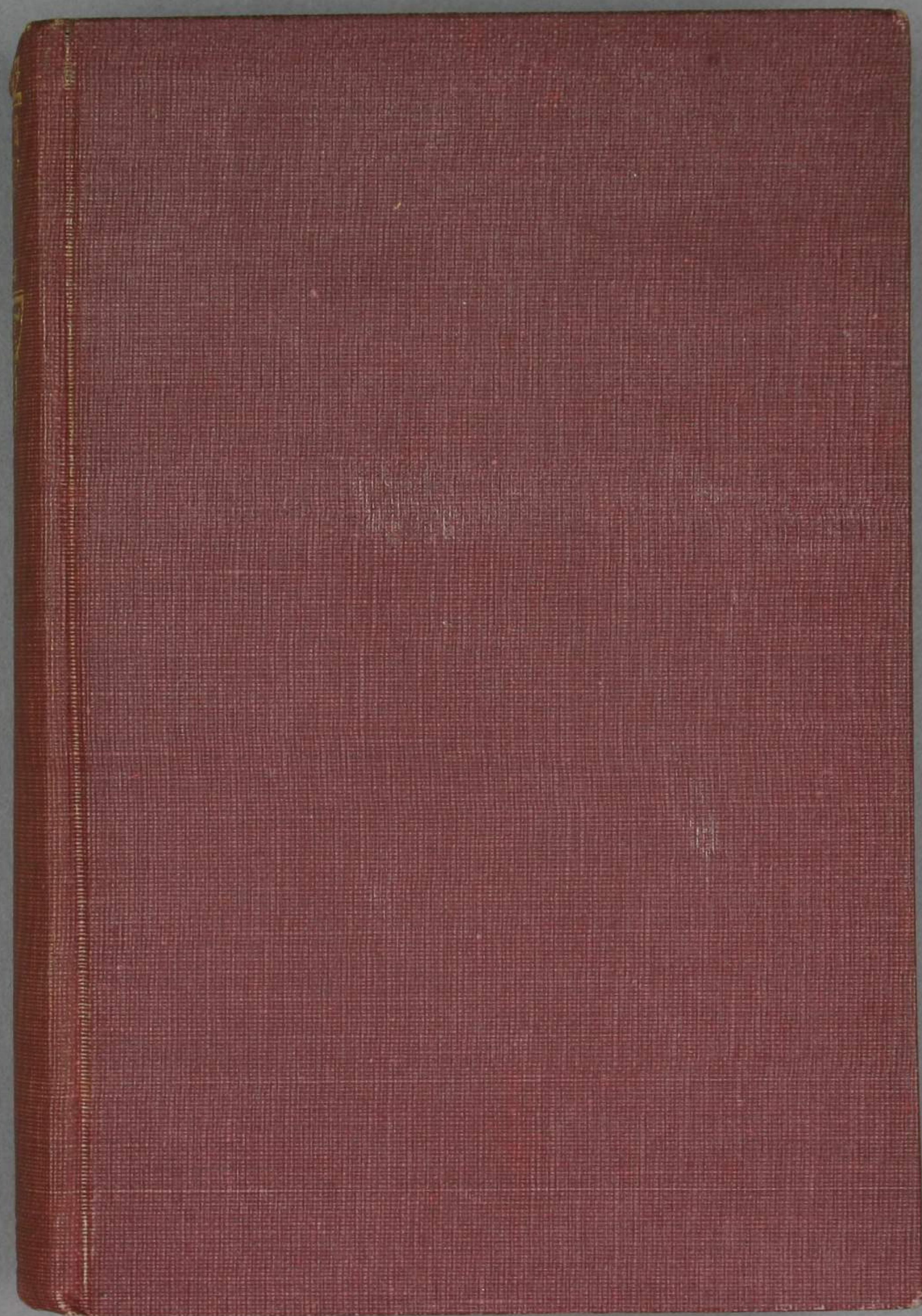


史記

王女の窟洞
窟實の王ノ口ノ
ドーガハ

輔之初林平







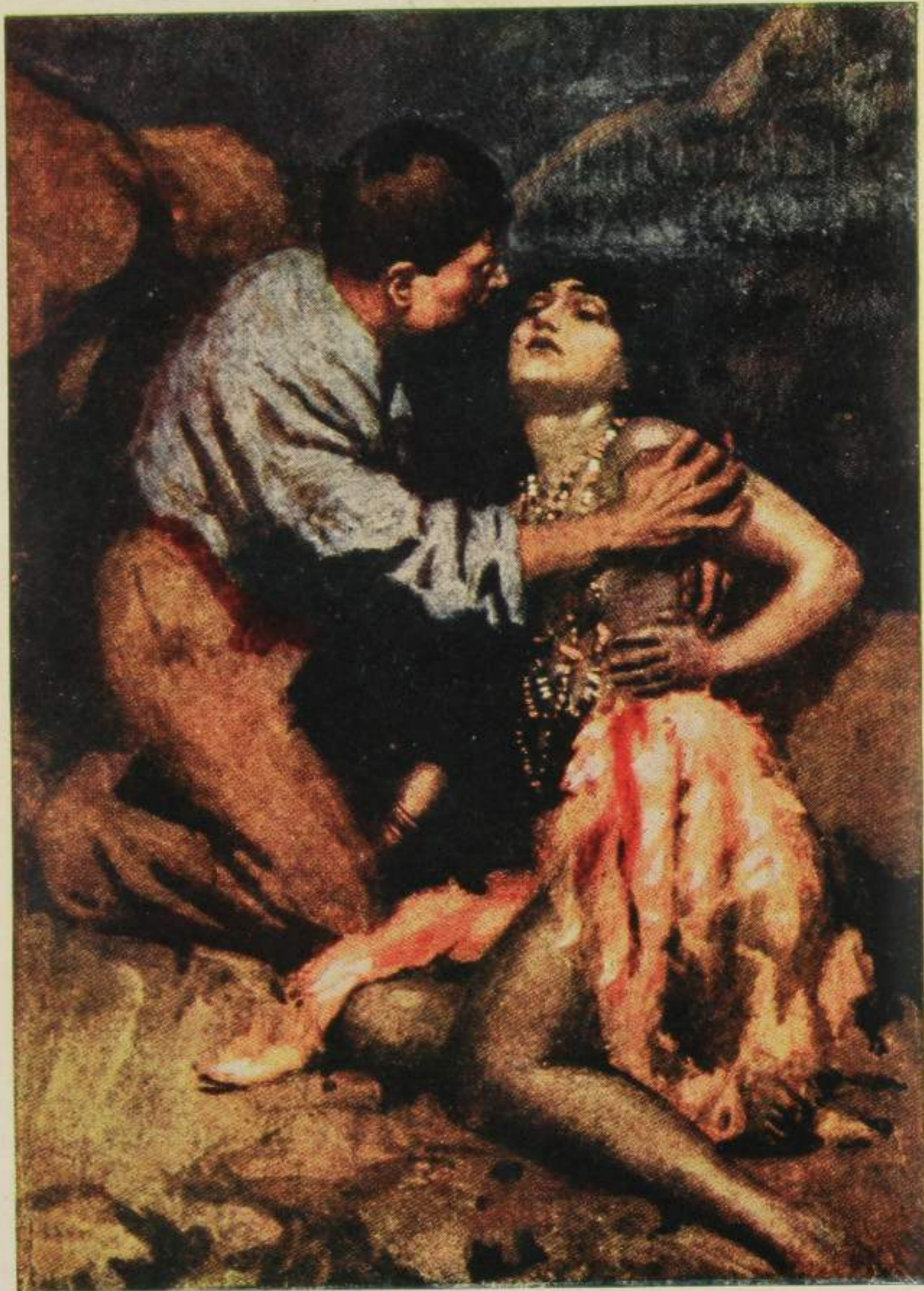
(照參頁〇六一)。たつなくしろ恐でのいし美りまんあが玉女

世界大衆文學全集
洞窟の女王
ソロモンの寶窟

—
平林初之輔



改造社



るれらみてき生てく若も年千でいばついにめたの愛は胸の妾……」
(照參頁四八五) し……。すでのるすが氣ならや



圖地たい描で血のラハムエワルンび及者譯(下) トーカハ・ダイフ(上)
(照參頁五七三)

譯者序

サー・ヘンリー・ライダー・ハガード Sir Henry Rider Haggard は一八五六年六月二十
二日英國のオアフォークで生れて一九二五年に死んだ英國近代の最も輝ける大衆作家であ
つた。

十九歳の時南アフリカのナタル總督の祕書として同地へ赴任し、その後トラスヴァール
で裁判所長をしてゐたこともあるので、彼地の事情に深く通じてゐたため、彼の小説の材
料は普通の小説家の追隨を許さない獨特のものがある。わけてもアフリカの蠻地に取材し
た小説が最も多く、本書に収録した二篇はいづれもその代表的なものである。

彼は一八八四年處女作「曙」 Dawn を發表して以來、相當な長篇を四五十篇も發表し
てゐる。多産な作家と言はねばならぬ。本書に收めた、洞窟の女王(原名 Queen of the Cave) は一八八
年の作で、この著者の最大の傑作の一つとされてゐる。それは實にこの上ない怪奇な戀と
嫉妬と復讐と冒険との物語でありながら全篇を貫く現實味は讀者を最後の頁までひきづつ
てゆくに十分である。最近日本に來朝したフランスの作家フランソワ・ブノワの有名な小
説ラトランチイドはこの「洞窟の女王」に筋がよく似てゐるので、これを剽窃したのでは
ないかといふので一時文壇に騒がれたことがあつた(但し事實さうではないことがわかつ

たが)ハガードは、本書の後日物語を「アッシュヤ」として一九〇五年に發表してゐる。「ソロモン王の寶窟」(原名 King Solomon's Mines)は一八八六年の作で第三番目に發表された作である。これは模範的な冒険小説で、「洞窟の女王」と共に今なほ英米の讀書界で食ひ讀まれてゐる。これはアラン・コオターメンといふアフリカの狩獵家の手記といふ形式になつてゐるが、その翌々年著者は同じ人を主人公として「アラン・コオターメン」といふ別の小説を書いてゐる。たゞの空想で描いたものではなくて、著者のアフリカ内地の實地の探險の經驗と知識とが基礎になつてゐると英國人氣質に投じた愉快な冒險談であるところにこの書物がかくも長い生命を保つてゐる理由があるのである。

ハガードは千九百十二年ナイトに列せられてサーの稱號を受けた。元來彼は法律家で、社會問題の研究家で、特に農業問題、村落問題等について造詣深く「貧民と土地」「英國の村落」等の著書もある。園藝に於ても相當な權威でノオアフォークの自邸には農園を經營してをり「園藝家の一年」といつた風の著述もある。特異な作家の一人である。

昭和三年六月十五日

譯者

目次

洞窟の女王

はしがき	八
第一章 深夜の訪問者	一四
第二章 歲月は過ぎて	二六
第三章 アメナルタスの壺片	三三
第四章 強風	五三
第五章 エチオピア人の頭	六四
第六章 古代基督教の儀式	七八
第七章 アステーン歌ふ	九三
第八章 酒宴の後	一〇七
第九章 小さい足	一一九
第十章 萬感交々	一二九

第十一章	コオルの平原	一四一
第十二章	女 王	一五一
第十三章	アッシャ面被をとる	一六三
第十四章	地獄の精	一八二
第十五章	アッシャの裁き	一九三
第十六章	コオルの墓所	二〇三
第十七章	ほつと一息	二一一
第十八章	行け！女！	二二六
第十九章	黒山羊をくれ！	二四二
第二十章	勝 利	二五二
第二十一章	死者と生者との邂逅	二六八
第二十二章	ジョップの豫感	二七六
第二十三章	真理の神殿	二八八
第二十四章	板橋を渡る	二九六
第二十五章	生命の精	三〇八

第二十六章	あゝ何たる光景ぞ	三二三
第二十七章	深淵を跳び越える	三三三
第二十八章	山を越えて	三四三

ソロモン王の寶窟

は し が き	三五四	
第一章	サー・ヘンリー・カーチスに會ふ	三五六
第二章	ソロモン王の寶窟の傳説	三六八
第三章	ウムボバを雇ふ	三八一
第四章	象 狩 り	三九三
第五章	沙漠に向ふ	四〇五
第六章	水だ！ 水だ！	四二〇
第七章	ソロモン街道	四三三
第八章	ククアナ國に入る	四五三
第九章	ツ マ ラ 王	四六四

第十章	魔法狩り	四八〇
第十一章	天の助けの月蝕	四九八
第十二章	戦闘の前	五一四
第十三章	攻撃	五二二
第十四章	白髪聯隊の最後の奮戦	五三二
第十五章	グッドの病氣	五四九
第十六章	國王の墓場	五六二
第十七章	ソロモン王の寶窟	五七二
第十八章	絶望	五八八
第十九章	イグノシの別辭	六〇一
第二十章	邂逅	六一〇

洞窟の女王

洞窟の女王

はしがき

この物語はたゞの冒険談として見ても、これまで人間の企てた冒険の中で、最も驚くべき、最も不思議なもの、一つだらうと思はれる。私はこれを公表するにあたって、この物語の記録と私との正確な関係を説明しておく義務があるやうな気がする。先づ第一に、この異常な物語は私が話すのではなくて、私はほんの出版者に過ぎないのだといふことを断わっておく。それから、どうしてこの記録が私の手にはひるやうになつたかを話すことにしよう。

數年前、この物語の出版者である私は、一人の友人と或る大學に足をとめてゐたことがある。この大學は、この物語の必要上、ケンブリッジ大學と言つておかう。或る日のこと、私は互に腕をくみあつて街を歩いて行く二人の男の姿を見て、この二人の男の容貌にひどく心を動かしたことがある。一人は真正正銘のところ私がこれまでに見た男の中で、これ位な美男子はなからうと思つた。脊はすらすらとして高く、肩幅は非常に廣く、顔つきは何とも言へず男らしく、舉動はやさしかつた。それは野生の牡鹿のそのやうに、この男の生れながらの資質であるやうに思はれた、おまけにこの男の顔には一點難のうちどころがなかつた。——いかにも上品な顔で、それでゐて美しく、ちやうどその時に通りかゝつた一人の婦人に帽子をとつて挨拶した時に見ると、彼の頭には小さな黄金色の卷毛が房々と密生してゐた。

「君、あの男を見たかい？」と私は一緒に歩いてゐた友人に言つた。「まるでアポロの像が生きて來たやうだね。すばらしい男ぶりぢやないか！」

「さうだよ」と彼は答へた。「あれはこの大學で一番好男子で、おまけに指折りの優さ男なんだ。みんな

なあいつのことを『希臘の神』と言つてゐる。本名はヴァインシイといふんだがね。だがもう一人の男を見たまへ。あれはヴァインシイの後見人で、實に頭のいい奴だ。みんなあいつのことをチャロンと言つてるが、それは、あいつの顔つきがおつかないからなのか、それともあいつが自分の後見してゐる子供の手をとつて、試験といふ深い海を渡してやつたからなのか——そのところはいつれともわからんがね。」

ちつと見てゐると、この年長の男の方も、人類の一方のすばらしい見本として、全く獨特の面白味をもつてゐることを私は發見した。彼はかれこれ四十くらゐの年輩のやうに見えた。そしてこの男は彼の同伴者が美男子であるのと好一對の醜男であると思つた。先づ第一にこの男は脊が低くて、脚は曲つてをり、胸はひどく凹んでゐて、それに兩の腕が人一倍長かつた。毛髪は黒くて低く額に生へ下つてをり、眼は小さく、頬髯は頭髪とつづく所まで生へ上つてゐたので、顔の見える部分と言つたら全くちよつびりしかなかつた。どうしても私はゴリラを思ひ出さずにはをられなかつた。しかもそれでゐて、この男の眼には、何かしら、ひどく氣易い、人なつつかいものがあつた。私はこの男と知り會ひになりたいと言つたのをおぼえてゐる。

すると私の友人は答へた。「いゝとも、何よりおやすい御用だ。僕はヴァインシイを知つてゐるから紹介しよう」かう言つて彼は私を紹介してくれた。そして吾々はしばらくの間立話をした。——だしかズル民族のことをしやべつてゐたやうに思ふ。といふのは私はその頃ちやうど喜望岬から歸つて來たばかりだつたから。ところがその時私は名前を忘れてしまつたが、一人の肥つた婦人が、綺麗な毛髪をした一人の娘をつれて歩道のあるいて來た。するとヴァインシイ君は、よくこの人達を知つてゐたと見えて、すぐにこの二人の仲間はひつて、一緒につれだつて行つてしまつた。ヴァインシイ君のつれの年長の男の名前はホリイといふことを私はその時に發見したが、二人の女が進んで來た時に、ホリイの表情ががらりと變つたのを私は面白いと思つたことをおぼえてゐる。急に彼は話をやめて、とがめるやうな眼つきでヴァインシイを見て、私にはお叩頭もそこそこにして、くるりと背中をむけて、ひと

りて街を横ぎつて行つてしまつた。後からきいたことだが、彼は、世間の多くの人が狂犬を恐れるやうに女を恐れてゐたのだといふ専らの評判だつたさうである。それで、彼が急いで逃げて行つたわけもわかつた。だが、ヴィンシイ青年は、女とつきあふのをひどく嫌つてゐる様子もなかつた。實際私はその時、笑ひながら、そばの友人に向つて、あんな男には自分がこれから結婚しようと思つてゐる女などはうっかり紹介できないね、うっかりあんな男と知りあひにさせると、しまひには女の方が愛情を先方へもつていつてしまふからねと言つたのをおぼえてゐる。彼は全く美男子すぎるくらゐだつた。そして、おまけに、自分ではそれに気がついてゐないで、美男子にあり勝ちな自惚を薬にしたくももつてゐなかつた。世間の多くの美男子は、自分の男振りのよいことを鼻にかけて仲間にははれがちのものだが、彼には微塵もさういふところがなかつた。

その晩で私のケンブリッジ滞在はおはつたので、私が「チャロン」と「希臘の神」とを見たのも、その噂をきいたのも、それからすつと長い間これが最後だつたのである。實際のところ、私はあの時から今までこの二人に會つたこともないし、これから先だつて會へさうにも思はれぬ。ところが、一月前に、私は一通の手紙と二つの小包と一綴の原稿とを受けとつた。そして手紙を開封して見ると中には「ホレス・ホリイ」と署名がしてあつた。その時にはホリイといふ名前は何としても私には思ひ出せなかつた。手紙には次のやうに認めてあつた。

一八——年五月一日、ケンブリッジ大學——科にて

親愛なる足下——あなたは私から手紙を受け取つて吃驚なさるでせう。吾々はほんのちよつと知つてゐただけですから。實を言へば、私は、今から數年前、私と私の後見してゐるレオ・ヴィンシイとがケンブリッジの通りで紹介されて一度お目にかゝつたことがあるといふ御記憶をよび起してから用向を申しあげるのがよいと考へるのでありますが、簡單にするために早速用件にとりかゝります。私は近頃あなたが中央アフリカの冒険についてお書きになつた書物を非常な興味をもつて拜見しました。この書物は半分は眞實で、半分は想像でお書きになつたもの

と私は考へます。それはいづれにしても、この書物は私に或ことを思ひつかせたのであります。私の彼後見人といふよりもむしろ私の養子である、レオ・ヴィンシイと私とは最近ほんたうにアフリカ探險をして參りました。その探險たるやあなたがお書きになつたものよりもずつと素晴らしいものでありまして、實を言へば私はこれをあなたに見ていたゞいてもあなたが私の話を信じて下さらないかと思つて恥かしい位なのです。それはこの手紙と一緒にお届けした原稿を御覽になればわかります。(この原稿と一緒に「日の御子」といふ甲蟲形の寶石と、壺の破片とを御手渡しいたします。)この原稿には、私、といふよりも吾々二人は、一緒に暮してゐる間はこの物語を公表しまいと決心した旨が記されてあります。ですから、吾々は最近に或る事情さへ起らなかつたなら、決心を變へはしなかつたでせう。吾々はもう一度アフリカへ行くかうとしてゐるのです。そのわけは、この原稿を讀んで下さればあなたにも推量できると思ひますが、こんどの行先は中央アフリカです。しかしこんどの滞在は長くなる豫定で、多分もう歸つて來ないことになるでせう。こんな風に事情が變つて來たので、吾々に一つの問題が起つて來ました。それは、吾々が世の中に二つとないと思つてゐる事柄の説明をこのまゝ、世間に發表せずにしてしまつておくのがよいかどうかといふ問題です。といふのは、この中には吾々の私生活に過ぎぬものが織り込まれてゐるからと、も一つは、吾々の物語が一笑に附せられたり、その眞偽を疑はれたりする恐れがあるからなのです。この點について私とレオとは見解がちがつてゐたので、いろいろ議論を戦はした末、結局、吾々は妥協したのであります。即ち、この物語をあなたにお送りして、あなたが發表した方がよいとお考へになつたら自由にこれを發表していただくといふ風に一切あなたにお任せすることにきめたのであります。たゞ、吾々の本名を明かさぬこと、吾々の素性についてもなるべく、明らさまに書かないで下さることだけを守つていたゞきたいのであります。

さて此の上私は何を申し上げたらよいでせう？

別封の原稿に何もかも細大洩らさず書いて

あるといふことを繰り返すより外、私は何も知らないであります。篇中の不思議な女王について私には何一つ附け加へて申し上げることはありません。日がたつにつれて吾々はあの世にも不思議な女から、もつと色々なこと聞いておかなかつたことが益々をしまれてならぬのです。あの女は一體何者であるか？ どうしてはじめてコオルの洞窟へ来たのか？ あの女の信じてゐたほんたうの宗教は何であつたか？ 吾々はさういふ事柄を一向たしかめてゐないのです。そして、今となつては、少なくとも今のところでは、それをたしかめるよしもないのです。以上申し上げたやうな疑問、それから、その他にも澤山の疑問が私の心中に起りますが、今そんなことを訊ねて見たつて詮すべもないことです。

あなたは、この仕事を引き受けて下さるでせうか？ 吾々はすっかりあなたにお任せいたします。その報償としては、あなたは、世にも不思議な物語を世間に發表するといふ名譽をになはれることを私たちは信じます。この物語が尋常一様のローマンスと選を異にしてゐることは、この記録が證明し得ると思ひます。どうぞ、この原稿を讀んで御意見をおきかせ下さい。（原稿はあなたの便宜をはかつて私が淨書いたしました。） 草々。

エル・ホレース・ホリイ

追伸——勿論、若しあなたがこれを發表して下さつた場合に、書物の賣り上げからいくらかでも利益が生じた節は、御隨意に處分して下さい。萬一損失を蒙られた場合には、私の顧問辯護士ジョフリイ、ジョーダン兩君に宜しく取計らふやう指圖をしておきます。壺の破片と甲蟲形寶石と、洋皮紙の書類とは、私たちが御返却を願ひするまで、あなたが保管して置いて下さるやう御依頼いたします。——ホリイ生。

この手紙は讀者の想像のとほり、ひどく私を驚かした。私は他のさし迫つた用事のために、半月ば

かり件の原稿を見ずにゐたが、この原稿に眼を通した時、私の驚きは一層ひどかつた。讀者もこれを讀んだらきつと驚くだらうと私は思ふ。それで私は急いでこれを出版することに決心して、その旨をホリイ君に書き送つた。ところが一週間たつてから、私は同君の顧問辯護士たちから、私の出した手紙に添へて一通の手紙を受けとつた。それには、ホレース君とレオ・ヴィンシイ君とは、もう既にこの國を立つて西藏へ行つてしまひ、今のところ宛先はわからないと書いてあつた。

さてこれで私の言ふべきことはすんだ。物語そのものに就ては讀者の方で判断しなければならぬ。私は篇中の人物の素性を一般の世間からかくすために極く少しばかり變更した以外には、正確に原文のままに發表する。私一個の註解はつけなことに決めた。はじめ、私は、殆んどはてしなき歲月の尊嚴を身に纏ひ、夜の翼の如き久遠の影を身に宿してゐるこの一人の女人の物語は、私には意味を捕捉することのできない或る素晴らしい比喩ではなからうかと信じたくなつた。その次には、私はこの物語は大地から力を吸ひとり、周囲の不死の世界に、たえず風や潮がさしひきするやうに、胸の中で情熱が満ちひきしてゐる一人の人間の實質を傳へることによつて、ほんたうに人間が不死であつたらかうもあらうかと思はれる結果を寫し出さうとした大膽な試みかも知れぬと考へた。しかし讀みつけてゆく中に、私はさうした考へも捨て、しまつた。私にはこの物語には眞實の刻印が捺してあるやうに思はれる。だがその説明は私にはできないから、他の人に譲らねばならぬ。已むを得ぬ事情のため、このさ、やかな序文をつけて、これから私は讀者をアツシヤとコオルの洞窟とへ案内する。

——出版者記。

第一章 深夜の訪問者

世の中には、何から何まで、周囲の細々しい事柄までが、記憶にはつきり刻みつけられてゐて、忘れようと思つて忘れられないやうな事件があるものだ。私がこれから描かうとする出来事もまさにそれだ。私の心には現在でも、まるで昨日の出来事のやうに、それがまざまざと浮んで来る。

かれこれ二十年も前のちやうど今日のことであつた。ルドウィツヒ・ホレース・ホリイ、即ちかくいふ私は、或る晩、ケンブリッジ大學の私の自修室で、一生懸命に何でも數學の勉強をしてゐた。私は一週間のうちに、特待校友の試験を受けることになつてゐたのだ。そして先生も學校のみんなのものも、私がきつと素晴らしい成績で合格するだらうと期待してゐたのである。しまひに私は疲れて來たので、書物を投げ出して、燧爐棚の方へ歩いてゆき、パイプを取つてそれに煙草をつめた。

燧爐棚の上には一本の蠟燭が燃えてゐて、そのうしろに細長い鏡がかけてあつた。私は煙草に火をつけようとしてふと鏡にうつた自分の顔を見て、ちつと考へこんでしまつた。マツチはもとまで燃えてしまつて、私は指を焦したので、それを下へ落した。それでも私はちつと立つて鏡にうつた自分の顔を見つめながら考へこんでゐた。

「さうだ」とたうとう私は聲を出して獨語を言つた。「俺はこの頭の中で何かやらかなきやならん、俺の頭の外側はこの様子ぢや何をする足しにもならんにきまつてるわい。」

といふ意味は、きつと讀者には少々曖昧に聞えるに相違ないが、實は稔は自分の肉體の醜いことを言つてゐたわけなのである。二十二位の年齢では大抵の男が、少くも、若いために小綺麗などころを少しはもつてゐるものである。ところが、私にはそれすらもないのであつた。脊が低く、づんぐりとしてゐて、胸は殆んど不具者のやうに凹み、腕は長くて筋ばつてごつく／＼してをり、顔の雜作は重苦しく、眼は灰色で落ちこんでをり、額には厚ぼつたいがさ／＼した黒い毛髪が、まるで伐採した空地へ周囲から林の木が生えてきたやうな工合に、生え下つてゐるのだ。かれこれ二十五年前の私の容貌はこんな風だつた。そして幾らか變つたところもあるが、いまでもざつとそんなものである。カインのやうに、私は烙印をおされてゐた。自然からひどく醜いといふ烙印をおされてゐた。そのかはり、私は、鐵のやうな異常な體力と、相當な知力とを自然から恵まれてゐたのである。まつたくもつて私の醜さは尋常一様の醜さではなかつたので、學校の若いおしやれな仲間、私の體力はほめそやしてゐたくせに私と一緒に歩いてゐるのを人に見られるのを閉口してゐた。だから、私が人間ざらひになり、偏屈者になつたのも不思議ではない。私がひとり考へたり、仕事をしたりして、友達といふものをもたなかつたこと、少くも一人しかもたなかつたことは不思議ではない。私は生れながらひとり生きて自然の懐からのみ楽しみをひきだすやうに、世間の人たちからひき離されてゐたのである。女どもは私を見るのも嫌つた。一週間ばかり前にも、或る女が、私のきいてゐることを知らな

いで、私のことをお怪けだと言ひ、私を見てから、人間の先祖は猿から出たといふ説に宗旨變へを

したと言つてゐた。尤も一度だけ、或る女が私に氣のあるやうな様子を見せたことがある。私は、この女に、これまで閉ぢこめられてゐた愛情のありたけをそゝぎかけたものである。ところが、私の手へはひる筈の金が他人の手へはひるやうになつたが最後、その女は私をすて、しまつた。私は一生懸命にその女を口説いた。あとにも先にも私が生きた人間を口説いたのはその時きりである。何しろ私は、その女の美しい顔にすつかりまいつて首つたけ惚れてゐたのだ。ところが最後にその女は返事をする代りに私を鏡の前へつれて行つて、私と二人並んで鏡へ向つて立つたのであつた。

「妾がヴィーナスだつたら貴方は何でせうかね？」と彼女は言つた。

しかもそれは私がまだ二十歳のときだつたのである。

閑話休題私が鏡にうつつた自分の姿にちつと見入つてゐると、誰か入口の扉を叩くものがあつた。私は扉を開けてゆく前に、耳をすました。といふのはもう十二時近くであつたので、知らぬ人には會ひたくなかつたからである。しかし、私には學校に、といふよりもむしろこの世の中に友達といつては一人しかなかつたが、ことによるとその一人の友達が來たのかも知れぬと私は思つたのである。ちやうどその時に扉の外に立つてゐた人が咳をした。その咳は聞きおぼえのある咳だつたので、私は急いで扉を開けた。

年齢のころは三十位の、今では見る影もなく瘠せてゐるが、もとは不思議な美男子だつたと思はれる、丈のすらつとした男が、右の手に大きな鐵の箱を下げて、その重みによろ／＼しながら急いで

ひつて來た。彼は卓子の上へその箱をおいたと思ふと、ひどく咳きこんだ。咳いて咳いて顔が紫色になる迄咳きぬいてから、彼はぐつたり椅子に沈みこんで口から血を吐きはじめた。私はコップに少しばかりウイスキーをついでそれを彼に與へた。彼はそれを飲むといくらか元氣を恢復したやうであつた。勿論元氣を恢復したといつても、まだまだひどい容體であつたことは言ふまでもないが。

「どうして寒い外に僕をたゞしておいたんだい？」と彼はすねるやうな口調でたづねた。

「風にあたるのは僕の身體には大禁物だつてことを知つてゐるくせに。」

「誰だかわからなかつたんだよ、君の來るのがあまりおそいもんだから」と私は答へた。

「さう、まつたく晩かつたね、それに僕はこれが君のとこへ來る最後だつてことを信じてゐる。ホライ君、僕はもう駄目だよ。もう駄目だよ。明日まで僕の命がもつとは信じられない」と彼は強ひて笑はうとしながら答へた。

「馬鹿なことを言ふな」と私は言つた。「これから僕が醫者をよんできてやらう。」

彼は手を振つて叱るやうに私を呼びとめた。「君がさう言ふのは尤もだが、僕は醫者は要らん。僕は醫者のことは研究してすつかり心得てゐる。どんな醫者にだつて僕の命は助からんのだ。僕の最期が來たんだ。この一年間僕が生きてゐたのが奇蹟なんだよ。ところでまあ僕の言ふことをよく聽いてくれ給へ。僕に言葉を繰り返させる機會は今後あるまいと思ふから、よく注意してきて貰ひたい。僕たちは二年も友達としてつきあつて來たが、君は一たい僕のことをどれだけ知つてゐるかい？」

「君は金持ちで、大抵の人が學校を卒業する年輩になつてからこの學校へはひつて來たつてことを僕は知つてゐる。それから君は前に結婚をして、君の細君は亡くなつたてことも知つてゐる。それから君は僕の一番親しい、殆んどたつた一人の友人だつたてことも知つてゐる。」

「僕に息子があることを知つてたかい？」

「それは知らなかつた。」

「實はあるんだよ。今年五つになる。その子供のお蔭で、子供の母親は亡くなつたんだ。だから僕はその子供の顔をどうしても見るに忍びなかつたんだ。ホリイ君、君に僕の息子のたゞ一人の後見人になつて貰ひたいのだ。」

私はもう少しで椅子から飛び上るところだつた。「僕に！」と私は言つた。

「さうだ君にさ。僕が二年間君と交際つて君を研究したのは目的なしにやつたことではないのだよ。僕は五分前からもう僕の命は駄目だつてことを知つて、子供とこの品とを託することのできる人を探してゐたんだ。」かう言つて彼は件の鐵の箱を叩いた。「そしてやつと見つかつたのが君だよ、ホリイ君、君はこぶこぶのある樹と同じで心が堅くてしつかりしてゐる。」

「まあきいてくれ。この子供は此の世の中で一番古い家柄の代表者になるのだ。こんなことを言ふと君は笑ふかも知れんが、いつかは君にも成る程と合點がゆくこと、思ふ。僕の六十五代目或は六十六代目の直系の先祖はイシスの埃及僧だつたんだ。尤もこの人はカリクラテスといつて希臘の血統をひ

いた人だがね。このカリクラテスの父親は第二十九王朝のハク・ホオルといふメンデシアの王に仕へた希臘の傭兵で、その祖父が曾祖父にあたるのが、ヘロドタスの言つてゐるカリクラテスだと僕は信じてゐる。紀元前三百三十九年か或はその頃ちやうど王の最後の没落の時に、このカリクラテスは、妻帯をしないといふ誓を破つて、彼に戀をしたやんごとなき王女と手をとつて埃及から脱走したのだ。そして彼の船はどこかアフリカの海岸に難破して打ち上げられたのだ。それは今のデラゴア灣の附近か、それよりも少し北の方だと僕は思ふ。で彼等夫婦の命は助かつたのだが、ついて來た家來の者どもはみんななぶり殺しにされてしまつたのだよ。二人はそこでひどく艱難を嘗めたが、たうとう、豪勢な蠻人の女王に歡待されるやうになつたのだ。それは一種異様な魅力をもつた白人の女でこの女が或る事情のために僕の先祖のカリクラテスを殺したんだ。その事情は今僕には言へないが、君はそれまで生きてさへあれば、いつかこの箱の中へはひつてゐる書類ですつかり知る事ができる。しかし、彼の妻は、どうして逃げたのかわからぬが、子供をつれてアテンへ逃げたんだ。その子供の名前はチシステネスといふのだ。これは大復讐者といふ意味なのだよ。

「それから五百年か或はそれ以上もたつてから、この一家は羅馬へ移つて行つたのだ。どうして羅馬へ行つたのか、まるで痕跡が遺つておらぬのでわからぬが、多分チシステネスといふ名前のもつてゐる復讐といふ意味を保存するためにヴィンデックスといふ姓を名乗つたらしい。その後この一家は五百年かそこら羅馬にゐたのだが、紀元七百七十年にシャルマン大帝がその頃この一族の住んでゐた

ロンバルヂイへ侵入して来たのだ。ヴィンデックス家の家長は、何でもこの大帝に歸屬して、大帝がアルプス山をこえて歸國するとき、その一行に加はつて、たうとうブリタニイに落ちついたらしい。それから八代たつて、この一家の嫡孫はエドワード懺悔王の治世に英國へ渡り、ウイリヤム王の治世には非常に高い身分に進んだのだ。それから今までは、僕はすつと切れ目なしに先祖の系圖を辿つてゆくことができる。といつてもヴィンシイ家——これはヴィンデックスといふ名前が英國に住むやうになつてから色々に轉訛して最後にかうなつてしまつたのだ——は特別に有名な家柄であつたわけでもなく、大して世間へ名前が出てゐたわけでもないのだ。時には軍人になつたこともあり、時には商人になつたこともあるが、チャールズ二世時代から今世紀のはじめまではみんな商人だつた。千七百九十年頃に僕の祖父が酒屋をはじめてかなりな財産をこさへて隠居したのだが、千八百二十一年に祖父が死ぬと父が相續してその財産は大抵つかつてしまつたのだ。それから十年たつて父も死んだが、父があとにのこしてくれた財産は、正味年收二千磅位なものだつた。そこで僕があれのことで探検を企てたんだ」と言ひながら彼は鐵の箱を指した。「ところがそれは見事に失敗してしまつた。歸りがけに僕は南歐地方を旅行して最後にアテンへ着き、そこで僕は愛妻に邂逅したのだ。この女は僕の古い先祖と同じやうに『美人』と言つてもはづかしくない女だつた。僕がこの女と結婚してから一年たつと子供が生れたがそれと同時に妻は死んでしまつたのだ。」

彼はしばらく言葉をとめて、手で顔をおほうてゐたが、やがて又言葉をつゞけた。

「僕は結婚のために計畫を中止して一時道草を食つてゐたのだ。そして今ではもうその計畫を遂行することができなくなつてしまつたのだ。僕には暇がないのだよ、ホリイ君、僕にはその暇がないのだ！ 君が承知してくれさへすれば、いつか君にはすつかりわかるだらう。妻が亡くなつてからはまた氣を變へて、最初の計畫にかへつたのだが、それには第一に東國の言葉、特にアラビヤ語を完全を知つておく必要があつたのだ。少くも僕はさう考へたんだ。で、その勉強のために僕はこゝへ来たわけなんだよ。だが、すぐに僕の病氣はわるくなつて、今ではもう僕の最期が来たのだ」かう言ひながら、彼はまるで自分の言葉の意味を強めるもの、やうに又してもおそろしく咳き入つた。

私はもう一度ウイスキーをついでやつた。すると彼はしばらくやすんずから語りつゞけた。

「僕はまだ息子のレオを赤ん坊の時分から見ることがない。見るに堪へなかつたのだ。けれども噂によるとあの子は伶俐な美しい子供になつてゐるといふことだ。この封筒の中に」と言ひながら彼は私の宛名を記した一通の手紙をポケットから取り出して「あの子供の教育方針についての僕の意向が認められている。それは少し特別な方法だから、赤の他人にたのむわけにはゆかない。もう一度お願ひするが、どうだ、ひき受けてくれないか？」

「何を引き受けるのだから、はじめにそれをきいておかなくちや」と私は答へた。

「僕の息子のレオが二十五歳になるまで君のそばにおいて面倒を見て貰へばよいのだよ。學校へやつてはいけないうだぜ、いゝか。あの子が二十五の誕生日で君の後見の役目はすむんだ。さうしたら、

僕が今君に渡す鍵で（彼は卓子の上に鍵を置いた）此の鐵の箱を開け、中にあるものをレオに見せ、書類を讀ませて、そこに書いてあることをやつて見るかどうかきいて見ればよいのだ。あの子にはそれをやらなければならぬ義務は少しもないのだよ。條件としては、僕の現在の年收が二千二百磅ある。その半分は、遺言で終身君の收入として遺しておく、千磅は後見の謝禮として君の所得にし、百磅は子供の養育費としてね。残りの半分は、レオが二十五になるまで積んでおいて、あの子が今僕の言つた探検をやらうと思へばその費用にあて、おくんだ。」

「若し僕が死んだらどうするかね？」と私は訊ねた。

「その時には裁判所に後見人になつて貰はなくちやならん。だが、この鐵の箱はレオの手に渡るやうに君から遺言しておいて貰はないと困る。ねえホリイ君、どうぞ承諾してくれたまへ、きつと君のためにもなると僕は思ふ。君は俗世間の仕事には適しない男だ。もう二三週間もすれば君は大學の特待校友にもなれる身だ。さうすれば、その方からの收入と、僕が君に遺しておく收入とで裕福な學究生活を送れるよ。そして君の大好きなスポーツもやれる。かういふ生活がちやうど君には適してゐるぢやないか。」

彼は言葉をきつて、心配さうに私を見た。けれど、私はまだ躊躇してゐた。あまり妙な頼みだつたものだから。

「ホリイ君、たのむよ、僕たちは親しい友人だつた。それに今となつては、僕は別の方面へ頼んでみ

る時間の餘裕がないのだ。」

「よろしい。ではやつて見よう」と私は言つた。「但し此の手紙に僕の氣を變へさせるやうなことが書いてあれば別だがね」かう言ひながら私は卓子の上の鍵のそばに彼がおいた封筒に手を觸れた。

「有り難う、ホリイ君有り難う。何も難しいことはないのだ。君がこの子供の父親になることを神に誓つてくれ。そして、僕の指圖に文字通りしたがつてくれ。」

「よし誓はう」と私は嚴肅に言つた。

「よろしい。だがおほえてゐてくれ給へ、ことによると僕はいつか君の誓ひのあかしを求めるかも知れんから。僕は死んで人に忘られても、矢つ張り生きてるんだよ。死なんていふものはない。死はただ一つの變化なんだ。しかも、いつか君にもわかる時が来るだらうが、この變化ですらも、場合によつては無期限に延期することができるんだ」と言ひながら彼はまた恐い咳の發作にとらはれた。

「では僕はもう行かなくちやならん」と彼は言つた。「そこに箱がある。それからその書類の中には僕の遺言がある。その遺言によつて僕は子供を君にあげける。君には十分の謝禮をする。僕は君の正直なことは知つてゐる。だが萬一、君が僕の信頼に裏切るやうなことがあつたら、僕はきつと君に崇るよ。」

私はだまつてゐた。實を言へば面喰つてしまつて言葉が口へ出なかつたのである。

彼は蠟燭をか、けて鏡に映つてゐる自分の顔を眺めた。それは以前は美しい顔であつたが、病ひの

ために見るかげもなくなつてゐた。「蟲の餌食だ」と彼は言つた。「もう二三時間で僕の身體が剛く冷たくなるんだと考へると妙な氣がするね。ねえホリイ君、人の一生はくよくよしながら生きてゐる價値のないものだね、戀してゐる時のほかは。少なくとも僕の一生はさうだつた。だがレオの一生は、若しあの子が勇氣と信仰とさへもつてゐればさうでないかも知れん。では左様なら！」かう言つたかと思ふと彼は急に懐かしさに堪へぬものゝやうに、兩腕で私を抱いて、私の顔に接吻して、それからるりと後を向いて出て行かうとした。

「まあ待ちたまへヴァインシイ君」と私は言つた。「ほんとに君が考へてゐる程身體がわるいなら僕が醫者をよんでくるよ。」

「いけない、いけない。」と彼は熱心に言つた。「誓つてそんな事はしてくれな。僕は今死ぬんだ。しかも毒をのんだ鼠みたいに獨りで死にたいのだ。」

「君が死にかゝつてるなんて僕にはどうしても信じられんねえ」と私は答へた。彼は微笑を浮べて、「忘れてくれるな」と言ひながら出て行つた。私は、椅子に腰を下して、眠つてゐたのぢやないかとあやしみながら眼をこすつた。だがどうしても眠つてゐたとは思はれんので、こんどはヴァインシイが酔つてゐたに違ひないと考へはじめた。なる程私は彼がひどい重病であることは知つてゐるが、明日まで生命がためぬことをはつきり知ることのできる筈はない。もしそれ程危篤に迫つてゐるのなら、あんな重い鐵の箱などをもつて歩けるわけがない。それによく考へて見ると、彼の話した物語も到底

信じられないやうに私には思はれた。今でこそわかつたが、その頃はまた私も若かつたので、世間一般の人たちの常識でともありさうにないと思はれるやうなことが、この世におこり得るなんてことは、私は氣もつかかなかつたのである。五つにもなる子供を赤ん坊の時から見ない人間が一體あるだらうか？ どうもありさうにない。自分の死期を正確に豫言し得る人があるだらうか？ これもありさうにない。自分の先祖を紀元前二世紀までもおぼえてゐて、急に自分の子供の後見を一から十まで學校友達にまかせて、その友達に財産を半分わけてやるなんて人があるだらうか？ 到底ありさうにない。ヴァインシイはきつと酔つてゐたか氣が狂つてゐたかにきまつてゐる。さうだとするとこれは一體どういふわけだらう？ 封をした鐵の箱には一體何がいられてゐるのだらう？

私は何もかもわからなくなつてしまつたので、そのまゝに眠ることにきめ、ヴァインシイが私にのこしていつた鍵と手紙とを手文庫の中へ藏ひ、鐵箱を大きな旅行靴の中へかくしてベットへ行き、すぐにぐつすり眠つてしまつた。

ほんの五六分とろつとろつと思ふと私は誰かによび起された。私はベットのの上に坐りなほつて眼をこすつた。もうまつ晝間の八時だつた。

「どうかしたのかい、ジョン？」と私は、ヴァインシイと私との受持ちの小使のジョンにたづねた。「まるで幽霊でも見たやうな顔をしてるぢやないか！」

「そ、そのとほりですよ」と彼は答へた。

「幽霊よりもつといやな死骸を見たのです。いつものやうにヴァインシイ様を起しにまゐりましたところ、ヴァインシイ様は、部屋の中に、かたくしやちこ張つて死んでをられるのです。」

第二章 歲月は過ぎて

ヴァインシイの頓死は、もちろん學校内に大騒ぎを起したが、彼の重病はみんなに知れてゐたことでもあり、醫者の死亡診断書も満足なものであつたので、別に取調べは行はれなかつた。當時はそのやうな取調べは今日程嚴重に行はれなかつたのである。私も別に訊問を受けたのではないから、ヴァインシイが死んだ晩の二人の會見の模様を進んでこちらから上申するにも及ぶまいと考へたので、たゞ、ヴァインシイがいつものやうに私の部屋へ遊びに來たといふことだけを知らせるにとゞめた。葬式の日、倫敦から一人の辯護士がやつてきて、かはいさうなヴァインシイの遺骸を墓場まで送つてゆき、それから書類と財産目録をもつて歸つて行つた。勿論、私が保管を頼まれた鐵の箱は私の手許にのこつてゐたのである。それから一週間このことについては何事も私の耳にははひらなかつた。實を言へば、私の注意は、特待校友の試験の方へすつかり奪はれてゐたので、葬式にも參列することができず、その辯護士にも會へなかつたやうな始末であつた。だがそのうちに試験もすんだので、私は自分の部屋へ歸り、試験がうまいつたので、いゝ氣持になつて安樂椅子にしづんでゐた。

ところが、數日間試験のことばかりに奪はれてゐた私の考へは、試験がすんでほつとしたと思ふまゝに、忽ち、あはれなヴァインシイの死んだ晩の事件に返つて來た。そして私は又もや、一體あれはどういふわけであるか、あの妙な鐵の箱はどう處分したらよいかと思ひわづらつた。私は考へれば考へる程わからなくなつた。深夜の不思議な訪問、あんなに間近に迫つてゐる死の豫言、私が彼に向つて誓つた嚴肅な誓ひ、彼がその誓ひの實行をあゝの世から監視してゐると言つた言葉、凡てが何のことやら私にはわからなかつた。あの男は自殺したのぢやなからうか？ どうもさうらしい。あの男の言つた探検といふのは一體何のことだらう？ 私は迷信をかつぐやうな人間ではないのであるが、あまりに不思議な事情なので薄氣味が悪くなつた。

私が考へこんでゐるところへ、扉を叩く音がして、青い封筒にはひつた一通の手紙が私の許へ運ばれた。私はすぐにそれは辯護士から來たのであることを知つた。そして、直覺的に、ヴァインシイが私へ依頼したことに關するものであることを豫感した。私は今でもその手紙をもつてゐるが、それには次のやうに書いてあつた。

拜啓、本月九日ケンブリッジ大學にて死亡された小生等の依頼人故ヴァインシイ氏の遺言の複製を同封御送附申上げ候。小生等はこの遺言執行人にこれあり候。この遺言により、貴下は、當年五歳になる故人の息レオ・ヴァインシイの後見人たることを承諾さる、條件にて、故人の遺産の約半額に對する利子を終身受けらる、ことに相成り居り候。故人の遺産はコンソールス銀行に預金いたしあり候。子息の引渡し方並びに貴下の受けとらるべき利息の支拂ひ方

について何分の御指圖にあづかり度く此段貴意を得度く候。草々。

ホレース・ホリイ様

私は手紙を下に置いて遺言に眼を通した。この手紙で見ると、ヴァインシイが死んだ晩に私に話したことは事實であることがわかった。兎に角、あの話はほんたうなのだ。私は子供を引きとらねばならぬ。私は急にヴァインシイが箱と一しよに私にのこして行つた手紙のことを思ひ出したので、それを取り出して開封して見た。その中には、彼が既に私に口で言つたこと、即ち、レオの二十五歳の誕生日に箱を開くことについての指圖と、子供の教育方針とが認めてあつた。その教育方針中には、希臘語、高等數學、アラビア語等が含まれてあつた。最後に追伸として、めつたにそんなことはあるまいと思ふが萬一レオが二十五歳になる前に死んだ時には、私が箱を開けて、若し私が適當と思つたら、箱の中に書いてある指圖通りに行動し、若し私が適當であると思はなかつたら中味はすつかり破棄して、どんなことがあつても、他人にそれを手渡してはならぬと書いてあつた。

この手紙には、私の今までに知つてゐたこと以上のことは何も書いてなく、従つて、私が亡友に約束した仕事を果たすのを拒む理由は何もなかつたので、私の進むべき道はたゞ一つしかなかつた。即ち、ゾップフリーとジョーダンとに宛て、委細承知の返事を認め、十日たつたら、早速レオを引き取

ゾップフリー
ジョーダン

つて喜んで後見にとりかゝる旨を言ひ送ることであつた。それがすむと、私は學校の當局に面會して、必要と思ふ話の要點を手短かに話し、若し特待校友の試験に合格したら、子供と一緒に住むことを許されたいと交渉して、やつと當局の許可を得た。無論私は内心で試験に合格することは殆んどきまつてあると信じてゐた。併し學校側では、私が校舎を出て下宿をするといふ條件で、私の願ひを許可したのであつた。私は、學校の正門のすぐ近くにやつと恰好な貸間を見つけた。その次には附添ひを見つけないければならぬ。子供はもう大丈夫女手なしに育つてゆく年齢になつてゐたので、私には女ではなく、適當な男の附添ひを探すことにきめた。幸にして、ゾップといふ丸顔の上品な青年が見つかった。この若者は鶏小舎の手傳をしてゐたのであるが十七人も家族のある家に育つたので、子供のくせはよくのみこんであるから、レオの世話は喜んで引き受けると自分で言つた。それから私は件の鐵の箱を町へ持つていつて、自分の手で銀行へ保管をたのみ、子供の衛生や育児に關する書物を買つて来て、先づ自分で読み、ゾップにも讀んで聞かせて、子供の到着を待つてゐた。

たうとう、子供は一人の年配の女につれられて來た。この女は子供と別れるときにひどく泣いて別れをしんだ。子供は非常に美しい子供だつた。實際私は此のやうな申し分のない子供はあとにもさきにも見たことがない。眼は灰色で、額は廣く、顔は、こんな年頃で、すでに浮彫をした玉のやうで、たるんだり瘦せたりしてゐるところは少しもなかつた。だが、何よりも人を惹きつけたのは髪であつた。それは純粹な黄金色で、くつきりした顔の上で、ちんまりと縮れてゐた。彼は自分をつれて

来た乳母とわかれるときに少し泣いた。この場の光景を私は一生忘れることができぬであらう。彼は窓からさしこむ日光に黄金色の捲毛をなぶらせながら一方の眼を拳でおさへ、一方の眼で私たちを見ながら立つてゐた。私は椅子に腰をかけて、手をのばして、子供に私の方へ来るやうに合圖をし、ジョップは隅つこの方で、クツクツ咽喉を鳴らしてゐた。彼は以前鶏を馴らしたときの経験で、さうすれば子供がなついて来ると考へたのである。それから又彼は、妙な恰好をした木馬を、おどけた調子で、前へ後へ走らせて見せた。数分間こんなことをしてゐるうちに、だしぬけに子供は兩腕をのばして私のそばへ走つて来た。

「僕おぢさんが好きだよ、おぢさんはおつかない顔をしてるけれど、い、人だもの」と彼は言つた。十分間もたつと、彼は、大きなバター麵麩の片をいかにもうまさうに食べてゐた。ジョップはそれにつたからと注意してそれをやめさせた。

それからしばらくたつと私は豫期のとほり特待校友の試験に合格したので、レオは全校の人気者になつてちやほやされるやうになつた。けれども、私はその頃の楽しい思ひ出をこゝで書いてゐるひまがない。かすくの思ひ出は次から次へと過ぎ去つて、私たち二人は益々親しみを増していつた。世の中の子供の中で私がレオを可愛がつた程可愛がられた子供はあまりなく、世の中の父親の中で私がレオになづかれた程なづかれた父親もたんとはないであらう。

悔みなき歲月は流れ流れて、子供は少年になり、少年は青年になつた。彼の身體が成長するにつれて、彼の容貌の美しさも増していつた。彼が十五かそこらになつた時、學校界隈のみんなの者は彼を美少年と名づけ私にけだものといふ仇名をつけた。この名前は、私たちが、街を歩いてゐるときにつけられた名前である。私たちは二人で街を歩くのが習慣だつたのである。ある時、彼の二倍もある肉屋の大漢が、うしろから私たちの仇名を鼻歌で唄つて歩いたのがもとで、レオはこの大漢に食つてかかつて、物の見事に打ちのめした。私は見ないふりをして歩いてゐたが、喧嘩があまりはげしくなつたので、後をふり向いてレオに聲援してやつた。學校では寄るとさはると私たちをこの仇名でからかつたが、私にはどうすることもできなかつた。そのうちにレオが少し大きくなると、學生等は今度は別の仇名をつけた。私のことをチャロンと言ひ、レオのことを希臘の神と呼んだ。私の仇名はまあ我慢する。私はこれまでだつて男ぶりのよかつたことはないし、これから年をとれば猶更らさうなものだから。ところがレオの仇名ときたら實に穿ち得て妙なるものであつた。二十一歳のときのレオは若いアポロの像のかほりをつとめたつてはぶかしくない程だつた。私は彼ほど美男子で、しかも自分ではまるでそのことに氣のついてゐない男を見たことがない。彼の精神はいへばきびくしてゐて、潑刺たる理知のひらめきをもつてゐたが、決して學者ではなかつた。學者のやうなぐづぐづしたところが彼には寸分もなかつた。私たちは彼の教育に關する父ヴィンシイの指圖を嚴格に守つた。そして大體に於ては、特に希臘語とアラビア語については、結果は満足なものであつた。私も彼の勉強の助

けになるやうにアラビア語を勉強したが、五年の後には、彼は私にまけぬ位——いや殆んど私たちにアラビア語を教へてくれた先生にもまけぬ位この言葉が上達した。私は狩獵家としては他人にひけをとらない方だったので、いつでも秋になると狩獵や魚釣りに出かけた。時にはスコットランドへ行ったり、ノルウエーへ行ったり、一度は露西亞まで行つたこともあつた。私は射撃は上手であつたが、こんなことにかけてすら、レオは私以上の腕前をもつやうになつた。

レオが十八歳になつた時、私は學校内の自分の部屋へ歸り、レオを私の學校へ入れた。そして二十のとき彼は、別段高い學位ではないが、立派な學位を得た。その時に、私ははじめて彼の身の上や、不思議な因縁をそれとなく話してきかせた。いふまでもなく彼はその詳しいことをきゝたが、私は、いまはまだ話すわけにゆかないことを説明してやつた。その後、ひまをつぶすために、私は彼に法律の勉強をしたらどうかとすゝめたので彼は私の勸告にしたがひ、ケンブリッヂで勉強し、倫敦へ夕食を食べに行くといふ風にして日を送つてゐた。

レオについてたゞ一つ氣にかゝることは、彼にあつた若い女が、皆が皆ではないまでも、少くも大部分彼に戀をするやうになつたことであつた。そのために色々な面倒が起つて、その當時はひどく困つたが、今はそんなことを述べる必要はない。大體に於て彼の態度はよかつたと言ふだけにとゞめておかう。

かくて歲月は過ぎ去つて、たうとうレオの二十五歳の誕生日が來た。この不思議な、或る意味では

おそろしい物語は、この時からほんたうにはじまるのである。

第三章 アメナルタスの壺片

レオの二十五歳の誕生日の前日、私たちは二人で倫敦へ行き、二十年前に私が保管をたのんでおいた不思議な箱を引き出した。私はおぼえてゐるがそれを出してくれたのは、前にそれを保管してくれたのと同じ事務員であつた。この男は自分が箱をしまつたときのことをよくおぼえてゐた。さうでなければ捜し出すのに非常に骨が折れたであらうと彼は言つた。それほどにもその箱は蜘蛛の巣におほはれてゐたのである。

その晩私たちは貴重な荷物をもつてケンブリッヂへ歸つて來た。その晩は昂奮して私たちはおちおち眠られなかつた。夜が明けるとレオは部屋着のまま、私の部屋へやつて來て、すぐに仕事に取りかゝらうと言つた。私はそれを制して、この箱は二十年も待つてゐたんだから、ついでに朝食がすむまでまたしといた方がよからうと言つた。で私たちは常になく九時かつきりに朝食の卓についた。私は自分の考へにあまり夢中になつてゐたので、恥かしい話だが、レオの茶の中へ砂糖と間違へてベエコンの片を入れた程だつた。ジョップにも昂奮が感染してゐたと見えて、私のセエツル焼の茶碗の柄を壊してしまつた。この茶碗は、マラーが風呂場で刺し殺されるすぐ前につかつたのと同じものだと思は信じてゐる。だが、たうとう朝食も片附いたので、私はジョップに命じて箱をもつて來させた。彼

はそれに疑念を挟むもの、やうに、こはしくそれを卓の上において部屋を出てゆかうとした。
「ちよつと待つてくれ」と私は言った。「レオに異議がなければ、うかうか他言するやうな心配のない第三者に證人として立ち會つて貰ひたいんだがね。」
「それがい、ですな、叔父さん」とレオは答へた。私は彼に自分のことを叔父さんと言はせてゐたのである。

「ジヨツプ、扉をしめてくれんか、そして僕の手文庫をもつてきてくれ」と私は言った。

彼はその通りにした。私はレオの父親の可哀さうなヴィンシイが臨終の晩に私にくれた鍵を手文庫の中から取り出した。鍵は三つあつた。一番大きいのは比較的近代の鍵で、二番目のはひどく古めかしいものであつた。三番目のと來たら、これまでに一度も見だことのない鍵で、何でも純銀でこしらへたものらしく、把手の代りに棒がついてゐて、棒の端には幾つかの溝が彫りぬいてあつた。どう見ても不細工な鐵道の鍵としか思へなかつた。

「さあ二人ともい、かね？」と私はダイナマイトの雷管に火をつけるときに人が言ふやうに言った。二人とも返事はしなかつた。私は大きい鍵をとつて、鍵穴へ少しばかりサラダ油をさして、手が慄へるので二三度しくじつた後やつとのことで鍵をさしこんだ。レオは前屈みになつて兩手で蓋をもち、蝶番が錆びついてゐたので、うんと力をこめてやつと蓋を開けた。中には埃だらけな箱がはひつてゐた。この箱は難なく取り出すことができた。私たちは幾星霜の間に積つた箱の上の塵を拂つた。

それは黒檀か、或はそれに似た木目の細かい黒い木でつくつたものらしく、平たい鐵の帯でぐるぐる縛つてあつた。随分古いものと見えて、流石の堅い木もところどころ朽ちこぼれてゐた。

「さあこん度はこれだ」と言ひながら私は二番目の鍵をさし込んだ。
ジヨツプとレオとは息もつかずに固睡をのんで前へ屈んでゐた。鍵はぐるりとまはつた。蓋をあけると私は思はずあつと叫んだ。それもその筈だ。中には約十二吋四角の高さ八吋ばかりの見事な銀の小函がはひつてゐたのだから。それはまぎれもなく埃及の職人がつくつたものと見えて、四本の脚はスフィックスの形にこさへてあり、圓屋根型の蓋の上にも一つのスフィックスがついてゐた。勿論この小函は長の歲月のために色はくすんで、凸凹ができてゐたが、その他の點ではまだがつちりしてゐた。

私はこの小函を取り出して卓の上に置いた。それから、殆んど完全な沈黙のうちに、妙な恰好をした銀の鍵をさしこんで蓋を開けた。中には線端のところまで、異様な褐色の細片がぎつしりつまつてゐた。それは紙といふよりも植物の纖維のやうなものであつたが、それが何であるかは私にはわからなかつた。それを注意深くとりぞくと、底から三吋ばかりのところ、普通に見る近代式な封筒に入れた一通の手紙が出て來た。それには、亡友ヴィンシイの筆蹟で次のやうに認めてあつた。

「我が子レオへ、若し彼がこの小函を開く時まで生き長らへてゐたならば、
私はこの手紙をレオに渡した。レオは上書きをちよつと見てから、それを卓の上に置き、つゞい

て函の中を調べて見るやうに私に合圖した。その次に私が見出したものは、丁寧に巻いた羊皮紙の巻物であつた。それをひろげて見ると、やはりヴィンシイの筆蹟で「一片に記されたる階書體希臘文字の翻譯」と記されてあつた。私はそれを手紙のそばに置いた。その次に私がとり出したのはいま一つは古ぼけた羊皮紙の巻物で、それは長い年月のために黄色に變色して皺だらけになつてゐた。それをひろげて見ると、矢張り同じ希臘の原文をブラック文字の羅西語に翻譯したものであつた。それは書體や文體から推して、一見十六世紀のはじめ頃のものと、やうに思はれた。

この巻物のすぐ下に何か堅い重いものが黄色い麻布につんで、纖維質のもの、上にのせてあつた。私たちは、ゆつくりと、注意深く、麻布をほどいて見ると、くすんだ黄色の古ぼけた大きな壺の破片が中から出て來た。この破片は、私の推定によると、普通の中型の古代希臘酒器の一部であるやうに思はれた。それは長さ十時半、幅七吋で、厚さは四分の一吋位で函の底の方に向いてゐた凸出した面の方には後期の階書體希臘文字がぎつしり一面に書いてあつた。文字は處々色が褪せてゐたけれども大部分は完全に読みわけることができた。文字は、古代人のよく使つた蘆筆で、非常に念入りに書いたものであることがありありとわかつた。忘れぬうちに言つておかねばならぬが、この不思議な破片は、よほどの昔に二つに壊れたのを、セメントと八つの長い鋸とでつなぎあはせたものであつた。破片には内側にも澤山文字が書いてあつたが、それはかなり読みにくい文字で書いてあり、筆者もまちまちで、書いた年代もまちまちであつた。

「もう何もありませんか？」とレオが昂奮して囁いた。

私は手さぐりをして、小さい麻布の袋に入れた固いものを取り出した。袋の中から出て來たのは象牙に描いた美しい小さな肖像畫と小さなチョコレート色をした甲蟲形のものであつた。それには次のやうなものが彫つてあつた。



この記號は、その後私たちが確めた所によると「日輪の御子」といふ意味であつた。そして肖像畫はレオの母親——美しい、黒服の女の畫像であつた。この畫の裏には、あはれなヴィンシイの筆蹟で、「我がいとしき妻」と書いてあつた。

「これでみんなだ」と私は言つた。

「ふむ」と答へて、レオは、なつかしさうに肖像畫に見入りながらそれを下に置いた。

「ぢやこれから手紙を讀んで見よう」と言ひながら、彼は片時も猶豫なく、封を切つて、聲をあげて

読み出した。

「我が子レオよ——お前が生きてゐて此の手紙を読む時は、お前はもう一人前の大人になり、自分はすつと前に死んでしまつて、殆んど凡ての人に、すつかり忘れられてゐることであらうと思ふ。だがこれを讀むときは、よくおぼえてゐるが、自分はかつて生きてゐたのであり、現在でも生きてゐるかも知れないのだ。そして、筆と紙とを通じて、死の深淵をよこぎつて、お前に手を差しのべてゐるのだ。自分の聲が、墓場の沈黙の中からお前に話しかけてゐるのだ。自分はとつと死んでしまつてお前の心の中には自分の記憶は少しものこつてはをらぬのだが、それでも猶ほ、お前がこれを読む時には、自分はお前のそばについてゐるのだ。お前がこの世に生きてから、自分はお前の顔は殆んど見なかつた。このことは許してくれい。お前の命は、自分が此の上なく愛してゐた女の命の代りなのだ。そのつらさが自分には今だに緝々と身に沁みて感じられる。自分が長く生きてゐたら、そのうちにはこんな馬鹿げた感情に打ち克つ事ができるだらうが、自分の定命はもう旦夕に迫つてゐるのだ。自分は、自分の肉體的、精神的の悩みにもう堪へられん。だから、お前の將來の幸福のために、これから少しばかり後始末をしておいて、それがすんだら、この悩みの結末をつけるつもりだ。自分がまぢがつてゐたら、神よ許したまへ。いつれにしても自分の壽命はせいゝあと一年しかなかつたのだから。」

「やつぱりあの時自殺したんだな、さうだと思つた」と私は叫んだ。レオはそれには答へないで讀み

つづけた。

「ところで、自分のことはもうこれだけで澤山だ。これから言はねばならぬことは、とつと死んで、すつかり忘れられてしまつた自分のことではなくて、生きてゐるお前のことだ。自分の友人ホリイ（この男が承知してさへくれ、ば自分はこの男にお前の後見をたのむつもりだ）から、お前は、お前のひどく古い血統のことについて何事かを聞いたことであらう。この小函の中には、それを證明するに十分な材料が入れてある。お前の遠い先祖が、壱片に書き記しておいた不思議な傳説をお前は見ただらうが、それは自分の父親が臨終の床で自分に渡してくれたもので、自分はあれを見て逞ましい想像にかられたものだ。自分はまだ十九の年に、真相をしらべに行かうと決心した。自分どもの先祖の一人がエリザベス朝時代に矢張りそれを企てたが可哀さうに失敗してしまつたのだ。その時自分が遭遇した事柄を一々述べてゐるわけにはゆかないが、次のことは、自分は、自分の眼ではつきりと見たのだ。ザンベジ河が海に注ぐところから少し北にあたるまでこれまで誰も行つたことのないアフリカの海岸に、一つの岬があつて、その先端に、この書類に書いてあるのと同じ、黒人の頭やうな形をした塔がそびえてゐる。自分はそこへ上陸して罪を犯したために仲間からすてられてゐるついでに一人の土人から、遙か奥地の方に、孟形の大きな山と、澤山の沼に囲まれた洞窟とがあるといふことをきいた。それから又その地方の住民はアラビアの土語を話し、其首長は美しい白人の女だといふことも聞いた。この女を見たものは滅多にないが、この女は生きた者に對しても死んだ者に對して

も、凡ての者に對して權力をもつてゐるといふことである、自分がこのことをたしかめてから二日目に、その男は沼地を渡るときに熱病にとりつかれて死んでしまひ、自分は食料品の缺乏と後に自分を斃した病氣の兆候が見えた、めとで、餘儀なく歸國の途につかねばならなかつたのである。

その後自分が遭遇した冒険については今語る必要はない。自分はマダガスカルの海岸で難船して、數ヶ月の後に英國の船に助けられて、アデンへ護送され、十分な用意ができた次第探検を實行するつもりで、英國へむけ出發したが、歸途希臘へたち寄つて、そこで、戀は凡てのものに勝つといふ諺のとほり、お前の親愛なる母親にあつて結婚し、お前が生れて、お前の母は死んだのだ。それから自分は最期の死病にとりつかれて、死ぬためにこゝへ歸つて來たのだ。けれども自分はまだ心細い希望をすてないで、若し病氣がなほつたら、もう一度アフリカの海岸へ行つて、自分達の家門に幾世紀もの間傳はつてきた傳説の神祕を解きたいと思つて、アラビア語の勉強をはじめたのだ。しかし自分の身體はよくはならなかつた。これで自分の關する限りではこの物語はおしまひである。

「だが我が子よ、お前の話はこれでおしまひではないのだよ。で自分は自分の勞作の結果と、代々傳つて來た原物の證據品とお前に渡すことにする。たゞ自分はお前が、この書類に書いてある此の世に於ける最大の祕密をしらべて見ようと思ふか、それともそんなことは狂女の頭の中に空想されたつまらぬつくり話としてうつちやつてしまふかを自分で判斷することのできる年齢まで、わざとお前の手にこれを渡さないやうな手筈にしておいたのである。

「自分はこれはつくり話ではないと思ふ。生命といふものが存在する以上、それを永久に保存する手段が存在しないわけはないではないか。だが自分はこのことについてお前の頭に偏見を植ゑつけたくない。お前が讀んで自分で判斷するがよい。若しお前が探検をやつて見ようといふ氣になつたら、費用にこまるやうなことはないやうにしてある。それとも、この傳説を荒唐無稽なものとして満足するなら、壺片も書類も破毀して棄て、しまつて貰ひたい。そして自分たちの一族から惱みの種を取りのぞいてほしい。おそらくそれが最も賢明なやりかただらう。未知のものは一般に怖れられるものだ。それは諺にあるやうに、人間の内心に巢喰ふ迷信のためではなくて、未知のものは實際に怖るべきものであることが屢々あるからだ。世界を動かしてゐる廣大神祕な力に要らざる手だしをするものは犠牲となつてたふれることがありがちだ。しかも萬一目的を達したとしても、遂にお前が試練に打ち克つて永劫の美しさと若さを保つことができるやうになり、神身の腐朽に超絶する力を得ることができるやうになつたとしても、そのためにお前が幸福になれると誰が言はう？ お前の欲するまゝにするがよい。萬物を司る神の力が、お前とお前が成功の曉にはその主となる世界との幸福になるやうに選擇を誤らしめざらんことを祈る。さらば！」

これで、署名も日附もない手紙はあわたしくもおしまひになつてゐた。「それをどうしますかね、おちさん」とレオは手紙を卓子の上に置きながら言つた。「吾々神祕をさがしてゐましたが、どうやら一つ見つかつたやうですね。」

「どうするかつて？ かはいさうに、お前のお父さんは氣が狂つてゐたに決つてゐるぢやないか」と私は答へた。「二十年前に、あの男が私の部屋にはひつて來た晩から私はさうぢやないかと思つてゐた。かはいさうに、あの男が自分の死期をはやめたんだつてことはお前にもわかつたね。こりやもう全くの變語だよ。」

「そのとほりでございますとも！」とジョップは鹿爪らしく言つた。ジョップは實際家の中でも模範的な實際家であつた。

「では兎も角、破片に何が書いてあるか見よう」と言ひながら、レオは父親の自筆の翻譯をとり上げて讀みはじめた。

「吾は埃及王家の出にて、神々にいつくしまれ、惡魔を従ふる、イシスの僧カリクラテスの妻アメナルタスなり、死するに臨みて吾が幼な兒チシステネスに書きのこす。吾は、戀のために誓を破りたるおん身の父とネクタネス王の治下に埃及を逃れ、海を渡りて南の方に赴き朝日に面せるリビアの海岸を二年の間放浪せり。そこにはとある河の邊に、エチオピア土人の顔に似たる巨巖あり。大河の河口より水上に流轉すること四日にして、或る者は水に溺れ、或る者は病の爲めに死したり。されど吾等二人は、蠻人につれられ、海鳥空をおほうて飛ぶ荒野又は沼地を過ぎて、十日の後、とある空洞の山に着きぬ。この山は古昔大都市のありしあとにて世の人のいまだ終端を見しことなき洞窟あり。蠻人等は吾等を彼等の女王の前につれゆきたり。彼等はその時異國人の頭に壺をのせぬたり。女王は全

知全能の魔法使ひにて、永劫不死の生命と美しさとをもち、女王はおん身の父カリクラテスに戀慕の眼差を送り、吾を殺して彼を夫となさんとしたれど、おん身の父は吾を愛して女王を恐れて、命に従はざりき。ついで女王は、氣味惡き魔術を用ゐて、吾等を恐ろしき道をとほりて巨大なる堅穴のそばへつれゆきたり。その入口には年老いたる仙人死して横はりあり。女王は吾等にうづまき燃ゆる不死の命の柱を指し示せり。そのうづまき響は萬雷の如く耳を聳せんばかりなりき。女王が焰の中に立ちて、出で來たる姿を見れば身に寸分の傷もなく却つて美しさを増せるかと思はれたり。女王は、おん身の父もし吾を殺して女王になびけば、おん身の父をも女王と同じく不死の身となさんと誓へり。そは吾が國の魔法を知りて女王の魔法に逆らひたる故に女王は自ら吾を殺す能はざりし故なり。おん身の父は手をのばしておのが眼をおほひ、女王の美しさを見えざるやうにし、なほも命に従はざりき。女王は怒りて魔法をもつておん身の父を殺したれど、いとしさに堪へかねて泣きふし、今は悲しみに沈みをれり。女王は吾をおそれて大河の入口に吾を送れり。そこは船着場なりしかば、やがて吾は船に乗せられ、船中にておん身を産み、諸方を漂流せるのち、アテンに來れるなり。吾が兒チシステネス也、いま吾おん身に言はん。この女を探し出して生命の秘法を學び、能ふべくんば、おん身の父のためにこの女を殺すべし。おん身若しこれをおそれ、或は失敗するときは、吾はこのことをおん身の後に來る子々孫々に言ひのこすものなり、やがてその中より勇敢なる人出で、火に浴し、國王の位置に坐するまで。吾が言ふこと、信じ難く思はるれど、吾はそれを知れり、吾は謔りを言はず。

「勿體ない、神様どうぞこの女の方を許して下さるやうに」と、口をあけてこの驚歎すべき文章をきいてゐたジョップは呻いた。

私は何も言はなかつた。はじめには、私はこれは、あのかはいさうなヴィンシイが、氣が變になつたときにすつかりこんな話をつくりあげたのだらうと思つたが、それにしては、こんな話は誰にだつてつくれさうにないやうに思はれた。あまりにそれは奇抜だつた。私は自分の疑をとくために、壺片をとり上げて、その上にきつしり書いてある楷書體の希臘文字を読みはじめた。それは埃及生れの人筆になつた文章としてはその當時甚だ立派な希臘文であつた。それから、なほもよくしらべて見ると、英文の翻譯は、正確な名文であることがわかつた。

壺片の凸面には楷書體希臘文字のほかに、もと酒壺の口であつた一番上のところに、くすんだ赤色で、吾々が小函の中で見出した甲蟲形寶石にあつたのと同じ玉璽が記してあつた。但しそれは、蠟の上へおしつけたやうに、中の象形文字或は符號が逆になつてゐた。これがほんもの、カリクラテスの玉璽であるのか、それとも彼の妻アメナルタスの先祖の王族の誰かのものであるのか、私にはわからなかつたのみならず、それが楷書體希臘文字を書きつけたときに描かれたものか、後に、一門の誰かが甲蟲形寶石から模寫したものかもわからなかつた。そればかりではなく、文章の書いてある下に、同じくくすんだ赤色で、二つの羽根をつけたスフィンクスの頭と肩との素描らしいもの、輪郭があらはれた。この羽根は王家のしるしであつて、神牛や神々の像にはよくつけてあるが、スフィンクスに

ついてゐたのは私はまだ見たことがない。

それから壺の表面の右端の希臘文字の書いてないところに、次のやうな不思議な文字が赤色でしるされて青色で署名がしてあつた。

地に空に海に

不思議なるものぞあるなり。

ドロテア・ヴィンシイ記す、

何が何やらすつかりわけがわからなくなつて、私は壺片を裏返して見た。そこには、上から下まで、希臘語や拉典語や英語で簡単な文句と署名とが一面に記してあつた。最初のは楷書體希臘文字で、表面の手蹟の宛名人になつてゐる。チシステネスの書いたものであつた。その文句は「吾は行く能はざりき。チシステネスより、我が子カリクラテスへ」このカリクラテス（きつと希臘流に祖父の名を襲名したのであらう）は、何でも、探検に出かけようとしたらしく、かすかな、殆んど読みわけることのできないやうな楷書體希臘文字で「吾は行くことを止めたり。神々は吾を守り給はざりき。カリクラテスより吾が子へ」と書いてあつた。

この二つの古代文字の手記のうちで第二のものは逆しまに記してあつて、しかも、ちようどそれの

れてゐた。それは、二つの十字架又は十字軍士の劍の上に書いたもので年代は千四百四十五年になつてゐた。そしてなほ一層奇怪なことには、二番目の羊皮紙の巻物にその英譯がついてゐた。その文意は次のとおりであつた。

「この遺物は、遠き昔我が先祖がブリタニイよりもち來りしものなるが、それは惡魔が魔法をもつてつくりたるものなれば破毀すべしとの聖僧の言に従ひ吾が父が二つに毀したるものなり。されど吾れヨシオン・デ・ヴィンシイは、紀元千四百四十五年聖母マリイの祭日の次の月曜日に、これを再びつぎあはしたるものなり」

その次の、最後から二番目の手記はエリザベス朝のもので一五六四年の日附になつてゐた。それには次のやうに書いてあつた。「こは最も不思議にして、且つ我が父の生命を失はしめたる物語なり。我が父はアフリカ東海岸に件の場所を探檢せんとしたるが、彼の快走船は、ロレンツ・マルケス沖にて、ホルトガルの大帆船のために沈められ、彼自らも亦死せり。——ジョン・ヴィンシイ。」

その次の、即ち最後の手記はその書體からかながへて見ると、十八世紀の中葉に、ヴィンシイ家の代表者によつて書かれたものである。それは、「ハムレット」の中の有名な文句の少々間違ひのある引用で「天地には、君の哲學の夢想たも及ばざる多くのことがあるぞよ、ホレーヌ君」といふのであつた。

いま一つの書類は、壺片の希臘文字を中世の拉典文に翻譯したものであつた。それは英國ではじめ

て希臘語を教へたエドマンド・ブラットといふ學者が一四九五年に翻譯したものである。きつと、その當時の何とかヴィンシイが、ことによると、壺片をつぎあはして一四四五年に前に記した文句を書いて、そしてジョン・デ・ヴィンシイがブラットの高名をきいて、彼が當時希臘語を教授してゐたオックスフォードへ駆けつけ、不思議な壺片の文字の意味を解かうと思つたのであらう。

これ等の書類、少くもその中の判讀できるものをすつかり讀み了り驗べ了つてから私は言つた。「さあこれですつかり様子はわかつた。これでもうお前も、考へをきめることができるわけだ。わしの考へはもうきまつたがね。」

「では叔父さんはどう考へますか？」と彼ははや口でたづねた。

「かうだ。この壺片は真正銘のものだとわしは信ずる。そして不思議なやうだが、これは紀元前四世紀の頃から君の家に傳はつて來たものであることも信ずる。手記が何よりの證據だ。だから、どんなにありさうもないことでも、事實は認めなくてはならん。だがちよつと待つて貰ひたい。お前の遠い先祖の埃及の王女或はその女の指圖を受けた或る書記が、この壺片に記してある文章を書いたのだといふことは、わしは少しも疑はんが、それと同時に、この女はいろいろな苦しみや夫を失つた悲しみのために正氣を失つてゐて、これを書いたときは健全な精神状態ではなかつたといふことも、わしは少しも疑はんのだ。」

「僕の親父が、あちらで見たり聞いたりしたことはどう説明するんですか？」とレオはたづねた。

「暗合さ。アフリカの海岸には、そりや勿論いくらか人間の頭に似た断崖もあらうし、アラビヤ語に似た土語を話す人間も澤山あるだらう。それに沼地だつていくらかもあるに相違ない。それから、こんなことを言つちや氣の毒だが、君の親父はこの手紙を書いたときに、全く正氣だつたとは僕は思はんよ。あの男は随分苦しみにあつて來たので、この物語もたうとう空想の餌食にしてしまつたのだ。元來が餘程の空想家だつたからねえ。いづれにしても、いま吾々の手に傳はつて來たこの傳説は取るに足らんものだよ。自然界には吾々が滅多に遭遇しない、そして遭遇しても吾々にはわからない不思議な力がいろ／＼あることはわしも知つてゐる。だがわしは自分の眼でそれを見るまでは、そしてこの眼で見るとは到底ありさうにないことだが、たとひ束の間でも死を避ける術があるなんてことは断じて信じない。又、アフリカの中心に白人の魔女が住んでゐるとか住んでゐたとかいふことも信じない。そりや、噺言だよ、レオ君、噺言だよ！——ジョップ、お前はどう思ふかね？」

「そりやもう眞赤な嘘でございますとも、それにもしほんたうだとしても、レオ様はそんなことに手出しをなさらないやうにしていたゞきたいですね。何もいゝことはありつこはありませんから。」

「多分あなたの方のお考へが正しいでせう」とレオは非常に物しづかに言つた。「僕は意見は何も申しませんが、これだけのことは言つておきます。僕はこの問題をすつかり解決してしまふつもりです。若し貴方がたが一緒に來られないなら、僕は一人で行く決心です。」

私はこの青年の顔を見て、彼が眞面目に言つてゐることを知つた。レオが眞面目に物を言ふときに

は、口のあたりに妙な表情が浮ぶので誰にでもわかつた。それは子供の時分からの彼の癖であつた。ところで私は、勿論彼を一人でもこへもやる氣はなかつた。それは彼のためといふより寧ろ私のためだつたのである。私は彼にひどく愛着を感じてゐたのでとてもそんなことはできなかつたのである。私にはあまり係累もなければ、愛情をわかつ相手も多くはない。此の點では私は逆境にたつてゐた。世間の人は男も女も私を避けてゐた。少なくとも私にはそのやうに思はれた。で私は世の中から隠退して、世間の人と親しい交りや結ぶ機会を自から断ちきつてゐたのである。だから、レオは私にとつては全世界であつた。弟でもあり、子供でもあり、友達でもあつた。それでレオの方で私に飽きて來るまでは、レオの行くところへはどこへでも私は行かねばならなかつたのである。だが勿論、彼が私にとつてそれ程重きをなしてゐることをさとられては工合が悪いので、私は何かうまい口實を設けて彼に従ふ手段はないものかと考へてゐた。

「さうです、私は行きますよ、叔父さん。」と彼は繰り返した。「もし『うづまく生命の柱』とやらが発見できなくなつて、すばらしい獵ができることは請合ですからね。」

私は、この絶好の機会を捉へた。

「獵だつて」と私は言つた。「さうさう！ それにはちつとも氣が附かなんだ。あちらにはきつと廣い人跡未踏の山野があることだらう。そして獲物が澤山あるにきまつてゐる。わしは生きてゐるうちに一度水牛を殺して見たいと思つてゐたんだ。いゝかいレオ、わしは探検のことなどは信じてをらん

が、獵のことになると眼がないんだよ。で、すっかり考へた上で、ほんたうにお前が出かけるつもりなら、わしも氣晴らしに、お伴をするよ。」

「さうでせう」とレオは言つた。「僕は叔父さんがこんな又とない機會を逃しはなさるまいと思つてあましたよ。だがお金はどうしませう。随分費用がかかるでせうからね。」

「その點についてちや心配は要らん。」と私は答へた。「お前の収入の何年分もすっかり積んであるからね。それに、お前の親父がわしにのこしといつてくれた金も三分の二は貯蓄してある。これもつまりはお前のためにのこしておいてくれたんだ。お金は正金でうんとあるよ。」

「そりや素敵だ。では、こんなものはもうしまつて、早速町へ鐵砲を見に出かけませう。ところでジョップ、お前も一緒に行かないかい？ もうお前もぼつ／＼世間を知つてよい時分だぜ。」

「よろしうございます。」とジョップは氣のりのしない聲で答へた。「わつしは見知らぬ異國へなどあまり行つて見たいとも思ひませんが、あなた様方が二人ともお出かけになれば、誰かお世話をする人もお入り用でございませうし、それにわつしは、二十年もの間使つていた／＼いて、今更らひとりであるに残つてあるやうな人間ではございせんから。」

「その通りだよ、ジョップ」と私は言つた。「別に何も驚くやうなことは見つかりもすまいが、すばらしい獵ができるぜ。それに二人ともこれを見たまへ。わしは、こんな馬鹿げたものについては一言も世間の人に聞かしたくないね」と言ひながら私は件の壺片を指さした。「もしこんなことが知れて、わ

しの身にまさかのことがあつた時には、わしが正氣だつたかどうかつて問題で近親の者の間に、わしの遺言について争ひが起るだらうし、わしはケンブリッヂの物笑ひになるにきまつてゐるからな。」それから三箇月たつて、吾々はサンヂバル行きの船に乗つて大洋を航渉してゐた。

第四章 狂風

これから私が話さうとする場面と、これまで私の話して來た場面とは何といふ相違であらう！ 靜かな大學の自修室も、風に搖れてゐる英國の楡も、白嘴鴉の啼き聲も、書棚に見られた書籍類もみんな過去のものだ。そしてその代りに、アフリカの満月の光の下に、くつきりとした陰影にくまどられて銀色に光つてゐる靜かな大海の光景が現はれてゐるのだ。吾々の乗つてゐる船は靜かな風を孕み、美妙な音をたて、舷側に打ち寄せる波をわけて走つてゆく。もう眞夜中近いので、大抵の人は眠つてゐる。だが、色の淺黒い、頑丈造りのマホメッドといふアラビア人が舵臺に立つて、星をたよりに、ものうげに舵をとつてゐる。右舷から三哩あまりのところ、低い、ぼんやりした線が見える。それが中央アフリカの東海岸だ。時は正に北東の季節風の起る前、處は、アフリカ大陸と、此の危険な海岸を數百哩の間縁どつてゐる暗礁との間を、吾々は南の方へ向つて走つてゐるのだ。夜は靜かだ。船首から船尾へ低聲で囁いても話ができ、とれるくらの靜かだ。遠くの陸地から、微かなうなり聲が、海面をこえて聞えるくらの靜かだ。

舵臺のアラビア人が手を伸して一語言った。「獅子だ！」

一同はみんな坐りなほつて耳を傾けた。また聞える。ゆつたりとした、莊重な、骨の髄まで泌みわたるやうな聲が。

「船長の計算が間違つてゐなければ、明日の朝の十時までには、あの人間の頭の形をした奇妙な巖に着くわけだね、そして獵がやれるわけだ」と私は言った。

「それから廢都の跡と生命の火との探検がはじまるわけですね。」とレオはパイプを口からはなして少し笑ひながら訂正した。

「莫迦な」と私は答へた。「お前は今日の午後舵臺であの男にアラビア語で得意さうに話をしてゐたが、あの男は何と言つたね？ あいつはこの地方をあちこち廻つて、やくざな半生を商賣をしてゐたところがあるさうだが、(多分奴隸の取引をやつてゐたのだらう)そして一度あの『人間』岩へ上陸したことがあるさうだが、廢都のことや洞窟のことを何か聞き知つてゐたかね？」

「い、や」とレオは答へた。「あの男は、この地方は奥の方は沼だらけで、蛇や獸が澤山すんでゐるが、人間は一人も住んでゐないと言つてましたよ。何しろ、アフリカの東海岸はずつと沼の帯で圍まれてゐるので、手がつけれんといふことですよ。」

「さうとも」と私は答へた。「マラリアにはもつてこいの處だ。あの連中が、この地方についてどんな意見をもつてるか、それでわかつたわけだね。誰だつて吾々の相手になんかなりやしないさ。奴等は

吾々を氣狂だと思つてるんだ。それにわしは誓つて言ふが、奴等の考へが正しいのだよ。」

「い、ですとも、ホレース叔父さん。僕はこの機會を逃しやしませんよ。おや！ あの雲は何でせう？」かう言ひながら彼に船尾から數哩はなれたところの星の空に浮んでゐる黒い斑點を指さした。

「行つて舵手に聞いて御覽」と私は言った。

彼は起ち上つて兩腕を伸して行つたが、すぐに歸つて來た。

「あれは狂風ださうですよ。けれどもずつと向うの方を通るつていふことです。」

ちやうどその時ジョップがやつて來た。

彼は大層元氣さうに見えた。褐色のフランネルの獵服姿はちやきくの英國つ兒であつた。だが、彼の人の善い丸顔には困つたやうな様子が見えた。それは彼がこの見知らぬ海へ乗りこんで來てからしじゆうのことだつた。

「ねえ旦那様」と阿彌陀にかぶつた日よけ帽子に一寸手をやりながら彼は言った。「船尾のボートには、織砲や何かみんな藏つてあるでせう。錠前付きの戸棚に入れてある食料品の方はい、としましてもですね。私はそつとあそこへ行つて、あのボートの中に眠つた方がよいやうに思ふのです。どうも私には、こゝで彼は聲をおとしてひそく話で囁いた。あの黒ん奴の奴等の眼つきが氣に入らんでしてね。奴等はどうも辻散くさい様子をしますよ。若し奴等が夜中にボートの中へしのびこんで、綱をきつてあの船にのつて逃げていつてしまつた日には、困つたことになりますぜ。」

このボートといふのは、吾々が萬一の場合の用心に、スコットランドのダンディで、特別に注文して造らせてもつて来た長さ三十呎の美しいボートで、熱さを防ぐために坊は銅でこしらへ、防水設備を施した室なども設けてあつたのである。

「さうだねえ、ジョツプ」と私は言つた。「さうした方がいゝかも知れんねえ。あそこには澤山毛布があるから、たゞ月の光にあたらぬやうに用心した方がいゝよ。さうしないと氣が變になつたり、盲人になつたりするからねえ。」

「かまふもんですか！ あの黒奴の野郎の、薄汚い、泥坊じみた様子を見たんでもういゝ、加減頭が變になつてゐるんですもの。奴等は肥搔きでもするより他に仕方のない連中ですよ。それにもう今から悪臭紛々たるもんでございますよ。」

ジョツプはこれでもわかるやうに、皮膚の黒い吾々の同胞の習慣や動作の讚美者ではけつしてなかつた。

そこで、吾々は曳綱でボートを引つ張つて、船尾の眞つ下まで引き寄せた。ジョツプはまるで馬鈴薯の袋でもころがすやうにその中へころがりこんだ。吾々はまたひきかへして、甲板に腰をかけて、煙草をふかしたり、しづかに話したりした。その夜は何とも言へぬ美しい夜であつた。吾々の頭の中は、抑へつけてゐた色々な昂奮で一ばいだつたので、眠くないやうな氣がした。かれこれ一時間もこんな風にして坐つてゐるうちに、どうやら、二人ともとくとまとろんだらしい。少くも、私は、

レオが水牛の頭は的ひどころとして悪くない、ちよつと角と角との眞ん中へ一發喰はしたり、咽喉つ首へ彈丸を射ちこんだりするのには素敵だとか、或はそれに類した他愛もないことを眠さうに説明してゐたのをかすかにおぼえてゐた。

それから先のことは何もおぼえてゐなかつた。すると突然、恐ろしい風の唸り聲と眼をさました乗組員のけた、ましい恐怖の叫び聲とがきこえ、水の泡沫が鞭のやうに顔を刺すのを感じた。二三の人はかけつて帆索をゆるめて帆を下さうとしたが、索が堅く喰ひ込んでゐて帆桁は容易に下りて來なかつた。私は跳び上つて一本の綱にぶら下つた。船尾の方の室は溼青のやうに眞黒であつたが、船首の方にはまだ月が皎々として漆黒の闇を透らしてゐた。月光の下には二十呎以上もある大波が白い波頭を見せて吾々の方へ突進して來た。大波は將に碎けやうとしてゐた。月はその峰を照らし、その泡沫に光を注ぎかけてゐた。後から恐るべき狂風にかりたてられて、眞黒な空の下を、大波は突き進んで來た。突然、瞬間に、黒いボートの形が、空中高く、碎けつゝある波頭の上に押し上げられたのを私は見た。ついで水がどつと打つつかつて、泡が沸き返りながら押し寄せて來た。私は一生懸命に櫓索にしがみついて、強風にあつた旗のやうに眞直ぐに引き伸ばされた。

船は船尾に波をかぶつたのである。

波は通り過ぎた。私は數分間も水の下にゐたやうに思つたが、その實それは數秒間であつた。前方を見ると、大きな帆は、疾風のために引きちぎられて、手傷を負うた巨鳥のやうに、風下の方へはた

はたとなびいてゐた。やがて比較的静かな區間が來た。その時に、私は「ボートはこちらですよ」と大聲でわめいてゐるジョップの聲を聞いた。私は氣が顛倒して半ば土左衛門になつてゐたのだが、それでも船尾の方へ突き進んでゆくだけの正氣はもつてゐた。私は歩いて行く足の下で船が沈んでゆくやうな氣がした。船はもう水で一ぱいになつてゐたのである。船尾の突出部のすぐ下で、ボートは狂氣のやうに揺れてゐた。と、今しがたまで親船の舵をとつてゐたアラビア人のマホメッドがそのボートの中へ跳びこんで行くのが見えた。私は眞直にびんと張つた綱を金剛力を出して引き寄せ、同じくあとからボートへ跳び降りた。ジョップが片腕をつかまへてくれた。そして私は船底へころがり込んだ。親船の船體はずぶくんと沈んでいつと忽ち吾々は嵐にかりたてられて、親船の沈んだ上を吹き流されて行つた。

「大變だ！」と私は叫んだ。「レオはどこにある？ レオー レオー」
「レオ様はゐなくなりました」とジョップが私の耳のそばまで口をもつて來てわめいた。それでも荒れ狂ふ暴風のために彼の聲はまるで私語のやうにきこえた。私は兩手をあはせて、ねぢまげながら懊惱した。レオは溺死したのだ。そして私があとへ生き残つて彼の死を悲しまねばならぬのだ。「そら、又浪が來ましたよ」ジョップが大聲でわめいた。

私は振り返つて見た。第二の巨浪が吾々に襲ひかゝらうとしてゐた。私はいつそのことその浪に天まれてしまひたいやうな氣になつて、妙に、釣り込まれるやうな氣持ちで、恐ろしい浪の押し寄せて來るのをぢちと見まもつてゐた。月は、すさまじい嵐に吹きまくられて殆んど姿を隠してゐたが、それでもなほ少しばかりの光が、貪婪な巨浪の波頭をきら／＼照してゐた。波頭の上に何か黒いものが漂うてゐる。それは難破船の破片だ。たうとう波は吾々のボートへ押し寄せて來た。ボートは水で殆んど一ぱいになつた。だがこのボートには有り難いことには誰が發明したのか空氣も通はぬ密閉した小室が澤山設けてあるので、波の間からひよいひよいと水鳥のやうに浮び上つた。渦巻く泡の中に、私は黒いものが波の上を眞直に私の方へ急いで來るのを見た。私はそれをおし除けようと思つて右手をのばした。すると私の手先に何者かの腕がつかまつた。私の指はその手首を萬力のやうにがきつつかんだ。私は随分力は強い方だが、それでも、この漂流者の身體の重味とひつぼる力とのために、肩が千切れさうになつた。もう二秒間も浪がついてゐたら私はきつと手をはなしたか、或は自分も一緒につれてゆかれたかしたにちがひない。けれどもボートの中に膝まで水をのこして、浪は通り過ぎてしまつた。

「さあ汲み出すんだ、水を汲み出すんだ」と叫びながらジョップはせつせと水汲みにかゝつた。けれども私はその時は水を汲むどころの騒ぎではなかつた。何故なら、月はもう雲間に没してあたりは眞の闇であつたけれども、一條のかすかな迷つた光りは、私のつかみあげた男の顔を照らしてゐ

たからだ。その男は船底に半ば横はり、半ば浮んでゐた。

それはレオであつたのだ。レオが波に押し返されて来たのだ。死んでゐるか生きてゐるかはわからぬが、正に死の顎から押し返されて来たのだ。

「さあ水を汲み出さなくちや沈んでしまふ」とジョップは聲を張りあげた。

私は腰掛の下に結びつけてあつた柄のついた大きな錫の甕をとつて、三人で一生懸命に水を汲み出した。嵐は吾々の上に、まはりに荒れ狂ひ、ボートは前後左右に翻弄された。嵐はうづを巻いて、水は棘のやうに身を刺し、眼をおほふ中を物ともせず、吾々は死物狂ひの歡喜にあれ狂ふ悪魔のやうにたち倒れた。死物狂ひにも一種の歡喜があるものだ。一分！ 三分！ 六分！ ボートはだんだん輕くなつてゆき、新しい波はもう押し寄せて來ない。それからまた五分もたつとボートの中の水は大抵汲み出されてしまつた。その時突如として、恐ろしい嵐のたけり狂ふあなたに、鈍い、深い轟きがきこえて來た。南無三！ それは激浪の音であつたのだ。

ちやうどその時、月はまた輝きはじめた。こん度は狂風の通つて來る後の方からである。少しく間隔をおいて二條の白い線が、遙か彼方から押し寄せて來る。それは浪なのだ。ボートが燕のやうに水を切つて進むにつれて、浪の音はだん／＼はつきりして來る。

「さあ舵をとるんだぞ、マホメッド」と私はアラビア語で言つた。「もう一度あの浪を乗り切らなくちやならん。」それと同時に私は槳を握り、ジョップにも槳をとらせた。一瞬にして、吾々のボートは、

泡立つ激浪の中へ、驀らに、競馬馬のやうな迅さで突進していった。

船は浪にぶつつかつた。筆紙につくしがたい、心臓の破れるやうな昂奮の一二分がついた。私のおぼえてゐるのは、たけり狂ふ泡の海と、こゝに、かしこに、至るところに、大洋の墓場から抜け出して來た怨靈のやうに頭を擡げて來る波濤だけである。一度吾々は渦のなかにまきこまれたが、運がよかつたのかマホメッドの舵の操りかたがうまかつたのか、ボートの軸は眞直ぐにゆつと浮き上つた。又しても怪物のやうな浪がやつて來た。吾々はそれを乗り越えた、といふよりも潜り抜けた。息詰まるやうな昂奮がちよつとしづまつて、アラビア人が歡喜の胴羅聲をあげた。ボートは激浪を乗りこえて、やゝ靜かな海へ出たのである。

けれども、船はほとんど水で一ぱいになつてゐたし、半哩ほど先には次の浪が押しよせて來てゐた。吾々は又もや狂氣のやうに水を汲み出した。幸にも嵐はすつかり鎮まつて、月は皎々として輝き、半哩以上も海上に突出してゐる岩だらけの岬がくつきりと見えた。浪はその岬までついでいて海ものと見えて、岬の麓で浪が碎けて白い飛沫をたててゐた。多分岬はそれからはなほすつとついでいて海面の下に没して暗礁になつてゐるのであらう。ちやうど吾々が二度目にボートから水をすつかり汲み出した時に、有り難いことにはレオは眼をひらいた。私は彼にそつと眼を閉ぢてゐるやうに言つた。彼は今の境遇を少しも知らずに、多分もう起きて教會へ行く時刻だとも考へてゐたのであらう、だまつて又眼を閉ぢた。教會と言へば、ケンブリッヂ大學のあの居心地のいゝ、自修室が何とも言へずな

つかしい。何故私はあの部屋をはなれてこんなところへ来るやうな馬鹿だつたのだらう？

だが、吾々はまた浪のはうへ押し流されてゐた。しかし、風がしづまつてゐたので、前のやうに急にはなく、たゞ潮流のまにまに押し流されてゐたに過ぎない。マホメッドはアラ一の名を呼び、私は神を念じ、ジョップもなにかさげびながら吾々は浪にぶつつかつた。かうした危険は幾度も繰りかへされた。たゞ以前ほど激しくはなかつただけのことである。マホメッドのたくみな舵の操縦と、密閉室とおかげで、吾々の命はたすかつたのである。五分もたつと吾々は波を乗り切つて、權をとる力もなくなつてしまつたので、潮に流されて、驚くべき速さで前に言つた岬のまはりを押し流されてゐた。

そのうちに船脚はだん／＼のろくなつて、船はもう進まなくなつた。嵐は静まり、空は拭つたやうに晴れ渡つた。吾々は或る河口へついてゐた。潮の流れもおさまつて、船はしづかに海上に泛んでゐた。月が沈むまでに船内の水の汲み出しもすつかり終つて、やつと船らしい形になつた。レオはぐつすり眠つてゐたが私は起きぬ方がよいだらうと思つた。彼は濡れた着物のまゝで寝てゐたのではあるが、暖い夜なので、彼のやうな人並以上に丈夫な人間には左程害はなからうと私も考へたし、ジョップの考へもさうだつた。それに第一手許に乾いた着替へはなかつたのだ。

まもなく月は沈んだ。そして吾々は、惱める女の胸のやうにひく／＼と動いてゐる海上に漂うてゐた。やつとのこと、今までのことを思ひかへす餘裕もできた。ジョップは舳に、マホメッドは舵の

ところ、そして私は船の中央のレオの寝てゐるすぐそばに腰をおろした。

月はしづ／＼と美しく沈んでいつて、水平線下に没し去り、長い被布のやうな影は空にひろがつて、それをとほして星影が見えてゐた。しかしそれも間もなく東が白むにつれて消えてゆき、夜は明けはなれて、空は紺青の色にかはつた。海は益々静かになつて、海面にたちこめてゐる柔い靄のやうにおだやかになつた。曙の天使は東から西へ、海から海へ、峰から峰へと、その胸と翼とから光をまき散して行つた。光は闇を追ひ拂つて静かな海上に、低い海岸線に、海岸線の彼方の沼の上に、その上に聳ゆる山の上に、平和に眠れるもの、上に、悲しみに眼ざめてゐるもの、上に、悪の上に、善の上に、生けるもの、上に、死せるもの、上に、廣大なる世界の上に、世界の上に呼吸してゐる、またかつて呼吸してゐた萬物の上にあまねく降り灑いでいつた。

それは美しい眺めであつたが、しかもなほ悲しい眺めでもあつた。恐らくそれはあまりに美しかつたためであらう。昇る日と沈む日！ それは正に人類と人類にかゝはりをもつ凡ての物との象徴であり姿態である。その朝はこのことが妙に泌々と私の胸にこたへた。今日吾々のために昇る日は、昨夜十八人の吾々の同乗者のために沈んだ日ではないか！ 吾々の知つてゐた十八人のために永久に沈んだ日ではないか！

アラビア船は彼等と共に沈んでいつた人々は、岩や海藻の中を、死の大海の中の人間の流れのやうに流れてゐるのだ！ そして吾々四人は助かつたのだ！

第五章 エチオピア人の頭

たうとう日輪の先驅はその仕事を了へて、影は隈なく掃き清められ、大日輪は大海原のベッドから雄姿をあらはして熱と光とを下界に漲らした。私は船の中にすわつて、おだやかに舷に寄せて来る水の音を聞きながら、朝日の昇るのを見まもつてゐた。そのうちにボートは少しづつ、押し流されて吾が今しがたひどい危険を冒して来た岬のとつばなにある、奇妙な形をした巖のそばへ来た。それは巖といふよりもむしろ峰といった方がよいかも知れぬ。その巖は、私と太陽との間にすつくと聳たてゐて、私の眼から太陽を遮ぎつてゐた。それでも私はぼんやり巖を凝視してゐた。すると間もなく、背後の太陽の光りで、巖の輪郭がくつきりと照し出された。私は仰天した。それも無理ではない。高さ約八十呎、麓の厚さが百五十呎もある巖の頂が、黒人の頭のやうな形をしてゐて、此の上なく氣味の悪い、恐ろしい形相が刻みつけられてゐるではないか。それはもう疑ふべくもなかつた。私のすぐ前に、厚い二つの唇と、肥つた頬と、背後の日光で、驚くほどくつきりと照し出されてゐるづんぐりとつたつた鼻とが見えるのだ。恐らく幾千年間風雨にけづられてあんな形になつたでもあらう圓い頭蓋、かて、加へてその上には海藻や苔がもじやもじやと生えてゐて、それが日光を浴びてゐるところは、巨大な黒人の頭のちげれ毛にそっくりなのである。たしかにそれは非常に妙であつた。あまり妙なので、今では、私はこれはたゞの造化の戯れではなくて、有名な埃及のスフィンクス

のやうに、遠い、誰の記憶にもこのつてゐない太古の人々によりてつくられた巨大な記念碑だらうと思つてゐる。恐らくそれは、この港に近づいて来る敵に對する警告と反抗との表象としてこしらへたものであらう。不幸にして吾々はその後果してさうであるか否かをたしかめることはできなかつた。それは海からも陸からもその巖へ近づくことはできなかつたのと、外にいろくしなればならぬ仕事があつたのとのためである。今、その後には吾々が見た事柄によりて察すると、たしかにそれは人間の手によりてつくられたものである。いづれにしても、それは二千餘年前、レオの遠い先祖のカリクラテスの妻であり埃及の王女であつたアメナルタスの頃にも立つてゐたのであり、今後もいつまでも立つてゐるに相違ないのだ。

「お前はあれをどう思ふかい、ジョップ？」とボートの端に腰を下して、ひどく悲觀した顔つきをしながら、出来るだけ多く日光を吸ひとらうとしてゐた吾々の從者に向つて私は訊ねた。そして私は悪魔の頭のやうな巖を指した。

「ひええ！」とはじめて巖を見たジョップは答へた。「まるで旦那様があの巖の上へ坐つて肖像をとらせなかつたやうですな。」

私は笑つた。その笑ひ聲でレオが眼をさました。

「おや！」と彼は言つた。「僕はどうしたんだらう？ すつかり身體が硬ばつちやつた。アラビア船はどうしたんです？ すこしプランデーを下さい。」

「お前は、もつと硬くならなかつたのを有難いと思はにやならんよ」と私は答へた。「あの船は沈没して乗組員は、吾々四人のほかはみんな溺れ死んだんだよ。お前の命が助かつたのなんぞも全くの奇蹟だ。」それから、もう明るくなつてゐたので、ジョップがレオに頼まれたブランデーを戸棚の中でさがしてゐる間に、私は彼に昨夜の冒険を話してきかせた。

「そりや大變でしたな」と彼はかすかに言つた。「それにつけても、吾々はよく生きてゐるやうに選ばれてゐたんですな。」

そのうちにブランデーが來たので、吾々はみんなで大いに飲んだ。日光はだんく強くなつて來たので、五時間以上も濡れになつて骨まで冷えてゐたのが温まつて來た。

「おや」とレオはブランデーの瓶を下において喘ぎながら言つた。「あれは例の書類に『エチオピア人の頭の如く刻まれたる巖』と書いてあつた頭ですね。」

「さうだ、あれがさうだよ」と私は言つた。

「して見るとみんな眞實なんだなあ。」と彼は答へた。

「先きのことはわからんさ」と私は答へた。「そりやこの巖が前からこゝにあつたといふことはわかつたさ。そして君の親父がこれを見だつてこともわかつたよ。だが、どうもこの巖があの書類に書いてあつた巖とは思はれんね。それに、若しさうだとしても、そりや何の證據にもならんよ。」

レオは私を見て得意さうに笑ひながら「あなたは疑ぐり深い猶大人ですね、ホレーヌ叔父さん」と

言つた。「この生きて眼で今にわかりますよ。」

「正にそのとほりだ」と私は答へた。「ところで、今吾々は洲を越えて河口へ漂流してゐるのだぜ。さあジョップ、權をもて、これから漕いでいつて上陸する場所があるかどうか見るんだ。」

吾々がはひつていつた河は、まだ海岸に立ちこめてゐる霧がすつかり霽れきらないので、確にはわからなかつたが、あまり廣くはなさ、うであつた。アフリカの海岸は大抵どこでもさうであるが、ここにも河口に相當大きな砂洲があつたので、風が陸の方から吹いて來たり、潮がひいたりしてゐる時なら、吃水數時のポイントでも絶対にそれを越えることはできなかつたのであるが、その時は大變工合がよかつた。それにポイントの中には、もはやコップに一杯の水もなかつたのである。二十分のうちに、吾々はほとんど骨を折らずに、強い、しかし多少むらのある風に運ばれて、眞つ直に港内にはひつた。霧はもう霽れて、日は氣味のわるい程暑くなつて來た。このあたりの河幅は約半哩位で、兩岸には沼地が多く、澤山の鰐が、丸太を並べたやうに群がつかつてゐるのが見えた。だが、一哩ばかり河上に、固い陸地らしいものが見えたので、吾々はそれを目掛けて漕いで行つた。それから十五分もたつと、船はそこに着いた。吾々は、一本の美しい樹にポイントをつないで上陸した。その樹は、葉は廣くて光つてをり、白ではなく薔薇色の木蓮屬の花が咲いて、それが水際におほひかゝつてゐた。それから吾々は着物を脱いで身體を洗ひ、着物や船の中のものをはひるげて天日に乾かした。みんなすぐに乾いた。それがすむと、吾々は樹蔭で暑さをさげながら、ゆつくりと、すてきな、タン・シチウの朝食

をすませた。吾々はそれを船の中に澤山積んで来たのである。食事をしながらも吾々は前日暴風でアラビア船が沈む前に、食料品をボートへ積みこんでおいた幸運を祝ひあつた。食事がおはつた時には着物はすつかり乾いてゐたので、吾々は急いでそれを身につけて、少なからずがくしい氣持になつた。疲れたのと少しばかり擦り傷を貰うた他には、吾々は他の乗組員たちの命を奪つた昨夜の恐ろしい冒険から別に被害を受けなかつた。レオはもう少しで溺死するところだつたが、二十五歳の元氣ざかりの彼にとつては、それ位のことは何でもなかつたのである。

朝食がすむと吾々はあたりをしらべはじめた。吾々のゐたところは、幅二百碼、長さ五百碼程の長方形な乾いた土地で、一方は河に面し、他の三方は見渡すかぎりの荒涼たる沼地であつた。この乾地は周囲の沼地や河の水面から約二十五呎ばかり高まつてゐたので、どう見ても人間の手でつくつたものらしかつた。

「此處は波止場だつたのですね」とレオは斷定的に言つた。

「莫迦な」と私は答へた。「こんな恐ろしい沼地の真ん中に波止場をこしらへるやうな馬鹿があるもんか、こんな蠻人の住んでゐる國に、それに蠻人だつて住んでるかどうかわかりやしない。」

「前から沼地ぢやなかつたのでせう、それに、この住民も前から蠻人ぢやなかつたかも知れませぬぜ」と彼は嶮しい岸を見下しながら、そつ氣なく言つた。吾々は河の岸に立つてゐたのである。「あそこを御覽なさい、あれは石造工事ぢやありませんか、どうもさうらしいですよ。」かう言ひながら彼

は、昨夜の暴風で一本の木蓮が根こぎにされて土塊を擡げてゐるところを指さした。そこはすぐ河つべりで、岸が急勾配で水面に下つてゐるところであつた。

「莫迦な」とまた私は言つたものゝ、二人はそこへ下りていつて、上向きになつた木蓮の根と岸との間に立つた。

「どうです？」と彼は言つた。

けれども今度は私は返事をしないで嘯いてゐた。といふわけは、土が掘り返されたところから、まぎれもない固い石の表が顔を出してゐたからだ。それは大きな區劃に切つて敷きつめ、褐色のセメントでかたくつきあはせてあつたので、小刀の蓋金でこすつて見てもあともつかかなかつた。そればかりではない。その石壁の底に土を擡げて何か突出してゐるものがあつたので、兩手で柔い土を取り除けて見ると、それは直徑が一呎以上もある、厚さ三吋ばかりの大きな石の環であつた。この發見は完全に私を沈黙さしてしまつた。

「相當大きい船が繫がれてゐた波止場らしいですね、どうです、ホレース叔父さん？」とレオは昂奮して齒を出して笑ひながら言つた。

私はもう一度「莫迦な」と言はうとしたが、言葉が咽喉につかへて出なかつた。この石の環が自分で語つてゐたのだ。昔、こゝに船が碇泊したことがあるのだ。そしてこの石壁は丈夫につくられた波止場の遺物にちがひないのである。多分この波止場のあつた都市はそのうしろにある沼地の下へ埋没

してしまつたのであらう。

「どうやらあの物語はまんざら嘘でもなさうに見えて來ましたね、ホレース叔父さん」とレオは雀躍りして言つた。あの不思議な黒人の頭や、それにも劣らず合點のゆかぬこの石造工事のことを考へて見ると、私にはそれに對して眞つ直ぐな返事は出來なかつた。

「アフリカのやうな國には」と私は言つた。「ずつと前に亡びて忘れられてしまつた文明の遺物はそこらぢゆうにあるにきまつてるさ。埃及の文明がいつからいつまでつゞいてゐたかを知つてる人は一人もないし、この文明にはきつと分派もあつたに相違ない。それからバビロン人や、フェニキヤ人や波斯人やその他の國民もみんな多かれ少なかれ文明をもつてゐたんだ。近頃ぢや大流行の猶太の文明は勿論のことだしね。これ等の民族、或はそのうちのどれかこの附近に植民地をもつてゐたか、或は貿易の根據地をもつてゐたかのも知れん。キルワで領事が吾々に見せてくれた埋没した波斯都市のことを記憶してゐるだらう。」

「全くそのとほりです」とレオは言つた。「大分叔父さんの説は前とはかはつて來ましたね。」

「ところでこれからどうするかね？」と私は話頭を轉じて訊ねた。

誰も返事をしなかつたので、吾々は沼の縁まで歩いて行つて、沼地を見渡した。見たところ、それは無限につゞいてゐた。そしていろ／＼な水鳥の群が隠れがから翔び出して來て、時々空も見えない程になつた。日は高く昇つてゐたので、沼の表や、泡だつた溜り水の池から嫌な恰好をした毒瓦斯の

雲が立ちのぼつてゐた。

「二つのことは明白だ」と私は當惑してこの光景を見つめてゐた二人の仲間に向つて言つた。「第一にこれを渡することはできん」といひながら私は沼を指した。「それから第二に、こゝに止つてをれば、きつと熱病にかゝつて死んでしまふ。」

「そのことはわかりきつたことでございますね」とジョツプは言つた。

「さうすると吾々のすべきことは二つかない。ボートにのつて、どこかの港をさがして見るか、これもなかく／＼危い藝當だが、それとも、帆か櫂で河上へ溯つて行つて何處へ着くか運だめしをして見るかだ。」

「みんなはどうするつもりか知らんが、僕は河上へ溯りますよ」とレオはきつと口を締めて言つた。

ジョツプは白眼をむいて呻いた。アラビア人もアララーの名を唱へながら呻いた。私は、どうせ、吾は悪魔と深海との間にはさまれてゐるらしいから、どつちへ行つたつて大してかはりはないのでおとなしく言つて聞かせた。けれども私は實を言へばレオの言ふ方へ行きたかつたのである。あの大きな黒人の頭と石の波止場とが私の好奇心をひどく刺戟して、私は内心恥かしい位だつた。どうしてこの好奇心を満足させようと私は腹できめてゐたのである。そこで吾々は注意深く櫂をあはせ、荷物を積み直し、小銃を取り出して船に乗り込んだ。幸にも風は海の方から吹き上げて來たので、帆を上げることができた。後になつて發見したのだが、一般に日中數時間は風は海の方から吹いて來

て、日没には又陸の方から吹いて来るのがこの地方の通則であつた。

吾々は順風に帆をあげて三四時間河を溯航した。一度河馬の群が、吾々の船から十尋から十二尋位のところへ現はれて恐ろしい聲を出して咆えたのでジョップはひどく驚いた。私も白状すれば、少なからず吃驚した。吾々はこの時はじめて河馬といふものを見たのである。それに河馬の方でも竝々ならぬ好奇心をあらはしてゐたところを見ると、白人といふものを見たのは吾々がはじめてだつたのであらう。謙ぢやない、二度はその好奇心を満たすために彼等は船の中へはひつて来ようとした。レオは彼等に發砲しようとしたが、私は結果を恐れて止めさせた。又吾々は兩岸の泥の上に、何百となく日向ぼつこをしてゐる鰐や、何千となく群がり飛んでゐる水鳥の群を見た。

正午頃になると太陽の熱度は益々加はつて、沼地から發散する悪臭はとてもたまらなかつたので、吾々は始終用心のためにキニーネを服んだ。流れに逆らつて、この炎天に重いボートを漕いでゆくのは、ちのぼつて、日没が近づいてほつと息をつけるまで横になつて休息してゐた。そのうちに前方に広い水面があるらしいのが見えたので、晩の仕事をきめるまでに、そこまで漕いでゆくことにきめて、ちやうど船の纜をゆるめようとしてゐたときに、前の方から、角の曲つた、尻に白い縞のある、一匹の美しい羚羊が五十碼ほど離れた柳の樹蔭に吾々が隠れてゐるのに気がつかずに河へ水を飲みに下りて來た。レオが一番はじめてそれを見つけた。彼は熱心な狩獵家で、大きな獲物の血に飢ゑて、何

ヶ月もその夢を見てゐた位だから、すぐにきつとなつてセッター種の犬のやうに、ねらひをつけた。それを知ると、私は彼のエックスプレス銃を渡して、私も自分の銃を手にとつた。

「おい」と私は言つた。「射ち損はないやうに注意するがい、よ。」

「射ち損ふ」と彼は輕蔑してつぶやいた。「射ち損はうとしたつて射ち損へやしませんよ。」

彼は銃をとり上げた。茸毛色の羚羊は、腹一杯水を飲むと頭を上げてきよとく向う河岸を見まはした。彼はかうした獸の好んで通る路らしい、沼地の中の少し小高くなつたところに、夕焼の空を背景にして立つてゐたのである。私は百まで生きてもこの時の光景を忘れることができぬであらう。實に物淋しい光景ではあるが、それでゐて狩獵家の心をわく／＼させる光景だつた。

ズドン！ 羚羊は大きく跳んで逃げ出した。レオは射ち損じたのだ。ズドン！ 彈丸はまた獲物の眞つ下へ外れた。さあもう一發、私も一發射たざるべからずだ。相手は矢のやうに飛んで行つて、もう百碼以上もはなれてゐる。一發、二發、私はつけさまに射つた。「どうやらお前の獲物をうちとめたやうだぞ、レオ」と、こんなときにはどんなに謙遜な狩獵家の胸にでもこみあげて来る喜びを抑へながら私は言つた。

「降参しましたよ、叔父さん。お目出たう。あなたのねらひは素晴らしいものだつた。僕のはひどかつたですよ。」

吾々は船から飛び降りて、羚羊のそばへ駆けつけた。羚羊は背骨を射ち抜かれて即死してゐた。そ

の皮をむいて、持ち去れるだけの肉を切りとるのに十五分かそこらかゝつた。そのために、暗くなるまでに、やつと河が廣がつて、沼の凹地にできてある潟まで漕いでゆける位であつた。ちやうど暗くなつた時に、吾々はこの湖の縁から三十尋ばかりのところに投錨した。吾々は上陸するわけには行かなかつた。といふのは、上陸して見たところで、夜營のできるやうな乾いた地面があるかどうかもわからんし、それに沼から立ちのぼる毒瓦斯が非常に恐ろしかつたのである。まだ水の上にあた方が毒瓦斯の危険が少ないと思つたのである。そこで、灯をともし、またタン・シチウの夕食をすまし、それから眠らうとした。ところが、眠るところの騒ぎでない事がすぐにわかつた。何故かといふと、灯の光りにさそはれたのか、それとも三千年來飢えてゐた、珍らしい白人の臭ひにさそはれたのか知らぬが、何萬と数知れぬ蚊が吾々を襲つて來たのである。それは私がかつて書物で讀んだり、實際に見たりした蚊の中で、最も血に飢ゑた、最もしつこい、最も大きな蚊であつた。彼等は雲のやうになつて押し寄せて來た。そしてぶん／＼唸つて刺すので吾々は氣が狂ひさうになつて來た。煙草の煙なんぞは、却て益々彼等を元氣づけて、活潑にとびまはらせるだけであつた。たうとう吾々は、頭からすつぽり毛布をかぶつて、その下で、身體中をがりがり／＼掻きむしりながら、しよつちうぶつ／＼呪ひ聲を上げて、徐々に蒸鍋の中で蒸されるやうな思ひをして坐つてゐた。その時、突然沈黙を破つて、深い、ライオンの咆聲がきこえた。つゞいて、吾々から六十碼足らずの蘆の中で動いてゐる第二のライオンの咆聲が聞えた。

「ねえ小父貴」とレオが毛布の下から顔をつき出して言つた。レオは時々私をかういふ不屈な呼び方をするのであつた。「上陸しなくて幸運だつたですな。畜生、蚊の野郎鼻を刺しやがつた」と言ひながら彼はまた顔をひつこめた。まもなく月が昇つた。岸の上から水の面をこえて、ライオンは様々な聲をあげて咆吼してゐたけれども、吾々は大丈夫危険はないと考へてゐたものだからうと／＼眠りかけた。どういふわけか知らぬが、ことによると、毛布の上から蚊がさした、めであらう、私がふと毛布の下から顔を出すと、ジョツプの低い慄へ聲が聞えた。「あれ、あそこを御覽なさい！」吾々はみんな岸の方を見た。するとどうだらう。汀の近くの水面に二つの大きな輪ができて、それがだん／＼大きくなつてゐる。そしてその輪の中央に二つの黒いものが動いてゐるのである。「あれは何だ？」と私はたづねた。「ライオンの畜生ともですよ」とジョツプは答へた。その聲の調子には、個人的な呪ひと、習慣的な尊敬と、争はれぬ恐怖との念が交々まじつてゐた。「奴等は私どもを食ひ殺さうと思つてこつちへ泳いで來るのです。」私はもう一度そちらを見た。ジョツプの言葉にまちがひはなかつた。私は彼等の兇猛な眼の爛々たる光りを見ることができた。たつた今殺された羚羊の肉の匂ひに誘はれたのか、それとも吾々自身の

匂ひに誘はれたのか、飢ゑた猛獣は吾々を目標として飛びかゝらうとしてゐたのである。

レオはもう既に銃を手にしてゐた。私は、もつと近くへ来るまで待てといつて制めて、その間に私の銃をさがした。吾々から十五呎ばかりのところは浅瀬になつてゐて水の深さは十五呎ほどであつた。第一のライオン——それは牝であつた——はすぐにそこまで渡つて来て、ぶる／＼と身體を振つて、咆吼した。ちやうどその時にレオが發砲した。彈丸は開いた口から頭の背後へ貫通して、ライオンはその場にたふれて、水煙をたてて死んでしまつた。もう一つのライオン——成長しきつた牝——がそれから二歩ばかり後にゐた。彼が前肢を浅瀬にかけた時に何事か起つた。ちやうど英國の池で、かますが小魚を捕へる時のやうに、水の面がぱた／＼騒がしくなつた。勿論その騒ぎは數千倍もひどかつたのであるが。すると突然ライオンが恐ろしい咆吼を上げて、何か黒いものを曳きずりながら浅瀬へ飛び上つた。

「大變だ」とマホメッドは叫んだ。「鰐が獅子の脚に食ひついた。」正にその通りであつた。長い口とぎらくした齒と鱗のついた胴體とを吾々は見る事ができた。

それから最もおどろくべき光景がひきつゞいておこつて來た。ライオンはどうかかかうか浅瀬へはひあがつたが、鰐はなれば立ち、なれば泳ぎながらまだライオンの後肢に噛みついてゐた。ライオンは四邊の空氣が震動するやうな聲で咆えた。それから、兇猛な叫び聲をあげながら、くるりと身を翻して鰐の頭に爪をたてた。鰐はあとからわかつたことであるが、片眼を敵にくりぬかせて、その爪を

拂ひのけながら少し前へすゝんだ。そこで今度はライオンは鰐の咽喉にとびついてしつかりと爪をたてた。かくして二つの怪物は上になり下になつて浅瀬のうへをころげまはつて、獐猛に闘つた。彼等の動作を一々見とゞけることは不可能だつたが、そのつきにはつきり見えるやうになつた時には畫面は一變してゐた。鰐は血の塊のやうな眞紅な頭をして、その鐵のやうな顎で、ライオンの臀のすこし上のところを咬へて、締めつけたり、前後に振りまはしたりしてゐた。ライオンはといふと、ひどくいじめつけられて、苦しうな唸り聲をあげながら、敵の鱗のある頭に爪をたて、噛みつき、大きな後肢の爪を鰐の比較的柔い咽喉部の皮膚にたてて、まるで手袋でも引き裂くやうに、引き裂いてゐた。

やがて、急に戦は終りをつげた。ライオンの頭は、がくりと前に垂れて、鰐の背中にかぶさり、恐ろしい呻り聲を上げて死んでしまつた。鰐は暫らくの間身動きもせず立ち上つてゐたが、やがてライオンの死體を口にくはへたまゝ、徐ろに横ざまに倒れた。ライオンの胴體は殆んど二つに噛み切られてゐたのであつた。

この命がけの決闘は世にも驚くべき、戦慄すべきものであつた。こんな場面を見た人はあまり多くはなからうと私は思ふ。そして、その結末はこんな風だつたのである。

それがすつかりすむと、吾々はマホメッドを見張りにのこしておいて、その夜の残りの部分を、蚊には刺されながらも、比較的平和に過したのであつた。

第六章 古代基督教の儀式

次の朝東が白むと同時に吾々は起き上つて、かうした場合にできる程度の簡単な沐浴をすまして、出発の準備をした。お互の顔が見える程明るくなつた時、私は思はず失笑してしまつた。といふのは、ジヨツプの肥つた、氣持のよい顔は、蚊に刺されたために殆んど實物の二倍にも膨れてゐたからである。レオとてもそれと大して變りはなかつた。三人の中では私が一番無難だつた。それは私の黒い皮膚が丈夫なせみにもよるだらうし、顔の大部分に鬚が一ぱい生えてゐたせみにもよるだらう。私は英國を出帆してから、ずるぶん濃い私の鬚をのび放題にさせておいたのである。ところが、外の二人は比較的綺麗に剃つてゐたので、蚊軍にとつては征服すべき平地の面積が私よりもずつと廣かつたわけである。たゞマホメッドと來ては蚊のはうでほんたうのアラー信者の味を見つけたと見えて、觸つて見ようともしなかつた。それから數日間、吾々はどんなにアラビア人の體臭を羨望したか知れない。

膨れぼつたい唇で笑へるだけ笑つてゐる間に、夜はすつかり明けはなれて、海の方から吹いて來る朝風が、沼から立ちのぼつて行手をふさいである濃霧を吹き拂つてしまつたので、吾々は帆を仕立て、死んだ二頭のライオンと鰐とを注意ぶかくしらべてから、湯を出て再び河筋をのぼつて行つた。正午になつて、風が屈いた時、吾々は幸運にも乾いた土地へ着いたので、そこへ上陸して火を焚き、

二匹の鴨と、羚羊の肉を少しばかりとを料理して食べ、翌日の夜明けまでそこに過した。勿論前夜と同じやうに蚊軍に惱まされたが、それ以外には別に災難もなかつた。それから一、二日は同じやうにして過ぎた。別段これといふ冒険もなく、たゞ綺麗な、角のない特種の羚羊を一つ射とめたこと、様々な睡蓮が咲き亂れてゐるのを見ただけであつた。

吾々が旅をしてから五日目、吾々の計算によるとアフリカの東海岸から西の方へ、百三十五哩から百四十哩行つたときに、はじめて、ほんたうに重大な事件が起つて來た。その朝は、十一時頃になるといつもの風が歇んでしまつたので、吾々は少し進んだばかりで多少疲れても來たので船を停めねばならなかつた。船の停まつたころは、吾々の漕いでゆく河と、幅五十呎ばかりのも一つの河とが合流してゐる所らしかつた。すぐそばに幾らかの樹が生えてゐた——この地方では樹といふものはただ河縁のみ生えてゐるのである——そこで吾々は樹陰へ行つて息んだ。地面は相當に乾いてゐたので、吾々は河縁に沿うて少しばかり歩いて四邊の様子をしらべたり、食用のために水鳥を射つたりした。五十碼も行かぬうちに吾々は、この上ボートで河上へ漕いでゆくことは絶対に不可能であることを見きはめた、といふのは吾々が上陸した地點から二百碼ほど上流には淺瀬と泥洲とがつゞいてゐて、水深は六時位しかなかつたからである、全くもつて、それは水の袋小路であつた。

そこで吾々は引きかへして、今度は別の河を岸に沿うて河上へ上つて見た。すぐに吾々は色々な徴候に照して、これは、ザンジバルの海岸のモンバサで見られるやうな古代の運河であるといふ結論に

達した。このモンバサの運河といふのは、タナ河とオジイとを聯結するもので、タナ河を降つて來た船は河口の危険な砂洲を避けるために、オジイへ行つてそれから海へ出るやうになつてゐるのである。吾々の前にある運河は世界史の或る遠い昔の時代に、人間の手で鑿掘されたものに相違なく、その痕跡は、昔曳船につかつたものらしい高い提防の形にのこつてゐた。ところ／＼水のために凹みができたり、陥没したりしてゐるのを除けば、粘土でかためた固い兩岩の提防の間の距離はずつと同じで、流れも深さも同じであるらしかつた。水流は極く少なく、或は皆無なので、運河の表面は草で塞がれ、その間をきれいな水の小流が縫うてゐた。それは、水鳥や蜥蜴やその他の毒蟲が絶えず通るためにできたのであらう。そこで、河を溯航することができないことが明白になつたので、運河を上つて見るか、それとも海へ引きかへすかより外には道のないことも明白になつた。兎も角吾々は、現在に食はれて、恐ろしい沼で熱病にかかつて死ぬまで、ある。

「どうせ運河を上つて見なくちやならんだらうな」と私は言つた。三人はとり／＼に賛成した。レオはまるで此の上ない冗戯のやうな調子で、ジョツプは、いや／＼ではあるが主命もだしがたしといつた調子で、マホメッドはアラアの名を唱へて不信者の考へかたや旅のしかたを呪ひながら。

そこで、吾々は、もう順風を期待することもできなかつたので、日が低くなるのを待つて出發した。はじめ一時間程は、どうかかうか船を漕いでゆくことができたが、それから先は雜草があまりに

はびこつてゐるために漕ぐことができないので、原始的な、最も骨の折れる手段をとつて、船を曳いてゆかねばならなかつた。マホメッドとジョツプと私との三人は二時間も船を曳いた。私は優に他の二人力はあると思はれてゐたのである。レオは船首に腰をかけて、マホメッドの劍で、流れのまはりにはびこつてゐる雜草を切り拂つてゐた。暗くなると吾々は暫らく息んで、蚊の御見舞を受けてゐたが、眞夜中になると、幾らか涼しくなつたので、また歩き出した。それから明け方に三時間程やすんで、また出發し、十時頃まで歩きつゝけたが、その時、雷鳴が猛雨を伴つてやつてきたので、それから六時間といふものは、吾々はまるで水を浴びてゐてゐるやうな始末だつた。

それからあと四日間の旅の模様はこゝで詳しく述べる必要があるかどうか私にはわからない。たゞ私がかれまでに送つた月日の中で最も、みじめな月日で、明けても暮れても、ひどい勞働と、暑さと、蚊とに苦しめられてゐただけ言つておけばよいであらう。どこまで行つても果しのない氣味の悪い沼地なので、吾々が熱病にかゝらずにすんだのは、始終キニーネや下劑を服用してゐたのと、しよつちゆう是が非でも働かねばならなかつたためとだらうと思ふ。運河にはひつてからの旅の三日目に、沼から立ちのぼる霧をとほして、ぼおつと霞んである丸い丘が見えた。それから、四日目の晩に吾々が夜營してゐると、この丘は吾々から二十五哩か三十哩位のところにあることがわかつた。それまでに、吾々はすっかり疲れはて、しまつて、手にはまめができて、もはや一碼も船を曳いてゆくことはできなくなつたやうな氣がした。いつそのことこの恐ろしい沼の中に横はつて死んでしま

つた方がましだと思つた。それは實にひどい場所であつた。こんなところへ来る白人はこれから先だつて滅多になからうと思つた。疲れきつたので、船の中で眠らうと思つて横になると、結局はこんないやな沼地の中で死んでしまふにきまつてある狂ひじみた旅の一行に加はつたのがいましくなつて来た。うとくとまどろむと、これから二三ヶ月もたつたら、この船や、不幸な船の乗組員はどんな姿になるだらうと思つた。船はこはれて、中には臭い水がたまつてゐることであらう。そしてその水は霧を含んだ濕っぽい風に揺り動かされて、朽ちはてた吾々の骨を洗つてゐることであらう。この船と、この船に乗つて馬鹿げた傳説を信じて自然の祕密をさぐりに来た一行の運命はさうなるに相違ないと私は思つた。

もう既にからくになつた私の骨に水が漣をたて、寄せて来て、それをがらくなぶつてゐる音が聞えるやうな気がした。私の頭蓋骨がマホメッドの頭蓋骨の方へころげてゆき、マホメッドのは私の方へころげて来て、遂にはマホメッドの頭蓋骨が脊椎の上に立つて、空つぽの眼窩で私をにらみつけ、私のやうな基督教徒の犬が、ほんたうの信者の最期の眼りを妨げたと言つて私を罵つてゐるのが聞えるやうな気がした。この恐ろしい夢に身慄ひして私は眼を開いた。すると今度は夢でない或る物を見て身慄ひした。といふのは霧のこめた暗がりの中に、二つの大きな眼が、私をじろく凝視めてゐたからである。私は立ち上つて、つゞけさまに恐怖と狼狽との叫び聲をあげた。すると他の者も、眠さと恐ろしさで、よろ／＼しながら酔つたやうに跳び起きた。その時突然、冷たい鋼鐵が眼の前

に閃いて、刃の廣い槍が私の咽喉に擬せられた。そしてその背後には別の槍がざら／＼と惨忍な光を放つてゐた。

「靜かにしろ」と一つの聲がアラビア語で、いやアラビア語といふよりも、アラビア語の澤山まじつた土語で言つた。「河を泳いでこゝへ来たのは何者だ？ 言えい、言はなければ殺してしまふ。」そして鋼鐵はするどく私の咽喉におしつけられた。私は全身がひやりと冷たくなるのをおぼえた。

「吾々は旅の者で、偶然にこゝに來たのです」と私はできるだけ上手なアラビア語で答へた。それが相手に通じたと見えて、その男は後をふり返つて、うしろの方に見えた脊の高い人間に向つて話しかけた。「長老さま、殺しませうか？」

「その連中の皮膚はどんな色だ？」とどつしりした聲が答へた。

「白でござります。」

「殺してはならぬ」と彼は答へた。「四日前に、全能の女王から、『いまに白人が来る、白人が來たら殺してはならぬ』といふお達しがあつた。あの人々を持ち物と一緒に、全能の女王のお邸へつれてゆけい。」

「こつちへ來い！」と男は船から私を半ば案内をし、半ば曳きずり出しながら言つた。見ると他の連中も矢張り他の男につれ出されてゐた。

堤防の上にはかれこれ五十人ばかりの仲間の者が集つてゐた。薄明りですかして見ると、彼等は皆

大きな槍をもつてゐて、非常に丈が高く、頑丈な體格をしてゐた。皮膚の色はあまり黒くなく、腰のあたりに豹の皮をまきつけてゐるほかは裸體のまゝだつた。

レオとジョツプとはすぐに前へ突き出されて私のそばに坐らされた。

「一體どうしたんだ？」とレオは眼をこすりながらたづねた。

「妙なことになつて來ましたな」とジョツプは叫んだ。ちやうどその時に騒ぎが起つて、マホメッドが吾々の間へひよろ／＼と轉げ込んで來た。そして、そのあとから、影のやうな姿が槍をふりかざしながらついて來た。

「アラ―！ アラー―！」とマホメッドは悲鳴を上げた。「助けたまへ、守りたまへ」彼はもう到底助からぬと思つてゐたのである。

「長老様、これは黒人でございます、全能の女王は黒人のことはどう仰言いました？」と一つの聲が言つた。

「女王は黒人については何とも仰言らなんだが、殺してはいけない。お前はこちらへ來い。」男は前へ進んだ。すると丈の高い影のやうな姿が前へ屈んで何事かを囁いた。

「ははつー」と相手の男は答へて、何となく血を凝らせるやうな不氣味な薄笑ひを洩らした。

「白人は三人ともそこにゐるか？」と影のやうな姿がたづねた。

「はい、そこにをります。」

「では用意のものをもつて來て、河に浮いてゐるもの、中でもてるだけのものを残らずもつてゆけ。」その言葉が終るか終らぬうちに、一同の者は蓋ひのついた駕籠をかついで來た。駕籠にはめい／＼四人の駕籠かきと二人の槍持ちとがついてゐた。どうやら吾々はその中へ乗せられるらしかつた。

「しめた」とレオは言つた。「誰か吾々を運んで呉れる者があるとは有り難い、ずゐぶん一人ですつて來たからなあ。」

レオはいつでも物事を陽氣に考へる方だつた。

ほかの者がみんな駕籠の中へはひるのを見てから、私も外に仕方もないので駕籠に乗つたが仲々乗り心地は良かった。それは草の織維で織つたものらしく、身體の動くまゝにしなやかに伸びたり縮んだりした。そして上と下とが擔ぎ棒にく／＼りつけてあるので頭と首とをのせるにあつらへ向きに出來てゐた。

私が身を落ちつけると、すぐに駕籠かきどもは、單調な歌聲に足竝を合はせて威勢のいゝ早足で出かけた。私は半時間ばかり、ちつと横になつていろ／＼なことを考へまはしてゐた。こんなことをケンプリツヂの學友どもに話したら信ずるだらうかとか、一體これから先どうなるであらうかとか思ひめぐらしてゐるうちに、いつしか眠つてしまつた。

かれこれ七八時間も眠つたに相違ないと思ふ。アラビア船が沈没する前の晩以來ほんたうに安眠したのはこの時がはじめてだつた。眼が覺めたときは、太陽はもう高く空に昇つてゐた。吾々はまだ、

一時間四哩位の足どりで旅をしてゐた。駕籠のうすいカーテンの隙間から、のぞいて見ると、有り難いことには、もう果てしのない沼地を通り抜けて、ふやけた草原の中を、盃形の丘の方へ旅してゐるのであつた。この丘は吾々が運河から見た丘なのかどうかは私は知らない。その後今になるまでつひにわからずじまひだつた。といふのは後から知つたことであるが、この土人どもは、さうしたことについて、殆んど何も教へてくれないからである。その次に私は吾々を運んでゐる人々を見た。彼等は皆すばらしい體格で、六尺以下のものは殆んどなかつた。そして皮膚の色は黄味を帯びてゐた。概して彼等の外貌は東アフリカのソマリ族に似てゐたが、髪は縮れ毛でなくて、漆黒の捲毛になつて兩肩に垂れてゐた。顔は彎曲してゐて多くは大變容色がよかつた。特に齒竝は揃つてゐて美しかつた。だがそんなに美しいにも拘らず、私は全體として、これ程兇惡な顔は見たことがないと思つた。何となく冷やかで、不愛想で、慘忍性を帯びてゐるので私はどうも蟲が好かなんだ。實際、その中の或る者の顔はあまり甚だしくて、薄氣味が悪い程であつた。

彼等について、もう一つ氣のついたことは、彼等が決して笑はぬらしいといふことであつた。時々彼等は、私が前に言つたやうに單調な歌を歌つたけれども、歌を歌はない時は殆んど完全に黙つてゐて、笑ひのために彼等の陰氣な邪惡な顔が晴れ晴れすることは決してなかつた。彼等は一體何人種なのだらう？ 彼等の話す言葉はアラビア語の系統であるが、彼等はアラビア人ではない。その點はたしかである。アラビア人にしては色が黒すぎる、黒いといふよりもむしろ黄色すぎる。何故かは知ら

ぬが彼等の顔つきを見ると私はぞつとした。そしてそれが恥かしくなつた。私がなほも怪しんでゐるうちに、別の駕籠が私の駕籠と並んだ。その中には——カーテンがあけてあつたので——白っぽい上衣を着た一人の老人が坐つてゐた。その上衣は粗い麻布でつくつたものらしく、ゆつたりと身體のまはりに垂れてゐた。私はすぐにそれは、岸の上に立つて「長老様」とよびかけられてゐた影のやうな姿であると考へた。この老人の様子は實に驚くべきもので、雪のやうな長髯は駕籠の兩側に垂れてをり、鼻はかき鼻で、その上に、雙つの眼が、蛇の眼のやうに鋭く光つてゐた。そして顔全體には、賢いこさうな人を愚弄するやうな、とても筆紙にあらはすことのできない様子が見えた。

「眼が覺めましたかな、他國の人？」と彼はどつしりした低い聲で言つた。

「はあ、覺めました、長老」と私は丁寧な答へた。この老人にとり入つておけばきつとよいことがあるだらうと思つたからである。

彼は美しい白髯をしごいて、かすかに笑つた。

「どこの國から迷つてお出でになつたか知らんが」と彼は言つた。「多分、この土地の言葉の知れてゐる、そして、子供に禮儀をしつける國からお出でなかつたのぢやらう。で一體この土地へ何のためにお出でなかつた、まだ人の知つてゐる限り、他國の人で、この國へ足を踏み込んだ者はないですぢや。あなたと連れの衆とは、この世の中がいやにでもおなりなかつたか？」

「吾々は新しいものを見に來たんですよ」と私は大膽に答へた。「吾々は古いものがいやになつたん

で、まだ知らないものを知るために海から上つて来たんです。私の非常に尊敬する長老、吾々は勇敢な種族で死をも恐れないのです——といふのは死ぬ前に少しでも新しい事を知つて死ねばですね。」
「ふむ」と老紳士は言つた。「それはほんたうかも知れん、あんたは嘘を吐いてあると言ひたいが、あんたの言葉に逆らうのも輕はずみぢやらう。ところで、その望みなら、全能の女王がかなへて下さるぢやらうて。」

「全能の女王といふのはどんな人です？」と私は好奇心にかられてたづねた。
老人は駕籠かきどもをちらりと見て、私の心臓をいくらかひやりとさせるやうなかな微笑を浮かべながら答へた。

「そのことは、若し女王が、あんたを肉のついたまゝで御覽になる思召しなら、すぐにわかりますわい。」

「肉のついたまゝで？」と私は答へた。「それは一體どういふ意味ですか？」
老人は物凄く笑つた。だけで返事はしなかつた。

「長老の國の人種は何といふのです？」と私は訊ねた。

「わしの國の住民はアマハツガ一族といひますぢや、つまり岩の民といひますぢや。」
「甚だ失禮ですが、長老のお名前は？」

「わしの名はビラリぢや。」

「吾々はどこへ行くんです？」

「今にわかりますわい」かう言つたかと思ふと、老人は駕籠かきに合圖をして、先の駕籠のそばまで走らせた。その駕籠にはジョップが片脚をだらりと外へ投げだして寝てゐた。けれども老人はジョップからは大して要領を得なかつたと見えて、すぐにレオの駕籠の方へ駕籠かきを走らせてゐるのが見えた。

その後は何もかはつたことは起らなかつたので、私は、氣持よく駕籠に揺られながら、また眠つてしまつた。眼が覺めた時には、吾々は、熔岩でできた岩だらけの峽路を通つてゐた。兩側の峻しい崖には美しい樹や花の咲いた灌木などが澤山生えてゐた。

やがてこの峽路を廻ると、美しい光景が眼前に展開された。吾々の前には、廣さ四哩から六哩もある大きな盃形の地面があつて、ちやうど羅馬の圓形劇場の様な形になつてゐた。この大盃の周壁は岩だらけでできつしり草敷に被はれてゐたが、中央部は豊穰な牧場で、すばらしくよく茂つた獨立の立木がこゝかしこに點綴され、小河が縦横に貫流してゐた。このよく繁つた草原に、山羊や牛の群が草を食んでゐたが、羊は見えなかつた。はじめ私は、この不思議な場所は何であるか想像もつかなくなつたが、すぐに、それはずつと昔に活動を熄めた火山の噴火孔で、後にそれが湖になり、最後にどういふわけか水が乾いたものであらうと考へつた。私はこゝで言つておいてもよいが、その後にもつと大きな、しかしその他の點ではこゝと同じ場所をいくつも見た經驗に照して、私の断定は正し

いと信ずべき理由をもつてゐる。いづれそれ等の場所については後で語る機会があるだらうと思ふ。だが私に合點のゆかなかつたのは、山羊や牛を飼つてゐる人間の姿は見えるが、人間の住家らしいものは何處にも見當らなかつたことである。一體彼等はどこに住んでゐるのだらうと私はあやしんだ。しかし私の好奇心はすぐに充たされた。駕籠の行列は左へ曲つて、半哩か、それよりもいくらか短い距離を、噴火孔の崖のそばに沿うて行つた。長老のピラリが駕籠から出たのを見て、私もそれにならつた。レオもジョップもその通りにした。一番はじめに氣のついたことは、かはいさうなアラビア人のマホメッドが、へとへとに疲れて地べたに横はつてゐたことであつた。彼は駕籠に乗せられずに、こゝまでの道中をすつかり歩かされたものらしかつた。出發の時でさへひどく疲れてゐたのだから、今はもう、ぐたくになつて地べたにへたばつてゐた。

四圍を見まはすと、吾々がとまつたところは大きな洞窟の入口で、その前に一つの臺があり、その臺の上にはボートの中にあつたものがすつかり、樞から帆に至るまで取り揃へておいてあつた。洞窟のまはりには吾々を護送して來た人々や、それによく似た人々が群がって立つてゐた。皆、脊が高く、きれいであつた。但し、皮膚の黒さは様々で、或る者はマホメッドのやうに黒く、或る者は支那人のやうに黄色だつた。彼等は腰に豹の皮をまきつけてゐる外は、みんな裸體で、めいゝ大きな槍をもつてゐた。

中には女もまじつてゐた。女どもは、豹の皮のかはりに小さい赤い羚羊の鞞皮をまとつてゐた。女

は一體にきれいで、眼は大きく、黒く、顔の輪郭はくつきりしてゐた。髪は黒人のやうに縮毛ではなくて、厚い捲毛で、黒から栗色までの中間の様々な色合ひであつた。少數ではあつたが或る女はピラリが着てゐたのと同じやうな黄色つばい麻の上衣を着てゐた。あとから知つたことであるが、これは女どもの好みによるのではなくて、地位のしるしであつたのである。その他、女の様子は男のそれのやうに兇猛ではなく、それに、女たちは時々笑ひもした、尤もそれはごく稀であつたけれど。吾々が駕籠から降りると、すぐに女どもは、吾々の周圍に集つて來て、物珍らしさうに、しかし大して騒がずに吾々をしらべまはした。けれどもレオのすつきりした狩獵家らしい體格と、くつきりした希臘式の顔とは、明らかに彼女等の注意を惹いたらしく、彼が帽子をとつて慇懃に一同に挨拶をして黄色い捲毛を見せると、ひそくと感歎の囁きが起つた。そればかりではなかつた。麻の上衣を着て黄色と栗色との合の子の色の髪をした一番容色のよい一人の若い女が、おもむろに彼の方へ進み出て、しづかに彼の頸へ腕をまきつけ、前屈みになつて、彼の脣に接吻した。その様子は、そのつもりでしただけではなくても、たしかに相手を誘惑するに十分だつたらうと思ふ。

私は今にもレオが槍で刺し殺されやしないかと思つて、思はず聲をあげて歎息した。ジョップは、「このお轉婆の奴、ふとい奴だ！」と怒鳴つた。當のレオは少し吃驚した様子だつたが、やがて、これはつきり古代基督教徒の慣例の行はれてゐる土地へ來たのであるといふことに氣がついて、落ちつき拂つて接吻を返した。

私はまた何か起りはしないかと思つて歎息した。ところが意外にも、少数の若い女は少しいまくしさうな様子を示したが、年老つた女や男どもは、ほんの少し笑つただけであつた。あとでこの不思議な民族の習慣がわかつて来たときに、この謎はすつかり解けた。アマハツガー族の女は、世界中の他の殆んどすべての蠻族の習慣とは反對に、男子と全く平等であつて、少しも男子に束縛されてゐないのであつた。血統は凡べて母系にしたがひ、吾々歐羅巴人が、父系の先祖のことを誇るやうに、彼等は、母系の先祖のえらいことや古いことを誇りとし、父親には一向注意を拂はず、明らかに父親の知れてゐる場合でも、それを父親とはみとめないものであつた。各部族はそれ／＼家族と呼ばれてゐたが、この家族にはそれ／＼名儀上の父が一人づゝあつて、それは、その部族の選舉された直接の支配者であつた。たとへば、このビラリも七千人ばかりの人員を有する部族の支配者であつた。で、ある女が自分の氣に入つた男があると、公衆の面前でその男のそばへ行つて彼を抱擁して、それで、自分がその男を選んだといふことを示すことになつてゐた。ちよつと、今、美しい、そして非常に機敏なアステーンといふ若い女がレオを抱擁したのはそれである。若し男の方で接吻を送り返すと、男が女の申込みを承諾したしるしになるのであつた。そして此のとり極めは二人のうちのどちらかが飽きてしまふまでつゞくことになつてゐた。だが、こゝで附言しておかねばならぬことは、夫をかへること、吾々が豫想するほど頻繁には行はれなかつたといふことである。又そのために争ひが起るといふやうなこともなかつた。少くも男の方には争ひは起らなかつた。彼等は自分の妻が外の男に思ひを寄せたのであつた。

第七章 アステーン歌ふ

公開接吻の儀式がすむと——ついでに言つておくが、こんな風にして可愛がつてやらうと申込んだ女は私にはなかつたが、ジヨップには一人の女がつきまとうて、この謹嚴な男をおどろかせた——ピラリ老人が前へ進み出て、手を振つて洞窟の中へはひるやうに合圖をした。吾々がそちらへ行くと、私がレオと密談があるのだからといふことを仄めかしても、それをきかずに、アステーンがあとからついて来た。

五歩も行かないうちに私は、吾々のはひつて行つた洞窟は自然にできたものではなくて、人間の手でくり抜かれたものであることを知つた。吾々の判断したところでは、それは長さ百呎、幅五十呎位で、非常に天井は高く、何よりも寺院の歩廊に似てゐるやうに思はれた。この歩廊からは、十二呎か十呎位の間隔をおいて通路が開けてゐた。それは小さい室へ通するものらしかつた。洞窟の入口から五十呎ばかりはひつて、ちよつと外の光りが暗くなつてきたところに火が燃えて、周囲の壁に大きな影を投げてゐた。ピラリはそこに立ちどまつて、吾々にも坐るやうにつげ、今に者ども

が食事を運んでくると言つた。そこで吾々は吾々のために敷かれた豹の皮の上に坐つて待つてゐた。やがて、若い娘たちが食事を運んで来た。それは山羊の肉の煮たのと、土製の壺に入れた新鮮な牛乳と、玉蜀黍の焼いたのとであつた。吾々は殆んど飢ゑてゐたので、生れてから今までに、こんな甘い甘美しい食事をしたことはないやうに思つた。實際食事が終るまでに、吾々は、吾々の前に置かれたものを片づ端から残らず平けてしまつた。

吾々が食事をすました時に、今までだまりこくつてじろく／＼吾々を見てゐた、少々無愛想な吾々の主人のピラリは、起ち上つて吾々に話しかけた。彼はこん度のことは實際不思議だと言つた。この岩の民の國へ、他國の白人が来たのを見たり聞いたりした人は一人もなかつたのである。時々、いつても極めて稀れではあつたが、黒人がやつて来て、黒人の口から、彼等よりも色の白い人間が船で航海してゐたといふ話は聞いてゐたが、その白人がやつて来たのは前代未聞であつたのだ。然るに、彼は、吾々が運河を船を曳いて来るのを見たのである。彼はあけすけに言つたが、その時、吾々を皆んな殺してしまふやうに命令を發したのださうである。といふのは他國人が此の國へはひつて來ることには不法だつたからである。ところが、ちやうどその時に、全能の女王から、吾々の命を助けよといふ達しがあつたので、それで吾々はこゝまでつれて來られたといふわけであつた。

「ちよつと長老」と私はそこで話の腰を折つた。「その全能の女王といふ方はまだずつと先に住んでをられるのに、どうして吾々の來たことがわかつたのです？」

ピラリは後ろを振り向いて、誰もゐないことを知つたので——アステーンは彼が話をはじめた時に退座してゐたのである——少しく不思議さうな笑ひを浮べて言つた。

「あんた方の國には眼がなくても見えたり、耳がなくても聞こえたりする人はゐませんか？ まあ、何も訊ねなざるな、あの方にはわかつてゐたんですわい。」

私はそれを聞いて肩をすくめた。彼は言葉をつけて、吾々の處置については何の達しもないから、これから全能の女王に謁見に行くのだと言つた。この全能の女王といふのはアマハツガー族の女王であることを吾々は彼から聞いて知つた。

私が彼にどの位留守にするのかと訊ねると彼は急いで行けば五日目には歸れるだらうが、何しろ女王のところまでゆくには何哩もある沼地を越さなくちやならんからと言つた。それについて、彼は、留守中は萬事手落ちのないやうにしておくし、彼は個人としては吾々が氣に入つたから、きつと女王様のお沙汰も命に別條はなからうと言つた。しかしそれと同時に、彼は、それも疑はしいと思つてゐることを隠さずに言つた。といふのは、彼の祖母の代にこの國へ來た他國人も、彼の母の代にこの國へ來た他國人も、彼自身の代になつてからこの國へ來た他國人も、みんな容赦なく殺されてゐるからといふのであつた。しかもその殺し方は吾々が恐ろしがるから言はずにおくと言つた。そしてこの死刑は女王自身の命令によつて行はれるのだといふことであつた。少くも彼はさう思ふと言つた。何れにしても女王はこれまでに、彼等の命を助けるために口出しされたことはないのであるといふのであ

つた。

「だつて可笑しいぢやありませんか？」と私は言った。「あなたは少し分御老體であらつしやる。それだのにあなたは三代も前のことを言はれたが、その時はまだ女王は生れてをる筈もないのにどうして女王があなたの祖母さんの若い時分などに人に死刑の命令を下すことができたんですか？」

ビラリはまた笑つた。それは此の老人に獨特の笑であつた。そして丁寧にお叩頭をして、何の返事もせずに彼はいつてしまつた。それから五日間吾々は彼を見なかつたのである。

彼が去つたあとで、吾々は、この恐ろしい現在の境遇について、色々話しあつた。私は、かはいさうな他國人を無慈悲なやりかたで殺すやうに命令するらしいこの不思議な全能の女王の話はもう眞平だつた。レオもこれには氣を重くしてゐたが、この女王こそ、まぎれもなくあの壺の破片に書いてあつた記録や親父の手紙の中に記してあつた女に相違ないと勝ち誇つたやうに指摘して自分を慰めてゐた。その證據として彼はビラリがその女王の年齢や不思議な力について言つたことをあげた。私は次から次へと起つてくる事件のためにすっかり氣をのまれてゐたので、そんな馬鹿げた話の相手になる氣は毛頭なかつた。それで、外へ出て沐浴をしようではないかと提議した。吾々は皆沐浴がしたくてたまらなかつた矢先きなのである。

そこで、吾々の意志を、ひどく不愛想な顔つきをした中年の男に傳へた。この男は、老人の留守中その代理として吾々の世話をしてくれてゐる男らしかつた。吾々は一團になつて、煙管に火をつけな

がら出かけた。洞窟の外には、澤山の土人が吾々の出てくるのを見守つてゐたが、吾々が煙草の煙を吐きだすと、これは素敵な魔法使ひだと言ひながら、散りくばら／＼に逃げ出してしまつた。實際吾々について彼等が何よりも大騒ぎをしたのは煙草の煙だつた。吾々のもつて来た銃ですらこれ程彼等を驚かしはしなかつた。それから吾々は流れの岸について靜かに沐浴した。但し女どもの中には、どうしてもそんな處までも吾々について來ると言つてきかない者もあつた。アステーンもその仲間の一人であつた。

吾々が此の上なく氣持のいい、沐浴を終へた時までは太陽は沈みかけてゐた。實際、吾々が大きな洞窟の中へ歸つて來たときには、もうすっかり太陽は沈んでゐた。洞窟の中には幾つかの焚火が燃えてゐて、その焚火のまはりには澤山の人が集つて、ちら／＼する焚火の明りと、壁のまはりや上に釣してある燈火の明りとで、夕食をしてゐた。

暫くの間吾々はすわつて、この兇猛な連中が、彼等と同様に不氣味な沈黙のうちに夕食をしてゐるのを見てゐたが、たうとう、彼等を見るのにも飽き、岩の壁にうつゝてゐる影の動くのを見るのにも飽きて來たので、私は、吾々の新しい接待係の男に、もう寝たくなつたと言つた。

一言も言はずに彼は起ち上つて鄭重に私の手を取りながら手燭をもつて、中央の洞窟から開いてゐる狭い通路の一つへ進んで行つた。そのあとからついてゆくと、突然通路は廣がつて、八呎平方ばかりの、天然の岩をきつてこしらへた小さな室になつてゐた。この室の一方には地面から三呎ばかり

り高くなつた石の板があつて、それはちやうど船室の中の寢棚のやうになつてゐた。私の案内者は、私にその上に寝るのだと告げた。室の中には窓もなく、風孔もなく、家具も全くなかつた。室内を仔細に點検して見た結果、私は、これは以前には生きた人間の寢所ではなくて、死人の墓場に使はれたもので石の板は屍體をのせるためにつくられたものであるといふ氣味の悪い結論に到達した。そしてあとになつてから、この推定は全く正しかつたことがわかつた。このことを考へると私はどうしても胸慄ひがとまらなかつた。けれども、どの道どこかで眠らなくてはならんといふことがわかつたので、私はできるだけ自分の感情を殺して、ほかのものと一緒に船から運ばれて來た毛布をとり洞窟へ引き返した。洞窟の中で私はジョップに會つた。ジョップも同じやうな室に入れられたのであるが、室の様子がとても恐ろしくてぞつとするので、そこにあることができなかつたのだと言つた。そして、あんなところに居る位なら、一そのこと死んでしまつて、一思ひにお祖父さんの煉瓦の墓場へ埋められた方がましだと言つた。そこで、彼は、若し差支へなかつたら私と一緒に寢かして貰ひたいと頼んだので、私は無論二つ返事で承知した。

その夜は大體に於て氣持ちよく過ぎて行つた。何故大體に於てなんて言ふかといふと、私自身は生き埋めにされた夢を見てひどくうなされたからである。これはきつと周圍の墓場の光景が頭に泌みこんでゐたからであらう。明け方に吾々は若いアマハツガー人が吹きならす高い喇叭の音におどろかさ

これはてつきり起きろといふ合圖だらうと思つて、吾々は起き上つて、小河へ洗面に行つた。それがすむと朝食の準備ができてゐた。朝食の時、あまり若くない年増女が進み出て、みんなの前でジョップに接吻をした。不作法な點は別として、これは實に愉快な光景であつた。謹嚴なジョップが怖ろしさといやらしさで弱つてゐた光景は終生忘れることができぬ。ジョップは私と同様女嫌ひであつた。多分これは十七人も家族のある家に生れたせいだらうと私は思ふ。そのジョップが、自分の方は承知もしないのに公衆の面前で接吻をされたけならまだよいが、自分の二人の主人もそれを見てゐる前なのだから、その時の彼の表情ははいさうな程混亂を極めたものであつた。彼はその場に立ち上つて、三十そこそこの年増女を邪険に押しつけた。

「とてもたまらん」と彼は溜息をした。すると女は、彼がはにかんでゐるのだと勘違ひして、また彼に接吻した。

「あつちへ行け、いつちまへ、このあばずれ女」と彼は、自分が食事をしてゐたスプーンを女の顔の前で上下に振りながら叫んだ。「皆さんどうぞ御勤辨を願ひます。私はこの女にそんな素振りを見せたのぢやないのにこの女はまたやつて來るんです。つかまへて、下さい。ホリイ様、私にはとても我慢ができません、とても。こんなことは前に一度だつてなかつたんです。これ位私の性分に合はんことはないんです。」と、彼は言葉は切つて、一生懸命に洞窟の方へ逃げ出した。その時私は初めてアマハツガー人が笑ふのを見た。だが當の女は笑はなかつた。笑ふどころか、彼女は、憤怒のあまり

髪の毛を逆立て、ゐた。それを外の女がひやかすので彼女の怒りは益々募る一方であつた。彼女はその場に棒打ちになつて、憤怒に身をふるはしてちつとにらみつけてゐた。私はその形相を見て、ジョップの謹厳が却つて災難にならねばよいがと思つてゐたが、案の定、あとになつて見ると私の推測は間違つてゐなかつた。

女が退つたのでジョップは、ひどく昂奮しながら引き返して来て、傍へ寄つて来る女たちを一々心配さうな眼つきで見まはした。私はその機会に家人たちに向つて、ジョップには妻があつたのだが、家庭に不幸があつた、めに、こゝへ来てゐるのだから、そのために女を見ると恐がるのだと説明した。だが一同の者は私の説明をきいてもだまつてゐた。彼等は、吾々の従者の行ひを、彼等家族全體に對する侮辱だと考へてゐることは明白だつた。

朝食がすむと吾々は散歩をして、アマハツガー族の家畜の群や耕地を檢分した。彼等は二種の牛を飼つてゐた。一つは大きい、骨ばつた角のない乳牛で、いま一つは、小柄で肥つた肉牛であつた。山羊は毛の長い種類で、肉をとるだけの目的で飼はれてゐた。少なくとも私は山羊の乳を搾つてゐるのを見たことはなかつた。アマハツガー族の耕作法は、非常に原始的なもので、農具といつては、たゞ鐵でこしらへた鋤があるばかりだつた。この民族は鐵を製鍊して、細工することを知つてゐたのである。この鋤は大きな槍の穂のやうな形をしてゐて、足をのせる肩がついてゐなかつた。そのため土を掘るのに大變な勞力がいつた。それでも彼等は男も女も耕作をしてゐた。多くの野蠻人の習慣のやうに、手先きの勞働を全くしなくてもよい者はなかつたのである。とは言へ前にも言つたやうに、權利は女の方にあつたのである。

はじめ、吾々は、この不思議な人種の起源や法律が皆目わからないので困つた。彼等はまた不思議にこの點について何も教へてくれなかつた。しかしながら、時がたつにつれて——といふのは、次の四日間には別に大した出來事もなかつたので——吾々はレオの女友達のアステーンから若干のことを聞き知つた。ついでに言つておくが、この女は、影のやうにレオのそばに附きまとうてゐたのである。起源については、少なくとも彼女の知つてゐる限りでは、起源といふやうなものはないといふことであつた。しかし、女王のすまひの近所には、石造の壁や柱などの澤山たつてゐるコオルといふ岡があることを彼女は知らせてくれた。物識りの言ふところによると、そこには太古に家があつて人がすんでゐたので、アマハツガー族はその人々の子孫ではないかといふことであつた。けれどもそこには幽霊が出るといふので、誰もこの廢墟のそばへ近寄らないで、たゞ遠くから眺めてゐるだけだとのことである。國內には、これに似た廢墟が方々にあつて、沼地の平面から高くなつてゐる山には皆それがあることを彼女は聞き知つてゐた。彼等が住んでゐる洞窟も、多分これ等の都市をこしらへた人々の手によつてくり抜かれたものであらう。彼等は成文律をもつてゐず、たゞ習慣だけを守つてゐたのであるが、この習慣は法律と同様の拘束力をもつてゐた。もしこの習慣を破るものがあると、家族の長老の命令によりて、死刑に處せられたのである。私は死刑はどんな風にして行はれるのかと聞いたが、

彼女(かのぢよ)はたゞ笑(わら)つてゐるばかりで答(こた)へなかつた。そしていづれ近いうちに見(み)られるだらうと言(い)つた。

しかし彼等(かれら)には女王(ぢよわう)があつた。全能(ぜんんのう)の女王(ぢよわう)といふのが彼等(かれら)の女王(ぢよわう)であつた。けれども女王(ぢよわう)が姿(すがた)を現(あら)はすことは極(ごく)く稀(まれ)れで、二三年(にさんねん)に一度(いちど)、罪人(ざいじん)に死刑(しけい)を宣告(せんこく)する時(とき)に姿(すがた)を見(み)せるだけであつた。しかもその時(とき)には女王(ぢよわう)は大きな被布(ゲブル)を頭(かぶ)からかぶつてゐるので、誰(たれ)にも顔(かほ)は見(み)えないとのことであつた。女王(ぢよわう)の近侍(きんじ)の者(もの)は皆(みな)聾(ろう)でその上(うへ)に啞(お)だつたので、少しも話(わ)を聞(き)くことはできなかつたが、女王(ぢよわう)はこの世(よ)の中に古往(こわう)今來(こんらい)住(す)んでゐたどの女(おんな)よりも美(うつく)しい女(おんな)だといふ評判(ひやうばん)であつた。又(また)彼女(かのぢよ)は不死(ふし)で萬物(ばんぶつ)を支配(しはい)する力(ちから)をもつてゐるといふ噂(うわさ)であつたが、アステーンはそのことについては何も知(し)つてゐなかつた。女王(ぢよわう)は時々(ときどき)夫(つま)を選(えら)んで女(おんな)子が生(う)まれるとその夫(つま)を殺(ころ)し、女(おんな)の子(こ)が大き(おほ)くなつて女王(ぢよわう)が死(し)ぬと、この女(おんな)の子(こ)が女王(ぢよわう)の位(ゐ)をついで母(はは)の屍體(しかばね)は大きな洞窟(どうくつ)の中(なか)へ埋(う)めるのであらうと彼女(かのぢよ)は信(しん)じてゐたが、これ等(ら)のことについては何(なに)一つたしかなことを知(し)つてはゐなかつた。たゞ國內(こくない)到(いた)るところで女王(ぢよわう)の命(いのち)にそむくものはなく、若(も)し命令(めいれい)をとやかくいふやうなことがあつたら直(ただ)ちに死刑(しけい)に處(しょ)せられるとのことであつた。彼女(かのぢよ)には護衛兵(ごゑいへい)がついてゐたが正規軍(せいぎぐん)といふものはないといふことであつた。

私はこの國(くに)の面積(めんせき)や人口(じんこう)はどれ程(ほど)あるかと訊(たず)ねて見た。彼女(かのぢよ)は、この家族(かぞ)のやうな家族(かぞ)が都合(がふご)十(じゅう)あつて、その中(なか)には女王(ぢよわう)の家族(かぞ)のやうに大きな家族(かぞ)もあると答(こた)へた。そして、これ等(ら)の家族(かぞ)はすべてこの丘(かみ)のやうな丘(かみ)にある洞窟(どうくつ)の中(なか)に住(す)んでゐるのであり、かうした丘(かみ)は沼地(ぬまぢ)の中(なか)に散在(さんざい)してゐて、秘密(ひみつ)の通路(つうろ)で往(ゆ)き來(き)することができただけであるとのことであつた。この家族(かぞ)の間(ま)には時々(ときどき)戦争(せんそう)が行(な)はれ

たこともあつたが、女王(ぢよわう)が中止(ちゅうし)を命(めい)ずると雙方(ふたうほう)ともばつたり止(と)めてしまつたといふことである。この戦(せん)争(そう)と、沼地(ぬまぢ)を渡(わた)るときにとりつかれる熱病(ねつびょう)とのために人口(じんこう)はあまり増(ふ)えないのだといふことであつた。彼等(かれら)と他の人種(じんしゆ)との間(ま)には何(なん)の聯絡(れんらく)もなく、附近(ふきん)には他の人種(じんしゆ)は住(す)んでゐなかつた。それに敵(てき)は沼地(ぬまぢ)を越(こ)えて來(く)ることはできなかつたのである。かつて軍勢(ぐんせい)が大河(たがは)〔多分(たぶん)それはザンベシ河(がは)のことであらう〕の方(ほう)から彼等(かれら)を攻(せ)めようとしたことがあつたが、沼地(ぬまぢ)の中(なか)で道(みち)に迷(まよ)つてしまひ、夜(よ)になつて、沼地(ぬまぢ)の附近(ふきん)に浮動(うきどう)する大きな火(ひ)の玉(たま)を敵(てき)の陣地(じんぢ)と間違(まちが)へてそれを攻(せ)めようとして、半分(はんぶん)は沼(ぬま)に溺(おぼ)れてしまひ、殘餘(ざんご)の軍勢(ぐんせい)は、すぐ(すぐ)に熱病(ねつびょう)と飢餓(きが)とのために死(し)んでしまつて、彼等(かれら)に一撃(いっげき)をも加(く)へることができなかつたといふことを繰(く)り返(かへ)して話(わ)し、吾々(われら)も、駕籠(かご)でつれて來(く)られなければ決(けつ)してこゝまでは來(く)られなかつたのだと附(つ)け足(た)したが、私(わたし)もなる程(ほど)それ(それ)にちがひないと思(おも)つた。

吾々(われら)が四日(よっぴ)間(かん)に聞(き)いたこれ等(ら)の事柄(ことば)は皆(みな)信(しん)ぜられない程(ほど)驚(おどろ)くべき話(わ)ばかりで、しかもその中(なか)で最も奇怪(きがい)な部分(ぶぶん)は、例(れい)の壺(つば)の破片(はくぺん)に記(し)してあつた文句(もんぐ)に多少(たうしう)とも符合(ふがふ)してゐた。どうも、驚(おどろ)くべき、又(また)恐(おそ)ろしい神通力(じんつうりき)をもつてゐるといふ噂(うわさ)のある不思議(ふしぎ)な女王(ぢよわう)が住(す)んでゐるらしい様子(ようす)であつた。私(わたし)にもレオにも一向(いかう)そのわけはわからなかつたが、レオは勿論(もちろん)、私(わたし)が前に何遍(なんべん)も傳説(でんせつ)のことをひやかしたので、私(わたし)に對(たい)しては、殊(こと)の外(ほか)得意(たいてい)であつた。ジョップと來(く)てはもうすつと前(まへ)から考(かう)へることは一切(いっさい)やめて凡(たゞ)てをなりゆきにまかせてゐた。アラビア人(アラビアじん)のマホメッドはアマハツガー人(アマハツガーじん)に鄭重(ていじゆう)な待遇(たいぐ)は受(う)けて

あだが、それと同時に冷たい侮蔑をも受けてあだ。彼は何に脅えてあだのか知らぬが、非常にびくびく脅えてあだ。彼は一日中洞窟の隅に蹲くまつて、アラアの神や豫言者マホメッドの名を唱へてひたすら加護を祈つてあだ。どうしたのかと私がしつこく聞いて見ると、彼は、この國の人間は男も女も人間ではなくて悪魔であり、この國は妖魔の國だから恐ろしいのだと答へた。實を言へば、私も二度彼の意見に賛成したくなつたことがあつた。かやうにして、ピラリが發つてから四日目の晩までは過ぎ去つたが、この晩に或る出来事が起つた。

吾々三人とアステーンとが、寢る前に、洞窟の中で焚火をかこんで座つてゐると、これまで黙つてゐたアステーンが、突然立ち上つてレオの金髪の上に手をおいて彼に話しかけた。

今でも私は眼を閉ぢると、この世の中の最も奇怪な光景の最も奇怪な中心のやうに、彼女の女の誇らしい、恰好のよい姿が、濃い影と、赤い焚火の光とに代るべく包まれて起ち上つたところがまぎく見えるやうな氣がする。彼女は起ち上つたと思ふと、かすくの胸の思ひと豫兆とをほゞ次のやうに節をつけて語り出した。

君は吾が選びし人——吾は初めより君を待ちぬ！

君はいとも美し。君の髪、君の白き皮膚は世に比ひなし。

君にまさりて力ある男々しき人はなし。

君が眼は空にして、眼の光は空の星。

缺くる所なき幸ある君が顔はせに、吾が心おのづと君に向ひぬ。

吾君を見しときより、吾君にこがれぬ——

されば吾君をとりぬ——お、いとしき君よ。

災の來らざるやうしかと君をとらへ、

日のさゝぬやう、吾が髪もて君が髪をおほひぬ。

君は皆吾がものなりき吾は皆汝がものなりき。

さるうちに日は過ぎて兎つ日は遂に來りぬ。

あゝその日何事の起りしぞ。戀人よ、吾は知らず。

さはれ君は見えずなり、吾は闇に迷ひぬ。

アステーンよりも強く、美しき人君をつれゆきぬ。

されど君は振り向きて吾が名を呼び、君が眼は闇を探しぬ。

しかも彼の女の美しさは、君をひきて恐ろしき所につれゆきぬ。

あゝかくて、あゝかくて、吾が戀人よ——

こゝで此の不思議な女は、この話とも歌ともつかぬものをやめて、彼女の前に映つてゐる深い影に輝く眼をちつと据ゑたやうに思はれた。言葉の意味のわからぬ吾々には、それは無茶苦茶な歌のやうに聞えた。次の瞬間に、彼女の兩眼は、何かはつきり見えない恐怖をうつし出さうともがくものゝや

うに、空虚な、物凄く凝視にかはつた。彼女はレオの頭においてゐた手を宙にあげて、闇の中を指さした。吾々はみんなその方を見たが、何も見えなかつた。けれども彼女は何かを見たのである。或は見えたり思つたのである。しかもそれは、彼女の鐵のやうな神経をも激動させるものだったと見えて、彼女は、それから一言も言はずに、ぱつたりと吾々の間に倒れて人事不省に陥つてしまつた。この不思議な少女に折頃だんくほんたうの愛着を感じはじめたレオはひどく吃驚して、困りはて、しまつた。それから何もかも公平に言つてしまへば、私の心理状態は、迷信的恐怖の状態から大して離れてはゐなかつた。場所といひその場の事情といひ、全くもつて不氣味極まるものだった。しかし、まもなく彼女は正氣に返つて、瘁撃的に身慄ひした。

「今のは一體どういふ意味なんだ。ねえアステーン？」とレオは訊ねた。彼は多年の勉強のお蔭で、アラビア語が非常にうまく話せたのである。

「何でもないので」と彼女は強ひて微笑しながら答へた。「妾の國の風習に従つて貴方に歌つてあげただけだわ。まだ起りもしないことがどうして妾にわかるもんですか？」

「では何を見たんだね、アステーン？」と私はきつと彼女の顔を見ながら訊ねた。

「何でも無いわ」と又彼女は答へた。「何も見やしくつてよ。何を見たなんて妾に問うちやいけないわ。貴方がたはどうして驚きなさるんです？」かう言ひながら彼女はレオの方を向いて、彼の顔を両手でつかまへてまるで母親がするやうな風に、彼の額に接吻した。私は文明人の中にも野蠻人の中に

も、その時の彼女の眼つきのやうに愛情に充ちた女の眼つきを見たことがない。

「ねえ貴方」と彼女は言つた。若し妾がゐなくなつても、貴方が夜、手を伸したときに妾の姿が見えなくなつても、時々妾のことを思ひ出して下さいね。妾は貴方の足を洗ふ價値もない女ですけれど、眞から貴方を愛してゐるのです。今のうちに妾たちは存分に愛しあつて幸福であませう。墓場へ行けば愛も温か味も接吻もありませんものね。ことによると何も起らないかも知れないわ。昔あつたことの苦い記憶かも知れないわ。兎に角今夜は妾たちのものよ、明日は誰のものになるか、そんなことは誰にだつてわかりやしないわ。」

第八章 酒宴の後

その翌日になると、その晩に吾々を歓迎するための酒宴が開かれるといふことを知らせて來た。私は、吾々はみんな不調法な人間で酒宴などは好まないと云つて、八方斷わつたが、私の辯解は不愉快さうな沈黙で迎へられたので、この上ことわらぬ方がよからうと考へた。そこで日没のすぐ前に、私はすつかり用意が出來たといふ知らせを受けたので、ジョップをつれて洞窟の中へはひつて行つた。其處で私はレオに會つた。レオの傍には相變らずアステーンがついてゐた。この二人は外へ散歩に行つてゐたので、酒宴のあることをその時まで知らずにゐたのである。此のことをきいたときアステーンの顔には恐怖の表情が浮んだ。彼女はうしろを振りむいて、洞窟の中を通つて行く男の腕をつかまへ

て、何事かをせつかちに訊ねた。彼の答へはいくらか彼女を安心させた見えて、彼女はほつとした様子だったが、まだくすつかり安心しきつた風ではなかつた。それから彼女はその場の頭分の男に何か諫言でもしようとした様子であつたが、その男は、ぶり／＼怒りながら何か言つて彼女を拂ひのけた。だがまもなく気が變つたと見えて、彼は彼女の腕をとつて、彼と、焚火のまはりに車座をつくつてゐた一人の男との間に彼女を坐らせた。彼女は、何かわけがあつたと見えて、彼の言ひなりになつてゐるのがよいと考へたらしかつた。

その晩の焚火はいつもよりすつと大きく、そのまはりには廣い環をつくつて三十五人の男と二人の女とが坐つてゐた。二人の女といふのはアステーンとジョップに振られた女とであつた。男はみな、いつものやうに黙つて坐つてゐた。そしてめい／＼自分のうしろの岩に掘り抜いた穴に眞つ直ぐに大きな槍をたてかけてゐた。前に言つた黄色つばい麻の上衣を着てゐる者は一人か二人で、他の者は腰に豹の皮をまきつけてゐるだけだつた。

「これからどうなるんです、旦那様」とジョップは心配さうに言つた。「おや／＼またあの女が來てゐる。だがもう私を追ひまはす氣遣ひはありませんよ。私はてんで相手にしなかつたんですから。奴等を見つるとむす／＼しますよ、どいつもこいつも、まつたくですよ。おや、奴等はマホメッドにも食事をやるやうに言つてゐますね。ほら、あの女が、マホメッドをあんなに鄭重に案内して來ますよ。やれやれ、私でなくて助かりました。」

吾々が見ると、たしかに、問題の女が起ち上つて、かはいさうなマホメッドを隅つこからつれ出してゐた。彼は、何かしら恐ろしい豫感に打たれて、アラーの名を念じながら、そこに慄へてゐたのである。彼はついてゆくのが氣が進まぬらしかつた。だがそれは恐らく、これまで別の食事を與へられてゐた彼が、急に慣例を破つてこのやうな恩典に浴したので薄氣味が悪かつたのであらう。いづれにしても彼はひどく恐怖にうたれて、膝ががた／＼ふるへるので、頑丈な、大きな身體を支へるのがやつとやつとだつた。彼が兎も角承知してついて來たのは、彼の手をとつてつれて來た女がなだめすかしたからといふよりも、むしろ後の方に大きな槍をもつたアマハツガー人の巨漢がひかへてゐたせゐだと私は思ふ。

「どうも様子が變だ。」と私は言つた。「だが當つて碎けるより外にしようがない。皆んな拳銃をもつてゐるかね。もつてゐるなら弾丸がこめてあるかどうかしらべておくがよい、ぜ。」

「私をもつてますよ」とジョップは彼のコルト（拳銃の名）を軽く叩きながら言つた。「けれどもレオ様は獵刀をもつてゐらつしやるきりですよ。尤もあれはずあぶん大きいから大丈夫ですけれど。」

置きわすれた武器をとりに行つてゐる間もないので、吾々は大胆に前へ進み出て、洞窟の壁に脊をむけて一列に並んで坐つた。

吾々が座を占めるとすぐに酒を入れた土製の甕がまはされた。この酒はカフィール黍といふ名で南阿地方に知られてゐる穀物でこしらへたもので、飲むと胃の腑がむか／＼しさうであつたが味は決して

て悪くはなかつた。酒の容れ物は非常に妙な形をした、ずつと昔にこしらへたもので、大きさは様々だつた。かうした甕は、あとで適當な時に詳しく述べようと思ふが、岩の墓場でよく見つかつた。私にはそれは埃及人の流儀に従つて死人の内臓を入れるために使はれたもので、この土地の古代の住民と埃及人との間には多少の聯絡があつたのかも知れないと考へたが、レオは、それはエトラスカンの流儀に従つて、死人の靈が使ふために墓場に置いてあるのだといふ意見だつた。これ等の甕には皆二つづ、把手がついてをり、大小さまざまで高さ三呎位もあるのから三呎位のまであつた。形も亦様々であつたが、どれもこれも此の上なく美しく、あまり光澤のない、少し粗い、非常に精巧な土器であつた。この土器の地には、更に一層美しい、生きたやうな象眼がしてあつた。その象眼の繪の中には、非常に無邪氣な、今日の嗜好には投じないやうな自由奔放な戀の場面や、少女の踊つてゐる繪や、狩獵の繪などがあつた。たとへば吾々がその時に酒を飲んでゐた甕には、片側には白人らしい元氣のいい人々が槍で象を攻撃してゐる繪がかいてあり、その反対の側には一人の獵師が矢で走つてゐる羚羊を射てゐる繪がかいてあつた。但しこの方はあまりよい出来榮えではなかつた。

こんな危急の場合に、こんな話をするのは餘計な道草だが、この場合にはこれ位な道草を食つても長すぎはしなかつた。何故かといふと、この場面そのものが實に長くつゞいたからである。時々酒の甕がまはされるのと、焚火に薪を投げこむ外は、かれこれ一時間の間、何事も起らなかつた。時々誰か一語も物を言はなかつた。吾々は完全に沈黙して、大きな焚火の燃えるのと、土器でこしらへた

燭臺のちらくする光が投げてゐる影とをちつと見つめてゐた。序に言つておくがこの燭臺は古代のもものではなかつた。吾々と焚火との間の空いたところに、短い四つの把手のついた、まるで屠殺屋の盆のやうな大きな木の盆がおいてあつた。盆の側には大きな、柄の長い鐵鉗が一挺おいてあり、焚火の向う側にも同じやうな鐵鉗が一挺おいてあつた。この盆と鐵鉗とは私には何だか薄氣味がわるかつた。この酒宴は實に風變りな饗宴で、まるでバルメシドの酒宴のやうに、食ふ物は何一つなかつた。たうとう、私が、まるで催眠術にでもかゝつたやうな氣持ちになりかけてゐた時、何か言ひ出したものがあつた。何等の豫告もなしに、焚火の向う側に坐つてゐた一人の男が大きな聲をだした。

「これから食ふ肉はどこにあるんだ？」

すると車座をつくつてゐた一同の者は右の手を火の方へさし出しながら、おさへつけたやうな調子で答へた。

「肉はいまに来る。」

「それは山羊か？」と前の男が言つた。

「角のない山羊だ。山羊よりも上肉だ。みんなでそれを殺すんだ。」一同は聲を揃へてかう答へながら、一齊に半ば身體をめぐらして右手で槍の柄をつかみ、やがて又一齊にそれをはなした。

「それは牡牛か？」とまた前の男が言つた。

「角のない牝牛だ。牡牛よりも上肉だ。みんなでそれを殺すんだ。」一同は答へて、再び槍をつかん

ではなした。

それからちよつと静になつた。マホメツドの隣りに坐つてゐた女が急に彼にちやほやしはじめた。彼の頬をたゞいたり、やさしい聲で呼びかけたりした。だが彼女の兇猛な眼は、ぶる／＼慄へてゐる。マホメツドの身體を上から下までろ／＼見まはしてゐた。私はそれを見ると恐ろしくて毛髪が逆立つた。どうしてそれ程恐ろしかつたのかわからんが、みんなひどく恐ろしがつてゐた。わけてもレオは一番ひどかつた。女は蛇のやうにマホメツドを抱擁した。たしかにこれは、しまひまでやつてしまはなければならぬ或る儀式の一部分だつたに相違ない。私はマホメツドの蒼色の皮膚の下が眞つ蒼になつたのに氣がついた。

「料理の用意はできたか？」と例の聲が早口で言つた。

「用意はできた、用意はできた。」

「壺は熱くなつたか？」とその聲はつゞいて言つた。その聲はけた／＼ましい叫び聲のやうに洞窟の中に沈痛に反響した。

「熱くなつてゐる。熱くなつてゐる。」

「大變だ」とレオは叫んだ。「あの記録をおぼえてゐますか、『彼等は異國人の頭に壺をのせるあたり』と書いてあつたでせう。」

彼がかう言つたとき、そして吾々がまだ身動きもせず、彼の話の意味をよくのみこみもしないうち

に、二人の荒くれ男が跳び上つて、長い鐵鉗をつかんで、それを焚火の中へ投げこんだ。その間に、マホメツドを抱擁してゐた女は、突然帯の下から緒綱をとりだして、それをマホメツドの肩にかけてぎゆつと締めつけ、彼の隣にゐた男どもは彼の兩脚をつかんだ。二人の男は同時に鐵鉗をとつて、岩の床に火花をちらしながら、白熱した大きな土製の壺をさし上げた。あつと言ふ間もあらばこそ、彼等はマホメツドの藻掻いてゐるところへ、一度にその壺をつき出した。マホメツドは必死の叫び聲を振りしぼりながら、惡鬼の如くに戦つた。そのために、綱で縛られ、二人の男に脚をおさへられてゐるにも拘らず、前へ進んできた者どもは一時目的を果すことができなかった。その目的といふのは、戦慄すべき、信ずることのできないことではあるが、赤熱の壺を頭にのせることであつたのだ。

私はあつと恐怖の叫び聲をあげて跳び上がりながら拳銃をとり出して、本能的に、今しがたマホメツドを抱擁して、今は彼の腕をつかんでゐる、惡魔のやうな女をめぐめて、眞つ直に發射した。彈丸は彼女の背中に命中して、彼女は即死した。私は今になるまで、それを喜んでゐる。といふのは後でわかつたところによると、アマハツが一人の食人の習慣につけこんで、ジョツプに侮蔑された腹いせに、こんな恐ろしい復讐を企てた張本人はこの女だつたからである。兎も角彼女は死んで倒れた。ちよつど彼女が斃れるときに、恐ろしいことには、マホメツドが人間業とも思はれぬ力で、彼を拷問にかけてゐた者共をふりはらつて、高く空中に跳び上つたかと思ふと、女の屍體の上に折り重なつて死んでしまつた。私の射つた拳銃の彈丸は、二人の身體を一度に射貫いたのだ。そして一舉にして虐殺者を

斃し、犠牲者をそれよりも百倍も恐ろしい死から救つたのだ。それは恐ろしい出来事ではあつたが、それと同時に慈悲深い出来事でもあつたのである。

しばらくの間は、みな、呆氣にとられて黙つてゐた。アマハツガー人はまだ鐵砲といふものを知らなかつたので、その偉力に辟易してゐた。だが暫くすると、吾々のすぐそばにゐた一人の男が氣を取り直して、槍をとつて一番近くにゐたレオを突かうとして身構へた。

「逃げる」と叫びながら、私は、眞つ先に立つて、足のつゞく限り全速力で洞窟の奥の方へかけ出した。私はできることなら外の方へ進んでゆきたかつたのであるが、途中に人がゐたし、それに入口には、遙か彼方の空を背にして立つてゐる群集の影がはつきり見えたからやめたのである。私は洞窟の奥の方へ進んで行つた。私のあとからはジョップとレオとがついて來た。そしてそのあとからは、女を殺された、めに物狂ほしいまでに怒つた食人種の群が、どや／＼と押し寄せて來た。私はぐつたり地べたに斃れてゐるマホメッドの屍體を跳び越えた。その時に、すぐそばにある灼熱した壺の熱が足を打つたのを感じた。そしてその光りで、マホメッドの手がかすかに動いてゐるのが見えた。彼はまだ死にきつてはゐなかつたのである。洞窟のどん詰りには高さ三呎、深さ八呎ばかりの小さな岩の臺があつて、その上には晩になると二つの大きな燭臺が置いてあつた。吾々三人はそこまで着くと、臺の上へ跳び上つて、どうせ死ぬとしても、できるだけ高價に命を賣らうと用意した。ジョップは右に、レオは中央に、私は左に陣どつた。吾々の後には燭臺があつた。レオは前屈みになつて、岩

の上に長く曳いた影の路を俯瞰してゐた。それは焚火と火のついた燭臺のところまで終つてゐて、その向うには、吾々を殺さうとしてゐる連中が、槍の穂先をきら／＼光らせながら右往左往してゐた。彼等はこんな怒つてゐるときでもブルドッグのやうに黙つてゐた。その他に見える物といつては、薄暗い中にまだかつかつと燃えてゐる赤熱した壺だけであつた。レオの眼には妙な光が浮んで、彼の美しい顔は石のやうになつた。彼は右手に大きな獵刀をもち、その革紐を少し手頭の方へずらして、私の身體へ腕をまきつけて抱擁した。

「左様なら叔父さん」と彼は言つた。「あなたは僕の親しい友達でした。僕にとつては父親以上でした。吾々はもう彼等から逃れる道はありません。彼奴らはもう數分間のうちに吾々を片付けて、あとで食つてしまふでせう。左様なら。こんなところへつれて來たのは僕です。勘辨して下さい。ジョップも左様なら。」

「何事も神の思し召しだ」と私は度胸をきめて、齒がみをしながら言つた。ちやうどその時、ジョップが、わつと叫んで、拳銃をとり上げて發射した。そして一人の男を射つた。序でに言ふが、それは彼のねらつた男ではなかつた。彼のねらひがあつた、めしなどはなかつたのである。

彼等はだん／＼近く押し寄せて來た。私もできるだけ速く射ちつゞけて、彼等を喰ひとめた。私とジョップとで、例の女のほかに、既に、五人の男を殺したり重傷を負はせたりしたが、その時はもう彈丸がなくなつてしまつた。しかし彈丸をつめかへてゐるひまなどはなかつた。彼等は吾々がもう彈

丸を射てなくなつたことなどは知らないのに、矢張りすんく前へ押し寄せて来た。その大膽さ加減は全く驚歎のほかほかになつた。

一人の大男が臺の上へ跳び上つて来た。するとレオは猿臂を伸ばして短刀で突き殺してしまつた。私も一人の男を同じやうに突き殺した。ところがジョップは突き損つてしまつた。一人の筋骨逞ましい男が彼の胴體をつかんで彼を岩からもぎ下した。その時に革靴がしつかりはまつてゐなかつたので、短刀がジョップの手から落ちた。運のよかつたことにはその短刀は柄の方を下にして岩の上に立つたので、下になつて倒れたアマハツガー人の身體にぐざと突き刺さつた。それからジョップがどうなつたかははつきりわからないが、何でも彼は、彼を襲つて来た男の屍體の上に倒れたまゝ、死んだふりをしてゐたらしい。私はすぐに二人の壯漢と格闘をはじめた。彼等は幸ひにも槍を投げすて、とびかゝつて来たのであつた。私は生れてはじめて、もち前の強い腕力がこの時役に立つた。私は殆んど短い劍ほどある獵刀を、柄も通れと一人の男の頭につきさした。あまり力を入れたので鋭い刃物は彼の頭蓋骨を眼のところまで切り裂いてしまひ、かたく中へ喰ひ入つたので、その男が急にばつたり横ざまに倒れたとき、短刀は私の手からねぢれてもぎはなされてしまつた。

すると又別の二人の男が私にとびかゝつて来た。私は彼等がやつて来るのを見ると、彼等の腰へ片つ方つゝの腕をまきつけて一しよになつて岩の床の上へ倒れて上になり下になりして轉げまはつた。彼等は仲々強かつたが、私は憤怒と、いざといふ時になつて來るとどんな文明人の心にも匍ひこんで

來る恐るべき鬪争慾とに燃えきつてゐた。私は二つの腕を、二つの眞黒な惡魔の身體にまきつけて、きゆうきゆう締めつけたので、たうとう肋骨がめき／＼と音をたて、碎けるのが聞えた。彼等は蛇のやうに身體をねぢまげてのたうちまはりながら、拳で私を打つたり搔いたりしたが、私は少しもゆるめなかつた。上からつき下す槍を避けるために、私は仰向きになつて二人の身體を私の上へのせて身をかばひながら、徐々に彼等を締めつけていつた。その時に、私はどういふものか、今では平和協會の會員になつてゐる、ケンブリッヂ大學の學長や、私と同輩の校友連が千里眼で、その時の私の姿を見たらどう思ふだらうと考へた。まもなく私を襲撃した二人の男は氣が遠くなつて、腕くのを止めてしまつた。息ももうとまつて、彼等は死にかけてゐた。それでも私は手を緩めなかつた。それは彼等の往生際が誠に惡かつたからである。他の蠻人どもは、吾々が三人とも、出づ張つた岩蔭に倒れてゐたので、みんな死んで終つたと思つたのか、兎に角吾々の小さな悲劇などには介意つてゐなかつた。振り返つて見ると、レオはもう岩からはなれたと見えて、滿身に燈火の光を浴びて立つてゐた。まるで狼の群が一頭の牡鹿を倒さうとするやうに、彼を中心にして、蠻人どもがとびかゝつてゐた。彼の美しい蒼ざめた顔は、彼等の上につきとそびえたち、つやく／＼した捲毛が前後左右に揺れてゐた。彼は渾身の力を出して、必死になつて戦つてゐた。それは勇ましい光景でもあつたと同時に、はらはらする光景でもあつた。彼は一人の男を短刀でつき刺した。彼等は、レオのすぐそばまで押し寄せて、薙めきあつてゐたので、彼等の大きな槍を使つて彼を殺すことはできなかつたのだ。それに彼

等は短刀も棒ももつてゐなかつたのである。刺された男が倒れる拍子に、レオの手から短刀がもぎとられて、彼は今は身に寸鐵も帯びなくなつたので、もういよいよおしまひだと私は思った。ところが、どうしてなかく、彼は、必死の力をふるつて一同をつき飛ばし、たつた今殺した男の屍體をつかんで宙にさし上げ、彼を襲つて来る群集を目がけてそれをはふりつけた。そのはずみを食つて、五六人の男は地べたに倒れてしまつた。しかし、頭蓋骨を打ち碎かれた一人の男を除くほかは、すぐに起き上つてまた彼に襲ひかゝつて来た。たうとう、狼の群はライオンを壓倒して来た。それでも彼は一度顔勢を挽回して、一人のアマハッガー人を拳で打ち倒したが、長い間には衆寡敵せず、遂に、彼は樫の木が倒れるやうに岩の床の上に倒れてしまつた。彼にしがみついてゐた連中も彼と一緒に倒れた。彼等は、彼の手足をおさへて、彼の身體からすつかり邪魔物をなくした。

「槍をもつて来い」と一つの聲が叫んだ。「こいつの咽喉を刺すんだ。それからこいつの血を入れる容れ物をもつて来い。」

私は觀念の眼を閉ぢた。何故かといふと、一人の男が槍をもつてやつて来たのに、私はレオを助けに行くことができなかつたからである。私自身ももう弱つてゐたし、それに私の上につかつてゐた二人の男はまだ死にきつてゐないで、私はひどい苦しみに惱まされてゐたのである。

その時何か急に騒ぎが起つたので、私は思はず眼を開けて、殺人の場面の方を見た。少女のアステーンが、レオの倒れた身體の上へ身を投げかけて、身をもつて彼の身體をかばひ、彼の首つたまへし

つかと抱きついたのであつた。皆の者は彼女を彼から引き離さうとしたが、彼女は自分の足をレオの足へまきつけて、ブルドッグのやうに、或は木へ攀ち登る人のやうに彼にしがみついてゐたので彼等ははどうすることもできなかつた。そこで彼等は、女を傷つけないやうに横の方からレオを突き刺さうとしたが、彼女がどうにか自分の身でかばつたので、レオは負傷しただけであつた。

たうとう彼等は我慢ができなくなつた。

「男も女も一緒に田楽刺しにしてしまへ。」と先刻の物凄い酒宴の席で色々な質問をしたのと同じ聲が言つた。「さうすりや、二人はほんたうに夫婦になれるだらう。」

ついで私は一人の男が仁王立ちになつて槍をしごいてゐるのを見た。冷たい刃物が上の方できらきら光るのが見えたので、私はまた眼を閉ぢた。

ちやうどその時、一人の男の聲が、凜として洞窟の中に鳴り響いて、岩の道に反響した。

「止めろ！」

それつきり私は氣が遠くなつた。そして氣を失ふ瞬間に、私の朦朧とした意識に、これが最期だといふ考へがちらりと閃いたのであつた。

第九章 小さい足

眼を開いて見ると、私は、あの恐ろしい酒宴の時に吾々が取り圍んで集まつてゐた焚火から、あま

り遠くないところに、毛皮の敷物の上に横はつてゐたのであつた。私のすぐそばには、レオがまだ氣を失つて横はつてをり、脊の高い少女アステーンは、彼が脇腹に受けた深い槍傷を麻布で縛束するために冷水で洗つてゐた。彼女のうしろに、洞窟の壁に凭れてジョップが立つてゐた。彼は見たところ負傷はしてゐなかつたやうだが、打撲傷を受けて、ぶる／＼慄えてゐた。焚火の向う側には、ぐたぐたに疲れて眠つてでもゐるやうに、吾々が物凄い血闘で殺した連中の屍體が、不規則にのたうつてゐた。數へて見ると、私が手にかけて可哀さうなマホメッドと例の女とのほかに十二人の屍體があつた。左手の方には多勢の人が、生き残つた食人どもをうしろ手に縛りあげて、二人づゝ一緒につなぎあはせてゐた。兇漢どもはむつとりとして無關心に運命に服従してゐた。それは、彼等の無氣味な眼にきらきら輝いてゐる内心の憤怒とそぐはない妙な光景であつた。縛られた人々の前に、一同の動作を指圖してたつてゐたのは、外ならぬ吾々の友人ピラリであつた。彼は少し疲れてゐたやうではあつたが長髯をたれてたつてゐる姿は、ことの外鷹揚なもので、まるで牡牛を切るのを監督でもしてゐるやうに、冷やかな、無頓着な様子をしてゐた。

やがて彼はこちらを振り向いて、私起き上つて坐つてゐるのを見て、もう氣分がよくなつたであらうと非常に丁寧にたづねた。私は、氣分がいゝ、わかるいゝか今のところ自分にもわからぬが、身體中が痛むと答へた。

それから彼はレオの身體の上へかゞみこんで傷をしらべた。

「たちのよくない傷ぢやが」と彼は言つた。「槍は内臓までは貫つてゐないから、きつとよくなりますわい。」

「あなたが来て下さつたので助かりましたよ、長老」と私は答へた。「もう一分もおくれたら助かりつこはなかつたんです。あなたの部屋の悪魔どもは、吾々の従者を殺したやうに吾々をみんな殺さうとしてゐたんですから」と言ひながら、私はマホメッドの方を指した。

老人は齒きしりをした。彼の兩眼には異常な憎惡が閃いたのを私は見た。

「もう大丈夫ですわい」と彼は答へた。「今に聞いただけで肉が骨からもぎとれるやうな復讐をされるでせう。これからみんな女王様のところへつれてゆくのです、女王様の復讐は、それはそれは恐ろしいもんですぢや。あの人は」と言ひながら、彼はマホメッドを指して「この連中がこれから殺される殺され方に比べると、ずつと慈悲ぶかい殺され方をさつしやつた。で、一體全體どうしてこんなことになつたのぢやな？」

私は手みじかに今まで起つたことをかいつまんで話した。

「ほゝ、うー」と彼は答へた。「此の土地ではな、異國人がはひつて來ると、壺で殺して食ふことになつとりますのぢや。」

「まるであべこべな歡待ですな」と私は力なく答へた。「吾々の國では、異國人が來ると歡待して御馳走を饗應するんですが、あなた方は異國人の肉を食つてあべこべに自分が饗應されるんですね。」

「それは習慣ですわい」と彼は肩を聳して答へた。「わしは悪い習慣ぢやと思つとりますがねえ。ところで」
と彼はしばらく躊躇してから言つた。「異國人の味はわしはあまり好まん。ことに沼地を歩いて野生の鳥を食つて来たあの肉はね。全能の女王が、あなた方の生命を助けよと命令を下されたとき、あの黒人のことについては何とも仰言らなんだものだから、あいつらはあの黒人の肉に飢ゑてゐたんですわい。そこへもつて来て、あなたが殺しになつたあの女が、あの黒人を燐壺で殺すやうにあいつ等をけしかけたんです。だがその仕返しはきつとありますぢや。女王の怒りにふれるよりも一生日の眼を見ん方がましな位ですぢや。あなたの手にかゝつて死んだ奴等は果報者ですわい。」
「それにしてもあんたはする分勇ましく戦ひなかつた」と彼は言葉をつづけた。「あんたはまるで、年をとつた手長狒々みたいだ。あの二人の男の肋骨を卵の殻か何ぞのやうにくだいてしまひなかつた。それからあの若いのは獅子ぢや、あんなに多勢のものを相手にして、見事に抵抗なかつた。あの人の手にかゝつて三人の者は即死しとります。それから、もう一人も」と言ひながら彼はまだびく／＼動いてゐる男の身體を指さした。「今に死んでしまひます。何しろ頭を碎かれてゐますからな。それから縛られてゐる連中の中には、怪我をしてゐるものが大分ある。何にしても勇ましい戦ぢやつた。だがな、狒々さん——あなたの鬚だらけの顔がさういへば狒々そつくりですぞ——あの身體に穴のあいである男をあんたはどうして殺しなかつた？ 何でも奴等の話によると、あんたはでかい音をさせなかつたさうぢや、そして音がするとあの男は前へのめつてしまつたといふことぢやが。」

私はできるだけ納得するやうに説明してきかせた。しかし説明はごく簡單にした。といふのは私はひどく疲れてゐたので、たゞ説明しなければ、全能の女王の逆鱗に觸れるかもしれないと思つたのでそれが恐ろしさに、仕方なしに火薬といふものゝ性質を話してきかせたのであつた。すると老人は縛られてゐる男を一人だめしに鐵砲で殺して見せてくれんかと言つた。私がそんな残酷なことはできんから、身體がよくなつたら、何か獸を射つて見せると言つたら彼は怪訝な顔をしてゐたが、このことを約束すると、彼は、子供が新しい玩具を約束された時のやうに喜んでゐた。

ちやうどその時にレオが、少量のブランデーで正氣づいて眼を開いた。吾々はまだ少しばかり、ブランデーをのこしてゐたので、ジョップがそれをレオの咽喉に滴らしこんだのである。そこで吾々の會話は終つた。

そのあとで、吾々は勇敢な少女のアステーンに助けられて、レオを安全に寢臺まで運んで行つた。レオはまだすつかり弱りきつて、半意識の状態だつた。私は、自分の身を賭してレオの命を救つてくれたアステーンの勇氣に感謝のあまり、彼女に接吻したかつたが、そんなことをして怒られたら大變だと思つてやめた。私は打ち傷や、擦り傷を負うてはゐたが、この四五日間つひぞ味はつたことのない安らかな氣持ちで、私の小さい墓場へこつそり引き返した。寢る前に私は神に感謝することは忘れなかつた。その日の吾々くらゐ死のそばへ近づいて助かつた者は、かつて、澤山はなかつたことであらう。

私はどんなに氣持ちのよい時でも眠つきの悪い方である。その晩やつとのことで眠りついてから見た夢はあまり愉快な夢ではなかつた。氣の毒なマホメッドが、赤く焼けた壺から逃れようとしてもがいてゐる姿が幾度びも幾度びも夢の中に現はれた。それから、此の幻影の背景には、ヴェールをまとつた人の姿が、つゞけざまにふはく浮んで、時々ヴェールを脱いでゐるやうに思はれた。ヴェールを脱いだ姿は、或る時は素敵な妙齡の美人となり、或る時は、げらげら笑つてゐる白骨のむくろとなつた。そして、ヴェールを脱いだり、着たりしながら、不思議な文句をしやべつた。それはちよつときくとまるで無意味な文句のやうであつた。

「生ける者はかつて死せし者なり。死せるものも死する能はず。心靈の輪廻には生も死もなければなり。萬物は、時に眠りて忘らるゝことあれど永久に生くるものなり。」

そのうちに、たうとう夜が明けた。けれども、私は、身體ぢゆうが硬ばつて、痛んで、起き上れなかつた。七時頃にジョップがひどく跛をひきながらやつて來た。彼の丸い顔は、腐つた林檎のやうな色をしてゐた。そして彼は、レオはよく眠つてゐるが大層弱つてゐると言つた。それから二時間程たつとピラリがやつて來た。ジョップはこの老人のことをピリーの山羊とかたゞ、ピリーとか呼んでゐた。此奴の白い髯が山羊に似てゐるやうに彼は思つたのだ。彼は燭臺を手にもつてゐた。脊の高い彼の身體は、殆んど小さい室の屋根まで届いた。私は眠つたやうなふりをして、臉をすこしあけて、老人の皮肉ではあるが上品な顔を見てゐた。彼は鷹のやうな眼でちつと私を見ながら、白い見事な髯を

しごいてゐた。序に言つておくが、このやうな髯なら、倫敦のどの理髮屋でも、廣告用として、年百碼位は出すだらうと思ふ。

「あゝ」と彼は言つた。ピラリは獨話を言ふくせがあつたのだ。「この人は醜い——もう一人の人の美しいのにひきかへて、まことに醜い。ほんたうに狒々そつくりだ。狒々とは吾ながらよい名前をつけたものぢやて。だがわしはこの人が好きだ。この年になつて人が好きになるなんて不思議なこつたわい。かういふ諺がある——『誰も信じてはならぬ。そして一番信用のおけない奴は殺してしまへ、凡ての女からは逃げるがよい。女は邪惡なもので、しまひには相手を滅ぼしてしまふから。』これは良い諺ぢや、わけてもしまひの方がよい。これはきつと太古から傳はつた諺ぢやらう。だが、わしはこの狒々が好きだ。かはいさうに、昨夜の戦争ですゑふん疲れとるぢやらう。どれ、眼を覺ますといけんから行くとしよう。」

私は彼が向うを向いて、爪先立ちで、そつと入口の處へ歩いてゆくまで待つてゐて、それから彼を呼びとめた。

「長老、あなたでしたか？」と私は言つた。

「左様、わしぢや、だが、お邪魔はしませんわい。わしはほんの、あなたがどうしとるかと思つて見に來たんですわい。それから、あなたがたを殺さうとした奴等はもう女王様のところへ向けて旅立つたことをお知らせしようと思つてな。女王様はあなた方にもすぐ來て貰ひたいといふことぢやが、ま

だ行けますまいの？」

「え、もう少しよくならなくちや」と私は言つた。「しかし日のあたるところへ出していたけませんか、私はどうもこゝが嫌ひなんです。」

「もつともですわい」と彼は答へた。「こゝは何だか陰氣ぢや。わしはよくおぼえとるが、子供の時分に、ちやうど今あなたが寝てゐるその腰掛の上に美しい女が寝てゐるのを見ましたわい。あまりその女が美しかつたもんだから、わしは、燭臺をもつて、そつとこゝへしのんで来てその女の顔をつくづく眺めたもんだ。手が冷たくさへなかつたら、わしは、その女は、眠つてゐるので、そのうちに眼をさますかも知れんと思つたこつちやらう。それ程美しく、それほど安らかに、その女は白い上衣を着て横つてをりましたのぢや。その女も白人で、黄色い髪は殆んど足まで垂れとりましたわい。女王のおすまひになつてゐらつしやるところには、かういふ静かな墓場が澤山ありますぢや。そこに墓場を設けた人たちは、どうしてか知らんが、戀人の手などを腐らんやうにし、死んでも死な、いやうにするすべを知つとりましたのぢや。毎日々々わしはこゝへ来てその女の顔を見ました——笑つちやいけませんぞ、わしはまだほんの馬鹿な子供ぢやつたのでう——ところがそのうちにわしはその屍體を戀するやうになつてしまひましたぢや、命の抜け殻をですぞ。わしはその女のそばへしのびよつて、その冷たい顔に接吻しました。そして、この女が生きてゐた時分から今までに、どんなに多くの人が生れたり死んだりしたことであらう。遠い昔に誰がこの女を愛して抱擁したのだらうなどあやしんだ

ものですわい。わしはな、狒々さん、この死んだ人から随分いろんな學問をしましたぞ。生の小さいこと、死の長いこと、日の下にある凡ての物が一つの道を通つて、永久に忘れられてしまふのだといふやうなことを知りましたわい。ところが、そのうちに、何事にもよく氣はつくが、少々せつかなわし之母が、わしの様子のかはつたのに氣がついてわしのあとからついて来て、その美しい白人の女を見て、わしはその女の妖術にかゝつたのぢやないかと心配したのですわい。實際またわしは妖術にかかつてゐたのですぢや。そこで、恐ろしさと腹立たしさとで、わし之母は、その女をまつ直ぐにあそこの壁にたてかけて、髪に火を點けたので、その女は足のところまで燃えてしまつたのですわい。といふのは、こんな風にして保存してある人間はまことに燃えがよいもんですぢや。まあ御覽、その女の燃えた烟がまだ天井にのこつとる。」

私はまさかと思つて上を向いて見ると、まきれもない油煙のやうな煤ぼけたあとが岩の天井にのこつてゐた。

「その女は足首まで燃えてしまひましたぢや」と老人は感慨深い聲で言葉を吐いた。「だがすぐにわしは引き返して来て、足だけはとりとめました。そして黒焦げになつた骨を切りとつて、麻の布につんで、あそこの石の腰掛けの下へかくしときましたぢや。考へて見ると、それはまだ昨日のことのやうな氣がする。誰も見つけてゐなきや、ことによるとまだあそこにあるかも知れん。實はその時から、今までわしはこの部屋へは入つたことはなかつたぢや。まあおまちなさい、ちよつと見て來

る。」かういひながら、ピラリはしやがんで、石の腰掛の下穴を手探りした。やがて、彼の顔は輝いた。そして彼は叫び聲を出しながら、何か埃だらけのものを取り出して、埃を床の上へ拂ひ落した。それはぼろ／＼になつた布につゝんであつた。彼はそれをほどこいて、中から恰好のいゝ、殆んど白人らしい女の足を取り出した。それは生き／＼として、形もちゃんとしてゐて、まるで昨日そこにおいたものゝやうであつた。私は驚いてそれをしげ／＼と眺めた。

「なあ、狒々さん、わしの言つたことはほんたうぢやろ」と彼は洗んだ聲で言つた。「こゝにまだ片足がのこつとるんぢやからな、さあ、手にとつてよく御覽なさるがいゝ。」

私は、この冷たい人間の薄片を手にとつて、燭臺の光でつく／＼と眺めた。私は何とも名狀することのできない、驚愕と、恐怖と、魅惑との一しよくたになつた感じがした。それは軽かつた。生きた人間の足よりもすつと軽いやうに思つた。けれども肉はどう見てもまだ肉であつた。たゞ微かな香料の匂ひがしてゐるだけであつた。その他の點では、この足は皺が寄つたり凋びたりもしてゐず、埃及のミイラの肉のやうに黒く醜くもなつてゐず、少しばかり焦げたところを除けば、死んだ時と同じに完全であつた。偉大なる香料の防腐力は正に驚歎に値する。

私はこの過去の遺物を、ぼろ／＼の麻布に包んだ。この麻布は、この足の持主の屍衣の一部分だつたと見えて少しばかり焦げてゐた。私はそれを旅行靴の中に藏つた。妙な安息所だと私は思つた。それからピラリに縋つて、私はレオの様子を見に行つた。レオはひどく傷ついてゐた。恐らく皮膚が

あまり白過ぎた爲でもあらう、私よりも一層ひどく見えた。それに側腹に受けた傷からひどく出血したので、餘程弱つてゐたが、それでも非常に快活で、何か朝食が欲しいなどと云つてゐた。ジョップとアステーンとは彼を駕籠の底、といふよりも、わざ／＼彼を寝かせるために柱から取つて敷いた粗麻布の上へのせた。そしてピラリ老人も手傳つて、洞窟の入口の物蔭へ彼をつれて行つた。序に言つておくが、洞窟の中は、昨夜の争闘のあとはずつかり取り片附けてあつた。そこで吾々一同は朝食をすまし、その日と、その次の二日間の大部分とをそこで過した。三日目の朝になると、ジョップと私とは事實上恢復した。レオも大分快くなつたので、私はピラリの幾度もの懇請をいれて、すぐにコオルへ旅立つことに同意した。コオルといふのは、不思議な女王の住んでゐるところだといふことを吾は聞かされた。だが私は内々そんな旅をしてレオの身體にさりはしなないと心配した。わけても、やつと薄い皮がついたばかりの傷口が、身體を動かした、めに破れはしなないと心配した。實を言へば、ピラリがあまり出立を急ぎさへしなければ、私はこんに早く出立することを承知するのぢやなかつたのだが、彼があまり氣をもむので、彼の言ふことをきかねば、何か厄介なことか危険かゞふりかゝつて来るやうな氣がしたのだ。

第十章 萬感交々

愈々出立ときまると、一時間もたぬうちに、五挺の駕籠が洞窟の入口まで運ばれた。駕籠にはそ

れぞれ四人づつの駕籠かきと二人づつの補缺とがついてゐた。そしてんでに武器をもつた五十人のアマハツガー人の一隊が、護衛と荷物の運搬とのためについて来た。五つの駕籠の中で三つは勿論吾々のためのもので、一つはピラリをのせるためであつた。私はピラリがついて来てくれると聞いてほつと安心した。五番目の駕籠はアステーンのだらうと私は思った。

「長老、あの女も吾々と一緒に行くんですか？」と私は其の場の指圖をしてあるピラリにたづねた。彼は肩をそびやかして答へた。

「若しあの女の希望ならね。此の國では、女はすきなことができるのですちや。吾々男は女を崇拜しとる。そして何事も勝手にさせておく。といふのは女がなくちや世の中はたつて行きませんか、女は生命のもとぢやからな。」

「は、あ」と私は、妙な見方があるもんだと思ひながら言つた。

「あんまり男が女を崇拜するもんだで」と彼は言葉をつづけた。「しまひには奴等は箒にも棒にもか、らなくなつて來ますのぢや。大抵二代目毎にさういふ風になりますがな。」

「さうなつたら、どうするんです？」と私は好奇心にかられてたづねた。

「その時には」と彼はかすかに笑ひながら答へた。「男が奮然として起ちあがつて、若い女への見せしめに老年の女を殺してしまひませう。そして、一番強いものは男だつてことを見せてやるんですわい。わしの女房も、かはいさうに、二三年前にそんな風で殺されちまひました。ずる分悲しかつた

が、實をいふと、それからこつち人生は幸福になりましたわい。この年ぢや、女子ども、寄りつきませんからな。」

「要するに」と私は或る政治家の言葉を引用して言つた。「汝は、より大なる自由と、より小なる責任との位置にたてりといふわけですか。」

私は十分要領を言ひあらはすやうに翻譯したつもりだけれども、はじめはこの文句の意味が彼にはよく呑みこめなかつたが、そのうちに意味がわかつたと見えて言つた。

「その通りですわい、狒々さん、やつとわかりました。だが、その責任はみんな殺されちまうんです。だから老年の女は少なくないつてわけなんです。奴等は自分で責任をしよつてゆきますだよ。」それから彼は莊重な口調で言つた。「あの娘についていぢや、どう言つたらよいかわかりませんが、あの娘は勝氣な娘で、おつれの獅子さんに惚れとりますわい。あの兒が獅子さんのあとをおひまはして、あの人の命を救けたことは御存じぢや。それにわし共の習慣によると、あの娘は獅子さんと結婚したんぢやから、あの人のゆくとこへはどこへでも行く権利がありますぢや。」彼はこゝで一段と意味ありげにつけたした。「もし女王様さへいけないと仰言らなければですぞ。女王様の御言葉は誰の権利よりも強いのですからな。」

「で若し女王が彼の女に彼から別れると言はれて、あの娘がそれを肯かなんだら、どうなりますか？」
「若し」と彼は肩をそびやかして言つた。「暴風が樹に狂がれと命令して、樹がそれをきかなんだら、

「どうなりますかな？」

かう言ひながら彼は答へも待たずにくるりと向きをかへて、彼の駕籠の方へ歩いて行つた。それから十分間のうちに吾々はすつかり出發の用意をと、のへた。

盃形の噴火孔を横切るのに一時間以上もかかり、その縁をのぼつて外側へ出るのにまた半時間かかった。そこは素晴らしい景色であつた。吾々の前には、ゆるやかな勾配になつた草原が横はつてをり、草原のあちこちには大部分荆棘類の樹が、群生してゐた。このおだやかな勾配の底にあたる、九哩か十哩ほどさきに、吾々は、朦朧たる沼の海を認めた。沼の上空には、ちやうど都會の上空に煤煙がかゝつてあるやうに、どす黒い水蒸氣がかゝつてゐた。この勾配を降りてゆくのは駕籠かきどもにとつて雑作はなかつたので、正午までに吾々は陰氣な沼の縁まで來た。そこで吾々は駕籠を停めて晝食をした、め、それからうねくした小徑をつたつて沼地の中へはひつて行つた。吾々のやうに馴れない者には、すぐに道は殆んどわからなくなつてしまつた。今でも私は駕籠かきどもが、どうしてあんな道を迷はずに歩けたかを不思議に思つてゐる。行列の先頭には二人の男が長い竿をもつて進んで行き、時々それを前の地面へさしこんでゐた。それは、どういふわけか土壌の性質がよく變つて、一箇月前には安全だつた處でもその次には旅人の身體を呑んでしまふやうなことが屢々あつたからである。こんな退屈な陰氣な景色は私はつひぞ見たことがない。何處まで行つても果しのない沼地であつた。この沼地の中に生きてゐるものといつては水禽類と、それを食つてゐる獸とで、ところづくに

ある水溜りには、小さい鰐の一種や、黒い色をしたいやな水蛇や大きな蛙などがうぢやうぢやしてゐた。蚊ときては、若しさういふことがあり得るとすれば、前に苦しめられた河よりもひどかつた。しかしなによりも一番たまらなかつたのは、あたりに立ちこめてゐる、腐つた植物のひどい惡臭であつた。

ずん／＼その中を進んで行くと、たうとう日は沈んだ。その時ちやうど吾々は、廣さ二エーカーばかりの、高い地面に着いたのであつた。そこは、沼地の中の乾いたオアシスで、ビラリは、そこで夜營をするのだと言つた。しかし、夜營といつても極く簡單なもので、ひからびた草や、吾々がもつて來た少しばかりの薪でこしらへた小さい焚火をかこんで車座に坐ればよかつたのである。そこで吾々は食事をしたり煙草をふかしたりした。この低地の暑さは非常なものであつたが、不思議なことに、時々冷くなることもあつた。けれどもどんなに暑くても吾々は火のそばがなつかしかつた。といふのは蚊は煙がきらひだからである。やがて吾々は毛布にくるまつて眠らうとしたが、ほかのことはまあ我慢するとして、蛙の啼聲と、空に何百となく群がって飛んでゐる鳴の聲とのために、とても私は眠つたかになかつた。私は、横を向いて隣にゐるレオを見ると、彼はうと／＼まどろんではゐたが、彼の顔はいやに赤みを帯びてゐた。そして、ちら／＼する焚火の明りで見ると、向う側にあるアステーンが時々眩をついて顔を上げて、ひどく心配さうに彼の寝顔を見てゐた。

それでも私にはどうすることも出来なかつた。吾々のもつてゐた唯一の豫防薬のキニーネはもう澤

山服んでゐたのである。そこで私はごろりと横になつて幾千となく現はれて来る星を見まもつてゐた。そのうちに、巨大な空の穹窿はきら／＼光る點で一ぱいになつてしまつた。その點はみんな一つの世界なのだ。このすばらしい光景を見ると、人間といふものの弱少さがつく／＼と感ぜられる。まもなく私はそんなことを考へるのをやめた。無限を擲まうとしたり、世界から世界へと大股に歩いてゆく全能の神の歩みのあとをつけようとしたり、神の仕事から神の目的を察知しようとしたりすると心はすぐに疲れて来るものだ。こんなことは吾々の知るべきことぢやない。知識は強者のものだ。然るに吾々は弱者なのだ。あまり物を知りすぎると、吾々の不完全な視力は却つて盲目になり、あまり力をもちすぎると吾々の理性は壓倒されてしまふ。眞理にはヴェールがかゝつてゐるのだ。吾々は太陽を見つめることができないと同じやうに、眞理の光輝を見ることはできないのだ。眞理は吾々を打ちくだいてしまふ。十分な知識は到底地上の人間には得られるものでない。吾々は吾々の能力を買ひかぶり勝ちなものだが、それはとるに足らぬものなのだ。小さな容れ物はすぐに一杯になつてしまふ。あの天體を回轉させる力、それを司る睿智の千分の一でも詰りこまうものなら、吾々は粉微塵に粉碎されてしまふだらう。外の世界では、又他の時代にはさうでないかも知れないが、そんなことは誰にもわかりはしないのだ。この世界では、人間の運命は、たゞ勞苦に耐へる事だ。運命に吹きまゝくられてゐる泡沫のやうな快樂を捉へようとして、吾々はあくせくしてゐるが、その泡沫がこはれてしまはないうちに一瞬間でも手の中にくつてゐれば、まだよい方である。

仰向きに寝てゐる空には、永遠の星が輝いてゐる。下には、沼から生れた小さな惡魔のやうな火の玉が、あちこちに亂れ飛んでゐる。私はこの二つに人間のすがたが見られるやうな氣がした。

その晩はどうしたのか、かうした考へが私の頭の中で次から次へと起つて來た。かうした考へは吾々を苦しめるばかりだ。何故なら考へるといふことは、思考の無力を示すだけの役にしかたないからである。吾々は一體何のために黙々たる空間に叫びかけるのだらう？ 吾々の曇つた理知で、星のちらばつた大空の祕密を讀むことができるだらうか？ 空から何か解決がやつて來るだらうか？ 決して何も來はしない。來るものは反響ととりとめのない幻影とだけだ！ しかも吾々は墓場の彼方に解決があつて、信仰がそれを與へてくれるのだと信じてゐる。信仰がなければ、吾々は精神的に死んでしまはねばならん。信仰の助けによつて、吾々はなほ天國に攀ちのぼることができるといふのだ。私は疲れてゐるが、眠つかれないので、たうとう、吾々のいまやつてゐることを考へはじめた。何といふ亂暴な冒険だらう。しかもそれでゐて、幾世紀も前に壺の破片に記された文句と何と不思議に符合してゐることだらう。滅びた文明の廢墟の中に、不思議な人民を支配してゐる女王とは一體どのやうな女だらう？ 無限の生命を與へるといふ火の柱の意味は何だらう？ 肉體を何年も何年もの間腐らずに保存する藥液があり得るものだらうか？ それはあり得るではあらうが、實際にはありさうに思はれぬ。氣の毒なヴィンシイが言つたやうに生命といふものが生じて、一時繼續するのが不思議でないなら、生命がいつまでもつゞくことは猶更ら不思議ではないかも知れん。若しそれがほんたう

だとしたならどうなるだらう？ その方法を見出した者はきつと世界の支配者になるに相違ない。その人は世界中の富と智慧と力とを蓄積するに相違ない。普通の人間の一生づつを費して、色々な藝術や科学ををさめることもできる。若しさうであるとしたならば、そして、私は一時もそんなことは信じなかつたが、その女王が實際に不死であるならば、わざ／＼食人種の中に交つて、洞窟の中に住つてるといふのは一體どういふわけだらう？ この一點で疑問は氷解する。あの話は誑つばちなのだ。あれを書いた時代には人々が迷信を信じてゐたから、あんな話を信じたのだ。それは兎に角、私は無限の生命などはほしいとは思はぬ。私はもう四十年の間にあまりに多くの悲しみや苦しみを味ひ過ぎたから、この上そんな状態が無限に續いたりしてはやりきれない。とは言つても、他の人と比較して見ると、私の生涯は幸福の部なのだが。

しかし現在のところでは、吾々の生命は無限に續きさうであるよりも、非常に短く切りつめられてしまひさうであることを思ひめぐらしながら、私はどうにか眠りに就いた。私が眠つたので、きつと讀者は大助かりであらうと思ふ。

私が眼をさました時はちやうど夜明けであつた。護衛の者どもや駕籠かきどもは、濃い朝霧の中に、幽霊のやうに動きまはつて出發の用意をしてゐた。焚火はもうすっかり消えてゐたので、私は寒さにかたく／＼慄へながら立ち上つてのびをした。それからレオを見ると、彼は床の上に坐つて兩手で頭を抱へてゐた。彼の顔は眞赤になり、眼はきら／＼光つてゐたが、それでゐて瞳のまはりには黄色く

なつてゐた。

「どうだい気分は、レオ？」と私は言つた。

「今にも死にさうな気がしますよ」と彼は皺喰れ聲で答へた。「頭は割れさうだし、身體ぢうが胴慄ひして、むか／＼するんです。」

レオはひどい熱病にとつつかれたのだ。私はジョップのところへキニーネをとりにつくと、幸ひにキニーネはまだたつぷりあつたが、ジョップもどうも背中の方がち／＼痛んで、眩暈がしさうでしやうがないと言つてこぼしてゐた。外にどうもしやうがないので、私は二人にそれ／＼十ダレンブ、キニーネを服ませ、私も用心のために少しばかり服んだ。それがすむと、私はピラリに會つて彼に事情を話して、どうしたらよからうかとたづねた。彼は私と一緒にやつて来て、レオとジョップとを見た。序に言つておくが、彼はジョップのことを肥つてゐて顔が丸くて、眼が小さいので、豚と呼んでゐた。

「やれやれ」と彼は相手に聲の聞えないところまで来ると言つた。「熱病だ！ わしもさうだと思つた。獅子の方は大分悪いが、まだ若いから命は助かるだらう。豚のはうはたいしたことではない。この方は軽い熱病できつとはじめには背中痛むやつだ。まああれだけ肥つとりや、少々痩せてもいゝだらう。」

「二人は旅をつゞけられますか、長老？」と私はたづねた。

「そりや勿論つゞけてゆかにやならん。こゝでとまつた日にや死ぬにきまつてますからな。それに、地べたより駕籠の方がいゝですわい。途中に差支へさへなけりや、今晚までには沼地をとほり抜けてよい空気のところへ行けますちや。さあ、あの二人を駕籠へのせて出かけよう。朝霧の中に立つてるのはひどく身體に毒だから、今事は歩きながらすることにしよう。」

吾々はそのとほりにした。そして重い心で、また不思議な旅に旅立つた。はじめの三時間程は無事に過ぎたが、そのあとで、もう少して一番先頭につて行つたピラリの命を失うやうな事件が起つた。吾々はその時、沼地の特に危険な場所を通つてゐたので、駕籠かきは時々膝まで泥の中へ沈むことがあつた。どうしてこんな道を重い駕籠をかついで行けるのか私にはわからなかつた。

やがて、吾々が、えつさく〜と進んでゐると、鋭い金切聲がきこえ、つゞいてわつといふわめき聲と、ひどい水のはねる音とがきこえて、行列はびつたりとまつてしまつた。

私は駕籠からとび出して前の方へ走つていつた。二十碼ほどさきに、一つの水溜りがあつて、吾々の行列はその水溜りの峻しい岸を通つてゐたのであつた。この水溜りを見ると、恐ろしいことにはその水面にピラリの駕籠が浮いてゐて、當のピラリの姿はどこにも見えなかつた。はつきり言つてしまへば、ピラリの駕籠かきの一人が運悪くも、日向ぼつこをしてゐた蛇を踏んだので、蛇に踵を噛まれて、無理もないことだが、瘡いでゐる棒を離してしまつたのである。そして彼は峻しい岸の上でよろしたので駕籠にしがみついたところが、駕籠が傾いたので残りの駕籠かきが手を離した拍子にピ

ラリと例の駕籠かきとは諸共に、水溜りの中へころがり落ちてしまつたのである。私が水の縁まで行つた時には、二人とも姿は見えななんだ。實際、その駕籠かきは、かはいさうに、それつきりたうと、水溜りの中へ沈んでしまつたのである。泥に吞まれてしまつたものか、或は多分蛇に噛まれて瘡を起したものであらう。とにかくこの男は消えて失くなつてしまつたのである。ピラリの姿も見えなかつたが、彼が下でどの邊で藻掻いてゐるかといふことは水の上に浮いてゐる駕籠がたゞ動いてゐるのでよくわかつた。

「あ、あそこにある、長老様はあそこにある」と一人の男が言つたが、その男は彼を助けに行かうとするでもなく、他の者も誰一人助けに行かうとはしないで、たゞ立つて水のうへを眺めてゐるだけだつた。

「そこを退け畜生！」と私は英語でどなつて、帽子を抜きすてて、かけつけて、ざんぶと泥池の中へ跳びこんだ。二泳ぎばかりで、私はピラリが着物の下にこんぐらがつて藻掻いてゐるところまで泳ぎついた。

どうしてしたか私自身にもわからぬが、私は兎も角、着物を引きちぎつて、ピラリの身を自由にした。彼の頭は、まるで、蔦の葉をつけた黄色いバツカス神の頭のやうに、緑色の泥をかぶつて水面へばかりと浮んだ。それから先は樂であつた。ピラリは仲々氣のきいた老人だったので、溺死者がよくやるやうに、私にしがみつくやうなことをせぬだけの常識をもつてゐた。そこで、私は彼の腕をつか

んで、岸の方へひいてゆき、やつとのことで泥の中から上つて来た。こんなひどい目にあつて、泥だらけになつてゐながら、美しい長髯から滴をたらしてたつてゐたビラリの姿に、まだ押しも押されぬ氣品があつたのは驚くべきことであつた。

「この犬奴等！」と彼は、やつと物が言へるやうになると駕籠かきどもに向つて言つた。「貴様等は、このわしが、長老のわしが濡れかゝつてゐるのを平氣で見てもくさつたな。この人がゐなきやわしはきつと濡れ死んでゐたんだ。このことはよくおぼえとくぞ。」かう言ひながら彼は、ぎら／＼光る濡れた眼でちつと一同を見据ゑた。その様子を駕籠かきどもは氣味悪く思つたらしかつたが、むつつりして、平氣を装うてゐた。

「あんたは」と老人は私の方へ向きなほつて私の手を握りしめながら言葉を吐いた。「安心さつしやい、良いにつけ悪いにつけわしはあんたの味方ぢや。あんたはわしの命を助けて下さつたが、ことによると、今度はわしがあんたの命を助けるやうなこともあらうて。」

そのあとで、吾々ができるだけ綺麗に身體を拭いて、駕籠をひき上げて、濡れ死んだ一人だけをあとにのこして旅をつづけた。私はこの溺死した男が、偶然評判のよくない男だつた、めか、それともこの國の人間の生れつきの冷淡と利己主義のためかは知らぬが、突然一人の仲間を失つたことに對して、誰一人悲しんでゐるものはなかつた。悲しんでゐたのは彼のかはりに駕籠をかつぐ番になつた者だけであつた。

第十一章 コオルの平原

日没までにかれこれ一時間もある頃に、吾々は、沼地からやつと抜け出して、逆捲く波のやうに次々に高まつてゐる土地へ着いたので、限りなく有り難かつた。ちやうど最初の波の峰の手に吾々はその夜を明かすことにした。私は何をおいてもレオの容態をしらべてみた。彼の容態は、朝よりもつといけない位であつた。そして新たな危険の徴候がおこつて、明けがたまで、それがつゞいた。私は一睡もしないで、アステーンの手傳をした。この女は、私がこれまでに見た中で、最も親切な最も倦むことを知らぬ看護婦で、一生懸命にレオとジョップとの看護をしてゐた。こゝは、空氣も暖く、きれいで、蚊もあまり多くはなかつたので、比較的凌ぎよかつた。

翌朝の明け方になると、レオはすつかり頭が變になつて、身體が半分に分かれたなんて囁語を言つた。私はしまひにはどうなることかと思つてはらく／＼した。この種の熱病にかゝると大抵助からんといふことを私は何遍もきいてゐたのだ。私が心配してゐるところへちやうどビラリがやつて来て、早速出かけにやならぬ、特に、レオは十二時間以内にもつと靜かに落ちつける處まで行つて、まともな看護を受けなくちや一兩日中に死ぬにきまつてゐると言つた。私は彼の言葉に従ふより外はなかつたので、レオを駕籠にのせて出發した。アステーンは彼のそばを徒歩で行つて、蠅を追つてやつたり、駕籠から落ちないやうに見張つてやつたりしてゐた。

日の出から半時間のうちに、吾々は、先刻言つた高臺の頂についた。素晴らしい景色が吾々の前にひらけて来た。眼下には青々とした草原が横つてをり、ところどころ青葉が繁り、花が咲いてゐた。その背後の遙か彼方には、大きな、不思議な山が平原の中にひよつこり聳え立つてゐた。吾々の立つてゐるところからそこまでは、かれこれ十八哩もあるだらうと私は思った。山の麓は草原の傾斜地のやうに見えたが、だんくのぼつてゆくと、さうだ、あとで観察したところによると、平原の地平面から約五百呎ものぼつてゆくと、とてつもない大きな、壁のやうに眞つ直ぐな岩の断崖があつた。それは高さが千二百呎乃至千五百呎はたつぶりあつた。この山は疑ひもなくともは火山だつたらしい。その形は圓いやうであつたが、圓の一部分しか見えないのだから、その大きさは正確なところはわからなかつたが、何しろ随分大きな山であつた。あとになつてから私はこの山の底面積は五十平方哩以下ではあり得ないことを發見した。

私は吊網の上に坐つて、平原の彼方に見えるこの莊嚴な光景を眺めてゐた。するとピラリがそれに気が附いたと見えて、彼の駕籠を私の駕籠のそばへ並べさせた。

「あれが全能の女王の御殿ですぢや。」と彼は言つた。「これ程立派な宮殿をもつてをられた女王がありませんか？」

「まったく驚きましたね」と私は答へた。「だがどうしてあの中へはひるんです？ あの崖はとてものぼれさうにないぢやありませんか？」

「下を見なさい、狒々さん。ほら道があるだらう。あれは何だと思ひなさるかな。あんたは物識りのやうぢやが、さあ言つて御覽。」

見ると、山の麓まで一直線に、道路のやうな線がついてゐた。だがその上には芝が一杯生えてゐた。そして、その兩側には高い堤防が築いてあつて、それはところどころ切れてゐたが、大體に於ては續いてゐた。私には何のためかわからなかつた。道路に堤防をこしらへるのをかした話である。

「さうですね。」と私は答へた。「あれは道路でせう。でなければ、河床かそれとも」と言ひながら、それが非常に眞つ直に切り開いてあることに氣づいて、私は附け足した。「運河かと言ひたいところですが。」

前日の災難にもかゝらず、すつかり元氣になつてゐたピラリは、大きくうなづきながら答へた。「その通りぢや。あれは前にこの土地に住んでゐた人が、水を流し出すために切り開いた水路ですぢや。わし共がこれから行く山の岩で圍まれた窪地は昔は大きな湖ぢやつたのだが、わし共の先祖が、どうしてやつたのか、あの山の堅い岩を湖床まで切り抜いて水のはけ口をつくつたのですわい。で愈水があつた湖から流れて来て、この平地を通つて、あの高地の向うにある低地まで流れてゆきましたぢや、わしどもの通つて来た沼地は多分そんな風にしてできたものぢやらうて。で、湖がすつかり干上つてしまつたものだからわしどもの先祖は、その湖床に、立派な都市をこしらへたのぢやが、今では、その廢墟と、コオルといふ名前とだけしか遺つてをらんわけで、その後年々、そこに洞窟や

通路が切りひらかれたのぢやが、それは今に見ることができませんわい。」

「さうかも知れんが」と私は答へた。「若しさうだとすると、湖水が雨水や、泉の水でまた一杯にならないのはどうして？」

「それはな、わしどもの先祖は賢い人ぢやつたので、矢つ張り水のはけ口はのこしといたんぢや。ほら、右手の方に河が見えるだらう？」と言ひながら、彼は吾々のあるところから四哩程はなれた平原をうね／＼流れてゐるかなり大きな河を指さした。「あれが下水ぢや、あれはこの道と同じ山腹から出てゐますのぢや。はじめにはこの水路から水は流れて出たのぢやらうが、わしどもの先祖が水を迂廻さして、この方は道路につかふやうにしましたのぢや。」

「ではその下水の外にはあの山へはひる道はないんですか？」と私は答へた。

「一とこあるにはあつて、牛や徒歩の人が非常に骨を折つて中へは入れるけれどそれは秘密ぢや。あんたが一月探したつて見つかりつこはない。それは一年に一度、山腹や平地で草を食つて肥つた牛をあの中へ入れるときにつかふだけですわい。」

「女王はいつもあそこに住んでをられるのですか、それとも時々山の外へ出て來られるんですか？」と私はたづねた。

「女王は何處へでもいらつしやるぢや。」

そのうちに吾々は大平原に着いた。そこには、半熱帯性の花が咲き、樹が生えてゐた。樹は大抵一本

づゝ生えてをり、せい／＼三四本かたまつてゐる位で森になつてはゐなかつた。犀や、野牛や、羚羊や、その他澤山の獸や鸵鳥などが、樹蔭や草原の上などをぞろ／＼歩いてゐるので私はもう我慢がでなくなつた。私は「エクスブレス」ぢや面倒なので短銃身のマルチニ型獵銃を駕籠の中へ入れてもつて來たのだが、それをとり出し、一本の檜の樹の下に身體をこすりつけてゐる大羚羊を見つけて、雀躍して、できるだけそばまで近づいて行つた。彼は私が八十碼の處へ近寄つてゆくまで知らずにゐたが、やがて、くるりとこちらを向いて、私をにらみつけながら逃げ出す準備をした。私は銃を上げて、横向きになつてゐる大羚羊の肩の下をめぐりつけて引き金をひいた。私は私の乏しい經驗を通じて、こんなに見事に獲物を斃したことはない。彼は一飛び宙に跳び上つて、ぱつたり倒れてしまつたのであつた。駕籠かきどもは何事が起つたかと思つて立ち停つて、ひそ／＼驚歎の囁きをかはした。どんなことにも吃驚しない、むつ／＼としたこの連中にとつては異例のことであつた。その間に護衛の連中は獲物のそばへかけつけた。私は獲物を見にゆきたいのは山々だつたが、それをぢつと抑へて、まるで一生羚羊撃ちをして來た人間のやうに、ぶら／＼自分の駕籠の方へひきかへして來た。そして、鐵砲を射つことを不思議な魔法と心得てゐたアマハツガー人は、これで私に對する尊敬を大分増した／＼と内心に北叟笑んでゐた。

ピラリは感歎して叫んだ。「まつたく不思議ぢや、わしはこの眼で見なきやあんたの話を感じないところだつた。あんたはわしに、さういふ殺しかたを教へてくれるつて言ひましたな。」

「教へますとも長老」と私は軽く言つた。「こんなことはわけはありません。」

とは言ひながら、私は、ビラリが愈々鐵砲を射つときにはきつと腹這ひになるか、どつかへ身をかくしてあようと堅く決心してゐた。

それからは何事もなかつたが、日没から約一時間半前に、吾々は、前に言つた、舊火山の下まで来た。辛抱強い駕籠かきどもが、昔の運河の河床に沿うて、えつちら、おつちら、駕籠をかついで、たうとう、雲表にそびえたつ褐色の絶壁のそばまで来たとき、その莊嚴な眺めは、何とも口で言ひ表はすことはできなかつた。私はその閑寂と、その壯大とに壓倒された。上へのぼつてゆくにつれて、だんだんと上から蔭が這ひ寄つて来て、そのうちに、たうとう吾々は天然石を切り抜いた切り通しの中へはひつて行つた。火薬もダイナマイトもなしに、どうしてこんな大工事ができたものか私にはわからない。この工事や、岩の中に洞窟を切り開く工事は、いづれもコオルの人民の國家事業で、埃及のピラミッドと同じやうに何萬人の奴隸を使役して、何百年もかゝつてこしらへられたものであらう。たうとう吾々は絶壁の正面についた。そして現代の技師たちが鐵道を敷設するときにこしらへる隧道を思はせるやうな暗い隧道の入口をのぞきこんだ。この隧道からは多量の水が流れ出してゐた。實を言へば天然石の切り開き工事がはじまつてゐる地點から吾々はこの水流に沿うて上つて来たのだ。この水流はやがて下へ流れて、前に言つた平野の中をうね／＼と流れてゐる河になつてゐるのだが、上流の方では、切り通しの半分は水路となり、それより八呎ばかり高くなつた他の半分は道路に用

ゐられてゐたのである。吾々の一隊は隧道の入口でとまつた。そして、或る者が、もつて来た土器のランプに火を點してゐる間に、ビラリは駕籠から降りて来て、吾々に向つて、女王の命令でこれから、山の中の秘密の道を知られては困るから眼かくしをしてもらはねばならぬと、親切に、しかし、きつぱりとした口調で言つた。私は喜んでこれに同意したが、旅の疲れにも拘らずもう餘程よくなつてゐたジョツプは、燃垂で殺される準備とでも思つたのか、眼かくしをするのを嫌がった。しかし私がここには壺もないし、焚火もない様子だから大丈夫だと言つたので彼はいくらか安心した。氣の毒なレオは、何時間も轉輾反側して苦しんでゐた擧句、有り難いことには、ぐつすり寢こんでしまつたので眼かくしをする必要はなかつた。尤も眠つてゐたといふより昏睡してゐたといつた方がよいかも知れぬ。私にはどちらだか、わからなかつた。この眼かくしといふのは、アマハツガー人が着物をこしらへる黄色い麻布の切れつばしで、眼のまはりをしつかりとく／＼つて、うしろでかたく結ぶことであつた。この麻布は、その後私の發見したところによると墓場から掘り出したもので、私の想像したやうに土民のこしらへたものではなかつた。

序に言つておくが、アステーンも眼かくしをされた。これは、彼女が吾々に秘密を聞かすかもしれんといふ用意のためだつたのであらう。

それがすむと、吾々はまた歩き出した。やがて、私は、駕籠かきどもの聲音の反響と、狭い空間に響き渡る爲に水の音が大きくなつたのと、山の中へはひつてゐることを知つた。岩の死んだ心臓の

中を何處へとも知れずつれてゆかれるのはあまり氣持のよいものではないが、私はもうかうした経験には馴れつこになつて終つて、どんなことにも驚かぬやうになつてしまつてゐたのである。そこで、私はちつと横になつて、駕籠かきの聲や水音をきながら、愉快な旅路だと信じようとつとめた。しばらくすると駕籠かきどもは陰鬱な小歌を歌ひはじめた。それは吾々がポートの中で俘虜にされたときにきいたのと同じ歌だ。そのうちに沈滞した空氣はだん／＼重苦しくなつて息が詰りさうになつて來た。そして遂に駕籠が幾度も角を曲つて、水の音はもう聞こえなくなつてしまつた。すると空氣はまたいくらかさわやかになつて來たが、曲り角はそれから幾つも幾つもつゞいて、眼がくしされてある私は、全く見當も何もつかなくなつてしまつた。私はいつかこの道を通つて逃げなければならぬやうなことがあるかも知れんと思つたので、頭の中で、通路の地圖を描いておかうと思つたが、それは到底だめであつた。それからまた半時間もたつと、私は外氣の中へ出たことに氣がついた。眼かくしをとほしてぼんやり光りが感じられたし、顔に新鮮な空氣があたるのをおぼえた。それから數分間の後、駕籠は停つた。そしてピラリがアステーンに向つて眼かくしをとるやうに命じ、吾々の眼かくしもとつてくれるやうに命じた。私は彼女の注意もまたずに、自分の眼かくしをほどいてあたりを見廻した。

案の定吾々は絶壁を通り抜けて、その反對側の、突き出た岩の眞つ下にゐたのであつた。一番はじめに私が氣のついたことは、こゝから見ると絶壁はそんなに高くはないといふことであつた。實際、五百呎などはなかつた。このことは、この湖床、或は太古の噴火孔の床は、外側をとりまいてゐる平原の地面よりもずつと高いといふことを證明してゐた。吾々の立つてゐるところは、岩にかこまれた大きな盃形の盆地で、前に吾々がゐたところとそつくりであつた。たゞ大きさはその十倍もあつて反對側の絶壁の輪郭がやつと見わけがつく位であつた。かやうに自然の障壁で圍まれた平野の大部分は耕されて、石の壁で墻がしてあつた。それはこの平野に澤山すんでゐる牛や山羊が畑の中へはひつて來ないやうにするためであつた。

この平野のあちこちには草の生えた丘がもち上がつてゐて數哩彼方の中心に近いところに非常に大きな廢墟が見えるやうに私は思つた。だがその時には私はそれ以上のものは何も見てゐるひまなどはなかつた。といふのは、すぐに吾々は、吾々のこれまでによく知つてゐるアマハッガー人に寸分違はぬアマハッガー人にとりかこまれたからである。彼等はあまり物は言はなかつたけれども、すぐ吾々のそばまでうよくたかつて來た。その時、多くの武器をもつた人々が隊をつくつて現はれ、象牙の杖をもつた士官に指揮されて吾々の方へ駆足で進んで來た。彼等は、まるで蟻が巢の中から出るやうに、斷崖のおもてからとび出して來たのであつた。士官も兵卒も、豹の革のほかにみんな上衣を着てゐた。てつきりこれは女王の護衛兵だと私は思つた。

そのうちに隊長がピラリの前へ進み出て、象牙の杖を額に横たへて敬禮し、何かたづねてゐたが、私にはその意味は全くわからなかつた。ピラリが簡單に答へると、軍隊は廻れ右をして崖の縁に沿う

て行進をはじめた。吾々の駕籠の行列はそのあとについて行つた。かうして半哩も歩いた頃、吾々
はもう一度停つた。そこは高さ六十呎、幅八十呎もある途方もない大きな洞窟の入口であつた。
こゝでピラリは駕籠から下り、ジョツプと私とにあとからついて来るやうに言つた。勿論レオはまだ
身體がひどく悪かつたので、そんなことをするどころでなかつた。私はピラリの言葉に従つて大きな洞
窟の中へはひつた。かなり奥の方まで夕日がさしこんでゐたが、日の光りがとゞかないところはラン
プでかすかに照されてゐた。このランプの行列は、まるで人通りのない倫敦の町の瓦斯燈のやうに、
果しない遠くまで延びてゐるやうに思はれた。

私が第一に氣のついたことは、洞窟の壁には一ぱいに浮彫の彫刻があつたことであつた。それ
は大部分前に言つた酒壺にかいてある繪のやうなものであつた。繪と繪との間には文字が書いてあつ
たが、私にはそれはどこの文字かまるでわからなかつた。兎に角それは希臘文字でも、埃及文字でも
ヘブライ文字でも、アッシリア文字でもなかつたことはたしかである。それは私の知つてゐるどこの
國の文字よりも支那の字によく似てゐた。入口の方は繪も字も擦れてよくわからなかつたが、奥の方
へはひるにつれて、まるで彫刻師があつた今鑿をやめたかのやうに新しく完全であつた。

護衛兵の一隊は洞窟の入口でとまつて、吾々を中へ案内した。しかし中へはひつてゆくと白衣を着
けた一人の男が、無言のまゝ、うやうやしく吾々に敬禮した。が、あとからきくと、それは啞だつたの
である。

入口から二十呎ばかりのところ、洞窟と直角に兩側の岩をくり抜いて、小さい洞窟、或は廣い
廊下のやうなものがこしらへてあつた。そして、この廊下の入口の正面から向つて左側に二人の番兵
がたつてゐたが、それで見ると、これは女王の居間へ通ずる廊下の入口であらうと私は思つた。右側
の廊下には番兵はゐないで、例の啞者が、吾々に中へはひれと手眞似で示した。ランプの點いたこの
を道數碼進んでゆくと、一つの室の入口へ來た。そこにはザンジバルの敷物に似た草でこしらへた
カーテンがかゝつてををつた。啞者は又丁寧にお叩頭をして、固い岩をくり抜いてつくつた相當に廣い
室へ案内した。しかし、有り難いことには、この室は、斷崖の表面まで堅穴が掘り抜いて、そこから
明りを探るやうになつてゐた。この室には一つの石の寢臺と、洗面用の水を入れた壺と、毛布の代用
にするための美しく鞣した豹の皮とが備へつけてあつた。

レオはまだぐつすり眠つてゐたので吾々はこの室に彼を残しておいた。アステーンもレオと一緒に
残つた。例の啞者はアステーンに鋭い一瞥を與へて「お前は誰だ。誰の命令で此處へ來たんだ？」と
とがめるやうな様子をしてゐた。それから彼はジョツプとピラリと私とに、次々に、同じやうな室へ
案内してくれた。

第十二章 女王

レオの病氣を見舞つたあとで、ジョツプと私とが何はおいても先づ第一に身體を洗つて綺麗な着物

と着替へた。吾々の着てゐた着物は、アラビヤ船が沈没した時からまだ一度も着替へないのであつた。前にも言つたことだが、吾々は運よくも、荷物の大部分はボートへ移してゐたので、それを駕籠かきどもがもつて来てくれてゐたのである。吾々の着物は、大抵、よく縮んだ、丈夫なフランネルでこしらへたものであつたが、かういふ土地を旅行するには、これに限ると私は思つた。

この時身體を洗つて、髪にブラシをかけて、清潔なフランネルに着替へたときの氣持のよさはいつまでも忘れられぬ。たゞ一つ物足りなかつたのは石鹼のないことであつた。

あとでできたところによると、アマハツガー人は石鹼の代りに焼土をつかふといふことであつた。これは馴れないうちは氣持がわるいけれども、石鹼の代用として中々隅におけないものだといふことである。

私は着物を着替へ、ピラリに佛々と呼ばれたのも無理のない黒い鬚に刷子をかけてこきれいにすると、ひどく空腹を感じて来た。だから、別の啞者——今度の啞者は若い娘であつた——が何とも合圖をせずに、だしぬけにカーテンを開けて、紛れつこない手眞似——といふのは口をあけて奥の方を指さすのであつた——で食事の用意ができたことを知らせに来てくれたとき、私は少しも失敬だとは思はなんだ。私は彼女のあとについて、吾々のまだはひつたことのない、隣の室へはひつた。そこにはもうジョップが来てゐた。彼も美しい娘に案内されて来たので困つてゐた。彼は、例の「焼け壺」の女が彼のそばへ進んで来たときのことをいつまでも忘れぬで、そばへ寄つて来る娘つ子はみんな同

じやうな目的でやつてくるのぢやないかと疑つてゐたのだ。

「この若い娘どもの人を見る眼つきは、どうも作法になつてゐるとは言へませんね」と彼は辯解がましく言ひ言ひした。

この室の大きさは寢室の二倍もあつて、もとは食堂としてつかはれたものらしくもあつたが、又僧侶が死人に防腐用の香料を塗るためにつかはれたものらしくもあつた。といふのは、これ等の洞窟は、大きな地下墓所のやうな形をしてゐて、その兩側には、天然岩をそのまゝ、切つてこしらへた縦横三呎高さ六呎ばかりのテーブルがあつて、そのテーブルの上は人間が坐つたときに膝がはひるやうにくり抜いてあつた。それから、よく験べて見ると、はひつて左手にある一つのテーブルははじめ食卓に使はれたのだと思つたが、それは思ひちがひで、これは屍體に香料を塗るために用ゐられたものであることが明瞭になつた。といふのはその上に子供から大人に至るまでの様々な大きさの人間に丁度びつたりあふやうに五つの人間の型が淺くくり抜いてあり、時々液を流し出すために、下へ穴が掘り抜いてあつたからである。それでもまだ疑はしいと思へば、その室の周囲の壁を見ると、そこには、古代の、王が長者からしい白髯の老人の、臨終から、香油を塗つて、葬るまでの畫面が彫刻であらしてあるのが見られた。

私はこの浮彫の彫刻を大急ぎで一とほり見てまはつてから、山羊の焼肉と、新鮮な牛乳と、玉蜀黍でこしらへた菓子とからなる素敵な食事の椅子にすわつた。これ等の食物はみなきれいな木の皿に入

れてあつた。

食事がすむと吾々はレオの様子を見に引き返して来た。といふのは、レオは當分女王に謁見してその命令をきかなくてもよいといふことだつたからだ。レオの室へはひつて見ると、彼はまだひどく悪かつた。もうすつかり昏睡から醒めて、頭の調子が全く變になり、ともすれば亂暴をはじめようとし、しよつちゆうカム河のボート・レースのことなどを口走つてゐた。實際吾々がはひつて行つた時にはアステーンが、彼をちつと抱いて抑へつけてゐた位であつた。私が彼に話しかけると、私の聲をきいて落ちついたと見えて、彼は大分おとなしくなつたので、やつとすかして、キニーネを服ませた。私は彼のそばにこれ一時間も坐つてゐた。少くも私は、大分暗くなつて来て、吾々が袋を毛布で包んで即席にこしらへた枕の上のつてゐる彼の黄金色の頭がやつと見える位であつたことをおぼえてゐる。その時、突然、ビラリが非常に物々しい様子ではひつて来て、女王が私に會ひたいといふ旨を知らせた。こんなことは滅多にない優遇だと彼はつけ足して言つた。ビラリは私がそれをあまり有り難がらんで少しびく／＼してゐたやうであつた。併し、實のところ、私は、どれ程、權力をもつた、不思議な女王かは知らんが、色の淺黒い、野蠻人の女王と會見するのだと思ふと大した有り難味は感じられなかつた。まして私の心は、可愛いレオのことで一ぱいで、彼の命が助かるかどうか心配になり出した矢さきであつたのだ。それでも、私は起ち上つて彼のあとについて行つた。すると床の上に何か光つたものが落ちてゐたので私はそれを拾ひあげた。讀者諸君は、おぼえてゐるだらう

が、例の箱の中に、壺の破片と一緒に、鶯鳥と「日輪の御子」といふ意味の妙な象形文字の記した甲蟲形の寶石とがはひつてゐたのである。この寶石は非常に小さいもので、レオはこれを、普通に印の代りにつかふ大きな金の指環にはめさせてゐた。私がこの時拾ひ上げたのは、その指環であつたのだ。彼は、熱の發作が起つたときに、思はずそれを抜いて床の上へ投げすてたものだらうと思つた。うつちやつておけばなくなるかも知れないと思つたので、私はそれを自分の小指にさしてジヨップとアステーンとレオとをあとにのこしてビラリのあとについて行つた。

吾々は通路を出て、廊下のやうな大きな洞窟を横ぎつて、向う側の通路へ行つた。入口には二人の番兵が塑像のやうに立つてゐた。吾々の姿を見ると、彼等は頭を低げて敬禮し、それから、槍をもち上げて、前に士官が象牙の杖でしたやうに、それを彼等の額に横たへた。吾々は二人の間をとほつて中へはひつた。廊下は吾々の室へ行く廊下と同じであつたが、この方はランプの光りがずつと明るかつた。五六歩降りてゆくと、吾々は四人の啞者に會つた。二人は男で二人は女である。彼等は丁寧に、お叩頭をしてから、女は先にたち、男はあとからついて来た。それから、吾々の室にかゝつてゐたのと同じやうなカーテンのかゝつてゐる幾つかの入口の前を通りすぎて進んで行つた。これ等の入口はあとでわかつたところによると、女王のつきそひの啞者たちの室だつたのである。それから又數歩進んでゆくと、今度は左側ではなく正面を向いた入口の前へ来た。そこで通路は終つてゐるらしくかつた。こゝには、二人の、白いといふよりも、黄色つばい上衣を着た番兵が立つてゐて、吾々に敬禮をし

てから、重いカーテンをあげて、吾々を縦横四十呎づゝもある大きな控への室へ通した。この室の中には八人か十人位の黄色い髪の女が象牙の針で刺繡らしいものをしてゐた。この女たちも矢張り聾啞であつた。このランプの點いた大きな室の端には更にも一つの入口があつて、吾々の室の入口にかつてゐるのとは全くちがつた東國製らしい綴織がかつてゐた。そして、そこにはとりわけ美しい二人の啞の娘が立つてゐて、頭を低く下げ兩手をくみ合せて恭順な態度を持してゐた。吾々が進んでゆくと、彼女等はめい／＼片方の腕をのばして、カーテンを開けた。するとビラリが妙なことをしはじめた。あの人品のある老紳士のビラリはそこにいきなりしやがんで、兩手と兩膝とを地べたにつけて四つん匍ひになり、長い髻を地べたにひきづりながら、向うの室の方へ匍ひ出したのである。私は普通の姿勢で、立つたまゝあとからついて行つた。すると彼は肩ごしにそれを見て言つた。

「匍ふんだ、匍ふんだ、狒々さん、兩手と兩膝とをついて。これから女王の御前へ出るのぢやから、鄭重にしないと、きつと、其の場で殺されてしまひますぞ。」

私は立ち停つた。そしてこはくなつて来た。膝がしらががく／＼して歩けなくなつた。だが、すぐに私は考へ直した。私は英國人だ。その英國人たる私が、なる程猿と人には言はれたが、實際猿のやうな眞似をして、得體の知れぬ野蠻人の女王の前へ出る理由がどこにある？ それも殺されるにきまつてゐるとすれば別だが、さうでないかぎり私にはそんな眞似はできんし、又もしない。はじめに匍つて出れば、しまひまで匍つてゐなければならぬ。それは自分の劣等さを承認するやうなものだ。

かう思つて私は大膽に立つて歩いていつた。やがて吾々は別の室へはひつた。それは控への室よりずっと狭く、壁には、入口にかけてあつたのと同じやうな、綴織のカーテンがかけてあつた。それは、控への室に坐つて刺繡をしてゐた啞者たちがこしらへたものであることが、後になつてわかつた。室内のところ／＼には、黒檀らしい黒い木でつくつて、象牙の嵌めこみ細工をした長椅子が置いてあり、床には、絨氈のやうな敷物が敷いてあつた。この室のつきあたりには床の間のやうなものがあつて、そこにもカーテンが下つて、その間から光が洩れてゐた。それきりで、この室には人は誰もゐなかつた。

ビラリは、苦しうに、ぼつぼつと、この洞窟の中を匍つて行つた。私はそのあとから威張つて大股に歩きながら行つた。だが私はこれは少し失策つたと感じた。第一、老人が蛇のやうに腹匍つてゆくあとから歩いてゆくのは大して威嚴のある筈がない。ビラリについてゆつくり歩いためには、一歩ごとに數秒間づゝ足を宙に振るか、或はスコットランドのメリー女王が演奏に出る時のやうに、一歩歩いてはちつと立ち停つてゐなければならなかつた。ビラリは、年齢のせゐもあつたらうが、あまり匍ふのは上手でなかつたので、その室まで行くのには随分長くかゝつた。私は時々もどかしくなつて、うしろから蹴つてやりたくなることもあつた。蠻人の女王の前へ、愛蘭人が隊をつくつて市場へ出かけるときのやうな風をして出てゆくなんて實に馬鹿げてゐた。實際吾々の様子はそれにそつくりだつたので、私はもう少しで聲を出して笑ふところだつた。

たうとう吾々はカーテンのところまで来た。するとビラリは胸を地べたにびつたりつけて平伏し、両手を死人のやうに前へのばした。私はどうしてよいかわからなかつたので、室内をじろく見廻しはじめた。まもなく私はカーテン越しに誰か吾々を見てゐる人があるのに気がついた。姿はわからないが、はつきりと誰かに見つめられてゐるやうな気がするのだ。しかもその凝視は私の神経に妙な作用を起した。私は何故か知らんが、空恐ろしくなつた。實際此處は妙なところであつた。壁は美々しく飾つてあり、柔かいランプの光りが照つてゐるにか、はらず、どうも淋しいのだ。これ等の附屬物は淋しさをへらすよりも淋しさを増してゐたのである。それは人つ子一人ない街燈のついた夜の街の方が、却つて眞つ暗な街より淋しいのと同じ理窟だ。室内は實に靜かで、ビラリは屍體のやうに重いカーテンの前に平伏してをり、カーテンの間からは、芳香が洩れて、薄暗い丸天井の方へ浮び上つてゆくやうに思はれた。一分、二分と時は経つたが、生き物のあるやうな氣配はなく、カーテンも動かなかつた。けれども、私を見てゐる人の凝視は益々深く私の體の中へ泌みこむやうに覺えた。私は何とも名狀すべからざる恐怖に充たされ、額には油汗がにじみ出して来た。

そのうちにたうとうカーテンが動き出した。その陰には一體何者があるのだらう？ 裸體の蠻人の女王だらうか？ 憂ひにしづむ東國の美人だらうか？ それとも當世風の若い婦人が午すぎのお茶を飲んでゐるのだらうか？ 私には皆目見當がつかなんだ。で、そのうちの誰があつて驚きはしなかつたであらう。實を言ふと私には驚く餘裕もなかつたのだ。やゝあつてカーテンがひとりでに動い

て、その折り目の間から雪のやうに白い手がにゆつと現はれた。そのしなやかな指のさきには薄桃色の爪がついてゐた。この手はカーテンをつかんでそれをわきへよけた。すると、私がこれまでに聞いたことのないやうな柔かい、それでゐて鈴のやうにすきとほる聲がきこえた。その聲はまるで小川のせ、らぎのやうであつた。

「異國の方」とその聲はアラビア語で言つた。アラビア語とは言つても、アマハツガー人の話す言葉よりもずつと純粹な、ずつと古いアラビア語だつた。「異國の方、何故そんなに恐がりなさるのです？」私は内心ではびく／＼してゐたが、おもてにはそんな氣ぶりは毛ほども出してゐないと自惚れてゐたのだが、この問ひをきいて少し驚いた。私がどう答へようかとまごまごしてゐるうちに、カーテンがあげられて、脊の高い姿が私の前に立つた。私が姿と言つたのは身體も顔も、眞つ白な柔い薄紗にすつかり包まれてゐて、一目見たときは、屍衣をまとつた死人にそっくりだつたからである。しかし、私はどうしてそんな聯想が浮んで来たのか知らない。といふのは、このまとひ物は非常にうすくて、その下に桃色の肉體がはつきりとわかつたからである。それは、偶然か、或は多分わざとであらうと思ふが、着物のきこなしのせいでそんな聯想をしたのだらうと思ふ。いづれにしても私は、こんな幽靈のやうなものが現はれて来たので、一層恐ろしくなつて来た。そして、私の前にもものはたゞ者ではないといふことが確實になつて来たので、頭の髪が逆立つて来た。だけど、私は私の前に立つてゐる白衣をまとつた木乃伊のやうな姿は、脊の高い美しい女で、身體の凡ての部分に生れつきの美し

さをそなへてをり、私がこれまでに見た何者にも匹敵しがたい蛇のやうなしなやかさをもつてゐることとはつきりとわかつた。彼女が手や足を動かすときには全身がうねるやうに見え、首を垂れるときにも、うねくとまがつた。

「何故そんなに怖がりなさるのです？再」びやさしい聲がたづねた。その聲は、此の上なく柔かな音楽の旋律のやうに、私の心臓をひきずり出すやうな気がした。「妾に、男の人を怖がらせるやうなところがあるのですか？さうだとすると、今の男は、前とはずぶん變つたのですね！」かう言ひながら、彼女は少し嬌態をつくりながら、うしろ向きになつて片腕をのばしたので、美しい腕はすつかりあらはになり、ふさ／＼とした漆黒の毛髪が、雪白の上衣の上をしなやかに垂れて、殆んど踵のところまでとゞいてゐるのが見えた。

「女王があんまり美しいので恐ろしくなつたのです」と、私は恭しく答へた。その實私はどう答へてよいかわからなかつたのである。私がさう答へた時にまだもとの通りに平伏してゐたビラリが、「よしよし、でかしたぞ狒々！」とつぶやいてゐるのが聞えたやうに思つた。「男はまだ矢つ張り嘘を言つて女を迷はすすべを知つてゐるのですね」と彼女は笑ひながら答へた。その笑ひ聲は遠くの方で鈴を鳴らすやうに聞えた。「あなたは、妾の眼が、あなたの心をさがしてゐたから恐かつたのでせう。それだからでせう。だけど妾は女ですから、その嘘は堪忍してあげます。あなたは丁寧に仰言つたからです。それで、あなたはどうしてこの洞窟住ひの人間の國へお出でなすつたのですか？この

沼の國へ、いやなものばかりの國へ、古い死人の無氣味な幽霊の國へ？何を見にいraftしやつたのですの、何故あなたは全能の女王の手中にとびこんで命の安賣りをなさるのです？それに又どうして私の話す言葉を知つておゐるのです？これは古い言葉ですよ。まだこのやうな言葉が使はれてゐるのですか？御覽のとほり、妾は洞窟の中で、死人と一緒に住んでゐるので、世間のことはまるで知りもせず、又知らうともしなかつたのです。ねえ、見知らぬ方、妾は、妾の形見と、もに住んで來たのです。そして私の形見は、私の手で掘つた墓場の中にあるのです。」彼女の聲はふるへて、森の小鳥の聲のやうなやさしいしらべを帯びて來た。突然彼女の眼は、腹ばつてゐるビラリの姿の上に落ちた。すると彼女は急に氣をとりのほしたやうであつた。

「あゝ、老人、お前はそこにゐるのね。一體どうして、お前の家族に間ちがひが起つたの？實際、妾の客人たちは非道い目におあひなさつたらしいね。そして、そのうちの一人は、もう少して「焼壺」で殺されてお前の子供等に食はれてしまふところだつたのだね。他の方も勇ましく戦ひなさらんだったら殺されてしまふところだつたのだ？妾にだつて一旦身體からはなれてしまつた生命をよびかへすことはできないのだよ。どうしたと言ふのだ？何か言ひ開きができるなら言つて見い。でないとお前を、妾の復讐執行人に引き渡しますよ。」

女の聲は怒りのために甲ばしつて、岩の壁に、冷たく澄み渡つて鳴り響いた。顔にまとうてゐるヴェールの奥で彼の女の眼がきら／＼と輝いてゐるやうに私は思つた。どんなことにも恐れるやうなこ

とのない人間だと思つてゐたビラリも、かはいさうに、彼女の言葉をきくと、恐怖のために眼に見え
る程わな／＼慄ひ出した。

「お、女王様、女王様！」と彼は白髯を地べたにつけたまゝで言つた。「偉大なる女王様、どうぞお
なさけをおかけ下さいませ。わたしは昔も今も變りはない心からのあなたのしもべでございます。あ
れは、決して決して、わたしのたくらんだことでもなければ、わたしのとがでもございませぬ。みん
な、あの子供の悪いわたしの子供等のしわざでござります。女王様の客人のあの豚に嫌はれた女にそ
そのかされて、奴等が、この土地の習慣にしたがひまして、女王様の客人の狒々や獅子と一緒にまゐ
りました肥つちよの黒ん坊を食はうとしたのでござります。女王様から黒人については何のお達しも
なかつたものでござりますから。ところが狒々と獅子とはそれを見て、その女を殺し、又その下僕を
殺して恐ろしい焼壺から助けたのでござります。すると悪者どもは、血に饑ゑて狂氣になり、獅子と
狒々と豚との咽喉をめぐけて跳びかゝつて来たのでござります。けれどもこの仁たちは勇ましく奴等
と戦はれたのでござります。お、女王様！ あなたの客人たちはほんたうに勇敢に戦つて澤山の相手
を殺して自分たちの命は全うしました。そこへ私がかけてつけまして、この人たちをお助け申し、悪者
どもは、このコオルへ送つて、女王様のおさばきを受けさせることにいたしましたのでござります。」
「よろしい、そのことはもう知つてゐるよ老人、で明日は大廣間の席について、悪者どもの裁判をし
ます。こはがらんでもよい。お前は許しがたいところだが、許してあげる。もつとよくお前の家族の

監督をするがよいぞ。さあもう行きなさい！」

ビラリは、びつくりするほど元氣よく起き直つて跪き、三度お叩頭をした。そして白い髯を地に
ひきずりながら、はひつて来た時と同じやうに四つん匍ひになつてうしろへさがり、遂にカーテンの
むかうへ消えてしまつた。私は、この恐ろしい、それでゐて此の上なく心をひきつける女と二人つき
りであるにのこされたので少なからず驚いた。

第十三章 アツシヤ面被をとる

「さあ、去つちまつた」と彼の女は言つた。「あの白い髯の老人のお馬鹿さんが！ でも人間といふも
ものは一生かゝつて、ほんの少しばかりの知識しか得られないものですわね。水のやうに知識をかき
集めるが、知識は又水のやうに指の間から逃げていつてしまふのですよ。でも手が、ほんの露で濡れ
たほどでも濡れてゐると、馬鹿者どもがよつてたかつて、あの人は物識りだなんてはやし立てるので
す。さうぢやありませんか？ ところであの連中はあなたを何とか言ひましたね？ 狒々なんて言ひ
ましたね」と彼女は笑ひながら言つた。「でもそれがあの連中の習慣なんです。想像力が乏しいも
んだから、すぐに自分等によく似た獸を聯想して、それを名前につけてしまふのです。あなたの國で
は、あなたは何と仰言るのですか？」
「ホリイと言はれてをりますよ、女王」と私は答へた。

「ホリイ」と彼女は言ひにくさうに言った。けれどもその調子には此の上ない魅力があつた。「でホリイといふのはどういふ意味なのです？」

「ホリイといふのは棘のある樹のことなんです」と私は答へた。

「さう、さう言へばあなたには棘がありますね。それでめて矢張り樹のやうですわ。あなたは強くて、醜いけれど、わたしの見るところが間違つてゐなければ、心の底は正直な、頼み甲斐のある方で、それに頭のある方ですわ。だが、ホリイ、そんなとこに立つてゐないで、こちらへはひつて妾のそばにかけなさい。妾は奴隷どものやうにあなたを四つん匍ひにさせたくはありません。妾はあの連中が妾を拜んだり恐れたりするのに飽きてゐるのです。で、時々氣に入らぬことがあると、妾は、なぐさみに奴等をすくめ殺して、死骸が心臓まで蒼ざめてしまふのを見てやることがあります。」かう言ひながら彼女は象牙のやうな手でカーテンをわきへやつて、私を通れるやうにした。

私はがたく、慄へながら中へはひつた。この女は非常に恐ろしい女であつた。カーテンの内側には、十二呎に十呎ばかりの凹んだところがあつて、その中に一つの長椅子と一つのテーブルとが置いてあつた。そしてテーブルの上には果物と水晶のやうな水とが置いてあつた。そのそばには石をくりぬいてこしらへた聖水盤のやうな容器があつて、それには清らかな水がなみ／＼とはひつてゐた。あたりは柔かなランプの光で照され、空氣にもカーテンにもえならぬ芳香がたゞよつてゐた。そして、女王のつや／＼した毛髪や、身にまとうてゐる白衣からも芳香が發してゐるやうに思はれた。

私はその小さい室の中へはひつて、びく／＼しながらそこに立つた。

「かけなさい」と彼女は長椅子を指さしながら言つた。「まだあなたは怖れる理由はありませんわ。若し怖がる理由があるとすれば、妾はすぐに殺してしまひますから、矢張り長く恐がらなくてもよいのですわ。ですから、まあ安心していらつしやい。」

私は水盤の近くの長椅子の脚許に坐つた。女王は長椅子の別の端にゆつたりと身を沈めた。

「さて、ホリイ」と彼女は言つた。「あなたはどうしてアラビア語が話せるやうになつたのです？ アラビア語は妾の大好きなつかしい言葉です。といふのは妾はアラビア生れなのです。生粹のアラビア人なのです。ヤーマン地方の美しい舊都オザールの生れで、カータンの子ヤラブの一族なのです。でもあなたのお言葉には妾のきゝたいハミヤル族の言葉のやうな床しい響きはありませんわね。それに或る言葉は變化してゐますわ。ちやうどこのアマハツガー人の使つてゐる言葉のやうに。アマハツガー人はアラビア語をすつかり下品なものにしてしまつてゐるので、あの連中に口をきく時には、妾はまるで他國の言葉を話してゐるやうな氣がするのですよ。」

「私は自分で勉強したのです」と私は答へた。「ずゑぶん長い間勉強しました。でもアラビヤ語は今でも埃及やその他の國で使はれてはゐますけれど。」

「まだアラビヤ語は使はれてゐるんですか？ それに埃及はまだあるのですか？ 今の埃及の國王は誰ですか？ 矢張り波斯人の子ですか？」

「波斯人はもう二千年も前に埃及を去りました。その後トレミー人や羅馬人や其の他いろくな民族がニール河を支配してゐましたが、みんな盛りを過ぎて滅びてしまひました。」と私は呆れながら言つた。「でも女王はどうして波斯のアルタクセルクセスのことを御存じなのです？」

彼女は笑つて何とも答へなかつた。また私はぞつとして全身が凍るやうな氣がした。

「それから希臘ですね」と彼女は言つた。「希臘はまだありますの？ あ、妾は希臘人が好きですわ。あの時分の希臘人は美しくて賢かつた。けれども、心の中は、移り氣なくせに、荒つばいところがありませんでした。」

「さうです」と私は答へた。「希臘はまだあります。そして希臘の國もできてゐます。けれども今の希臘人は昔の希臘人とはちがひますし、希臘の國だつて、昔の希臘と比べてはお話になりません。」

「では、ヘブライ人はまだエルサレムにゐますの？ そして賢王の建てた寺はまだ立つてゐますか？」

ヘブライ人はどんな神を拜んでゐるのでせう？ ヘブライ人が仰山に説教したり豫言したりしてゐたメシアは來ましたの？ そしてそのメシアは地上を支配してゐますか？」

「猶太人はちりちりになつて滅びてしまひました。そしてその破片は世界ぢうに散らばつてゐます。それからエルサレムはもうありません。ヘロド王の建てた寺は——」

「ヘロド王ですつて」と彼女は言つた。「私は、そんな人は存じませんよ。だがまあ次を話して御覽なさい。」

「羅馬人が焼いてしまひました。そして羅馬の鷲はその廢墟の上を翔んで行つて、今では猶太は沙漠になつてゐます。」

「さう、羅馬人は偉大な國民だつた。そして、運命の神のやうに、いや彼等の鷲が餌に向つてとぶときのやうに、眞つ直ぐに最後の滅亡につき進んで行つた！ そしてあとには平和をのこしていつたのですわね。」

「孤獨をつくつて平和と呼ぶですかね」と私はラテン語で言つた。

「まあ、あなたはラテン語もお話しなさるのですね」と彼女は吃驚して言つた。「随分長く聞かなかつたので、ラテン語は妙に妾の耳に響きますわ。それにあなたの話は、羅馬人の話の様に語尾が下りませんね。今あなたが仰言つた文句は誰が書いたのです？ 私はその文句は知りませんが、あの偉大な國民をよく穿つてゐますわ。どうやらあなたは物識らしいですね。希臘語もおできになるの？」「え、それにヘブライ語も少しはできます、よく話はできませんけれど、こんな言葉は今みんな死語なんです。」

彼女は子供のやうによろこんで手を打つた。「全くあなたは醜い樹だけれど、その樹には智慧の實になつてゐることね。ねえホイリさん」と彼女は言つた。「だけど、猶太人は、妾が彼等に學問を教へると異人だとか異教徒だとか言つたから妾はきらひですが、あの猶太人どものメシアは來ましたか、そして世界を支配してゐますか？」

「メシアは来ました」と私は恭々しく答へた。「けれども貧しい賤しい姿で来たものですから、猶太人は、このメシアを歓迎しないで、却つて迫害して十字架にかけました。けれどもメシアは神の子ですから、その言葉と事業とは今だに生きのこつて世界の半分を支配してゐます。尤も地上の國を支配してゐるではありませんが。」

「あゝ、實に兇暴な狼どもだ」と彼女は言つた。「多くの神を信じ、利慾には眼がなく、徒黨をくんで争ひあつてゐるあいつ等の黒い顔が今でも見えるやうな氣がする。では、彼等は彼等のメシアを十字架に架けたのですか？ さうでせう、妾にもそれは信じられますわ。メシアがほんたうに生ける精靈の子だつて彼等には何でもなかつたでせう。そのことは後で話しましょう。彼等は、傲然として威張つて來なければ神だとは思はんですわ。エホバを拜むかと思へばパールを拜み、アストレトを拜むかと思へば埃及の神々に手を合せるといふ風で、利慾のためにはどんなことでもする奴等です。さうですか、奴等はメシアが卑しい服装をして來たといふので十字架にかけたのですか、そして今は世界の各地にちり／＼ばら／＼になつてゐるのですか。さう言へば猶太の或る豫言者がそんなことを言つたのをおぼえてゐますわ。だが、猶太人のことなどは妾はどうでもいゝ。抑も妾の心を傷つけて、ひがませて、妾をこんな處へ追ひやつたのは奴等の爲業ですもの。奴等は妾がエルサレムで學問を教へてゐたときに、妾に石を投げましたよ。寺の門の前でね。白い鬚を生じた猶太の偽善者や學者どもが人々をけしかけて妾に石を投げさせたのです。御覽なさい。まだその傷痕がのこつてゐますわ！」

かう言ひながら、突然彼女は紗の被布をめぐつて、腕を出し、ミルク色の美しい肌のにこつてゐる赤い傷痕を指して見せた。

私は恐ろしさにうしろへ身を退いた。

「失禮ですが、女王」と私は言つた。「猶太の救世主がゴルゴタで十字架をになはれてからもうかれこれ二千年もたつてゐます。それなのに、まだ救世主のゐない前に貴女が猶太人に學問を教へたといふのはどういふわけなのです？ 貴女は御婦人です。精靈ではありません。その女がどうして二千年も生きられるのですか？ 貴女は私を馬鹿にしてゐなされるのですか？」

彼女は長椅子にもたれた。私はまた彼女のかくれた眼が私の心を探してゐるのを感じた。

「あなた」と彼女は非常にゆつくりと用心ぶかく言つた。「この地上には、まだあなたがよくお知りにならぬ秘密がのこつてゐるやうですわ。あなたはまだあの猶太人が信じてゐたやうに、生れた者は皆死ぬと信じていらつしやるのですか？ 何だつて死にやしませんよ。そりや變化といふことはありますけれど、死といふことはないのです。御覽なさい」と言ひながら彼女は岩の壁に彫つてゐる彫刻を指した。「この彫刻を彫つた人種の最後の一人が疫病のために斃れてから、二千年の三倍もたつてゐるのですが、この人たちは死んでゐませんよ。今でも生きてゐます。これによるとこの人達の靈は、現在こゝへ來てゐるのかも知れません。」と言ひながら彼女をちらりとあたりを見廻した。「妾の眼にはまがまがごとそれが見えるやうですよ。」

「ですけれども、此の世では死んでゐるのでせう？」

「さうです、一時はね。だけど、此の世へも何遍も生れかはつてゐるのです。妾は、この妾、アッシヤは——妾を愛してゐた人が生れかはつて來るのをこゝに待つてゐるのです。妾は、その人が妾を見つくるまで此處にゐるのです。その人が妾に會釋をする場所はこゝより外にはないのです。妾のやうな全能のものが、幾度びも詩人たちに誦はれた希臘の女神ヘレンよりも美しく、賢者ソロモンの智慧にもまさる深く廣い智慧をもつてゐる妾が、地上の祕密を知り、その富を知り、凡ての物を妾の役に立つやうにかへることのできる妾が、そして暫くの間なら、あなた方が死と呼んでゐる變化にさへも打ち勝つことのできる妾が、こんなところで、畜生にも劣る野蠻人を相手に暮してゐるのは何のためだとあなたはお考へですか？」

「私にはわかりません」と私はへり下つて答へた。

「それは妾が戀人を待つてゐるからなのです。妾の生涯はことによると邪惡なものであつたかも知れません。それは妾は知りません、何が惡で何が善だといふやうなことは誰にだつてわかりはしませんからね、ところで妾は時が來なければ死ぬことはできないのですけれど、たとひ死ぬことができたとしても死んであの人に會ひにゆくのは心配なのです。といふわけは、妾とあの人との間に妾にはよぢ上れないやうな障壁ができてゐるかも知れないからですわ。それに澤山の星が永劫に飛びかうてゐる大無廣變な空間の中で、道に迷ふ心配もあります。けれども、いつかは、——五千年もさきのことか或

は明日のことかも知れませんが——妾の戀人が生れかはつて、どんな人間の巧案した掟よりも強い掟に従つて、こゝで、昔妾たちが接吻をしたこゝで、妾を見つけ出す日が來るに相違ありません。妾は以前にあの人に罪を犯したけれども、あの人のはきはきつと妾に對して柔らぐにきまつてゐます。あの人にはもう妾を見覚えてゐないかも知れませんが、それでも妾を愛するにきまつてゐます。妾の美しさのためだけに妾を愛するにきまつてゐます。」

しばしの間私は呆氣にとられて答へもできなかつた。あまり途方もない話なので、私の理知はそれをつかむことができなかつたのだ。

「でも女王」と私はたうとう口を開いた。「たとひ吾々は幾度も生れかはつて來るとしても、貴女はさうではないでせう、若しあなたのお話がほんたうなら？」この時彼女の見えない眼がまた鋭く輝いたのを私は見た。「貴女はまだ死んだことはないのです。」と私は急いでつゞけて言つた。

「さうです」と彼女は言つた。「といふわけは、半分は偶然のおかげで、半分は研究のおかげで、妾は世界の最大の祕密の一つを解いたからです。いゝですが、生命といふものはあるのですよ。して見れば、その生命をしばらくの間長びかすことができないうわけがありますか？ 生命を歴史で一萬年とか二萬年とか五萬年とか、何でせう？ 一萬年くらゐたつたつて、雨や風のために、山の高さは餘りかはりはありませんわね。二千年の間に、この洞窟は少しも變りませんでしたよ。變つたのは獸と獸と同じやうな人間とだけです。生命こそは不思議なものです。しかし生命を少し長びかす位の事は不思

議でも何でもありませんわ。自然には、自然の子である人間にと同じやうに物を活かす精氣があるのです。この精氣を發見して、それを自分に通はせることさへできれば、その人は自然の生命と、もに生きることができのです。尤もその人も永久に生きることができません。自然の生命も永久ではないのですからね。自然も亦死なねばならぬのです。月の自然が死んでしまつたやうにです。尤も自然は死ぬといふよりも變化するといつた方がよいでせう。自然もまた生れかへつてきて生きるのですからね。では自然が何時死ぬか？ といふと、それはまだ中々だと思ひますわ。そして自然の秘密をすつかり知つてゐる人は、自然が生きてゐる限り生きて居られるのです。妾はまだ自然の秘密をすつかり知つてはゐませんが、いくらかは知つてゐます。多分これまでにこの世界にすんでゐた誰よりも多く知つてゐるかも知れません。ところで、この事は、あなたには大きな秘密であるに相違ありませんわね。ですからいまそれをお話してあなたを驚かすのはやめませう。若し氣が向いたら、もう少しはしく話してあげるかも知れませんが、まあ多分この事は二度とお話ししないでせう。あなたは、妾がどうしてあなた方がこの國へおいでになつたのを知つて、あなた方が壺で顔を焼かれるのを助けてあげたか不思議に思つていらつしやるでせう？」

「不思議です」と私は力なく答へた。

「ではあの水を御覽なさい。」かう言ひながら彼女は例の水盤を指し、その上へ身を屈めて手をかざした。

私は起ち上つて水面を見つめた。すると忽ち水面は暗くなつたが、再び澄み渡つて来て、その中には、吾々のボートが、あの恐ろしい運河に浮んでゐる光景がはつきりと見えた。レオはその中に横はつて蚊をよけるために上着を頭からすつぱりかぶつて眠つてゐた。私と、ジヨツブとマホメツドとは岸でボートを曳いてゐた。

私は慄然として身を退き、これは魔法だと叫んだ。實際、私が見たのは實際にあつた通りのことであつた。微細な點にわたるまですつかりそのまゝだつたのである。

「い、え、ホリイさん」と彼女は答へた。「これは魔法ぢやありませんよ。魔法なんては愚人の夢です。魔法なんていふものはありません。この水は妾の鏡です。妾は時々過去のことをよび起して見たいと思ふとこの水の中にそれが映るのです。この國のことや、妾の知つてゐることや、あなたの知つてゐることなら何でも映して見せてあげませう。若しおのぞみなら、誰かの顔のことを考へて御覽なさい。さうすると、その顔があなたの心からこの水に反射して映つて見えますから。妾にはまだ秘密がすつかりわからんので、未來のことは何もわかりません。アラビヤや埃及の魔法使はずつと前にそれを知つてゐたといふことですが、まあそんなわけで、妾は或る日のこと、二十年前に一度船で通つたことのある、あの古い運河のことを思ひ出して、その様子を見ようと思つたのです。すると運河に一隻のボートが浮んでゐて、三人の男は岸を歩いてをり、一人若い男がボートの中に眠つてゐるのが見えたのです。眠つてゐる人の顔はわかりませんでした。何でも人品卑しからぬ若者のやうに思は

れました。ですから私は人をやつて助けさしたのです。ところで、もうこれでお別れにさせうね。だが、ちよつとお待ちなさい。あの若い人のことをきかして下さい。ピラリが獅子と言つた人のことを。妾はあの人を見たいのですが、あの方は病氣なのだからです。熱病で、それに負傷をしてあらつしやるといふことですね？」

「ひどい重態なんです」と私は悲しげに答へた。「女王、いろくなことを知つてをられるあなたに、あれの病氣はどうにもならんでせうか？」

「それはなりません。妾は癒してあげることができません。だが、あなたはどうしてそんなに悲しうに仰言るのです。あの若者を愛していらつしやるのですか？ 若しかしたらあなたの御子さんなのですか？」

「あれは私の養子なのです。あの子をあなたの前へつれて参りませうか？」

「いやそれには及びません。發病してから一體何日になりますか？」

「今日で三日目です。」

「では、もう一日寝かしておきなさい。さうすればあの方はことによると自分で病氣を追ひ拂ふことができるかも知れん。その方が妾が癒してあげるよりよいのです。妾の療法は、生命の城砦を揺るがすやうな療法ですからね。でも明日の晩の、發病した時刻までによくならか、らなかつたら、妾があの人をそばへ行つて治してあげます。一寸お待ち、誰があの人を看護してゐるのですか？」

「私どもがつれて来た白人の召使です。ピラリ老人が豚と言つた奴です、それから」とこゝまで言つた時に、私はちよつとためらつてから言葉を止めた。「アステーンといふ女も介抱してくれてゐます。この國の大層きれいな女です。この女ははじめてあの子を見たときに、あの子のそばへ寄つて来て、あの子を抱擁し、それからつとあの子のそばについてゐるのです。これは女王の人民の習慣なのだからです。」

「妾の人民です！ 妾に向つて、妾の人民だなんて言はないで下さい。」と彼女は大きく答へた。

「この奴隷どもは決して妾の人民ぢやありません。奴等は妾がゆるしてやつてゐる間だけ妾の命令することをしてゐる犬です。あいつ等の習慣なんて、妾には何もか、はりはないのです。それから、妾を女王なんて言はないで下さいね。私はおべつかを言はれたり、尊稱で呼ばれたりするのに飽きてゐるのです。妾をアッシャと言つて下さい。この名は妾の耳に快よく響きます。それは過去の反響です。そのアステーンとやらいふ女は妾は知らないが、ことによると、あの女かも知れない。妾にその女を警戒せよと言つた者がある。そして妾もその女に警告をしておいた。その女かも知れない。その女は、——一寸お待ちなさい、見て見ませう。」かう言ひながら彼女は前へ屈んで、水盤の上へ手をかざして、ちよつとその中を見つめてゐた。

「ちよつと」と彼女は静かに言つた。「これがその女ですか？」

私は水の中をのぞきこんだ。すると、静かな水の面にアステーンのきりつとした横顔が映つてゐる。

た。彼女は前こゝみになつてゐたが、その容貌は無限のやさしさをこめ、栗色の捲毛を右の肩に垂らして何か下の方をちつと見てゐた。

「この女です」と私は低聲で言つた。又もや私はこの竝々ならぬ光景にすつかり度膽を抜かれてしまつたのである。「この女がレオの眠つてゐるのをみてゐてくれてゐるのです。」

「レオです」とアツシヤは氣の抜けた聲で言つた。「レオといへばラテン語で獅子のことだ。あの老人もこれだけはうまい名前をつけたもんだ。妙なことがあるものだ」と彼女は獨言をつづけた。「實に妙だ、ことによると——だがそんなことは有り得ない！」

彼女がいらくした手つきで又水の上へ手をかざすと、水の面は暗くなつて、そこに映つてゐた像は、それが現はれた時と同じやうに、音もなく、不思議に消えてゆき、再びランプの光が、おだやかな、澄み渡つた生きた鏡の面を照した。

「ホリイさん、行く前に私に何かのぞみはありませんか？」と彼女はしばらく考へた後で言つた。「あなたはこのころからこゝで随分ひどい生活をしなければなりませんわ。この住民は皆野蠻人で、文明人の習慣は少しも知つてゐません。妾は別段そのために困つてはあませんけれど」と言ひながら彼女は小さいテーブルの上の果物を指した。「妾の口を通るものは果物だけですのよ。果物と麥粉でこしらへた菓子と、少しばかりの水とだけです。妾はあの娘たちに貴方の御用をするやうに言ひつけておきました、御承知のとほりあの娘たちは聲で唾ですから、あの娘たちの聲色や手眞似をよむことので

きない者には一番安全です。妾はあんな風に仕上げるのに何百年もか、りましたのよ。やつと成功したと思つとその娘があまり醜い子だつたので殺してしまつたりしたこともありました。ところで何か妾にお希みはありませんか？」

「さうですね、一つだけありますよ、アツシヤ」と私は大膽に言つた。併し他目には私が思つてゐる程大膽には見えなかつたやうな氣がした。「私はあなたのお顔が見たいのです。」

彼女は鈴のやうな響のある聲で笑ひ出した。そして「よく考へなさい、ホリイ」と答へた。「あなたは希臘の神々の傳説を知つてをられるやうですが、アクテオンといふ神は、あまり美しいものを見たために、無残にも身を滅ぼしてしまつたでせう？ 妾があなたに顔を見せたら、もしかするとあなたも同じやうに身を滅ぼしなされるかも知れませんよ。抑へても抑へても抑へきれぬ慾情のために生命を蝕むやうなことになるかも知れませんよ。いゝですが、言つておきますが、妾はあなたのものでありませんよ、誰のものでもないのです。ただ、かつてこの世にゐた人で、まだ此の世へ出て來ないやつた一人の人の女ですよ。」

「ところがアツシヤ、私はあなたの美しさなどは恐れはしませんよ、女の美しさなんてものは、花のやうに儂なく過ぎ去つてゆくものです。そんな下らないものを私の心は見向きはしないのです。」

「あなたの言ふことは間違ひです」と彼女は言つた。「女の美しさは過ぎ去つてしまふものではありません。妾の美しさは妾の生きてゐる限りつゞくのです。でも、どうしても我を通したいなら、通しな

さるがい、いけれども埃及の調馬師が小馬を御するやうに、あなたの情慾が理性を御して、あなたが行きたくもないところへつれて行つたからつて、妾をとがめてはなりませんよ。妾の顔を一度見たら、それで病みつきにならない人はないのです。ですから妾はこゝの野蠻人にすら顔を見せないのです。でないといついうるさくなつて、彼等を殺さねばならぬやうになりますからね。それでもあなたは御覽になりますか？」

「是非見せて欲しいです」と私は答へた。私はどうしても好奇心を抑へる事ができなかつたのである。彼女は白い丸味のある、これまで私が見たことのないやうな兩の腕をあげて、ごくゆつくりと毛髪の下のところのとめ金を抜いた。すると突然、長い、屍衣のやうな覆ひ物がする／＼と彼女の身體から地上へ送り落ちた。私の視線は彼女の姿に注がれた。彼女の身體には、びつたりと密着した白衣がまとはれてゐるだけで、それは、生命以上の生命と、人間以上の、一種蛇のやうな艶麗さをもつて、ふくよかな、壓倒するやうな肉體美を見せるに役立つだけであつた。小さい足には金銀でとめた雪駄を穿いてゐた。踝の美しさは、彫刻家などの夢想を超越した完全なものであつた。腰のまはりの白い肌着は純金の二頭の蛇のとめ金でとめてあつた。そしてその上へ、美しい清らかな輪郭をよがいて彼女の上體がふくれ上つて居り、肌着は雪白の胸のところでおはつてゐた。そしてその胸のところでは彼女は兩手を組んでゐた。私はそれから尙ほも上の方へ視線をはこんで、彼女の顔を見た。私は大袈裟なことを言ふわけではないが、まったく、眼が眩んで、驚歎して思はず身を退いた。私は天女の美

しさを噂さには聞いたことがあるが、今それを見たのだ。たゞこの美しさは、えも言はれぬ愛らしさと、純潔さともかゝはらず惡の美しさであつた。といふよりもむしろ、その時には、私はさういふ印象を受けた。どうしてそれを言ひあらはしたのか、私には言ひ表はせない。たゞもう言ひ表はせないのだ。私の見た感じを筆で書きあらはすことのできるやうな人は此の世にはない。此の上なく黒い、柔かな、絶えまなく動いてゐる眼のことや、ほんのりと櫻色を帯びた顔のことや、廣い高貴な額のことや、その上にふさ／＼と垂れ下つてゐる髪のことや、繊細な、ひきしまつた顔貌のことなら言へるかも知れん。これ等のものもなる程美しい。何物にも増して美しい。けれども彼女の美しさはそんなところにあるのではないのだ。それは生きた御光のやうに、彼女の晴々とした顔から發出してゐる何とも名狀のできない神々しさにあるのだ。私の前にたつてゐる顔は三十を越さぬ若い女の、完全に健かな、熟しきつた美しさがはじめて外へあらはれたばかりの顔であつたが、それでゐて、名狀すべからざる世故の辛酸をなめ、悲しみも情慾も味はひつくしたあとがまぎれもなく刻まれてゐるのだ。口のまはりの靨に徐々にうかんで來る微笑も、この罪と悲しみとの影をかくすことはできなかつた。それは、輝く眼の光りにも、堂々たる態度にもあらはれてゐて、まるで「妾を見なさい、世の中のどの女にも増して美しいけれども、妾は年々歳々過ぎし日の思ひ出に惱まされ、情慾にかられ、邪しきなことをしたために苦しんでゐるのです。そして贖罪の日が來るまでは、いつまでもいつまでも、邪惡と悲痛とを重ねてゆくのです」とでも言つてゐるやうに思はれた。

磁力にでも吸ひ寄せられるやうに、どうしても抵抗することができない力で私の眼は彼女のきらき
らと光る雙の眼に吸ひ寄せられていった。すると彼女の眼から私の身體へ電流が傳はつたやうな氣が
して、私はどきまぎして眼がくらんで來た。

彼女は、えならぬ音楽のやうな聲で笑ひながら、勝ち誇れるヴィーナスにもふさはしい、崇高な媚
を含んだ様子で、私を見てうなづいた。

「向う見ずな人？」と彼女は言つた。「あなたはアクテオンのやうにのぞみをかへなかつたが、アク
テオンのやうにみじめに身を滅ぼさないやうに用心しなさい。あなたの心の中の煩惱の犬に身を咬み
碎かれないやうに用心しなさい。妾もたつた一人の人にしか心を動かさない處女の女神ですよ。しか
もその人といふのはあなたではないのですよ。どうです、もう十分御覽になりました？」

「私はあまり美しいものを見たので眼がくらんで來ました。」と、嗚聲で言ひながら私は手をあげて
兩の眼をおほふた。

「だから言はないこつちやありませんか。美は電光のやうなものです。美しいけれども、破壊力をも
つてゐます。特に樹は危険ですよ、ホリイさん。」かういひながら彼女はまたうなづいて笑つた。

こゝでアツシヤは、ばつたり話をやめた。私が指の隙間から見ると彼女の顔は酷く變つて來た。
大きな眼は急にちつと据つて來て、恐怖が、暗い魂の底から湧き起つて來た何かたゞならぬ希望と
争闘してゐるやうな表情を帯びて來た。美しい顔は硬はつて來て、柳のやうにしなやかな姿はびんと伸

びてしまつたやうに思はれた。

「おやー」と彼女は將に獲物に向つて跳びかゝらんとする蛇のやうに頭をうしろへひいて、半ば囁く
やうに、半ば叱るやうに言つた、「その手にはめてある甲蟲形寶石はどこで手に入れなかつた？ 言ひ
なさい。でないと、生命の精氣によつてその場であなただちを打ち殺してしまひますぞ！」かう言ひなが
ら彼女は心持ち私の方へにぢり寄つた。彼女の眼はその間も爛々と焰のやうに輝いてゐたので、私は
恐ろしさに打たれて地べたに倒れながら、何かしどころもどろに言つた。

「靜かに！」と急に彼女は様子をかへて、以前のやうなやさしい調子になつて言つた。「妾はあなたを
吃驚させましたわね。勘辨して下さい。だがね、ホリイさん。殆ど無限の心は、時々、有限な心の
るまさ加減にたまたまなくなつて、つい痼癩をおこしたくなるのです。もう少しでああなたの命はなくな
るところでしたよ。だが、私は思ひ出しました。ところで、その甲蟲形寶石は？」

「拾つたんです」と私はまた立ち上りながら、力なくつて吃つて言つた。あまりに氣が顛倒してしま
つたので、私はその時は、この甲蟲形寶石のことについては、たゞそれをレオの洞窟で拾つたことだ
けしか思ひ出すことができなかったのである。

「随分妙ですね」と彼女は、いかめしい女にも似ず、急に女らしく身を標はして、そはくしながら
言つた。「妾も前にそのやうな形をした甲蟲形寶石を知つてゐたのですよ。それは妾の戀人が首にかけ
てゐたのです。」かう言つて彼女は少しばかりすゝり泣いた。私はそれを見て、この女も非常に年をと

つてゐるかは知れんけれど、要するにたゞの女だといふことがわかつた。
「して見ると」と彼女は言葉を續けた。「あの寶石は對のものだつたに相違ないが、妾はこれまで一つしか見たことがないので。何しろあの寶石は由緒附のもので、もつてゐる人は随分珍重したものでずからね。だけど妾の見たのは、こんなに指環に嵌てはなかつたのです。さあ、ホリイ、もう行きなさい、行きなさい。そしてできるなら、アッシャの美しきを見たあなたの愚かしさを忘れるやうにしない—そして彼女は、私から身をそむけて、長椅子によりかゝり、クッションの中に顔を埋めた。私は彼女の前から、よろ／＼しながら引き退つた。どうして私の洞窟まで歸つて來たのか私はおぼえてゐない。

第十四章 地獄の精

私が床の上に身を投げて、散り／＼になつた心をかき集めて、見たり聞いたりしたことを思ひかへしはじめたのは夜の十時近くであつた。併し、考へれば考へる程私は何が何やらわからなくなつた。私は氣が狂つてゐたのだらうか、酔つ拂つてゐたのだらうか。それとも夢を見てゐたのだらうか。或はまたすばらしい大きなすべてに—ばいかつがれてゐたに過ぎんのだらうか？ 私のやうな理性のある、吾々の歴史の主要な科學的事實にも通じてをり、歐羅巴で超自然と言はれてゐる魔術などを絶対に信じない人間が、たつた今、二千年も生きてゐた女と話をしてゐたことを信ずることができたなん

ていふことがどうしてほんとうと思へよう。全く、これは人類の経験と矛盾してゐる。絶対に不可能なことだ。それにあの女の此の世のものとも思はれぬ美しさはどうだ。あんな美しい姿を見て迷はぬ男は絶対にないだらう。私のやうに、その方の道にかけては、女嫌ひとしてとほつてゐる男でも、恐しいには恐しいが、あの女の幻を追ひ拂ふことはできなかつたのだ。その悪魔のやうなおそろしさが、却つて私の心を惹きつけたのだ。いゝ年をして今更らあんな女に戀を感じるなんて、馬鹿げてゐる。馬鹿げてゐる。あの女は私に警告した。それを私はきかなんだのだ。そしてあの女のヴェールを脱がせたのだ。何といふことだらう。

私は何かしなくては氣が狂つてしまひさうな氣がしたので、髪をかきむしりながら長椅子から跳び上つた。それに女王が甲蟲形寶石について言つたことは一體何のことだらう？ あれはレオのもので、二十一年程前に、ヴィンシイが私の室にのこしていつた箱の中にあつたのだ。するとあの話は結局ほんたうなのだらうか？ 壺の破片に書いてあつた文字も贋物ではなかつたのだらうか？ さうだとすると、あの女が待つてゐたのは、死んだ戀人の生れ代つて來るのを待つてゐたのは、つまりレオのことだらうか？ そんなことは有り得ない！ そんな想像は正氣の沙汰ぢやない！ 人間が生れ代るなんていふ話がどこにあるものか？

だが二千年も生きてゐる女があり得るとすれば、そのことだつて有り得るかも知れん。さうなればどんなことだつて有り得るわけだ。現にこの私だつて、誰かの生れ代りで自分の前身をも忘れてしま

つてゐるのかも知れん。私はこの馬鹿げた考へに思はず笑ひ出して、岩の壁に彫つてある、氣むづかしい顔をした古代の戦士の彫刻に向つて大きな聲で呼びかけた。「なあ、大將、ことによると君と僕とは同じ時代に住んでゐたのかも知れんぜ。もしかすると、君が僕で、僕が君なのかも知れんぢやないか。」かう言ひながら私はまた笑つた。すると私の笑ひ聲は陰氣な洞窟の中にまるで、その戦士の亡霊が答へたかのやうに反響した。

それから、私はレオの様子を見にゆくのをお忘れてゐたことに氣がついて、私のそばにともしてあつたランプを一つとつて、靴を脱いで彼の寢室にあてられた洞窟の方へそつと出て行つた。夜の風が、彼の室のカーテンをしづかになぶつてゐるのが、まるで眼に見えぬ靈のしわざであるかのやうに思はれた。私はこつそり、窺のやうな室の中へしのびこんで四邊を見廻した。ランプの明りで見るとレオは長椅子の上に横はつて、熱のために、しきりに身悶えしてはゐたが、眠つてゐた。彼のそばには、半身を床の上に投げ出し、半身を石の長椅子にもたせかけて、アステーンがゐた。彼女は片手でレオの手を握つてゐたが、彼女の方も矢張りうとくまどろんでゐた。それはまことに愛すべき、といふよりもむしろ哀切な一幅の畫面であつた。かはいさうに、彼の頬は赤く燃え、眼の下には黒い隈がつき、息をするのも大儀さうであつた。彼の病氣はひどく悪いのだ。私は、またレオが死んで私一人此の世にのこされるんぢやなからうかといふ恐ろしい恐怖に打たれた。しかも、生きてをれば彼はアッシャに對して私の戀仇になるらしい。たとひあの女の待つてゐる戀人といふのがレオではないに

しても、この醜い中年の男の私と、若い美男子のレオとぢや、まるで私の方に勝ち味はない。だが、有り難いことには私の正義感はまだ死んでしまつてはゐなかつた。女王はまだそれを殺してしまひはしなかつた。で私はその場に立つたまま、私の子供、否子供以上のものが、たとひ女王の待つてゐる男であるとしても、生命に別條のないやうにと心から天に祈つた。

それから、私は行くときと同じやうにこつそりと引き返して來た。それでも私はまだ眠ることはできなかつた。レオが重態でゐた姿を見たり、そのことを考へだしたりしたのは却つて、私の不安を益々募らせるばかりであつた。身體はぐたぐたに疲れ、頭は無暗に昂奮して、想像力ばかりが、不自然に逞ましくなつて來る。いろいろな考へ、いろいろな幻影、いろいろな靈感が、驚くほどはつきりと浮んで來る。大抵怪奇なものばかりで、中には氣味の悪いのもあれば、中には、數年來、過去の生活の滓の中に埋もれてゐた考へや感覺を喚び起すものもある。だがそれ等凡ての背後に、上に、あの恐ろしい女の姿がつきまとひ、あの得も言はれぬ蠱惑的な美しさの思ひ出が、それ等凡ての中から輝き出て來るのである。私は洞窟の中をあちこち歩き廻つた。

突然私は、それまで氣のつかなかつたものを見つけた。岩の壁に一つの狭い孔があるのだ。私は燭臺をとり上げて、それをしらべて見た。穴の先は通路になつてゐた。かうした場合に、自分の寢てゐる室に、何處へ通ずるとも知れぬ通路が開いてゐるのを見出すのは、誰だつてあまり氣持ちのよいものではない。通路があるとなれば人が通ることも出来る。眠つてゐる間に通ることも出来るわけだ。

私はその通路が何處へ通じてあるのか知りたいたいのが半分と、何かしなければちつとしておられない不安が半分とでこの通路へはひつて行つた。通路の先には階段があつて、その階段を降りて行くとまた通路になつてゐた。通路といふよりもトンネルと言つた方がよいかも知れぬ。何でも私の判断では、このトンネルは、私たちの室へはひる廊下の真下を通つて、中央の大岩窟を横断してゐるらしい。私はずん／＼歩いて行つた。あたりは墓場のやうにしんとしてゐたが、私は何とも名状しがたい感じといはうか誘惑といはうか、兎に角何物かにひきずられて、進んで行つた。靴下だけ穿いた私の足は、滑かの岩の床の上へ音もなく降りて行つた。五十碼も歩いたと思ふ頃、もとの道と直角に交つてゐる第三の通路へ出た。そこで大變なことが起つてしまつた。強い風がさつと吹いて来て、私のもつてゐた手燭の灯を消してしまつたのだ。私はこの不思議な眞つ暮な岩の陽の中に一人でのこされてしまつたのである。私は直角になつた通路へ二歩ばかり踏みこんで立ちどまつた。若し途中で迷ひ兒になつたら愈々大變だと思つたのである。どうしたらよいであらう。私は燐寸をもつてゐない。眞暗な長い道をあとへ引き返すのは大變だし、さうかといつて一晩その場に立ちつくしてゐるわけにもゆかぬ。それに一晩立ちつくしてゐたところで、恐らく何にもならぬだらう。岩窟の中のトンネルの中では眞晝だつて眞夜中だつて同じやうに眞つ暗に相違ない。私はうしろを振り返つて見た。何も見えなければ何の物音もしない。前の闇をすかして見た。するとたしかに、すつと向うの方に、かすかな火の燃えてゐるやうな光が見えた。あそこまで行けば明りが手にはひるだらう。兎に角しらべて見なく

てはならん。私はゆつくりと、非常に骨を折つて、手を壁にあて、穴にでも落ちては大變だと思つて一歩ごとに足で地面をさぐつて歩いて行つた。三十歩ばかり行くとカーテンの隙間から明滅してゐる明りが洩れて見えた。五十歩行くと、もうすぐ明りのそばへ來た。六十歩進んだ、やれ／＼、私はほつとした。

すぐ鼻の先にカーテンがかゝつてゐるのだ。カーテンには隙間ができてゐたので、私は、その向うにある小さな洞窟をはつきり見ることができた。それは墓場のやうで、中央に燃えてゐる焚火で照されてゐた。焚火の焰の色は白つぼくて煙は上つてゐなかつた。左手には三吋かそこの高さの小さい縁のついた石の棚があつて、その上には屍體らしいものがのせて、何か白いものがかけてあつた。右にも同じやうな棚があつて、その上には、刺繍をした被覆が散らばつてゐた。そして一人の女の姿が、火の上へ身を屈めてちら／＼する焰を見つめてゐた。女は私の方から見ると横向きになつて、屍體の方へ向いて跪ぎいた。身には、黒い被布をまとひ、ちようど尼僧の外套のやうにすつぽりと全身をつゝんでゐた。私がどうしようかと思つてゐたときに、突然起ち上つて黒い外套を脱ぎすてた。

それは實に女王であつたのだ！

女王は私の前でヴェールを脱いだときと同じやうに胸のところを低く切れた身體にびつたり密着した白い肌衣を着て、腰には不氣味な兩頭の蛇をまきつけ、縮れた黒髪はゆつたりと殆んど足のところまで垂れてゐた。併し惡に魅られたやうに私の眼を捉へたのは彼女の顔であつた。だが今度はその美

しさのためではなくて、蠱惑的な恐怖の力のためであつた。美しいことも美しかつたが、その慄へる顔と、上を向いた苦しき眼つきとに現はれた恐ろしい執念深さは、何とも言ひ現はすことのできないものであつた。

しばらくの間私はちつと立ちすくんでゐた。すると、彼女の両手は高く頭の上になり、白衣は金の帯のところまでするく、迂り落ちて、眼もくらむやうな美しい裸體が現はれた。彼女が、指をにぎりしめてそこに立つてゐる間に、彼女の顔には恐ろしい悪の形相が益々加はり深まつて行つた。突然、彼女が若し私を見つけたらどんなことが起るだらうと思ふと、ぞつとして氣が遠くなつた。けれども、たとひ、そこにぐずぐずしてをれば殺されることがわかつてゐたとしても、私はそこから立ち去ることができなかつたであらう。それ程にも私はすっかり魅惑されてしまつてゐたのだ。彼女の握りしめた手が兩側へ下り、又頭の上へ上るにつれて、白い火焰は殆んど天井にとぐく迄舞ひ上つて、その氣味の悪い光は彼女の姿を照し、被覆に包まれた棚の上の白い姿を照し岩窟の隅々まで鮮やかに照した。

象牙のやうな腕は再び下へ下りた。ちようどその時に彼女はアラビヤ語で、疾風のやうな鋭い聲で語り出した。その響きをきくと私の血は凝結してしまひ、忽ち心臓の働きはとまつてしまつた。

「呪はしき女、永久に呪はれてあれ。」
腕が下りると焰も下りる。腕が上ると大きな火の舌が燃え上る。そしてまた下りる。

「呪はしき女の記憶——埃及女の記憶よ呪はれてあれ。」

焰は燃え上り、また下火になる。

「吾よりも美はしきニールの娘、呪はれてあれ、」

「吾が魔法を破りし女、呪はれてあれ、」

「吾が戀人をはなさざりし女、呪はれてあれ。」

焰はまた小さくなつた。

女王は眼の前へ手をやつて、今度は叱咤するやうな調子をやめて、高い聲で泣きだした。

「いくら呪つて見ても何にならう。あの女は妾に勝つたのだ、そして死んでしまつたのだもの。」

それからまた彼女は前よりも一層恐ろしい精力をふりしほつてはじめた。

「呪はしき女、現在ある場所にて呪はれてあれ。吾が呪ひそこへ届きて彼の女の休息を妨げよ。」

「星の空をこえて女を呪へ。彼の女の影、呪はれてあれ。」

「吾が力、そこまで届きて彼女を見出せよ。」

「彼女に吾が呪ひを聞かしめ、黒闇に身をかくさしめよ。」

「彼女を絶望の穴に落ちしめよ、いつか吾彼女を見出すべければ。」

焰はまた下火になり、女王は両手で雙の眼をおほうて泣いた。

「馬鹿なことを、誰が全能の翼の下に眠つてゐるものところまで行けよう？ 妾にだつて行けはし

ない。」

「またもや女王の呪咀ははじまつた。」

「彼女の生れ代れる時彼女を呪へ、呪はれて生れしめよ。」

「生れ落ちたるその日より、眠りにつくその日まで彼女は呪はれてあれ。」

「さなり、呪はれてあれ。かくてこそ吾が復讐成りて、彼女を打ち破るべければ。」

かうして火焰は燃え上つたり下火になつたりして、それがアツシヤの苦しみ悶える眼に反照した。呪ひの聲は洞窟の中に物凄く響き渡り、火焰は明るく暗く明滅した。

しかし、たうとう彼女は疲れたと見えてやめてしまひ、岩の床の上にくづをれて、顔から胸へ美しい毛髪を打ち慄はしながら、身も世もあらぬ思ひに苦しんでひどくむせび泣いた。

「二千年の間」と彼女は呻いた。二千年の間妾はちつと辛抱して待つてゐたのに、年はたてども、世紀は變れども、あの苦しい思ひ出は少しも薄らがない。希望の光りは少しも明るくならない。お、二千年の間、情慾に心を蝕まれ、目のあたりに罪を見て生きてゐるなんて！

「戀しい！ 戀しい！ 私の戀人！ 今度来たあの他國の人はどうしてこんなにあなたのことを思ひ出させるのでせう？ この五百年の間、妾はこんなに苦しい思ひをしたことはない。妾はあなたに罪を犯したけれども、その罪はもう拭ひ去つてしまつたではありませんか？ 何時あなたは私のところへ歸つて来るのですか？ 妾は凡ての物をもつてゐるが、あなたが缺けてゐては何にももたぬと同じ

ことです。妾はどうしたらよいのでせう？ どうしたら？ もしかすると、あの埃及の女はあなたのそばにゐて、妾のことを思ひ出して嘲つてゐることとせう。どうしてあなたを殺した妾が死ぬことができなかつたのでせう？ あ、妾は死ねないのがうらめしい！ あ、！」かう言ひながら地べたにたふれて、心臓が裂けたのぢやないかと思ふまでよ、とむせび泣いた。

急に彼女は泣くのを止めて、起ち上り、着物をなほして、長い捲毛をいらくしながらうしろへかきあげ、柵の上に横はつてゐる屍體の方へ歩みよつた。

「お、カリクラテス！」と彼女は叫んだ。私はこの名をきくとぞつと身慄ひがした。「妾は苦しいけれど、もう一度あなたのお顔を見なければなりません。妾は、妾のこの手で殺したあなたを見るのはこれで三十年振りです」かう言ひながら彼女は、慄へる指さきで、屍體の上にかけてある敷布のやうな布の隅をつかんでちよつと手を止めた。それから彼女はまるで自分の考へてゐることが自分ながら恐ろしいかのやうに、おごそかな嘯聲で再び語り出した。

「あなた、起こしてあげませうか」と彼女はまるで屍體に話しかけるやうに言つた。「さうすれば昔のやうに妾の前に立つてをれるのでせう？ 妾、起してあげることならできてよ。」かう言ひながら彼女は兩手を屍體の上へさし出した。彼女の身體は見るも恐ろしい様に硬ばり、兩眼は光を失つてぢつとすわつて来た。私はカーテンのうしろで、それを見て、恐ろしさに毛髪を逆立てて思はず身じろぎした。そして、氣のせいだつたのかそれとも事實だつたのか知らぬが、被布の下がぶる／＼慄ひ出し、

敷布がまるで眠つてゐる人の胸の上にもかけてあるかのやうにもちあがつたやうな気がした。突然アツシヤは手をひいた。すると屍體も動くのをやめたやうに思はれた。

「つまらない」と彼女は重々しく言つた。「あなたの魂を喚び起すことができないのに假の生命を喚び出して見たつて何にならう？ あなたがたとひその場で起き上つたところで、あなたには妾はわからないのです。たゞ妾の命令のとほりにするだけです。あなたの生命は妾の生命で、あなたの生命ぢやないのですもの！」

しばらく彼女はこんな風にして思ひにしづんでゐたが、やがて屍體のそばに跪いて、唇を被布におしつけて泣きはじめた。この恐ろしい女が、胸の思ひを死人にうちあけてゐる光景は實に物凄くものであつた。私は、もうそれを見てゐることができなくなつたので、踵を返して、がた／＼全身を慄はしながら、眞つ暗なトンネルを、そろ／＼匍ひ出した。そして慄へる胸の中で、地獄の精といふものを見たやうに感じた。

私は無我夢中でよろめきながら進んでいつた。途中で二度轉んだ。一度道を間違へたが幸にもすぐに気がついた。二十分間以上も匍つてゐるうちに、私は、來る時に降りて來た階段をとほつたやうに思つたが、その時にはもうすっかり疲れきつてしまつてゐたのと、恐ろしきとで、床の上に轉んだまゝ、正氣を失つてしまつた。

気がついて見ると、うしろの方の通路へ光がさしこんでゐるのが見えたので、その方へ匍ひ寄つて見ると、かすかな光が小さい階段の下へさしこんでゐるのであつた。私はそれを上つて、無事に私の室へ辿りつき、長椅子に身を横たへて、すぐにぐすり眠つてしまつた。といふよりも寧ろ氣を失つてしまつたといふ方がよいかも知れぬ。

第十五章 アツシヤの裁き

その次に私のおぼえてゐることは眼をあけてジョップの姿を見たことであつた。彼の熱病はもう殆んどなほつてゐた。彼は外の明りのさしこむところに立つて、私の服にブラシをかけるかほりに、それを振つて埃を落し、きちんと疊んで長椅子の下に置き、旅行鞆の中から着替へを出して、その上へのせ、それがすむと、水の一ぱいはひつた壺を見てゐた。それが吾々の洗面器であつたのだ。彼はそれを見ながら獨り言を言ひはじめた。「こんなところには湯もありやしない。奴等が湯を使ふのはお互ひを煮て食ふときだけだらうて。」

「どうしたんだ、ジョップ？」と私は言つた。

「これはどうも、御免なすつて」と彼は頭を掻きながら言つた。「旦那様は眠つていらつしやると思つたもんですから、何だか眠が足りないやうですね。旦那様の眼を見ると昨夜はまるでお眼みにならなかつたやうに見えますよ。」

私は返事をするかほりに口の中で呻つた。成る程私は昨夜はまるで眠られなかつたにちがひないの

だ。しかもたゞ眠られなかつたのではなくて、一晚中此の上ない恐ろしい目にあつてゐたのだ。

「レオはどうしたかね？」

「矢つ張り同じでございますよ。すぐになほりなさらないともう駄目ですよ。尤もあのアステーンといふ野蠻人はまるで洗禮を受けた基督教徒みたいなのに、一生懸命につくしてありますがね。あの女はしよつちゆうレオ様につききつて看護してゐますよ。で私が差しでがましいことでもしようものなら大變です。髪を逆立てて、何だかわけのわからぬ言葉で私を呪ふんです。あの顔付きでみるとたしかに呪つてゐるのだらうと私は思ふのです。」

「その時にお前はどうする？」

「私は丁寧にお叩頭をして、かう言ふのです。『娘さん、私には貴女の位置がまだよくわからんので、まだレオ様の奥さまと認めることはできません。私にとつてはレオ様は大切な御主人ですから、御主人が病氣で不自由をしてゐなさりや、看護する義務があるのです。それで私は私の足腰がた、なくなるまでは、私の義務をつくすつもりです』とね、それでもあの女はちつともきかないで、猶更ひどく私を呪つて追つ拂ふのです。兎に角こんなところへやつてきたのがまちがつてたんですよ。私どもは裁きを受けたのです。しかもその裁きの半分はまだ残つてゐるんです。私どもは、この氣味の悪い洞窟の中に、幽霊や死骸と一緒にいつまでもゐなきやならんのですからね。」

ジョップの言はは、昨夜のやうな恐ろしい一夜を過してきた私にとつては愉快な言葉ではなかつ

た。しかも彼の言葉はほんたうのことなのだ。たとひレオの病氣がなほつて、女王が吾々を放免してくれて——これは實にあやしいことだが——それから又女王がいつか怒りにかられて吾々をならみ殺すやうなこともなく、アマハツガー人に燒毒で殺されることも免かれたとしたところで、何十哩も綱の目のやうにつゞいてゐる沼地の中の道を逃げかへることなどは到底できはしないのだ。たゞこの運命に耐へてゆくより外にしようがないのだ。それに私は、むしろそれを望んだ。といふのはアツシヤの美しさが忘れられないのだ。私はそのことをこの眞つ晝間に眞面目で言ふ。昨夜見た恐ろしい光景も、私の頭からこの煩惱を追つ拂つてはくれないのだ。實を言へば、これを書いてゐる今でもそれを忘れかねてゐるのだ。

私は起き上ると着物を着て食堂にあてられてゐる例の塗油室へ行つて食事をした。食事を私に運んでくれたのは、前に言つた啞の娘であつた。食事がすむと私は氣の毒なレオを見に行つた。彼はもうすつかり正氣を失つてゐて、私の顔を見ても誰かわからない程の始末だつた。私はアステーンにどうしたのだらうと訊ねて見たが、彼女は、たゞ頭を振るばかりで、しくしく泣き出した。明かに彼女ももう殆んど希望を失つてゐるのだ。そこで私は、もし出来ることなら、女王に、レオに會つてくれるやうに説きつけて見ようと決心した。若し女王に病氣を治す力があるなら、きつと治してくれるに相違ない——少なくとも彼女は自分では病氣を治すことができると言つた。私が室の中にある間に、ピラリがはひつて來た。そして彼もレオを見ると首を振つた。

「夕方には息をひきとるだらう」と彼は言った。

「そんなことはないでせう、長老。」と私は答へて、重い心で出て行つた。

「全能の女王があんたをお召しですぞ、狒々さん」と老人はカーテンをくゞるが早いか言つた。「だがよく氣をつけなさるがい。昨日あんたが女王様の前へ出て這ひつくばらなだったので、わしはもうあの場であんたが殺されることぢやらうと思つてゐたですぞ。女王さまはこれから、あんたと獅子とを撃ち殺さうとした奴等をお裁きになるところですわい。さあ、速くお出で。」

私は彼のあとからついて廊下を歩いて行つた。吾々が中央の洞窟へ來ると澤山のアマハツガー人が急いでそこを通つてゐるのが見えた。中には上衣を着たものもあり、豹の皮だけしか身に着けてゐない者もあつた。吾々は群集の中に混つて、この大きな殆んど果てしない洞窟の中を歩いて行つた。兩側の岩壁には非常に精巧な彫刻がしてあり二十歩ごとに大洞窟と直角に廊下があつた。ピラリの言葉によると、それは皆墓所へ通ずるものであつた。それは皆この土地に以前に住んでゐた住民が岩をくりぬいてこしらへたものである。今では誰もこの墓所へ行つて見るものはないとのことであつた。私は、いつか機會があつたら、そのなかへはひつて考古學的研究をして見たいと内心考へて楽しんでゐた。

たうとう洞窟のつきあたりへ來た。そこには、吾々が猛烈な襲撃を受けたところにあつたのと殆んど寸分もちがはぬ岩の臺があつた。それによつて考へて見ると、この臺はきつと宗教上の儀式をするための、特に死人の埋葬に關する儀式をするための祭壇らしい。ピラリの話ではこの臺の兩側には廊下があつて、そのつきあたりの洞窟には死骸が一ぱいあるといふことであつた。「實際に」と老人は附け足して言つた。「此の山ぢゆうが死人だらけですわい。しかもその死骸が大抵、原形のまゝにのこつとりますよ。」

この臺の前には澤山の男女が立つて、彼等に特有の陰氣な様子をしてじろくあたりを見まはしてゐた。これを見たら、どんな陽氣な人間だつて五分間とたぬうちにすつかり氣が滅入つて來るに相違ない。臺の上には、象牙を嵌め込んだ黒い木製の粗末な椅子があり、椅子には、草の纖維で編んだ座席がこしらへてあり、木の板でこしらへた足置き臺が、椅子の骨につけてあつた。

急に「女王だ、女王だ！」といふ叫聲が起つた。すると見物の群集は一齊に地べたに平伏した。彼等は一人々々、そして全體に即死したやうにぢつと身を伏せた。そして、私一人が殺戮のあとにたつた一人生き残つた者のやうに立つたまゝであつた。それと同時に、護衛兵の一隊が左側の廊下から列をつくつて出て來て、臺の兩側に整列した。それから二十人ばかりの啞の男と同數の啞の女とが燈火をもつてあらはれ、最後に、頭から足まで白衣をまとつた脊の高い姿があらはれた。それが女王であることは私には一目でわかつた。女王は臺の上に上つて椅子に腰を下し、私に向つて希臘語で話しかけた。それはその場の者共に話の内容を知らせたくないからであらうと私は思つた。

「こちらへおいでなさい、ホリイ」と彼女は言つた。「そして妾の足下に坐つて、妾があなたを殺さう

とした者どもを裁くのを見てゐなさい。妾の希臘語が跛者のやうにとんちんかんになつても勘辨して下さいね。あまり長い間聞いたことがないので舌が硬ばつて、うまく言葉が出ないのでです。」

私は敬禮して、臺の上に登り、彼女の足許に坐つた。

「昨夜はよく眠れましたか、ホリイ？」と彼女は訊ねた。

「よく眠れませんでした！」と私はすつかりほんたうのことを言つた。そして内心、私が昨夜の夜中に何をしてゐたかを彼女は知つてゐるのぢやないかと心配した。

「さうですか」と彼女は少し笑ひながら言つた。「妾もよく眠れなかつたのよ。昨夜は、妾はいろんな夢を見ました。それはあなたのせゐですよ、ホリイ。」

「どんな夢を御覧になつたのです、アツシヤ？」と私は何げなく訊いた。

「妾はね」と彼女は急いで答へた。「憎い人と戀しい人との夢を見たの」それから彼女は話題をかへようとするかのやうに、護衛兵の隊長に向つてアラビア語で言つた。

「みんなの者を妾の前へつれておいで。」

隊長は最敬禮をして、部下のものをつれて右手の廊下へ出て行つた。護衛兵だけは、腹這ひにならずに立つてゐたのである。

それからしばらく沈黙がつゞいた。女王はヴェールに覆はれた顔を両手の上のせて考へにしづんでゐるらしかつた。群集は相變らず腹這ひになつてはゐたが、少しばかり身體をねぢつて、片眼で吾

吾を見てゐた。女王が公衆の前に姿を現はすことは滅多にないと見えて、彼等はこんな窮屈な姿勢をしのび、危険を忍んでまでも、彼女を見たがつてゐたのである。いや彼女といふよりも彼女の纏ひ物といった方がよいかも知れぬ。といふのは、私以外には彼女の顔を見た者は、その場には一人もゐなかつたのだから。そのうちにたうとう、ちら／＼する光が見え、廊下を歩いて来る聲音がきこえた。

やがて護衛兵の一隊が列をつくつてはひつて來た。そのあとからは、吾々を殺さうとした連中の中生残者が二十人あまりはひつて來た。彼等の顔にはその野蠻な心の中に一ぱいになつてゐる恐怖が性來のふくれつ面の中にもありありと見えた。彼等は臺の前に並んで、見物人と同じやうに、洞窟の上に腹這ひにならうとした。だが女王はそれをとめた。

「それには及ばん」と女王は此の上なくやなしの聲で言つた。「い、から立つてゐなさい。そのうちに、手足を伸してゐるのに飽きてくるだらうから」かう言ひながら彼女は朗らかに笑つた。

私は運命の宣告を受けた一同の者どもが恐怖のためにち／＼み上つたのを見た。彼等は兇猛な悪人ではあるが、それでも私は氣の毒に思つた。數分間、恐らく二三分間は何事も起らずにすぎた。その間、女王の頭の動き工合から推して考へると——勿論彼女の眼は見えなかつたので——彼女は罪人等を一々、ゆつくりと、注意ぶかくしらべて見てゐたやうであつた。遂に彼女は、私に向つて、靜かな、落ちついた口調で話しかけた。

「あなたはこの連中をみんな記憶えておいでですか？」

「え、大抵はおぼえてをります」と私は言った。私がさう言ふと、彼等は私の方をきつと睨んだ。「では妾と、こゝにある皆の者に、前に妾がきいた話をしてきかせて下さい」

さう頼まれたので、私はできるだけ簡単に食人の酒宴のことや、吾々の氣の毒な召使のマホメッドが苦しめられたことを話した。被告も聴衆も、女王も皆、だまつて私の話をきいてゐた。私の話がすむと女王はビラリの名を呼んだ。ビラリは、起ち上りはしないで、たゞ地べたにつけてゐた頭だけを上げて、私の話は事實に相違ないことを證言した。それ以上の證據しらはなかつた。

「みんな、聞いたであらう」と、たうとう女王は、いつもの調子とはまるで異つた、冷たい、はつきりした聲で言つた。一體、その時々々の氣分によつて聲の調子ががらりとかはつて來るのはこの不思議な女の最も著しい特徴の一つだつたのである。「何か言ふことがあるか、これから處刑をするのに不服があるか？」

しばらくの間は答へる者はなかつた。けれども、たうとう一人の立派な、胸の廣い、鷹のやうな眼をした中年の男が口を切つた。彼は彼等が受けた命令は白人に危害を加へてはならぬといふ命令だけで、黒人の下男のことについては何ともお沙汰がなかつたから、あの死んだ女にそゝのかされて、あの黒人をこの國の古式によつて燒壺で殺して食はうとしたのであること、又彼等が吾々を襲撃したのは一時の怒りの發作だつたので、今では皆ひどく後悔してゐることなどを申し立て、最後に彼等に慈悲を垂れたまはんことを女王に歎願し、せめて沼の中へ投げこんで死ぬも生きるも運にまかせるやう

なお取り計らひが願ひたいと懇願した。併し彼の顔色から察すると、所詮女王の慈悲を殆んど期待してはをらぬやうであつた。

やゝあつて、女王ははじめは低い聲で言つた。その聲はだん／＼強くなつて、遂には洞窟の中に鳴り響くやうになつた。「畜生ども、人の肉を食ふ畜生ども、お前たちは、二つの罪を犯したのぢや。第一に、他國の人たちを、白人と知りつゝ、襲撃して、その下男を殺さうとした。それだけでもお前たちは十分殺される資格はあるのぢや。しかしそれだけではない。お前たちは、妾の命令にそむかうとしたのぢや。妾は、お前たちの父であり、妾の下僕であるビラリをとほして妾の命令を傳へたではないか。客人たちを手あつくもてなすやうに命じたではないか。それだのにお前たちは、その客人たちを殺さうとしたのぢや。もしあの人たちが人間並以上の勇氣と力をもつてゐなかつたら、お前たちのために慘たらしく殺されてゐたのぢや。お前たちは子供の時分から、女王の法律は永久不變の法律であつてすこしでもそれを破る者は死罪になることを教へられてゐなかつたのか？ 妾の口から出る片言隻句は皆法律ぢや。このことは、お前たちがまだ子供の時分に父から聞いたぢやらう？ この洞窟がくづれ落ちやうとも、太陽がその歩みをとめやうとも、妾の意志をとめることはできないのぢや。お前たちは皆悪い奴ぢや。骨の髄までの悪人ぢや。お前たちの心の中には春の泉のやうに惡の泉が湧きかへつてゐる。妾があなかつたら、お前たちは、とほの昔に、仲間同志で殺しあつて、もう此の世にお前たちの種は残つてゐない筈ぢや。ところで、お前たちは、妾の客人を殺さうとし、あまつ

さへ妾の命令にそむかうとした。その罪にむくいるために妾はお前たちを次のやうに處罰する。これから拷問の岩窟につれてゆき、拷問者の手に引きわたし、明日の日没になつてもまだ生きてゐる奴は、お前たちが妾の客人の下男を殺さうとしたのと同じ方法で殺してしまふ。」

女王の言葉が終ると、かすかな恐怖の囁きが洞窟の中に起つた。被告等は、彼等の運命のおそろしさを知ると、日頃の無感覺な態度をすて、しまつて、地べたにたふれて、見るもむごたらしい様子でゆるしを乞ひながら泣いた。私もアツシヤに向つて彼等の助命をたのみ、それができなければせめてもつと恐ろしくない殺しかたで處罰してくれるやうに願つた。だが女王の決心は鐵石の如く動かさなかつた。

「ホリイ」と彼女はまた希臘語で言つた。實を言ふと彼女の希臘語は、大抵の人に劣らぬ程上手ではあつたが、アクセントが少し變つてゐるので私には聞きわけの骨が折れた。「ホリイ、それはできません。もしこの狼どもに少しでも慈悲をかけやうものなら、あなた方の生命は一日だつて安全ではないのです。あなたにはこの連中がどんな奴等かわからないのです。奴等は血をなめる虎で、今でもあなた方の生命に饑ゑてゐるのです、あなたはどうして妾がこの連中を支配してゐると思ひなされるの？ 妾には一聯隊の護衛兵しかないのでから武力で治めてゐるのぢやありません。恐怖で治めてゐるのです。妾の帝國は想像の帝國です。大抵私は人の一生に一度づゝは、今したやうにして、二十人の者を拷問にかけて殺します。妾が残酷だとか、あんな下等なものどもに復讐をするのだとか思つ

て下さると困りますわ。あんな奴等に復讐をして何になります？ 妾が怒りにかられて殺すやうにも見ませうし、妾が意地悪のために殺すやうにも見ませうが、決してさうではないのです。空の小さい雲はわけもなくあちこちに飛んでゐるやうに見えますが、その雲はひどい暴風に押されて動いてゐるのです。妾の場合もやはりさうなんです。妾の氣分の變化は小さい雲のやうなもので、發作的に變つてゐるやうに見えるでせう。けれども、その背後には、妾の目的の大きな風が常に吹きすさんでゐるのです。」かう言つてから、彼女は急に護衛兵の隊長に向つて附け足した。

「妾の命令どほりにしなさい！」

第十六章 コオルの墓所

囚人どもがつれ去られると、アツシヤは手を振つた。すると見物人は後を向いて、散りゆくになつた羊のやうに這ひながらその場を去りはじめた。しかし彼等は臺から大分離れたところまで行くと、起ち上つて歩いて行つた。あとには女王と私と嘔者たちと、僅かばかりの護衛兵とがのこつた。護衛兵の大部分は囚人どもと一緒に出て行つたのである。これはよい機會だと思つて、私は、レオの病氣の重いことを話して、診に来て貰ふやうに頼んだ。ところが、女王は、あの熱病にかつた者は、日没か曉方でなければ死なないから、夕方までに死ぬ氣遣ひはないと言つて、きいてくれなかつた。そしておまけに、あの病氣は彼女が治すまでに出來るだけ進行させておくのがよいのだと言つた。そこ

で私は起ち上つてその場を去らうとすると、女王は私を呼びとめて、少し話したいことがあるし、洞窟の中の色々な不思議なものを案内したいから、あとからついて来るやうに私に言った。

私はすっかり彼女に魅せられてしまつてあつたので、たとひ行きたくなかつたにしても、いやとは言へなかつた。そこで私はお叩頭をして彼女の申出に同意した。すると彼女は椅子から立ち上つて、啞娘たちに何か手真似をして、臺から降りた。女王が臺を降りると四人の啞娘が手燭をもち、二人は吾々の前に、二人は吾々のうしろに並び、他のものは、護衛兵と、もにその場を立ち去つた。

「さて。」と彼女は言った。「こゝにある不思議な物を少しばかり御覧になりたいとは思ひませんか、ホリイ？ このまあ大きな岩窟を御覧なさい。これまでに、こんな大きな洞窟を見たことがありませんか？ しかも、この洞窟は、他の澤山の洞窟と、もに、この平原の都に昔住んでゐた民族がこしらへたものなのです。このコオルの人民は、實に偉大な、不思議な人民だつたにちがひありません。しかし、彼等は埃及人と同じやうに、生きてゐる者よりも死んだ者のことを多く考へたのです。この洞窟とあの果しのない廊下とを掘るのにどれだけの人が何年位か、つたとあなたは思ひます？」

「數萬人もかゝつたでせうね」と私は答へた。

「さうですよ、ホリイ。コオル人は埃及人よりも古い國民です。妾は鍵を見つけたので彼等の書いたものが少しは読めますが、まあ御覧なさい。これは彼等が最後にこしらへた洞窟の一つですよ」かう言ひながら彼女は、そばにある岩の方を向いて、啞娘に、手燭をかゝげるやうに合圖した。臺の上には、象牙の杖を手にもつて椅子にかけてゐる老人の姿が彫つてあつた。椅子の下には、私が前に言つたやうな妙な文字で、簡単な文句が記してあつた。アツシヤは、ところ／＼行き詰りながら、聲を上げてそれを讀んで翻譯した。

「コオルの都の創設より四千二百五十九年に、此の洞窟（墓所）は後代の高貴なる市民の墓場とするために、コオル王チスノが、コオルの人民と奴隸とを使役し、三代の日子をかけて造營せるものなり。天の上なる神の祝福よ、彼等の仕事の上にあれ、而してその上に肖像の刻まれたるチスノ大王の眠りを、やがて眠りより覺むる日まで安らかならしめよ。又大王の從者、並びに今地下に眠れどもやがて起き上り来るべき大王の一族の眠りを安らかならしめよ。」

「わかつたでせう、ホリイ」と彼女は言った。「この人々はこの洞窟ができてから四千年も前にこゝに都をこしらへたのです。その都の廢墟は今でもあの平原に残つてゐますがね。しかも、妾が二千年前にこゝへ來たときにも、こゝはちやうど今と同じだつたのですよ。それを考へてもこの都がどんな風に古いものかわかるぢやありませんか。だがまあ妾について來て御覧なさい。この大國民がどんな風にして滅亡したかを見せてあげます」かう言ひながら彼女は洞窟の中央へ行つて、床にあいてゐる大きな穴へ丸い岩のはめこんであるところまで來てたち停つた。「これは何だと思ひます？」と、彼女は言つた。「私にはわかりません」と答へると、彼女は洞窟の左側へ行つて、入口の方を向きながら、啞娘に手燭をかゝげるやうに合圖した。その壁には赤い繪具で、さつきと同じやうな文字で何か書

いてあつた。アツシヤはこの長い文章を私に翻譯してきかせた。

「コオル大寺院の僧なる吾れ、ユニスは、コオルの創設より四千八百三年に、この焼場の岩に書き記す。コオルは没落せり！ 大廣間の祝宴も今はなく、コオルはもはや世界に覇を唱ふることなく、その海軍は世界に通商に出かくることもなくなりぬ。コオルは没落せり。その雄大な事業も、コオルの全都市も、港も、運河も、今は狼と梟と野鳥と、後に來れる蠻族との横行に委ぬるに至りぬ。今を過ぐる二十五ヶ月前、一團の雲、コオルと、その數百の都市との上にかゝり、その雲の中より疫病來りてコオルの民を老幼の別なく殺してあまさず。彼等は老若、貧富、男女、貴賤の別なく、皆黒くなりて死したり。疫病の猛威は日に夜をついで益々猖獗を極め、疫病より免がれたものは饑餓のため死にはたり。コオルの民の屍體は、あまりに數多くして、古式にのつとりて保存すること能はずなり、この洞窟の床の穴より、下なる大坑に投げこまれたり。かくて遂に、全世界の光なるこの大國民の生殘者は海岸に赴きて船に乗り北の方に向けて出航せり。いまこれを書き記す僧ユニスなる吾れはこの大都市の最後の生殘者なり。されば他の都市には未だ生殘者ありやなきやは吾の知るところに非ず。コオル帝國は今はなく、寺院の中には禮拜すべきものなく、凡ての宮殿は空しく、王侯も、隊長も、商人も、美女も、今は永遠に地上より過ぎ行きたるをもつて、吾れはいま死するに臨み、いたましき心もてこれを書き記すものなり。」

私は長大息した。この偉大な國民のたつた一人の生殘者が、自らも亦闇に落ちゆく前に、その國民の運命をここに記してゐた姿は思つただけでもぞつとした。この老僧のその時の氣持はどんなであつたらう。それは正に警世家の好箇の題材である。畫家の題材である。否、考へることを知る凡ての人の題材であるではないか！

「ねえ、ホリイ」とアツシヤは私の肩に手をのせて言つた。「この北の方へ船出して行つた人たちが最後の埃及人の先祖だとは思ひませんか？」

「私にはわかりませんが」と私は答へた。「世界は随分古いもの、やうですね。」

「古いつて？ さうです、ほんたうに古いですよ。次から次へと藝術に秀でた富強な國民が起つては又過ぎ去つて行つて、その記憶はもう残つてゐないのです。このコオルの國民だつてその中の一つに過ぎないので。コオルの國民のやうに、洞窟でも掘つてのこしておかなければ、時が人間の事業を蝕んでゆきますし、海にのまれることもあれば、地震で埋没することもありますからね。地上に昔何があつたか、またこれから先どうなるかを知つてゐる者はありません。ずつと昔へブライの賢者が言つたやうに日の下に新しき物なしですよ。ですけれど妾の考へではコオルの人民は全部死にはつたのではないらしいですね。他の都市には幾らか生き残つたものがあつたやうに思はれます。そして、南の方から來た蠻族か、それとも妾の先祖のアラビヤ人がこの國へ押し寄せて來て、この國の女を妻としてできたのが、現在のアマハツガー人ではないでせうか。だが、まあこちらへ來て御覽なさい。これからあの記録に記してあつたこの洞窟の下にある大坑を御案内ませう。こんなものはきつと二

度と見られますまいから。」

そこで私は彼女のあとについて中央の洞窟から開いてある側道へはひり、澤山の階段を降りて、洞窟の床から六十呎以上もあらうと思はれるところまで下つて行つた。道が行き詰りになつたところでアツシヤは立ち停つて、啞娘たちに、手燭をかゝげるやうに告げた。なる程彼女が豫言したとほりそれは二度と見られさうにもない光景であつた。吾々の立つてゐたところは大きな坑の縁であつた。その坑の大きさは私の考へでは倫敦のセント・ポオル大寺院の敷地ほどもあつて、その中には文字どほり、人間の骸骨が一ぱいに積み重ねられてゐた。あまりのことに私はあつと聲をあげた。すると驚いたことには、その反響によつて、數千年來平衡を保つてゐた骸骨の塚が一角から崩れはじめ、遂に坑の中の全體が搖ぎ出して、まるで骸骨が吾々に挨拶をするために起ち上つたやうな光景を呈した。「もうあちらへ行きませう」と私はその場から歩き出しながら言つた。「これが、疫病で死んだ人たちなんですかね？」

「さうです。コオル人は埃及人と同じやうに死人に防腐劑を施したんです。しかしその技術は埃及人よりも巧みで、埃及人は内臓や腦髓などを取り去つてしまつたのですが、コオル人は血管の中へ防腐劑を注射したので全身がすつかり保存できたのです。だがまあ、ちよつとこゝを御覽なさい。」かう言ひながら彼女は、小さい入口の前に立ちどまつて、啞娘に明りをかゝげさせた。その室は吾々の寢室と同じやうな小さい室であつたが、石の寢臺が一つではなくて二つあつた。寢臺の上には黄色い麻布

で覆はれた人の姿が横はつてゐた。

「その布を脱がして御覽なさい、ホリイ」とアツシヤは言つた。私はその言葉に従がつて手を伸ばしたが、すぐに又ひつこめた。何だか冒瀆のやうな氣もしたし、それに實を言へば、私はその場の嚴肅さに壓倒されてしまつたのだ。すると彼女は私の恐がるのを見て笑ひながら、自分で布をめくつた。その下にはもう一枚薄紗がかぶせてあつた。それもめくると、三十五かそこらの、たしかに美人だつたらしい白衣につゝまれた女の肉體があらはれた。何千年とも知れぬ太古に死んだのであるにも拘らず、くつきりした顔だち、きやしやな肩、長い睫毛は今でも仲々美しかつた。そして腕には一人のみどり兒が抱かれてゐた。この哀切な場面に私は思はず涙のにじむのを禁ずることができなかつた。私は無量の感慨に打たれながら、そつと被覆をもとのとほりにかぶせて、今度は反對の側の棚にある屍體の方へ行き、前と同じやうに、被覆をとりのけた。それは矢張り白衣をまとうた可成り老齡の男であつた。多分あの女の夫であつたのだらう。そして妻の死後長く生きのこつてゐて、最後に妻のそばに横はつて永遠の眠りについたのであらう。

それから吾々はこゝを出て又別の墓所へいつた。しかし、次々に見た色々のことを書いてゐてはあまり長くなるからやめる。たゞ、吾々が一番最後に訪れた墓所については一言しておかねばならぬ。それははじめに見たのよりもつと哀切なものであつた。その墓所には二人の屍體しかなく、この二人は同じ一つの棚の上に一しよに横はつてゐた。墓衣をとりのけて見ると二人の若い男女が胸と胸とを

抱きあつて横はつてゐた。女は男の腕に顔をのせ、男の唇は女の額におしつけられてゐた。男の上衣を脱がして見ると、その心臓の上に刀傷があり、女の美しい乳房の下にも同じやうな刀傷のあとがあつた。その傷が女の玉の緒を断つたものらしい。その上の岩には、三つの言葉がほりつけてあつた。アツシヤはそれを翻譯してきかした。それは死婚者といふ文字であつた。

この二人の男女の生前の身の上はどうであつたであらう。死んでもなほはなれないこの二人の美しく若い男女の身の上を私は瞑目して空想した。私は一時、殆んど時を超越してしまつた。私の洞察力は、過去の神祕に徹したやうに思つた。

しばらくするとアツシヤは、死せる二人の戀人に墓衣をかけてやりながら、おごそかな、鋭い聲で私に話しかけた。「これが人間の運命です。妾たちはみんな、しまひには、墓場へ、そして墓場をつむ忘却へ行かねばならぬのですわ。こんなに長生きをしてゐる妾だつて同じです。その時になつたら、妾が自然から少しばかり知識をとつて、ほんの僅かの間生命を伸してゐたことなどが何になりませう。時の歴史に於て一萬年が何でせう？ 十萬年が何でせう？ それは無にひとしいではありませんか？ 太陽の前に消えさる朝霧のやうなものではありませんか？ それは假睡の時のやうに、過ぎてしまひ、冬の雪のやうにとけてしまふではありませんか？ これが人間の運命です。この運命はきつと妾たちをもとらへるのですわ。妾たちも眠るのです。けれどもたしかに又眠りはさめます。そして覺めてはまた眠るのです。眠つては覺め、覺めては眠つてゐるうちに、遂には世界が死滅してし

まひます。妾たちの、それからこゝに眠つてゐる二人の最後のどんづまりは生でせうか、それとも死でせうか？ 死は生の夜ですから、夜からはまた明日が生れ、明日からはまた明日の夜が生れます。けれども日も夜も、生も死も、それがはじめに出てきたもの、懐へ呑みつくされた時には、吾々の運命は一體どうなるでせう？ ホリイさん、そんなに遠くまで見る事のできる人があるでせうか？ 妾にはできませんわ！」

それから彼女は急に言葉の調子をかへて、附け足した。

「もうこれで澤山ですか？ それともつとこの墓所の不思議を色々御案内しませうか？ コオルの國王チヌノの眠つてゐるところへ御案内しませうか？」

「もう澤山です、女王」と私は答へた。「私はもう死の力に壓倒されてしまひました。人間といふものは弱いもので、自分の最期を待つてゐるこの屍體の中にあるとすぐに變な氣になつてしまひます。どうぞ私をこゝからつれ出して下さい、アツシヤ！」

第十七章 ほつと一息

啞娘のか、けてゐる手燭の光は、ひとりで闇の中を漂うて行くやうに進んでゆく。吾々はそのあとからついて行つた。するとまもなく、前日ピラリが四つん這ひになつてはひつた女王の控への室へ通ずる階段についた。私はこゝで女王に別れをつけようとしたが、女王はそれを肯かなんだ。

「まあおはひりなさい、ホリイ」と彼女は言った。「實を言ふと、妾はあなたの話をきくのが面白いのです。まあ考へても見なさい。この二千年の間妾の話し相手といつては奴隷か、でなければ妾自身の魂だけだったのです。でもそのために大分知恵を得るところはありましたが、矢つ張りそれには飽きてきたのです。記憶が與へてくれる食物は苦いので、希望の齒でそれを噛まねばならぬのです。あなたの頭はまだ若い人に似つかはしく柔いけれど、物を考へる人の頭ですわね。あなたを見ると、妾は、妾が以前にアテンヤ、ベツカヤ、アラビアで議論をした老哲學者を思ひ出しますわ。あなたの様子にはまるで古い書類をひつくりかへして讀みにくい希臘文字ばかり讀んで過して來た人のやうなところがありますからね。ですからカーテンを開けて妾のそばにおかけなさいね。そして果物を食べたり、面白い話をしたりしようぢやありませんか？ 妾はまたヴェールをとつて見せますわ。あなたを私を見て美しいと言ひましたわね。昔の哲學者もやつぱりさうでしたのよ。」

彼女は躊躇せずに、白いヴェールを脱ぎすてて立ち上つた。そして、皮を抜いたときのきら／＼した蛇のやうな、眩い、素晴らしい姿をあらはして、ちつと私を見つめ、銀鈴のやうな聲でかる／＼笑つた。

彼女の氣分は一變してゐた。それは焰を燃して、死んだ戀仇を呪つてゐた時のやうに、憎悪と苦悶に充ちた形相ではなかつた。罪人を裁いた時のやうに、氷のやうな物凄さももうなかつた。それは勝ち誇つたヴィナスのやうであつた。輝かしい、生命が、彼女の身體から流れ出てゐるやうであつた。女そのものであつた。

「ねえ、ホリイ、そこに、妾の見えるところにお坐りなさいね。そして、ほんたうのことを言ふと、妾あなたにほめていたゞきたいのよ、妾は美しくつて？ い、え、そんなに急いで言つちやいけたいわ。もつとよく見て頂戴、妾の姿から、妾の手足から、髪から、皮膚の白さまで、みんなよくしらべて頂戴、そしてほんたうのところを言つて頂戴！ どうです、ほんのちよつとしたところでも、たとへば睫毛の曲りかた一つだつて、この世の中に妾位美しい女が他にあつて？ 妾の腰は少し大きすぎるよ、あなたは思ふでせう。だけどさうぢやないのよ。大き過ぎるのはこの金の蛇なのよ。だからきちんとしまらないのよ。まあ手をかして御覽、そして兩手で妾の腰のまはりをはかつて御覽、少し力を入れると兩手の指の端がと／＼くでせう。ね、ホリイ！」

私はもう堪らなくなつてしまつた。私はたゞの男だのに、彼女は女以上のものであつた。私はその場で彼女の前に跪いて、しどろもどろの言葉で、心の底から彼女を崇拜してゐるといふこと、彼女と結婚するためなら死もいとほぬといふことを告げた。私でなくてどんな男だつて、その時の彼女の姿を見て思ひを焦がさずにあるわけには行かなかつたであらう。しばらくの間彼女はちよつと驚い

て妾を見てゐたが、すぐに手を拍つて陽気に笑ひ出した。

「ずいぶん早いね、ホリイ！」と彼女は言つた。「あなたを妾の前に跪かせるのに何分か、るかと思つてたの。ずいぶん長いこと妾は男が妾の前に跪ぐのを見なかつたわ。どんなに物を識つても、どんなに年を老つても、女は男に跪かれるのを見るのが楽しいものよ。この楽しみが女のもつてゐるたゞ一つの権利ですからね。あなた、どうしようとするの？ あなたは自分のしてゐることがわからないの？ 妾はあなたのものではないと言つたでせう。妾の戀人は一人しかない。それはあなたぢやないのよ。ねえホリイ、あなたも賢い人だけれど、矢つ張り、煩惱のとりこになるとたゞのお馬鹿さんね。あなた妾の眼が見たいの？ 妾に接吻がしたいの？ い、わ、見たければ御覽なさい一かう言ひながら彼女は私の方へ身體をまげて、黒い、泌み入るやうな眼でちつと私の眼をみつめた。「それから、したければ接吻もしてもい、わ、有り難いことには接吻しても痕はのこりませんからね、心にだけは痕がのこるけれど。だけどあなたがもし妾に接吻したら、あなたは妾が戀しくなつて、そのあまり死んでしまふにきまつて、よ。きつとさうですよ。」かう言ひながら彼女は、更に私の方へ近く身體を屈けた。彼女の柔い毛髪は私の額に觸れ、彼女の芳ばしい呼吸は、私の顔にふりか、つたので、私は氣が遠くなつてしまつた。その時突然、私が、彼女を抱きしめようと思つて手を伸した瞬間に、彼女は身體を眞直に伸した。彼女の様子はまたがらりと一變した。彼女が手を伸してそれを私の頭の上へ置くと、彼女の指の先から何かしら冷たいものが流れ出したやうな氣がして、私は常識に立ち返つた。

「もうこんなみだらなお芝居はよしませう」と彼女は少し嚴肅な色を見せて言つた。「よくおき、なさい、ホリイ。あなたは善良な正直なかたですから、妾はあなたの身を滅ぼしたくないのです。妾はあなたのものぢやないと言つたでせう。ですから、妾のことなどもう忘れておしまひなさい。あなたには妾がまだよくわからないのです。今からほんの十時間前に、妾が激情にかられてゐるときに、妾を御覽になつたら、あなたは、きつと恐ろしさに慄へて妾のそばへもよりつけなかつたでせう。妾の氣分は色々變るのです。あの鉢の水のやうに妾の心は色々なものを反射します。けれどもそれはみんな過ぎ去つて忘れられてしまふのです。けれども、水はやつぱり水であるやうに妾は矢つ張り妾ですわ。妾の本質にかはりはないのです。ですから、妾がどんな風に見えても、そんなことは深く氣にとめないで下さいね。あなたには妾がどんな人間であるかはわからないのですから。今度妾にうるさくしなされると、妾はヴェールをきて顔をかくしてしまひますよ。」

私は起ち上つて、彼女のそばのクッションをしいた長椅子の上に身をしづめた。風が吹き過ぎたあとでもまだ木の葉が慄へてゐるやうに、私の狂暴な情慾は一時過ぎ去つたけれども、なほ私は慄へてゐた。

「それで」と彼女は言葉を續けた。「この果物をお食べなさいな。人間のほんたうの食物はこれだけですわ。そして妾よりも後に生れて、今日希臘や羅馬や埃及や、それよりむかうにある蠻人たちを支配

してあるといふヘブライの救世主の哲學を妾に話して聞かして下さいな。それはよつほど變つた哲學だつたのでせう？」

私はその時まで少しは氣をとりなほして、私の弱さを見せたことをひどく恥ぢながら、できるだけ丁寧ていねいに基督教の教義を彼女に話して聞かせた。だが彼女は天國と地獄との教理の外には大して注意を拂はないで、専らその教義を説いた人にだけ興味を惹かれてゐた。私はまた彼女の生國であるアラビアにもマホメッドといふ別の豫言者が現はれて、多くの信者をもつてゐることを話してきかせた。「あゝわかりました」と彼女は言つた。「つまり新しい宗教が二つあるわけですね。一體人間に宗教心を起させるものは恐怖ですね。修飾された利己心ですよ、それは。随分多くの宗教が起つては滅びてゆきましたわね。多くの人間が生れては過ぎ去つてゆきましたわね。そしてあとには何も残つてゐないのです。残つてゐるのは世界と人間の本性とです。ほんたうに、人間といふものが、希望は自己の内心にあるもので、決して外から來るものではないつてゐること、人間は自分で自分を救済しなきやならんといふことを知つてゐるといふのがねえ。」

私は彼女の説は、つい近頃、コオルではなくて他の場所で聞いた説のやうに思つた。序でに言つておくが、私はこの説には少しも同意しなかつたが、こんな問題で彼女と議論しようとは思はなかつた。それに議論をすればきつと私の方がまけて、私が宗旨變へをしなければならぬやうになるにきまつてゐると思つたのだ。それで私はだまつてゐた。だが、後になつて、私はこの時だまつてゐた事をひどく後悔した。といふのは、そのお蔭で、私は、アツシヤが何な信仰をもつてゐるか、彼女の「哲學」がどんなものであるかをたしかめるたつた一度の機會を失つてしまつたからである。

「さうですかホリイ」と彼女は言葉をつゞけた。「では妾の生國にも豫言者が出たのですね。そしてそれは僞豫言者だと仰言るんですね。あなた方の豫言者とちがふものだから。だが妾のゐた時分には、アラビヤにはずあぶん澤山の神がをりましたよ。馬鹿げてゐるぢやありませんか。ところで、ホリイ、あなたは妾の話にもう飽きたのですか、すつかりおだまりになつたぢやありませんか？ それとも妾があなたに妾の哲學を教へやしないかと心配してゐるのですか。さうすればあなたはすつかり妾の弟子になつてしまひますからね。でもあなたはする分氣の變りやすい人ですね。たつた半時間前に妾の前に跪ひざまづいて妾を愛するなんて誓つたくせに。あの時の恰好つたらなかつたわよ。では、これからどうしませうね？ さうさう、あのピラリが獅子と言つた人のところへ行つて見ませう。大變病氣がわるいんださうですね。もうきつと熱がたかまつて病氣が餘程進んでゐるでせう。でも今にも死ぬといふ時になつたら妾がなほしてあげますわ。心配しなくつてもいゝことよ。妾が魔法なんかつかやしませんから。魔法なんてものはないつて言つたことがあるでせう。自然の力に通じてそれを支配するだけなのよ。でわもう行きなさい。妾も藥の用意ができたらすぐに行きますわ。」

行つて見ると、ジョツプとアステーンとはレオが死にかゝつてゐるといふので酷く悲しんでゐた。そしてそこらぢゆうへ行つて私をさがしまはつてゐたのだと言つた。私は急いで長椅子のそばへ行つ

てレオを見た。正に彼は死にかゝつてゐた。すつかり正氣を失ひ、重い息をつきながら、唇をふるはしてゐた。そして時々、ぶる／＼と全身が痙攣的にふるへてゐた。妾は多少醫療の心得があるので彼の容態は、もう一時間もたてば、いやもう五分もたてば、何とも手のつくしやうがなくなることにすぐにわかつた。そして、自分の可愛い子供が死にかゝつて寢てゐるのに、アツシヤのそばにつきまとうて、みだらな思ひにふけてゐた自分の我儘が呪はしくなつた。どんな良い男でも、女の眼にかかつちや一たまりもなく墮落してしまふものだ。私は何といふろくでなしであつただらう！ 現に、この三十分の間、私はレオのことなどおくびにも思ひ出さなかつたのだ。しかもそのレオたるや二十年の間、私の最も親しいつれであつて、私がかうして生きてゐるのも主として彼のためであるのだ。そしてそのレオは、今になつては、ことによるともう手おくれになつたのかも知れないのだ！

私の両手を托げながら、あたりを見まはした。長椅子のそばに坐つてゐたアステーンの雙つの眼には鈍い絶望の光が燃えてゐた。ジョツプは、隅つこの方で、何かぶつぶつ言つてゐたが、私がちつと彼をみつめてゐるのを見て、悲しみがこみあげて來たと見えて、廊下へ出てしまつた。たゞもうたのみとするはアツシヤだけである。彼女は、山師でない限り、レオの病氣をなほすことのできるたつた一人の人だ。そして私は彼女を山師だなどとは信じなかつた。私は彼女のところへ行つて頼んで來ようと思つた。ちやうど私が起ち上つたときに、ジョツプが恐怖のために髪を逆立てて室の中へはひつて來た。

「た、大變です！—と彼は息を切らしながら叫んだ。「いま屍骸が廊下を這つてやつて來ます。—私は、しばらく何事かと思つたが、勿論、すぐに、これは、きつとアツシヤが白い被布をかぶつて來たのを彼が見たのに相違ない、そして彼女の歩きかたがあまりにしなやかで、しづかなので、つきり白い幽霊がそつとしのび寄つて來たのだと勘ちがひしたに相違ないと思つた。實際疑ひはすぐに解けた。といふのは當のアツシヤが、室の中へ、といふよりもむしろ洞窟の中へ姿を現したからである。ジョツプは後をふり向いて、白衣に包まれた彼女を見て「そら來た！」と痙攣的に叫びながら、隅つこへ飛び退つて、壁に顔をかくした。アステーンは、地べたに平伏した。

「い、時に來て下さいました、アツシヤ」と私は言つた。「私の子供は今死ぬところだつたのです。」「さうですか」と彼女は柔かに言つた。「まだ死んでさへゐなければ、すぐ治してあげます。あの人はあなたの従者ですか？ あなたの國では従者は客にあんな風にして挨拶するのですか？」「あいつはあなたの服裝を怖がつてゐるのですよ。まるで死人のやうに見えるものですから」と私は答へた。

彼女は笑つた。

「それからこの娘は、あゝわかりました。あなたが言つた娘ですね。で、この人たちに二人ともこの場から出て行くやうに言つて下さい。それから妾たちは病人を診察させよう。妾は目下の者に妾の知慧を見せたくないので。」

そこで、私はアステーンにはアラビヤ語で、ジョツプには英語で、室を出てゆくやうに命じた。ジョツプの方は二つ返事で行つたが、アステーンの方はさうでなかつた。

「女王様はどのやうな御用があるのでせう？」と彼女は低い聲で囁いた。彼女は女王の恐ろしさと、レオのそばにのこつてゐたいのとで迷つてゐたのである。「夫の臨終にそばについてゐるのは妻の權利ですわ。妾は出てゆかなくつてよ、狒々さん。」

「あの女はどうして行かないのです、ホリイ？」と、洞窟の他の端で、彫刻を見てゐたアツシヤはたづねた。

「この女はレオのそばから離れたがらないのです」と私はどう言つていゝかわからないので答へた。アツシヤはくると向き直つて、娘のアステーンを指さしながら、「一語、たつた一語言つた。併しその一言には何とも言へぬ冒しがたい凛とした響きがあつた。」

「行け！」

するとアステーンは四つん這ひになつて出て行つた。

「わかつたでせう、ホリイ」とアツシヤは少し笑ひながら言つた。「妾がこの國の人民に服従の教訓を與へておく必要のあることが。この娘はもう少しで妾の命令にそむくところでした。今日の晝間妾が妾の命令にそむいたものをどんな風に處分するかをあの娘は見なかつたのです。さあ、あの娘も行つてしまつたから病人を見ませう。」かう言ひながら彼女はレオの寢てゐる長椅子の方へ迂り寄つた。

レオは壁の方へ頭を向けて寢てゐた。

「この人は仲々品のある方ですね」と彼女はレオの頭をのぞきこみながら言つた。

次の瞬間、彼女の脊の高い柳のやうな姿はまるで鐵砲で射たれたか、刃で刺されでもしたやうに、よろ／＼とよろめいて、後ずさりして室を横きりて、後の岩壁につきあつた。そして彼女の唇の間から、私がまだこれまでに聞いたことのないやうな、恐ろしい、この世のものとも思はれぬ叫びが洩れた。

「どうしたのです、アツシヤ？」と私は叫んだ。「レオはもう死んだのですか？」

彼女は私の方へ向き直つて牝虎のやうに私に跳びかゝつて來た。

「この犬めが！」と彼女は、蛇の走る時のやうな物凄い囁聲で言つた。「何故妾にこのことをかくしてゐたのです？」かう言つて彼女が腕を伸した時、私は彼女が私を殺さうとしてゐるのだと思つた。

「何です？」と私はひどい恐怖に捉はれて叫んだ。「何をです？」

「あゝ」と彼女は言つた。「多分あなたは知らなかつたのですわ。よくききなさい、ホリイ、これは、妾の失したカリクラテスです。カリクラテスが、たうとう妾の處へ歸つて來たのですよ。妾は屹度歸つて來る事を知つてゐたのです。知つてゐたのです。」かう言つてから彼女は泣いたり笑つたりし始めた。そして、氣を取亂した世の常の女と同じやうに「カリクラテス、カリクラテス！」と口走つた。「馬鹿な」と私は心の中で思つたが、それを口に出しては言はなかつた。それにその時は、私はレオ

の生死のことはばかりで胸が一ぱいで、他のことは何もかも忘れてしまつてゐたのだ。私が心配したのはアツシヤのヒステリイがしづまらぬうちに、レオが死んでしまやしないかといふことだけだつた。「あなたが助けて下さることができなければ」と私は言つた。「あなたのカリクラテスは、今に、こときれてしまひますよ。いまにも死にますよ。」

「まつたくです」と彼女は、きよつとして言つた。「まあ、どうして妾はもつとはやく來なかつたのでせう？ 妾の手ですら慄へてゐます。だけど心配はありませんわ。さあ、ホリイ、この薬瓶をとりなさい」かう言つて彼女は上衣のかくしから小さい壺をとり出した。「そして中にある液を、この人の咽喉へたらしめて下さい。まだ死んでさへゐなければ直に治ります。速く、速く！ でないとこの人は死んでしまひます！」

私は彼女の方をちらりと見た。實際その通りであつた。レオは断末魔の苦しみをしてゐた。彼のやつれた顔は灰色にかはり、呼吸が咽喉にひつかつてごろ／＼いつてゐた。薬瓶は小さい木片で栓がしてあつたので、私はそれを齒で抜いた。その時中の薬液が一滴私の舌へ飛んだ。それは實によい味であつた。そしてしばらくの間私の頭はぼう／＼として眼の前に霧がかつたが、幸ひにも、その効果は、それが現はれたのと同じ位の速さで消え去つた。

私がレオのそばまで行つた時は、レオは今にも呼吸をひきとらうとしてゐた。彼は金色の頭を、ゆつくりと代る／＼左右に向け、口を少しばかり開いてゐた。私がアツシヤに彼の頭をおさへてゐてく

れるやうに頼むと、彼女は白楊の葉か、驚いた馬のやうに、頭から足の爪先までぶる／＼慄へてゐたが、どうかかうか私の言ふとほりにすることができた。それから、私は彼の頸を無理に開けて、薬瓶の中味を彼の口の中へ注ぎこんだ。すると忽ち、硝酸をかきまはしたときのやうに、水蒸氣が立ちのぼつた。しかし、それを見ても、もう既に消えかゝつてゐた私の希望は増しはしなかつた。

だが、断末魔の苦しみがやんだといふ一つの事だけはたしかだつた。はじめには私は、もうその苦しみも通り越して、彼は三途の川を渡つてしまつたのではないかと思つた。彼の顔は鉛のやうに蒼白くなり、胸の鼓動は既に前からかすかであつたのが、今ではすつかりとまつたやうに思はれた。たゞ、喉だけが時々びく／＼動いてゐた。私は疑はしい眼つきでアツシヤを見上げた。彼女のヴェールは彼女が昂奮のあまり室の中をよるけたときにうしろへ江り落ちてしまつてゐた。彼女はまだレオの頭をおさへてゐた。そして、レオの顔と同じやうに眞蒼な顔で彼の顔を見まもつてゐた。彼女のその時の苦悶と不安との表情は、私がこれまでに見たことがない程ひどいものであつた。レオの命が助かるか助からないかは明かに彼女にもわからないのだ。五分間がのろ／＼と過ぎた。彼女の顔からはもうすつかり希望が消えてしまつた。心の苦悶のために彼女の卵形の顔は見る／＼衰れ、瘦せてゆくのが眼にも見える位だつた。眼のまはりには凹んで黒い隈がついてゐた。唇にさへも血のけがなくなつて、レオの顔のやうに蒼くなり、見るもいたましい程慄へてゐた。實際彼女の様子はいた／＼しく見て居られなかつた。自分の悲しみも忘れて、私は彼女の心のつらさを思ひやつたのであつた。

「もう遅すぎたのでせうか？」と私は溜息をつきながら言った。

彼女は両手で顔をかくして答へなかつたので、私も思はずそつぽを向いた。だがその拍子に、私は深い呼吸の音をきいた。下を見るとレオの顔に一線の血のけが現はれ、つゞいて一線又一線血色が加はつて来た。そして、實に不思議といはうか、何と言はうか、今まで死んだとばかり思つてゐた男がごろりと寝返りをうつたのである。

「見たでせう」と私は低聲で言った。

「え、」と彼女は嗚れ聲で答へた。「あの人は助かりました！。ほんたうにもう遅すぎて間にあはんかとにひましたわ。もう少し、ほんの少し手遅れになつたら、あの人は助からなかつたところですよ！」かういひながら、彼女は瀧のやうに涙を流して、胸も裂けるかと思はれる程、嬉し泣きに泣きくづれた。しかもその泣き顔はこの上なく美しかった。やがて彼女は泣くのをやめた。

「許して下さい、ホリイ。妾の意氣地のないのを許して下さい。」と彼女は言った。「妾も矢張り女ですわね。まつたくです！。今朝あなたは、あなたがたの宗教で言ふ苦しみの場所のことを妾に話して下さいましたね。地獄とか何とか言つたでせう。そこへ行つた人は、みんな此の世で生きてゐたときの記憶をもつてゐて、自分で犯した罪の責苦をいつまでも、いつまでも受けるのですつてね。妾はこの二千年の間、丁度その地獄の苦しみの中で生きて来たのです。二千年と言へばあなた方の算へかたによると、かれこれ六十六代です。その間、妾は、この地獄の中で、罪の記憶に責めさいなまれ、日

となく夜となく、満されない慾望に苦められて、友もなく、楽しみもなく、死ぬこともなく、たゞ、いつか妾を救つてくれる人が来るかも知れんといふ頼み少ない希望をつないで生きて来たのです。」

「それから、もつとお聞きなさいね、こんな話はもう二度と聞かれはしませんわ。こんな場面はもう二度と見られはしませんわ。たとひ妾があなたに一萬年の生命を授けてあげてもよ。若しお望みなら、お禮に、妾はあなたにそれだけの生命をあげてもよいのですけれどね。たうとう私の救ひ主が来たのですよ。妾が何十代も待つてゐたその人がたうとう来たのです。いつか定られた日にその人が妾をたづねて来ることは妾にはわかつてゐました。私の智慧には誤りはありませんからね。だけど、何時来るか、どんな風にして来るかは妾にもわからなかつたのです。それにしても、妾は何といふ無知だつたのでせう！。妾の知識は何といふ小さなものだつたのでせう！。妾の力は何といふ弱いものだつたのでせう！。あの人は長いこと、に寝てゐて、病氣のために今にも死にかゝつてゐるのに、妾はそれに氣が附なかつたのです、二千年もその人を待つてゐた妾が、それを知らなかつたのです！。そして、やつと、その人に會つたと思ふと、どうでせう！。もう間一髪のところまで手遅れにならうとしてゐたのです。あの人は死の顎の中へ今にも呑みつくされようとしてゐたのです。一旦死んでしまつた以上は、妾の力ではどうにも出来ないのですからねえ。若しあの人が死んでしまつたら、妾はきつともう一度地獄の中に生きなければならなかつたのです。もう一度物倦い幾十世紀を送つて、戀人が歸つて来るのを待つてゐなければならなかつたのです。あなたが薬をのまして下さつてから五分間と

いふもの、妾にも、あの人の生死の程はわかりませんでした。これまでに過ぎ去つた六十代の年月も、あの五分間ほどに長くはありませんでした。ところが、その五分間がたつても、何の效能も現れないでせう。妾はもう薬が利かなくなつたのではないかと思ひました。またもやあの人は死んでしまつたのかと思ひました。そして、何十年間の苦惱が、一本の毒槍の穂先に集まつて、その槍で、幾度びも幾度びも突き刺されるやうな気がしたのです。またカリクラテスを失つたと思つたものですからねえ。するとどうでせう。あの人は呼吸をし出したのです。御覧なさい。あの人は生きてゐます。あの人はもう大丈夫生きるのです。あの薬の利き目があらはれ出したら死ぬことはないのですから、ねえ、ホリイ、考へて御覧なさい。實に不思議ではありませんか！ あの人はこれから十二時間眠りまゐります。そして眠りから醒めると病氣は拭つたやうに綺麗に治つてしまふのです。そして生き返つて、妾のものになるのです！」

彼女はこゝで言葉をきつて、レオの金色の頭の手をおき、心からなるやさしさをこめて、彼の額に接吻した。その眺めは又なく美しいものではあつたが、私は胸を切られるやうな思ひがした。私は嫉妬を感じてゐたのだ。

第十八章 行け！ 女！

それから一分間かそこら沈黙がつゞいた。その間女王はうつとりとして幸福の境地にひたつてゐる

やうに見えた。といふのは彼女の顔に天使のやうな歡喜が現はれてゐたからである。彼女の顔は時々天使のやうになることがあつたのだ。ところが、急に彼女は新しい考に打たれたと見えて、うつて變つた悪魔のやうな形相になつた。

「もう少しで忘れるところだつた」と女王は言つた。「あの女のことを、アステーンのことを。あの女はカリクラテスの何にあたるのです——あの人の下女ですか、それとも——」と聲を慄はして言つて彼女は言葉を切つた。

私は肩をすくめた。「何でもアマハッガー人の習慣に従つてレオと結婚したといふことですが」と私は答へた。「よくは知りません。」

女王の顔は夕立雲のやうに暗くなつた。年は老つても、アッシャにも嫉妬の心は残つてゐたのだ。「ではもうおしまひだ」と彼女は言つた。「あの女は生かしてはおけない。今すぐにも！」

「何の罪でですか？」と私は恐怖に打たれてたづねた。「あの女には何の罪もありませんよ、アッシャ。あの女は、この男を愛し、この男は喜んでその愛を受けたのです。何處にあの女の罪があるのです？」

「ほんたうにあなたは馬鹿ですね、ホリイ」と彼女は氣短かに答へた。「何處にあの女の罪があるかつて？ あの女の罪は、あの女が妾と妾の戀人との間に邪魔になつてゐることです。妾は、あの女をあの女から奪ひとることはできません。この世には、妾の力に抵抗できる人はありませんからね。男とい

ふものは誘惑が過ぎ去るまでの間だけは忠實なものです。で若しその誘惑が十分に強ければ参つてしまひます。男といふものは繩と同じで、十分強くひつばれば、切れてしまふものです。男といふものは女の美で買へるものですよ、若し十分に美しければですね。丁度女の美が十分の金さへ出せば金で買へるやうなものです。妾の時はさうでした。恐らく此の世の續く限りさうでせう。この世界は一つの大きな市場ですよ。凡ての物が賣物で、何でも一番高い値をつけた人の手に落ちるのです。「だがそんな無駄口をきくのはもうやめませう」と彼女が言葉をつづけた。「あなたと議論をしたり、知恵比べをしたりしてゐる暇はありませんからね。何故あなたはそんなに議論がおすきなのです？ あなたも近頃の哲學者なのですか？ あの女はどうしても助けておけないのです。妾はあの女の戀人を奪ひとることはできるけれども、あの女が生きてゐる限り、あの人はあの女にやさしい思ひをむけるに相違ありません。それが妾には耐へられないのです。妾の戀人の心の中に他の女がすんでゐてはならないのです。妾の支配は完全でなくちやなりません。あの女はもううれいめをさんざして來たのですから、それで満足しなくちやなりません。戀の一時間は孤獨の一世紀にもまさつてゐますからね。今度は夜があの女を呑みつくしてしまふのです。」

「いや、いや」と私は叫んだ。「それは罪惡です。罪を犯せば悪い報いしかありません。あなたのために、そんなことをなさつてはいけません。」

「では妾たちと、妾たちの目的物との間に邪魔をしてゐるものを取り除くのが罪惡なのですか？ 馬

鹿な人です。ねあなたは。さうすると妾たちの生涯は長い罪惡ですよ、ホリイ。吾々は生きてゆくために、毎日毎日他の者を殺してゐるんですからね。此の世では強者だけしか長らへてゆくことはできないのですから。弱者は亡びなければなりません。此の大地は、そして大地に生ずる者は、凡て強者のものです。一本の樹が成長するためには二十本の樹が枯れてしまふのです。妾たちは失敗して倒れた人の死骸を乗り越えて、地位と権力とにはしるのです。妾達の食べる食物は饑ゑた赤ん坊の口からもぎとつたものです。これが萬物のさだめですよ。あなたは、また、罪を犯せば悪い報いがあると言ひましたわね。それはあなたが經驗が足りないからです。罪から善いことが生じたり、良いことが悪い結果を生んだりすることはさらにあるのですよ。暴君の残忍な怒りが、後世の多數の人の祝福になることもあり、聖者のやさしい心が一國民を奴隷にすることもあるのです。人間は善かれ、悪しかれと思つて、あれをしたり、これをしたりしますが、それがどんな結果を生むかは知らないのです。人間が何か打つときだつて、その人は自分で何を打つた結果になるかはまるで知らないのです。善と悪、愛と憎み、夜と晝、樂と苦、男と女、上なる天と下なる地、——これ等のものは皆それ／＼必要なのです。それでこれ等のものがそれ／＼何のためにあるのかを知つてゐるものはないのです。ですから妾たちはこれが悪であれが善だとか、闇が憎むべきもので光が愛すべきものだとか言つてはなりません。何故なら、他の人には悪が善であるかも知れず、闇が光よりも美しいかも知れず、或はみんな同じであるかも知れないからです。わかりまして、ホリイ？」

私はこんな風の詭辯には到底逆らふことができないやうな気がした。こんな詭辯を實行したら、吾の解してある道徳はすっかり破壊されてしまふことになる。しかしアツシヤのやうに人間界の法律に拘束されない人間は、正邪の道徳にも絶対に動かされはしないのだと思ふと、私は今更のやうにぞつとした。

それでも私は何とかしてアステーンを全能の戀仇の手から救ひたかつた。私は彼女がすきでもあり彼女を尊敬もしてゐたのだ。そこで私はもう一度訴へて見た。

「アツシヤ」と私は言つた。「あなたの仰言ふことは、あまりにこみ入つてゐて、私にはわかりませんが、あなたは人はいく／＼自分に對する法律をもつてをり、自分の心の教へに従ふものだと思ひましたね。あなたが胸には、あなたがこれからとつて代らうとする女に對して慈悲の心が少しもないのですか？ 私には信じられませんが、あなたは長い年月の間待つてゐた戀人が歸つて來たと仰言ひましたね。よく考へて御覽なさい。その人を愛してゐる女を、そしてその人に多分愛されてゐる女を——少なくとも、あなたの奴隷どもがその人を槍で殺さうとしてゐたのを救つてくれた女を殺して、その手であなたはその人を迎へようとなさるのですか？ それから貴女は、遠い昔に、この人に悪いことをされたと言ひましたね。アメンタルタスといふ埃及の女のために、この人をあなた自身の手にかけて殺したと仰言ひましたね。」

「どうしてあなたは知つてゐるのです。どうしてそのアメンタルタスといふ名前を知つてゐるのです。」

妾はまだその名前は申し上げたことにはないのに」と彼女は私の腕をつかんで叫んだ。

「多分そんな夢を見たのでせう。」と私は答へた。「このコオルの洞窟には不思議な夢がそこらぢゆうにうよく／＼してあますからね。何でも夢が眞實の影だつたと見えますね。ところで、あなたのその狂ひのやうな罪惡から何が生じましたか？ そのためにあなたは二千年も待たなければならなかつたでせう。しかもまたそれを繰り返さうとなさるのですか？ きつと良い結果は生じませんよ。若しあなたが、あの罪もない女を殺されたら、貴女はきつと呪はれます。そして貴女の昔の愛の樹からどんな果實もつみとることはできないでせう。あの人は、あの人を愛し、あの人をいたはつた女の血で汚れた貴女の手をとることができると貴女は思ひますか？」

「そのことならもう答へたぢやありませんか」と彼女は答へた。「あの女のやうにあなたも殺したつて、あの人はきつと妾を愛するやうになりますよ、ホリイ。あの人はさうせずにはをれなくなるのです。ちやうど妾が偶然あなたを殺さうと思へば、あなたがどうしても死から免かれることができないと同じです。でもあなたの言ふことにも眞理があるかも知れませんがね。といふのは妾も少し気が、りになつて來たからです。でことによつたら、あの女の生命は助けることにしませう。妾は何も好きこのんで惨忍なことをするのぢやありませんからね。妾は人の苦しむのを見たり、人を苦しめたりしたくはないのです。ではあの女を妾の前へ呼んで下さい。はやく、妾の氣の變らぬうちに」かう言ひながら、彼女は大急ぎで、薄紗で顔を覆うた。

これ位な程度でも兎に角私の歎願のきゝめがあつたのを喜んで、私は廊下へ出てアステーンを呼んだ。彼女の白い上衣が、數碼先に土器のランプでぼんやり照らされてゐるのを私は見つけたのだ。彼女は起ち上つて私の方へ走つて來た。

「妾の夫は死にましたか？ どうぞ死んだなんて言はないで下さいね」と彼女は上品な顔を上げて私を見あげながら叫んだ。見ると彼女の顔はすっかり涙で濡れ、身も世もあげて戀人の無事を祈る真心が、眞直ぐに私の胸に感じられた。

「いや、あの人は助かつたよ」と私は答へた。「女王が助けて下さつたのだ。」
彼女は深い溜息をつきながらはひつて來て、アマハッガー人の習慣に従つて、恐ろしい女王の前に平伏した。

「起て」と女王は此の上ない冷たい聲で言つた。「こちらへお出で。」
アステーンは女王の言葉に従つて、女王の前に立つて頭を下げた。

しばらく沈黙がついたが、アツシヤがそれを破つた。

「その男は誰だ？」と女王は眠つてゐるレオを指さしながら言つた。

「この人は妾の夫です」と彼女は低い聲で答へた。

「誰がこの人をお前の夫としてお前に與へたのだ？」

「妾が、この國の習慣に従つて、この人を夫にしたのでございます、女王様！」

「お前が、この他國の人を夫にしたのは悪いことぢや。この人はお前の國の人ではない。お前の國の習慣はこの人には無効ぢや。よくおき、多分、お前は何も知らずに、そのやうなことをしたのであらう。だから、許してあげる。でなかつたら、お前の生命はないのぢや。もう一度よくおき、今からお前のすみかへ歸つて、今後この人に物を言つたり、この人を見たりしてはなりません。この人はお前のものぢやないのぢや。二度び、よくおき、若しお前が妾の法律を破つたら、その場でお前は死ぬのぢや。行け！」

しかし、アステーンは身動きもしなかつた。

「行け、女！」

するとアステーンは顔を上げた。彼女の顔は激情のために歪んでゐるのを私は見た。

「い、え、女王様、私は参りません」と彼女は聲をつまらせて答へた。「あの人は妾の夫でございます。妾はあの人を愛してをります。愛してをります。ですから、妾はあの人の傍をはなれません。妾の夫から離れるやうに命令をなさる権利があなたにございますのですか？」

私はアツシヤの全身が慄ふのを見た。そしてどうなることかと思つて私も慄へあがつた。

「どうぞ大目に見てやつて下さい」と私はラテン語で言つた。「あの女の言ふことにも無理はないのですから。」

「妾は大目に見てをりますよ」と女王は矢張りラテン語で冷かに答へた。「妾が大目に見てのなかつ

「たら、この女はとほに死んでゐるのです。」それからアステーンに向つて彼女は言つた。「女、妾がその場でお前を殺してしまはぬうちに行け！」

「妾は参りません！ この人は妾のものです、妾の夫です！」彼女は苦しうに叫んだ。「妾が夫に選んだのです。そして妾が命を助けてあげたのです。殺せるなら妾を殺して下さい！ 妾は、妾の夫を決して貴女には渡しません！」

アツシヤは眼にもとまらぬ早業で、かはいさうなアステーンの頭に、軽く手を置いた。私はアステーンを見た。そしてあまりの恐ろしさにうしろへよろけた。といふのは、彼女の青銅色の結髪の上に、真直に雪のやうに白い三つの指のあとがのこつてゐたからである。アステーンは眼がくらんだやうに、両手を上へさし上げた。

「大變だ」と私はこの超人的な力の顯現に魂消て言つた。だが女王は少し笑つた。けであつた。

「何も知らない馬鹿娘が」と彼女は途方にくれてゐる女に向つて言つた。「お前は妾にお前を殺す力がないと思つたのだね。あの鏡を見なさい。」とかう言ひながら彼女はレオの鬚剃用の丸い鏡を指さした。「ホリイ、その鏡を女に渡して、髪がどうなつたか見せてやつて下さい。そして妾に人を殺す力があるかないかを知らせてやつて下さい。」

私は鏡をとつてアステーンの眼の前に差し出した。彼女はそれを見てから、髪を手でさはつて、また鏡を見た。そして忽ち、息のつまるやうにむせびながら地べたに泣きくづれた。

「さあもう行くだらうね、それとももう一度打ちませうか？」とアツシヤは嘲るやうな口調でたづねた。「見なさい、妾はお前にしるしをつけておいた。これでお前の髪がすっかり白くなるまでは、どこでお前にあつても一目でわかる。若し今度お前の顔を見たら、お前の骨もその髪のやうに白くなる」と覺悟してゐなさい。」

かはいさうな女は、すっかり恐怖に打たれて、その場に起ちあがり、恐ろしい印しをつけられたまま、ひどく歎息しながら、室から這つて出て行つた。

「そんなに恐がるには及びませんよ、ホリイ。」と彼女が出てゆくと女王は言つた。「妾は魔法をつかふのぢやありません。魔法なんでもものはないのです。あれはあなたの知らない力なんです。妾はあの女の度膽を抜くために印しをつけてやつたのです。でなければ妾はきつと殺してしまふところだつたのですよ。ところで、妾はこれから、下男に命じて夫のカリクラテスを、妾の室の隣の室へつれてゆかせることにしませう。さうすれば、あの人を看護することもできるし、眼が醒めたら、早速挨拶をすることもできますから。それからねホリイ、あなたも、あなたの召使の白人もその室へ来るのですよ。だが、たゞ一事だけ、あなたの生命にかけておぼえてゐて下さい。あの女がどうして出て行つたかといふことは一言も口外してはなりませんよ。それから妾のこともなるだけ話さないやうにしてね。これだけのことをあなたに警告しておきますよ。」かう言つてから彼女は命令を傳へるために室を出て行つた。あとにのこつた私は、以前にもまして、すっかり何が何だかわからなくなつてしまつ

た。實際私は次から次へと起つて来る、色々な感情にこづきまはされて、全く途方にくれて終ひ、氣が狂ふのぢやないかと思ひはじめた。けれども、幸か不幸か、私には、あまり考へてある時間はない。つた。といふのはすぐに啞者が来て、眠つてゐるレオや吾々の所持品を、中央の大洞窟の向う側へ運びはじめたので、しばらくの間、あたりががや／＼騒々しくなつてしまつたからだ。吾々の新しい室は私をはじめアツシヤにあつたアツシヤの居間と吾々が呼んでゐたカーテンを下した室のすぐ隣にあつた。その時は彼女がどこに寝てゐるのか私には知らなかつたが、それはすぐ傍だつたのである。その晩は私はレオの室で過した。しかし、彼は一晩ぢう死人のやうに眠りとほして、毛すぢ一つ動かさなかつた。私もよく眠つた。眠る必要があつたのだ。だが私の眠りは、これまでに經て来た様々な恐怖や不思議な夢に充ちた眠りであつた。わけても一番多く見た夢は、アツシヤが戀仇の頭髮に、指の痕をつけた恐ろしい魔法の夢だつた。あの時のことは餘つ程恐ろしかつたと見えて、私は今でもよくあの夢を見る。そして、戀人を奪はれ、カインのやうに烙印をおされて、戀人の顔に最後の一瞥を投げながら、恐ろしい女王の前から泣きながらこそ／＼と這ひ出て行つた女の姿が眼の前に見えるやうである。

もう一つ私の惱まされた夢は、あの巨大な骸骨のピラミッドの夢だつた。あの骸骨が何千何萬となく一度に起ちあがつて、小隊となり、中隊となり、軍團となつて、うつろな肋骨に日光を浴びながら私の前を進軍してゆく光景であつた。この骸骨の一隊はコオルの平野を通り過ぎ、宮殿の前を通りす

ぎ、私のこれまでに見たことのないやうな豪華な市街や殿堂の前を通り過ぎて行つた。けれども廣場には彼等を歓迎する人影は一つもなく、彼等の行軍を窓から見てゐる女の顔は一つもなかつた。たゞ彼等の行く手に、姿の見えない聲が叫んでゐた。「コオル帝國は滅びた、滅びた、滅びた！」そして日が沈むとこの骸骨はもとの墓穴へ歸つて一つづゝもとの通りに積み重なるのであつた。その時に私はちやうど胸慄ひしながら眼をさました。見ると、私の寝てゐる長椅子とレオの寝てゐる長椅子との間に女王が立つてゐたが、やがて音もなくすうつと室から消え去つた。

そのあとで私はまた眠つた。今度はぐつすり朝まで眠つた。そして、朝になつて、非常にせい／＼した氣持ちで起き上つた。たうとう女王のいつたレオの眠りのさめる時刻が近づいたのだ。そしてその時刻が近づいた時、ヴェールにまとはれた女王が姿を現はした。

「ホリイ、見て、御覽なさい」と彼女は言つた。「もう熱は去つたから、今にこの人は正氣に返りますよ。」

彼女の言葉が了るか了らぬうちにレオはごろりと寝返りをうつて、兩腕を伸ばしながら、欠伸をして眼を開いた。しかし、女の姿が彼にこゞみかゝつてゐるのを見て、兩腕で抱き寄せて接吻をした。多分アステーンと間違へたのであらう。何にしても、彼はアラビア語で「やあ、アステーン、何故そんなに頭をくゝつてゐるんだい？ 齒が痛いのかい？」と言つて、それから英語で「どうも腹がベコベコになつた。おいジョップ、一體こゝは何處だい——え、？」

「私もそれが知りたいたいのですよ、レオ様」と言ひながら、ジョップは、こはくアツシヤの横を通りながら言つた。彼はまだ女王を生きた人間だとは思ひきれないので、此の上なく恐がり、嫌がつてゐた。「だが、そんなに話をなさつちやいけませんぜ、レオ様、あなたは大變重病で、ずるぶん心配をかけましたぜ、ところで、この御婦人が」と言ひながらアツシヤのほうを見て「ちよつと退いて下されば、あなたにスープをもつて来てあげるのですが。」

この言葉でレオは、彼のそばに無言のまゝ、立つてゐた「御婦人」の方へ注意を向けた。「おや」と彼は言つた。「アステーンちゃんやなかつたんだね。アステーンはどこへ行つたんだい？」

この時はじめてアツシヤが口を開いた。彼女の最初の言葉は嘘であつた。「あの女は誰かをたづねてゆきましたの」と彼女は言つた。「でその代りに妾がお付き添ひしてゐるのですわ。」

アツシヤの聲の銀鈴のやうな響きと、彼女の死人のやうなヴェールとは、半ば眼覺めたレオの頭をひどく面喰らはせたらしかつたが、彼は何とも返事をしないで、がつくしながらスープを飲み干すと、また仰向けになつて夕方まで眠つた。二度目に彼が眼をさましたときに、彼は私を見て、どうしたのだと訊ねた。けれども私はできるだけ言葉をにごして翌朝まで返事をのぼした。翌朝彼が起きたときは奇蹟的に彼の元氣は回復してゐた。そこで、私は、彼の病氣のことや、私のしたことなどを少しばかり話してきかせたが、女王がそばにゐたので、あまり色々なことは言へなかつた。たゞ、この婦人はこの國の女王で、吾々に好意をもつてをり、いつもヴェールを着てゐるのだといふことだけを

話した。といふのは私は無論英語で話してゐたのではあるが、表情で吾々が何を話してゐるかを彼女にわかるかも知れんと思つたし、その上、彼女の警告も思ひ出したからであつた。

その翌朝には、レオはもう殆んど平生の身體に回復してゐた。側腹の痠も癒え、性來頑強な彼の體格は、恐ろしい熱病を短時日のうちにすつかり振ひ落してしまつた。それはひとへにアツシヤがのませた藥の靈驗によること勿論だが、發病の期間が短かつたので衰弱があまり甚だしくなかつたせいでもあると私は思つた。彼は健康が回復すると、彼が沼の中を通るときに意識を失つてしまふまでの冒險の記憶をすつかりよび起した。勿論アステーンのことと思ひ出した。彼はアステーンに對して大分愛着を感じて來てゐることを私は發見した。實際、彼はこの氣の毒な娘について、私にいろ／＼なことを矢繼早やにたづねたが、私はそれには答へなかつた。といふのは、レオが最初に眼覺めたあとで女王と呼ばれて、厳格な二度目の警告を受け、決してあのことをレオに話してはならぬと定められてゐたからだ。そして若し私がそれにそむいたら悪いことがあるといふことを婉曲に匂はされてゐたからだ。それに、時が來れば女王が自分の口から凡てを打ち開けるとも言つてゐた。

實際彼女の様子は以前とはがらりと變つてゐた。前のことから推して、女王は彼女が前世の戀人であると思つてゐる男に、機會があり次第、言ひ寄ることだらうと思つてゐたが、事實はさうでなかつた。それは彼女の方に理由があつたのだが、その當時は私にはどういふ理由か見當がつかなんだ。ただもう彼女はおとなしく彼の用を足してゐた。そして以前の尊大な様子とはうつつ變つたつゝ、まじや

かな様子で、彼に物を言ひかけるにも、恭しい調子で言ひかけ、できるだけ彼のそばをはなれないやうにしてゐた。勿論此の不思議な女に對して彼の好奇心は刺戟されてゐた。わけても彼は彼女の顔を見たがつた。私は、細部にはわたらないで、ただ姿や聲と同じやうに美しい顔だといふことは彼に話しておいたのである。これだけでも若い男に危険な期待をもたせるには十分だから、若し彼にまだ病後の苦しみがこのつてゐず、アステーンの親切と獸身的な世話とが骨身に沁みてゐなかつたら、アツシヤの思ふつぼにはまつて、彼は彼女に思ひを焦がすやうになつたに相違ないと私は思ふ。だが、どういふものか、彼は、たゞ好奇心をもつてゐただけだつた。それに、女王の途方もない年齢のことも少しも話さなかつたし、無理もないことだが、この女が壺の破片に記してあつた女だといふこともさつてゐなかつたに拘らず、彼は、多少女王に怖れを抱いてもゐた。たうとう、三日目の朝、彼は着替へをしなから、しきりに根掘り葉掘り私にアステーンのありかをたづねるので、私は、實は知らないのだと答へて——實際私は知らなかつたのだ——彼をアツシヤにひきあはせることにした。そこでレオが腹一ぱい朝食をつめこんでしまふと、吾々は女王の前へ出頭した。女王の側づきの啞どもは、いつでも吾々を案内するやうに命ぜられてゐたのだ。

彼女はいつものやうに、彼女の居間に坐つてゐたが、カーテンがあがると長椅子から立ち上つて、両手をのばして吾々に挨拶をするために前へ進み出た。いや吾々といふよりもレオと言つた方がよいかも知れぬ。といふのは私はもうすつかり冷淡に待遇されてゐたからである。

「ようこそお出で下さいました、お客さま。」とアツシヤは此の上もないやさしい聲で言つた。「あなたが立つていらつしやるお姿を見て、ほんたうにうれしうございますわ。妾が最後のときにお救ひしなかつたら、あなたはそんなにしやんとお立ちになることはできなかつたのですもの。だけど、もう危険はありませんわ。これからは、妾が、もう二度と危険の來ないやうにしてあげるだけですわ」彼女はこの最後の文句に千鈞の重味をつけて言つた。

レオはお叩頭をして、丁寧なアラビア語で、他國の見知らぬ人間を手厚く介抱してくれた彼女の親切を感謝した。

「いゝえ」と彼女はやさしく答へた。「あなたのやうな方は、世の中が、病氣などにさしておきやしませんわ。美しい方つて滅多にないんですもの。妾にお禮などいりませんわ。妾はあなたがいらしたので幸福なのですから。」

「ふん！ 叔父き」とレオは私の方を向いて英語で言つた。「中々如才のない女ですな。吾々はどうやらクロヴァーの中へころげこんだらしい。叔父さんもたんとよいことがあつたでせう。ほんたうに、どうです、あの美しい腕は——」

私は彼にしづかにするやうに眼くばせした。それはヴェールの下から私を不思議さうに見てゐたアツシヤの眼が疑はしさうに光つてゐるのが見えたからである。

「たしか、妾の召使どもが」と彼女は言葉をつづけた。「落度なくかしづいてくれてゐること、思ひま

すが、こんな見すばらしい處にでも何かお氣に召すものがあつたら、遠慮なく仰言つて下さい。ほかに何かおのぞみはございませんか？」

「あります」とレオは急いで答へた。「私のそばにゐた女は一體どこへ雲隠れしたのです？」

「あゝ」とアツシヤは言つた。「あの娘ですか、あの娘なら見ましたわ。けれど何處へ行つたか存じません。行くと言つて出ましたが何處へ行つたかわかりません。ことによると歸つて來るかも知れませんが、ことによると歸つて來ないかも知れませんわ。病人の看護といふものは退屈なものですし、それに蠻人の女なんて浮氣者ばかりですから。」

レオはこの知らせを聞いて變に思つた。そして胸が苦しくなつた。

「どうも變だ」と彼は私に向つて英語で言つた。それから女王に向つて附け加へた。「どうも私にはわかりませんなあ。あの娘と私とは——えゝと、つまり私もは——お互ひに尊敬しあつてゐたのですがなあ。」

アツシヤは非常に朗かに、少し笑つた。そして話題をかへた。

第十九章 黒山羊をくれ!

それからあとの會話は全くとりとめのないもので、私には全く何を話したのか思ひ出せない。どういふわけか、多分、威嚴をくづさないやうにするためだらうと思ふが、アツシヤはいつも程口數をき

かなんだ。だが、やがて彼女は、レオに向つて、その晩吾々を歓迎するために舞踏の催しをするやうに準備してあると告げた。私はそれを聞いて苦蟲を噛みつぶしたやうなアマハツガー人にもそんな楽しみがあるのかと思つて驚いた。だがあとですぐわかつたやうに、アマハツガー人の舞踏といふのは、他の國の舞踏とはまるでちがつたものであつた。それから、吾々が退出しようとする時、女王は、レオに向つて、洞窟の中の不思議な事柄を少し見物してはどうかとすゝめたので、吾々は、ジョツプとピラリとをつれて出かけた。

だが、洞窟の中を見物した模様を一々書いてゐては、前に私がアツシヤに案内されて見たときのこと、大部分重複するから、こゝでは一切省略することにする。勿論レオは此の異様な光景を見て非常に興味を感じたが、ジョツプは有難迷惑の様子だつた。

洞窟の見物がすむともう午後四時を過ぎてゐたので、吾々は歸つて食事をした。吾々は皆食物と休息との必要を感じてゐたのだ。特にレオはさうだつた。六時になると吾々はジョツプをつれて、アツシヤの前へ出た。彼女は私からジョツプには十七人の兄弟姉妹があるといふことをきいて、彼に、その兄弟をすつかり、でなければできるだけ澤山思ひ出して見よと命じた。それから、ジョツプに水中を覗いて見るやうに言つた。すると何年も前に過ぎ去つた、ジョツプの兄弟姉妹が團欒してゐる場面が、靜かな水の中に、彼の頭で思ひ出すまゝに映つた。中にははつきりうつてゐる顔もあればほんやりふやけたのもあつた。それは、ジョツプが咄嗟の場合に、みんなの顔をはつきり思ひ出せなか

つた證據なのだ。ジョップはこれを見て、また、すっかり氣味わるがつてしまった。レオもこれはあまり好まなかつたと見えて、手の指を髪の中へつゝこんで「どうも氣味が悪い」と言つた。

それから、一時間あまりもたつた時に、嘔吐もが、手眞似で、ビラリがお目通りしたいと言つてゐる旨を告げた。そこで、ビラリは、いつものやうに、ぶきつちよに四つん這ひになつてはひつて來て、舞踏がはじまつたといふことをしらせた。まもなく吾々一同は起ち上り、アツシヤは白い被覆の上に着てゐた黒い外套（それは彼女が火のそばで死んで戀仇を呪つてゐたときに着てゐた外套であつた）を脱いで出かけた。舞踏は、大洞窟の正面の滑らかな岩の丘の上の野天で開かれることになつてゐたので、吾々はその方へ進んで行つた。洞窟の入口から十五歩ばかり進んだところに三つの椅子がおいてあつた。まだ舞踏は見えなかつたので、吾々はその椅子に腰をかけて待つてゐた。夜はまだまづ暗とは言へないが、ほゞ暗くなり、月はまだ昇つてゐなかつたので、こんな暗い中でどうして舞踏が見えるのかと吾々は不思議に思つた。

レオがそのことを訊ねると、アツシヤは少し笑ひながら「今にわかりますよ」と言つた。彼女の言葉が了るか了らぬうちに、そこらぢうから、黒い姿が、てんでに、大きな松明のやうなものをもつて現はれて來た。それは何かよくわからなかつたが、非常によく燃えてゐて、それをもつてゐる人のうしろで、一碼以上もある高い炎を上げてゐた。五十人あまりの同勢がこの松明のやうなものをかざして進んで來る光景は、正に地獄から惡魔が跳び出して來たやうであつた。レオがはじめ

て松明の正體を發見した。

「おやー」と彼は言つた。「あれは火のついた死骸だ。」

私は何遍も眼を据ゑてよく見た。正に彼の言つたとほりであつた。吾々を歡待するための松明の明りは、洞窟から取り出して來た人間の木乃伊であつたのだ。

燃える死骸をもつた人々は後から後からと進んで來て、吾々から二十歩ばかりはなれたところに集つて、てんでにもつて來た死骸を組み合はせて大きな篝火をつくつた。その勢よく燃えること、タールの樽だつてこれ程よく燃えはしましと思はれる位だつた。しかもそれだけではなかつた。突然一人の巨漢が、胴體から燃え落ちた火のついた人間の腕をつかんで、黒闇の中へかけこんだ。やがて彼が立ち停ると、一條の火柱が空中高く立ち昇つて、四邊の闇と、闇の中に輝き出したランプとを照した。ランプといふのは女の木乃伊で、岩の中にさした頑丈な杭に縛りつけてあつた。例の巨漢はその女の髪に火をつけたのだ。その男は、それから、二番目、三番目、四番目のランプに火をつけてまはり、たうとう吾々は三方から、燃えさかる死骸の環にとり圍まれてしまつた。

ネロは、基督教徒を生きながらタールの中へ漬けて、それで彼の庭園を照したといふことだが、吾もいま丁度それと同じやうな光景を見せられてゐるのだ。恐らく、こんな光景を見た者はネロ以來

吾々がはじめてであらう。たゞ幸ひなことには、吾々のランプは生きた人間ではなかつた。生きた人間のお祭り騒ぎの明りに、ずつと昔に死んだ人の死骸をつかふといふことは、ひどく恐る

しいことでもあつたが、それと同時に何とも言へぬ魅力をもつてゐた。そのこと自體が死者にとつても生者にとつても一篇の諷詩であつた。中にはシーザーの死骸もアレキサンダーの死骸もあるかも知れないのだ。

一つの木乃伊が、蹠の所まで燃えて終ふと、燃え残りの足は蹴飛ばして終つて、また別の木乃伊が代りにおかれた。篝火の燃料はかうして、惜氣もなく補給されてゆき、焰はしゆうく／＼ばちばち音をたてながら空中二三十呎の高さまで燃え上つて四邊の闇を照した。そしてこの光りを浴びて、眞つ黒なアマハツガー人の姿が、宛然、地獄の火を焚いてゐる悪魔のやうにあちこちとび廻つてゐるのである。吾々はその場に立つた儘、この不思議な光景を見つめてゐた。それは氣味の悪い嫌な見物ではあつたが、それでゐて人の心魂を恍惚させるやうな眺めでもあつた。見てゐると死骸の中にかつてとちこめられてゐた靈魂が這出して來て、冒瀆者に復讐をするのではないかといふやうな氣がした。

「妾はあなたに不思議なものを見せてあげると約束しましたでせう、ホリイ」とアツシヤは笑ひながら言つた。彼女の神經だけはこの様な眺めを見ても平氣だつたらしい。「あれを御覽なさい、僞ではなかつたでせう。それにこのことになつて教訓が含まれてゐるのですよ。未來などを信じちやいけません。未來がどうなるなんて誰が知つてゐませう。現在に生きることです。そして、人間の最後は灰になつてしまふのですから、それから免れようなんて努力するのは無駄ですよ。この貴人や貴婦人たちが、いつか彼等の纖細な肉體が、野蠻人の舞踏の明りに燃やされるのだつてことを知つたら、どんな

氣がしたでせう？ だが、まあ御覽なさい。踊り子がやつて來ました。陽氣な踊り子でせう？ 舞臺

が明るくなりました。これから舞踏がはじまるのです。」

彼女の言葉がおはらぬうちに人間の篝火のまはりに、めい／＼豹の皮と羚羊の皮とを着けた約百人ばかりの踊り子が、男の組と女の組との二列になつて、やつて來た。彼等は無言のまゝ、吾々と篝火との間に互に向きあつてゐた。それから舞踏がはじまつた。地獄の悪魔の舞踏のやうな舞踏がはじまつた。その舞踏の模様を描くことは到底不可能だが、足を上げたり、二人で取つ組みあつたりするところは大分あつたけれど、吾々のやうなはじめての者が見ると舞踏といふよりもむしろ芝居のやうであつた。そして、その芝居の主題は、氣味のわるいものばかりだつた。

第一の場面は殺人未遂の場面で、その次には犠牲者を生き埋めにしようとし、犠牲者が墓穴から出ようとしてもがいてゐる場面であつた。どれもこれも皆殺伐極まるもので、それを演技者はまつたく一語も言はないで演じ、しまひには、犠牲者になる役者をかこんで、皆の者が狂暴に踊り出し、犠牲者は篝火の赤い光りに照らされて、地べたにのたうち廻つて苦しむのであつた。

ところが突然この陽氣な芝居は中絶された。少しあたりになが／＼騒ぎが起つたかと思ふと、大柄な、強さうな一人の女が、このいまはしい昂奮に狂酔して、吾々の方へよろめきながらとんで來て金切聲で叫び出した。

「黒山羊がほしい、黒山羊が貰ひたい。黒山羊をつれてきてくれ！」かう言ひながら彼女は岩の床の

上にあつて倒れて、口から泡を吹き、のたうち廻つて、しきりに黒山羊をせがんで叫んだ。それは實に此の上ない不氣味な、醜惡極まるながめであつた。

すると忽ち大部分の踊り子は彼女のまはりに集まつて来て輪をつくつた。尤も少しはまだうしろの方で踊りつゞけてゐる者もあつた。

「悪魔に取つ憑かれたんだ」とその中の一人が叫んだ。「誰か走つて行つて黒山羊をつれて来い。さあ悪魔や、おとなしくしておいで！ おとなしくして！ 今に黒山羊をつれて来てあげるからね！ 今つれに行つたのだから。」

「黒山羊がほしい。黒山羊が貰ひたい！」女は泡を吹きながらごろごろげまはつてはまた金切聲を出した。

「よし、よし、悪魔や、今に山羊が来るからね、おとなしくしておいで、よい悪魔だから！」

そのうちに近所の厩から、山羊が鳴きながら角をひつばられて来た。

「黒い山羊か、黒い山羊か？」と憑かれた女は叫んだ。

「さうだよ、悪魔、夜のやうに黒い山羊だ」と言つてから一寸傍を向いて「うしろへ山羊をかくしとけ、臀と腹とに白い斑點があるのを悪魔に見せないやうにしろ。いますぐだよ、悪魔。さあはやく咽喉を切るんだ。血はどこにある？」

「山羊！ 山羊！ 山羊！ 黒山羊の血をくれ、はやくくれ、くれつたら！ お、お、お、山羊の

血をくれ。」

その時きやあつと怖ろしい鳴き聲をあげて山羊は殺された。するとすぐに一人の女が、血の一ぱいはひつた血をもつて駈けて来た。憑かれた女は、その時此の上なく物狂ほしくなつて、泡を吹いてゐたが、その血をひつつかんで、ぐいとそれを飲みほした。すると忽ちあの恐ろしいヒステリーの發作はけろりと治つてしまひ、女は兩の腕をのばして、につこり笑ひながら、また踊り子の群に混つてしまつた。踊り子等は、やがて、来たときと同じやうに二列になつて出てゆき、吾々と篝火との間は空っぽになつてしまつた。

私はもうこれで響應はすんだのだと思つて、何だか氣持ちもわるくなつたので、女王にもう起つてもよいかと訊ねた。すると、突然狒々のやうなものが跳び出して来て、火のまはりをびよこびよこ跳んでゆき、反對の側から出て来た獅子といふよりも獅子の毛皮を着た人間と出會つた。その次には山羊や牛の皮を着て角を左右に振つてゐる人間が出て来た。それからひきつゞき、羚羊や、山羊や、その他の様々な動物が出て来た。中には、きら／＼光る鱗のついた蟒蛇の皮を着て數碼もうしろの方へ尾をひいてゐる女もまじつてゐた。假面舞踏者がすつかり揃ふと、彼等は、火のまはりを、異様な身振りをして踊りはじめ、それ／＼自分の假装してゐる動物の啼き聲を摸倣して、唸つたり、鼻を鳴らしたり、蛇のやうにしゆう／＼音をたてたりした。

その踊りは大分長くつゞいた。そのうちに吾々はこの默劇に飽きて来たので、レオと二人で少しづつ

らぶら歩いて、人間の松明を見て来てもし、かとアツシヤに訊ねた。彼女は別にそれに逆らはなかつたので、吾々は起ち上つて、左手の方へ歩いて行つた。一つか二つ燃えてゐる人間の身體を見ると、吾々はすっかり胸が悪くなつて来たので、あとへ引き返さうとした。その時吾々は一人の踊子に注意をひいた。その踊子は豹の扮装をして、仲間の動物から離れて、吾々のすぐそばでとりわけ元氣に踊つてゐたが、だんく、燃えてゐる木乃伊と木乃伊の丁度等距離にあたる一番暗いところまで来た。吾々は好奇心にかられてその方へついて行つた。すると突然、この踊り子は、吾々の前を通りすぎて、外側の暗がりの中へ突き進んで行き、足で起ち上つて「こつちへいらつしやい」と低い聲で言つた。吾々は、その聲を聞いて、すぐに、アステーンの聲であることを知つた。レオは私に相談もせず、くるりと身をめぐらして彼女のあとについて、外側の暗闇の中へ行つた。私もはく、急いで二人のあとを追つた。豹が、かれこれ五十歩も歩つてゆき、松明の明りも、篝火の光りもとゞかぬところまで来たときに、レオは豹の扮装をしたアステーンに追ひついた。

「あなた！」といふ囁き聲が私の耳にきこえた。「たうとう妾はあなたを見つけました！ きいて下さい妾の命はいま女王のために取られかゝつてゐるのですわ。きつと狒々さんからお聞きになつたでせう。女王が妾を追ひ出したときの模様は？ わたしはあなたを愛してゐます。あなたは此の國の習慣で妾の夫になつたのですもの。妾はあなたの命を助けてあげました。それだのにあなたは妾をお捨てになるの？ ねえ、あなた、戀しいあなた？」

「勿論するやうなことがあるもんか」とレオは言つた。「僕はお前を探してゐたんだよ、アステーンこれから行つて女王にわけを話さう。」

「いゝえ、いゝえ、あの女は妾たちを殺してしまひます。あなたはあの女の力を御存じないので。そこにある狒々さんは知つてゐます。あの人は見たのですから。ねえ、あなた、逃れる道は一つしかありません。若しあなたが妾をお見すてなさらぬなら、今すぐに、沼地をこえて逃げて下さい。さうすれば、もしかすれば逃げおほせるかも知れません。」

「レオ、わしは頼むから」と私は言ひかけたが、アステーンはすぐに私の話を横取りした。

「いゝえ、この人の言ふことをきいちゃいけません。はやく、はやく。死は目の前にあります。今でも、ことによると女王は妾たちの話をきいてゐるかも知れませんわ」彼女はもう片時の猶豫もなく、レオの腕に身を投げかけて、否應なしに相手を説きふせようとした。彼女が身を投げかけた時に、彼女の頭から豹の頭がこぼれ落ちた。彼女の頭髮に、三本の白い指のあとが、星あかりでかすかに光つてゐるのを私は見た。あまり無鐵砲な計畫に私は恐ろしくなつたのと、それにまたレオは女にかけてはあまり強い方ではないことを知つてゐたので、私はもう一度口をはさまうとした。すると後の方で、銀鈴のやうなかなかな笑ひ聲が聞えた。私はうしろを振り返つた。恐ろしや！ それは別人ならぬ女王であつた。女王がピラリと二人の啞の男とをつれて立つてゐたのだ。私は呀つと叫んでもう少しでその場に倒れさうになつた。何故かといふとかういふ破目になつて来ては、きつと恐ろしい悲劇がもちあ

がらねばおさまらぬにきまつてゐることを私は知つてゐたからだ。しかも、最初に槍玉にあがるのはつきり私らしいと思はれたからだ。アステーンはいふと戀人を抱いてゐた手をはなして、兩手で眼をかくした。レオはこの場の恐ろしさをまだ十分に知らなかつたので、たゞ顔を赧くして、こんなきまりの悪い場面を見られた人が誰でもさうであるやうに、狐につまゝれたやうな顔をしてゐた。

第二十章 勝利

それからしばらくの間、私がこれまで経験したことのないやうな、何とも言へぬ苦しい沈黙がついた。アツシヤがそれを破つてレオに呼びかけた。

「お客さま」と彼女は言つた。その聲は此の上ないやさしい聲ではあつたが、どこかに鋼鐵のやうな冷たい調子をもつてゐた。「そんなに、恥かしがらなくてもいい、でせう。まつたくよくお似合ですわ。豹と獅子なんて！」

「うるさいなあ」とレオは英語で言つた。

「それから、アステーン」と女王は言葉をつづけた。「ほんとに妾はお前を知らずに通り過ぎるところだつた、あの光がお前の髪についてゐる白い縞を照してくれなかつたら」かう言ひながら彼女は地平線の上に昇つたばかりの、皎々たる月を指さした。「さう！ さう！ 舞踏ももうすんだし、松明も燃えつくしてしまつたし、何もかも靜かになつて、灰になつてしまつたので、お前は、戀をするのに又

とない時だと思つたのだね——ところが、妾は、妾の命令にそむく者はないと思つてゐたのですよ、お前はもうとつくに遠くへ行つてしまつたのだと思つてゐたのですよ。」

「妾をからかはないで下さい」とかはいさうな女は苦しい聲でうめいた。「妾を殺して、きれいに片付けてしまつて下さい。」

「おや、どうして？ 熱烈戀の唇から、そんなに速く、冷い墓場の口へ行くのはよくありませんよ」かう言ひながらアツシヤが合圖を見ると、啞どもは、すぐさま、づか／＼とアステーンのをばへやつて来て、彼女の兩腕を兩方からつかんだ。畜生つと言ひながら、レオは近くの啞に跳びかゝつて、その男を地べたに投げつけ、ちつとその男を睨みつけながら拳を握りしめて立つてゐた。

アツシヤは再び笑つた。「ずゑ分見事にお投げになりましたのね。ついこないだまで御病氣だつたにしては、ほんたうにお強い腕ですこと。でもお願ひですから、この男は殺さないで、妾の命令をさしてやつて頂戴！ あの女に危害を加へるやうなことはさせませんから。夜の風が冷たくなりましたから、あの娘は妾の居間へつれてゆかうと思ふのです。あなたのお氣に入りの娘ですもの、妾だつて大事にしますわ。」

私はレオの腕をつかんで、地べたにへたばつてゐる男のそばから彼を引きはなさうとした。彼は半ば途方にくれてゐたが、私の言ふとほりになつて、その男からはなれた。そこで吾々は丘を横ぎつて、洞窟の方へ向けて歩き出した。丘の上にはもう踊り子の姿は見えなくなり、彼等の舞踏を照して

あつた明りも消えて、たゞ白い人間の灰ばかりがあとにのこつてゐた。

それから吾々はまつすぐにアツシヤの居間へ着いた。次に起ることに付いて不吉な豫感をもつてゐた、めに胸がふさいでゐたので、あまりに早く着いたやうに私には思はれた。

アツシヤはクツシヨンの上に腰を下して、ジョップとビラリを退け、氣に入りの一人の召使だけをのこして、あとの啞どもには、ランプを置いて立ち去るやうに合圖をした。吾々三人はその場に立つてのこつてゐた。不幸せなアステーンは吾々一同から少し左にはなれて立つてゐた。

「さて、ホリイ」とアツシヤは口をきつた。「あなたは妾がこの悪いことをした娘に」彼女がアステーンを指しながら言つた。「立ち去るやうに命令けたのを聞いてゐましたね。あなたがあまり頼むもんだから妾はこの女の生命を助けてやつたのですよ。そのあなたが、なぜ、今夜妾が見たやうなことにかかりあひなされたのです？ 返事をしなさい。そして、あなたのために言つておきますが、ほんたうのことを仰言ひ。妾はこのことについては、嘘はき、たくありませんから！」

「まつたく偶然だつたのですよ、女王」と私は答へた。「私は何も知らなかつたのです。」

「妾はあなたの言葉を信じますよ、ホリイ」と彼女は冷やかに答へた。「妾があなたを信じるのは、あなたのためにしあはせですよ。では罪はすつかりこの女にあるのですね？」

「罪なぞ何もありませんよ」とレオが遮ぎつた。「この女は誰の妻でもありませんよ。そして、この國の習慣に従つて、私と結婚したらしいですよ。誰も害を受けたものはないぢやありませんか？ いづ

れにしても、夫人、この娘がしたことは私がしたことです。この女を罰するなら、私も一しよに罰して下さい。」それから彼は怒りのために聲を上げまして言葉を吐つた。「若しこの啞どもに、この女に指でも觸らせたなら、私は、そいつを八つ裂きにしてしまひますよ、言つておきますが！」

アツシヤは氷のやうに黙つてきいてゐた。そして何とも言はなかつた。だが、レオの言葉がをはると、彼女はアステーンに向つて言葉をかけた。

「お前は何か言ひたいことがありますか。淺慕な女だ。はしたない情慾をみたすために、妾の意志の風に逆うてまで、うかつにも漂うて行かうと考へるなんて、馬鹿な、薬すべか羽毛みたいなもの、くせに！ どうしてお前はこんなことをしでかしたのです。妾はそれがき、たい！」

その時のアステーンの態度は世にも驚くべき勇氣と大膽との見本であつたやうに私は思ふ。此の、あはれむべき、不運な女は、恐るべき女王の手中に生殺與奪の權を握られてゐると知りながら、しかも以前の苦い経験から彼女の敵手の力がどんなに偉大なものであるかを知りながら、泰然自若として、絶望のどん底から、なほ、彼女に挑戦する力を曳き出したのであつた。

「妾がかういふことをしましたわけは」と彼女はきつと身體を伸して、けなげにつゝ立ち上り、豹の皮を頭から拂ひのけながら答へた。「妾の戀は墓場よりも深いからです。妾の心が選んだこの人と一緒に生きるのだから、妾は生きた屍骸も同然だからです。ですから妾は命を賭けたのです。今では妾の命はもうあなたの怒りにふれて無いも同じです。けれども、いまでも妾は、命を賭けたことを

喜んでゐます。命を賭けた以上は命を支拂はなければなりません。この方は一度妾を抱きしめて、まだ妾を愛してゐると言つて下さつたのですもの。」

この時アツシヤは半ば長椅子から起ち上つたが、また腰を下した。

「妾は魔法は知りません」と彼女は豊かな聲量を一ぱいにはり上げて言葉を吐つた。「それに妾は女王でもありません。またいつまでも死な、い命ももつてゐません。けれども女の心といふものは、どんなに深い水の底へでも沈んでゆける程重いものですよ、女王様、女の眼はあなたのヴェールの奥まで見とほすことのできる程鋭いものですよ、女王様！」

「お、お聴きなさい、妾は知つてゐます。貴女は御自分でこの人を愛してゐらつしやるのです。それでああなたの戀の邪魔になる妾を殺さうとなさるのです。妾は死にます。死にます。死んで暗闇の中へ参ります。それともどこか妾の知らないところへ参ります。ですけれど、このことだけは妾は知つてゐます。妾の胸には明りが輝いてゐます。その明りによつて妾には眞理が見えます。妾のないあとの未來が妾には巻物のやうにひろがつて見えるのです。妾がはじめて妾の夫を知つた時」と言ひながら彼女はレオを指さして「あの人の妾への結婚の贈り物は死であることも妾は知つてゐました。そのことは突然妾にわかつたのです。けれども妾は背を向けられないで、その價を支拂はうと決心しました。ところがどうでせう。今その死が來たではありませんか！ それからいま運命の階段の上に立つて、そのことを知つてゐると同じやうに、妾は、あなたが、あなたの罪から何の利益も刈りとることはでき

ないつてことも知つてゐます。あの人は妾のものです。あなたの美しさは、星の中の太陽のやうに輝いてはゐますけれど、あの人は決してあなたのものにはならないで、いつまでも妾のものです。あの人は此の世で、決してあなたを見むきもしなければ、あなたを妻と呼ぶこともないでせう。あなたの運命も矢つ張りきまつてゐるのです。妾には見えます」彼女の聲は、こゝで靈感を受けた女豫言者の絶叫のやうに、一段と張り上つた。「あ、妾には見えます——」

その時、これに答へる憤怒の叫びが鳴り響いた。私は聲のする方へ顔を向けた。アツシヤはすつくと立ち上つて手を伸してアステーンを指さしてゐた。するとアステーンは急に黙つてしまつた。私はこのかはいさうな女をちつと見つめた。私が見つめてゐるうちに、彼女の顔には、以前に、變な歌を歌ひ出したときと同じやうな、悲しさうな、恐怖の表情が浮んで來た。彼女の眼は大きくなり、鼻孔はひろがり、唇は白くなつた。

アツシヤは一言も言はず、ごとりとも音をさせないで、たゞ身體をしやんと伸して、腕を差し出してゐた。そしてヴェールにまとはれた彼女の高い全身は白楊の葉のやうに震ひ、ちつと犠牲者を凝視してゐる様子であつた。アステーンはアツシヤに凝視められながらも、兩手を頭へ上げて、一瞥絹を裂くやうな叫び聲をあげて、くるくると二度身を廻して、ぱつたり床の上に倒れた。レオと私とは彼女のそばへ走り寄つた。あ、彼女はもう石のやうになつて死んでゐたのだ。恐るべき女王の不思議な靈力、或は壓倒的意力に感電して即死したのだ。

しばらくの間レオは何が起つたのか知らなかつた。だが我に返ると、彼の顔は見るも凄まじい形相になつた。荒々しい呪ひの言葉を叫びながら、死骸のそばから起ち上つて、向き直つたかと思ふと、文字通り、アツシヤに跳びかゝつた。だが、彼女はそれを見てゐた。そしてまた手を差し出した。するとレオはよろ／＼と私の方へよろけて来て、私がかまへなければ倒れてしまふところだつた。あとで彼は、その時のことを、まるでだしぬけに胸の邊をこつびどく打たれたやうな氣がしたと言つてゐた。そして、その上に、まるで、すつかり男らしい勇氣を抜きとられたやうに、臆病になつてしまつたと言つてゐた。

その時、アツシヤは言つた。「どうぞ妾をゆるして下さい、お客様」と彼女はやさしく彼に話しかけた。「若し妾の裁判があなたのお氣に障りましたなら。」

「貴様を許せて、悪魔！」とかはいさうなレオは怒りと悲しみとに両手を握りしめて叫んだ。「貴様を許してくれつて、この人殺しめ！ きつと、殺せるものなら、殺してやる！」

「いゝえ。」と彼女は前と同じやさしい聲で答へた。「あなたにはおわかりならんのです。今こそあなたも知つてもよい時です。あなたは妾の戀人です。妾のカリクラテスです。妾の夫です！ 妾の力です！ 二千年の間妾はあなたをお待ちしてゐました、カリクラテス。そして、今やつとあなたは妾のところへお歸りになつたのです。それからこの女は」と死骸を指さしながら「妾とあなたとの仲を邪魔したので。ですから妾は殺してしまつたのですよ、カリクラテス！」

「誰をつけ！」とレオは言つた。「僕の名はカリクラテスぢやない。僕はレオ・ヴィンシイだ。カリクラテスといふのは僕の先祖の名だ——とまあ僕は信じてゐるんだ。」

「あゝ、あなたは、あなたの先祖がカリクラテスだつたと仰言るのですねえ。で、あなたも矢つ張りカリクラテスなのです。カリクラテスの生れ更りなのです。妾のいとしい戀人なのです？」

「僕はカリクラテスぢやない。それに貴様の夫だつて、或は貴様の何かだつて。そんなものになる位なら、僕は地獄の悪魔の夫になる。悪魔でも貴様よりはました。」

「ずあぶんなことを仰言いますね、そんなことを、カリクラテス？ でもあなたは長いこと妾を見なかつたのですつかりお忘れになつたのですわ。妾はまだ仲々美しいのよ、カリクラテス！」

「僕は貴様がきらひだよ、人殺し、それにちつとも貴様なんか見たくない。貴様がどれ程美しくたつて、それが僕に何の關係があるのだ。僕はほんたうに貴様が嫌ひだよ。」

「でも、ほんのもうしばらくたてばあなたは妾の膝の前に這つて、妾を愛するとお誓ひになりますよ」とアツシヤはやさしい、からかふやうな笑ひを浮かべながら答へた。「さあ、いまがちやうど詭へ向きの時です。このあなたを愛してゐた死んだ娘の前で、それを證據立てようぢやありませんか。」

「さあ、妾を御覽なさい、カリクラテス！」かう言ひながら彼女は、急に身を動かし、薄紗のヴェールを拂ひのけ、低い肌着と蛇の帯とだけになつて、立ち上り、輝くやうな美しさをあらはした。彼女がヴェールを脱ぎすて、立ち上つたときの姿には、波の中から立ち上つたダイナスか、大理石の中か

ら抜け出したガラテアか、墓場から姿を現はした美装した精霊のやうな風情があつた。彼女は立ちあがつて、深い、ぎら／＼光る眼差で、ちつとレオの眼を見据ゑた。すると、彼の握りしめた拳はひとりでにほどけ、彼の固くなつて慄へてゐた顔たちは、彼女の凝視を受けてひとりでにゆるんで来るのを私は見た。彼の驚愕は讚歎とかはり、讚歎は憧憬と變つて、もがけばもがく程彼女の恐るべき美はしつかりと彼に喰ひ入り、彼の五官をとらへてそれをひきつけ、彼の心の臓を、ひきすりだすのを私は見た。私にもかうした経験はおぼえがある。彼の二倍も年をとつて居る私もそれと同じ経験を來たのだ。否、現に、彼女の美しい情熱的な凝視は私に向けられてゐるのではないのに、私は同じ経験を新たにしようとしてゐるではないか？ さうだ！ 正にその通りだ。私はこの瞬間に、物狂ほしい迄に嫉妬を感じたことを白狀しなければならぬ。恥かしい話だが、私はレオに跳びかゝらうとした位だつた。この女性は、私の道德感を攪亂して、殆んど破壊してしまつたのだ。誰だつて彼女の人間のものとも思はれぬ美しさを見たら、十人が十人頭をかき亂されてしまふに違ひないのだ。だが、私はやつと、どうかかうか自分を制して、もう一度この恐ろしい悲劇の絶頂を見るためにふり向いた。

「あ、びつくりした！」とレオは息を切らしながら言つた。「あなたは女ですか？」

「女ですとも、正真正銘の女ですわ。そしてあなたの妻ですわ、カリクラテス！」と彼女は答へた。そして、圓い象牙のやうな腕を彼の方へ差し出して、何とも言へぬ美しい笑ひを洩らした。

彼は飽かずに彼女をしげ／＼と見まもつてゐたが、だん／＼彼女の方へにじりよつて行つた。その

時急に彼の眼は氣の毒なアステーンの死骸の上に落ちたので、ぶる／＼と身震ひしてたち停まつた。「どうしてそんなことが？」と彼は嗚れ聲で言つた。「貴女は人殺しです。この女は私を愛してゐたのです。」

ほら、もう、彼は彼がアステーンを愛してゐたことを忘れてゐたのだ。

「そんなことは何でもありませんわ」とアッシヤは樹の間を渡り行く夜風のやうなやさしい聲でつぶやいた。「何でもありませんわ。若し妾が罪を犯したのなら、妾の美しさに免じて許して下さい。妾が罪を犯したのも、あなたを愛すればこそです。ですから妾の罪などは、うつちやつて、忘れてしまつて下さいね。」そして彼女はもう一度兩の腕を伸して「いらつしやい」と囁いた。それから數秒間で萬事が結着してしまつた。

私はレオがもがいてゐるのを見た。彼が逃げ出さうとしてゐるのをさへ見た。だが、彼女の眼は鐵の鎖よりも強く彼をひきつけ、彼女の美しさと、集中された意志と情熱との怪しい力は彼の心の中へ泌み徹つて彼を壓倒してしまつた。しかもそれは、死を賭してまで彼を愛した女の死骸を前にしての出來事なのだ。これは實に恐ろしい、悪いことのやうに聞えるかも知れないが、あまり深く彼をとがめるわけにはゆかない。罪は彼のせみではないのだ。彼を邪惡にひきつけた女の誘惑は人間以上のもので、彼女の美しさは人間の娘の美しさ以上のものだつたからである。

私は再び見上げた。その時には彼女の身體は、すつかり彼の腕に抱かれ、彼女の唇は彼の唇に

おしつけられてゐた。かくして、死んだ戀人の屍體を祭壇として、レオ・ヴィンシイは、戀人の血で手の染きつた殺人女と結婚の誓ひをかけたのである。その誓ひは一日の誓ひであるとはいへ又永久の誓ひでもある。何故なら、こんな風にして名譽も魂も情慾のために賣つてしまつた人は、それから解放されることは容易なことではないからである。

突然彼女は蛇のやうに身をくねらして彼の抱擁から迂り抜けたかと思つて、再び低い聲で、からかふやうな勝利の笑ひを洩らし、アステーンの屍體を指しながら言つた。

「妾は、しばらくすればあなたが妾の膝の前に這ひなると言つたでせう、カリクラテス？ ほんたうに、あまり長い時間はかゝらなかつたわねえ！」

レオは恥しさと面目なさで呻いた。彼はすつかり、壓倒され、打ちひしがれてゐたけれど、自分がどれだけ墮落の深味へしづみこんだかに氣のつかぬ程性根が腐つてはゐなかつた。

アッシヤは二度が笑つた。そして大急ぎでヴェールをかぶつて、不思議さうな眼をしてこの妙な場面を見てゐた嘔娘に合圖をした。すると嘔娘は室を出て行つたが、すぐに二人の男の嘔をつれてひき返して來た。女王はこの男の嘔にまた別の合圖をした。そこで、三人の嘔は、あはれなアステーンの死骸の腕をとつて、洞窟の床を重さうに曳きすつて行つてカーテンの外へ運び出した。レオはしばらくすると兩手で眼をおぼつた。私もひどく昂奮させたせいか、アステーンの屍骸が、出てゆきがけに、吾々を見つめてゐるやうに思つた。

カーテンが揺れて、もとの位置にかへり、その蔭へ氣味の悪い一行が消え去つたときアッシヤは「あゝ過去の死人は過ぎ去つて行く」と嚴肅に言つた。それから、また彼女はがらりと氣分を一變して、ヴェールを脱ぎすて、アラビアの住民の古い詩的ななをつくつて、勝利の讚歌、或は結婚の祝ひの歌を歌ひ出した。それは實に美しい情味に溢れた歌であつたが、英語に翻譯するのは非常にむづかしい。それは、實際書いたり、讀んだりする歌ではなくて、音樂にあはせて歌ふ歌である。それは二部に分れてゐて、第一部は叙事詩で、第二部は抒情詩であつた。私のおぼえてゐるかぎりを記すとそれは次のやうな歌であつた。

戀は沙漠の花に似たり。

たゞ一度花さきて枯れてゆく、アラビアの蘆薈に似たり。つらき浮世に花咲きて、浮世の荒野を飾るなり、嵐の上の星のごとく。

戀の日輪は精靈にして、その周圍には神風そよぐ。

過ぎ行く人の登音に戀は花咲き、過ぎゆく人にしたたる。

過ぎ行く人はこれを摘む。蜜に充ちたる赤き花を摘みて、沙漠の中を運びゆく。花枯る、

まで、沙漠の盡くるまで。

人の世の荒野に咲く赤き花は唯一つ、

その花こそは戀なれ！
吾等が放浪の闇を照す光は唯一つ。
その光こそは戀なれ！
吾等が絶望の夜に輝く希望は唯一つ。
その希望こそ戀なれ！
戀ならぬものは皆偽りなり。水に捨ぐ影なり。風なり、空虚なり。
戀の大きさを知るものありや？
戀は肉より生れて靈に宿り、靈と肉とより楽しみをとる。
戀の美しさは星の如し。
その形は様々なれど、美しさはみな一つ。その星の何處より昇り、何處へ沈むかを知る者はたえてなし。

それからアツシヤはレオの方に向きなほり、彼の肩に手をおいて、前よりも一段と朗らかな、勝ち誇ったやうな調子で歌ひはじめた。釣合のとれた歌の節は徐々に高潮に達してロマンチックな散文から、清浄、莊重な韻文にかはつていった。

戀人よ、吾は長くおん身を戀しぬ。されどわが戀は衰へざりき。
吾、おん身を長く待ちし甲斐ありて、今や報いは來れり。
遠き昔吾はおん身を見ぬ。おん身は昔より奪はれゆきぬ。
吾は墓場に忍耐の種を蒔き、希望の目にてそれを照らし、悔恨の涙もて水かひ、智慧のいぶきをかけぬ。
さればいま種子は芽生えて實を結べり。見よ、そは墓場より芽ばえぬ。さなり枯れたる骨と屍の中より。
吾、待ちわびし報いは今ぞ來れり。
吾は死に打ち克ち、死は死せる人を吾にかへしぬ。
されば吾樂しまん、未來は美しければ。
吾等が過ぎ行く牧場は永久に綠なり。
時は來れり。夜は溪間へ去れ！
曙は山頂に接吻せり。
戀人よ、吾等樂しく過さん、安らかに行かん。
吾等王冠を戴かん。
世の民はみな、吾等をあがめ、吾等に驚き、吾等の美と力とに眼くらみて平伏さん。吾等の

偉さは時より時へと鳴り響き、限りなき日を走りゆく戦車の如く諱かん。
吾等笑ひながら勝利の榮華に馳せゆかん。

小山にをどる日光の如く笑ひながら。

勝利より新たなる勝利へと限りなく進まん。

力より新たなる力へと限りなく進まん。

光榮を身にまとひて倦まず進まん。

吾等の運命をはりて、夜の襲ひ來るまで。

彼女はこの不思議な歌を歌ひ了ると、ちよつとやすんでから言つた。

「多分あなたは妾の言葉を信じなさらんでせう、カリクラテス。多分あなたは妾があなたをだましてあるとお思ひでせう。妾が長い年月の間生きてゐたとか、あなたが生れ更つて來たのだとか言つても信じなさらんでせう。ですけれどそんな風に考へないで下さいね。これには偽りはないのですから。たとひ太陽が西から出やうとも、燕が古巢を忘れやうとも、妾の心は偽りを誓ひませんわ。妾はあなたを見忘れはしませんわ、カリクラテス。たとひ目かくしをされようとも、眼をとり去つて妾のまはりに闇の壁をゆはうとも、私の耳があなたの聲を覚えてゐます。たとひ耳を奪はれても手であなたの額をさすれば、妾にはあなただとわかります。いゝえ、たとひ五官を奪はれやうとも、妾の魂は、

「これがカリクラテス」と妾の胸に囁きます。

彼女はしばらく言葉をきつたあとでまた言つた。「お待ちなさい。もしまだ合點がおゆきなさらぬなら、そして何か證據を御覽になりたいなら、今すぐその證據をお目にかけてませう。ホリイ、あなたにも見せませう。お二人ともめい／＼手燭をもつて、妾のあとからついて來て下さい。」

私は、いくら考へて見たつてわからぬことだらけなので、もう考へることをやめてしまつた。そして吾々は手燭をもつて彼女のあとについて行つた。

アツシヤが室の端まで歩いて行つて、カーテンをあげると、そこに一つの小さい階段が現はれた。それはこの薄暗いコオルの洞窟ではよく見受ける階段であつた。吾々はその階段を急いで降りて行つたが、その時に私は、この階段はもとの厚さは七時半もあつたらしいのに、その中央部が三時半くらゐに凹んであることに氣がついてどういふわけだらうとあやしんだ。かうした場合には却つてちよつとしたことが氣になるものだ。

階段を降りきつたところで立ち停つて、擦り減つた階段を見つめてゐるとアツシヤが私の方をふり返つた。

「この岩をこんなに踏み減らしたのは誰の足だらうと不審がつておいでなんですか、ホリイ？」と彼女は訊ねた。「これは妾の足ですよ。この軽い妾の足なのです。妾はまだあの階段が新しく平らだつた時のことをおぼえてゐます。だが、二千年あまりの間、妾は毎日々々この階段を通つたのです。」

ですから御覽なさい。妾の雪駄で、固い岩がこんなに減つてしまつたのです！」
この階段は隧道につゞいてゐた。隧道を五六歩進むと、掛幕のかゝつた入口があつた。それを一目見て、私は、その室はいつかの晩、明滅する焰の光で私か物凄い場面を見た時の室であることを知つた。カーテンの模様に見覚えがあつたのだ。で、それを見ると、あの恐ろしい光景がまぎ／＼と眼の前へ浮んで来て、思ひ出ただけでも胸懐ひがした。それは墓所であつたのだ。アツシヤはそのなかへはひつた。吾々もそのあとについて行つた。私はこの墓所の祕密がこれからわかつて来るのだと思ふと嬉しくもあり、また恐ろしくもあつた。

第二十一章 死者と生者との邂逅

「此處が妾が二千年の間眠つてゐた場所なのです」とアツシヤはレオの手から手燭をとつて、それを頭の上にかざしながら言つた。
「此處に」とアツシヤは岩の上に手をのせながら言葉を吐いた。「私は毎晩毎晩、この長の年月、外套一枚着て眠つたのです。妾の夫が」と言ひながら彼女は石の寢臺に寝てゐる固くなつた人の姿を指して「こんなところに固くなつて死んでをられるのに、妾が柔かい夜具にくるまつて寝るなんて都合ですものね。こゝに、妾は、毎晩毎晩、冷たくなつたつれあひと一緒に寝てゐたのです。御覽なさい、この石の板は、今しがた妾たちが通つて來た階段と同じやうに、妾が身體を動かしたのでこんなに

磨り減つてゐます。それほどまでに妾は、あなたが眠つていらつしやる間もあなたに操をたて、あなたのですわ。これからあなたに妙なものを御覽に入れませう。生きてゐるあなたに死んでゐるあなたをお目にかけてませう。ようござんすか？」

吾々は返事もしないで、呆氣にとられて顔を見合せた。アツシヤは前へ進み出て、屍衣の端をつかんでまた語り出した。
「吃驚なされることはありませんわ」と彼女は言つた。「あなたがたには不思議に見えるかも知れませんが、現在生きてゐる者は、みんな以前にも生きてゐたことがあるのです。たゞ妾たちがそれを忘れてゐるだけのことです。でこれから死んだあなたと生きてゐるあなたとをあはしてあげませう。いくら長い年月がその間に横はつてゐても、あなたは矢つ張りあなたです。恐れるには及びませんよ、カリクラテス、これから、こないだ生れ更つたばかりのあなたが、遠い昔に此の世を去つたあなたを御覽になるのです。妾は、ほんの妾の生涯の一ページをめくつて、そこに書いてあることをあなたにお目にかけるのです。さあ御覽なさい！」

急に身を動かして、彼女は冷い身體から屍衣を拂ひのけて、その上を手燭で照した。私はそれを見て、ぞつとして身體をすくめた。實に、吾々の前に石の柵の上に白衣をまとうて横はつてゐたのは、レオ・ヴィンシイそのまゝの人の姿であつたのだ。私はそこに生きて立つてゐるレオと、死んで横はつてゐるレオとをじろ／＼見くらべた。二人の間には少しの違ひもなかつた。たゞ横はつてゐる方の

レオがいくらか老けて見ただけであつた。顔の造作の一つ一つもすつかり同じで、レオの顔をなみなみならず美しく見せてある金色の捲髪の刈りこみまで、寸分もちがはなかつた。死人の顔の表情は、レオがぐつすり熟睡してあるときの表情にそのまゝだつた。私はこの死者と生者と位よく似た生兒を見たことがない。かういへば、この二人がどれほどよく似てゐたかわかるであらう。

私は、レオがどんな様子をして、この死んだ自分を見てゐるかと思つて彼の方を振りむいた。彼は呆然としてゐた。そして二三分間棒立ちになつて、黙つてそれを見てゐたが、たうとう吐き出すやうに叫んだ。

「それをかくして下さい、そして私をあつちへつれて行つて下さい。」

「まあお待ちなさい、カリクラテス」とアツシヤは言つた。彼女はまるで神の靈示を受けた巫女のやうにつゝ立つて、頭上に手燭をかざし、彼女自らの豊かな美しさと、屍衣をまとうて柵の上に横はつてゐる不思議な冷たい死體とを照しながら、莊重な、潤達な言葉で、おごそかに語り出した。

「お待ちなさい。これから或るものをあなたにお目にかけますわ。妾の罪をあなたに匿しておくのはよくありませんから。ホリイ、死んだカリクラテスの胸のところを開けて下さい。妾の夫は死んだ御自分の身體に觸るのが恐ろしいでせうから。」

私は指を慄はしたが、彼女の命令に従つた。私のそばにゐる生きた人の眠つた像に手を觸れるのは何だか神聖を漬すやうな氣がした。やがて冷たい胸があらはれた。そして、ちやうど心臓の眞上に、

一つの傷痕があるのが見えた。それは明かに槍か刀で刺したらしい傷痕であつた。

「御覽になつたでせう」と彼女は言つた。「あなたを殺したのはこの妾なのです。妾はあなたに生命の代りに死を與へたのです。妾は埃及女のアメンルタスのためにあなたを殺したのです。この女は手練手管であなたを籠絡してゐたので、あなたはこの女を愛してをられたのです。そしてその女は強かつたので、妾は、いまあの女を衝ち殺したやうにその女を殺してしまふことはできなかつたのです。妾は怒りのあまり、あわて、ついあなたを殺してしまつたのですが、それからといふものこの二千年の間、妾は、悲歎にくれて、あなたの再来をお待ちしてゐたのです。ところが今度あなたはとうとう歸つて來られました、今度は妾たちの仲を邪魔する者はなくなりましたから、今度こそ妾は、あなたに、死のかはりに生命を差し上げます。永遠の命といふわけにはゆきませんが、何千年も何千年もの間の命を差し上げます。それから、これまでだつて、これから先だつて、誰ももつたことのないやうな力と富と美とをあげます。この死骸が、この長の年月の間、妾の冷たいつれあひであり、妾の慰めでありましたが、もう、今となつては、生きたあなたが歸つて來られたのですから、これには用はありません。このやうなものは、妾の忘れたいと思ふ記憶を喚びおこすばかりです。ですから、これはもう塵に返してしまひませう。御覽なさい、妾はこの嬉しい時のためにすつかり準備しておいたのです。」

彼女は、彼女の寢臺につかつたのだと言つた別の長椅子から、大きな、柄の二つついた硝子の甕を

取り出した。その口は膀胱で閉ぢてあつた。彼女はこの蓋をゆるめて、先づ、そつと死骸の上に身を屈めてその額に接吻をし、それから、蓋をとつて、中の液が一滴でも吾々や彼女自身の身體へ飛ばないやうに非常に用心をしながら、壺の中の薬液を死骸の上にふりかけた。それから残つてゐる滴を胸と頭とに垂らした。すると忽ちにして、もやくとした水蒸気が立ち昇つて、洞窟の中は、むせるやうな煙で一ぱいになつた。そのために、この恐るべき酸が作用してゐるうちに屍骸がどうなつてゐたかはちつともわからなかつた。私はこの薬液は強裂な何かの酸だらうと思つた。屍體の横つてゐる場所から、じい、つといふ熔けるやうな音や、ばち／＼はじくやうな音が聞えてゐたが、煙が消え去るまでにはその音も止んでしまつた。やがて煙はすつかり消えて屍體の上の方に小さい雲のかたまりになつて上つてゐるだけになつた。それから二三分間もたつと、その煙も消えてしまつた。そして、不思議に思はれるかも知れないが、實際だから仕方がない。何千年の間、昔のカリクラテスをのせてゐた石の長椅子の上には、ぶす／＼くすぶつてゐる三握りか四握りの白い粉だけしか見られなくなつた。酸が完全に屍體を破壊してしまつたのだ。下の石までも少し腐蝕してゐた。アッシャは身を屈めてその粉をつかみ、それを空中にまき散しながら、落ちついた莊嚴な聲で言つた。

「塵は塵へ！ 過去は過去へ！ 失はれたるものは失はれたるものへ！ カリクラテスは死んだ、そして生れ更つた！」

灰は吾々の身のまはりに漂うてゐたが、やがて岩の床の上に散りしいた。その間、吾々は、黙つてその落ちるのを見てゐた。あまりのことに呆氣にとられて言葉も出なかつたのである。

「さあもう行きなさい」と彼女は言つた。「そして眠れたら、よくお休みなさい。妾はよく見張りをしてゐて考へねばならぬことがありますから。明日の晩には妾たちはこの土地をはなれるのですからね。そして妾は明日の晩行く道を随分長いこと歩いたことがないのですから」

そこで吾々はお叩頭をして彼女のそばを辭した。

吾々の室へ歸つたときに、私はジョップがどうしてゐるかと思つて彼の寝てゐる場所をのぞきこんだ。彼は、吾々が、舞踏の最中にアステーンに會ひに行く前に、すつかり、あの舞踏に怖氣をふるつて逃げ出してゐたのだ。彼はぐつすり眠つてゐた。可愛い奴だ。彼の神経は多くの無教育な人間の神経と同じやうにあまり強くないので、今日のをはりの恐ろしい光景を彼が見ずにすんだことを私は喜んだ。それから吾々は吾々の室へはひつた。レオはかあいさうに、生きた自分の氷つた像を見てからといふもの、まるで呆然としてゐたが、室へ歸ると、急にひどく悲しみ出した。もうあの恐ろしい女王の面前にゐるのではないのに、彼は、今までに起つて來たこと、わけても、彼と離れられない仲にあつたアステーンが無残にも殺されたことを思ひ出して、悲しみが嵐のやうに一度にどつと押し寄せて來るのであつた。そして彼は悔恨と恐怖とに責めさいなまれて、見るもいたいたしい位だつた。彼は彼自身を呪つた。吾々が壺の破片に記してあつた文字をはじめて見た時を呪つた。其の文字は不思議にも實證されて來たのだ。それから彼は彼自身の弱さをひどく呪つた。だが彼はアッシャを呪はう

とはしなかつた。いつでも吾々が何をしてあるかを見てあるかも知れないやうな、不思議な靈の力をもつた、このやうな女のことを悪くいふことなどは誰にだつてではいけないのだ。

「僕はどうしたらいいでせう、叔父さん？」と彼は悲しみのあまり、彼の手を私の肩において、うなるやうに言つた。「僕はあの女を殺さしてしまつたのです。しかも殺されるのをだまつて見てゐたばかりか、五分間もたぬうちに、あの女の屍骸の上で、あの女を殺した當の女と接吻をしたのです。僕は墮落した獣だ。だが僕はそれをどうすることもできない。——こゝで彼は一段聲を沈めて「恐ろしい魔法使ひだ。僕は明日も同じやうにするにきまつてゐます。僕はもう永久にあの女に支配されるにきまつてゐます。僕にはそれが判つてゐるのです。たとひ、これから先二度とあの女を見なくても、僕は一生あの女より他の女のことは考へんでせう。僕は針が磁石についてゆくやうにあの女についてゆくに違ひありません。僕はいま此の場を逃げることでできても逃げたくないのです。あの女からはなれることはできません。僕の足がふくことをきかんでせう。だが僕の心はしつかりしてゐます。僕は心の中であの女を憎んでゐる。少くも憎んでゐると思つてゐる。何もかも怖ろしい。それにあの死んだ男、あれをどうすることができやう？ あれは僕だつたのです！僕は賣られて捉はれの身になつてゐるのですよ、叔父さん。あの女はあの女の身の代金として僕の魂をとるでせう！」

その時私ははじめて、私もそれと同じやうな經驗をしたことを彼に話した。すると、レオは、彼自身に溺れきつてゐたにも拘らず、私に同情してくれただけの分別をもつてゐた。このことは是非言つ

ておかなかちやならぬ。多分彼は嫉妬するがものでもないと思へたのであらう。あの女については、彼の方では嫉妬する理由は何もなかつたからである。私は彼に逃げ出さうではないかと勸めて見た。だがすぐに、到底逃げおほせるものではないことをさとつた。それに、洗ひざらひ正直に言つてしまへば、何か素晴らしい力があつて、この陰氣な洞窟からケンブリッヂへつれて行つてやらうと申し出たにしても、吾々は二人ともアツシヤからはなれる氣にはならなかつたらうと私は思ふ。吾々は、蛾が身を焦すの知りながら光からはなれることができないやうに、彼女から離れることができなかったのだ。吾々は札つきの阿片常用者のやうなもので、正氣の時には自分のやつてゐることがどんなに恐ろしいものであるかをよく知つてゐるにか、はらず、その恐ろしい快樂をすてる氣にはならなかつたのだ。

誰だつて、一度彼女のヴェールをとつた姿を見、彼女の樂の音のやうな聲を聞き、彼女の言葉に含まれてゐる若い智慧を呑んだ人なら、どんなことがあつたつてその快樂をすてる氣にはならぬだらう。ましてや、レオの場合のやうに、この素晴らしい女から獸身的に愛慕され、二千年の間彼のために操を守つて來たらしい證據を見せられた日にはたまつたものでない。

疑ひもなく彼女は悪い人間だ。それに疑ひもなくアステーンが戀の邪魔をした時に、彼女を殺した。だが、彼女は戀には忠實であつた。男の性質として、兎角女の罪は軽く考へ勝ちなものだ。とりわけその女が美しく彼を愛するあまり罪を犯したやうな場合には猶更さうだ。

私は今に至るまでアツシヤを愛してゐる。そして他のどのやうな女に一生愛されるよりも、たった一週間でもいゝから、彼女に愛される身になつて見たいと思ふ。私の言葉を疑ふ人や、私を馬鹿だと思ふ男に、一度アツシヤのヴェールを脱いだ姿を見せたら、その男の意見はすぐに變つて私に同感するにきまつてゐる。私は勿論男について言つてゐるので、女はさうでないかも知れない。女はかういふ女をきらふかも知れないのだ。

二時間あまりの間、レオと私とは、吾々が今までに経験した不思議極まる事件について語りあつた。それは、嚴肅な事實ではなくて、まるで、お伽噺の中の夢のやうに思はれた。甞の破片にしるしてあつた文字が、眞實であつたばかりでなく、吾々が、その事實であることを實際に確かめ、コオルの墓場の中で、吾々の來るのを二千年も待つてゐた女にあつたなんて言つたつて誰が信するものがあるらう？ 彼女がレオを見て、これが彼女が二千年間待つてゐた戀人だといふことを一目で見つけたなんて言つたつて誰が信する者があらう。だが、それは事實だつたのだ。吾々は人間の知識の無力さをつつく／＼痛感しながら、これから先の運命を天にまかせて床についた。

第二十二章 ジョツブの豫感

次の朝の九時頃、ジョツブが吾々の室へやつて來た。彼はまだ、驚きがしづまらないと見えてゐる。彼に懐へてゐたが、吾々の無事な姿を見てほつと安心した様子であつた。吾々が無事であつたことは、彼

には意外らしかつた。私がアステーンの無残の最期を話して聞かせると、彼は益々吾々の無事であつたことを感謝したと同時に、彼とアステーンとは互に好意をもちあつてはゐなかつたが、彼女のために女王のしうちをひどく憤慨して、彼女のことをいゝ／＼と悪しざまに言つた。

「だつて兎に角あの女はレオの生命を助けてくれたぢやないか」と私は言つた。

「さうです。しかし、その代りに、あの女はレオ様の魂をとつてしまひますよ。あの女はレオ様だあの女と同じやうな魔法使ひにしてしまひますよ。あんな連中にかゝりあることは悪いことだと私や思ひますね。私や、昨夜眠れませんので、床の中で、母親に貰つた小さい聖書を開いて、魔法使ひのこの書いてあるところを讀んでゐたら、こはくなつて來て髪が逆立ちになりましたよ。ジョツブがこんなところ來てるのを見たら、母親がまあ何ていふだらう！」

「實際、妙な國だね、こは、それにこゝに住んでゐる人間ども、妙な人間どもだ！」

「さうでございますとも」とジョツブは答へた。「それに、こんなことを言ふと、あなた様は私を馬鹿だと考へなさるかも知れませんが、レオ様の様子は普通ぢやございませぬよ——（レオは早く起きて散歩に出てゐたのである）——「それから、私はこの國から無事にや歸れませぬよ。そのことを私は知つてゐるのでございませぬ。昨夜私や夢を見ましたが、その夢の中で、私の年老つた親父が、この國の晴着のやうな着物來て、途中であつて來たものと見えて、この洞窟の入口から少し行つたところ、澤山咲いてゐる妙な草花をもつて私に會ひに來ましたよ。そして妙にかしこまつた口つきで、こゝ

れでおさらばなんて言ふのです。どうも私の生命は長くないらしいでございますよ。」
「莫迦を言ふな、親父の夢を見たからというて人が死ぬんだつたら、繼母の夢を見た人はどうなるんだい？」と私はからかった。

「あなた様は、私の親父を知らないからからかひなさるが」とジョップは言つた。「私の親父は特別なのです。私だつて別の人の夢を見たなら何でもありませんが、たとへばマリイ伯母さんの夢なんかなら何とも思ひませんが、私の親父と來たら特別なんです。あの怠け者の親父がこんなところまで來るなんてよく／＼のことです。きつと私に用事があつたのでございますよ。だが、それはもう仕方がありません。私は諦めてゐるのです。誰だつて一度は死なにやならんのですから。けれどもせめて基督教の式で埋めてほしいと思ひますよ。ホリイ様、もしあなた様が、いつか、この土地から出なさる時があつたら、私の白くなつた骨だけをよく願ひしときますよ。あなた様は多分出られるやうな氣がするのです。」

「おい、おい、ジョップ」と私は眞面目になつて言つた。「そんな噺語を言ふもんぢやない。どうしてそんな馬鹿なことを考へるのだ？ 吾々はこれまでだつて、すい分妙な目にあひながら生きて來たのだから、これからだつて生きて行けるぢやないか。」

「いゝえ」とジョップは固く信じてゐるやうな調子で言つた。私にそれを聞くと何だ氣味が悪くなつた。「これは噺語ではありません。私の運命はもう極つてゐるのでございます。私にはさういふ氣がするのです。實にいやな氣持ちで、どうしてこんな氣がするのか自分にもわからんのです。蟲が知らせるといふことは誰にだつてあることでございます。あなた様だつて食事をしていらつしやる時に、毒藥のことをお考へになつたら、お食事が胃の腑につかへるでせう。こんな暗い洞窟の中を歩いてゐる時に、ナイフのことを思ひ出すと、背中がむず／＼して慄へて來るでせう！ それと同じです。ただ私は、死んだアステーンといふ娘さんと同じやうに、世間並の人よりは少し勘が強いだけなんでございませう。だけど死ぬのはまあいゝとして、せめてあの燒垂で殺されるのでなけりやいゝと思つとるのでございます。」

「馬鹿な、馬鹿な」と私は怒つて怒鳴つた。

「ほんたうに、こんなところで、あなた様と議論してゐる場合ぢやありませんでした。だがこれから先も、私と一緒に居て行つて下さい、ホリイ様。ところで、これから朝食をもつて參りませう。」かう言ひながら彼は出て行つた。後にのこされた私はひどく氣がむしやむしやして來た。

私はジョップを非常に可愛がつてゐた。この男は、私が生涯にかゝりあつた人間の中で、誰よりも氣だてのよい、正直な男であつたので、私は召使といふよりも寧ろ友達のやうにつきあつてゐたのである。だから彼の身に何事か起るのではないかと思ふと、咽喉に塊りができるやうな思ひがしたのだ。彼の言つたことは、なる程つまらぬことではあつたが、その言葉の底に、何事か彼の身に起ることを彼がかたく信じきつてゐることがわかつた。それはたわいもない迷信であるにしろ、私はいく

らかひやりとせざるを得なかつた。

やがて朝の食事が運ばれて来た。それと同時に散歩に行つて来たレオも歸つて来た。此の際、レオと食事とは両方とも私には有り難かつた。といふのはそのお蔭で氣をまぎらすことができたからである。朝食がすむと、吾々はまた散歩に出かけて、アマハッガー人が麥酒の原料にする麥を蒔いてあるのを見た。彼等の麥の蒔きかたは、聖書に書いてある通りの蒔き方だつた。即ち一人の男が山羊の皮でこしらへた袋を腰のまはりにゆはひつけて、大股に歩きながら種子をまきちらして行つた。アマハッガー人のやうな恐ろしい人間でも種蒔きのやうな、しをらしい、愉快な仕事をするのを見て私はほつとした。多分、そんなことをすることによつて、彼等も爾餘の人類とどこかに共通點をもつてゐるやうに思はれたからであらう。

散歩から歸るとビラリが待つてゐて、女王が吾々に會ひたいと言つてゐる旨を告げた。そこで吾々はおそろしく彼女の前へ出た。アツシヤといふ女は世間一般の通則の例外で、いくら彼女と親しくなつても、情熱や、驚異や、恐怖の念を抱かせこそすれ、侮蔑の念を抱かせるやうなことはなかつたのである。

吾々はいつものやうに啞どもに案内された。啞どもが去るとアツシヤはヴェールを脱いでもう一度レオに抱擁してくれと言つた。それは、前夜のうちに彼が變心したかどうかをためすためだつたのだが、彼は厳格な禮儀としての必要以上に勇んで、熱をこめて彼女を抱擁した。

女王は白い手をレオの頭にのせて、彼の眼をなつかしげにしげ／＼と見ながら言つた。「ねえ、カリクラテス、あなたは、いつになつたら妾をすつかりあなたのものだと呼べるやうになるかとあやしんでいらつしやるでせう。いつになつたら妾たち二人が、お互にお互のものとなるかを疑つていらつしやるでせう。それを聞かしてあげますわ。先づ第一に、あなたは妾と同じやうにならなくちやならないのですよ。不死の身になるといふわけではありません、妾だつて不死ぢやないのですから。けれども、時といふものに襲撃されないやうにかたく武装しなくちやなりません。日光が水の面から逸れるやうに、時の征矢があなたの丈夫な生命からそれてしまふやうにしなくちやなりません。それまでは、あなたと妾とは夫婦になるわけにはゆかないのよ。でないよ、あなたと妾とはちがつてゐるのですから、妾の輝かしさがあなたを焼きつくして、あなたの身をほろぼしてしまふかも知れないわ。あなたを妾をあまり長い間見ていらつしやることすらできないのよ。あまり長く見てゐると、あなたの眼が痛んで、あなたの五官がくらんで來ますからね。ですから」と言ひながら彼女はちよつとうなづいて「妾はすぐにヴェールをかけます」(序でに言つておくが彼女はさう言ひながらなく／＼ヴェールをかけなかつた)「だが、まあおき、なさい。妾はあなたを堪へられない程苦しい目にあはせはしません。といふのは今日の夕方、日没の一時前に、妾たちはこゝを旅立つて、若し萬事都合よく行き、妾が道に迷ひさへしなければ、明日の晩までには、妾たちは、生命の場所へついて、そこであなたは火を浴びて、立派なお身體におなりなさるのです。その時にこそあなたは妾を妻と呼び、妾はあなた

を夫と呼ぶことが出来るのですよ、カリクラテス。」

レオはこの驚くべき言葉に對して何か口の中でむにやむにや言つたやうであつたが、彼が何を言つたか私にはわからなかつた。彼女は彼が狼狽してゐるのを見て、少し笑ひながら言葉をつづけた。

「それから、ホリイ、あなたにもこの冥利にあづかせてあげませう。さうすればあなたはいつまでも若くてゐられるのです。あなたに妾がこのやうな恩恵をさづけてあげるのは、あなたは大變妾を喜ばせてくれたからです。そして、あなたは、あなたは大抵の人間の子のやうに、まったくの馬鹿ではないからです。それに、あなたは昔の哲學者と同じやうに、馬鹿らしい哲學を信じてはいらつしやるけれど、立派な文句も女の眼にあふとどんな風になつてしまふかを忘れていらつしやらぬからですわ。」

「おや叔父さん」とレオはいくらか以前の快活な氣分に返りながら言つた。「するとあなたもあの女に變なことを言つたと見えますね、あなたはまさかと思つてゐましたよ、僕は。」

「有り難う、アツシヤ」と私は出来るだけ威厳をくづさないやうにして答へた。「けれども、若しあなたの仰言るやうな所があつて、その不思議な場所には、死を遠ざける力のある火があるとしても、私はそのやうなものはほしいと思ひません。私にとつては、この世はいつまでも仕んでゐたいやうな柔かな樂ではなかつたですよ。吾々の地球は石のやうな心の母親で、その母親が子供に與へる毎日の食物は石の麵麩です。食物としては石を與へ、渴を醫するするためには苦い水を與へ、やさしくいたはつてくれる代りに鞭で育てるのです。なる程、吾々は死をおそれます。それは、吾々のかよわい肉體を

おしぼむ蟲をおそれるからです。死のとはりの彼方にある未知のものを恐れるからです。けれども、私の考へでは、生をつづけてゆくことの方がもつとつらいのです。葉は緑で美しくても、核は枯れて腐つてしまひ、永久に吾々の心を記憶の蟲に齧られながら生きてゐるのはもつとつらいのです。」

「だがね、ホリイ」と彼女は言つた。「長い生命と力と美とをもつてをれば、限らない権力と、人間にとつて貴重なものが見得られますよ。」

「では、その人間にとつて貴重なものとは何です、女王？」と私は答へた。「そのやうなものは皆泡沫ではありませんか？ 功名心なんていふものは果しのない梯子のやうなものではありませんか。どこまで登つても、上には上があつて、休息の處がないぢやありませんか？ 富なんていふものは、すぐに飽きてきて、吾々の樂しみを充す事もできなければ、心の安息を買ふ事もできなくなるではありませんか？ 知慧だつて同じです。吾々は學べば學ぶ程、吾々の無知を知つてくるに過ぎません。吾々がたとひ一萬年生きてゐたとて、太陽の祕密や、太陽の彼方の祕密を解くことができるでせうか？」

「でも戀といふものがありますよ、ホリイ。戀は凡てのものを美しくします。妾たちの踏む埃ですらも神々しいものにしますよ。戀さへあれば人生は楽しい、高尚なものになりますよ。」

「さうかも知れませんが」と私は答へた。「併し戀の相手が折れた處で、吾々を刺すものであつた場合はどうです。戀をしてもそれが無駄だつたらどうです？ 悲しみを水の上に書きさへすればすむのにわざ／＼それを石に彫りつけるものがあるでせうか？ い、え、女王、私は、私の一生だけ生きて

他のものと一しよに年を老り、壽命が盡きた時に死んで忘れてしまひますよ。あなたが命をのばして下さると言つたつて、それは世界の次に比べれば、ほんの指の長さ位のものに過ぎません。私は肉體の不滅より魂の不滅を尊びます。肉體がつゞく限りは、悲しみも、悪も、罪もつゞきますか、魂はさういふものから解脱されてゐますからね。」

女王は私の考へを、彼女一流の哲學をもつて駁したあとで、言葉の調子も、話題もがらりと變へて言つた。「ところで、カリクラテス、あなたはどうしてこゝへ妾をたづねていらつしやいましたのですか？ 妾はまだそのわけを知らないのです。昨夜あなたはカリクラテスといふのはあなたの先祖だと仰言いしましたわね。それはどうしてですか？ 話して下さいな。あなたはすみ分無口ですわね！」

レオは、こんな風に頼まれたので、彼の先祖の埃及女王アメルテスが壺の破片に記しのおいておいた不思議な物語を逐一アツシヤに話してきかせた。アツシヤは熱心に聞いてゐたが、レオの話がはると私に向つて言つた。

「ねえ、ホリイ、こないだ、妾は、あなたに、善から悪の生ずることもあり、悪から善の生ずることもあると言ひましたね。種子を蒔く人はどのやうな實になるか知らず、人を打つものは打つた結果がどうなるかを知らないのだと言ひましたね。御覽なさい、この埃及女王、このニールの女王を。あの女は妾を憎んでゐましたし、妾は今でもあの女を憎んでゐますが、あの女が橋渡しとなつて、あの女の戀人を妾のところへつれてくるやうにしたのです。あの女のために妾は戀人を殺したのですが、そ

の戀人が、あの女のおかげで妾の許へ歸つて來たのです！ それで」と彼女はしばらくしてから言葉をつづけた。「その女は、子供に向つて、妾があの子供の父親を殺したのだから、できるなら妾を殺すやうに言ひつけたのですね？ カリクラテス、あなたはその父親なのです。そして或る意味では子供でもあるのです。あなたは妾に復讐がしたいのでせう？ 御覽なさい」かう言つて彼女は、その場に跪いて、白衣を開いて象牙のやうな胸をあらはに出した。「御覽なさい、この通り妾の心臓は打つてゐます。あなたのおそばにはナイフがあります。重い、長い、鋭いナイフですから、邪しまな道にはひつた女を殺すには十分です。さあ、それをとつて復讐しなさい。さあ衝きなさい、急所をねらつてつきなさい。さうすれば、あなたの望みは達せられるのですよ、カリクラテス。そして、一生を幸福にお暮しなさい。悪に復讐して、先祖の命令に服従したことになるのですから。」

彼は彼女を眺めた。そして手を伸して彼女を起ち上らせた。「起ちなさい、アツシヤ」と彼は悲しげに言つた。「あなたは、私があなたを傷つけ得ないことを承知でいらつしやるのです。あなたが、たつた昨夜殺した女のためにですら、私がどうもできなかったことを御存じなのです。私はあなたに刃向ふことはできません。私はあなたの奴隷です。どうして私にあなたを殺させませう。あなたを殺す位なら、その前に私が死んでしまひます。」

「どうやら妾を愛し始めて來られたやうですわね、カリクラテス」と彼女は微笑ながら答へた。「ではこれからあなたのお國のことでも承はりませうか？ 随分大きな國なんでせう？ 羅馬のやうな帝

國なんでせう？ あなたはきつとお國へお歸りになりますわね。それがよろしいですわ。妾もこんなコオルの洞窟の中なんかあなたに住んでいたゞきたくありませんわ。あなたが妾と同じやうな身體におなりになつたら、妾たちはこゝを出てゆきませうね。大丈夫、妾は道は知つてゐますから。そしてあなたのお國の英國とやらへ歸つて、そこで一緒に暮らさせう。二千年の間妾はやくこんな嫌な洞窟や、陰氣な顔をした連中と別れる日ばかり待つてゐたのですわ。その日が近づいて來たのです。妾は子供が休日を待つてゐるやうに、胸を踊らせてその日を待つてゐるのですわ。あなたはその英國の支配者におなりなんですか？

「ところが英國にはもう女皇が既にあるのです」とレオは急いで言葉をはさんだ。

「そんなことはかまはないぢやありませんか」とアツシヤは言つた。「そんな女皇は倒してしまへばよいでせう？」

この言葉をきいて吾々は困つてしまつた。そして、そんなことをする位なら吾々自身が倒れてしまふ方がましだといふことを彼女に説明した。

「妙ですねえ」とアツシヤは驚いて言つた。「人民が女皇を愛するなんて、きつと妾がコオルに住んでゐる間に世の中の様子がまるで變つてしまつたのですわね。」

「それにあなたのやうに人を殺したりすると英國では罪を受けるのです。法律に照して、多分斷頭臺にたゞせられるでせう。」と私は言つた。

「法律ですて」と彼女は嘲笑した。「あなたにはまだわからないのですか、妾は法律を超越してゐるつてことが。そしてカリクラテスも今にさうなるのです。人間の法律なんてものは、妾たちにとつては、山にぶつつかつて來る北風のやうなものです。風のために山が屈るでせうか、それとも山のために風が屈るでせうか？」

「だがもうこれでお別れにしませう。カリクラテスもうあつちへ行つて下さい。妾も旅の準備がしたがいし、あなたがたも、それからあなたがたの召使も準備をしなくちやなりませんから。けれど、着物などはあまり澤山おもちにならぬ方がいゝですわ。三日も旅をしなくちやなんのですから。それがすんだら、またこゝへ引返して來て、このコオルの墓場に永久の別れを告げる計畫をたてませうね。」

そこで吾々は女王のそばを辭した。私は、吾々の前に開かれた、大變な問題についていろ／＼と考へた。女王はたしかに英國へ行かうと決心したらしい。彼女が英國へ行つたらどんなことになるだらうと思ふと、私はぞつとした。彼女の力を私はよく知つてゐる。そして彼女はきつとその力を十分に發揮するに相違ない。彼女は自分の邪魔をするものは、立に氣合を掛けて衝ち殺すにきまつてゐる。そして自分では死ぬことがないのみならず、ことによると人に殺されることもないのかも知れないから、しまひには大英國の絶對支配者になり、全世界の支配者になるかも知れない。尤も彼女は、自分の支配する帝國を、かつて地上に榮えたどの帝國よりも遙かに立派な帝國にするにはきまつてゐる。併し、それには恐しい人命の犠牲を拂はなければならんにきまつてゐるのだ。

第二十三章 眞理の神殿

吾々の準備はあまり長くはかゝらなかつた。吾々は着替へを一枚づつと豫備の靴とを靴の中へ入れ、めい／＼一挺づつ、の拳銃とライフル銃とをもち、食料品はたつぷり用意した。そのお蔭で命拾ひしたことはその後一再ではなかつた。

所定の時刻の數分間前に吾々はアツシヤの居間へ呼ばれた。彼女もすつかり準備を了へて、屍衣のやうなヴェールの上に黒い外套をまとうてゐた。

「冒険の用意はできましたか？」と彼女は言つた。

「用意はできました」と私は答へた。「しかし私は、これから先のことを信じてはゐませんよ、アツシヤ。」

「ほんたうに、あなたは昔のユデア人そつくりですわね、ホリイ」と彼女は言つた。「一人の言葉を信じないで、自分の信じないことは容易に受け容れないところはそつくりよ。私はあのユデア人のことは思ひ出しても腹がたちますよ。だがまああの鏡を見て御覽なさい」と言ひながら彼女は清らかな水のはひつた水盤を指して「道は昔のまゝですよ。さあこれから、いつまでつゞくかわからない新しい生涯の門出に旅立ちませう。」

「いつまでつゞくかわからない？」と私は鸚鵡返しに言つた。そして吾々は中央の大洞窟を通り過ぎ

て洞窟の外の明るみへ出た。洞窟の入口には一挺の駕籠と六人の駕籠かきとが待つてゐた。それはみんな啞だつた。その中に交つて、ピラリ老人がゐたので、私はほつとした。私はこの老人に一種の愛着を感じてゐたのである。アツシヤは彼女以外のものはみんな徒歩でついて行つた方がよいと考へたらしい。吾々も亦徒歩で行くことは一向かまはなかつた。何しろ長い間陰氣な洞窟の中に閉ぢこめられてゐたあとなので、その方がせい／＼してよい位であつた。偶然なのか、それとも女王の命令によるのか、吾々が以前に恐ろしい舞踏を見た洞窟の前の廣場には見物人は一人もゐなかつた。それで吾々の出發を知つてゐる者は、つきそひの啞だけだつたわけだ。しかもその啞は、何でも祕密をまもる習慣になつてゐたのである。

數分間たつと、吾々は、斷崖の中に嵌めた巨大なエメラルドのやうな形をした大耕地或は湖床を横きつてゐた。こゝで吾々はまた今更のやうに、コオルの人民が彼等の首都として選んだ場所の自然の壮大に驚歎し、この都市の建設者がこの大きな湖の排水工事に支拂つた、驚くべき努力と、精巧と熟練とに驚歎した。私の經驗の限りでは、人間が自然に對して加へた工事のうちで、これ位大仕掛けのものはまだ見たことがない。スエズ運河もモン・セニス隧道もその規模の大きさに於て遙かにこれには及ばないと私は思つた。

吾々は、毎日此の時刻になるとコオルの大平原をおそつてくる氣持のよい涼しさ、四面岩山に圍まれてゐて、海からも陸からも風の吹いて來ないこの土地で、幾分風のかはりになつてゐる涼しさを味

はひながら、約半時間も歩いてゆくと、ピラリが前に吾々に告げた大都市の廢墟だといふ建物をはつきりと見ることができた。

こんな遠くから見ても、吾々はこの廢墟が如何に素晴らしいものであるかを知ることができた。しかしこの事實は一步ごとに益々明白となつて來た。町の大きさは、ペビロンやテーベやその他の古代都市に比べるとさして大きいといふわけではない。恐らくその外濠で圍まれた地積は十二平方哩か、それより幾らか広い位なものであらう。それに城壁も、私の判斷したところでは大して高くはなく、四十呎を越してはゐないやうに思はれた。それは、コオルの人民は、外敵の襲撃に對しては人間の手をつくつた城壁などの遙かに及ばぬ天嶮でももられてゐたから、城壁はほんの飾りのためと、内亂にそなへるためとに設けたものであつたからであらう。だが、この城壁の幅は高さと同じ位あつて、切石で築いてあり、その外側は、約六十呎の幅の壕で圍まれてゐた。その壕には今でも水の溜つてゐるところがあつた。吾々は日没の十分程前にこの壕に着いてそれを渡り、城壁に攀ぢ登つた。吾々が城壁の頂きに登つて見おろした時の雄大な光景をうつつ筆の力が私にないのが残念でならぬ。見渡す限りの廢墟、圓柱や寺院や神社や王城などが、悉く落日の眞赤な光を浴び、その間に緑の草叢が點々と散在してゐた。勿論これ等の遺物の屋根はずつと昔にくづれ落ちてなくなつてゐたが、石造工事の途方もない大きさと、それに使用してある岩の堅さと耐久力のおかげで、大部分の隔壁や大圓柱は今なほ嚴然と残つてゐた。

吾々の眞正面に、かつてこの町の目貫きの大通りだつたらしい通りがあつた。といふのは、それは非常に廣くて眞直だつた。テムズ河岸通りよりも廣かつた。あとで發見したによると、この通りはすつかり石で敷きつめてあり、今なほそこには草や灌木が少し生えてゐるだけであつた。これに反して、昔公園だつたらしい場所には雜木がぎつしりと生えてゐた。通りの兩側には廢墟の塊が堆積してをり、この塊と塊との間は密生した雜木林になつてゐた。それは昔庭地であつた場所らしい。やがて吾々は途方もない大きな廢墟の堆積のところまで來た。それは少くも八エーカーばかりの地面を占領してゐた。寺院のあとであることが吾々にはすぐわかつた。

この寺院はテエベのエル・カルナツクの寺院にも劣らぬ程大きなもので、一番大きな柱は基部の直徑十八呎乃至二十呎、高さ七十呎もあらうと思はれた。この大寺院の正面に吾々の一行は足を停め、アツシヤはそこで駕籠から降りた。

「こゝに眠つてもいいやうな室が一つあつたのですがねえ、カリクラテス」と彼女は、彼女を助けて駕籠から降りしてゐたレオに言つた。「二千年前に、あなたと妾とあの埃及の毒蛇と三人であることに息んだことがあるのです。でもそれからこつち妾はあそこへ足を踏み入れたことがないから、もう倒れてゐるかも知れませんがね。」それから彼女は吾々をつれて、くづれ落ちた階段を踏んで外庭へ出て、暗がりの中を見渡した。やがて彼女は思ひ出したと見えて、壁につたつて五六歩左へ曲つたところで立ち停つた。

「矢つ張り昔の儘ですわ」と言ひながらアッシャは食料品や吾々の荷物をもつて来た啞を手招いた。一人の啞が進み出て、ランプを取り出しそれに火をつけた。吾々はすぐ中へはひつた。それは厚い岩をくりぬいてこしらへた室で、中に大きな石の卓子があるところを見ると、昔は居室につかはれてゐたものらしい。多分、この大寺院の門番の一人がそこに住んでゐたものであらう。

こゝで吾々は夜を明すことになつた。で、できるだけ綺麗に掃除をして、吾々、と言つても、レオとジョップと私とは冷肉を食つた。と言ふのは、前にも言つたと思ふが、アッシャは麥粉でこしらへた菓子と果物と水との外には何も手に觸れなかつたからである。吾々がまだ食事を了へないうちに、満月が山壁の上に昇つて、四邊に銀色の光を投げはじめた。

「妾がなぜ今夜あなた方をこゝへお連れしたか、わかりますか、ホリイ？」とアッシャは頰杖をついて、莊嚴な寺院の柱の上に昇つてゐる、空の女王ともいふべき月をみまもりながら言つた。「妾がこゝへお連れしたのはね——あら妙ね、カリクラテス、あなたが今坐つていらつしやる處は、ずつと以前にあなたの死骸が寝てゐた處ですよ。妾はそこからあなたの死骸をコオルの洞窟まで運んでいつたのです。あの時の事が目に見えて妾は怖しくなりましたわ。」かう言ひながら彼女はぶる／＼慄つた。

レオは急いで席をかへた。

「妾があなた方をおつれしたのはねえ」と彼女はすぐに言葉をつゞけた。「人間の眼がこれまでに見たことのないやうな素晴らしい光景をお見せしたいからですよ。コオルの廢墟を照す満月をお見せした

いからですよ。食事がすんだら外へ出て、この大寺院と、昔こゝに住んでゐた人々が禮拜した神とを御目にかけてませう。」

勿論吾々はすぐに立ち上つて出發した。だが、この満月に照された寺院の光景を描くことは到底私には出来ない。吾々は聲を出して物を言ふことすらも出来なかつた。アッシャすらも彼女の長い命も物の數でない程古いこの廢墟に立つては嚴肅の氣に打たれてゐた。吾々はたゞ低聲で囁き交すばかりであつた。すると吾々の低聲は柱の間を迂りぬけて、やがて、靜かな空の中へ消えてゆくやうに思はれた。あゝ空なる死んだ天體と、下なる死んだ都市とは、何千年の間互にむかひあつて、ありし日の光榮を語りあつてゐたことであらう。

「いらつしやい」と吾々が吾々を忘れて恍惚と眺め入つてゐたときにアッシャは言つた。「これから石でつくつた美の花をお目にかけてませう。これこそ驚異の絶頂ともいふべきものですわ。多分、その美しさをもつて時の力を嘲笑し、ヴェールの後を見たさの念願で男の胸を焦させながら、今でも残つてゐるでせう」かう言ひながら、返事も待たずに、彼女は古い寺院の内院へ吾々を案内して行つた。

五十碼平方もあらうと思はれる内庭の中に、吾々は、かつて人間の手で造られた最も偉大なる寓意的な藝術品とむかひあつてゐた。といふのは、ちやうど庭の中央の、厚い岩の臺の上に、直径二十呎もある巨大な黒い色をした石の玉が据ゑつけてあつて、その上に、大きな、愛らしく、神々しい翼のある美女の像が立つてゐたのである。柔かな月光に照されて、くつきりと陰影を隈どられて立つ

であるこの女像を見たときに、私は息もとまり、心臓の鼓動も止まつてしまつた。

この女像は、純白の大理石を刻んでつくつたもので、幾千年の星霜を経た今日でも、まだ月光を浴びて艶々と光つてゐた。その高さは二十呎以上もあらうと思はれた。それは翼のある、限りなく美しい女人の像であつて、しかも、それが實物よりも大きいことは却て益々この像の人間のなまた靈的な美しさを増してゐるやうに思はれた。女像は前屈みになつて、半ば擴げた翼と鈎合のとれるやうな姿勢をして立つてゐた。

兩の腕を、限りなく愛するものを抱擁せんとする女の腕のやうに前に差し出し、全身の姿勢は、この上なくやさしい心をこめて何事かを哀願してゐるやうな印象を興へた。女像の完全優美を極めた姿は裸體であつたが、驚くべきことには、顔だけにはうすいヴェールをかけてゐたので、顔は輪郭だけしかわからなかつた。顔のまはりに投げかけられてゐるうすいヴェールの一端は、ふくよかな左の乳房の上に垂れかかり、他の一端は今破れて、顔のうしろへなびいてゐた。

私はこの女像から目をはなすとすぐに「この女は誰です？」と訊ねた。

「お見當がつきませんか、ホリイ？」とアツシヤは訊ねた。「まあ、あなたの想像力はどうしてゐるのです？　これは世界の上に立つて世界の子等に顔のヴェールをとれと呼びかけてゐる真理ですよ。御覽なさい、あの臺に書いてある文字を。きつとこれはコオルの人民の聖典からとつた文句だらうと思ひますわ」かう言ひながら彼女は女像の臺の下まで進んで行つた。そこには例の漢字のやうな象形文

字が深く刻まれてゐたので、アツシヤには容易に讀むことができた。彼女が翻譯してくれたところによつてそれは次のやうな意味の文句であつた。

「吾がヴェールを取り去りて、吾が美はしき顔を見る人はなきや？　吾は吾がヴェールを取り去る人のものとなり、その人に平和を興へ、智慧と善事の愛兒を興へん。」

その時聲あり叫びて曰く「汝を探しもとむる者皆汝を得んと欲すれど、見よ汝は未だ處女なり。而して時の終るまで汝は處女ならん。女の胎内より生れたる者にして汝のヴェール取り去りて生を完うせる者なく、將來も亦あらざるべし。死によりてのみ汝のヴェールは取除かれん、お、真理よ！」

かくて真理は雙の腕を伸ばして泣けり。彼女を得んとする者は彼女を得る能はず、眼のあたり彼女の顔を見る能はざればなり。

「わかつたでせう」とアツシヤは翻譯ををはつてから言つた。「コオルの人民の女神は真理だつたのです。真理のために彼等は神殿をたて、それを探し求めたのです。永久に見出されないことを知りながら、それを探し求めたのです。」

「それから」と彼女は悲しげに附け足した。「人類は今に至るまで真理を探し求めてゐるが、矢張り見出されないのですね。そして聖典に記してあるやうに將來とても見出すことはできないのです。死に於てのみ真理は見出されるのですから。」

それから、吾々はもう一度このヴェールを纏うた美女の像を見てから、もと来た道を引き返した。それつきり私はこの像を見たことがないが、それが残念でたまらない。といふのは、世界を象どつたあの石の玉には、月の光で、線が引いてあるのが見えたから、明るいつ時に見れば、コオルの人民が世界の地圖をどんな風に考へたかわかつたらうと思ふからである。いづれにしても、こんな太古に滅びてしまつた眞理を禮拜する民族が、地球の圓いことを認めてゐたといふことは、この民族が多少の科學的知識をもつてゐたことを語つてゐる。

第二十四章 板橋を渡る

翌日夜明け前に吾々は啞どもに起された。吾々が眼をこすつて睡氣を拂ひ落し、大理石の水盤の遺物の中に湧き出してゐる泉で顔を洗つてしまふと、アツシヤはもう駕籠のそばに立つて出發の用意をしてをり、ピラリ老人と二人の駕籠かきの啞とは忙がしさうに荷物をまとめてゐた。アツシヤはいつものとほり、眞理の女神のやうに、ヴェールで顔をおほうてゐた。その時私は不圖彼女がヴェールで顔をおほうてゐるのは、あの女人の像を見て思ひついたのでないかと考へた。だが、彼女はひどく沈んでゐて、いつものやうに、悠然とした、堂々たる態度は全く見られなかつた。吾々が行くと、彼女は今までふせてゐた眼をあけて吾々を見た。レオは彼女にむかつて、昨夜はよく眠れたかどうかと訊ねた。

「よく眠れなかつたのよ、カリクラテス」と彼女は答へた。「昨夜はほんたうに、不思議な、嫌な夢ばかり見て、ちつとも眠れなかつたのよ。それが何の前兆だか妾にはわからないのです。何か悪いことが起るのぢやないか知らといふやうな氣もしたけれど、妾の身體にそんなことがあるわけもないし、ほんたうに不思議ですわ」彼女は急に女らしいやさしさを爆發させて言葉をつけた。「でもね、もしも妾の身に何か起つて、あなたをのこして妾だけが眠つてしまふのぢやないかといふやうな氣がするのよ。ねえ、カリクラテス、さうしたら、あなたは妾を待つて下さるの、妾があなたのいらつしやるのを何世紀も何世紀もお待ちしていたやうに？」

それから彼女は返事もまたずに言葉をつけた。「ではこれから出かけませう。妾たちは遠くまで行かなきゃならんですから、そして明日の朝までには、生命の場所まで着いてゐなくちやならんですから。」

五分間もたつと、吾々は荒廢した都市を抜け出て、朝日の光が最初の金色の矢を廢墟の上に投げかけたときには、ちやうど城門のところまで来てゐた。吾々はこゝでもう一度廢墟をふりかへつて、それをゆつくり探検できなかつたのを残念がりながら、壕を渡つて、外の平原へ出た。

日が昇るにつれてアツシヤの氣分はなほつて来て、たうとういつもの状態にかへつた。そして彼女は笑ひながら、前夜來氣分の悪かつたのは、眠つた場所がいやな聯想を起させたせゐだと言つた。

「この蠻人たちはコオルには幽霊が出ると言つてゐますがねえ」と彼女は言つた。「妾もそれはまつ

「たぐだと思ひますわ。昨夜のやうないやな晩たらありませんでしたわ。妾はよくおぼえてありますが、ちやうど、あそこで、妾の脚下にあなたが死んで横はつてゐたのですよ、カリクラテス。妾はもう二度とあんなところへは行きませんわ、何だかいやな氣持がするんですもの。」

朝食のために、暫くやすんでから、非常に元氣を出して道を急いだので、その日の二時までに吾々は火山孔の周縁をなしてゐる大きな岩壁の麓に着いた。岩壁は吾々の着いたところから、屏風のやうな絶壁になつて千五百呎か二千呎位の高さまで聳え立つてゐた。そこで吾々は足を停めたが、私はそれを見ても別に驚きはしなかつた。といふのは、こんな絶壁は到底登るわけにはゆかないと思つたからだ。

「さあ、これからがほんたうに骨が折れるのですよ」とアッシヤは駕籠から降りながら言つた。「これから妾たちはこの連中と別れて、めい／＼自分で行かなくちやならんのです。」それから彼女はピラリに向つて言葉を付け加へた。「お前と、この奴隷たちとは、こゝに遣つて、妾たちの歸りを待つてあなさい。明日の正午までには歸つて來ますからね。」

ピラリは、恭しく頭を低げて、いつまで、もお待ちいたしますと答へた。

それから、女王はジョップを指して「ホリイ、この男もこゝに待つてゐる方がよいでせう。かういふ心の凡庸な、勇氣の乏しい人は、まちがひが起ると困りますから。それに妾たちが行く場所の秘密は、普通平凡な人間が行つたつてしようがありませんからね。」

私は女王の言葉をジョップに通譯してやつた。するとジョップは、すぐさま、熱心に、殆んど泣かぬばかりにして一緒に連れて行つてくれと私に頼んだ。彼は災難に遭ふことはもうとつくに承知してゐるから、それ以上の災難はありつこはないし、それに、この物も言はない連中と一緒にこのこつてゐては、燒壺で殺されるかも知れないから、是非お供がしたいと言つた。

私がそれをアッシヤに通譯すると、彼女は肩をすくめて答へた。「では一緒に來てもよいでせう。妾は何でもないんですから、あの男のしたいやうにさせなさい。それにランプやこれをもつて行つて貰へますから」と言ひながら彼女は十六呎ばかり長さのある狭い板を指さした。その板は駕籠の吊棒の上にもずびつてあつたので、私はカーテンをひるげておくためのものだと思つてゐたが、これで見ると何か吾々のこれからやる異常な冒険に關係した目的に使はれるものらしい。

そこで、この板と一つのランプがジョップに渡された。この板は丈夫な板ではあつたが非常に輕かつた。私はいま一つのランプと油壺とを背負ひ、レオは食料品と、山羊皮に入れた水とを持つた。それがすむと、女王は、ピラリと六人の駕籠かきとに向つて、百碼ばかり彼方のマグノリアの花の咲いてゐる林のうしろへ行つて、吾々が見えなくなるまで待つてゐるやうに嚴命した。一同は丁寧に頭を下げて去つた。それから女王は吾々に向つて用意ができたかどうかを簡單にたづねて、前面に屹立してゐる絶壁を眺めた。

「おやおや、レオ」と私は言つた。「まさか吾々はその絶壁に登るんぢやなからうね？」

半ばうつとりとした氣持ちで、半ば神祕を期待するやうな氣持ちであつた。レオは肩をすくめた。その時、アツシヤはひらりと身をかはして斷崖をのぼりはじめた。勿論吾々もあとからついて行かねばならなかつた。彼女が岩から岩へと、やすやすと、しなやかにとびうつつてゆくのは實に驚歎すべき見物であつた。しかし、登つてゆくのは思つた程困難ではなかつた。それはこの邊はまだ岩に勾配があつて、上の方程甚い斷崖になつてはゐなかつたからである。けれども、處々いやな場所を通つたとき、あとを振り返つて見ると、よい氣持ちはしなかつた。

こんな風にして、ジョップの持つて来た板のしまつには困つたが、それ以外には大した骨折りもなしに、吾々はかれこれ五十呎ばかりの高さまで登つた。道がはずかひになつてゐるのでそれだけ登るのに、出發點から六七十歩も左の方へ來てゐた。間もなく吾々は一つの岩の出つ張りまで辿りついた。それははじめのうちは狭かつたが、進んで行くにつれてだん／＼廣くなり、おまけに、花瓣のやうに内側へ傾斜してゐた。そのために吾々は、進むにつれて徐々に岩の襞の中へ沈んで行つた。襞はだん／＼深くなり、遂にはデヴォンシャーの岩の小徑のやうになつて、下の勾配に誰か見てゐる者があつたとしても、下からは見えなくなつてしまつた。この小徑は自然にできたものらしく、三四十碼もつゞいてゐたが、急に、先が、矢張り自然にできた洞窟になつて終つてゐた。

アツシヤはこの入口に立ち停つて、ランプに灯をつけるやうに吾々に告げたので、私はその言葉に従つて、一つをアツシヤに渡し、一つを自分でもつた。アツシヤは先頭に立つて、非常に用心しながら

ら、そろ／＼と洞窟の中へはひつて行つた。それは、洞窟の床がひどく不規則で、河床のやうに石ころがころがつてゐたり、深い穴が掘れてゐたりして、穴の中へ落ちたら手足をくじくにきまつてゐたからだ。

この洞窟を通り過ぎるのに吾々は二十分あまりもかゝつた。長さは四五丁位しかなかつたやうに思ふが、途中でねぢれたり曲つたりしてゐたので、これを通り過ぎるのは大抵ぢやなかつた。

だがたうとう吾々はこの洞窟を通り抜けた。そして私が外の薄暗がりに眼を馴らさうとしてゐたときに、さつと一陣の風が吹いて來て、ランプが二つとも消えてしまつた。

此の時少し先の方へ進んでゐたアツシヤが吾々を呼んだので、吾々は彼女の側まで匍つて行つた。すると吾々の前面に、實に物凄い光景が現れた。吾々の前面の黒い岩に大きな裂け目ができてゐた。それは遠い遠い昔に、何か怖ろしい自然の異變のために裂けたものらしく、まるで、幾度びも幾度びも落雷に打たれてできたもの、やうであつた。この裂目の兩側は斷崖であつたが、眞つ暗なところから見ると大して廣いものとは思はれなかつた。何故暗かつたかといふと、吾々の立つてゐた地點は、兩側の斷崖の頂上から千五百呎か二千呎も下の方にあつて、上からはひつて來る明りはこゝまで殆んどとゞかなかつたからである。吾々がいま抜けて來た洞窟の入口は、この斷崖から裂目の虚空の中へ、妙な形になつて五十碼程も伸びてゐた。それはまるで、鶏の脚から距が伸びてゐるやうな工合であつた。そしてこの巨大な岩の距の先端は細くなつて槍のやうに宙に突出してゐた。

「ここを渡らなくちやなりません」とアツシヤは言つた。「よく氣をつけないと眼が眩みますよ。それに風に吹き落されぬやうに用心しなさい。この裂目には、ほんたうに底がないのですから」かう言ひながら、彼女は吾々に恐れを抱く餘裕も與へないで、すん／＼この距の上を歩いて行つた。私は彼女のあとに續き、そのあとからジョップが板を曳きすりながらついて来て、レオは殿りになつた。この大膽不敵な女がこの恐ろしい處を平然として立つて進んでゆくのは實に驚歎すべき眺めであつた。私は數碼進むと、空氣の壓力と、落ちたらどうなるだらうといふ恐ろしさのために、知らず／＼両手をついて匍はねばならなかつた。他の者も私と同じやうにした。

しかし、アツシヤは、そんな醜い眞似はしないで、風に抵抗するために身を屈げて、見事に身體の平衡を保ちながら、びくともせず歩いて行つた。

數分間のうちに、吾々は一步毎に狭くなつて來るこの恐ろしい橋を二十歩ばかりも進んで行つたが、その時、急に強い風がさつと吹いて來た。アツシヤは風の方へ身をもたせかけてゐたが、風は彼女の外套の内側へ入りこんで、黒い外套は彼女の身體をはなれてまるで傷ついた鳥のやうに底のない溪間へひら／＼と落ちて黒闇に吸はれてしまつた。

私は岩の鞍にしがついて四邊を見廻した。岩の距はまるで生き物のやうに、ぶん／＼音をたてながら吾々の下で震動した。それは實に物凄い光景であつた。吾々は天と地との間の黒闇の中に宙ぶらりになつてゐたのだ。下には底ひも知れぬ千尋の溪間が眞つ黒な口を開いてをり、上は眼の眩むやう

な斷崖の遙か彼方に一線の蒼空が見えてゐるだけなのである。しかも、吾々のいま立つてゐる虚空には、強い風が吹き荒れて、雲を追ひ、霧をうづまかせてゐるのだ。吾々は殆んど眼が見えなくなり、全くどうしてよいかわからなくなつてしまつた。私は今でもこの時の恐ろしさを時々夢に見て、汗びつしよりになることがある。

「さあ進んで來なさい、進んで來なさい」と吾々の前にある白衣の姿は言つた。彼女は、外套を吹き落されて、今はすつかり白衣の姿になつてゐたのだ。その姿は、女といふよりもむしろ疾風に乘つてゐる人魂のやうに見えた。「進んで來ないと下へ落ちて粉々になつてしまひますよ。地面に眼をすゑて、しつかり岩につかまつて來なさい。」

吾々は彼女の言葉に従つて、震動する道を、えつさえつさと匍つて進んだ。風はひゆうひゆう唸りながら岩を揺ぶり、岩は大きな音叉のやうにぶん／＼唸つた。吾々は時々身のまはりを見まはしながら、進んで行つた。どれ程進んで來たかわからないが、そのうちにたうとう距の先端に着いた。そこは普通の卓子よりも少し廣い位の岩の板になつてゐた。そこに、吾々は、しつかり岩につかまりながら身を横へて四邊を見まはした。アツシヤは千尋の淵が下に口を開いてゐることなどは全く氣にもとめないで、風に身を靠せて、長い髪をゆる／＼と風になびかせながら立つてゐた。その時吾々は、何故あの狭い板を用意して來たのかを知つた。吾々の前には虚空が展がつてゐるのだ。その向う岸には何かあるらしいが、どういふわけか、眞つ暗なのでわからなかつた。

「しばらく待たなくちやなりません」とアツシヤは言った。「今に明りがさして來ますから。私はその時は彼女の言葉がどういふ意味なのか想像できなかつた。こんなところへ、どうして今までの以上の明りがさして來るのだらうと思つた。ところが私が怪しんであるまもなく、突然大きな火焰の劍のやうな、夕日の光が地獄の闇をつき破つて吾々の横はつてゐる岩の先端を照し、アツシヤの美しい姿に、此の世のものならぬ神々しい光を浴せた。この時の美觀は到底私の筆では描き出せない。どうしてこんなところへ夕日が差しこんだものか私には今だにわからないが、多分、對岸の絶壁に、裂け目か穴があつて夕日がちやうどその直線上へ來たときに、そこまで光がさしこんで來たものだらうと思ふ。その光は、眞つ暗な闇の横つ腹へ、鋭利な光の刃をぐざりと突きさしたやうで、光のころは實に明るくて、遠くからでも岩の縞目が見える位であつたが、光の刃の外は、さうだその利刃から數時はなれたところは、全くの黒暗だつた。

女王は、この光を待つてゐたのだ。そしてちやうどこの光のさしこむ時刻を見計つてこゝへ着くやうに手筈をして來たのだ。この光によつて吾々は、行手に何があるかを見ることのできた。吾々の立つてゐる岩の先端から十一二碼先に、多分淵の底から立つてゐるのだらうと思はれる、棒砂糖のやうな圓錐狀の岩が立つてゐた。そしてその圓錐の頂がちやうど吾々の前面に向ひあつてゐた。しかし、そこまでは四十呎も距離があるので、それだけならどうにもしやうがなかつたのだが、その頂が小さい火山孔のやうな形になつてその周邊に、大きな楕圓形の石がのつてをり、その石の端が吾

吾から十二呎位のところまで突き出てゐた。この石はこの小火山孔の周邊にのつかつてあやふく平衡を保つてゐたので、風がふくと揺れてゐるのが、夕日の光で見えた。

「はやく、板を」とアツシヤは言つた。「光のあるうちに渡らないとすぐに暗くなりますから。」

「まさかこんなもの、上を歩かせるのぢやないでせうね？」とジョツプは私の方へ長い板を差し出しながら呻るやうに言つた。

「きつとさうだよ、ジョツプ」と私は、陽氣に答へたものゝ、こんな板の上を歩くのだと思ふとジョツプと同じやうによい氣持はしなかつた。

私はアツシヤに板を渡した。彼女はそれを器用に淵にかけた。板の一端はぐらく揺れる石の上におかれ、他の一端は、ぶる／＼震動してゐる岩の距の先端に支へられた。彼女は板が風に吹き飛ばされぬやうに、それを片足で踏まへながら私に向つて呼びかけた。

「この前に渡つた時より、向うの石の揺れかたがいくらかひどくなつたやうですから妾たちが乗つても大丈夫かどうかわかりません。ですから妾が一番先に渡りませう。妾は怪我をする氣遣ひはありませんから。」かう言ひながら、彼女は寸時も躊躇せず、軽やかに、だが、しつかりと、この不安定な橋を踏んで、忽ち向うの石に辿り着いた。

「大丈夫ですよ」と彼女は呼びかけた。「そちらの端をつかまへなさい。こちらの端には妾がのつてゐますから、あなたの身體が乗つても大丈夫です。さあホリイ、來なさい。すぐに暗くなりますよ。」

私は立ち上らうとしてもがいた。私が生涯の中でほんたうに恐ろしかったことがあるとすれば、それはこの時だった。實際私は、躊躇して尻込みしたと言つても恥だと思はない。「まさか怖いものぢやないでせう」と彼女は突風のやんだ時を見計らつて言つた。彼女は揺れる岩の頂點に立つて、鳥のやうに突風に羽ばたきしてゐるやうだった。「怖いのなら、カリククラテスに道をあけてあげなさい。」

この言葉を聞いて私は度胸をきめた。このやうな女から嘲笑される位なら、むしろ、断崖から落ちて死んでしまつた方がましだ！ 私は齒をくひしばつて、下も周囲も底の知れぬ虚空の中にかゝつてゐる狭いたわんだ橋の上に立つた。私は元來高い處に立つのが嫌ひなのだが、今まで、どんなにそれが恐ろしいものかをしみる味つたことはなかつた。私は眩暈がしさうになり、きつと落ちるに相違ないといふやうな気がした。脊筋が寒くなつた。現に落ちてゐるのぢやないかと思つたこともあつた。で、手を伸して波に漂ふボートのやうに揺れてゐる對岸の石につかまつた時の嬉しさは何とも言ひやうのないものであつた。私は思はず神に感謝した程であつた。

その次はレオの番だ。彼は少し顔色は蒼ざめてゐたが、まるで綱渡りの娘のやうに走つて渡つた。アツシヤは手をのばして、彼の手をつかみながら言つた。「ほんたうにあなたは勇敢でした。立派にお渡りになりました！ 昔の希臘人の魂がまだあなたの心の中には生きてゐるのですわ！」

あとにはかはいさうなジョップだけが向う岸にのこされた。彼は板のところまで匍つて来てわめい

た。「私には渡れません。あの恐ろしいところへ落つこちてしまひます。」

「渡らなくちやならんよ」と私はこんな時には不似合なおどけた調子で答へたのをおぼえてゐる。「何でもないよ、蠅をつかむより容易いことつたよ」私は私の良心を満足させるためにこんなことを言つたのだらうと思ふ。何故といふと、何でもなさうな顔はしてゐたけれど、實をいふと、世の中で蠅をつかむ位難かしいことはないからだ。

「できません——私には渡れません。」

「あの男はやく來なければ、あそこで死んでしまふより外にしやうがありませんよ。御覽なさい日はだん／＼影つてゆきます。今に眞つ暗になりますから。」

見ると成程彼女の言ふ通りだった。太陽は崖の裂け目から沈まうとしてゐた。

「そこにあればひとり死んでしまはなくちやならんよ」と私は呼んだ。「いまに暗くなるから。」

「さあ來い、ジョップ、元氣を出せ」とレオは叫んだ。「何でもないよ。」

かう言はれて、ジョップは、いきなり、板の上に腹はつたまゝ、馬乗りになつて兩脚を宙にぶらさげながら、少しづつ、跳びはじめた。彼が歩いて來られなかつたのは無理もないのだ。

彼が板の上をはげしく跳ぶ度に、數時の岩でやつと釣合を保つてゐた大石はひどく揺れた。おまけに彼が橋の中途まで來たときに、急に日が沈んで、あたりは、カーテンをおろした部屋の中でランプが消えたやうに眞つ暗になつてしまつた。

「さあ来い、ジョップ」と私は恐怖と苦悶の聲をふりしぼつて怒鳴つた。石はジョップが跳ぶ度にぐらぐら揺れて、それにつかまつてゐるのも困難な位だった。實に何とも言へぬ恐ろしい境遇だった。「神様、お助け下さい！」と闇の中からジョップの聲がした。「板が迂り落ちさうです」その時はげしくも音がした。私はもうだめだと思つた。

ところがその時、彼が、苦しまぎれに虚空をつかまうとして伸した手さきが、私の手に觸れた。私はそれをつかんでひつぽつた。金剛力を出してひつぽつた。うれしや、たうとうジョップは私のそばで、岩の上にあへいでゐた。だが板は！ 私は板が迂り落ちたのを感じた。つゞいてそれが突き出た岩角にぶつかる音が聞えて、やがて板は闇の中に消えていつた。

「しまつた！」と私は叫んだ。「歸りにはどうするのだ？」

「僕にもわかりませんよ」とレオが黒闇の中から答へた。「落ちたのが板だけですんでまあよかつたやうなものですよ。何しろこゝまで來られたので有り難い。」

だがアツシヤは、私に向つて、彼女の手をとつてあとからついて來るやうに命じたゞけであつた。

第二十五章 生命の精

私は命ぜられた通りにした。そして恐ろしさに慄へながら、今つれて行かれてゐる處は石の端であるやうな氣がした。足を外へつき出して見ても何も足に觸れるものはなかつた。

「落ちさうですね！」と私は喘いだ。

「では落ちなさい、大丈夫ですから」とアツシヤは答へた。

しかし如何に彼女の力に信頼してゐても、これだけは信じかねた。でも、一生のうちには吾々は不思議な祭壇に信仰を置かねばならぬこともあるものだ。ちやうど今がその時なのだ。

「落ちなさいつたら！」と彼女は再び叫んだ。私は外にどうする術もなかつたので落ちた。私は二三歩程、岩の傾斜面を迂るやうな氣がしたが、それから虚空の中へ落ちていつた。もう駄目だといふ考へが頭の中をかすめてとほつた。ところがさうでなかつた！ 私の足は忽ち岩の床にぶつかつた。そして私は自分が何か固いものゝ上に立つてゐることを知つた。そこへはもう風も届かなかつた。風は頭の上の方で唸つてゐるのが聞えた。私がそこに立つて、神の恩恵を感謝してゐると、やがて、どさりと音がして、レオがすぐ私のそばへ迂り落ちて來た。

「おや、叔父さん！」と彼は叫んだ。「あなたはそこにあるんですか。面白いですね？」

ちやうどその時、恐ろしい聲をたてながら今度はジョップが吾々の眞上へ落ちて來たので、吾々はその場にぶつ倒れてしまつた。吾々がやつと起き直つて見ると、アツシヤがそばに立つてゐて、ランフをつけるやうにと言つた。幸ひにもランプも油壺も壊れてゐなかつたのである。

私は蠟マツチの箱を見つけてそれを擦つた。マツチはこんな恐ろしい處で、まるでロンドンの客室でのやうに景氣よく燃えた。

すぐに二つのランプに灯がついた。その光で見ると、そこは實に妙な場所であつた。それは半ば自然の力ででき、半ば人工を加へてこしらへたらしい、十呎平方ばかりの石室だつた。

「やつとみんな無事につきましたわね」と女王は言つた。「でも一時は、あなた方があの揺れる石から振り落されて、底無しの溪間へ落ちてしまやしないかと思つてする分心配しましたわ。あの岩の裂け目は實際世界の臟物の申までとゞいてゐるやうですからね。しかしあの男が」と言ひながら彼女はジョップの方を頷でさして「板を落してしまつたのだから、歸り途が容易ぢやありませんわ。何とか工夫しなきゃなりませんから、あなたがたは、しばらく息んで、こゝをよく御覽なさい。こゝは何だと思ひます？」

「吾々にはわかりません」と私は答へた。

「昔一人の男がこゝに長年の間住んでゐたのだと言つたらあなたは信じなさいますか？　ホリイ？　土地の人々が食物と水と油とをもつてきてあのトンネルの入口に置いてゆき、その男は十二日目に一度づつそれを取りに行つてゐたのです。」

私は疑はしさに彼女の顔を見た。彼女は言葉をつげた。

「眞實なのですよ。その男は自分でヌートと言つてゐました。そして、ずっと後の人でありましたけれど、コオル人の子孫として恥かしからぬ知慧をもつてゐました。隠者で、哲人で、自然の祕密に大變よく通じてゐて、これから妾があなた方に御案内しようと思つてゐる、自然の血であり命である火

を發見したのはその人なのです。その火を浴びてそれを吸ひ込んだ人は自然の命のつゞく限り生きられるといふ火を發見したのです。ところがね、ホリイ、このヌートといふ人もあなたと同じやうに、この知識を役に立てようとはしないで、人間は死ぬのが定命なのだから、いつ迄も生きてゐるのはよくないと言つて、その火を探してゆく人がどうしても通らねばならぬ、この場所に住んでゐて、誰にもその祕密を話さないで、アマハツガー人から仙人だとか生佛だとかいつて敬はれてゐたのです。

「ところが妾がはじめてこゝへ來ましたとき——妾がどうして來たか御存じですかカリクラテス？　いつかそのことはお話ししますが、それは不思議な話なのですよ。——妾はこの話を土地の者から聞いて、その老人が食物をとり來るのを待つてゐたのです。そして老人につれられて、こゝへ歸つて來たのです。あの岩の裂け目を渡つたときはほんたうに恐ろしかつたですけれど。それから妾は、妾の美しさと知慧とで、その老人にとり入つて、たうとうその火の祕密を老人の口から話さしてしまつたのです。けれど、老人がとめるものですから、火の中へははひらないで、そのまゝ歸つて來たのですが、それからほんの二三日たつて、あなたに會つたのですよ、カリクラテス、あなたはアメナルタスといふ美しい埃及女と二人でこの土地へ彷徨うて來られたのです。妾はあなたを見て、一生のうちではじめて戀を感じました。これは最初の戀でも最後の戀でもあつたのです。そこで妾はあなたと二人でこの自然の恵みを受けて不死の身にならうと思ひ立つてこゝへ來たのです。埃及女もどうしてもあとに残つてゐるのが嫌だといふのでついて來ました。來て見ると、ヌート老人はこゝに死んでゐ

たのです。白い髻が着物のやうに身體の上におほひかゝつてこゝに斃れてゐたのです。「かう言ひながら、彼女は私の坐つてゐるすぐ隣りを指さした。「でももう老人の死骸はすっかりぼろ／＼になつて風に吹き飛ばされてしまつたでせう。」

この時私が手を伸すと埃の中で何か硬いものが指に觸れた。それは黄色い人間の齒であつた。私がそれを差し出してアツシヤに見せると彼女は笑ひながら言つた。

「きつとそれはヌートの齒ですわ。ヌートとヌートの知慧との中で今のこつてゐるのはこの小さな齒だけなのですわね！ けれどもあの人は生命を自由に支配することができたのです。たゞ良心のためにそれを自分のものとしなかつたのです。さて、その老人は死んでゐたものですから、妾たちは、これからあなたがたを案内するところまで行つて、妾は死を賭してその焰の中へ跳びこんだのです。ところがその結果はどうでせう。妾は、不死の身になつて、そしてこんなに美しくなつて出て來たのですよ。そこで妾はね、カリクラテス、あなたに向つて、この不死の花嫁をおとりなさいと言つたのです。するとあなたは、妾のあまりの美しさに眼が見えなくなつて、アメンタルタスの胸へ顔を伏せて妾からかくれなさつたのです。妾は怒りのために氣が狂つて、あなたのもつていらつした投槍をとつてあなたをつき刺してしまひました。するとあなたは場所もあらうに生命の場所へ、呻き聲をあげながら、妾の脚下へ倒れて死んでおしまひになりました。妾はその時はまだ妾の眼と意志の力とで人をにらみ殺す力があることに氣がつかかなかつたものですから、氣の狂つたあまり、あなたを槍で突き殺してしまつたのです。」

「あなたが死んでおしまひになると妾はわつと泣き出しました。妾は不死の身になつたのに、あなたはもう死んでしまはれたのですもの。妾は泣いて泣いて泣きくづれました。若し妾が普通の女であつたら、心臓も破れたでありませう。するとにくい埃及女は、あの女の神の名を呼んで妾を呪ひました。オシリスやイシスやネプチスやセクトやセツト等の神々の名を呼んで、妾の身に災のあるやうに、永久に妾が悲運に沈むやうに呪ひました。あゝ妾は今だにあの女が黒い顔を妾に向けて嵐のやうに呪つてゐる姿がありありと見えるやうです。でもあの女は妾に危害を加へることはできなかつたのです。妾があゝの女に危害を加へることができたかどうかは妾は知りません。妾はそんなことはして見ませんでした。そんなことどころではなかつたのです。で妾はあの女と二人でああなたの屍骸をもつて歸つたのです。そのあとで妾は、埃及女を歸してやりました。それから何でもあの女には子供が生れて、その子供のためにあの物語を書き記しておき、それを見てあなたが、あの女の戀敵であり、あなたを殺した下手人でもある妾のところへ歸つて來られたといふわけなのですわ。」

「まあざつとかういふわけなのですよ、あなた、そして、この物語りに最後の結末をつける時が近づいて來たのです。此の世の中の事は何事でもさうですが、この話にも善と惡とが入り込んであります。恐らく善よりも惡の方が多いでせう。それにこの物語は血の巻物に書いてあるのです。妾はありのままを申し上げました。何一つかくしてゐません。ところで、これから、愈々あなたが試練を受けな

る前に、いま一つのことを申し上げておきます。妾たちはこれから死の面前に立つのです。といふのは生命と死とはほんたうに隣りあつてゐるのですからね。これから、お互に離れて、また長いこと待たなければならぬやうになるかどうか誰にだつてわかりはしません。妾は豫言者ではなくてたゞの女です。未來のことはわかりません。ですけれど、これだけのことは妾にもわかつてゐます。ヌートに聞いて知つたのです。といふのは妾の生命は長く伸ばされて、輝かしいものにされたといふだけのこと、永久に不死といふわけではないといふことです。ですから、これから出かける前に、あなたが、心から妾を許して下さり、妾を愛して下さることを妾にどうぞ誓つて下さい、カリクラテス。妾は随分悪いことをしました。妾は罪を犯しました。ですけれど妾が罪を犯したのも戀故です。それに妾の心はまだ硬くなりきつてはゐません。カリクラテス、あなたの愛こそ、妾の贖罪の門です。以前に妾の情熱が妾に罪を犯させたやうに、あなたの愛で妾の罪は救はれるのです。満されない深い戀は地獄です。しかし戀が完全に酬いられると、それは翼となつて妾たちを空に翔けさせ、妾たちの本領を十分に發揮させます。ですから、カリクラテス、どうぞ妾の手をとつて下さい。さうして、妾を此の世で一番美しい一番賢い女だなどと思はないで、まるで名もない田舎娘だと思つて、恐がらないで妾のヴェールをとつて妾の眼を見て下さい。そして、妾を心から許す、心から愛すると仰言つて下さい。」

彼女はこの言葉をきつた。彼女の聲にこもつた言ひしれぬやさしさは、死者の思ひ出のやうに

吾々の周圍に立ちこめてゐるやうに思はれた。妾は彼女の言葉以上にその聲に動かされた。それ程にもそれは人間味に溢れた聲であつた。レオも不思議に感動してゐるらしかつた。これまでは彼は蛇に魅惑された小鳥のやうに、理性ではこれではいけないと考へながらも、彼女の美しさに魅惑されてゐたのであつたが、今ではもうさうではなくて、ほんたうに、心底から、この不思議な輝やかなしい女を愛してゐることを彼は知つてゐたのだ。私自身も實をいふとさうだつたのだ！ いづれにもせよ、レオは兩眼に涙を一ぱいたためて、彼女のそばへかけ寄り、彼女の顔の薄紗をとつて、彼女の手を握り、彼女の美しい顔をちつと見ながら言つた。

「アッシャ、私は私の心の全部をさへ、あなたを愛します。それから許すの何のといふことがあるなら、私はアステーンの死について、あなたを許します。その外のことにはあなたとあなたをつくつた神とのことで、私は何も知らないのです。私の知つてゐることは、私が今までは愛したどの愛にもまさつてあなたを愛するといふことだけです。私はこれからあなたのそばにゐようとも、あなたと遠くはなれようとも、心は永久にあなたから離れません。」

「では」と彼女は誇りを失はないで、しかもへりくだつた調子で言つた。「あなたが許して下さつた以上は、妾ももう躊躇いたしません。御覽なさい！」かう言つて彼女はレオの手をとつて、それを彼女の恰好のいゝ頭にのせ、片脚の膝がしはし地に觸れるまで腰を屈めた。「御覽なさい！ 妾はあなたに身をお委せするしるしに、あなたに頭をさげます！」それから彼の唇に接吻しながら「妾の妻と

しての愛のしるしにあなたに接吻します。」ついで彼女は彼の胸の上に手をおいて「妾の犯した罪にかけて、今は拭ひさられた、妾の待ち焦れてゐたわびしい數世紀の年月にかけて、妾の大きな戀にかけて、精靈にかけて、凡てのもの、母なる永遠の物にかけて——妾は誓ひます——

「妾ははじめて女になつたこの神聖な時にあつて、妾は今後惡をすて、善をなすことを誓ひます。永久に妾はあなたの聲に導かれて眞直な義務の道を進むことを誓ひます。そして、時の波を横ぎつて妾の腕へ歸つて來られたあなたを、妾の最後の日まであがめいつくしむことを誓ひます。」

「さ、妾は誓ひました。ホリイ、あなたは證人です。こゝで妾たちは結婚したのです。このうすぐらい窟を婚儀の室として、妾たちの縁は萬物のをはりまで結ばれたのです。こゝに妾たちは、吹く風に結婚證書を書き記します。その風はやがてそれを天上に持ちこび、このめぐり行く世界の周圍を永久にまはることでありませう。」

「それから結婚の贈物として、妾は、妾の美と、長い命と、はかり知れぬ智慧と、數へきれない富とをあなたに差し上げます。この世の最も偉大なる者もあなたの脚下にひれ伏すでせう。この世の美しい女子たちは、あなたの美しさに眼が眩んで、眼をあけてあなたを見得ないでせう。この世の賢者たちはあなたの前にたてば顔を根らめてしまふでせう。」

「御覽なさい、もう一度妾はあなたに接吻します。そしてこの接吻とともに、妾は海陸の支配權をあなたに差し上げます。日光の降りそぐところ、水が月影を宿すところ、嵐のすさぶところ、虹の掛

橋のかゝるところ、雪におほはれた北の端より、青海原のベッドに横はる花嫁のやうに、戀の南國が桃金嬢の匂かぐはしき吐息をつくところまで、悉くあなたの領土です。あなたは神のやうに、善惡を掌握なされて、この妾でさへも、つゝましかにあなたの前には跪くでせう。」

「さあこれですみました。妾はあなたのために、妾の處女の帯を解きます。嵐が來やうが、光が來やうが、善が來やうが、惡が來やうが、生が來やうが、死が來やうがこの誓ひは變ることはないのでございませう。」かう言ひながら彼女は一つのランプをとつて、揺れる石が屋根のやうにかぶさつた室の端の方へ進んで行つて、そこで足を停めた。

吾々は彼女のあとについて行つた。そして圓錐形の壁に階段があるのに氣がついた。もつと正確に言へば階段のやうな形にこしらへた岩の瘤が突き出たのである。アツシヤはこの階段をひらりひらりと輕やかに降りて行つた。吾々もよろ／＼あとにつゞいた。五六十歩も降りて行くと、それは、漏斗形の長い岩の勾配になつてゐた。

この勾配は非常に急で、處々絶壁になつてゐたが、それでも通れないところはなかつたので、吾々はランプの光を頼りに、難なく降りてゆくことができた。とは言へ、こんな風にして、行先きがどうなつてゐるかも知らずに、死火山の中心に向つて降りてゆくことは、ひどく氣味のわるいものではあつた。

こんな風にして、かれこれ半時間も旅をつゞけてゆき、數百尺も降りて行つたと思ふ時、吾々は漏

斗の底に着いた。そこには低い狭い通路があつて、吾々は匍はなければそこを通ることは出来なかつた。この通路を五十碼ばかりも匍つてゆくと、突然その先に途方もない大きな洞窟があつた。その洞窟はあまり大きいので吾々には天井も側壁も見えなかつた。たゞ吾々の聲音が反響すると、空氣が重く沈んで靜まり返つてゐるのとで、それが洞窟であることがわかつた位である。吾々は地獄の亡者のやうに、黙りこくつて、白衣姿のアツシヤを先頭にしなければらくの間歩みをつゞけて行つた。そのうちにまた通路があつて、こんどは前の洞窟よりも狭い第二の洞窟に着いた。それからこの洞窟の奥につきあたると第三の通路があつて、そこから微かな光が洩れてゐた。

何處から發して來てゐるのかわからないこの光を見つけたとき、私はアツシヤの口からほつと安心の吐息が洩れるのを聞いた。

「さあ、これから地球の胎内へはひつて行くのですよ」と彼女は言つた。「そこに、人間や獸や、木や花にまで命を與へる生命が孕んでゐるのです。さあ用意なさい。これからあなたがたは生れかはるのです。」

彼女は素速く通路の中へはひつて行つた。吾々もつまづきながらあとにつゞいた。吾々の心は恐ろしさと、恐い物見たさで一ぱいだつた。この先きになんものがあるのだらう？ 吾々がトンネルを進むにつれて、光は益々強くなつて燈臺の光のやうな大閃光となつた。そればかりではない。この光と、もに、雷鳴のやうな、大木の折れるやうな、魂の中までも震撼させる音が聞えて來た。たう

とう吾々はトンネルをくゞりぬけた。すると、どうだらう！

吾々は第三の洞窟に立つてゐた。それは長さと高さとはそれら五十呎もあり幅は三十呎位であつた。下には白砂が敷きつめてあり、壁は火か水かの作用で滑らかなになつてゐた。この洞窟は他の洞窟のやうに暗くはなく柔かい薔薇色の光に満ちてをり、又とない美しい眺めであつた。しかし先程見たやうな閃光も見えなければ雷鳴のやうな音も聞えなかつた。けれども、吾々が、この不思議な光景を呆氣にとられてながめてゐるうちに、しばらくすると、恐ろしくも美しい出來事が起つた。洞窟の遙か彼方にあつて、轟然たる音響とともに——それは非常に恐ろしい音で吾々はみんな慄へ上つた、ジョップの如きはその場にへたばつてしまつた程であつた——虹のやうに七色に彩られ、電光のやうに明るい、恐ろしい火柱がかつと燃え上つた。そしてしばらくの間、さうだ約四十秒程の間、それは音を立て、燃えてゐたが、そのうちにだん／＼音もやみ火も消えてしまつて、あとには、吾々がはじめに見たやうな薔薇色の光が残つた。

「もつとこちらへいらつしやい！」とアツシヤは歡喜のために聲を張り上げて言つた。「これが、この世界の胸の中で打つてゐる生命の泉です。生命の心臓です。これが萬物の精力の源泉たる實體です。地球の輝ける精です。これが無ければ地球は生きてゆけなくて、月のやうに冷たくなつて死んでしまふのです。もつとこちらへ寄りなさい。そしてこの生きた焰であなたがたの身體を洗ひなさい。そしてこの焰の力をあなた方の身體の中へ吸ひとりなさい。」

吾々は彼女のあとについて薔薇色の光の中を通つて、洞窟のつき當りまで行つた。そして、大きな鼓動が脈うち、大きな焰の燃えてゐた場所の前に立つた。そこへ進んで行くにつれて吾々は心が馬鹿に素晴らしく陽氣になつてゆき、生命がはちきれぬやうに充ち／＼て来るのを感じた。この時の氣持に比べると、どんなに吾々の力が充實してゐた時でもお話にならない位であつた。これは焰から發散する靈氣が吾々の身中に入つて、吾々を巨人のやうに強くし、驚のやうに敏捷にしたに過ぎないのだ。吾々は洞窟のつきあたり立つて、明るい火の光を浴びながら、互に顔を見あはして、軽い氣持で、神々しさに酔つたやうな爽快さを覺えながら聲を出して笑つた。この數週間にこりともしたことのないジョップでさへも笑つた。私は人間の知力の達し得る凡ゆる天才が私の身體の中へ宿つて來たやうな氣がした。沙翁のやうな素晴らしい無韻詩が口をついて出て來るやうな氣がした。まるで肉體の束縛が解けて精神が自由に解放されたやうな氣持であつた。

私が、この新生の自己の素晴らしい力を享樂してゐたときに、突然遠くの方でごろ／＼といふ恐ろしい音が聞えて來た。その音はだん／＼強くなつて、ごう／＼、がら／＼といふ音になり、それが結合して、此の上ない恐ろしい、それでゐて素晴らしい音になつた。音は刻々吾々に迫つて來て、まるで光の駒に曳かれてゆく雷車のやうに轟いて來た。それと、ともに、眼も眩むやうな晃々たる七色の雲がまき起り、しばらく吾々の前に立つてゐたが、やがて靜かに渦をまいて、轟然たる響と、ともに、何處へともなく消えて行つた。

この驚くべき光景を見て、吾々は皆その場にへたばつて、礎で顔を隠した。たゞ女王だけはその場につゝ立つたまま、火の方へ兩手をのばしてゐた。

光が消え去つた時、アッシヤは語り出した。

「たうとう時が來ましたよ、カリクラテス。こんどあの大きな火焰が燃えて來たら、あなたはあの中へ飛びこまなくちやなりません。でもその時はお召物は脱ぎなさい。あなたの身體には怪我はありませんけれどお召物は燃えてしましますから。あなたは、あなたの五官が辛抱できる限りあの焰の中に立つてゐて、すつかり焰につゝまされたとき、その精氣をあなたの心の臟まで吸ひ込みなさい。そして、あなたの手足のまはりに焰を跳びまはらせて、焰の力をすつかりあなたのものにしなさい。妾のいふことを聞いてゐますね、カリクラテス？」

「聞いてゐますよ、アッシヤ」とレオは答へた。「だけど、實を言へば——私は臆病者ではありませんけれど——あの燃えさかつてゐる火の中へ飛びこんで大丈夫だらうかと思ふのです。私もあなたもそのために滅びてしまふやうなことはないでせうか？　でもやるにはやりますけれど」と彼は附け足した。

アッシヤはしばらく考へてゐたがやがて口を開いた。

「あなたがお疑ひなさるのも無理ありません。ではかうしませう。妾があゝの焰の中に立つて、怪我もせずに出て來たら、あなたもおはひりになりますね？」

「はひりますとも」と彼は答へた。「死んでも入ります。今も入ると言つたぢやありませんか？」

「私にはひりますよ」と私は叫んだ。

「何ですて、ホリイ」と彼女は聲を出して笑つた。「あなたは長生きしたくないといふぢやありませんか、どうしたのです？」

「私にもわからんですが」と私は答へた。「私の心の中で、あの焔を味つて生きると呼びかけるものがあるのです。」

「ようござんす」と彼女は言つた。「あなたもまだすつかり性根を腐らしてはいらつしやらなかつたのね。さあ御覽なさい。妾はこれから二度目に生きた焔を浴びます。ことによると妾はもつと美しく、妾の命はもつと長くなるかも知れませんが、若しそれが叶はぬとしても、怪我をするやうなことはありません。」

「それから」と彼女はしばらくやすんだあとで言葉をつけた。「妾が二度この焔を浴びようと思ふには別にもつと深いわけがあるのです。はじめに妾がこの焔の力を味つたときには、妾の心は、あの埃及女のアメナルタスに對する怒りと憎しみとで一ぱいでありました。ですから、妾は一生懸命にそれをふりすてたいと思ひましたけれど、その時から今になるまで、妾の魂には怒りと憎しみとの烙印が捺されてゐるのです。けれども今はちがひます。今は妾の気分は幸福な気分です。そして今妾は此の上ない清浄な心に満されてゐます。妾はいつまでも此のやうな氣持であたいのです。それだから妾

はもう一度この焔で身體を洗ひ清めて、あなたに似つかはしくなりたいのです。それだから、また、あなたも焔の中へはひつた時は邪心を去つて心の平靜を保つてあなさい。魂の翼をゆるめて、おつかさんの接吻を念頭におき、最高善の姿を見つめてあなさい。と申しますのは、その恐ろしい瞬間に蒔かれた種が生長して、これからの限らない生涯の實を結ぶのですから。

「では支度をなさい！ あなたの最期の時が近づいて、これから死を越えて、冥土へ行くのだと思つて支度をなさい。光榮の門から美しい生命の國へ行くのだと思つてはなりませんよ。さあ、支度をなさい！」

第二十六章 あ、何たる光景ぞ

それからしばらくの間沈黙がつづいた。アツシヤは、猛火の試練を受けるために力を集中してゐるしかつた。その間吾々は互に身體を擦りよせてしがみつきなながら、固唾を呑んで待つてゐた。

そのうちに遠くの方から、微かな音が聞え、やがて音はだん／＼高くなつて來た。アツシヤは此の音を聞くと素速く薄紗の被覆を脱ぎすて、金色の蛇の形をした帯を解いた。それから、美しい髪を外套のやうに身體のまはりに振り亂して、その髪の下で白い上衣を脱ぎすて、髪を垂れたまゝ髪の上から胴體に蛇の帯をしめなほした。そして彼女は、アダムの前になつてゐたイヴの姿ながらの姿で吾の前に立つた。身につけてゐるものとは、ふさ／＼した髪を金の帯で身體にまきつけてゐるばか

りであつた。その時の彼女の美しさ、神々しさは、とても私の筆では傳へ難い。焰の雷車は刻々に近づいて来た。焰が燃え上つて来たとき、彼女は黒い髪のかき束の塊りの中から象牙のやうな腕を出して、レオの頸にまきつけた。

「お、戀しいあなた！」と彼女は低聲で言つた。「妾がどんなにあなたを愛してゐたか、いつかあなたにわかるでせうか？」かう言ひながら彼女は彼の額に接吻し、疑ふものゝやうにしばし躊躇つた後、つか／＼と前へ進み出て命の焰の通路に立つた。

私は今でもおぼえてゐるが、この時の彼女の言葉と、レオの額にした接吻とは、何かしら非常に強く私の心を動かすものがあつた。それはまるで母親の接吻のやうで、祝福がこもつてゐるやうであつた。

風が林を吹き靡けるやうな音が、ごう／＼と近づいて、渦巻く火焰の柱を前觸れする閃光が、薔薇色の空に矢のやうにひらめき、更に火柱そのものゝ尖端が現はれて来た。アッシヤはその方角を向いて、腕をさしのべてそれに會釋をした。焰は非常にゆるやかに渦を巻いて、彼女の身のまはりを甜めまはした。私は焰の精が彼女の身體を舞ひ上げるのを見た。彼女はまるでそれが水でもあるかのやうに、両手でそれを掬ひ上げて、彼女の頭に注ぎかけた。それから彼女は口を開けてそれを肺の中まで吸ひこみさへした。實に何とも言へぬ恐ろしくも奇しき光景であつた。

それから彼女はしばらく動作をやめて、兩の腕を伸ばしたまゝで立つてゐた。唇邊には神々しい微笑が浮んで、まるで彼女自身が焰の精であるかのやうに見えた。

不思議な火は彼女の黒いちぢれ髪をなぶつて、まるで金色のレースのやうにその間からちよろ／＼燃え上り、黒髪のしなだれてゐる象牙のやうな肩や胸を匍ひ、咽喉から頭へ燃え上つて、きら／＼輝く眼のところまで来て、所得顔に燃えさかつた。

あゝこの焰の中に立つてゐる彼女の美しさ！ 天から下つて来た天女だつてこれより美しくはないであらう。今でも私は、裸體のまゝで火の中に立つて微笑んでゐたその時の彼女の姿を思ひ出すと氣が遠くなる。もう一度あの姿が見られるなら、残りの半生を棒に振つてもよいと思ふ。

だが突然に、何とも名状し難い變化が彼女の顔を襲つて来た。あまり突然で私にはどう言つていゝかわからない位だ。それにその變化は私には何とも説明のしやうがないが、何しろ變化は變化にちがひない。彼女の顔からは微笑は消えてしまつて、干乾びた、硬ばつた容子にかはつてしまつた。丸々してゐた顔は大變な心配事に惱まされたやうにやつれてゆき、眼の光も失せてしまひ、品のよい眞つ直な體格はだんだん醜くまがつて来た。

私は眼を擦つた。そして何か錯覺に襲はれたのぢやないかと思つた。それとも、あまり強い光を見たために幻覺を起したのではないかと思つた。私が不思議の眼を睜つてゐる間に、焰の柱は徐々にねぢれて、下火になつて、やがて大地の陽の中へ消えてしまひ、あとにはアッシヤの姿だけが残つた。焰が消え去るとすぐに彼女はレオのそばに進み寄つて、手を伸してそれを彼の肩においた。私は彼

女の腕をちつと見つめた。あの丸々した美しさはどこへ行つてしまつたのだらう？ その腕は瘦せて
ごつ／＼骨ばつてゐた。そして彼女の顔はどうだらう！ 彼女の顔は私の見てゐる前で、見る見る年
を老つていつた。レオもそれを見たらうと私は思ふ。彼はたしかに少し後退りした。

「どうしたのです、カリクラテス？」と彼女は言つた。その聲はまたどうしたことであらう。あの澄
み渡つた鋭い響きはなくなつて、高いかすれたきい／＼聲になつてしまつてゐるではないか。

「おやどうしたのです——どうしたのです？」と彼女はときまきしながら言つた。「妾は眼が眩んでし
まつたのです。火の質がかはる筈もないのに、生命の原質がかはる筈もないのに？ 言つて下さい、
カリクラテス、妾の眼はどうかしましたか？ 妾にははつきり物が見えないのです」かう言ひながら
彼女が手をあげて髪を觸ると——あ、恐ろしや！——髪は床の上へばさ／＼抜け落ちてしまつた。

「まあ！ まあ！ まあ！」とジョツプは甲高い恐怖の聲で叫んだ。彼の眼は顔から飛び出し、肩
の間からは泡を吹いてゐた。「まあ！ まあ！ まあ！ あの子は萎んでゆく！ 猿になつてゆく！」
かう言ひながら彼は發作を起して、口から泡を吹き、齒をくひしりながら地べたにとつと倒れた。

實際その通りであつた。アツシヤは見る見る萎んで行つた。彼女の美しい腰に巻いてあつた金蛇の
帯はするりと臀を迂り抜けて地に落ちた。彼女はだん／＼小さくなつてゆき、皮膚のいろはかはつて
艶々した白い色は、古ぼけた羊皮紙のやうな薄汚ない黄褐色にかはつていつた。しなやかな手は爪ば
かりになり、保存しかたのまずい埃及の木乃伊の爪そつくりになつてしまつた。やがて彼女はこの

化に氣づいたものと見えて、金切聲をあげて叫んだ。あ、あのアツシヤが床の上を轉げまはりなが
ら、金切聲を上げて叫んだのだ。

彼女は益々小さく凋んでいつて、たうとう猿位の大きさになつた。皮膚には無数の皺が生じ、醜い
顔には何とも名狀できない程の老齡のあとがきざみこまれた。私はこんなものを未だかつて見たこと
がない。誰だつて、生後二ヶ月の赤ん坊位の大ききで、頭だけ大人のやうに大きくて、その恐ろしい
顔に、無限の年齢のきざみつけられたこの時の彼女の顔のやうなものを見た人はないに相違ない。

たうとう彼女はちつととしてしまつた。といふよりもほんの微かにびく／＼身體を動かすだけになつ
てしまつた。二分間前までは、此の世に又とない素晴らしい美人であつた彼女が、今は、猿程の大き
さになつて、彼女自身の髪の毛の塊りのそばに、言語に絶した醜い姿をしてちつと横はつてゐるのだ。け
れども私はその時、それは矢つ張り同じ彼女にはちがひないと思つた。

彼女はもう瀕死の状態であつた。それは有難いことであつた。といふのは生きてゐれば感情も持つ
てゐることだらう。感情をもつてをれば變りはてた自分の姿を見てどんな感じがするだらう。彼女は
骨ばつた手をあげて、かすんだ眼であたりを見まはしながら、龜のやうに、そろ／＼と頭を左右に振
つた。眼はもう見えないのだ。白い眼は角膜で蔽はれてしまつてゐたのだ。何たる哀れな眺めであら
う！ だが彼女はまた物を言ふことはできた。

「カリクラテス」と彼女は囁れた慄へ聲で言つた。「妾を忘れないで下さい、カリクラテス。このはづ

かしい姿をあはれんでください。妾は死にはしません。また來ます。もう一度美しくなります。誓つてこれはほんたうです！ お、——」かう言ひながら彼女はがくりと顔を伏せて動かなくなつてしまつた。

さうだ。かうして、二千年以上前に、彼女が僧侶カリクラテスを殺した同じ場所で、アッシヤは自分から倒れて死んでしまつたのだ。

極度の恐ろしさに打たれて、吾々も、砂の床の上に打ち倒れて、そのまゝ氣を失つてしまつた。

私はどれ位の間氣を失つてゐたのか知らない。多分數時間もたつたのであらう。私が眼を開いた時には、あとの二人はまだ床の上に横はつてゐた。薔薇色の光はまだ曙の空のやうに輝き、生命の精の雷車はまだその軌道を走つてゐた。私が眼醒めた時はちやうど火柱が消えてゆくところであつた。かつては光榮に包まれた女王であつた彼女の干乾びた皺だらけの皮膚におほはれた醜い猿のやうな屍骸もまだそこに横はつてゐた。あゝ、これはいやな夢ではなかつたのだ。嚴肅な、前代未聞の事實であつたのだ！

どうして一體この様な變化が起つたのであらう？ 命を與へる火の性質が變つたのであらうか？ ことによると、この火は、時々生命の精のかはりに死の精を吐き出すのではあるまいか？ それとも、この火を二度浴びると中和して前に得た力が相殺されてもとのとほりになつてしまふのであらう

か？ かう考へれば説明のつかぬことはない。といふのはアッシヤの死んだ時の有様は、何か異常な方法で、二千年も女が生きてゐたら、これ程にも年を老るだらうと思はれる姿だつたからだ。

だが、この時何が起つたかは誰にだつてわかりつことはない。それは事實であつたのだ。今までのアッシヤは、生きながら墓所の中に閉ぢこもつて戀人の來るのを待つ外は世界の秩序に大した變化も起さずにゐたが、若しこのアッシヤが、戀を得て幸福になり、不滅の若さと、神のやうな美と力と、數千年の知慧とをもつてしたら、社會に革命を起したかも知れはしない。人類の運命を變へたかも知れはしない。かやうにして自然の大法に逆つた彼女は、どれ程強かつたにしても、遂にその自然の大法にはね返されて、醜骸をさらすことになつてしまつたのだ。

しばらくの間、横になつたまゝ、ぼんやりと心の中で恐ろしかつたことを回想してゐるうちに、その場所の浮きくした雰圍氣のせめか間もなく私の體力は恢復して來た。私は外の者のことを思ひ出したので、二人の正氣を恢復させることができるか、どうかを見るために、よろ／＼と起ち上つた。だが私は先づ第一にアッシヤの下着と薄紗のスカーフとを拾ひ上げた。このスカーフこそは、彼女が彼女の眼も眩む美しさを人々の眼からかくすためにつかつてゐたものだ。それから私は彼女のかはりした姿を見ないやうに顔をそむけて、それを彼女の屍骸の上にはふりかけた。レオが正氣に返つてそれを見やしないかと思つて私は大急ぎでそれををへた。

それから砂の上に散らばつてゐた香の高い黒髪の塊りを踏んで、うつ伏せになつて横はつてゐる。

ヨツプのそばへ行き、彼の身體を仰向けにひっくり返した。私が彼を抱き起すと彼の腕は氣味悪くだらりと下つた。私はそれを見るとぞつとして、けはしい眼をして彼の顔を見た。一目見たゞけで十分だつた。吾々の忠實な老僕は死んでゐたのだ。これまでに随分恐しいことを見て来て、極度に傷けられてゐた彼の神經は、この最後の物凄しい光景を見て、すつかり打ち碎かれてしまひ、恐怖のために、或は恐怖から生じた發作のために死んでしまつたのだ。

これも大變な打撃であつたが、吾々はもう次から次へと恐ろしい目に遭ひどほしたつたので、その時は格別ヨツプの死には驚かなかつたと言つても讀者は理解してくれること、思ふ。この男の死んだのは當然だつたのだ。それから十分程たつて、レオが呻きながら、そして四肢を震はしながら、正氣づいた時、私は彼にヨツプの死んだことを話した。すると彼はたゞ「はあ」と答へたゞけだつた。だが記憶しておいて貰ひたい。これは彼が無情な人間だからでは決してないのだ。彼とヨツプとは非常に愛しあつてゐた仲だし、それにその後屢々彼はヨツプのことを可哀さうだ可哀さうだといつて話す。その時は彼の心がもう堪へられなかつたのだ。堅琴の出す音には、いくら強く打つたとて一定の限度があるものだ。

さて私はレオを正氣に返した。嬉しいことには彼は死んでゐなかつたのだ。そして前に言つたやうに、彼はその場に坐り直つた。その時私はまた恐ろしいことを眼にした。こゝへ來たときにレオの髪は美しく金色に光つてゐたのが、今ではすつかり胡麻鹽になつてをり、外氣に觸れるまでには雪のやうに白くなつてゐた。それに彼は急に二十も年を老つたやうに見えた。

「どうしませう叔父さん？」と彼は少し頭がはつきりして、今までのことを心の中に思ひ出して來ると、氣の抜けた死んだやうな聲で言つた。

「一かばちか逃げ出して見るんだね」と私は答へた。「お前がこの中へはひりたくなければ」と言つて私はまた燃え上つて來た焰を指した。

「死ぬにきまつてをれば跳び込んで見てもよいのですがね」と彼は少し笑ひながら言つた。「僕が躊躇したもんだからこんなことになつたのですよ。僕が疑ひさへしなればアツシヤは跳びこみはしなかつたかも知れないのです。だけど僕がこの中へ跳び込んでどうなるかはつきりわかりませんからね。僕の身體には此の火が反對の作用を及ぼして、僕が不死の身になるかも知れません。その時には、僕はその女のやうに二千年もあの女の來るのを待つてゐる忍耐が僕にはありませんからね。僕は壽命がなくなつた時に死んでしまつて、アツシヤを探しに行きます。あなたこそどうです、あの中へはひつて見たら？」

だが私はたゞ頭を振つたゞけだつた。私の昂奮はもう溝の水のやうに死んでしまひ、またもとのやうに、生きてゐる苦しみを長くすることなどは眞つ平になつてしまつてゐたのだ。

「ところで、レオ、吾々は、こんな風になるまでこゝにのこつてゐるわけにもゆかないから」と言ひながら私は白い着物に被はれた小さな塊りと、固くなつたかはいさうなヨツプの屍骸とを指さして

「もう行かうではないか、だが、ランプはもう燃えきつてしまつたか知ら？」私は一つのランプを取
り上げて見た。たしかに油はからくになつてゐた。

「油壺にまだすこしのこつてゐますよ、油壺がこはれてさへゐなければ」とレオは氣のない返事を
した。

私は油壺をしらべて見た。有難いことにはこはれてはゐなかつたので、私は手を慄はしながら油を
注いだ。幸にも麻のしんの燃え残りがまだあつたので、私は蠟マツチを擦つてそれに火をつけた。
そのうちにまた火の柱の近づいて来る音が聞えた。

「もう一度あれを見てゆきませう」とレオは言つた。「もう此の世ではあんなものは二度と見られん
せうから。」

私はレオの意見に従つた。そして、火が消え去るのを待つて吾々も踵を返して出發の用意をした。
けれども出かける前に、吾々はめい／＼ジョップの冷い手に握手した。随分氣味の悪い儀式だが、
この際、それが吾々の忠僕に對して敬意を表する唯一の手段だつたのだ。白い着物の下の塊りは吾々
は開けて見なかつた。あの恐ろしい姿を二度と見たくなかつたのだ。けれども、あの恐るべき變化の
刹那に抜け落ちて、床の上に散らばつてゐる艶々した黒髪を吾々はめい／＼一束づ、拾ひあげた。今
でも吾々はこの髪束を保存してゐる。それがアツシヤが吾々に殘してくれた唯一の記念なのだ。レオ
は香ひの高い髪を彼の肩におしつけながら嘎れ聲で言つた。

「あの女は、僕に決して忘れてくれるなと言ひましたね。そしてまた會ふと誓ひましたね。僕は誓つ
てあの女を忘れはしません。僕は誓ひます。僕たちがたとひこゝから逃げおほせることができても、
僕は一生、他の女には關係しません。そしてあの女が僕を待つてゐてくれたやうに、どこへ行つても
あの女を忠實に待つてゐます。」

「さうだ」と私は獨りで考へた。「若しあの女が以前のやうな美しい姿で歸つて來たら。だが若しあ
んな姿で歸つて來たらどうだらう！」

それから吾々は二人の屍骸と、それを包む薔薇色の光とに最後の一瞥を投げて、重い重い、何とも
言ひやうのない氣持を抱いてこゝから這ひ出たのであつた。

第二十七章 深淵を跳び越える

洞窟を通つて行くのは左して困りもしなかつたが、漏斗形の勾配のところまで來ると吾々は二つの
困難にぶつかつた。一つはそれを攀ち登ることの困難で、いま一つは道がわからないための困難だ。
實際、私が幸ひにも色々な岩の形を心おぼえにとめておかなかつたら、吾々は、道がわからなくつ
て、恐ろしい火山の胎内へ迷ひ込み、絶望と疲勞とで死んでしまつたに相違ない。實際吾々は幾度び
ちがつた道へ踏み迷つたか知れない。一度はもう少しのことで岩の裂け目へ落ちてしまふところだつ
た。暗い、森閑とした道を、岩から岩へとかすかなランプの光りを頼りに匍ひまはつて、一々岩の形

に見覚えがあるかどうかをしらべながら進んで行くのは生やさしい仕事ではなかつた。吾々はめつたに口を開かなかつた。物を言ふ元氣もない程吾々はしよげきつてゐたのだ。吾々はまるで犬のやうにだまりこくつて、躓きながら、時々轉んだり、怪我をしたりしながら進んで行つた。吾々の心はひどく打ちのめされてゐたので、自分の身體がどうならうと、そんなことは大して氣にもとめなかつたのだ。たゞ吾々はできるだけ命が助かりたいといふ一念で一ぱいだつた。自然の本能が吾々をさうさせたのだ。吾々は三四時間も、迷路の中を辛苦して進んでいつた。併し、動いてゐる時計はもう一つもないので正確な時間は到底わからなかつた。最後の二時間程はすっかり道に迷つてしまつて、別の漏斗形の中へ迷ひ込んだのぢやないかと心配したが、そのうちにやつと、吾々が前に漏斗形の勾配を降りかけてから間のないところにあつた大きな見おぼえのある岩が見つかつた。吾々はその岩を通り過ぎて別の道へ踏み込んでゐたのだが、あと戻りして何の氣もなしにそれをしらべて見ると、それが見おぼえのある岩だつたのだ。實にそれは奇蹟であつた。このお蔭で吾々は助かつたのである。それから吾々は天然にできた岩の階段を大した困難もなく登つていつて、道にも迷はずに、再び、昔ヌート老人が住んでゐたといふ小さい室の中へ辿り着いたのであつた。

ところが、今度はまた新たな恐怖が吾々に當面して來た。ジョツプが恐ろしさのために、へまをやつて、震動する大きな距形の岩と、揺る石との間の深淵を越える板を落してしまつたことを讀者は記憶してをられるであらう。

板がなくて、どうしてあの大きな岩の裂け目が越せようか？

答へは一つしかない——運を天にまかせて跳び越して見るか、それともこのまゝ死んでしまふかだ。二つの岩の間の距離は左程廣くはない。十一、二呎だと私は思ふ。それにレオは學校にゐた時には幅跳びで二十呎も跳んだことがあるのを私は見た。だがその時の條件を考へて見なくちやならない。それを跳び越えようとしてゐる男は二人ともへとへとに疲れてゐて、そのうちの一人はもう四十の阪を越してゐるのだ。足場はぐら／＼揺れる石で、跳んで行先はぶる／＼震へてゐる幅數呎の岩で、それが突風の吹きすさぶ虚空にかゝつてゐて、下には千仞の淵が口を開いてゐるのだ。だが私がこのことをレオに言ふと、彼は言下にどの道死ぬにはきまつてゐる、たゞこゝに待つてゐてちりちり死ぬか、思ひきつて跳んで見て手つ取り早く死ぬかどつちかだから、一かばちか跳んで見るより外はないと答へた。

此の言葉には反駁の餘地はない。だが暗闇の中で跳ぶわけには行かないから、吾々のなすべきことは、夕日のさしこむのを待つことあるのみだ。とは言へ夕方方までにはまだ間があるのか、それともうすぐなのか吾々は二人とも皆目見當がつかなかつた。吾々の知つてゐたことは、たゞ光が差しこんで來たらせい／＼二分以上はつかないでまた暗くなるからいざといふ時の用意をしておかねばならぬといふことだけであつた。そこで吾々は、揺れる石の上へ匍ひ上つて用意をすることに決心した。この決心がやくついたのであつた。即ち、二つのランプのうちの

つはもうすっかり消えてしまひ、あとの一つは油がなくなつた時どのランプの火でもさうであるやうに、ちよろくと斷續して燃えてゐた。そこで吾々はこの消えかゝつたランプの光をたよりに、急いで室を抜け出して、大石の上へ匍ひ上つた。ちやうどその時にランプは消えてしまつた。

室の中とこの石の上とはひどいちがひだ。室の中にあつた時には、たゞ上の方で突風のさうさういふ音が聞えるだけだつたが、こゝへ來るとその突風の荒れ狂ふ眞つ只中に曝されてゐるのだ。風の方向は刻々に變つていつて、猛り狂ひながら絶壁にぶつつかつた。吾々はそこに何時間も何時間も石にしがみついて横はつてゐた。風の音に交つて、對岸の岩の距の震動する音がぶん／＼と響いて來る。人間の見たどんな夢だつて、小説家の考へ出したどんな怖ろしい空想だつて、この恐怖に匹敵するものがあらうか。吾々は難破船の乗組員が流木にしがみついてゐるやうに、石にしがみついて、風にふかれながら、底の知れぬ空中に揺られてゐた。しかし幸ひにも氣温は低くなかつた。風は實際生温かつた。でなかつたら吾々は凍え死んでしまつたであらう。吾々がこんな風にして石にしがみついてゐる間に、實に不思議な出來事が起つた。

吾々がこの石へ渡つて來る前に、アツシヤが岩の距の尖端に立つてゐたとき、風が彼女の外套をどつかへ吹き飛ばしたことは讀者は記憶してゐるであらう。私はあまり不思議で讀者が信じないかも知れんから、こんな話はしたくないのだが、吾々が石にしがみついてうづぶしてゐたとき、その外套が、どこからともなく、死者の思ひ出のやうにひら／＼舞ひ落ちて來て、レオの足から頭までふわり

とかぶさてしまつたのだ。はじめは、吾々には、それが何だか想像もつかなかつたが、手觸りでアツシヤの外套だと判つた。かはいさうにレオは、こらへてゐた悲しさがはじめて抑へきれなくなつて、嘔吐してゐるのが聞えた。きつとその外套はどつかの岩角にひつかつてゐて、偶然こゝへ吹き飛ばされて來たのだらうが、實に奇妙な哀れつぼいめぐりあはせであつた。

それからしばらくたつと、突然、何の豫告もなしに、赤い刃が闇をつらぬいて、吾々の乗つてゐる石から眞一文字に對岸の震へる岩の距までかつと照した。

「さあ今だ、この機會をはずしたら駄目だ」とレオは言つた。

吾々は立ち上つて身をのばした。

「誰から先に跳ばう？」と私は言つた。

「叔父さんから跳びなさい」とレオは答へた。「僕は岩の反對の端に坐つて揺れないやうにしてゐます。できるだけ走つてはすみをつけて高く跳ぶんですよ。それから先は神様にまかせます。」

私は點頭いてレオの言葉に従つた。それから私はレオがまだほんの子供であつた時分からしなかつたことをした。即ち、私はレオの方を向き直つて、彼を抱き寄せて、額に接吻した。これはどうもフランス人らしいやりかたのやうに思はれるか知れんが、何しろ私は、親身の子供にもまして愛してゐたレオに、最後の告別をしたのだ。

「左様なら、レオ」と私は言つた。「何處へ行つてもまたあひたいものだね。」

實際私はあと二分間も生きてはをれまいと思つたのだ。

それから私は、岩の端まで身をひいて、風がうしろへ廻るのを待ち、大石の上を三十三四呎も走つて、眼のまはるやうな虚空へ暮ぐらに跳びこんだ。あゝ、私の足が石を離れたときの何とも言いやうのないやな心持ち、跳び方が足りなかつたかなと感じたとき私の頭にさつと閃いた怖ろしい絶望感！ しかも實際跳び方が足りなかつたのだ。私の足は岩にとどかないで虚空を踏みはづした。たゞ私の胴體と手とだけが岩の端にとどいたのだ。私は呀つと叫びながらそれにしがみついた。しかし片手が這つたので、私は他の片手で岩角をつかみながら後向きになつて、真直ぐに空中にぶら下り、今跳んで来た石と向ひあつた。私はもがき苦しんで左手を岩にしがみつけ、今度はやつと岩の瘤をつかむことができた。そして、私は烈しい赤光を身に浴びて千仞の淵を下に見おろしながらぶら下つてゐた。私は両手で岩の距の兩端をつかんでゐたので、岩の突端は私の頭へさはつた。だから私にたとひ力があつたとしても上へ身を上へることはできなかつた。せいゝく一分間もぶら下つてゐて、底なしの淵へ落ちてしまふより外はなかつたのだ。これ位いやな境遇を想像することのできる人があるなら聞かしてほしい！ この半分間の苦しみのために私の頭は變になりかゝつた程だつた。

私はレオの叫び聲を聞いた。と思ふと突然彼が羚羊のやうに空中に跳び上るのが見えた。この絶對絶命の場合渾身の力をこめて跳んだ彼の跳び方は實に素晴らしいものであつた。恐ろしい深淵を物ともせず跳び越えて、岩の突端に辿りつき、深淵へ振り落されぬやうに、すぐにうつぶせに身を倒した。私はレオが跳びついたときに、上の岩が揺れるのを感じた。それと同時に、彼が跳んだはずみに、對岸の大石が、はずみを食つて、この數千年來はじめて平衡を失つて、恐ろしい音をたてて、かつてヌート老人がかくれ家としてつかつてゐた部屋の上へ轉げ落ちるのが見えた。これで生命の場所へ行く路は數百噸の岩で永久に封じられてしまつたわけだ。

これ等の事柄はほんの一瞬の間に起つたのであつた。しかも不思議にも私はこんな恐ろしい境遇にありながら無意識にはあらうがそれに氣がついてゐた。もうこれつきりこの恐ろしい道を通る人はあるまいなどと考へたことさへ私はおぼえてゐる。

次の瞬間に、私は、レオが両手で私の右の手首を掴んだのを感じた。彼は岩の上に腹這ひになつて、やつと私まで手がとどいたのである。

「手を放してぶら下りなさい」と彼は落ちついた、力のこもつた聲で言つた。「さうすれば僕が引き上げて見ます。でないと二人とも落ちてしまひますよ。いゝですか？」

私は返事をするかはりに、先づ左手を岩からはなし、それから右手を岩からはなして、レオの腕にぶら下つた。それは實に恐ろしい瞬間であつた。成る程彼は大變力のある男であることは私は知つてゐる。けれども、こんな恰好をしてゐて、果して彼の力で私が岩の上をつかむことができるまで引っぱり上げることができたらうか？

數秒間私はぶらりぶらりと左右に身體を振つてゐた。その間に彼は努力を集中してゐた。やゝあつ

て私は彼の筋肉が上の方でめき／＼鳴る音を聞いた。そして私がまるで小さい子供か何ぞのやうにもち上げられるのを感じた。たうとう私は左手を岩の上にかけて身体を支へた。それからあとはもう雑作はなかつた。数秒間のうちに私は上へ匍ひ上つて、吾々は木の葉のやうに慄ひながら、恐ろしさのために、冷汗でぐつしより濡れて、その場に身を横へたまゝ、喘いでゐた。

すると以前と同じやうに、夕日の光は、ランプの消えるやうにだしぬけに消えてしまつた。

ものゝ半時間も、吾々は、一言も口をきかずに、そこでやすんでゐたが、やがて暗闇の中で、できるだけ上手に、大きな岩の距の上を匍ひはじめた。距の突き出てる崖の正面まで辿りついた時にはほんの少しばかりではあつたが明りが増して来た。何しろもう上の方は夜になつてゐたからである。こゝまで来ると風も大分弱くなつたので進むのが楽になつた。そして遂に第一の洞窟或は隧道の入口にまで着いた。だが今度は別の困難が吾々を待つてゐた。ランプはもうなくなつてしまつてゐた上に、水はヌートの室にあるときにすつかり呑みつくしてしまつたので、今は一滴も残つてゐなかつた。どうして吾々はこれからこの凸凹の洞窟を進んだらいいだらう？

明かに吾々はたゞ觸覚だけにたよつて、暮い道を進んでゆくより外にしやうがなかつた。そこで吾々は、はやく進まないとそのうちに精根がつきてしまつて、途中でへたばつてしまふことを恐れたので、急いで洞窟の中へ匍つてはひつた。

あゝこの最後の隧道の恐ろしかつたこと！ 岩はでこぼこで、角だらけなので、吾々は幾度びもつ

まづいたり、ころんだりして、身体ぢゆう血だらけになつた。たよりにするものとしてはたゞ洞窟の側壁だけだったので、吾々はそれを手さぐりしながら進んでいつた。あまりの暗さに頭が變になつて、まぢがつた道へはひつたのぢやないかといふ恐怖にとらはれたことが三度もあつた。進んでゆくにつれて、吾々はだん／＼力を失つて弱つて来た。數分間進んではやすまねばならなかつた。一度は途中で眠りこけてしまつた。數時間も眠つたことであらうと思ふ。といふのは眼が醒めて見ると、四肢は硬ばつて擦れ傷から出た血はかたまつて干乾びてゐたからだ。それから又吾々はへと／＼になつた足を曳きすつて進み出した。たうとう、精根つきはてゝがつかりしてしまつた時、やつと再び目の見ることができた。吾々はそのとき、斷崖の外側へ通する隧道の外に立つてゐたのだ。

その時は、すが／＼しい風と、もう二度と見られまいと思つた朝焼けの空とから推して早朝であることがわかつた。吾々は日没後間もなく隧道の中へはひつたのだから、一晚中あの恐ろしいところを匍つてゐたわけだ。

「もう一息だな、レオ」と私は喘ぎながら言つた。「さうすりやピラリのある山腹へ出られる。まだあの老人はあるだらうな。さあ氣をゆるめずに行かう。」彼はこの時うつぶしになつてゐたのだが、私の聲をきいて立ち上つた。そして吾々は互に身をもたせかけながら、五十呎あまりの崖を、つまづきつゝ降りて行つた。どうして降りたのかちつともおぼえてはゐないが、何でも一番底にへたばつてゐただけをおぼえてゐる。それから吾々はもう一步も立つては歩けないので、匍ひながら、彼女がピ

シリに向つて歸るまで待つてゐるやうに命じた林の方へ進んで行つた。こんな風にして四十碼近くも行つたときに、一人の啞が、だしぬけに吾々の左手に現はれた。この男は朝の散歩をしてゐたものらしくつたが吾々を見つけると、妙な獸がとび出して來たとも思つたのか、吾々のそばへ駆け寄つて來た。彼は吾々の姿をよく見ると、兩手をあげて恐ろしさのために地べたに倒れようとした。それから一目散に二百碼もはなれた林の方へ逃げだした。吾々の姿があまりかはりはて、ゐたので、怖がつたのであることは一點の疑ひもない。先づ第一にレオの髪は眞白になつてゐるし、着物はぼろぼろになつて殆んど身についてゐないし、顔はやつれ、手は傷だらけだし、どう見ても、猫か、血だらけの豚といった形相だつた。私とても同じことであつた。それから二日たつてから私は自分の顔を水に映して見たが、それが自分の顔だといふことが殆んどわからなんだ位である。

やがて、ビラリ老人が吾々の方へ急いでやつて來たので、私はほつとした。このやうな場合にでも、この老人が鹿爪らしい顔に驚きの色を浮べてゐるのを見ると、微笑せずにはゐられなかつた。

「お、狒々！ 狒々！」と彼は叫んだ。「ほんたうにあんたと獅子とちやらうな？ 熟れた麥のやうだつた獅子の鬣が眞白になつてゐるのはどうしたわけぢや？ どこから來なすつた？ 豚はどうした？ それから全能の女王様はどうなされた？」

「死んぢまつた、二人とも死んぢまつた！」と私は答へた。「だがもう何も訊ねないで、助けて下さい。食物と水とをばやく、でないとおんたの眼の前で吾々も死んぢまひます。咽喉が潤いて舌が黒く

なつてゐるのが見えませんか？ 話どころぢやないのです。」

「死んだ！」と彼は喘いだ。「そんな筈はない！ 不死の女王が死ぬなんて？」それから彼は言葉をきつて、急いでその場へかけつけた啞どもに命じて吾々を天幕の方へつれてゆかせた。

幸ひにも吾々が着いたとき、火にかけてあつたスープが煮えてゐたので、ビラリがそれを吾々に食べさせてくれた。吾々は自分で食べるだけの力もなかつたのだ。このスープのお蔭で吾々は、疲勞のために死ぬのをまぬかれたのだとかたく信じてゐる。それからビラリは濡れた布で吾々の身體から血や汚物を拭ひとるやうに命じた。それがすむと、吾々は香草を積み重ねたしとねの上に横になつて、すぐに正體もなくぐつすり眠つてしまつた。

第二十八章 山を越えて

その次に私のおぼえてゐることは、身體が妙に硬ばつて、自分の身體が、まるで打ちたての敷物のやうな氣がしたのを寢ぼけ頭にぼんやり意識したことであつた。私は眼をひらいた。眞つ先きに見えたのは、俄造りのベッドの上になつてゐる吾々のそばにすわつて長髯をしいてゐた、鹿爪らしいビラリ老人の顔だつた。老人の顔を見ると、私の心には、最近に吾々が経験した數々の冒險の記憶が甦つて來た。それから私と向きあつて寢てゐる、傷だらけのレオの顔を見、眞白な彼の頭を見ると、記憶は益々まざくとして來た。私はまた眼を閉ぢてうめいた。

「すゑぶん長いことあんたは眠りましたぞ佛々」とピラリ老人は言った。

「どれ位眠りましたかね？」と私は訊ねた。

「太陽が一まはりして、月が一まはりする間、つまり一日と一晩あんたは眠りつゞけましたわい。レオもさうぢや、御覽じ、まだレオは眠つとりますよ。」

「眠りといふものは有り難いもんだ」と私は答へた。「何もかもすつかり記憶を呑んでしまひますからな。」

「一體どんな目にあひなされた？ 不死の女王が死なれなされたといふのはどうしたわけですか、聞かして下され。もしそれがほんたうだとすると、あんたの身もレオの身もちつとも油断がなりませんぞ。ことによると焼壺でやかれて食はれるかも知れん。あの連中はもう血に饑ゑとりますからな。それにアマハツガー人はあんたたちをひどく憎んどりますぞ。あんたたちは異國人ではあるし、その上あんたたちのお蔭で、仲間の者が女王から責苦にあつたのぢやからなあ。女王様がなくなられたつてことを知つたら彼奴等はきつとあんたたちを焼壺で、殺してしまふにきまつとりますわい。だがまあ、話を下さい。」

かう頼まれたので、私は、女王は火山の火の中へ落ちて焼け死んだのだといふことを話してきかせた。ほんたうのことを話したつてわかりつこはないと思つたからだ。それから私は逃げて来る道中の恐ろしかつたことを少しばかり話してきかせた。これには老人も大分感動したらしかつたが、アッシヤが死んだといふことはどうしても信じなかつた。女王は何かの都合で一時姿をかくしたので、それを吾々が死んだと思つてゐるのだと彼は言つた。そして、前にも彼のおやぢの代に十二年も女王が姿をかくしたことがあつたと言つた。私はこれには何とも答へずに、たゞ悲しさに首を振つた。彼女がもう歸つて来ないこと、少なくともピラリはもう二度と彼女にあへないことが私にはあまりによくわかつてゐたのだ。

「ところで」とピラリは言葉をむすんだ。「あんたはこれからどうしなさるつもりぢやな、佛々？」

「どうしていゝかわかりませんよ、長老」と私は言つた。「この土地から逃げることはできんぞな？」

彼は首を振つた。

「それは大變にむづかしい。コオルを通つて行くわけにはゆきませんぞ。あそこを通つた日にや、アマハツガー人に見つかる。彼奴等は女王と一緒に知るところと、それ一と言ひながら彼は意味ありげに笑ひながら、帽子をかぶるやうな手眞似をした。「だが、崖の中に、いつかあんたに話したことがあるが、牛を牧場へ追ひ出す小徑が有るさあ。その牧場の先には沼地があつて、それを通り抜けるのに三日かゝる。それから先のことは、私は知らんが、七日もかゝつて歩いてゆくと大きな河があつて、その河は黒い海に注いでゐるといふことを聞いたります。その河の岸までゆくことができりや、ことによると逃げられるかも知れんが、どうしてそんなとこまで行けますか？」

「ビラリ」と私は言った。「あんたも知つてゐる通り、いつか私はあんたの命を助けてあげたことがある。その代りに今度は私とレオの命を助けて貰ひたい。あんたの考へてあるとほりだとすると、いつかまた女王が姿を現はされるかも知れん。その時には良いことをしとくと女王のお賞めにも預かれようといふものだ。」

「狒々さん」と老人は答へた。「わしは思知らずちやありませんぞ。あの犬どもがわしの瀕れるのを見てぼんやり立つてゐた時に、あんたがわしの命を救つて下さつたことは、よくおぼえとりますわい。わしはわしにつくして貰つただけの恩返しをします。そして助かるものならあんたの命を助けて進ぜますわい。明日の夜明けまでに支度をなさるがよい。さうすれば、わしは女王の命令だと言つて、あんたがたを、駕籠かきどもを偽つて、山を越えて、沼地を渡つて、その先きまで送らせませう。沼地を越えたら、その先はあんたがただけで進んでゆかにやならん。さうすれば運がよけりや、黒い海とやらまで無事に行きつけるかも知れせんわい。ところで獅子も眼が醒めたやうだから、食事をしなさるがよい。支度はしてありますからな。」

レオの工合は、すつかり眼がさめてしまふと、最初思つたほどわるくはなかつたので、吾々は腹一ぱい食物を詰めこんだ。それがすむと吾々は泉のそばまで行つて行水をつかひ、また歸つて来て夕方まで寝て、また腹一ぱい食事をした。ビラリはその日一日ちゆうあなかつた。きつと駕籠や駕籠かきの用意をと、のへてゐたのであらう。何故といふと、夜半頃に、吾々の夜營地へ、かなりの人数の一

行がどやくと押しかけて來たので吾々は眼をさまされたからである。

夜明けになると老人もやつて來た。そして、少し工合が悪さうではあつたが、女王の名をひきあひに出して、必要な人数をと、のへ、別に、二人の道案内を命じて、若し途中で裏切るやうなことがあつたときの用心に彼自身も一行に加はつて行くと吾々に告げた。吾々はこの蠻地の老人が他國人の吾々につくしてくれた親切にひどく心を動かされた。往復六日もかゝる恐ろしい沼地を、この年で旅をするのは並大抵なことぢやない。勿論、自分の一身上の利害の打算も加はつてゐたのかも知れぬ。女王が突然歸つて來て、吾々をどうしたと訊ねられたときのことも考へてゐたのかも知れぬ。併し、それにしても、この老人の心づくしは、一生涯に泌みて忘れぬものであつた。

吾々は朝食がすむとすぐに駕籠にのつて出發した。身體の方は長く眠つたのと、しこたま食物をつめこんだのとですつかり元氣が恢復してゐた。心の方は讀者の想像にまかせると、外はない。

それから問もなく恐ろしい崖の登り道にさしかつた。道は自然に出來た道のところもあつたが、大部分は古代のコオル人がつくつたものらしい。鋸形の道だつた。アマハツガー人が一年に一度づゝこゝから牛を牧場へ出すのださうだが、その牛はきつと足の丈夫な牛に相違ない。勿論こゝでは駕籠は役に立たないので、吾々は歩いて行かねばならなかつた。

けれども、正午までに、吾々はこの大きな岩壁の頂上の平地まで着いた。その眺望は實に雄大なものであつた。一方を見るとコオルの平原でその平原の中央には、眞理の神殿の廢墟の柱がたつてを

り、他方に眼を轉すると、果しのない陰鬱な沼地がつゞいてゐた。この岩壁はかつて火山孔の縁環であつたものに相違なく、厚さが一哩半もあつて、まだ灰滓に被はれてゐた。岩の上には何も生えてゐなかつたが、ところ／＼に窪みができて、そこには最近に雨が降つたものと見えて水がたまつてゐた。吾々はこの雄大な岩壁の頂きの平地を攀ちて進んだ。そのうちに道は降り坂になつた。降り道は登り程困難ではなかつたが、それほど生やさしいものでもなかつたので下まで降りきつたときはもう日没だつた。併しその夜は吾々は、崖の麓から沼地までつゞいてゐる廣い裾野の上で安らかに夜營をした。

翌朝十一時頃から、吾々はこのいやな沼地の旅をはじめた。

まる三日間、泥濘と熱氣との中を、吾々の駕籠かきどもはよち／＼と歩いて行つた。そして、案内人がなければとてもわからない蕭條たる道を通りぬけて、たうとう、うね／＼起伏した平地へ出た。そこは耕地ではなく、樹はほとんど生えてゐなかつたが、色々な鳥や獸が歩きまはつてゐた。そして、こゝで翌朝吾々はビラリに名残をしい別れをつげた。彼は白髯をしごきながら吾々にむかつて言つた。

「左様なら、狒々さん、それから獅子さんも左様なら。もうこれ以上わしはあんたがたをお助けすることはできません。だが、若し、あんたがたの國へ歸りなかつたら、これに懲りて、もう二度と知らない處へは行かないやうになさるがよいですぞ。でないと、今度は歸れなくなつて旅の行き詰りにあ

んだがたの白い骨を曝さにやなりませんからな。もう一度おさらばぢや、わしもあんたがたのことを度々思ひ出すぢやうが、狒々、あんたもわしを忘れて下さるなよ。あんたの顔は醜いが心には眞情がこもつてゐる。」それから彼は踵をまはして去つた。彼のあとから丈の高い、氣むづかしさうな顔をした駕籠かきども、去つて行つた。吾々にはこれがアマハツガー人の見をさめだつた。吾々は、まるで戰場から戦死者をつれて來る行列のやうに空駕籠をぶら／＼させながら去つて行く彼等の後姿が沼から立ち昇る霧に包まれるまで一行を見送つてゐた。それから吾々は今更のやうに荒涼たる身のまはりを見まはし、二人で互に顔を見合せた。

思へば吾々四人の者がコオルの沼地へはひつて來たのは三週間前だつた。そのうちの二人は今死んでしまひ、吾々二人は、奇しくもまた恐ろしい冒険の數々を経て生き残つたのだ。三週間——たつた三週間だ！ほんたうに時といふものは、たゞ経過した長さだけでははかられないものだ。その間に起つた事件によつてはからねばならぬものだ。吾々にはボートの中であつたから三十年もたつたやうな氣がする。

「これからザンベシ河まで突き貫けにやならんね、レオ」と私は言つた。「だがそこまで行けるかどうかは神様にしかわからない。」

レオは點頭いた。

彼は近頃めつきり口かすをきかなくなつた。そこで吾々は着のみ着のまゝの着物と、磁石と、拳銃

と、エキスプレス銃と二百發の彈丸とだけをもつて出發した。これで吾々の雄大なコオルの廢墟の訪問の物語は終つたのである。

その後、吾々の身にふりかゝつてきた災難のかすくは、不思議な、様々なものではあつたが、よく考へて見た上で私はこゝに記さぬことに決めた。こゝでは、私はたゞ、私が前代未聞の出來事であると信じてゐる出來事を簡單に述べただけである。しかも私は、これをすぐに世間に發表するつもりではなく、たゞ忘れないうちに書きつけておかうと思つただけである。この旅のことを詳しく書いて發表すればきつと世間では面白がるだらうと思ふが、現在では、吾々が二人とも生きてゐるうちは、そんなことはしないつもりである。

これから先のことは、一人の中央アフリカ旅行家の旅行記のやうなもので、一般の讀者には興味の無いものである。だから、吾々は言語に絶した困苦をなめた末、ビラリと別れた地點から約七十哩も南方にあたるザンベシ河へ辿りついたと言つておけば十分だ。そこで吾々は六ヶ月間蠻人の部落で虜にされた。蠻人どもは吾々をたゞの人間ではないと思つたらしい。それは主として、レオが若い顔をしてゐながら頭が眞つ白だつたからであらうと思ふ。吾々は、この蠻族の手から免れてザンベシ河を渡り、南の方へ放浪の旅をつゞけ、今にも饑死にしようとしてゐたときに、運よくも混血のポルトガル人の狩獵家にあつた。この狩獵家は、その時、象の群のあとをつけて、これまでにまだ来たこ

とのない程、深く奥地まで入り込んで来たのであつたさうな。吾々はこの男から親切なもてなしを受けて、數限りない苦しみや冒險を経て、最後に、彼の助けでデラゴア灣に着いた。それは吾々がコオルの沼地を抜け出してから十八箇月以上も後のことであつた。その翌日、吾々は運よくも、喜望岬から英本國へ歸航する汽船に便乗した。それは楽しい航路であつた。吾々がサンプトンの波止場に足を踏みしめたときは、吾々か、一見荒唐無稽に見える亂暴極まる探検に旅だつてから丁度二年目であつた。今私は昔なつかしい大學の部屋でこの最後の文字を書いてゐるのだ。レオは私の肩にもたれかかつてゐる。この部屋こそ、忘れもしない、二十二年前に、かはいさうな吾が友ヴァインシイが、臨終の晩に、鐵の箱をもつてよろ／＼してはひつて来た部屋だ。

これで現代の科學と外部の世界とに關する限りではこの物語はおしまひである。レオと私とに關しては、この物語がいつになつたら終るのか私には見當もつかない。だが、吾々は、まだ終つたのではないやうな氣がする。二千年以上前にはじまつた物語だから、これから先き、遠い／＼將來までつくかも知れない。

レオはほんたうに壺の破片に書いてあつた昔のカリクラテスの生れ更りだらうか？ それとも、餘り先祖の顔によく似てゐたのでアッシヤが見ちがへたのであらうか？ もう一つの疑問は、この生れ更り物語りの中で、アステーンは昔のアメナルタスと何か關係があるのだらうか？ これ等のことに

ついても、その他のことについても讀者の方で自由に意見をたてて貰ひたい。私の意見を言ふと、レオのことについてはアツシヤは決して見ちがへたのではないと思ふ。

私は夜一人で坐つてゐて、まだ生れて來ない未來の暗闇の中を、心の眼でちつと見つめながら、この一大戯曲はこの次にはどんな形で、どんな姿で展開してゆくだらう、そして次の幕は何處で演ぜられるだらうとあやしんだことが幾度でもある。物には結末といふものがある。この戯曲にも最後の幕があるに相違ないが、それは一體どんな幕であらう。その最後の幕で、僧侶カリクラテスに、煩惱のためにイシスの神への誓ひをやぶらせ、執念深い復讐の女神に追はれてリビアの海岸にのがれ、コオルへ來て最期を遂げさせたファラオの女王、あの美しい埃及女のアメナルタスの演ずる役割は何だらう？

洞窟の女王終

ソロモン王の寶窟

ソロモン王の寶窟

はし が き

この書物が印刷されて愈々世に出ることになつて見ると、文章に於ても、内容に於ても、あまりに缺點だらけなのが、大變氣にかゝる。内容については、私は、これは吾々が見たり、したりしたことを残らず書いたのではないと斷つておくより他はない。吾々のククアナ旅行については、詳しく書きたいことで、ほんの一言も言はなかつたことが澤山ある。その中には、王宮の激戦で吾々の命を救つてくれた鎖鎧や、鐘乳洞の入口にある「無言の神」の巨像についての不思議な傳説などもある。それから私は、ズル語とククアナ語との差異についても書いて見たかつた。そのうちの或るものは非常に暗示的だと私は思つてゐる。又、ククアナ國の土生の動植物についても數頁の説明をしておいてよかつたと思ふ。ククアナ國のすばらしい軍隊制度のことも興味があるが、そのことにはちよつと觸れただけだつた。これはズル國の軍隊制度に比べると、動員が迅速な點と有害な獨身生活を強制しない點とだけでも優れてゐると私は思ふ。最後に、多くの點に於いて非常に風變りなククアナの家庭の習慣や、彼等が冶金術に優れてゐることを殆んど語らなかつた。この國民の冶金術は非常に完全なもので、「投げ槍」の如きはその一例だ。

それから文章の拙い點については、私は、日頃鐵砲ばかりいじつてゐて、ペンをもつことなどは滅多にないためだと辯解するより外はない。私の文章には少しも修飾や誇張がない。さういふものをあながち排斥するわけではなくても、私の力には及ばないのだ。しかし私はありのまゝの事柄の方が、よく人の頭にのこるもので、ありのまゝに書いた書物の方がわかりよいものであると考へざるを得ない。尤も私にはそんなことを言ふ資格はないだらうが。ククアナの諺に、「鋭い槍は磨くに及ばぬ」と

いふ諺がある。私はそれにならつて、眞實の話は、どんなに不思議な話でも、美しい言葉で修飾する必要がないと言つていゝと思ふ。

アラン・コオターメン

第一章 サー・ヘンリー・カーチスに會ふ

この前の誕生日で、私は五十五になつたわけだ。こんな年になつてから、ペンをとつて、物語りを書かうなんて妙な話だ。若し旅のをはりまですつかりこれを書きあげてしまつたら、この物語がどんな風なものになるか、今のところ私にもわからないのだ。私は生涯のうちに、ずいぶん色々なことをして来た。私の生涯は實に長い生涯だつたやうに思ふ。それといふのも極く若い時から私は色々なことをして来たからだ。他の子供等がまだ學校に行つてゐる時分から、私は舊植民地で商人になつて、糊口の道を立てゐたものだ。それからといふもの、私は商賣をしたり、狩をしたり、漁獵をしたり、坑山で働いたりして来た。それでゐて私がやつと一儲けたのは、ほんの八箇月前のことだ。私はずいぶん儲けたものだ。どれ程儲けたか私にもまだわからない位だ。しかし、私はどれだけ儲かつたところで、この十五六ヶ月間にやつて来たことをもう一度繰り返してやつて見る氣はない。たとひ無事に、しこたま儲けて歸つて來られることがわかつてゐても、もう眞つ平だ。といふのは私は、臆病者で、亂暴なことは嫌ひで、冒險なんてことは蟲が好かぬからだ。私はどうしてこんな物語を書く氣になつたのか自分でもわからぬ。これはどう見てもお門前がひだ。私は筆をもつやうな柄ぢやない。で私がこんな物語を書きはじめる理由があるとすれば、まあ次のやうなものだらう。

第一に、サー・ヘンリー・カーチスと船長ジョン・グッドとが私にこれを書いて見るやうに言つてくれたからだ。

第二に、私は、いま、左の脚が痛むので、このダーバンへ來て寝てゐるからだ。あのいまくしいライオンに噛みつかれてからといふもの、しよつちゆう、傷をうけたところが痛みがちなのだが、それが今は、わけても激しくなつて、いつもよりひどくびつこをひいてゐるのだ。ライオンの齒には、きつと毒があるに相違ない。でなければ、一日癒えた傷が、毎年、傷を受けた時節になるとまた痛み出すなんて法はない。私は一生のうちに二十五頭のライオンを射殺したのだが、二十六頭目のライオンに、まるで噛み煙草か何かのやうに脚を噛まれるなんてつくづく情なくなる。私は物事はきちんとしたことがすきだから、外のことはさておいて、こんな風に一度だけやり損なつたことが癪にさはつてならぬのだ。おつとこれは餘計な話だつた。

第三に、私の倅は今ロンドンの病院で醫者にならうと思つて勉強してゐるが、私はこの倅を樂しませてやりたいのだ。病院の仕事なんて、退屈なものだから、時々は厭になることもあるに相違ない。屍體の解剖だつて始終見てをれば飽きぐるに相違ない。ところがこの物語は、何はともあれ、退屈でないことだけは請け合ひだから、倅もこれを讀んでゐる一日か二日の間はいくらか氣が晴れるかも知れないと思ふのだ。

第四に、そして、これは最後の理由だが、私がこれから語らうとする物語りは、又とない不思議な物語りだ。その上特にこの話にはフアラタを除いては女は一人も出てこない。いや、待つた、ガゴ

オルといふ老婆が出て来る。だがこれは女といふよりむしろ悪魔と言つた方がよい。それにこの女は少くも、もう百歳にもなつてゐるのだから、結婚のできるやうな女ぢやない。だから私はこの女は勘定に入れないのだ。兎にかく此の話には艶っぽいところは何もないと言つても大丈夫だ。さてこれから本題にとりかゝらう。

ナタル州ダーバンの紳士、アラン・コオターメンと申す私は、こゝに宣誓をして申し上げます——私はキヴァとフエントフォーゲルとの死について、裁判官の前で證言したときにかういつてきりだしたものだ。だが書物の書き出しには、どうもこれでは工合がわるいやうに思ふ。それに一體私は紳士だらうか？ 紳士とは一體何だらう？ 私にはまるでわからないのだ。

だが、いづれにしても生れたときは私も紳士として生れたのだ。一生旅商人をしたり獵師をしたりして過したには過したが、生れは紳士だつたのだ。今でもさうかどうかは私は知らぬ。それは諸君の判断にまかせる。私が一生懸命にとめて來たことは神様が御承知だ。私は一生のうち随分人を殺すには殺したが、決してみだりに人殺しをしたのでもなければ、罪のない者の血で私の手は汚れてをりはしない。たゞ自衛のために殺したのだ。神様から授かつた命だもの、大事にしなくちやならんと私は常々思つてゐるのだ。

さて、私をはじめてサー・ヘンリー・カーチスと船長グッドとに會つたのはもう十八ヶ月あまりも

前のことだ。私はバマングワトの象狩りに出かけて、散々な不獵で、することなすことがへまになつたばかりならいゝが、擧句のはてに、ひどい熱病にかゝつてしまつた。病氣が治ると、私は早速ダイヤモンド探掘場へ出かけて、もつてゐた象牙を、荷車や牛と一緒に賣り拂つてしまひ、傭つた獵師どもに暇を出して、喜望岬行きの驛馬車に乗つた。ケープ・タウンで一週間ばかり過した後、ホテルに泊つてゐても費用がかゝる一方だし、それに、町はずつかりもう見物してしまつて、植物園や、新しく出來た議事堂まで見てしまつたので、英國からエデンバー・キャスル號の到着するのを待つて出航する筈になつてゐたダンケルド號に便乗して、ナタルへ歸ることに決めた。私は寢臺室を買つて船に乗つた。そして、その日の午後、エデンバー・キャスル號に乗つて來たナタル行きの乗客が、こちらの船へ乗り換へて來るのを待つて吾々は出帆したのであつた。

その乗客の中に、私の好奇心を動かした人が二人あつた。一人は私がこれまでに見たことのない程胸の大きな腕の長い人であつた。この人の髪は黄色で、髭も薄い黄色で、顔だちはくつきりとしてをり、大きい灰色の眼が、深く落ちこんでゐた。私はこんな立派な男はつひぞ見たことがない。何となく、どこか昔のデンマーク人のやうなところがあつた。ところが、不思議なもので、この人はサー・ヘンリー・カーチスといふ人であつたが、あとからわかつたところによると、ほんたうにデンマーク人の血をうけた人だつた。それからこの人は、どこかで見た人によく似てゐると思つたが、その時は誰に似てゐたのかどうしても思ひ出せなかつた。

いま一人の、サー・ヘンリーに話をしかけてゐた男は、頑丈づくりな、色の浅黒い、全く別種の人であつた。私はすぐにこれは海軍士官ぢやないかと思つた。なぜかわからぬが、海軍の軍人はめつたに見損ひのすることはないものだ。私は、生涯のうち、海軍の軍人と獵に出かけたことが度々あつたが、彼等は少々言葉が亂暴ではあつたが、此の上なく氣だてのよい、勇敢な連中であつた。私はつい今しがた、紳士とは何だらう？と言つたが、今なら答へができる。海軍の軍人こそは、中にはろくでなしもあるが、概して紳士だと言へる。廣い海と、風とに心を洗はれてゐるので、邪まな考へは心の中から追ひ出されてしまつて、ひとりで立派な人間がでさるのだらうと私は思つてゐる。それはさておき、私はあとで、この色の浅黒い男は矢張り海軍士官であつたことをたしかめた。十七年の間海軍の飯を食つて、中佐になつて仕官をやめたのだ。といふのはもうそれ以上陸進する見込みもないのでお拂ひばこになつたのだ。一體お上の役人になる者はいつでもさういふ覺悟をしてゐなくちやならんものだ。やつと仕事の味がわかり出す時分になると、世智辛い世の中へ抛り出されるにきまつてゐるのだ。その人たちにしてみりや何とも思つてゐないだらうが、私はまあそんなことをするより、獵師として麵麩を稼いでゐた方がましだと思つてゐる。

士官の名は船客名簿で調べて見たら、グッドといふ名前だつた。船長、ジョン・グッドといふのだ。この男は肩幅の廣い、中春の、色の浅黒い、肥つた、少し風變りな男だつた。いつも身のまはりをきちんとし、鬚は綺麗に剃つて、右の眼に眼鏡をかけてゐた。まるで眼鏡はそこに生えてゐるかのやま

で、紐もつけてゐなければ、球を拭くとき以外に外したこともなかつた。初めは、私は、眠る時眼鏡をかけた儘で眠るのぢやないか知らんと思つたが、それは間違ひだつた。床に就く時は、義齒と一緒にそれをツボンのポケットへしまふのだつた。義齒は非常に立派なものを彼は二組もつてゐた。私の義齒と來たら随分ひどいのだつたから、私はつい十誠の十番目の誠めを破つた事が度々あつた。

船が進み出すと間もなく日が暮れて、天氣がわるくなつて來た。強い風が沖の方から吹いて來て、霧がひどかつたので、船客は皆甲板から逃げ出した。吾々の乗つてゐたダンケルド號は平底船だつたので波のまにまにのし上げられて、ひどく揺れた。まるで今にも顛覆しやしないかと思はれる程だつたが、顛覆はせずすんだ。歩きまはることなどはとても出来なかつたので、私は機關のそばに立つて私の真正面にすゑつてゐる振子の揺れるのを眺めてゐた。機關のそばは温かかつた。振子は船が揺れる度に大きな角度を描いて前後に振れてゐた。

「あの振子は狂つてる」突然私の肩のところ、氣短かな聲でかう叫んだものがあつた。後を振り向いて見ると、それはさつき私の眼にとまつた海軍士官だつた。

「どうしてさうお考へになるのです？」と私はたづねた。

「考へるつて？ 考へるんぢやないんだ」と彼は船に揺られた身體を眞直にのばしてから言つた。「あの振子が指してゐる程この船が揺られた日には、もう二度と揺りたくても揺れなくなつてしまひますよ。それつきりのことです。だが、こゝいらの商船の船長なんて奴は、みなこんなことにかけてちやい

まいましい程無頓着ですからなあ。」

ちやうどその時食事の鐘が鳴った。私はそれを有り難く思つた。といふのは、海軍士官からこんな話をくどく聞きかされちやたまらなかつたからである。

グッド船長と私とは一緒に食堂へ行つた。サー・ヘンリー・カーチスはもう既に席についてゐた。彼とグッド船長とは並んで坐り、私は二人と向ひあつて坐つた。船長と私とは直に獵の話始めた。彼は色々なことを訊ねるので、私はできるだけそれに答へてゐたが、そのうちに象の話になつた。

すると私の近くにゐた誰かが言つた。「あなたは、人をつかまへましたよ。象の話ならこのコオターメンさんに聞けば誰よりもよく知つてゐますからね。」

ちつと坐つて吾々の話をきいてゐたサー・ヘンリー・カーチスは、この時、他目にもわかるほどびつくりした。

「失禮ですが」と彼は食卓の上へもたれかゝつて、低い、どつしりした聲で言つた。

「失禮ですが、あなたは、アラン・コオターメンさんと仰言いますか？」

私はさうだと答へた。

この大漢は、それつきり何とも言はなかつたが、鬚の中で「よかつた」と呟いたのが私には聞えた。

やがて食事がすんだので、吾々がそろそろ食堂から出かけて行くと、サー・ヘンリーが私のそばへ寄つて来て、彼の船室へ煙草を喫みに来ないかと申し込んだ。私は承知した。そこで彼は甲板の船室

へ私をつれて行つた。それは立派な船室だつた。この船室は、以前は二つの室に分れてゐたのだが、サー・ガーネットといふ成金がこの船へ乗つた時に、中仕切を壊したまゝ、それつきり、そのまゝになつてゐたのである。この船室にはソファが一つあつて、その前に小さいテーブルが置いてあつた。サー・ヘンリーは、給仕にウキスキーを注文しておいて、それから吾々三人は椅子に腰を下してパイプに火をつけた。

「コオターメンさん」とサー・ヘンリーは給仕がウキスキーの瓶をもつて来て、ランプに灯をつけてから言つた。「あなたは一昨年この頃、トランスヴァールの北にあたるバマンガワトといふ所にをられましたね。」

「さうです」と私は答へた。そして、世間にさう注意されてゐる筈もない私の動靜を、この紳士が知つてゐたのに少なからず驚いた。

「あなたはそこで商賣をしてゐたんでせう？」とグッド船長が例の氣短かな口調で言葉をはさんだ。

「さうです。荷物を荷車に積んで、居留地外に野營をして、品物を賣りつくしてしまふまで、そこに滞在しとりました。」

サー・ヘンリーは、私に向ひあつて、マデイラ椅子に腰をかけ、兩腕をテーブルの上へもたせかけてゐた。が、この時顔を上げて、大きな灰色の眼で、真正面から私の顔をじろく見た。その眼には何となく氣にかゝることがあるやうな様子が見えた。

「あなたは、もしかしたら、ネヴィルといふ男にお會ひになりやしませんでしたか？」

「會ひました。あの人が奥地へはひつてゆく前に會つたことがあります。數ヶ月前にある辯護士から私のところへ手紙で、あの人がどうなつたか知つてあるかといつて訊ねて來ましたので、私は、その時、知つてゐるだけのことを答へてやりました。」

「さうですか、その手紙は私の手許へ廻つて來ましたよ。あなたは、その手紙で、五月のはじめに、ネヴィルといふ紳士が、一人の御者とジムといふケーファー人の獵師とをつれて、バマンガワトを出立したといふことや、出がけに、もし行けるなら、マタベレ地方の一番はづれの商業地のインヤチまで馬車でやつて、そこで馬車を賣つて、その先は歩いて行くのだと言つたといふことや、それから、その紳士は實際その馬車を賣つた、といふのは、それから六ヶ月もたつてから、ポルトガルの或る商人が、その馬車をもつてゐるのをあなたが御覽になり、そのポルトガル人は、その馬車をイヤンチで或る白人から買ひとつたとあなたに話したことや、それからその白人と土人の下男とは更に奥地の方へ狩に出かけて行つたらしいと、あなたに話したことなどを書いてをられましたね。」

「さうです。」

それからしばらく話が途切れた。

「コオターメンさん」とサー・ヘンリーは急に口をきつた。「あなたは、多分、私の——いや、そのネヴィルといふ人が何故南の方へ行つたか、そして、どこを目指して行つたのかは御存じぢやありませんか？」

「まいね？」

「いくらか聞いてゐることもあります。」と言つて私は口をつぐんだ。こんな話には私はあまり興味になかつたからだ。

サー・ヘンリーとグッド船長とは互に顔を見合せ、グッド船長は點頭いた。

「コオターメンさん」とヘンリーは言葉をつづけた。「私はこれから一つ身の上話を聞いていたゞかうと思ふのです。そしてあなたの御意見をうかがつたり、ことによつたら、お力を借りたいと思ふのです。私にあなたの手紙を渡してくれた辯護士は、あなたはナタルで、人に知られ、人に敬まはれてゐる方で、わけても分別のある方だから、きつとよい智慧を貸して下さるだらうと言つてゐました。」

私は頭を低げて、てれ隠しに、ウキスキと水とを少しばかり飲んだ。といふのは私はおとなしい人間だからほめられて氣まがいが悪かつたのだ。サー・ヘンリーは猶も言葉をつづけた。

「ネヴィルといふのは私の弟なのです。」

「ほ、う」と私は吃驚して言つた。といふのは、サー・ヘンリーをはじめて見たとき、どうもどこかで見たことのある人に似てゐると思つたからだ。彼の弟は、ヘンリーから見ると體格は小造りで、鬚は黒かつたが、灰色の眼はそつくりで、その眼の鋭い輝きもそつくりだつたし、顔もよく似てゐた。

「あれは」とサー・ヘンリーは續けて言つた。「私のたつた一人の弟で、五年前までは、一月だつてお互に離れて暮すやうなことになるうとは夢にも思つてゐなかつたのです。ところが、どこの家にも

よくあることで、五年前に私どもの家に一つの不幸がふりかゝつたのです。吾々はひどい喧嘩をして癩癩まぎれに私は弟をひどい目にあはせたのです。」

グッド船長は、ひとりで元氣にうなづいた。船ははげしく揺れてゐた。

「御承知と思ふが」とサー・ヘンリーは言葉を吐いた。「若し或る人が遺言なしに死んだ場合に、その人に不動産、つまり土地だけしか財産がない場合には、英國ではその財産はすつかり長男のものになることになつてゐるのです。ところが、ちやうど喧嘩をしてゐる最中に、折悪しく吾々の親父が遺言せず死んでしまつたのです。遺言を書くのをのばしてゐるうらにたうとう間にあはなくなつてしまつたのです。そのために、身に職業のおぼえ一つない弟は一文なしになつてしまつたのです。勿論私が何とかしなければならぬところだつたのですが、何しろその頃吾々は喧嘩の眞つ最中だつたので、お恥かしいことながら（かう言つて彼は深い溜息をもらした）私は弟に何一つやらうと言はなかつたのです。勿論私としても、そんな不公平なことをする氣ぢやなかつたのですが、そのうちに弟の方で折れて出るだらうと思つてそれを待つてゐたのです。ところが弟は飽く迄も強情を張つて、何とも妥協を申し込んで來ないのです。コオターメンさん、こんなお話をして御免下さい。でも私はすつかり事情を打ち明けてお話しなくちやならんのです、ねえ、グッド君？」

「さうですとも」と船長は言つた。「コオターメンさんはきつと他言なんかなさらんでせう。」

「勿論です」と私は言つた。といふのは私は分別をわきまへてゐるといふことでは、少々自慢でもあ

つたし、サー・ヘンリーが言つたやうに、少しは評判者でもあつたのだ。

「で、弟はその當時自分のものとしては五六百磅の小遣をもつてゐたけななのですが」とサー・ヘンリーは言葉をつけた。「私には何とも言はずに、此の僅かばかりの金をひき出して、ネヴィルと名前をかへて、一儲けしようといふ無鐵砲な考へを起して、南アフリカへ出かけて行つたのです。私はこのことをあとで知つたのです。それから三年もたつても、弟からは何の便りもありません。私は度々手紙を書いたのですが、きつと弟の手許までは届かなんだのでせう。併し時が経つにつれて、私はだん／＼このことが心配になつて來ました。コオターメンさん、私は血は水よりも濃いといふことをつく／＼悟つて來ましたよ。」

「もつともですとも」と私は息子のハリイのことを思ひ出しながら言つた。

「私は財産の半分を投げ出して、いゝから、たつた一人の血を分けた。弟のジョオジの安否が知りた

い、一目でいゝからもう一度弟に會ひたいと思ふやうになつたのです。」

「併しのぞみはかなひませんでしたね、カーチスさん」とグッド船長はヘンリーの顔をちらりと見ながらせつかに言つた。

「さうです、コオターメンさん。時が経つにつれて、私は弟の生死が知りたい、生きてゐるものなら、もう一度家へつれて歸りたいと氣を揉んで來ました。私は方々を歩きまはつて探しました。あなたの手紙もその捜索によつて手に入れた結果の一つだつたのです。ところが今のところではまあ安心

なのです。といふのは最近までジョオジは生きてゐたことはわかつてゐるからです。しかしその先きが皆目わからんのです。でまあ、長い話をつめて申し上げると、私は弟のありかを探さうと思つて出かけて来たやうなわけなのです。グッド船長は親切にも、私について来て下さることになつたのです。」

「さうです。」と船長は言つた。「海軍の方をお拂ひばこになつて見れば、他にすることもないもんですからね。ところで今度は、あなたから、ネヴィルといふ紳士についてお聞きになつたことを話していたゞきたいですなあ。」

第二章 ソロモン王の寶窟の傳説

「あなたは私の弟がバマンガワトへ旅立つたことについて、どんなことをお聞きになりました？」とサー・ヘンリイは私がグッド船長に答へようと思つてバイブに煙草をつめてあるときに訊ねた。

「私はこのことはまだ、今まで誰にも話したことはないのですが」と私は答へた。「あの人はソロモン王の寶窟を目あてに旅立たれたのださうです。」

「ソロモン王の寶窟だつて？」と二人の聽者は同時に叫んだ。「それは一體何處にあるのです？」

「私もよくは知らないのですが」と私は言つた。「人の噂だけはきいてゐます、前に、私は、ソロモン王の寶窟の前にある山の峰を見たことがあります。しかし、私の立つてゐた處とその山との間には、

百三十哩もある沙漠がありましたので、そこを越して行つた白人は一人つきりしか私は知りません。だがこんなことを申し上げるより、そのソロモン王の寶窟の傳説について、私の知つてあることを申し上げた方がよいと思ひます。但し、この話は、私にことばならないで、他の人に話さないやうにしていたゞきたいのです、それにはわけがあるのですから。それでよろしうでございますか？」

サー・ヘンリイは點頭いた。グッド船長は「大丈夫、承知した」と答へた。

「では申しあげませう」と私ははじめた。「大抵おわかりでもありませんが、獵師なんでものは、概して荒削りにできてますから、ケーファー人の見たまゝの生活以上の事を知りたいなんて氣はめつたに起すものぢやありませんが、時々、土人の傳説を蒐めて、この暗黒地方の歴史を少しでも明かにしようなんて考へをもつてゐる殊勝な人にもぶつかることがあります。私がはじめてソロモン王の寶窟の傳説をきいたのは、まあさういつたたちの人からでした。もうかれこれ三十年も前のことですがね。それは私がはじめてマタベレ地方へ象狩りに出かけた時のことでした。私にそれを話してくれた男はイヴァンスといふ男で、かはいさうに、手傷を受けた野牛のために殺されて、今ぢやザムベシ瀧の近くに葬られてゐます。或る晩のこと私はイヴァンスに、トランスヴァールのライデンブルグ地方へ獵に行つた時に見た金坑の話をしたことがあります。今でこそこの地方は金山で榮えてゐますが、私はそれよりも前から、此の地方に金山のあることは知つてゐたのです。するとイヴァンスは「もつと不思議な話がある」と言つて、すつと奥地の方にある廢都の話をしてくれたのです。彼はこの廢都

は聖書のオフィルのことだらうと言つておきましたが、ついでに言つておきますと、その後もつと物識りの學者が矢張りイヴァンスと同じことを言つておきました。私はその頃若かつたものですから、熱心にこの古代文明の話をきいておりました。するとイヴァンスは突然私に向つて「お前さんはマシユクルムプエ地方の西北にあたるスリマン山の話を書いたことがあるかい？」と申しました。私が聞いたことがないと答へると、彼は「さうか、あそこには、ソロモン王がほんたうに坑山をもつてゐただぜ、ダイヤモンドの坑山をもつてゐただぜ」と言ひました。

「どうしてそれがわかつたのです？」と私は訊ねて見ました。

「どうしてつて、スリマンといふのはソロモンのアラビア訛りだよ。それにマニカ地方にある魔法婆から私はその事をすつかり聞いたんだ。その婆の話によると、あの山の向うに住んでゐる人間はズル民族の分派で、ズルの方言を使つてゐるが、ズル人よりは立派で體格が大きいといふ事だ。それから、そこには偉い魔法使が住んでゐるといふ事だ。この魔法使ひどもは、まだ『世界中がまつ暗な時代に』白人から魔法を教はつたので、不思議な『光る石』の出る坑山を知つてゐたといふことだ」

「私はこの話をきいた時大變面白い話だとは思ひましたが、その頃はまだダイヤモンド探鑛場の發見される前のことですからたゞ一笑に附してゐました。だがかはいさうないヴァンスはそれから出かけて行つて、殺されてしまつたのです。それから二十年の間、私はこの事は忘れてしまつてゐたのですが、二十年後に——二十年といへば長い年月ですよ、象狩りをしやうばいにしてゐる人間は、しやう

ばいをはじめから二十年も生きてゐない人がずゑんありますからね——私はこのスリマン山とその山の向うにある地方について、もつとはつきりしたことを聞きました。私はマニカ地方の先にあるシタンダ村といふ所まで行きました。そこは實にひどい所で、食物もなければ、獵の獲物も殆んどありませんでした。私は熱病にかゝつて弱つてをりますと、或る日のこと、一人のポルトガル人がたつた一人の混血兒をつれてやつて來ました。一體ポルトガルの商人ときたら、奴隸の生血を絞つて生きてゐる惡魔ですが、この人は、そんな人ではなく、大層おとなしさうな人でした。瘦せた脊の高い人で、大きな黒い眼をして、灰色のちぢれた口鬚をはやしてゐました。その人はブローケン・イングリッシを話しましたし、私は少々ポルトガル語がわかつたので、二人は少し話をしました。その人はジョゼ・シルヴェストルといつてデラゴア灣の近くに住んでゐるのだと言つてゐましたが、翌日、一人の混血兒の從者をつれて行きがけに、ひどく古風な帽子を脱いで「左様なら」と言ひました。

「左様なら、こんど二人が會ふやうなことがあつたら、その時には私は世界一の大金持ちになつてゐて、あなたをおぼえてゐますよ」とかう言ひました。私は少し笑ひました。ひどく弱つてゐたので澤山笑へなかつたのです。そして私はあの人は氣狂ひだらうか、何をさがしに行くのだらうなど、思ひながら、その人が沙漠を横ぎつてゆくのを見てゐました。

「それから一週間たつて、私の熱病はなほりました。或る晩のこと、私は、私のテントの前にすはつて、土人から布の切れつばしで買つた最後の鳥の脚を齧みながら、沙漠の向うへ沈んで行く赤い夕陽

を見てみますと、どうやらヨーロッパ人らしい一人の人影が見えました。といふのは、その人影は外套を着て、三百碼ばかり離れたところの、丘の中腹に立つてこちらを見ているのです。その人は這つてあましたが、しばらくするとまた立ち上つて歩き、歩き出したかと思ふとまたよろけて這つてあまりました。これはきつと災難にあつた人に相違ないと思つて、私は手下の獵師に、その人を助けて来るやうに言ひつけました。まもなくその人はやつて来ました。それは一體誰だつたとお考へですか？—
「無論ジヨゼ・シルヴェストルだらう」とグッド船長が言つた。

「さうです、ジヨゼ・シルヴェストルでした。といふよりも、ジヨゼ・シルヴェストルの骨と皮とでした。顔は熱のために黄色くなり、大きな黒い眼は顔から飛び出しさうになり、肉は全くなくなつて、黄色い干乾びた皮膚と、白い髪と、骨とだけになつてあまりました。

「水を！ 後生だから水を！」と彼は呻きました。かはいさうに、唇はからくに乾いて、その間からはみ出してある舌は、膨れて黒ずんであまりました。

「私が水の中へ少し牛乳をたらしてやると、彼は一升あまりの水を息もせず飲みましたが、また熱がぶり返して来たので、その場に寝ころんで、スリマン山だとか、ダイヤモンドだとか、沙漠だとかいふことを夢中で口走りました。私は彼を天幕の中へつれて来て、大したこともできませんでしたが、できるだけ介抱してやりました。十一時頃になると病人も少ししづまつて来たので、少しやすまうと思つて私は寝ましたが、翌朝、夜明け頃に眼をさまして、薄暗い明りで見ると、シルヴェストル

は瘦せこけた身體で起き直つて、沙漠の方を見つめてあまりました。やがて、朝日が、吾々の前の廣い平原を横きつて、百哩以上も向うにあるスリマン山の一番高い峯を照しました。

「あれだ」と死にかつた男はポルトガル語で叫びました。そして長い瘦せた腕でその方を指しながら「だが私にはもう行けない。誰にだつて行けはしない！」

「それから、彼は急に言葉を切つて、何か決心してゐるやうな様子でしたが、やがて私の方を向いて、「お前さん、お前さんはそこにゐなされるか？ 私は眼がかすんでよく見えないのです。」

「こゝにゐますよ」と私は言ひました。「こゝにゐますから、横になつておやすみなさい。」

「はい」と彼は答へました。「私はすぐにやすみます。ゆつくりと——いつまでもやすめるやうになります。聽いて下さい。私は死にかけているのです。お前さんは私を親切にして下さつた。私はお前さんにこの書物をあげます。多分お前さんは、私と私の下男とを殺してしまつたこの沙漠さへ無事に通ることができれば、あそこへ行けるでせう。」

「かう言ひながら彼は、シャツを手探りして、羚羊の皮でこしらへたポーア人の煙草入れのやうなものを取り出しました。それは細い紐でゆはへてあつたので、彼はそれを解かうとしましたが、解けなかつたので、それを私にわたして「これをといて下さい」と言ひました。私がといてやると、彼はその中から、ぼろ／＼になつた黄色い麻の布をとり出しました。それには藍色で何か書いてありました。そしてこのぼろに一枚の紙が包んでありました。

難し)をして、これを國王の御耳に入れしめ國王の軍隊を派遣せしむべし。若し國王の軍隊が、無事に沙漠と山とを越え、且つ勇敢なるククアナ人とその恐るべき魔法に打ち勝ちなば、國王はソロモン王以來の最も富める王となりたまふべし。ククアナ人の魔法を破るためには多くの僧侶を伴ひゆかるゝがよし。吾は吾自らの眼にて『白き死の神』のうしろにあるソロモンの寶窟に無数のダイヤモンドの貯へあるを見たり。されど、魔法使ひガゴオルの裏切りによりて一物ももち去ること能はざりしのみならず、一命をも持ち歸る能はざるに至りしなり。こゝへ來る者は地圖の案内に従ひ、シバの左の乳房の雪道を辿りて頂上に達すべし。山頂の北側にはソロモンの造れる大道あり、三日にして王宮に達すべし。來る者はガゴオルを殺すべし。さらば。

ジョゼ・ダ・シルヴェストラ

私がこれを読み了つて老いたポルトガル人が臨終に血で書いた地圖の寫しを見せると、二人はあつけにとられてだまつてゐた。

「ずあぶん妙な話ですな」とサー・ヘンリイは言つた。「きつと吾々をからかつておいでなんでせう？」
「さうお考へなさるなら」と私はマツチを消て書物をポケットの中へ藏ながら言つた。「もうこれよしませう」私は、諺をついて得意になつたり、はじめて來た人に、自分の實際やもしない冒險の話をして自慢したりする人間と思はれたくなかつたので、かう言つて、もう出て行かうと思つて起ち上つた。
サー・ヘンリイは、彼の大きな手を私の肩へかけて「まあおかけなさい、コオターメンさん」と言

つた。「ごめん下さい。あなたが吾々をだまさうといふ氣なんか毛頭ないことは百も承知してはゐるのですが、あんまり不思議な話だもんだから信じられなかつたのです。」

「ダーバンへ着いたら、この原文と地圖とを御覽に入れますよ」と私は少し機嫌を直して言つた。といふのは、この人たちが私の言つたことを眞に受けないのも無理がないと思つたからだ。「ですが、あなたの御兄弟のことをまだお話ししませんでしたな。私はあなたの弟様のおともをして行つたジムといふ男を知つてゐたのです。この男は、ククアナの生れで、腕利の獵師で、土人としては大變賢い奴でした。ネザイル様がお出かけになる朝、ジムは私の馬車の側に立つて煙草を切つてゐました。」
「ジム公、こん度の旅はどちらだね？ 象狩りかね？」と私は言ひました。

すると「いゝや、象牙よりもつといゝものを取りにゆくんでさ」と奴は答へました。

「そりや一體何だい？ 金かね？」と私は好奇心を動かしてたづねて見ました。

「いゝや、金よりもつといゝものですよ」と言ひながら奴はにたゞ笑つてゐました。

「私はあんまり根掘り葉掘り聞きたすのは下品に見えろと思つて、それつきり問ふのはやめました。が、どうもわかりませんでした。するとジムは煙草を切りをはつて『旦那』と言ひました。

「私氣がつかずにあると、また『旦那』と言ふのです。」

「何だい？」と私は返事をしました。

「これからダイヤモンドをさがしに行くんです。」

「ダイヤモンド！ それぢやお前方角ちがひぢやないか？ ダイヤモンドなら、探鑛場の方へ行かなくちや。」

「旦那はスリマン山の話をきいたことがあるかい？」

「うん！」

「あそこにダイヤモンドがあるつてことをきいたかい？」

「そんな馬鹿な話もきいたことがある、よジム。」

「それは話ぢやないよ、旦那。わしはあの山へ行つて来て、子供をつれてナタルへ歸つた女を知つてるがね、その女がわしにさう言つたよ——その女はもう死んだだけだね。」

「お前さんの主人は兀鷹の餌食になるにきまつてるぜ、スリマン山なんぞへ行かうとすれば。それから、兀鷹がお前さんのけちな身體でもつまみ食ひしようつて氣を起したら、お前さんだつて矢つ張り同じだよ」と私は言ひました。

「すると彼奴は齒を剥出して笑ひながら『さうかも知れんね、旦那。だが人間でどうせ一度は死ぬんだ。わしはまだ人の行かん處へ自分で行つて見たいよ。この界限にやもう象も種切になつたからね。』
「まあ『蒼白い老人』に咽喉つ首をぎゆつとやられるのを待つてるがいゝさ。こちとらは、その時お前さんがどんな聲を出すか聞いてゐようよ。」

「それから半時間もたつとネヴィル様の馬車は動き出しました。するとジムが走つて歸つて『旦那、

左様なら』と言ひました。『旦那に左様ならも言はずに行きたくなかつたもんですからね。といふのは、ことによると旦那の言ふとほり、わし等はもう南へは歸つて來られねえかも知れませんがな。』

「ほんたうにお前さんの御主人はスリマン山へ行くのかい、ジム、それともお前さんが諺をついてるのかい？」

「ほんたうに行くんですよ」と彼奴は答へました。あの旦那はどうしても財産をこしらへにやならんので、一かばちかダイヤモンドを探しに行つて見るのだと言つてました。」

「ではちよつと待つてくれ、ジム、お前さんの御主人にこの書き附けをもつて行つてくれ。そしてインヤチへ着くまでこれを渡さないやうにしてくれ。インヤチまではこゝからかれこれ百哩だ。」

「承知しました。」

「そこで私は紙片をとり出して、それに『こゝへ來るものは……シバの左の乳房の雪道を辿りて頂上に達すべし、山頂の北側にはソロモンの造れる大道あり』と書きました。」

「さあジム」と私は言ひました。『これを御主人に渡すときに、こゝに書いてある通りになさいと言つてくれ。だが今渡しちやいけないう、あの人が引き返して來て、いろく問はれちや困るからな。では行つといで、もう馬車が見えなくなりかゝつてるから。』

「ジムは此の書き附けをもつて行つてしまひました。私があなたの弟様について知つてゐることはこれだけでございますよ、ヘンリイ様、だが私の氣になるのは——」

「コオターメンさん」とサー・ヘンリーは言った。「私はこれから弟を探しに行くのです。弟のあとをつけてスリマン山まで、そして、必要とあらばその先までも、兎に角弟を見出すか、弟の死んだことをたしかめるかするまではどこまでも行つて見ようと思ふのです。あなた、一つ私と一緒に来ていただけませんか？」

私は前にも言つたやうに思ふが、用心深い、臆病者なので、この勧めを聞いて慄へ上つてしまつた。こんな旅をした日には死ぬにきまつてゐるやうに私には思はれた。それに他の事は兎に角、私にはまだ養つてやらねばならぬ一人息子があつたので、私はその時はまだ死ぬわけには行かなかつたのだ。「ありがたうございますが、私はお断りしたいと思ひます」と私は答へた。「もうすぐ分年もとりましたので私には向ふ見ずなことはできませんのです。そんなところへ行つたら、あのかはいさうなシルヴェストルと同じやうな最期をとげるにきまつてゐますから。それに私は一人息子の面倒を見てやらねばなりませんので、命にかゝるやうなことは致しかねるのです。」

サー・ヘンリーとグッド船長とはがっかりしたやうな顔をした。

「コオターメンさん」とサー・ヘンリーが言つた。「私は裕福な身で、こん度の仕事には一生懸命になつてゐるのです。あなたのお骨折りに對する報酬をどれだけでも言つて下されば、出かける前に前金で差し上げてもいいのです。それに萬一吾々かあなたかに不慮の災難が生じた場合には、あなたの息子さんには然るべき處置を講じておきます。これ程迄にして願ひするのは、吾々があなたに是非とも

行つていたゞきたいからです。それにもし吾々が、あちらへ行つてダイヤモンドを見つけたら、それはあなたとグッド君とで山分けにすることにして下さい。私はほしくありません。だがこの約束は何にもならんでせうから、その代り吾々がとつた象牙にもこの約束は適用します。どうぞ遠慮なくあなたの條件を仰言つて下さい。勿論費用はすべて私の方でもちます。」

「ヘンリー様」と私は言つた。「私はこんな過分な割のいゝ話をまだもちかけられたことがありませんから、私のやうな貧乏な獵師商人には、さう仰言られて見ると一概に鼻の先でおことわりするわけにもありません。しかし、仕事も私がこれまでして来たどんな仕事よりも大物ですから、こいつはゆつくり考へさせて頂きたいと思ひます。ダーバンへ着くまでには何分の御返事をいたします。」

「それでいゝですとも」とサー・ヘンリーは答へた。そこで私は二人に別れをつけて歸り、ずつと以前に死んだシルヴェストルのことやダイヤモンドのことなどを夢に見た。

第二章 ウムボバを雇ふ

喜望岬からダーバンまでは、船の速力や天候の加減で四日かゝることもあれば五日かゝることもある。そのころはまだイースト・ロンドンの自慢の波止場もできてゐなかつたので、そこへ上陸するのに手間がとれたり、正金を積みこんであつて船脚が重くなつてゐるときには、荷船へ荷を下すまでに二十四時間も遅れることがあるのだ。しかしこの日は、吾々はちつとも待たなくてよかつた。といふの

は砂洲にはとりたて、言ふ程の浪もなかつたので、曳船が醜い平底のボートの行列を曳いてすぐにやつて来たからだ。そのボートの中へ荷物は亂暴にはふりこまれるのだ。陶器だらうが、木製の器具だらうが、何でもかまやしないのだ。私は三鞭酒の瓶が四打程こはれて、ボートの底でしゅうく音をたて、沸騰してゐるのを見た。もつたいたい話だ。ケーファー人どももつたいたいと思つたと見えて、まだ壊れない瓶を二つ發見して、首をかいて中味を呑んでゐた。私は船の中から、それは白人のつかふ恐ろしい薬だよと怒鳴つてやつたら、ケーファー人どもは魂消て岸の方へ急いで行つた。その後彼等は三鞭酒の瓶には手も觸れぬことだらうと思ふ。

さて、船がナタルに向けて航海をつづけてゐる間ぢゆう、私はサー・ヘンリー・カーチスの申込みについていろ／＼思案をめぐらしてゐた。二三日の間はそのことについては何も話さないで、いろいろ狩の話をして聞かせた。みんな實際の話ばかりだ。狩をやつてゐる人間には色々不思議な経験があるから諺を吐く必要はないのだ。だがこれはまあ餘談だ。

たうとう、一月のよく晴れた夕方——一月といへばこちらでは一年中で一番暑い月だ——吾々の船はナタルの海岸を過ぎて夕方までにはダーバンの港にはひれさうになつた。イースト・ロンドン一帯の海岸は實に景色がよい。赤い砂丘、廣々とした緑の地域、その間に點在してゐるケーファー族の村落、汀に寄せてゐる白い浪の帯。しかもダーバンに近附くと景色は更に一層よくなつて来る。丘には何千年來の雨で切り開かれた崖に瀧がかゝつてをり、神の手で植ゑられたまゝの草叢の縁は愈々深く

なり、所々に白い家屋が無心の海に向つて笑ひかけ、一點の人間味を添へて自然の絶景を完成しゐる。といふのは、私にはどんなに、景色だつて、人間があなくては、どうも完全だとは思へないのだ。それといふのも私はいつも荒涼たる荒野にはかりあつたので、文明といふもの、有難味を知つてゐたからだらう。エデンの園は人のあない前だつて美しかつたには相違ないが、イヴが歩いてゐたときの方が餘計に美しかつたに相違ないと私は常に思つてゐる。ところで吾々の時間の見當は少々ちがつてゐた。船が港に碇を下すまでに日はもうとつぷりと暮れてゐた。でその晩は酒場へ行かうなんて思つてゐたのもあてがはずれて、吾々は船の食堂で夕食をすますことになつた。

吾々が甲板へひき返して来たときには、既にもう月が昇つて晃々たる光を海や岸に投げ、そのために燈臺の光りも蒼ざめて見える位だつた。實にそれは申し分のない夜だつた。それは南アフリカでなければ見られない、凡ての人の心を妙にしんみりさせる夜だつた。

吾々、即ち、サー・ヘンリー・カーチスとグッド船長と私とは舵輪のそばに立つて、暫くちつとしてゐた。

「さてコオターメンさん」とサー・ヘンリーはしばらくたつてから言つた。「私の御願ひしたことを考へて下さりましたか？」

「さう」とグッド船長はそれにつづけて言つた。「どうですな、コオターメンさん？ ソロモン山ま

で、或はあなたがネヴィルといふ名で知つてゐなされる人のゐるところまで、一緒に行つて下さると大

變有り難いですがなあ。」

私は起ち上つて、返事をする前にパイプから、煙草の灰をはたき落した。私はもう一息といふところまでまだ決心がつかずにゐたのだ。ところが、火のついた煙草が海の中へ落ちてしまはぬうちに、ほんのちよつとした瞬間に私は決心してしまつた。よくさういふことがあるものだ。

「承知しました」と私はまた腰を下しながら言つた。「私は参りませう。それから御免を蒙つて、私が何故お供をすることにきめたかといふわけと、私の條件とを申し上げませう。はじめに私のあなた方に要求する條件から申し上げます。

「先づ第一に、費用は全部そちらでもつていたゞいて、象牙とか、その他値打のあるものが手にはひつたら、それはグッド船長と私とで山分けにしていただきます。

「第二に私は、あなたが旅を思ひとゞまりなさるか、吾々が成功するか、或は不慮の災難で斃れるか、そのいづれかの場合まで、忠實に御用をつとめますから、出發前に五百磅の前渡金をいたゞきたいと思ひます。それから第三に、出立する前に、私が死ぬか、不具者になつた場合には、いまロンドンのガイ病院で醫者の勉強をしてゐる倅のハリイに、五ヶ年間毎年二百磅づゝ支給して下さる契約書を書いておいていたゞきたいと思ひます。五年たてば倅も一人だちができるやうになるでせうから。條件はこれだけでござります。多分こんな蟲のよい條件ではいやと仰言るでせうが。」

「どうしまして」とサー・ヘンリーは答へた。「喜んであなたの條件は承知します。私はこの計畫にす

つかり心をうちこんであるのですから、もつと澤山だつて支拂ひする氣だつたのです。それに、あなたは人の知らない特別のことを知つてをられるのですから。」

「さうですか、ではすつかりお約束はすみましたから、これから私がどうしてお供をする氣になつたか、そのわけを申し上げます。先づ第一に、私はこの四五日の間、あなたがたの様子をよく注意して見てゐましたが、失禮ながら私はあなたがたがすきになりましたのです。かういふ方となら一しよに骨を折つて見てもよいといふ氣になつたのです。このことは、こん度のやうな長い旅をするには大事なことですよ。

「それから、こん度の旅行そのものについては、ヘンリー様にも、グッド様にも、私はざつとくばらんに申し上げますが、私は、スリマン山まで行かうとすれば、まづ生きては歸れまいと思つてゐます。三百年前のシルヴェストラの運命はどうでした。その子孫は二十年前にどんな目にあひました。あなたの弟様はどうです。私は正直に申し上げますが、私どもの運命もこの人たちの運命と同じだらうと思ふのです。」

私はちよつと言葉をきつて二人の顔色を見た。グッド船長は、少しいやな顔をしてゐたが、サー・ヘンリーの顔色は少しも變らなかつた。「一かばちかやつて見るんです。」と彼は言つた。

「私のやうな臆病者が、このやうな冒険をやつて見る氣になつたのをあなたがたは不思議に思はれるでせうが、それには二つの理由があるのです」と私は言葉をつけた。「第一に私は宿命論者です。で

すから、私の壽命はもう定つてゐるので、どこにゐたところで壽命がつけば死んでしまふのだと堅く信じてゐるのです。スリマン山へ行つて殺されるとすれば、もとからさうきまつてゐたので、私のことは神様がちやんときめといて下さつたのだから、私がそれをとやかく心配する必要はないと思ふのです。第二に私は貧乏な人間です。私はこの職業をはじめからもう四十年近くになります、やつと食つてゐるだけです。一體象狩りなどを職業にしてゐる人間の平均の壽命は、職業をはじめから四五年位なものです。ところが私はもう既に普通の人の七倍も長生きしたので、これから生きてゐたところがさう長いことはありません。もし、いま何かの間違ひで私が死んでしまふと、さしづめ倅のハリイを養ふことができなくなります。ところが今度の約束によると五年間は倅を養つていただけます。かういふわけで私は最後の決心をしたのでございます。

「コオターメンさん」と熱心に私に注意してゐたサー・ヘンリーは言つた。「私はあなたの動機を承て、大變あなたが頼もしくなつて來ました。あなたの仰言るやうに、今度の冒険が失敗に了るかどうかは、時がたつて見なければわかりませんが、いづれにしても、私はしまひまでやりとほして見るつもりです。」

「さうですとも」と船長が言葉をはさんだ。「吾々は三人とも危険には慣れてゐますから、今更ら尻込みするわけはありませんよ。」

翌日吾々は上陸した。そして私は、サー・ヘンリーとグッド船長とを、ペレアに私が建て、おいた小舎へ案内した。私はこれを自分の家と呼んでゐたのである。この家には室が三つと臺所があるだけだつた。それに緑色の煉瓦でつくつてあつて、とたん屋根をふいた粗末な家だつたが、庭だけは立派なものだつた。

サー・ヘンリーとグッドとはこの庭の端にある小さい蜜柑林の中に張つた天幕の中で眠つた。蜜柑林の中にはよい香ひの花の咲いた樹もあれば、青い實をつけた樹もあり、黄色く熟した實をつけた樹もあつた。ダーバンでは花と青い果と熟した果とが一度に見られるのだ。しかもこのペレアでは大雨でも降らない限りは蚊も殆んどゐないので、まあ理想的な處だと言へる。

閑話休題、私はいよく出かけるときめたので、行くについての支度にとりかゝつた。先づ第一に萬一の場合のために倅へ渡す證書をサー・ヘンリーから貰つた。ヘンリーは外國人ではあり、處理すべき財産は海外にあるので、この手續きはちよつと面倒だつたが、ある辯護士の助けでうまく行つた。この辯護士はこの仕事で二十磅せしめたが、随分ぼろい仕事もあるものだ。私は五百磅の小切手を受けとつた。

それがすむと私はサー・ヘンリーのために馬車を一臺と牛を二頭と買ひ求めた。馬車は頑丈な鐵の車軸のついた長さ二十二呎のものであつた。この馬車は半幌馬車といはれてゐるものだつた。といふのは車體の後半部だけに幌がついてゐたからだ。そしてこの後半部には二人寝られるだけの寢臺がついてをり、銃をのせる臺などがこしらへてあつて、中々便利にできてゐた。私は百二十五磅でこ

れを買つたのだが安く買へたと思つた。

それから私は美しい二十頭のズル牛を一組買つた。普通一組は十六頭なのだが、私は萬一の用心に四頭だけ餘分のを買つておいたのだ。このズル牛は普通のアフリカ牛の半分位の大きさだが、アフリカ牛の死ぬやうな處へ行つてもこの牛は死なないのと、脚が疾いので重寶なのである。それにこの牛は、草原などを歩くときに、よく牛の命を奪ふ血尿病に對する抵抗力が強く、また肺炎の一種である胸の病に對して免疫性をもつてゐるのだ。これは牛の尻尾に少し傷をつけて、病氣にかつた牛の肺をそこへく、りつけ、軽い病氣を局部に起させて、免疫にするのである。このために尻尾は落ちてしまふ。蠅の多いこの地方で牛の尻尾を落してしまふのは慘酷なやうだが、そのために一命が助かるのだから、まあ牛の方でも我慢しなければなるまい。

その次は食料品と醫藥との問題だが、これはあまりかさばらないで、しかも必要なものに事を缺かないやうにするに苦心があるのだ。幸にもグッドは少し醫者の心得があることがわかつた。免狀こそもつてゐないが、以前にこの方面の勉強をしたことがあるので、ちよつと駆出しの醫者などはない程此方面の知識をもつてをり、旅行用の醫藥と、醫療用の道具を一揃ひもつてゐた。

最後にのこつた問題は武器と傭人とだが、武器は必要なものはすつかり取り揃へて、サー・ヘンリーが英國からもつて來たので心配しなくてもよかつた。傭人はよく相談した結果、五人だけつれてゆくことに決めた。即ち御者が一人、案内者が一人、それから從者が三人といふことにした。

御者と案内者とは難なく見つかつた。二人ともズル人で、一人はゴザと言ひ、一人はトムと言つた。だが從者を探すにはすつと骨が折れた。といふのは仕事の仕事だから、吾々の一命は從者のよしあしによる場合もあらう。だから、餘程信用のおける、勇敢な奴でなければならぬ。やつとのこと、私は二人だけは工面した。一人はフェントフォードといふホットントト人で、一人はキヴァといふ小男のズル人だつた。キヴァは英語が完全に話せた。フェントフォードは私は前から知つてゐたが、この男は獸を係蹄にかける名人で、この道にかけては私はこれ程上手な奴にまだ會つたことがない。それに、革鞭のやうに頑丈で、疲れるといふことを知らぬ男だつた。しかしこの男にはズル人に共通の一つの缺點があつた。それは飲むといふことだつた。近所に徳利があつたら、もうこの男は少しも信用はできなかつた。だが、吾々がこれから行くところは酒屋などのありつこのないところだから、この點は大して問題でなかつたのだ。

二人だけ從者が見つかつたが、いま一人がどうしても見附からぬので、吾々は、途中でいゝのが見つかるかもしれないと多寡をく、つて二人だけつれて出發することに決めた。ところが愈々出發と決めた日の前日になつて、ズル人のキヴァが、一人のケーファー人が私に會ひたいといつて來てゐることを知らして來た。その時吾々は恰度食事中だつたので、食事がすむとキヴァにその男をつれて來いと命じた。すると間もなく、脊の高い、人品のよい三十位の、ズル人にしては色の薄黒い男がはひつて來た。私はしばらく知らん顔をしてゐた。何故といふと、ズル人に會つてすぐに話をはじめたりしよ

ものなら、彼等はすつかりこちらを見縊つてしまふからだ。しかし私はこの男は輪人だといふことに気がついた。輪人といふのは頭に脂肪で磨いたゴムの輪をはめてゐる人のことで、一定の年齢や身分に達したズル人は普通さうするやうになつてゐるのである。それから私はこの男はどこかで見覚えがあるやうに思つた。

「た、と」と私はたうとう口をきつた。「お前の名は何といふんだね？」

「ウムボバと言ひます」と彼は低いどつしりした聲で答へた。

「どこかで見たことがあるやうだね。」

「え、リットル・ハンドで、戦争のはじまる前のお目にかゝりました。」

それで私は思ひ出した。私は、あの不運なズル戦争のときに、ロード・チエルムスフォードの指揮官の一人として従軍し、運よく生き残つてゐるのだ。そのことは思ひ出しても悲しくなるから書かないことにする。だがこの戦争のはじまる前のお目に私はこの男と話をしたことがある。この男は土人の援軍の小さい部隊の長をしてゐたが、味方の軍が危いといふ意見を私につげた。その當時は、私はそんなことはだまつて、えらい方にまかせておけと言つたものだが、後になつて、彼の言葉に思ひあつたところがあつた。

「成る程、わしもおぼえてゐる」と私は言つた。「で用事は何だ？」

「用事と申しますのはね、マクマザン様」と彼は言つた。ケーファー人は私をマクマザンと呼んでゐ

たのだ。「あなたは、外國からお出でになつたかたのお供をして、ずっと北の方へ冒険にいらつしやるとき、ましたが、それはほんたうでござりますか？」

「ほんたうだ。」

「ルカンガ河の方までいらつしやると聞きましたが、それもほんたうでございませうか？」

「どうして吾々の行く先なんか訊くのだい？ お前に何か關係があるのか？」と私は疑はしさうに答へた。といふのは、吾々の旅行の目的は絶対秘密にしてあつたからだ。

「それはね、白人の旦那、ほんたうに、旦那がそんなとこまでいらつしやるなら、私もおともがしたいと思ひまして。」

「お前は少しかしてゐるな」と私は言つた。「お前の言ひかたは輕はずみだ。そんなもの、言ひ方をするものぢやない。一體お前は何かといふ者で、どこの村のものだ。それから先へ言はなくちや、吾々は誰と話をしてゐるのかわからんぢやないか？」

「私はウムボバと申します。ズル人ではありませんが、ほんたうのズル人とも言へません。私の家はずっと北の方にあるのですが、ズル人が千年も前にこちらへ移つて来たときに、あとに残されたのでございませう。私には村といふものはありません。何年もの間方々を漂流つて、子供の時分にズルの國へ来たのです。そしてヌカバコシ聯隊でセテリヨの部下になり、アンスロポカーシ隊長に使はれて戦争の術を教はりましたが、その後、ズルの國を逃げ出して、白人の様子を見たいためにナタルへ來まし

た。それから戦争ではセテワヨを向うにして戦つたこともありすが、それからはずつとナタルで仕事をしてをりました。しかしそれももうあきて来まして、また北の方へ歸りたくなつたのでございませう。どうしてもこの土地は私には向きません。私は金はいりません。しかし私は勇敢な男ですから、おともをさして、食べさせていたゞく値打ちはあると思ひます」

私はこの男やこの男の話しぶりが、どうもよくわからなかつた。話の模様では諷をいつてゐるのではないやうだが、金はいらぬから行つてくれなんていふところは、普通のズル人とあまりかはずつてゐるので、少し信用がおけなくなつた。困つた擧句、私は、彼の話をサー・ヘンリーとグッドとに通譯して二人の意見を求めた。

サー・ヘンリーは、私に向つて、ウムボバを起ち上らせてくれと言つた。ウムボバは私の言ふとほりにした。そして、それと同時に着てゐた長い軍服を身體からするりと下り落して、腰に巻いてゐる腰帶と、頸にかけてゐる獅子の爪の頸飾りとだけになつた。私はこれ程立派な土人を見たことがない。丈は六呎、三寸もあり、それに應じて肩幅も廣く、身體の恰好も伸々よく整つて居り、色は、淺黒いといふ位の程度であまり黒くなかつた。サー・ヘンリーは彼のそばへ歩みよつて、誇りに満ちた、美しい彼の顔をしげしげと見た。

「實によく揃つてゐますなあ」とグッドは言つた。「二人ともどつちが大きいとも言へませぬ。」「私はお前の顔が氣に入つたよ。ウムボバ、だからお前を私の從者にしてあげる」とサー・ヘンリー

に英語で言つた。

ウムボバはわかつたと見えてズル語で「有り難うございませぬ」と答へた。そして、この白人の體格と胸幅とをちらりと見て附け足した。「私とあなたとは二人とも男の中の男ですな。」

第四章 象 狩 り

ルカンガ河とカルクエ河との交流點に近いシタンダ村までダーバンから千哩以上もある。その長い旅の間に起つた出来事を私は一々こゝで話さうとは思はない。この間の旅の最後の三百哩程は、吾々は徒歩で行かねばならなかつた。といふのは、その地方にはツエツエといふ恐ろしい蠅があるからだ。この蠅にさされるやと驢馬と人間と以外の動物は一たまりもなく死んでしまふのだ。

吾々は一月の末にダーバンを出發して、シタンダ村の近くに天幕を張つたのは五月の第二週目であつた。途中で遭遇した吾々の冒険は種々様々なものであつたが、それはアフリカの獵師なら誰でも遭遇するものだから、讀者に退屈であらうと思つてこゝでは一切書かないことにする。併したゞ一つの例外があつたから、それだけ書くことにしようと思ふ。

ロベンガラといふ王の治めてゐるマタベレ國の、商業地としては一番はづれにあるインヤチで、吾は乗り心地のよい馬車に名残をしい別れをつげた。ダーバンで買つた二十頭の美しい牛の中で、この時まで生き残つてゐたのは十二頭だけであつた。一頭はコブラといふ毒蛇に噛まれて死に、三頭は

榮養不良と水の缺乏のために死に、一頭は道に迷つて行方が知れなくなり、あとの三頭はチューリップといふ毒草を食つて死んでしまつたのだ。チューリップを食つた、めにあとの五頭も病氣になつたが、チューリップの葉を煎じて服ませたので命をとりとめたのである。これは手後れにならぬうちに服ませると、よくきく解毒劑なのだ。

馬車と牛とは、御者及び案内者として雇つて来たゴザとトムとに見張りをたのみ、こんな處まで傳道に来てゐたスコットランドの宣教師に萬事を托しておいた。それから、ウムボバとキヴァとフエンとフオーゲルと、此地で雇つた六人の人足とをつれて、吾々は徒歩で、無鐵砲な冒險の旅に向つた。私はよく覺えてゐるが、こゝを出發する時は、皆だまりこくつてゐた。皆の者は、今別れた牛と馬車とが再び見られるかどうかを氣にしてゐたのだ。私は萬々そんなことはあるまいと覺悟してゐた。しばらく無言のまゝで歩いてゐるうちに、先頭にたつてゐたウムボバがズルの歌を歌ひ出した。それは勇ましい人々が、生活がいやになり、平凡な世の中に飽きて、何か新しいものを見つけろか、それとも死んで終ふか、どちらかだと覺悟して、荒野の中へ旅立つと、荒野の向うには美しい處があつて、そこには美しい女や、肥つた牛や、狩の獲物や、殺す相手の敵などが澤山あつたといふ歌であつた。吾々一同はみんな笑ひ出した。そしてさいきよしと勇み立つた。ウムボバは實に愉快な蠻人で、時々ちつと考へこむ癖があるが、その時を除くと、吾々を元氣づけてくれるこつをよくのみこんでゐた。吾々はこの男が非常に好きになつた。

さて、これから一つだけ冒險の話しよう。といふのは私は狩の話が好きでたまらないからである。

インヤチから半月ばかり旅をつゞけて行つた時、吾々は水の豊富な、とりわけ美しい林のある地帯を通つた。小山の上には象の大好きなマチャベルの樹が茂つてゐて、象の歩きまはつた足跡がそこらぢうにあるのみならず、マチャベルの樹が處々折れたり、根こぎになつたりしてゐた。象がこの邊に出没するまぎれもない證據だ。

或る日の夕方、吾々は、一日長い旅をして来たあとで、非常に景色のよい處へ来た。雜木林におほはれた丘の麓に、水の涸れた河床があつた。この河床には處々に水晶のやうな美しい水だまりがあつて、そのまはりには色々な獸の蹄のあとがのこつてゐた。この丘の正面は、公園のやうな野原があつて、色々な樹が茂つてをり、周圍は道もない雜木林になつてゐた。

吾々が此の河床の道へはひつてゆくと、突然丈の高い麒麟の一隊が、妙な足どりで、尻尾を背中の上へたて、四竹のやうな聲音をさせてやつて来た。吾々のあるところから三百碼もはなれてゐるので、射つことはできないのだが、先頭にたつて、彈丸をこめたエキスブレス銃をもつて歩いてゐたグッドは、もう矢も楯もたまらなくなつて鐵砲をとつて、一番あとから歩いてゐた若い雌に向つて發砲した。どうしたはずみか、彈丸は、ちやうど頭の眞後へ命中して、脊柱を粉碎し、その麒麟はまるで兎のやうに頭をぐるぐる廻しながら倒れた。

「畜生！」とグッドは行つた。どうもこの人は少し昂奮して來ると言葉使ひがわるくなるのは困つたものだ。海軍生活をやつてゐる時にさういふ癖がついてしまつたのだ。「畜生つ！ たうとう殺しちまつた。」

「よう、ブウグワン」とケーファー人どもは怒鳴つた。「よう、よう。」

ブウグワンといふのは硝子の眼玉といふ意味で、彼等はグッドが眼鏡をかけてゐるので、彼のことゝをかう呼んでゐたのだ。

「よう、ブウグワン」とサー・ヘンリーと私とは眞似をして言つた。その日から、グッドは少くも、ケーファー人の仲間では射撃の能手といふ評判をとつた。その實彼は射撃は極く下手だったが、この日の殊動に免じて、その後彼が射ち損つたときには、それを帳消しにしてやつた。

人足どもに、この麒麟の肉の、よいところを、切り取らせるやうに言つておいて、吾々は、とある水だまりから百碼ばかり離れたところまで小屋をこしらへに行つた。それは次の木を切つて、それを積み重ねて圓形の壁をつくり、その壁に圍まれた中の地面を掃除して、その中央に、若し乾いたタムブキの葉が手にはひればそれで床をこしらへ、一ヶ所か二ヶ所に火を焚けばよいのだ。

小屋が出来上つた時分には月は空に昇り、麒麟のテキヤ、骨の髓を焼いたのなどで夕食の準備ができた。その時の麒麟の髓のうまかつたこと！ 噛みくだくには少し骨が折れたが、私は、象の心臓を別にすると麒麟の髓くらゐ甘い料理をまたと知らない。しかもその翌日は象の心臓も食べられたの

だ。吾々は月明りで簡単な食事をすまし、折々手をやすめてはグッドにお禮を言つた。

食事がすむと吾々は火を圍んで煙草をふかしたり雑談をしたりした。それは實に珍妙な圖であつたに相違ない。短い、眞直に立つた私の胡麻鹽の髪と、サー・ヘンリーの少し伸びすぎた黄色い縮れ毛とは好箇の對照だつた。とりわけ私は瘡せて、ちんちくりんで、色が淺黒いのに、ヘンリーは脊が高くて、胸幅が廣くて、肥つてゐるといふ違ひやうだつた。しかし三人のうちで、この場合、一番妙な恰好をしてゐたのはジョン・グッド船長であつた。彼が革袋の上に坐つてゐる様子はどう見ても文明國で愉快な一日の獵を了へて家へ歸つて來たといふ風であつた。それ程彼は身のまはりをきれいに、小じんまりとしてゐたのだ。彼はスコッチの獵服を着け、對の帽子をかぶり、きれいなゲートルを穿いてゐた。顔はいつものやうにきれいに剃つて、眼鏡も義齒もきちんとしてゐた。こんな荒野の中で、これ程身なりをきちんとしてゐる人を私は見たことがない。カラーさへちやんとかはりをもつて來てゐて、新しいのをつけてゐた。

私がそれを驚くと彼は無邪氣に答へた。「こんなものは重いものぢやないですか。私はいつも紳士らしくしてゐたいんですよ。」あ、彼がこの先どんな目にあふか、どんなものを着なければならなくなるかをこの時に知つてゐたら！

吾々三人は美しい月光を浴びて雑談をしながら、數碼はなれたところで、羚羊の角でこしらへた口のついたパイプをくはへてダツカをふかしてゐるケーファー人どもを見てゐた。彼等はそのうちに

グツカに酔つて、次々に毛布にくるまつてごろり／＼と横になつて眠つてしまつた。たゞウンボバだけは少し一同から離れて、頬杖をついて何かちつと考へこんでゐた。彼はあまり他の連中と一緒にないことに私は気がついた。

まもなく、吾々の後の草叢の中で「ウー、ウー」といふ高い唸り聲が聞えた。「ライオンだ！」と私は言つた。そして吾々は起き直つて耳を傾けた。かと思ふと百碼ばかりはなれた水溜りの方から、鋭い象の鳴き聲が聞えた。「象だ！象だ！」とケーファー人どもは囁きあつた。それから數分間たつと、吾々は大きな黒いものが、次々に水たまりの方から草叢の方へのご／＼動いてゆくのを見た。グツドは、それを殺したさに跳び上つた。恐らく彼は象を殺すのは麒麟を射つ位雑作のないものだと思つてゐたのだらう。私は彼の銃をつかんで彼を坐らせた。

「駄目だ」と私は低聲で言つた。「通り過ぎさしておきなさい。」

「どうも此處は獲物の樂園らしいな。一日か二日とまつて少し狩をやつて見るかな」とやがてサー・ヘンリーが言つた。

私は少々驚いた。といふのはサー・ヘンリーはこれまでいつも旅を急いでゐて、わけでも、インヤチで、二年前にネヴィルといふ英國人が馬車を賣つて奥地の方へはひりこんだといふことを確かめてからは、餘計と急いでゐたのに、その彼がこんなことを言ひ出したからだ。きつと彼の狩獵本能が一瞬彼を壓倒したのだらうと私は思つた。

グツドはこれをきいて喜んで跳び上つた。といふのは彼はこの象に一發ずどんと喰らはしてやりたくて堪らなかつたからだ。實をいふと私も同じだつた。こんな象の群を見て、一發もお見舞せずむざむざ逃がしてしまつては私の良心が承知しないからだ。

「そりやい、ですな。」と私は言つた。「吾々は少し骨休めをする必要があると私は思ひますね。で今はもう寝ませう。明日は夜明け前に起きて、奴等が草を食つてゐて、まだ動き出さない前に襲はねばなりませんからね。」

二人とも私に同意したので吾々は早速準備にとりかゝつた。グツドは服を脱いで塵を拂ひ、眼鏡と義齒を外してツボンのポケットへしまひ、それを藪にあてないやうに、彼の敷布の隅つこの下へ入れた。サー・ヘンリーと私とはもつと簡単な準備で満足して、吾々はめい／＼毛布にくるまり、夢も見ずにぐつすり熟睡した。

突然、水溜りの方にあつて、何かひどく格闘してゐるやうな物音がきこえ、それにつゞいて、つづけさまに恐ろしい呻り聲が聞えた。その聲が何の聲であるかは聞き誤りやうがなかつた。あんな聲を出すものはライオンより外にないからだ。吾々はみな跳び起きて水溜りの方を見た。するとその方に、黒いやうな黄色いやうなごたくした塊りが、藻掻きながら吾々の方へ進んで來た。吾々は銃をとり上げ、そつと毛皮でこしらへた靴を穿いて、小屋を出てその方へ駆け寄つた。この時には、もう塊りは倒れてしまつて、地べたを上になり下になりしながらころげまはつてゐたが、吾々がそこまで

ゆくと、それもやんで、靜かにその場に横はつてゐた。

吾々はその塊りの正體を見届けた。草原の上に一匹の羚羊が、死んで横はつてゐた。そして、その羚羊の角につきさ、れたまゝ、黒い鬚の素晴らしいライオンがこれも矢張り死んでゐた。羚羊が水を飲みにやつて來る所をライオンが待ち伏せてゐて、羚羊が水を飲んでゐるところへ跳びかゝつていつて、鋭い角で突き刺され、それから格闘がはじまつて共倒れになつたのに相違ない。前にも私はかういふ光景を見たことがある。

吾々は死んだ二つの獸をよくしらべてから、すぐにケーファー人どもを呼んで、みんなでその死骸を小屋まで曳きすつてゆき、それから夜明けまで、もう眼を醒ますことなしに眠つた。

夜が明けるとすぐに吾々は起き上つて戦闘準備にとりかゝつた。吾々はてんで銃をもち、薄い冷し紅茶のはひつた大きな水筒を用意した。そして少しばかり朝食をかきこんで、吾々はウンポバとキバとフェントフォーゲルとをつれて出かけた。ほかのケーファー人どもは後にのこしてライオンと羚羊との皮をむいて、羚羊の肉を切つておくやうに命じた。

大きな象の足跡を見出すのは容易であつた。フェントフォーゲルはこの足跡を見て、象の群は二十頭で大部分は成長した牡だと言つた。だが、この象の群は、夜のうちにどつかへ移つてしまつたのだから、吾々が、樹の葉や樹皮についてゐる傷で、象の近くまで來たのを知つたときはもう九時で、既に昏い日がかんく照つてゐた。

やがて吾々は件の象の群が、朝の食事を終へて、大きな耳朶をぶら／＼させながら、窪地に立つてゐるのを見つけた。その数はフェントフォーゲルが言つたやうに二三十頭であつた。それは實に素晴らしい光景であつた。といふのは、彼等は吾々のあるところから二百碼位しかはなれてゐなかつたからだ。私は風向きをしらべらるために一握りの枯草をつかんでそれを空へ投げて見た。若し風が向うの方へ吹いてゐると、象の群は吾々が鐵砲を放つことができるやうになるまでに逃げてしまふことを私は知つてゐたのだ。ところが風はい、鹽梅に向うからこちらへ吹いてくることがわかつたので、吾々は還音をしのばせて言つて進み、樹蔭で身體をかくすことができたお蔭で、巨獸の群から四十碼位のところまで近づくことができた。ちやうど吾々の眞正面に三頭の兎な牡が立つてゐた。そのうちの一つの象の牙は素晴らしく大きなものだつた。私は他の者に向つて、中央のを射つと囁いた。サー・ヘンリーは左のを受持つことにし、グッドは大きな牙をもつた奴をねらうことにした。

「さあ」と私は囁いた。

ズドン！ズドン！ズドン！と三つの銃口から一齊に彈丸は飛んでいつた。するとサー・ヘンリーの象は、心臟を射貫かれて、ハムマーのやうに倒れた。私の象は膝をついたので、死ぬの知らんと思つてゐると、すぐに起き上つて、霧らに私の眼の前を通り過ぎたので、私は第二の彈丸を肋骨のあたりへ射ちこんだ。すると象はこの一撃でころりと倒れたので、私は急いで二發彈丸をこめて象のそばへ走つてゆき、象の腦天を射抜いてやつたので、彼はもう藻掻くのをやめてしまつた。それ

から私はグッドがあの大きな牡の象をどうしてあるかと思つて振り返つた。私が自分の象にとめの一發を射つてあるときに、グッドの象が怒つて鳴いてゐるのを聞いたからだ。グッドのところへ行つて見ると、彼はひどく昂奮してゐた。彼の象は彈丸を受けると、向き直つて、射撃者の方へ跳びかかり、グッドが逃げるひまもないうちに、彼の前を通り過ぎて、吾々の夜營の天幕の方へ盲滅法にかけ行つたのだ。一方象の群はひどく驚いて、それと反対の方へ逃げ出したのであつた。

暫くの間吾々はどちらを追ひかけようかとためらつてゐたが、遂に象の群の方を追ふことに決めた。象を追跡する位たやすいことはない。正にそれは車の通つたあとをつけてゆくやうなもので、象があつて、逃げて行つたあとは、雜木林がまるで草原のやうに蹂躪られてゐるからだ。

併し、あとをつけること、追ひつくこと、は別問題だ。吾々は焼けつくやうな日に照らされて、二時間以上もかゝつて、やつと彼等を發見したのであつた。一頭の牡だけを除いて象の群は一つ處に集つて立つてゐた。何だかそはくして、危険に注意してゐるらしかつた。一頭だけは、この群から五十碼ほど離れたところに、番兵の役目をしてたつてゐた。そこから吾々のところまでは六十碼位であつた。この上近づいてゆけばこの番兵は、吾々の姿を見るか、嗅きつけるかして、きつとあとの象の群は逃げ出すに相違ない。それに地面は平坦で身をかくす場所もなく、その上、吾々はこの番兵をしてる牡の象がひどく氣に入つたので、私が低聲で合圖をして此の象を射つことにした。三發の彈丸に射たれて、この象はどしんとその場に倒れて死んでしまつた。すると象の群はまた逃げ出した。

が、彼等にとつて氣の毒なことには、百碼ばかり進むと、一條の乾いた水路があつて、その岸はけはしい絶壁になつてゐた。象の群はその中へ跳びこんだのだ。吾々が崖の上まで辿りついた時には、彼等は、ひどく狼狽して向う岸へ上らうとあせつてゐた。彼等がきいゝ鳴きながら、先を争つて逃げてゆくさまは人間そっくりであつた。吾々は好機逸すべからずと、できるだけ素速く彈丸をこめて、つゞけざまに射ち、立るに五頭を射殺してしまつた。彼等が向う岸へ上るのを斷念して、水路の下の方へ一目散に逃げ出しさへしなかつたら、吾々は塵殺しにすることもできたらうと思ふ。だが吾々はひどく疲れてもゐたし、あまり澤山殺すのも嫌になつた。一日の獲物として、象八頭といへばさう貧弱でもないのだから。

そこで、吾々はしばらく休憩して、ケーファア人どもに、死んだ象の二頭の心臓を切りとらせ、明日は人足どもに象牙を切らせようと心で決めながら、大満足で歸路に着いた。

グッドが頭分の象に傷を負はしたあたりを通り過ぎたとき、吾々は大羚羊の群に出會つた。併し、食物はもう澤山あるので、射たなかつた。彼等は吾々の横を通り過ぎて、百碼ばかりうしろの方にある小さい雜木林のところまでゆくと立ち停つて、くるりとこちらを向いて吾々を見てゐた。グッドはまだ大羚羊をそばで見ることがなかつたので、それが見たくてたまらず、銃をウムボバに渡してキツアと二人で雜木林の方へ歩いて行つた。吾々はその場に腰を下して、休みながら待つてゐた。陽は雲を血潮のやうに染めて西に没するところであつた。サー・ヘンライと私はこの美景に感歎久

しうしてゐた。その時突然象の鳴き聲が聞えた。そして、夕日を浴びた巨獣の姿が體軀をもちあげ、尾を上にあげながら突進して來るのが見えた。それは前にグッドに傷つけられた象だった。次の瞬間に、吾々の眼には別のものが見えた。それは、グッドとキヴァとが、この負傷した巨獣に追はれながら一目散にこちらへ逃げて來たのだ。しばらくの間吾々は鐵砲を射つことをし得なかつた、といふのは射てば彈丸がこの二人のどちらかの身體にあたりはしないかとおそれたのだ。ついでに恐るべきことが起つた。グッドが文明人の身だしなみの犠牲になつて倒れたのだ。彼がみんなのものと同じやうに、ツボンやゲートルなどにかまはず、フランネルの獵服を着て毛皮の靴を穿いてをれば何でもなかつたのだが、さうでなかつたので、この死に物狂ひの競走にあつて、ツボンが脚にもつれ、乾草で磨いた靴がこつて、吾々から六十碼位のところまで來たときに、荒れ狂ふ象のすぐ前で彼は倒れてしまつたのだ。

吾々はあつと溜息を洩らした。もう駄目だと思つたからだ。そしてできるだけ速く彼の方へ駆出した。それから三秒の間に萬事終つた。しかしその終りかたは吾々の想像どほりではなかつた。勇敢なキヴァは主人が倒れたのを見て、くると向きなほり、槍を振つて象の胴體をすぶりと突き刺した。巨獣は苦悶の叫びをあげながら、かはいさうなキヴァを、鼻で巻いて地べたに投げつけ、彼の胴のうへへ大きな脚をのせて、きりつと踏みしめたかと思ふと、キヴァの身體は眞つ二つにちぎれてしまつた。

吾々は恐ろしさに狂氣のやうになつて、つゞけざまに發砲したので、たうとう象はキヴァの屍體の破片の上にとどまりと倒れてしまつた。

グッドは起ち上がつて、一命をすて、彼の命を救つてくれた勇敢なズルの少年の屍體の上で手をあはせて感謝した。私もさすがに胸が迫つて、咽喉に塊りができたやうな氣がした。ウンボバは巨獣の屍體と、かはいさうなキヴァの切斷された屍體とを眺めながら言つた。

「あゝ、こいつは死んだ。だが男らしい死に方だつた！」

第五章 沙漠に向ふ

吾々は都合五頭の象を殺したわけだ。それから牙を切りとつて、天幕へ運び、遠くから見てもわかるやうに、それを注意ぶかく大木の根元へ埋めるのに二日かゝつた。それは實に素晴らしい象牙だつた。一本平均四十封度から五十封度あつた。私はまだこんな立派な象牙を見たことがない。キヴァを殺した巨象の牙と來たら、一對で百七十封度はあるだらうと思はれた。

キヴァの屍體は、彼の道中の武器であつた槍と、もに丁寧に埋めてやつて、吾々は、無事に歸つて來て埋めておいた象牙を掘りだすことができればよいがと考へながら、三日目に、また旅をはじめた。途中で色々な冒険もあつたが、それはすつかり省略する。兎に角吾々は格別道にも迷はずにルカンガ河の近くにあるシタンダ村に着いた。これから、吾々のほんたうの遠征がはじまるのだ。私はこゝへ

着いたときのことを今でもよくおぼえてゐる。右には、こゝかしこに土人の家が散在して居り、それには石造の牛小舎が附屬して居り、河の側には、少しばかりの耕地があつた。その向うには乾いた河床がうね／＼と匍つてゐて、その中には丈の高い草が生えてをり、その上を小さい獸類がうろつてゐた。左手には廣漠たる沙漠が廣がつてゐた。こゝがちやうど肥沃な土地の外れらしい。どんな自然の原因によつて、こんなにしぬけに土壌が變化したのかわからないが、兎に角ひどい變化である。恰度吾々の天幕を張つた下に小川が流れてゐて、そのすつと彼方に石の坂道がある。二十年前に、かはいさうなシルゲエトルがソロモン山の探險に失敗して降りて來るのを見たのはこの阪だ。この勾配の先から、カローといふ一種の灌木の一ぱい生えた水のない沙漠がはじまつてゐるのだ。吾々が天幕を張つた時はもう夕刻で、太陽は沙漠の中へ沈みつゝあつた。グッドに監督を頼んでおいて、私はサー・ヘンリーと二人で、向うの勾配の頂きまで歩いてゆき、沙漠の彼方を見渡した。空は清く澄んでゐたので吾々は、遙か彼方に、ところ／＼白い帽子をかぶつたスリマン山の薄い藍色の輪郭を見ることができた。

「あれがソロモン山の障壁ですよ」と私は言つた。「けれどあそこまで行けるかどうかは神様にしかわかりませんがね。」

「弟はあそこにあるのですね。若しあれがあるとすれば、兎に角あれのあるところまで行けるわけですね」とサー・ヘンリーは、この人に特有の落ちついた口調で言つた。

「たとよいのですがね」と答へながら、私がひき返さうとすると、吾々のそばに誰かもう一人立つてゐた。ウンボバが矢張り吾々と同じやうに遠くの山を眺めながら立つてゐたのだ。

ウンボバは私が彼のあることに氣がついたのを見て、サー・ヘンリーに向つて話しかけた。

「あなたはあそこまで行くつもりなんですか？」と彼は、身の廣い槍で山の方を指しながら言つた。私は、どうして御主人に向つて、そんな親しき口をきくのだと鋭く詰つてやつた。するとウンボバは靜かに笑ひながら言つた。

「私だつて、あの方と同じ身分かも知れないぢやありませんか？ あの人はずつと尊い家柄の人でせう。あの人の大きな身體と眼とでわかりますよ。ところが私だつてさうかも知れないぢやありませんか？ 少くも私だつて身體は大きいでせう。マクマザンの旦那、どうぞ私の言ふことを向うの旦那に傳へて下さい。私はあの旦那とあなたと二人ともに話したいのだから。」

私はケーファー人からこんな對等な物の言ひ方をされた事はないので、腹がたつたが、それでも妙に彼の言葉には私を動かす力があつたし、それに、何を言ひたいのか知りたくもあつたので、私は、それをサー・ヘンリーに通譯し、ついでに、この男は實に無禮な奴で、亂暴極まる物の言ひ方をしてゐると附け加へた。

「左様、自分はおそまで行くつもりだ」とサー・ヘンリーは答へた。

「沙漠は廣くて水がありませんよ。山は高く雪が一ぱいですよ。山のむかうの日の沈むところには

何かあるか知つてゐる者はないのですよ。どうしてあなたはそこへ行きます、それから何のために行くのです？」

また私は通譯した。

「あの男にかう言つて下さい」とサー・ヘンリーは答へた。「自分の兄弟があそこへ行つてゐるので、それを探しに行くんだと。」

「さうでせう。道であつたホツテントット人が、二年前に一人の白人が、一人の獵師を従者につれてあの山の方へ行つたつきり、歸つて來ないと言つてましたよ。」

「どうしてそれがわしの弟だつてことがわかつたんだね？」とサー・ヘンリーは訊ねた。

「私や知りませんが、そのホツテントット人が、その白人は、あなたと同じやうな眼をして、黒い髪を生やしてゐたと言つてゐました。それに、その人は、従者の名はジムと言つて、ベクアナの獵師で、着物を着てゐたと言つてゐました。」

「ぢやまちがひつこはない」と私は言つた。「わしはジムはよく知つてゐるから。」

サー・ヘンリーは點頭いて言つた。「それにちがひない。ジョオジは一旦かうと決めたら何でもやる男だつた。子供の時からいつもさうだつた。スリマン山を越えたいと思つたら、途中で何か故障が起らん限りは、越したに違ひない。だから吾々は山の彼方まで行つて、弟を探さなくちやならん。」

ウンボバは、英語の話はあまりできなかつたが、英語を聞くことはできた。

「遠い旅ですよ」と彼は口を挾んだ。

「さうだ」とサー・ヘンリーは答へた。「遠いには遠いが、人間がやらうと思つてやれない旅はない。人間にできないつてことはないよ、ウンボバ。人間に登れない山つてないよ。越せない沙漠つてないよ。愛に導かれて、命をすて、かゝれば、何だつて人間にできないことはない。」

私はそれを通譯した。

「えらい」とウンボバは答へた。「あなたの口によく似合つた言葉です。あなたの仰言る通りですよ。命なんて何物ですか？ 命なんて羽毛のやうなものぢやありませんか。風のまに／＼吹きとばされる草の實のやうなものです。どうせ人間は一度は死ななくちやなりません。まかりまちがつたつて、少しばかり早く死ぬといふだけです。私は、途中でへたばつてしまふまでは、沙漠をこえて山の向うまであなたについて行きます。」

彼はしばらく言葉をきつたが、それからズル人に特有の雄辯を揮つて滔々と語り出した。その話には随分無駄な反復もあつたが、この民族にも詩的本能と、智力とが無いではないといふことを示してゐた。

「命とは何ですか？ 物識りで、世界の秘密も、星の世界も、星の向うにある世界も知つてゐなされる白人の方々、教へて下さい。生命の秘密を教へて下さい。生命といふものは何處から來て何處へ行くのです？」

「あなた方には返事ができませんね。あなた方は御存じないのです。聞きなさい。私が答へませう。吾々は闇の中から来て闇の中へ行くのです。夜、嵐に吹かれて飛んで来た鳥のやうに、吾々はどこからともなく飛んで来たのです。そして、しばらくの間吾々の翼は火の光りで見えますが、またどこへともなく飛び去つてしまふのです。生命は何でもないものであり、また凡てあるのです。それは吾々が死を追ひ拂ふための手です。夜光つて朝になると黒くなる螢です。冬、牛の吐く息です。草の上を匍つて日が沈むと消えてしまふ影です。」

「お前は妙な男だね」とサー・ヘンリーは彼が言葉をやめるのをまつて言つた。

ウンボバは笑つた。「吾々はみんな同じですよ。ことによると私もあの山のむかうで兄弟を見つけろかも知れません。」

私は怪訝さうに彼を見ながら訊ねた。「何だつて、ではお前はあの山のことを知つてるのかい？」

「少しばかり、ほんの少しばかりですよ。あそこには妙な國がありますよ。美しい國で、魔法使ひが棲んでゐます。あそこに棲んでる人間は勇ましい人間で、樹や、河や、雪の峰や、大きな白い道などがあります。私は聞いて知つてゐるのです。だがそんなことを申し上げたつて何にもなりません。もう暗くなりました。行つて見ればわかることですよ。」

あまり色々なことを知つてゐるので私はまた疑はしさに彼を見た。

「心配なさらなくてもよいのですよ。マクマザンさん」と彼は私の眼つきを讀んで言つた。「私は決して

瞞すやうなことはしません。深い譯があつて申し上げないのぢやないのです。あの日の沈む山を越したら知つてゐることはみんな申し上げますよ。だがあの山には死に神が坐つてゐます。今の中にあきらめてお歸りになつた方がためですよ。歸つて象狩りでもなさつた方がよいですよ、ねえ旦那がた。」

かう言つたかと思ふと、彼は槍をもちあげて會釋をして、天幕の方へ歸り、外のケーファー人と同じやうに銃の掃除をしてゐた。

「妙な奴ですな」とサー・ヘンリーは言つた。

「實に妙な奴です」と私は答へた。「何かを知つてゐるに話さないんですよ。しかしどうせ奇怪な旅人なので、強ひてきて見たとて大したことはありませんまいけれど。」

その翌日吾々は出發の用意をと、のへた。重い象狩り用の鐵砲や、その他の道具をもつて行くことはとてもできないので、吾々は人足を解雇して、近くに家をもつてゐる十人の老人に、歸つて来るまで、荷物の保管をたのんだ。併し、こんな重寶な道具を、泥坊も同じ蠻人にまかしておいては危険だと思つたので、それに對する手配りを十分しておいた。

先づ第一に銃器にはすつかり彈丸をこめて、ちよつとでもさはつたら彈丸が飛びだすと脅威した。そしてこの老人に實驗をして見せた。すると彈丸は、その時小屋の方へ走つてゐた牛に命中して、その牛はその場にひつくり反つて死んでしまつた。これでこの老人はすつかり怖氣をふるつたので、もうそれに手を觸れる氣遣ひはなかつた。

それから、私は、若し歸つて来たときに何か一つでも失くなつてゐたら、魔法にかけて皆んな殺してやるし、吾々が死んでも、祟つて、彼等の牛を氣狂ひにし、牛乳を酸つぼくしてやると脅したので、この老人は吾々の品物を、先祖の靈のやうに大事にして預つておくと誓つた。この老人はひどく悪い奴だったが、又大の迷信家でもあつたのだ。

これで、老人の方は片附いたので、吾々五人、サー・ヘンリーとグッドと私とウンボバとホツテントット人のフエントフォージェルとは、旅にもつてゆく荷物の整理をした。荷物といふのは、エキスブレス銃三挺と彈藥各二百發、ウムボバとフエントフォージェルとのためのウインチエスター連發銃二挺と彈藥各二百發、コルト短銃三挺と彈藥各六十發、一升三斗ばかり這入る水筒五つ、乾肉二十五封度、一オンスのキニーネ及び其他の藥品と簡単な外科用の道具、小刀、磁石、マッチ、煙草、鏡、珠數玉、ブランドー一瓶、着替へ等であつた。

こんな大冒険に向ふにしては、あまり荷物が少ないやうだが、何しろ、焼けるやうな沙漠を歩くのだから、これ以上の荷物は持てなかつたのだ。

吾々は三人の土人に、上等のナイフを一挺づつやるからと言つて、はじめの二十哩ばかり、一ガロン程水を入れた瓢箪をもつて送つてくるやうに説き伏せた。一晩歩いてから水筒の水を詰め代へようと思つたのだ。土人等は、吾々を狂人だと言つた。そして咽喉が渴いて死ぬにきまつてゐると言つたが、やがて、他人の生命なんかどうならうと、それよりも自分が立派な小刀が欲しさにやつと承知した。

その翌日は吾々は一日休養して眠り、夕方に新鮮な牛肉を腹一ぱい詰めこみ、茶を飲んで、最後の支度をして月の出るのを待たつた。たうとう九時頃になると皓々たる月が上つて、荒涼たる沙漠を照した。吾々は起ちあがつたが、愈々出かけるとなると一寸躊躇した。のつびきならぬ旅に向つて足を踏み出すときに何となく足がでしふるのは人間の本性だ。吾々三人の白人は一團になつて立つてゐた。ウムボバは槍を手に持ち、銃を肩にかついで、吾々の五六歩先きに立つて沙漠をちつと凝視してゐた。瓢箪を持つた土人等とフエントフォージェルとは、少し後にかたまつてゐた。

「諸君」とや、あつてサー・ヘンリーはどつしりした聲で言つた。「吾々三人はこれから人間業ではとても企てられないやうな旅に向ふのですが、うまく成功するかどうかは甚だ疑問です。併し三人は良きにまれ悪しきにまれ最後まで運命をとにもするのでありますから、出かける前に、吾々の運命を司る神の加護を祈りませう。」

彼は帽子を脱いで、一分間かそこらの間、兩手で顔をおほうた。グッドと私とはそれにならつた。吾々の未來の運命は今全くわからないのだ。わからない事の前にたつと、吾々の心に信仰が起つて來るものだ。私は一生のうちで一度だけをのぞくと、この時位心から神に祈つたことはなかつた。そして祈つたためにどうやら幸福になつたやうな氣がした。

「さあ行かう」といふサー・ヘンリーの言葉とともに吾々は出發した。

吾々の道しるべとなるものといつては、遠くの方に聳えてある山と、ジョゼ・ダ・シルヴェストラの地図とだけであつた。この地図も、瀕死の、半ば氣の狂つた男が三百年も前に麻布の切れつぽしに書いたものだから、あまりあてにできるものぢやなかつたが、この場合吾々の成功の希望はたゞこの地図だけにながつてゐたのである。この地図には沙漠の恰度中央に、即ち吾々の出發點からも山からもそれ／＼六十哩の地點に悪い水の池があると注意してあるが、それが見つからなかつた日には、吾々は渴のため、はじめな往生を遂げることになるにきまつてゐる。それに考へて見れば、こんな荒漠たる沙漠の中で、その池を見つけないなんてことは實に心細いのぞみであつた。たとひダ・シルヴェストラの地圖に間違ひがないにしても、三百年もたつた今日、日光に照りつけられて池は乾いてゐるかも知れぬし、獸に踏まれたり、砂が吹き寄せたりして埋まつてゐるかも知れたものではない。吾々は影のやうに黙つて、重い砂を踏みながら夜道を歩いて行つた。カローといふ灌木が足にからまつて歩みがおくれる上に、靴の中へ砂がはひるので、三三哩行つては、足を停めて砂を出さねばならなかつた。けれども幸ひに夜は相當涼しかつたので、かなりの道程を進んだ。沙漠といふものは實に淋しいものだ。實際氣が滅入つてしまふやうだ。グッドは淋しくてしようがないもんだから、一度「あとにのこした娘は」の唄を歌ひ出したが、こんな廣々としたところで歌ふと妙に物悲しく響くのでやめてしまつた。

しばらくすると、ちよつとした出來事が起つて吾々を笑はせた。とは言へ、その時は非常に吃驚したのである。グッドは海軍にゐたので磁石の見方はよく心得てゐるので、一番先頭にたつて進んでゆき、吾々はそのあとから一列縱隊になつて進んでゐたのだが、突然けた、ましい叫び聲が聞えたかと思ふとグッドの姿が見えなくなつてしまつた。次の瞬間に、あたり一面に、きやあ／＼いふ聲やきやつきやついふ聲と、あわた／＼しく砂の上を走りまはる聲音が聞え、かすかな月明りで、半ば砂原に隠れながら飛びまはつてゐる物の影が見えた。土人等は荷物を投げ出して駈け出さうとしたが、何處へも逃げ出すところがないのに氣がつくと、地べたに身を投げて、悪魔だ悪魔だと呪ひの聲をあげてゐた。サー・ヘンリーと私とは呆氣にとられて茫然として立つてゐたが、驚いたのはそればかりではなく、グッドが馬に乗つて走つてゐるやうに、山の方へ向つて一目散に駈けてゆくのだ。忽ち彼は兩腕を宙に上げて、どさりと下に倒れたのが聞えた。

それで私はすっかり様子がわかつた。吾々はちやうど斑驢の群の眠つてゐるところへ通りかつて、グッドがそのうちの一匹の上へ倒れたのだ。するとこの獸は吃驚して起き上つて、彼を脊にのせたま、駈け出したのだ。私は何でもないのだと皆の者に大聲で言ひながら怪我でもしはしないかと思つてグッドの方へかけつけた。しかし彼は、砂の上にすわつて、ちやんと眼鏡もかけてをり、ひどく慄へて驚いてはゐたが、少しも怪我はしてゐなかつたのでほつとした。

その後は何も變つたこともなく、吾々は一時頃まで旅をつづけた。それから吾々は足を停めて少しばかり水を呑み、半時間程休んでからまた出發した。

ずん／＼進んでゆくうちに、東の空が小娘の頬べたのやうに赭らんで来た。それから微かな櫻色の光が射しこみ、やがてこの光は金色の矢になつて、沙漠一面に夜が明け渡つた。星は瞬一瞬とうすれていつて遂には消えてしまひ、月影も次第にうすれて、朝日の光は、あたりにたちこめてゐる露を拂ひ、夜は全く明けはなれた。

吾々はやすみたくてしようがなかつたけれど、日が高く昇つたが最後、もう歩くことはできないのを知つてゐたので、まだ歩みを停めなかつた。たうとう、それから一時間もたつてから、砂つ原の中に石がもち上つてゐるのを見つけたので、吾々はそのそばまで足を曳きやつて行つた。幸ひにもそこは岩が上へかぶさつてゐて、下は滑かな砂地だったので、太陽の熱をよけるにはもつてこの場所だつた。吾々はその下へ匍つて行つて、みんな少しばかりの水を呑み乾肉を食べて横になつたかと思ふとぐつすり眠つてしまつた。

吾々が眼を醒ましたときはもう三時過ぎで、人足どもは既に歸り支度をしてゐた。彼等は沙漠のことはよく知つてゐたので、それから先はいくら小刀をやつたつて一歩も行かぬはなかつた。そこで吾々は腹一杯水を飲んで水筒を空にしてしまひ、人足どもが持つて来た瓢箪の水をそれに詰めなほし、彼等が二十哩の道を引き返してゆくのを見送つた。

四時半になると吾々も出發した。實にそれは荒涼たる旅で、僅かばかり駝鳥がゐたのを除くと生き物の影も見えなかつた。明かに鳥や獸の住むにはあまりに土地が乾燥し過ぎてゐるのだ。無氣味な恰

好をしたコブラを一二匹見た外には爬虫類も見られなかつた。しかし昆虫はたゞ一種類だけだつたけれども非常に澤山ゐた。それは普通の蠅だつた。蠅は、舊約聖書のどこかに書いてあつたやうに「ただの斥候として、はななく大隊をつくつて」やつて来た。實に蠅といふ動物は驚くべき動物だ。どこへ行つても蠅のゐない處はない。太古の昔からさうであつたに相違ない。私は、五十萬年も昔にできたと言はれてゐる琥珀の中に蠅が閉ぢこめられてゐるのを見たことがあるが、それはまぎれもなく今日の蠅の先祖に相違なかつた。最後の人間がこの地上で息をひきとるときにも、若しそれが夏であるならば、此の蠅のやつはその屍體のまはりにぶん／＼つきまとうてゐるに相違ない。

日没に吾々は足を停めて月の出るのをまつた。たうとう、美しく澄み渡つた月が出たので吾々はまた歩き出して、朝の二時頃に一度休んだだけで、夜が明けるまでずつと歩きどほした。太陽が昇つて来ると吾々は少しばかり水を飲んで横になつて眠つた。こんな見渡す限りの沙漠の中では、どんな敵の襲撃も恐れなくてもよかつたので、見張りを置く必要はなかつた。吾々の唯一の敵は、熱こと、咽喉の渴きと蠅とだけであつた。しかし、どんな恐ろしい人間でも獸でも、この三つの敵よりはましだと私は思つた。こん度は前日のやうに、日をよける場所がなかつたので、吾々は身體のしんまでも焼かれるやうな氣がした。焼けるやうな太陽は、吾々の身體から血までも吸ひ取るやうに思はれた。吾々は起きなほつて喘いだ。

「畜生つ」と言つて私は身體のまはりに集かつて来る蠅をひつつかんだ。蠅の奴は暑さなどは屁とも

思つてゐないらしい。

「暑いな！」とサー・ヘンリイは言つた。

「まったく暑い！」とグッドは言つた。

實際暑かつた。それに日をよけるものは何一つないのだ。あたりを見まはしても、岩一つなければ樹一本生えてゐない。たゞもう果しのない焼け砂原で、砂の上には、赤熱したストーヴの上に乗つたやうに暑いきれがたつてゐて、眼がまひさうだつた。

「どうしたらいい、だらう？」とサー・ヘンリイは訊ねた。「こんな風ぢや迎も長くは耐へられないが。」

吾々はだまつて互に顔を見合した。

「いゝことがある」とグッドが言つた。「穴を掘つてその中へ入つて上からカロリーの枝をかけよう。」

大したうまい考へでもなささうであつたが、それでも何もしないよりはましなので、吾々は、もつてきた鍬と手でせつせと砂を掘りはじめ、かれこれ一時間もかゝつて長さ十呎、幅十二呎、深さ二呎ばかりの穴を掘り、獵刀でカロリーの枝を切つて来て、穴の中へはひつて上からそれをかぶせた。フエントフォールゲルだけは、ホットtentト人で、暑さは大して苦にならないので穴の外に寝てゐた。これで幾らか日よけにはなつたものゝ、とてもそれ位のことでは辛抱できるものではなかつた。吾々は喘ぎながらその中に横になつて、時々乏しい水で唇を濡らしてゐた。飲みたいだけ飲んだ日には吾々のもつて来た水は二時間ももたなかつたが、吾々は水がなくなつたらすぐにもじめな

最期をよげにやらんことを知つてゐたので、非常に用心して飲んだのだつた。

だが何事にも終りといふことがある。ぢつとしてゐたとして晩までは水はもたない。こんな穴の中で暑さと渴とのためにぢりぢり死んでしまふよりは、一思ひに歩いて斃れた方がましだと思つて、吾々は少しばかり残つた水をもつて、午後三時頃に、よろゝと歩きはじめた。水はもう吾々の血と同じ位の温度になつてゐるのだ。

吾々はこれまでにかれこれ五十哩ばかり歩いて来たのだが、ダシルヴェストラの地圖で見ると沙漠の直径は四十英里あることになつてゐる。そしてその中央に悪い水の池があるわけだ。ところで四十英里といへば百二十哩だから若し、ほんたうにそんな池があるとすれば、吾々はその池から十二哩か十五哩ばかりの處までどうにか辿りついたわけだ。

午後は吾々の歩みは一層のろくなつて、一時間に一哩半がせいゝだつた。日没になるとまたやすんで、少し水を飲んで、月の出るまでしばらく眠つた。

吾々が横になる前に、ウンボバは、八哩ばかり先の沙漠の上に、かすかな、蟻の巢のやうな丘があるのを吾々に指した。私はそれは何だらうとあやしみながらうとく眠つてしまつた。

月がのぼるのを待つて吾々はまた歩き出した。暑さと渴とのために五臓はへとく疲れてゐた。この苦しきは経験のない者にはとてもわかりつこはない。吾々は歩くのではなくてよろめいてゐるのだ。時々疲れのためにはつたり倒れることがある。一時間毎に休まねば足はつゝかないのだ。吾々は

もう物を言ふ元氣もなかつた。グッドは快活な人間なので、それまではよく饒舌つたり、冗戯を言つたりしてゐたが、もう冗戯どころではなかつた。

たうとう二時頃に、身も心もへとへになつて、吾々はやつとのことで妙な丘の麓まで辿りついた。それはちよつと見ると高さ百呎ばかりの大きな蟻の巢のやうな形をしてゐた。

そこで吾々は足を停めて、もう矢も楯もたまらなかつたので、最後の水を飲み干してしまつた。めいめい一ガロン位の水は飲みたかつたのだが、その時吾々に残つてゐた水は、一人あたり半ポイント位しかなかつた。

それから吾々は横になつた。私がうとうと眠りかけようとしてゐると、ウンボバがズル語で獨言を言つてゐるのが聞えた。

「水が見つからなかつた日にや、明日の月が出るまでにみんなお陀佛だ。」

私はこんなに暑いのに拘らず胴慄ひがした。そんな恐ろしい死が間近に迫つてゐることを考へるとあまり愉快な氣はしないものだ。しかし、それ程恐ろしいことを考へながらも、あまりに疲れがひどかつたので私はたうとう眠つてしまつた。

第六章 水だ！ 水だ！

それから二時間たつて、即ち四時頃に、私は眼を醒した。身體の疲れがやつとをさまると、ひど

く渴をおぼえて来て、もう眠れなかつたのである。私は岸に緑の草が生えてをり、その上には青々と樹の葉が茂つた小川で水を浴びてゐる夢を見てゐたのだが、覺めて見るとやけつく沙漠の中に身を横へてゐたのだ。しかもウンボバが言つたやうに、今日中に水が見つからねば吾々はみじめな最期をとげるのだ。どんな人間だつて、此のやうな暑さに水無しで生きてゐるわけにはゆかぬ。私は坐り直つて、かさ／＼になつた角のやうな手で顔をこすつた。唇も喉もかたくつついてゐたので、少し擦つてから努力しなければ開かなかつたのだ。もう夜明けに間もなかつたのだが、夜明けらしいすがすがしい氣持は少しもなかつた。空氣は濃厚で何とも言へず重苦しかつた。他の者はまだ眠つてゐた。やがて東が白んで少し明るくなつたので、私は、もつて来た「インゴールズバイ・レジエンド」のポケット版を出して「ランスのジャリクドオ」を読みはじめた。

「美はしき少年は浮彫せる黄金の水瓶をもてり、水瓶には、ランスとナムニールとの間を流るる如何なる水にもまして清らかなる水なみ／＼と満てり」

この節を読んだとき、私はひからびた唇で文字通り舌なめずりした。といふよりもしようと思つたと言つた方があつてゐるかも知れぬ。舌などはさう自由に動かなかつたからだ。この清らかな水の事を考へたゞけでも私は氣が狂ひさうになつた。たとひそこに大僧正が、鐘と、書物と、蠟燭とをもつて立つてゐても、私はそこへ走つて行つてその水を飲み干したゞらう。さうだ、たとひ大僧正が、羅馬法王の手を洗ふために、その水に石鹼水を入れてしまつたあとでも、かまはずやつてのけただら

う。全カトリック教會の呪ひを一身に集めたつて敢へて意としなかつたであらう。私はどうも少々気が變になつたに相違ないと思つた。といふのは、私は、その時、日にやけた、鶯色の眼をした、胡麻鹽頭の獵師がその場へはひつていつて、汚い顔を聖水盤に於て、中の水をがぶく飲んだら、僧正や、少年やジャックドオはどんなに驚くだらうと想像して、思はず乾いた唇でひい／＼笑つたものだ。すると皆の者は眼をさまして、汚い顔をこすつて、くつついた唇と眼とを開けた。

みんなが眼を醒ますと、吾々は額をあつめて善後策を凝議した。水はもう一滴も残つてゐなかつた。吾々は水筒を適しまにしてその口を舐めてみたが、それはまるで骨のやうにから／＼に乾いてゐた。ブランドーの瓶をもつてゐたグッドが、それをとり出して飲みたさうにしてゐたが、サー・ヘンリーはすぐにそれをとり上げた。それは酒などを飲めば、益々渴をばげしくする一方だからだ。

「水がなければ死ぬばかりだ」と彼は言つた。

「シルヅエストラの地圖があてになるとすりや、この近所にどつか水があるわけだがなあ」と私は言つた。けれども、誰もそれには大して期待をおかぬらしかつた。地圖があまりあてにならぬことは明かだつた。するとその時、ホツテントット人のフェントフォーゲルが起ち上つて、地上を凝視めながら歩きはじめたかと思ふとすぐに立ち停まつて、地上を指さしながら、妙な聲で叫んだ。

「どうしたんだ？」と言ひながら、吾々は一度に起ち上つて彼が立つて地べたをみつめてゐる處まで進み寄つた。

「こりや、羚羊の足跡ぢやないか、これがどうしたんだ？—と私は言つた。

「羚羊は水のそばをあまりはなれんものですよ」と彼は和蘭語で答へた。

「さう／＼、忘れてゐた。これは有難い」と私は答へた。

このちよつとした発見のために吾々は急に元氣づいた。人間が絶望のどん底に落ちると、ちよつとした希望にでもすがつて、幸福を感じるものだ。暗い夜にはたつた一つの星だつてないよりはましなものだ。

フェントフォーゲルは獅子つ鼻を上げて、暑い空気をしきりに嗅きまはしてゐたが、やがて「水の香ひがする」と言ひ出した。

吾々はこれを聞いてひどく喜んだ。といふのは、かうした野蠻人は實に驚くべき本能をもつてゐることを知つてゐたからだ。

ちやうどその時に旭日が昇つて、素晴らしく雄大な光景を吾々の眼前に現出した。吾々はしばしの間は渴も忘れてそれに見惚れた位であつた。

吾々から四五十哩離れた前方には、朝日の光を浴びてシバの乳房が銀色に光つてゐた。そして西方へそれ／＼數百哩の裾野をひいてスリマン山がそびえてゐた。その時の吾々の感じは到底筆紙につくしがたい。思ひ出しただけでもたゞ恍惚として感謝するよりほかはないのである。吾々の前に屹立してゐる二つの俊峰はそれ／＼少くも一萬五千呎はあるだらう。その間の距離は十二哩程で、兩者は

岩の絶壁でつながれ、その峰には白雪を戴いてゐるのだ。この巨大な關門のやうにそびえてゐる山は女の乳房をつくりで、時々その中腹に霧がかゝると、恰度女が薄紗をまとうて眠つてゐるやうな形になる。麓の方は、平地からゆるやかに圓味を帯びてふくれ上り、山頂の雪に覆はれた部分はちやうど乳房の乳頭のやうに見えた。

吾々が感歎してシバの乳房を見てゐるうちに、いつしか山の姿はうすい雲に包まれて消えてしまつた。それと同時に、猛烈な勢ひで、湯が吾々を襲うて來た。

フエントフォーゲルが水の匂ひがすると言つたのはよかつたが、さて何處を探しまはつても水のありさうな處は見つからなかつた。見渡す限り荒漠たる砂原で、カローといふ灌木が砂の上に匍つてゐるばかりだ。吾々は砂丘のまはり歩きまはつて、その反対側の方へ行つて見たが、矢張り同じで、一滴の水も見られなかつた。況んや池などのありさうな氣配もなかつた。

「馬鹿、水なんかないぢやないか」と私はぶり／＼しながらフエントフォーゲルに言つた。

だが彼はまだ醜い獅子つ鼻をひく／＼させて嗅いでゐた。

「矢つ張りしますよ、どつかこの空氣の中から水の匂ひがしてきますよ。」

「そりや雲の中にや水があるだらうさ。二ヶ月もたてば下界へ降つて來て吾々の骨を洗ふやうになるだらう。」

サー・ヘンリイは黄色い鬚を撫でながら考へ深い調子で言つた。

「ことによると砂丘の上に水があるのかも知れん。」

「冗戯でせう」とグッドは言つた。「丘の上に水があるなんて聞いたこともありませんよ。」

「兎に角行つて見ませう」と私は口を出した。そしてウンボバを先に立て、あまり大した望みも抱かずに、えつちらおつちら丘を登つて行つた。するとウンボバは急に化石したやうに立ち停つて大きな聲で叫んだ。

「水がある、水がある！」

吾々は、彼のゐるところまで駆けつけた。實際、丘の頂きの深い凹みの中にまぎれもない水がたまつてゐた。吾々はどうしてこんな處へ水がたまつたのだらうなんてことは少しも怪しまなかつた。それにどす黒い水を見ても少しも躊躇しなかつた。それは成る程水にはちがひないが、水といふよりも水に似たものと言つた方がよかつたかも知れぬ。しかし吾々にはそれで澤山だつた。吾々は跳んで池のそばへ行つて、腹這ひになつて、この汚い水をまるで神々の飲む甘露か何ぞのやうに飲んだ。飲んだも飲んだも、大變飲んだ。それから鱈ふく飲んでしまふと、着物を脱いで、池の中に坐つて、干乾びた皮膚を水でしめした。

しばらくすると吾々はせい／＼した氣持ちになつて起ち上つて、腹一ぱい乾肉をばくついた。この二十四時間といふもの、吾々は乾肉には一口だつて手をつける氣にもならなかつたのである。それから吾々は煙草をふかして、水のそばに横はり、正午ごろまで眠つた。

その日は吾々は一日ぢう水のそばで暮して、水の見つかつた幸運を感謝しあつた。わるい水ではあつたが、そのありかを、かくも正確に着物の切れつばしに記しておいてくれたダ・シルヴェストラの靈に感謝することもわすれなかつた。それにしても不思議なのは、この池が、三百年も前からよくも涸れずにゐたといふことであつた。きつとこれは深い泉から湧いて来たものにちがひないと私は思つた。

腹にも飲めるだけの水を詰めこみ、水筒にもはひるだけの水を入れて、吾々は月の出をまつて、非常に元氣よく出發した。その夜は吾々は二十五哩も歩いた。言ふまでもないことだが、水はそれつきり見つからなかつたが、幸ひにも翌くる日は、蟻塚のうしろでちよつとした日蔭が見つかつた。朝日が昇つて、霧が晴れわたると、二つの乳房をもつたスリマン山が、今度は二十哩彼方に、まるで吾々の頭の上へのしか、つてゐるやうに聳えてゐるのが見えた。夕方になるのを待つて吾々は再び出發した。そしてつゞめて言へば、翌朝日が昇るまでに、吾々はシバの左の乳房の麓まで着いたのだ。その時までは、また水がなくなつたので、吾々はひどく渴のために苦しんだが、ずつと上の雪線までは渴を癒すべきすべもなかつた。一二時間麓で休んでから、吾々は、渴の苦しさと戦ひながら、焼けつくやうな炎天の下を、熔岩の坂道に沿うてあへぎ／＼攀ち登つた。

十一時頃になると、吾々はもうぐたく／＼に疲れてしまつた。この熔岩はアセンシオン島の熔岩などに比べると幾らか滑らかではあつたが、それでもこぼこの熔岩の灰滓の上を歩いて行くと足が痛

む。それにひどい渴に苦しめられてゐるので吾々は、すっかりへこたれてしまつた。だが數百碼上の方に大きな熔岩の塊りがあつたので、その日蔭で休まうと思つて、一生懸命にそこまで匍ひ上つた。すると驚いたことには——驚くだけの力がのこつてゐたのも不思議な位だが——すぐそばの小さい丘の灰滓の上に綠草が生ひ茂つてゐた。きつとそこは熔岩が分解して土になり、鳥が草の實をそこまで運んで来たのであらう。併し、この綠草に對する吾々の興味はそれつきりであつた。といふのは、吾々は、ネブカドネザルのやうに草を食つて生きてゆくわけにはゆかないからである。そこで吾々は岩蔭に坐つて苦しさにうん／＼呻つてゐた。飛んでもない旅へ出て来たのを私は後悔した。するとその時、ウンボベが起ち上つて、草の生えてゐる處まで跳んで行つた。しかも驚いたことには、平素からおとなしいこの男が、何か青いものを振りまはして、狂人のやうに踊りながら大聲で叫び出した。水が見つかつたのではないかと思つて、吾々は疲れた足で、できるだけ速く彼の方へ走つて行つた。

「どうした、ウンボベ？」と私はズル語で叫んだ。

「水と食物とが見つかりましたよ。マクマザンさん」かう言ひながら彼はまた青い物を振り廻した。

よく見ると、彼が振り廻してゐたのはメロンであつた。吾々は野生のメロン畑へとびこんだのだ。何千とないメロンが、しかもよく熟れて生つてゐるのだ。

「メロンだ！」と私はすぐ後から来たグッドにわめいた。忽ち彼の義齒は一つのメロンにかぶりつい

てゐた。

吾々はめい／＼六つ宛位食べたやうに思ふ。この際、これくらゐ有り難いものを私は想像もできなかった。

しかしメロンは大して腹の足しにはならぬ。吾々は渴を癒すことができる、今度はひどい空腹を感じて来た。乾肉はもう飽きて嫌になつてもゐたし、それに、これから先食物が見つかるかどうかからないので、節約しなければならぬ。ちやうどその時、幸運にも、十羽程の大きな鳥が群をなして沙漠の方から吾々の方へ飛んで来た。

「旦那、射ちなさい！」とホットtentト人は地べたに顔を伏せながら低聲で言つた。吾々も彼のする通りにした。

その鳥は鵝で、吾々のあるところから五十碼位の高さを飛んでゐるのであつた。私はウインチェスター連發銃をもつて、鳥が吾々のほゞ眞上を通り過ぎるのを待つてすつくと起ち上つた。鳥は私の姿を見ると、吾れ先きにと上の方へ舞ひ上つたが、その刹那に私はつゞけざまに二發ぶつばなした。幸に一羽だけ死んで落ちて来た。二百封度もある素的なのだつた。それから半時間もかゝつて吾々はメロンの枯れた蔓で火を焚き、獲物を焼いて一週間ぶりで御馳走にありついた。吾々は脚の骨と嘴とのほかは何一つのこさずべりりと平げてしまつた。

その夜吾々はできるだけメロンをもつて、月の出るのをまつてこゝを出發した。上へ登るにつれて

涼しくなるので非常に助かつた。そして夜明けまでには雪線から六哩ばかりの距離まで着いたらしい。そこではまたメロンが見つかつた。もうすぐに雪線だから、渴に苦しむ心配はなくなつたが、そのかはり、今度は登り道が非常に急になつて来て、道が中々撻取らなかつた。一時間に一哩がやつとだつた。おまけにその晩に最後の乾肉を食つてしまつたのに、鵝の外には何一つ生き物は見つからなかつた。それに、妙なことには、すぐ上には雪があり、雪は解けることもあらうに、河も泉も何もなかつた。後でわかつたことだが、水は皆山の北側へ流れてゐるのだつた。

吾々はだん／＼空腹を感じて来た。渴の爲めに死ぬことは免れたが、こん度は餓死が心配になつて来た。それから三日間のことは、その當時私を手帳に書きとめておいた記録を見ればよくわかる。

「五月二十一日——午前十一時に若干のウオーターメロンをもつて出發、空氣が冷くなつて来たので日中でも歩けるやうになつた。一日中歩いたがもはやメロンは見つからなかつた。メロンの育つ地帯を通り過ぎたらしい。鳥獸の姿は少しも見えず。長く食物をとらないので夕方やすむ。夜は寒さのために苦しむ。

二十二日——夜明けをまつて出發する。身心困憊甚だし。終日かゝつて漸く五哩を進む。ところどころに雪があつたのでそれを食つた外には何も食はず。大きな丘の下に夜營をする。寒さ甚し。みな少量のブランデーを飲む。毛布をかぶつて、皆一緒に寄りそつて凍死を防ぐ。餓餓と疲勞甚だしく、夜のうちにフェントフォールは死んだのではないかと思ふ。

二十三日——日が昇るとともに再び登り始める。手足少しく霜やけす。疲勞困憊極度に達し、今日中に食物が見つからねば、もうおしまひだと思ふ。ブランドーも残り少量になる。グッドとサー・ヘンリーとウンボバとは元氣なれど、フェントフォーゲルは非常に弱つてゐる。多くのホツテントット人同様彼は寒さに堪へることができないのである。餓ゑの苦しみは大して痛くはないが、胃のあたりが痺れたやうな氣がする。皆さう言つてゐた。吾々は今や二つの乳房を聯繫してある熔岩の絶壁と同じ水準面に達した。實に素晴らしい景色だ。後には沙漠が地平線までうね／＼としてつゞいてゐる。前は何哩も何哩も、固い滑かな、殆んど平坦な雪で、上に昇るにつれて、むつくりと脹れて、その中央から周圍數哩もありさうな乳頭が約四千呎も雲表に聳えてゐる。生き物は何一つ見えない。もう吾々の最期が來たのぢやないかと思ふ。」
これでも日記の拔萃はやめる。それは讀んで面白くもないし、且つ又次の出來事はもつと詳しく説明しなければならんからだ。

その日——五月二十三日——は一日ぢゆう吾々は雪の坂道を、度々やすみながら、のろ／＼と登つて行つた。ひもじさうな眼と眼を見かはしながら、疲れた足を曳きすつて、茫漠たる雪の原を歩いてゆく吾々の恰好ときたら實に見物であつたらうと思ふ。だが、そんなに四邊をきよ／＼見廻したつてなんにもなりはしないのだ。食物などはとても見つかりつこはなかつたのだから。その日は吾々は七哩足らずしか歩けなかつた。かつきり日没までに、吾々は、ちやうどシバの左の乳頭の眞下まで

來た。

「もうかれこれシルヴェストラとかいふ人の書いてゐた洞窟の近くまで來てゐさうなもんだなあ」とグッドが喘ぎながら言つた。

「さうですな、そんな洞窟がほんたうにあればねえ」と私は言つた。

「そんな言ひかたをするもんぢやありませんよ、コオターメンさん」とサー・ヘンリーは太い聲で言つた。「あの人の書いてゐることは全くたしかですよ、水のこととわかるぢやありませんか！ 洞窟はきつともうすぐですよ。」

「暗くなるまでに見つからなかつたら、吾々はまづ此の世のもんぢやありませんね」と私は答へた。ウンボバは、毛布にくるまつて、さうすれば腹の空りが少いといつて、革帶でかたく腹のまはりをしめて、まるで娘つ子のやうな腰をして吾々のそばを歩いてゐたが、この時突然私の腕をつかまへて「御覽なさい」と言ひながら上の方を指さした。

彼の見てゐる方を見ると、二百碼ばかり先に、雪の中に穴のやうなものがあるのが見えた。「あれが洞窟ですよ」とウンボバは言つた。

吾々は急いでそこまで辿りついた。たしかにそれは洞窟の入口に相違なかつた。きつとシルヴェストラが書いてゐた洞窟に相違ない。吾々はやつと間にあつたのであつた。といふのは、太陽はそれからすぐに沈んで、沈んだかと思ふとすぐに暗くなつたからである。この地方では黄昏時といふものが

非常に短いのだ。吾々は洞窟の中へ這入つた。それはあまり大きいものではないらしかつた。吾々は暖をとるために、互に身體をくつつけて、残りのブランデーと言つてもほんの一口づつしかなかつたが——を飲んで、早く眠つて、今のみじめさを忘れようとした。が、寒さがあまりひどいので中眠れなかつた。私の考へでは、氣温は零下十四五度位だつたと思ふ。身體はへとへとに疲れてをり、ひどく饑ゑてゐる上に、沙漠の熱氣に惱まされて來た吾々にとつて、この寒さがどれ程身に泌みたかは、私が書くより、讀者の想像にまかした方がたしかだらうと思ふ。吾々は互に身體をくつ、けて温まらうとしたが、饑ゑた、かさ／＼の身體を寄せてみたつてしようがなかつた。時々數分間とると眠るものもあつたが、とても長くは眠つてゐられなかつた。しかしそれが結局幸ひだつたかも知れぬ。うっかり眠りなどしたら、それつきり醒めなかつたかも知れないと私は思ふ。吾々はたゞ意志の力だけで生きてゐたのだ。

一晩中、フェントフォーゲルは、しよつちゆう齒をがたく／＼いはせてゐたが、夜明け前にそれをやめてしまつて深い溜息をした。その時は、私は、彼が眠つたのであらうと思つて、何の氣もなしにゐたが、彼の背中はず／＼冷たくなつてゆき、たうとう氷のやうになつてしまつた。

そのうちに東が白んで來て、やがて太陽は熔岩の絶壁の上に昇り、吾々の半ば凍えた身體を照し、フェントフォーゲルの身體をも照した。彼は石のやうに固くなつて死んでしまつてゐた。背中は冷たくなつたのも無理でない。かはいさうな奴だ。彼は夜明け前に深い溜息をした時に死んだのだ。そし

て今では凍つて殆んど冷くなつてゐた。吾々はひどく魂消て、ぞつとして死體から身をひいた。吾々人間はどういふものか死骸と一緒にゐるのを恐れるものだ。

その時まで、冷い日光は——こゝでは日光も冷たかつた——眞直に洞窟の入口にさし込んでゐた。突然私は誰か恐怖の叫聲をあげたのをきいて、そちらを振り向いた。

するとどうだらう。深さ二十呎もない洞窟のつき當りに、もう一人の人間が、頭をがくりと前へ垂れ、長い兩腕をだらりと下げてゐるではないか。よく見るとそれも死骸で、しかも白人なのだ。

他の者もそれを見た。吾々のひどく惱まされた神經はもう、この物凄光景を見るに堪へなかつたので、みんな、凍えた足のゆるす限り、大急ぎで洞窟からとび出した。

第七章 ソロモン街道

洞窟の外側で吾々は足を停めた。

「わしはもう一度引き返して來る」とサー・ヘンリーは言つた。

「何故？」とグッドがたづねた。

「ことによるとあれは弟の死骸ぢやないかと思ふので。」

そのことにはまだ吾々は氣がつかなかつたので、しらべて見るために後へ引き返した。明るい外の雪を見たあとなので、しばらくの間は薄暗い洞窟の中はよく見えなかつたが、やがて、眼が闇に馴れ

たので、吾々は死骸のそばへ進んで行つた。

サー・ヘンリーは膝を折つて死骸の顔をのぞきこんだ。

「有り難い」と彼は安堵の吐息を洩らしながら言つた。「弟、ぢやなかつた。」

そこで、私もそばへ寄つて見た。死骸は、脊の高い中年の男の死骸で、顔つきは鷲のやうで、毛髪は胡麻鹽で、長い黒い鬚を生やしてゐた。皮膚は完全に黄色く、かたく骨の上に引きつってゐた。着物といつては、羊毛の股引の遺物らしいものがのこつてゐるほかはすつかりなくなつて、骸骨のやうな身體は裸體であつた。すつかり凍つて硬くなつた死骸の首のまはりには黄色い象牙の十字架がぶら下つてゐた。

「誰の死骸だらう？」と私は言つた。

「見當がつきませんか？」とグッドが訊ねた。

私は首を振つた。

「ジョゼ・ダ・シルヴェストラの死骸にきまつてるぢやありませんか、勿論！」

「そんな筈はない」と私は言つた。「あの男は三百年も前に死んだのですもの。」

「たとひ三千年前に死んだにしたつて、こんなところで、死骸がなくなつてしまふわけがまれば承りたいもんですな？」とグッドは訊ねた。「気温さへ低けりや人間の肉や血はニュウジランドの羊のやうにいつまでたつて生まくしてゐますよ。ところがこゝはこんなに寒いんですからな。日光はあ

たらないし、他の動物が来て死骸をつつきまはす氣遣ひもありませんよ。あの記録に書いてあつた奴隷が着物を脱がしてもつて行つたのですよ。そして一人だつたものだから主人を埋葬することもできなかつたのです。ほら！」と言ひながら彼はそこへ屈んで、地べたにさゝつてゐた尖つた骨を拾ひ上げた。「これはシルヴェストラがペンの代りにして地圖を書いた骨の破片ですよ。」

吾々はしばらく自分のみじめな境涯を忘れて、呆氣にとられてそれを眺めた。

「さうだ」とサー・ヘンリーは言つた。「そして、シルヴェストラは此處をインキの代り使つたのです」「と言ひながら死骸の左の腕にある小さい傷の痕を指した。

もう疑ひの餘地はなかつた。こゝに坐つてゐる死骸こそ十代も前にあの記録を書いて、その指圖に従つて吾々が此處へやつて來たその死骸にきまつてゐる。私はその時にこの男が使つた骨のペンを握つてゐるのだ。そして彼の首には、彼が臨終の辱で接吻をした十字架がぶら下つてゐるのだ。彼の姿を見てゐると、私は、この悲劇の最後の場面をまざまざと想像することができた。寒さと饑ゑのため死に瀕して、しかも自分の發見した大秘密を世人に傳へようとした旅人の淋しい最期、その證據が吾々の前に坐つてゐるのだ。よく見ると、この死骸の顔は、二十年前に會つた、かはいさうなシルヴェストルに似てゐるやうな氣もした。だがそれは多分氣のせめだらう。それにつけても、吾々も今、寒さと飢ゑのために、この死骸と同じ運命を辿らうとしてゐるのだと思ふとはつと胸が迫つた。「もう行かう」とサー・ヘンリーが低い聲で言つた。「だがちよつと待つて、この人に友達をこさへて

やらう」と言ひながら彼はフェントフォーゲルの死骸を起して、シルヴェストラの死骸に並べて坐らせた。それから彼は手がこぼえて結び目をほどくことができなかつたので、シルヴェストラの首にかけてあつた十字架の紐をひきちぎつた。彼は今でもそれをもつてゐるだらうと思ふ。私は骨のペンをもつて行つた。それは今私がこの物語を書いてゐる眼の前にある。とき／＼私はこれで署名したこともある。

それから吾々は、この二人の死骸を、千古の雪のなかにのこしておいて、洞窟から這ひ出し、吾々があんな風になるのはこれから何時間先のことだらうと無気味な想像をふがきながら、とぼ／＼歩き出した。

かれこれ半哩も歩いたときに、吾々は丘の縁端まで来た。沙漠の方から見ると乳頭はまんなかにあるやうに見えたが實はさうでなかつたのだ。朝霧がたちこめてゐたので前の方に何があるのか見えなかつたが、霧の上の方が少し霽れるにつれて、長い雪の勾配の端に、吾々のあるところから約五百碼程下の方に、緑の草の生えた地面があつて、その中を小川が流れてゐるのが見えた。しかも川のそばには、大きな羚羊の群が、寝ころんだり立ったりして日向ぼっこをしてゐた。併し距離が遠いのでどんな種類の羚羊かはわからなかつた。

吾々はこれを見て狂氣のやうに喜んだ。とることさへ出来ればまづ食物は澤山見つかつたわけだ。しかし、どうしてとるか問題だ。吾々のあるところからそこまでは、六百碼はたつぷりある。そ

の成否が吾々の生命にかゝる際の射撃としては、距離が遠過ぎて心もとないこと夥しい。

そこで、吾々は、そつと獲物の方へ忍び寄つて見ようではないかと相談して見たが、風の向きは悪いし、雪を背景にして歩いて行つたのぢや、どんなに用心したつて見つかるにきまつてゐるので、その考へは、いや／＼ながら抛棄してしまつた。

「兎に角こゝより撃つて見るより外はない」とサー・ヘンリーは言つた。「ところで、コオターメンさん、連發銃とエキस्प्रेस銃とどちらをつかつたらいいでせう？」

これがまた問題だつた。ウンボバがかはいさうなフェントフォーゲルのも持つて来たので、ウインチエスター連發銃は二挺あつた。この方は千碼まで照準がきく。ところがエキस्प्रेस銃の方は三百碼までしか照準がきかないから、それ以上の距離は多少あてずつぼうだ。その代り、彈丸が命中すれば、エキस्प्रेसの方は弾道がひろがつて行くから、對手を殺す可能性は多い。そこが問題の難しいところだ。併し私は、一かばちかエキस्प्रेसでやつて見なくちやいかんと決心した。

「みんな自分の眞正面にある奴の肩の邊をねらつて、ウンボバに合圖をして貰つて一度に射たう」と私は言つた。

この一發が自分の生命にかゝるのだと思つて、吾々は一生懸命にねらひを定めた。

「射てー」とウンボバはズル語で言つた。すると三つの銃口が殆んど一度に音をたてた。三つの雲の塊りがしばらく吾々の前にかゝり、銃聲は静かな雪の中に幾度びも反響した。やがて、煙が霽れ渡る

と、嬉しや！ 大きな羚羊が、仰向けにひっくり返つて、斷末魔の苦悶最中であつた。吾々は凱歌をあげた。吾々は救はれたのだ。餓死をまぬがれたのだ。吾々は疲れてゐたが、雪の勾配を駆け降りて、銃を射つてから十分間のうちに、羚羊の心臓と肝臓とは吾々の前に横はつてゐた。しかし今度は又新たな困難が起つて来た。といふのは燃料がないので、それを料理するための火をこさへることができなかつた。吾々は當惑して互に顔を見合せた。

「餓ゑた人間は贅澤を言つてちやいけな、生で食はう」とグッドは言つた。

ほかにどうにもしようがなかつたし、それに饑餓はこの上とても辛抱できない程度に達してゐたので、吾々は心臓と肝臓とを、しばらく雪の中に埋めて冷し、小川の冷たい水で洗つて、それからがつ生のまゝで食つた。恐ろしいことのやうに聞えるかも知れないが、正直なところ私はこの生肉程おいしいものをまだ食べたことがない。十五分もたつと吾々はすっかり別人のやうになつた。元氣は見る／＼恢復して、脈搏もだん／＼しつかりうつやうになり、血は、勢ひよく血管を流れ出した。併し、空き腹にあまり澤山詰めこみすぎて、食傷をおこしてはならぬと用心して、腹八分目のとこでやめた。

「有難い、この獸のために吾々は命を救はれたわけですが、これは何といふ羚羊です、コーターメンさん？」とサー・ヘンリーは言つた。

私もたしかでなかつたので、起ち上つてその羚羊を見に行つた。それは角の曲つた驢馬程の大きさ

の羚羊だつた。私はこんな羚羊はこれまで見たことがなかつた。毛は鶯色で薄赤色のかすかな斑であつた。あとでわかつたことだが、土人はこれを「インコ」と言つてゐた。珍らしい種類で、外の獸の棲まない高い地方だけに棲んでゐるものだとのことである。弾丸は見事に肩に命中してゐた。無論誰の弾丸が命中つたのかはわからなかつたが、グッドは、麒麟を射つたときのすばらしい手際を思ひだして、ひそかに、自分の弾丸があつたにちがひないと思つてゐたにちがひないと思ふ。

吾々は花より團子の譬への通り、食ふのに忙がしくて、ろく／＼あたりを見もせずにあたが、満腹になると、ウンボバに、もつてゆけるだけの上肉を切りとらせながら、その間にあたりの景色を見まはした。もう八時だつたので、霧はすつかりはれ渡り、前に横はつてゐる地方を一瞬のもとに見渡すことができた。私は、この時吾々の眼前に展開されたすばらしい光景をどう言ひあらはしてよいか知らぬ。こんな景色はこれまでも見たことがないし、これからだつてあるまいと思ふ。

吾々の背後には雪を戴いたシバの乳房が聳えて居り、吾々の立つて居る處からかれこれ五百呎ほど下には何里も何里も續いて非常に美しい田舎景色が横つてゐる。彼方此方に、鬱蒼たる森があるかと思ふと、銀色の河が蜿々と流れてゐる。左手にはよく繁つた草原が、緩やかな勾配を造つて廣がつて居り、その上には、野獸だか牛だかよく判らぬ獸の群が無數に跳び廻つてゐるのが見える。この草原の周圍を、遠巻きに山が圍んでゐる。右手には、あちこちに獨立の小山が、地平からもち上つてゐて、山と山との間には、高地が點綴され、その間に穹窿形の小屋の群が見える。此處から見渡した

景色は、まるで地圖のやうで、その間を縫ふ河の流れは、銀蛇のやうに輝いて居り、アルプの峯のやうな、雪を戴いた、俊峰がいかめしく屹立してゐる。そして、これ等凡ての上に、嬉々たる日光と、大自然の幸福な生命のいぶきとが、つてゐるのだ。

それを見てゐるうちに、吾々が、不思議に思つたことが二つあつた。一つは、吾々の前に横はつてゐる地方は、吾々が通つて来た沙漠より少くも五千呎は高いと云ふことで、いま一つは、河といふ河は、みな南から北へ流れてゐるといふことであつた。上り道には水がちつともなかつたのに、北側には澤山の小川が流れてゐて、それが大きな河に合流して、地平の彼方に蜿々と流れて見えなくなつてゐた。

吾々は、暫時の間、腰を下して、無言のまゝ、この驚くべき景色を眺めてゐた。やがて、サー・ヘンリーが言つた。

「あの地圖には、ソロモン街道のことが何か書いてあつたね？」

私はやはり遠くの方を眺めながら點頭いた。

「さうだ、あそこにある！」と彼は、吾々の少し右手の方を指した。グッドと私とが、その方を見る

と、遙かの平原の方に廣いローマの街道のやうなものが見えた。

「右の方から廻つて行けばすぐだ。早速行つて見ませう」とグッドは言つた。

そこで吾々は、小川の水で、大急ぎで顔と手とを洗つて出發した。一二哩の間吾々は、石ころや、解け残つた雪の道を進んで行くと、急に小さな岡の頂きについた。すると、吾々の脚下に道が横はつてゐた。それは、堅い岩を切り開いて造つた、幅五十呎以上もあるすばらしい道であつたが、不思議なことには、その道は、急にそこからとはまつてゐるらしかつた。吾々は、その道へ下りて行つて、シバの乳房の方へ、ほんの百歩ほど歩いて行くと、道はなくなつて、すぐそばまで山が迫つてきてゐた。

「これはどうしたんでせう。コオターメンさん？」と、サー・ヘンリーはたづねた。

私は、さつぱり判らなかつたので頭を振つた。

「判つた！」と、グッドは云つた。「この道は、きつとこの山を越えて向う側の沙漠まで通じてゐたんですよ。ところが下の方は沙漠の砂で埋められ、上の方は火山の爆破か何かで、熔岩でつぶされてしまつたのですよ。」

なるほどさうかも知れんと思ひながら吾々は山を下りて行つた。雪の上を、酷い飢ゑに悩まされ、凍えながら、山を登つて来たときと、いま十分腹をこしらへて、この坦々たる大道を降つて行くのは非常な相違であつた。實際、かはいさうな最期をとげた、フェントフォールと、洞窟の中に凍え死んでゐたシルヴェストラの陰氣な憶ひ出さへなかつたら、これから先に、どんな危険が横はつてゐるか判らないにもかゝらず、吾々は、非常に愉快であつたらう。進んで行くにつれて、空氣はますます柔くなり、景色は、ますます美しくなつてきた。それに、吾々の歩いてゐる道ときたら、こん

な大工事を見たことがない。

ある處にはトンネルがあつて、その兩側には妙な彫刻がしてあつた。それはたいてい、戦車に乗つて駆けて行く甲冑を着けた武人の彫刻であつたが、なかには戦の全景を寫しだしたすばらしいのもあつた。

サー・ヘンリーは、この古代美術の作品をよく調べて見てから言つた。「これを見ると、ソロモン街道の昔の模様がよくわかりますね。しかし、私の考では、ソロモンの民が来る前に、こゝには、埃及人があつたらしいですね。この彫刻は、埃及人の手になつたものではないにしても、埃及彫刻に非常によく似てゐますからね。」

正午までに、吾々は、森のある處まで下りて來た。はじめには、ぼつ／＼雑木林があらはれはじめ、その内に道はうねりうねつて、銀色の葉のついた木の茂つてゐる大きな森の中へはひつてゐた。この木はケーブ・タウンの岡で、よく見かける木だが、ほかでは私は見たことがない。

グッドはこの木を見ながら大喜びで言つた。「こゝには木が澤山あるから、一つ食事をしようではないか、もうあの生肉は、大ていこなれてしまつたから。」これには誰も異議がなかつた。そこで吾々は、近くに流れてゐる小川のそばまで行つて、枯枝を集めて火を焚き、吾々が持つて來た、インコの肉の良い所を切つて、ケーブ・アーン人がやるやうに、それを串にさして焼いて喰つた。腹が一杯になると、煙草に火をつけて、悠／＼と樂んだ。最近に吾々が経験したひどい困難に比べると、まるで天

國にあるやうな思ひがした。

吾々は、餘りの變化にももの言へなかつた。サー・ヘンリーと、ウンボバとは、まづい英語と、ズル語とを、ごつちやませにして、低聲で何か熱心に話してゐた。私は、半ば眼を閉ぢて、河岸に生えてゐる羊齒の上に寝ころんで二人を見てゐた。するとグッドの姿が見えなくなつたので、どうしたのだらうとあたりを見ると、彼は、河の岸に腰をかけて行水をつかつてゐた。フランネルの襯衣一枚になつて、生れつきの綺麗好きの癖が起つたと見えてせつせと念入りに化粧をしてゐた。彼は、カラーを洗ひ、ツボンや上着やチョッキの塵を拂ひ、いつでもそれを着られるやうに折りたんでゐたが、さうしながら彼は悲しげに頭を振つてゐた。と言ふのは、今迄に通つてきた怖ろしい道中で、上着やツボンは方々ちぎれたり裂けたりしてゐたからであつた。それから彼は靴を出して、羊齒の葉でこすり、インコの肉から注意して探つておいた脂をそれに塗つた。それから彼は、眼鏡越しによく磨き工合を調べて見て、それを穿き、今度は別の動作にとりかゝつた。即ち彼は、小さい袋からポケット用の櫛と、懐中鏡とを取り出して念入りに髪をといてゐたが、どうもまだ満足出來ない様子であつた。と言ふのは願のあたりに十日も剃らない鬚がもぢや／＼のびてゐたからだ。「まさかあれを剃る氣ぢやなからうな」と私は思つた。ところがさうではなかつた。彼は、靴を磨いた脂の片を取り出して、それをよく川で洗ひ、小さい剃刀を取り出して願や顔を強く脂でこすつて剃りはじめた。しかし非常に痛かつたと見えて、時々唸り聲をあげてゐたので、私は、うちからこみ上げて來る笑ひを抑へること

が出来なかつた。男のくせに、こんなところで、こんな場合に、脂の片で顔を剃るなんてまことに可笑しいことだ。が、たうとう彼は頓と顔の右側の鬚とを剃ってしまった。恰度その時、彼の頭の頂上で何かキラリと光るものがあつた。

グッドは頓狂な叫びを上げて跳び上つた。(若し彼の持つてゐたのが安全剃刀でなかつたなら、彼はきつと咽喉を切つたであらう) 私も物も言はずに跳び上つた。私のあるところから二十歩たらず、グッドのあるところからは十歩ばかり離れたところに、非常に脊の高い銅色の皮膚をした人の群が立つてゐた。中には頭に大きな黒い羽根飾をつけて、豹の皮を身にまとつてゐるものもあつた。この一隊の前に十七位の若者が、希臘彫刻の鎗投げ選手のやうな姿勢をして、まだ手を擧げたまゝ、前かゞみになつて立つてゐた。いまキラリと光つたのはたしかにこの若者が投げた短刀の光りであつたのだ。見てゐる中に軍人のやうな恰好をした老人が隊を離れて前へ進み出て、若者の腕を捉へて何か彼に言つた。そして二人は吾々の方へ進んで来た。

サー・ヘンリーとグッドと、ウンボベとは銃をとつて彼等を脅威するやうに身がまへた。だが野蠻人の一行は、平氣ですん／＼進んで来た。彼等は鐵砲と云ふものを知らないのぢやないかと私は思つた。でなければこんな平氣である筈がないからだ。

「銃を下に置きなさい」と私は一同に向つてわめいた。こんな場合妥協するのが一番安全だと思つたからである。一同はそれにしたがつた。私は前へ進み出て、今しがた若者をとめた老人に向つて話しかけた。

「今日は」と私は何處の言葉を使つてよいか判らなつたものだからズル語で云つた。驚いたことには私の言葉は先方に通じた。

「今日は」と老人は答へた。その言葉には少しなまりがあつたが、ウンボベにも私にもよく判つた。後から知つたところによると、この連中の言葉は、ズル語の古語で、それと今日のズル語との關係は恰度チヨオサー時代の英語と今日の英語との關係のやうなものであつた。

「何處から來なされたか？」と老人は言葉を續けた。「貴方がたは何者です？ 何故貴方がたの三人の顔は白くて、一人の顔は私どもと同じ色なのです？」と云ひながら彼はウンボベを指さした。見るとなるほどウンボベの顔は彼等の顔と同じで、體格の大きい點も彼等と同じだつた。併し私はこの暗合をよく考へて見る餘裕などはなかつた。

「吾々は他國の者です。決して惡意を持つてゐるものではありません」と私は彼等に判るやうに悠々と答へた。「それからこの男は、吾々の從者です」

「それは謊だ」と彼は答へた。「生き物の通れないあの山を越えて、他國の人がこんな處へ來る筈がない、がしかし謊なんかどうでもよい、もしあんたががたが本當に他國人なら、あんたがたの命は貫はにやならん。と云ふのはククアナ人の國では他國人を生かして置くわけにはいかないからだ。それは國王の法律だから、さあ覺悟をしなさい。」

私はこれを聞いて少し後の方へ踵けた。特にこの連中の中の或者が手をする／＼と腰のところへすべらして、腰につけてある大きな短刀のやうな物をつかんだときはたち／＼となつた。

「あの乞食は何を言つてるんだね？」とグッドは訊ねた。

「あいつは吾々を殺さうと言つてゐるのだ」と私は苦い顔をして答へた。

「そりや大へんだ！」とグッドはうめいた。その時彼は、困つた時にいつでもするやうに、義齒に手を當てて、それを抜いて裏返しにした。世の中のこととは何が幸になるかわからぬもので、それが非常に幸運であつた。と云ふのは次の瞬間にいかめしく立つてゐたククアナ人の群は、一度に恐怖の叫びを上げて數碼後へとびさがつた。

「どうしたんでせう？」と私は云つた。

「あの齒ですよ。」とサー・ヘンリイは昂奮して囁いた。「グッドが齒を動かしたんですよ。おいグッド君齒を外したまへ！」彼はその言葉に従つて、フランネルの襯衣の袖の中へ義齒をすべり落した。すると土人の群は怖いもの見たさにそろ／＼前へ進んで來た。彼等はもう吾々を殺すこと等は忘れてゐるらしかつた。

「どうしたのです皆さん」と老人は勿體ぶつた口調で尋ねた。「あのよく肥つた人は、身體には着物をつけて、脚は裸かで、顔の一方だけに髻をはやして、一方の眼だけ大きな透き通つた眼をして、ひとりでに齒を動かして口の外に出したり入れたり自由にしていますか、あれはどう云ふ譯ですか？」

「口を開けたまへ」と私はグッドに向つて言つた。すると彼は老人に向つて怒つた犬のやうに唇を上下にそらし、呆氣にとられてゐる老人の眼の前で、赤い二列の薄い齒齦を出して見せた。老人はアツと魂消た。

「あの人の齒はどうしたんだ。たつた今たしかに見えたんだがな」と一同は叫んだ。

グッドは悠くりと顔を後へまはして、すばやく手を口へあてた。そして再び笑ふと今度は綺麗な二列の齒が竝んでゐるではないか。

今しがた短刀を投げた若者は、草の上へ身を投げて長い恐怖の叫びをあげた。老人の膝は恐ろしさのためにがた／＼慄へてゐた。

「判りました。貴方がたは神様にちがひない」と彼は吃りながら云つた。「女の腹から生れた人なら顔の一方だけに髻があつて丸い透き通つた眼をして、齒がひりでに動いて、生えたり溶けてなくなつたりする譯はありません。あゝ神様、どうぞ私どもを許して下さい。」

これは實に願つてもない幸運だつたので無論私はそれにつけ込んだ。

「その通りだ」と私はいかめしい笑ひを浮べて言つた。「まことのことを言つて聞かすと吾々はお前たちと同じ人間の形はしてゐるが空にある一番大きい星から來たのだ」

「おゝ！ おゝ！」と呆氣にとられた土人どもは聲を揃へてうなつた。

「正にその通りだ」と私は再びやさしい笑を浮べながら言葉を續けた。「吾々はしばらく此處に滞在し

てお前たちに福を授けてやる。見る通りわしは此處へ来るために、お前達の言葉を學んで来たのだ。」

「その通りです、その通りです。」と一同は聲を合して言った。

「さて皆の者」と私は言葉を續けた。「吾々はこんな長い旅をして来たあとで、あんな待遇を受けたのだから復讐するかもしれないぞ。さうだ、あの齒を入れたり出したりする人の頭へ短刀を投げた不埒な奴は殺してしまふかもしれない。」

「あの人は助けてやつて下さい」と老人は拜むやうに云つた。「あれは國王の王子で私はあれの叔父で御座ります。若しあれの身に間違つたことでもあると大變ですから」

「お前達は吾々の復讐の力を疑つてゐるらしい」と私は相手の言葉には耳をかさずに續けて言った。

「さて、わしが今證據を見せてやる。こりや奴隷、あの音のする魔法の筒を持つて来い」と私はウンボベに向つて荒々しい言葉で命令しながらエキスプレス銃の方へ目くばせした。

ウンボベはすぐに立ち上つて、ちよつと苦笑ひをしながら私に銃を渡した。

「且那樣持つて参りました」と彼は鄭重に言った。

恰度その時小さい一疋の羚羊が七十碼ほど向うの岩の上に立つてゐたので、私はそれを射つてやらうと心できめた。

「あそこに羚羊があるだらう」と私は一同の者にその動物を指し示しながら云つた。

「どうだ、女の腹から生れた人間に、此處から音をさせてあれを殺すことが出来るか？」

「左様なことはとても出来ません」と老人は答へた。

「ところがわしにはそれが出来るのだ」と私は落ちついて言った。

老人は「まさか左様なことは」と答へながら微笑を洩らした。

私は銃を取り上げて羚羊をねらつた。それは小さい羚羊だったので普通の獵師なら射ち損じかねないものであつたが、私は射ちそこなふ氣遣ひはないと云ふことを知つてゐた。

私は呼吸を深く引いて悠くりと曳金をおさへた。羚羊は石のやうにちつと立つてゐた。

「ズドン！」羚羊は宙へ飛び上つて岩の上に落ちて釘のやうに死んでしまつた。

一同の者は恐怖のためにうめいた。

「肉が欲しければあの羚羊を連れて来るがいい、」と私は冷やかに言った。

老人が合圖をすると一人の家來が走つて行つて、やがて件の羚羊を持つて歸つて来た。私の射つた弾丸は肩の下のところに見事に命中してゐた。一同の者は哀れな獸の死骸のまはりに集まつて仰天して彈痕を見つめてゐた。

「どうだ、わしは嘘を言はないだらう」と私は言った。

誰も返事をしなかつた。

「若し吾々の力を疑ふものがあるなら、誰か一人あの岩の上に立つて見るがよい、さうすればこの羚羊と同じやうに見せてやる」と私は續けて言った。

誰もこんなすゝめに應じさうなものはないが、そのうちにたうとう國王の王子が口をきつた。「よし、伯父さん貴方あの岩の上に立つて御覽なさい。魔法で羚羊は殺すことは出来ても、人間を殺すことはできないにきまつてゐるから。」

「いや〜」と彼はいそいで叫んだ。「わしはこの眼でちやんとならんだ。この人達は本當の魔法使ひだ。だから國王の許へお連れ申さう。だがまだこの上に證據が見たいと云ふものがあるなら、その人を岩の上に立たした方がよいだらう。さうしてあの魔法の筒に物を云はせたがよからう。」

一同の者はあわて、もう澤山だと云ふやうな表情をした。

「あんな立派な魔法をこちとらのやうないやしい者に澤山見せて貰ふのはもつたいない」と一人の男が云つた。「こちとらはもう澤山だ。この國の魔法使ひが束になつたつて、あんな藝當を見せることは出来はしない。」

「さうだとも」と老人はほつとしたやうな調子で云つた。「それに違ひない、まあ聞いて下さい、星の世界のお方達。光る眼をした、齒の動く、そして遠くから音をたて、生き物を殺しなされるお方達、私はインファドオスと申しまして、以前にこのクアアの國王であつたカファの子で御座ります。それからこの若者は、スクラツガと申しましてツワラ大王の王子で御座ります。ツワラ大王と申しますのは后を千人もお持ちになる國王で、クアアの民の長であり、この大街道の所有者であり、魔法の學者で十萬の軍隊を率ゐて敵に恐れられてゐる方で、片眼の、色の黒い、恐ろしい王様で御座ります。」

「さうか」と私は鷹揚に言つた。「ではツワラの處へ吾々を案内せい。吾々は賤しい者とは話をしたくない。」

「承知致しました。がすみ分道のりが遠う御座ります。吾々は、王様の居なさる處から三日もかゝつてこちらへ獵に來たので御座ります。それをおいとひでなければ御案内申します。」

「そりや仕方がない」と私はぶつきら棒に言つた。「吾々は死ぬと云ふことはないのぢやから、いつまでか、つてもかまはん。用意はよいから案内せい。だがインファドオスもスクラツガも要心せい、吾々を騙さうなどと思つてはいかぬぞ。お前達の泥のやうな頭で悪企みをしたつてすぐに判るから復讐するぞ。あの人の透き通つた眼でお前たちをにらみ殺し、あの出沒自在の齒でお前達もお前達の妻子も喰ひ殺してしまふぞ。あの魔法の筒が音をたて、お前達を蜂の巢のやうにしてしまふぞ。よく氣をつけるがよい！」このいかめしい言葉のきゝめはてきめんであつた。實を云へばそんなに脅す必要のないほど既に彼等は吾々の力に打たれてゐたのだ。

老人は深く敬意を表して家來の者共に向つて何事かを言つた。すると家來の者共は吾々の荷物を持つた。何でも先まで運んでくれるつもりらしい。たゞし鐵砲には手をさはらうともしなかつた。彼等はグッドの着物さへも持つて行かうとした。それは讀者は記憶してゐるであらうが、彼がきちんと込んでそばに置いたものである。

彼はそれを見てあわて、手を通さうとした。すると大騒ぎが持ち上つた。

「眼の透き通つた齒の溶けてしまふ方にそんなものゝさはらせちやいけない。持つて行くのは家來の役目だぞ。」と老人は言つた。

「おれはそれが着たいのだよ！」とグッドは氣短かな英語でどなつた。

ウンボベはそれを通譯した。

「とんでもない、私どものしたことがお氣にさはつてその美しい白い脚を見せてくださらないのですか？」とインフアドオスが答へた。

私はこの時もうちよつとで失笑すところであつた。がその間に一人の男は、さつさと着物を持つて出懸けてしまつた。

「畜生つ！、あの黒ん坊の奴、おれのツボンを持つて行きやがつた」とグッドはどなつた。

「おいグッド君」とサー・ヘンリーは云つた。「君はこの國では特別扱ひにされてゐるのだから、しまひまでさうしてゐなきやならんよ。いつまで経つてもツボンなんか穿く譯にいかんぞ。これからはフランネルの襯衣と靴と眼鏡とだけで通さなくちやならんよ。」

「さうだ」と私は言つた。「それに片一方だけ頬髯を生やしてゐなければならん。若しその中の一つでも變へたら奴等は吾々を僞者だと思ふからな。グッドさんにはまことに氣の毒だが、眞面目にさうしてゐなけりやなりませんよ。もし奴等がちよつとでも疑ひ初めたら、吾々の命は五厘銅貨の値打もなくなりませんからな。」

「ほんとに貴方がたはさう思ひますか？」とグッドは悲觀しながら言つた。

「ほんとですとも、貴方の美しい白い脚と貴方の眼鏡とは、吾々一行の目じるしなんだから。サー・ヘンリーが仰言るやうに貴方は終ひまでそれで押し通さなけりやなりませんよ。まだしも靴を穿いてゐたのが僥倖ですよ。それにこゝは空氣が暖いから。」

グッドは溜息をして何にも言はなかつた。がこの新しい貧弱な服装になれるのに半月もかゝつた。

第八章 ククアナ國に入る

その日の午後はすばらしい街道に沿うて、吾々はずつと旅を續けた。街道は、一本調子に北西の方角に走つてゐた。インフアドオスとスクラツガとは吾々と一緒に歩いてゐたが、彼等の從者は百歩ばかり前を歩いて行つた。

「インフアドオス、この道は一體誰が造つたのだね？」と私はたうとう話しかけた。

「これはずつと昔からあるので御座いますよ。どうして出来たのか、何時造られたのか誰も知つてゐるものはないのです。何代も何代も生きてゐる物識りのガゴオル婆さんだつてそれは知らないのです。今時はこんな道は誰にだつて造れはしません、王様は道に草一本生やさないうやうにしてをられます。」

「ではこの道へ来るまでに、吾々が通つて來た、トンネルの壁に書いてあつたものは誰が書いたのだ

い？」と私は、吾々が見て来た埃及彫刻らしいもの、ことを訊ねた。「やつぱり道を造つた方が、あの不思議な彫刻も造られたのですよ。私どもには誰が書いたのか判りません。」

「ククアナ人は何時この國へ来たのだい？」

「此處の人間は何萬月も前に嵐のやうに向うの大きな國からやつて来たのです。と言ひながら彼は北の方を指さした。この國は周圍が山に圍まれてゐるものですから、これからさきへ行くことが出来なかつたのださうです。それに此の國は良い國だものですから、その人達はこゝに落着いて、だんく強い國民になつたのです。今日では、私どもの仲間の數は積の砂のやうに澤山あります。ツワラ王が軍隊を召集されると、廣い野原が羽根飾りでうづまつてしまひます。」

「周圍が山に圍まれてゐちや、軍隊は戦争する相手がないだらう？」

「ところが北の方は開いてゐるので御座います。で時々私どもの知らない國から雲霞のやうな大軍が押し寄せて來ますが、吾々は塵殺しにしてしまひます。この前に戦争があつてからもう十年になりませんが、その戦争で私どもの軍隊は何千となく戦死しました。しかし、たうとう私どもは攻めて來た奴を滅ぼしてしまひました。それからこつちもはや戦争はありません。」

「兵隊どもは、鎧を休めてゐちや、さぞ退屈だらうな？」

「ところがその戦争が濟んでから實はもう一度戦争があつたのです。がそれは内亂でした。犬と犬と

が喰ひ合つて云ふやつです。」

「それはどうしておこつたのだ？」

「私の兄のツワラ王は雙生兒だったのでございます。私どもの國の習慣として雙生兒は二人共生きてゐることが出来ないで、弱い方が殺されることになつてゐるのですが國王の母親は吾が兒を殺すに忍びないものですから、後から生れた弱い方の子供をかくしておいたのです。その子供が、つまりツワラ王なのです。私は別の後の腹から生れたツワラ王の弟なのでございます。」

「それで？」

「私どもの父は、私どもが成人すると死んでしまひ、兄のイモツが、そのかほりに王位について、しばらく國をさめてゐる内に、寵妃の腹から一人の息子が生れたのです。この赤ん坊が三つの時に、あの大戦争がはじまつて、戦争の間ぢゆう、田や畑は種も蒔かず耕しもせずにおいたものですから飢饉がおこつて來たのです。すると人民はぼつ／＼不平をとへはじめ、何か不平をはらす的はないかと、飢ゑたライオンのやうにあたりを捜しまはつてゐたのです。その時に、ガゴオルと言ふ恐ろしい不死身の物識りの婆さんが人民に向つて「イモツ王は王ぢやない」と言つたものです。その當時イモツは負傷して身體の自由がきかないので、彼の小舎に寝てゐたのでございます。」

「その時にガゴオルは一軒の小舎にはひつて私の兄であり、國王の雙生兒の兄弟であるツワラを連れ出して來たものです。この婆さんは、ツワラが生れた時からこの子供を岩窟の中へかくしておいたの

です。そしてこの婆さんは、ツワラの腰から腰帶を取り拂つて彼の腹のまはりにとぐる巻いてある聖蛇のしるしをツワラの人民に見せて「これがお前達の王様だ、妾が今迄お救ひ申してゐたのだ」と聲高に叫んだのです。この聖蛇のしるしは、國王の長子が生れた時につけるしるしなのでござります。「すると人民は飢ゑのために狂氣のやうになつて、理性を失ひ、眞偽を見分ける力を失つてゐた際なので「國王！ 國王！」と叫びました。しかし私はさうでないことを知つてゐたのです。イモツの方が先きに生れた正當な王であることを知つてゐたのです。騒ぎがあまり大きくなつたので、イモツ王は病床に寝てゐながらも、妻の手をとり、幼兒のイグノシを連れて小舎から匍ひだしたのです。ついでに申し上げますが、イグノシと云ふのは電光と云ふ意味なのでござります。

「あの物音は何だ？ 何故國王！ 國王！ なんて叫んでゐるのだ？」と彼はたづねました。「その時同じ腹から生れたツワラは彼の側へ走りよつて、その髪を掴み、短刀で彼の心臓を突き刺したのです。すると氣の移りやすい、いつでも長いものには巻かれる主義の人民は手を打つて叫びました。「ツワラが王様だ！ ツワラ王萬歳！」

「それでイモツの妻と子供はイグノシとはどうなつたんだ？ ツワラがやつぱり殺したのか？」
「いえ、女王は王様が殺されたのを見ると、子供を抱いて泣きながら逃げて行つたのでござります。それから二日目に女王は非常に飢ゑて一軒の小舎へ辿りつきましたが、もはや國王が死んだまとなので、誰も女王にミルクも食物も與へてくれるものはなかつたのです。人間と言ふものは、皆、不幸な

者を相手にしないものです。ところが夕方になると一人の小娘が、こつそりと穀物を持つて小舎からしつび出て来て、それを子供に與へ、そして翌朝日の出前に母親はこの子供をつれて山の方へ行つてしまつたのです。多分、その女は向うで死んでしまつたのでせう、と云ふのはその母親も、イグノシもそれから後誰も見たものはないのでござりますから。」

「ではもしそのイグノシと云ふ子供が生きてゐたら、ククアナ國のほんたうの王になる譯だな？」
「さうで御座います。あの子の腰のまはりには聖蛇のしるしがついてゐます。生きてゐたら王なので

すが、もうすつと前に死んでしまつてゐるのです。」
「御覽なさい」と云ひながらインフアドオスは澤山の小舎の集まつた部落を指さした。その部落は濠にとり圍まれてゐて、その濠の外側をまた大きな牆が取り圍んでゐた。「あれがイモツの妻が最後に子供のイグノシと一緒にゐた家です。あなた方は下界でお眠みなさるのかどうか判りませんが、もしお眠みなさるなら、私どもは今夜あの家で泊らうと思つてゐるのです。」

「郷に入れば郷に従へ」と云ふことがある。ククアナ人の仲間の中にある間は、ククアナ人のするやうにするぞ」と私はおこそかに言つてグッドを振り返つた。グッドは氣むづかしい顔をして歩いてゐた。彼の心はフランネルの襦袢が夕風でひらくするのを避けようとするので一ぱいだつたのだ。驚いたことには私が後を振り向いた拍子にウンボバの顔につきあつた。彼は吾々のすぐ後からついて来て、私とインフアドオスとの會話を非常な興味をもつて聞いてゐたらしかつた。彼の顔つきは好

好奇心にみちみちてゐた。それはずつと前に忘れてしまつた何事かを思ひ出さうとして、一生懸命になつてゐる人のやうな顔つきであつた。

この間に吾々は下の方に、波のやうに起伏してゐる平原へ向つてずん／＼足を早めた。吾々が通つて来た山々は今では、頭上にぼんやり霞んで見え、シバの乳房は羞かしさうに透きとほつた霧のヴェールに包まれてゐた。進んで行くに連れて景色はますます良くなつた。植物はよく繁茂してゐたが、それであつて熱帯植物ではなく、日光は明るく暖か、つたけれども灼けるやうではなかつた。心地よい微風が香ばしい山々の山腹に沿うて吹き下してきた。實際この新しい國は、地上の天國と云つてもよい位であつた。景色のよい事と云ひ、自然の産物の豊かなこと、云ひ、氣候の温暖なこと、云ひ、私はこのやうなところを今までに見たことがない。トランスヴァールも良い國だが、このククアナとは較べものにならぬ。

吾々が出發すると同時に、インファドオスは、この先の村の人民へ吾々の到着を知せるために一人の傳令を派遣した。この男は非常な速さで出懸けて行つた。インファドオスの話によると、彼は途中で一度も憩まずに先方まで走り続けるであらうと云ふことであつた。と云ふのは、この國ではランニングの練習が非常に廣く行はれてゐるからだ。

この傳令を派遣した結果は漸く判りはじめて来た。吾々はその部落から二哩ばかりの處まで着くと、大勢の男が隊を造つて部落の門から出て吾々の方へ進んで来た。

サー・ヘンリイは、私の腕をさはつて、どうやら款待されるらしいぞと言つた。するとインファドオスは、彼のそぶりに氣がついて慌て、言つた。

「御心配なさるには及びません、私どもは、決して悪企みをしてゐるのぢやありません、この軍隊は、私の部下の軍隊で、私の命令でお出迎ひに来たので御座ります。」

私は平氣で點頭いた。しかし心の中は餘り平氣ではなかつたのだ。村の門から半哩ばかりのところには、街道から緩かな勾配を作つてもちあがつた長い岡があつた。軍隊はそこで整列してゐたのだ。それは實に立派な見ものであつた。一隊は約三百人からなつて居り、めい／＼ギラ／＼した鎗を持ち、羽根飾りをつけて敏捷に岡の上を駆けあがつて指定された場所に整列した。吾々はその勾配にさしか、つた時には、かやうな軍隊が十二も出來て總數三千六百の軍隊が街道に沿うて列んでゐた。

やがて、吾々は、第一の隊のところまでやつて来て、この驚くべき軍隊をつく／＼眺めることが出来るやうになつた。彼等は大部分四十歳位の古兵で、脊の高さは六呎三四吋もあり、六呎以下のもものは一人もあなかつた。頭には黒い羽根飾りをつけ、腰の圍りと、右の膝の下には白い牛の尾で造つた小さな環が結びつけてあり、左の手には直径二十吋ばかりの丸い楯を持つてゐた。この楯は妙な楯であつた。薄い鐵板で造つたもので、その上に乳のやうに白い牛の皮が張つてあつた。めい／＼の持つてゐる武器はごく簡單なものであつたが、併し恐るべき效力をもつてゐるものであつた。

その一つは木の柄のついた短かい非常に重い雙刃の鎗で、この鎗の刃の一番廣いところは幅六寸ばかりあつた。この鎗は、投げ鎗ではなくて近くに迫つて来た敵を突き刺すものであつた。この鎗の他に短刀を三ちやう持つてゐた。それはみな二封度もある大きな重いもので、一つは牛の尾でこしらへた環の中にはめてをり、他の二つは丸い楯の脊につけてゐた。この短刀が投げ鎗のかかりになるので、クダアナの軍人は五十碼も離れたところへ極めて正確にそれを投げる事が出来るのだ。彼等は敵が近くへ迫つて来ると、どつと喊聲をあげながら、それを投げるのが習慣になつてゐるのであつた。

各隊は吾々がその正面へ来るまで、まるで銅像のやうにぢつとしてゐたが、豹の皮の外套を着て五六歩前に立つてゐる指揮官が號令をかけると、一度に鎗を高くさしあげ、三百人のものが聲を揃へて歓迎歌を歌つた。そして吾々が通り過ぎると、そのあとに整列してついて来た。かうして十二の中隊は全部吾々の後ろについて村の方へ進んで来た。

たうとう吾々はソロモン街道から枝道へはひつて、村の周りを圍んでゐる廣い濠のところまで来た。村の周圍は一哩もあつて丈夫な木柵で造へた垣で取り巻かれてゐた。入口には、壕の上に原始的な開橋が架つてゐて、番兵がそれを下して吾々を通してくれた。村は直角に交叉する道路によつて十二の區劃に分れ、一つの區劃がそれより一つの中隊になつてゐたのである。小舎は穹窿形で、ズル人の小舎と同じやうに、小枝で造つて草の屋根が葺いてあつたが、ズル人の小舎と違ふところは、吾

々がたつぷり立つてはひれる位の入口のあることだつた。

村の中を貫通してゐる大道の兩側には、澤山の女が列んで、物珍らしさうに吾々を見てゐた。これ等の女は、土人にしては大へん綺麗で、脊も高く顔も整つてをり、髪は短かいけれども捲毛で、肩も普通のアフリカ土人のやうに不愉快に厚くはなかつた。しかし何よりも吾々が驚いたのは、彼女等が非常におとなしくて一種の威嚴を持つてゐる點であつた。彼女等は好奇心に驅られて吾々を見に出たのであるが、吾々を見てもひどく吃驚したやうな顔をしたり、不作法な批評をしたりしなかつた。インフアドオスがグッドの白い脚を指さして見せた時ですら、彼女等は黒い眼で眞白な美しい脚をちつと見詰めたがら感歎してゐるだけであつた。しかし生來羞かみやのグッドにとつてはそれだけでももう澤山だつたのであるが。

吾々が村の眞中に着いた時、インフアドオスは遠くから小さい小舎に圍まれた、大きな小屋の入口で立ち止つた。

「おはひりなさい、星の國のお方達」と彼はもつたい振つた聲で言つた。「どうぞこのあばら家でやすみ下さい。すぐにお食事をさしあげます。お食事は、蜜と牛乳と、牛と羊とで御座ります。」
「よろしい、吾々は星の世界から降りて来たので大分疲れたからすこし憩ませてもらはう」と私は言つた。

それから吾々は小舎の中へはひつた。部屋の中は氣持ちよく準備が出来てゐて、吾々の寝るために

鞆皮の寢床が設けてあり、顔を洗ふための水がおいてあつた。

やがて部屋の外で、がやく／＼云ふ聲と蹙音とが聞えて、娘たちが列をつくつて、牛乳と玉蜀黍の焼いたのと、蜜の入つた壺とを持って来た。その後から数人の若者が肥つた仔牛を二頭曳張つて来た。吾々がこの贈物を受取る時、一人の若者が、腰から短刀を抜いて、巧みに牛の咽喉を突き刺した。それから十分間の後に、その牛を殺して皮を剥ぎ、一番良い肉を吾々のために切り取つてくれた。残りの肉は、私が一行を代表して周圍に立つてゐる軍人共に進呈した。すると一同は、それをうけとつて「顔の白いお客様の下さりものだ」と云ひながらみなで分けた。

ウンボバは非常に愛嬌のある若い娘に手傳つて貰つて吾々の肉を大きな土鍋に入れて、小舎の外にこしらへてある竈にかけて煮はじめた。料理が出来あがると、インフアドオスと、王子のスクラツガとに使を遣つて一緒に食事をするやうに知らせた。

やがて二人はやつて来て、小さい腰掛に腰をかけた。老人の方は愛想が良くて丁寧であつたが、若い方はなんだか疑はしさうな顔附をしてゐた。彼は他の者と同じやうに、吾々の色の白いのと、魔法を知つてゐるのとは怖氣をふるつてゐたが、吾々が他の人間と同じやうに、食つたり、飲んだり、眠つたりするのを見て、畏敬の念がだん／＼薄いで、猜疑の念がこれに變つて来たらしかつたので、吾々は少し氣味が悪かつた。

食事中にサー・ヘンリイは、彼の弟の運命を知つてゐるかどうか、或ひは、彼の弟の事を聞いた

り見たりしたことがあるかどうかを訊ねて見たらどうだらうと言つたが、私はこの際その事については何も言はないのが賢明だらうと考へた。

食事が済むと吾々はパイプに煙草をつめて火をつけた。インフアドオスとスクラツガとは、それを見てひどく驚いた。クアアナ人は明らかに煙草を喫かすことを知らないのだ。煙草はこの土地には澤山生えてゐたが、彼等はズル人と同じやうに、それを喫煙草として使用するだけで、吾々の喫かしてゐた煙草がそれと同じものだと言ふことは全く知らなかつたのだ。

それから間もなく私はインフアドオスに向つて、いつ出懸けるのだと尋ねた。有難いことにはもう既に吾々の到着したことはツワラ王の許に知らせてあるから、明朝出發の手筈になつてゐるとのことであつた。ツワラ王は、いま宮殿に於て六月の第一週に行はれる年一回の大祭の準備をしてゐるらしかつた。この大祭には警備のために残つてゐる若干の小部隊を除いて、全國の軍隊が國王の前にあつまつて觀兵式をすることになつてゐた。それから年一回の魔法狩りも近く開かれることになつてゐたのだ。

吾々は翌日早朝に出發することになつてゐた。インフアドオスも吾々に同行する筈になつてゐたが、彼の話によると途中に變つた事さへなければ、二日目の晩には宮殿まで着けると云ふことであつた。

これだけのことを告げると二人の容はおやすみなさいと言つて出て行つた。吾々は代るがはる一人

づつ、若しも吾々を裏切りはしないかと思つて、用心のために見張りをすることにきめて、あとの三人はごろりと横になつて良い氣持で眠つた。

第九章 ツワラ王

宮殿へ行くまでの旅の出来事は、一々こゝで書く必要はない。まつ直ぐなソロモン街道を通つて吾々はそこへ着くまでにまる二日かゝつた。進むにしたがつて、村落とその周圍の高地の数はだん／＼多くなつた。村落は、吾々が初めに見たのと同じ設計に出来てゐて、大勢の軍隊が守備してゐた。實際、ククアナと言ふ國は、ドイツや、ズルヤ、マサイと同様國民皆兵主義の國で、戦争の時には不具者以外の男子は、凡て戦線に出られるやうになつてゐた。吾々は旅の途中で宮殿へ觀兵式に出懸けて行く軍隊を澤山見たが、それは實にすばらしい軍隊であつた。

二日目の夕方、吾々は小高い岡の上にとまつて暫く憩んだ。街道はその岡の上を走つてゐたのだ。吾々の眼前に見える美しい沃野の中に首都が見えた。土人の町にしては、大きな町で、周圍五哩もある。おまけに近接部落がその外へはみ出してゐた。それは軍隊の駐屯のために使はれたのである。それから、後に吾々がよく知るやうになつた奇妙な馬蹄形の岡が二哩程北にあつた。町の中央には河が流れてゐて、河には數ヶ所橋が架つてゐるらしかつた。六七十哩先には雪を戴いた三つの山が三角形をなして平地から聳えて居り、その山の中腹は、シバの乳房とは違つて屏風のやうな絶壁になつて

ゐた。土人等はその山を「三つの魔女」と呼んでゐた。

インフアドオスは吾々が山を見てゐるのを見て言つた。「この街道はあそこでおしまひになつてゐるので御座います。」

「どうしてだ？」と私は訊ねた。

「どうしてだか判りません」と彼は肩をすくめながら答へた。「あの山には澤山洞窟があつて、その間に大きな堅坑が一つあるので御座ります。昔の賢者たちはこの町へ来て、そこへ何か採りに行つたのださうですが、今ではこの國の代々の王様がそこにある墓場の中へ埋られてゐるので御座ります。」

「昔の人はそこへ何を採りに來たのだ？」と私は熱心に訊ねた。

「それは判りません。星の世界からお出でになつたあなたは御存じで御座りませう」と彼はちらりと吾々の方を見ながら答へた。明かに彼は口で言つてゐる以上のことを知つてゐるらしかつた。

「左様」と私は言つた。「お前の言ふ通り吾々は星の世界でいろ／＼の事を知つて來たのだ。例へば、昔の賢者達が、この山へ、光る石や、美しいおもちゃや、黄色い鐵等を採りに來たといふことを聞いてゐる。」

「あなた方は賢くていらつしやる」と彼は冷やかに答へた。「私はまだほんの子供ですからかやうな事柄については、あなた方とお話することは出来ませんが、國王の宮殿にあるガゴオルと言ふ婆さんとお話しになればよろしう御座います。この婆さんはあなた方と同じやうに物識の女で御座います。」

かう言ひながら彼は出て行つた。

彼が出て行くと私は一同の者に向き直つて件の山を指さし「あそこにソロモンのダイヤモンド坑があるんですよ」と言つた。

ウンボバは皆の者の傍に立つて、いつもの癖で、何か考へ込んでゐたが、急に私の言葉尻をとらへて「さうです、きつとあそこにダイヤモンドがあるのですよ」とズル語で云つた。

「どうしてお前はそれを知つてゐるのだ、ウンボバ？」と私は鋭く訊ねた。私は彼が時々合點のゆかぬことを云ふのが嫌ひだつたのだ。

すると彼は「何でもなし、晩に夢で見たんですよ」と笑ひながら言つてくるりと後を向いて去つてしまつた。

「あいつは何か知つてるやうですね」とサー・ヘンリーは言つた。「ついでだがコオターメンさん、あいつは私の弟の事を何かきいたでせうか？」

「何もきいてゐないやうです。あいつは知りあひになつた奴等に片つぱしから訊いて見たさうだが、皆この國へ白人の來たのを見たことはないと言つてゐるさうです。」

「一體あなたは弟さんがこんな處へ來たと思つておめですか？」とグッドが口を出した。「吾々が來られたのだつて奇蹟のやうなものですよ。地圖もなしにこんな處へ來られるものですか。」

「そりや判らんが何だか私は弟に逢へさうな氣がする」とサー・ヘンリーは沈んだ聲で言つた。

陽は緩やかに沈んで行き、突然四邊はまつ暗になつた。晝と夜との間には呼吸をする隙もなかつた。熱帯地方では黄昏と云ふものは全くないのだ。晝から夜への變化は生から死への變化のやうなもので、太陽が沈めば世界はすぐにまつ暗になつてしまふのだ。しかしまもなく銀色の満月が出て下界を隈なく照らした。それは實に筆紙につくしがたい美しい光景であつた。私の生涯は殺風景な生涯であつたが、それでも生きてゐてよかつたと思つたことが少しはある。その中の一つ、ククアナで満月を見たこともだ。

やがて吾々の冥想はインファドオスの丁寧な聲で破られた。

「皆様がおやすみになつたら、ぼつ／＼宮殿へ参りませう。あそこにはあなた方の今夜のお宿が用意して御座ります。よい月夜ですから途中でころぶやうな事も御座りませう。」

吾々はそれに同意した。そして一時間ほど経つと、吾々は町の郊外に着いた。郊外には無数の篝火がついてゐた。間もなく吾々は濠のところまで來た。そこには一人の番兵がゐて武器をがた／＼いせながら吾々を誰河した。インファドオスが何か吾々に判らない合言葉を云ふと、番兵は敬禮して道をあげ、吾々はこの町の中央の大通りを進んで行つた。涯もなく竝んでゐる小舎の前を、かれこれ半時間も歩いて行つたときに、インファドオスは小さい小舎のかたまつて立つてゐる入口で止つた。この小舎の群には、さゝやかな庭がついてゐて、その庭には石灰が撒いてあつた。インファドオスはこれが吾々の宿だと告げた。

中へはひつて見ると、吾々にはめい／＼一軒づつ小舎があてがはれてゐた。この小舎は吾々が今迄に見たどの小舎よりも上等なもので、その中にはめい／＼鞆皮で拵らへた居心地の良い寢床が香草で編んだ敷物の上に展べてあつた。食事の用意も出来てゐたので、吾々が土甕に入れてある水で顔を洗ふと、すぐに數人の可愛らしい娘が、焼肉と玉蜀黍の穂とを木の盆に載せて、恭々しく吾々の前へ持つて來た。

食事がすむと吾々はベッドを一つの小舎の中へ移させた。娘たちはそれを見てくす／＼笑つてゐた。吾々は長い旅の疲れでベッドに横はるとすぐにぐつすり眠つてしまつた。

眼が醒めたときはもう陽は高く昇つてゐた。化粧等はしてゐないらしい附添の娘たちは、吾々が支度をする手傳ひをするやうに言ひつかつてゐたと見えて、もう既に小舎の中へ來て立つてゐた。

「フランネルの襪衣一枚と靴とを穿くのちや支度も何もいらぬや」とグッドはなきけなさうに云つた。「コオターメンさん、僕のツボンを買つて下さいよ」そこで私がそのことを頼んで見ると、あの有難い形見の品はもう既に國王に獻上したと言ふ返事であつた。吾々は附添の娘たちにちよつと外に出てゐて貰つて、こんな場合に出来るだけの身じまひをした。これには娘たちも驚いたと同時に失望した様子だつた。グッドは丁寧にも顔の右側をもう一度剃つた。左の方には毛がもちやくと生えてゐたが吾々は、そちらはさはつてはならんと云つてとめた。吾々はたゞ顔をよく洗つて髪を梳くだけで満足してゐた。

吾々が朝食を済し、煙草を喫かしてしまつた時分に、一人の使者がやつて來た。それは外ならぬインフアドオスであつた。彼はツワラ王はもう會見の準備が出来たから、いつでもお出でなさるやうにと告げた。

吾々は、旅で疲れてゐるからもう少し陽が高く昇る迄待つてもらひたいと答へた。野蠻人を相手にする時には、いつでも餘り急がない方がよいのだ。彼等はこちらが禮儀正しくすると反つてこちらを輕蔑するものだ。そこで吾々は早くツワラを見たくてたまらなかつたのだが、一時間餘りも腰をかけた待つてゐた。そしてその間に、吾々の乏しい所持品から、彼に獻上する品をえり出したりしてゐた。獻上品といふのはフェントフォードルが使つてゐたウインチェスター銃と若干の珠數玉とであつた。吾々はこの銃と彈藥とを國王に獻上し、珠數玉は后と宮女達とに獻上するつもりであつた。やがて吾々はもう支度が出来たからと告げて、インフアドオスに案内され、ウンボベに鐵砲と珠數玉とを持たせて出懸けた。

數百碼進んで行くと、吾々は一つの垣のところまで來た。それは吾々のあてがはれた小舎の圍りの垣と同じやうなものであつたが、大きさはその五十倍もあつた。垣の外側にはすつと小舎が列をなして並んでゐた。それは國王の后たちの住みかだといふことであつた。入口から眞正面には廣い空地を隔て、獨立した一軒の大きな小舎が建つてゐた。國王はそこに住んでゐたのだ。その他の小舎には凡そ七八千人もあらうかと思はれる軍隊がぎつしりとつまつて羽根飾りを風に靡かせ、ギラ／＼する

槍を持ち、鐵の裏のついた牛の皮の楯を持つて、銅像のやうに立ち列んでゐた。吾々はその中をすんずん進んで行つた。

大きな小舎の前の空地には數脚の腰掛が置いてあつた。吾々三人は、インフアドオスの合圖によつてそれに腰をかけ、ウンポバは吾々の後に立つてゐた。インフアドオスはいへば、彼は小舎の入口の側に席を占めた。かうして吾々は十分間かそこら死の如き沈黙の中に待つてゐた。八千對ばかりの眼で凝つと見詰められてゐるのだと思ふと、薄氣味の悪い法廷へ出たやうな氣がしたが、出来るだけ平氣をよそほつてゐた。その中にたうとう小舎の扉が開いて、立派な虎の皮を悠たりと肩へ掛けた大きな男がスクラツガ少年と、毛皮の外套に包まれた瘡せしぼんだ猿のやうなものとを連れて出て來た。大きな男は椅子に腰を掛け、スクラツガはその側に立ち、瘡せしぼんだ猿は、小舎の中の薄暗い物蔭へ行つて四つんばひになつてゐた。

それでもまだ靜まりかへつてゐて、誰も一言も言はなかつた。

やゝあつて、この巨漢は虎の皮を振り拂つて吾々の前に恐ろしい形相をしてたち上つた。それは實に嫌な顔をした巨漢であつた。この男の肩は黒人の肩のやうに厚ぼつたく、鼻は平べつたく、一つの黒い眼が爛々と光つてゐた。片一方の眼は顔の真中に穴になつて残つてゐるだけであつた。全體の容貌はこの上なく殘忍で肉感的であつた。大きな唇の上にはすばらしい白い駝鳥の羽根が立つて居り、身體にはぎら／＼光る鎖鎖を纏ひ、腰の圍りと右の膝とには、普通の白い牛の尾で捲へた環をつ

けてゐた。右手には大きな鎗を持ち、額には黄金の重い頸鎖をかけ、額には一つの大きな塚いてないダイヤモンドが鈍い光りを放つてゐた。

それでもまだ誰も一言も言はなかつた。しかしそれは長いことではなかつた。やがて國王らしい巨漢は大きな鎗をあげた。すると直ちに八千の鎗が上へあがり、八千の口から國王に敬意を表する聲が起つた。それは三度繰返され、その都度萬雷の墜ちるやうな響きが天地を震撼した。

「もつたいたなくも國王の御臨御ぢや」と細い甲走つた聲が聞えた。その聲は物蔭にゐた例の猿の聲らしかつた。

「國王様の御臨御ぢや」と八千の聲がこれに應じた。「もつたいたなくも國王様の御臨御ぢや」それからまた死のやうな沈黙にかへつた。だが暫くするとその沈黙は破られた。吾々の左りに列んでゐた一人の兵士が楯を落したのだ。楯は石灰石の床の上になが／＼と音をして落ちた。

ツワラは冷やかな眼を音のした方へ向けた。

「こちらへ來い」と彼は冷たい聲で云つた。

立派な若者が列の中から進み出て國王の前に立つた。

「楯を落したのはお前だな、このぶざまな、犬奴が。お前はどの星の世界から來られた客人の眼前でわしに恥をかゝせるつもりか、どうだ返事はあるか？」

かはいさうにこの若者は眞蒼になつてしまつた。

「過失で落したのであります、お、陛下」と彼は呟いた。

「では過失の償ひをせにやならん。お前はわしを馬鹿にしたのだ、覺悟をしろ！」

「私は國王の牛で御座います。牛のやうに殺して下さいませ。」と彼は低い聲で答へた。

「スクラツガ」と國王はどなつた。「お前の鎗の使ひ振りを見せてくれい。このぶざまな犬を殺してくれい！」

スクラツガは不機嫌な苦笑をして前へ進み出て鎗を取り上げた。哀れな犠牲者は手で眼を蔽ひながらちつと立つてゐた。吾々は恐ろしさに化石のやうになつた。

彼は鎗をりうくとしごいて突き刺した。鎗の穂先は犠牲者の身體を貫通して背中に突き出た。彼は兩手を舉げてばつたり倒れてしまつた。あたりからひそく嘯く聲が起つて、次から次へと雷のやうに鳴りわたり、やがて消えてしまつた。かうして悲劇は終りをづけ、屍骸はそこに横はつた。

「ふむ、立派な腕まへだ」と國王は言つた。「これをつれて行け！」

四人の男が列から進み出て、殺された男の屍骸を運び去つた。

「けがれた血に蓋をせい。蓋をせい！」と猿のやうな女のかな切り聲が聞えた。「王様の命令はもう果されたのぢや！」

すると一人の娘がカーテンの後から石灰を入れた甕を持つて前へ進み出で、赤い血のあとへそれを振り掛けて見えなくした。

サー・ヘンリーはこれを見て烈火のやうに憤つてゐた。實際吾々は彼をちつとさせて置くのに大へん骨が折れた。

「坐りなさい、お願いだから」と私は囁いた。「へたをする吾々の命が危いですから。」

彼はやつとのこと我を折つて靜かになつた。ツワラは悲劇の跡が取り片付けられるのを待つて、吾々に向つて言つた。

「色の白い客人、貴方がたは何處から、何をしにこの國へお出でなかつたか知らんが、ようお出でなかつた！」

「これはこれは、ククアナ王ツワラ、御機嫌よう」と私は答へた。

「色の白い客人、貴方がたは何處から何をしにお出でなかつた？」

「吾々は星の國からこの國を見物に來たのです。」

「ずる分違ひところから、つまらぬものを見物にお出でなかつたな。あの男もやはり星から來たのかな？」と言ひながら彼はウンボベを指さした。

「さうです、星の國にも矢張りこの國の人と同じ色をした人間が住んでゐるのです。だが星の國のことなんかもう訊ねないでほしい。」

「貴方がたは大きなことを言ひなされるが、こゝは星の世界からは遠いのですぞ、わしが貴方がたを今殺された兵隊のやうな目にあはせたらどうなさる？」

私は大聲を出して笑つた。その實心の中では笑ふどころでなかつたのであるが。

「お、國王！ 熱い石の上を歩くときは、足を焼かぬやうに氣をつけるがよろしいぞ。鎗は柄の方を持たぬと手が切れますぞ。吾々の髪の毛にちよつとでも手をふれたら貴方の身は破滅ですぞ」かう言ひながら私はインフアドオスとスクラツガとを指さして更に言葉をつけた。「この人たちは吾々の事を何と言ひました？ 貴方は吾々のやうな人間を見たことがありますか？」と言つて私はグッドを指さした。

「成程さう言ふ人は見たことはない」と國王はグッドをよく見ながら言つた。

「あの人たちは吾々が遠くから生き物を殺すことを話しましたか？」と私は續けて言つた。

「そのことは聞いた。がわしは信じん、わしにその殺すところを見せて貰ひたい。向うに立つてある奴を誰か一人殺して見せて貰ひたい。さうすればわしも信じる」と言ひながら彼は廣場の向う側を指さした。

「いや、吾々は正當に罰する時の外は人間の血を流さない。だが、たつてお望みとあるなら、貴方の家來に命じて、城門から牛を追ひ出さない。さうすれば二十歩と行かぬうちにその牛を殺して見せる。」

「い、や、人間を殺さなくちや、わしは信じん」と國王は冷笑しながら言つた。

「よろしい」と私は冷かに答へた。では國王、貴方が自分であちらへ歩いて行きなさい！ さうすれば

ば門まで行きつかない中に貴方を殺して見せる。それがいやなら貴方の息子のスクラツガをやりなさい！」實際私はその時、スクラツガを射つたら、どんなに愉快だらうと思つてゐたのだ。

これを聞くとスクラツガは吼えるやうな叫び聲をあげて小舎の中へ駆け込んだ。

ツワラは苦々しげに眉をひそめた。

「牛の仔を追ひ出せ！」と彼は言つた。

二人の男がすぐに走つて行つた。

「ヘンリーさん、今度は貴方が射ちなさい。あの野郎に魔法使ひは私だけでないことを見せてやりた

いのです」

そこでサー・ヘンリーは、エクスブレス銃を取つて身がまへた。

「うまく射てると良いがなあ！」と彼は唸つた。

「うまくやらなきやいけませんよ」と私は答へた。「最初の弾丸で失敗したら、もう一つ放ちなさい。照尺を百五十碼にしておいて、獸が横向きになるのを待つてゐるんです。」

それからしばらくたつと、一頭の牡牛が部落の門の方へ向つてまつしぐらに駆け出した。そして恰度門の處まで來ると、人が澤山あるので吃驚してこちらを向いて一聲吼えた。

「さあ今ですよ！」と私は囁いた。

彼は銃を取り上げた。

ズドン！ 牛は肋骨を討たれて宙を蹴つて仆れた、数千の観衆から感歎の吐息が洩れた。私は冷かに後を振り返つた。

「どうです國王、私は嘘をつきましたか？」

「いや本當だ！」と彼は少々怖氣づいた聲で答へた。

「よく聞きなさい、ツワラ！」と私に續けて言つた。「吾々は貴方と戦争をしに來たのぢやないのだ。」と言ひながらウインチェスター連發銃を取つて「この銃を貴方にさしあげる、これで何でも殺すことが出来るが、人間を殺してはなりませんぞ。これを人間に向けると自分が死にますぞ。これから私が試して見ませう。あの兵隊の持つてゐる鎗を、こちらへ、鎗の身に向けて地面に立てさせなさい。」直ちに鎗は地面に立てられた。

「よく見てゐなさい！ これからあの鎗を射つて見せる。」

私はよくねらいを定めて曳金を引いた。彈丸は鎗の刃にあたつてそれを粉微塵に碎いてしまつた。再び感歎の吐息が洩れた。

「さてツワラ、吾々はこの魔法の銃を貴方にさし上げる。だが星の世界の魔法を地上の人間に向けたらどうなるかよく氣をつけるんですよ！」かう言つて私は彼に銃を渡した。

國王は非常に要心してそれを受け取つて脚下に置いた。恰度その時に、小舎の蔭から瘖せしなびた猿のやうなものが匍ひ出して來るのが見えた。それは始めは四ん匍ひになつてゐたが、國王の坐つて

ある處まで來ると、足で立ちあがつて毛皮のかつきを拂いのけて、見るも怖ろしい形相を現はした。それは非常に年をとつた女のやうであつた。ひどくしぼんでゐるのでふかい黄色い無數の皺がよつてはゐたけれども、顔の大きさは赤ん坊位の大きさであつた。この皺の中に一つの裂け目がおちこんでゐた、それが口であつた。口の下には尖つた頤が外側へまがつてゐた。鼻は取りたて、言ふほどのものはなかつた。實際二つの大きな眼さへなかつたら、この顔は干乾びた屍骸の顔そつくりであつた。眼はまつ白な眉毛の下でキラ／＼と怪しく光つてをり、頭はすつかり禿けてゐた。しかし頭の皮はコブラの頭の皮のやうに伸びたり縮んだりしてゐた。

この悚然とするやうな怖ろしい顔をした老婆は、しばらくぢつと立つてゐたが、やがて一時もある爪のついた干乾びた手を伸して、それをツワラ王の肩におき、鋭い金切聲を出して言つた。

「王様よ聞きなされ！ 軍人共も聞け！ ククアナ人の住家なる山も野も川も聞け！ 空も日も雨も嵐も霧も聞け！ 生きとし生けるものは悉く聞け！ 死して甦りてまた死するすべてのものも聞け！ 命の精がわれに乗り移つた！ われは豫言する！ 豫言する！ 豫言する！」

その言葉は微かな號泣になつて消えていつた。それを聞いた人々の心は恐怖のために縮みあがつたやうに見えた。吾々も悚然とした。

「血！ 血！ 血の川！ そこらぢゆうが血だらけだ！ 血が見える！ 血の匂ひがする！ 血の味がする！ 鹹からい！ 血が地上をまつ赤に流れる！ 空から雨のやうに降つて來る！

「鷲音！ 鷲音！ 遠くから白人の鷲音が聞える。地が震ふ、大地が其主人の前でぶるく震ふ！
「良い血だ。まつ赤な血だ。今出たばかりの血のやうに腥くはない、ライオンがそれを舐めて吼える！ 兀鷹がそれで翼を洗つて喜び叫ぶ！」

「わしは年をとつてゐる。わしは老人だ！ わしは澤山の血を見て来た。は！ は！ だが死ぬまでにもう一度血を見て喜ぶのだ！ わしをいくつだと思ふ？ お前達の父親もわしを知つてゐた。その父親もわしを知つてゐた。その父親の父親もわしを知つてゐた。わしは白人を見たことがある。白人の望みを知つてゐる。わしは年をとつてゐる。が山はわしよりもつと年をとつてゐる！ あの街道を造つたのは誰ぢや言つてくれい？ 岩に繪を描いた人は誰ぢや教へてくれい！ 向うに竅穴を見下してゐる三つの山をこさへたものは誰ぢや知らせてくれい！」と言ひながら、吾々が前夜見た嶮しい三つの山を指さした。

「お前達には判らないが、わしには判つてゐる。白人はお前達より前からゐたのぢや！ そしてお前達よりも後までゐるのぢや！ そしてお前達を亡ぼしてしまふのぢや！ さうぢや！ さうぢや！ さうぢや！」

「魔術の巧みなら何でも知つてゐる、強い、恐るべき白人は何をしに來たか？ お、國王！ そなたの額にある光つた石は何ぢや？ そなたの鎧は誰がこしらへたのぢや。そなたは知らぬがわしは知つてゐる。この老婆は、この物識りは、この魔法使は知つてゐる！」

それから彼女は禿げた頭を吾々の方へ向けた。「お前達は何をしに來なかつた？ 星の國の、さうぢや星の國の白人がた？ なくなつた人を捜しなさるのか？ その人は此處には居らぬ！ こゝには居らぬ！ すつと昔からこの土地を踏んだ白人は無いのぢや！ たゞ一度しか無いのぢや！ そしてその人はこゝを去つて死んでしまつたのぢや。お前達は光る石を探りにお出でなかつたのぢやらう。わしはそれを知つとる。わしはそれを知つとる。だがお前たちがそれを見出すときにはもう血が干乾びてゐる。だから、お前達は來た道を引返しなさるか、それとも此地に留まりなさるか？ は！ は！ は！」

「それからそこに黒い色をして威張つてゐるお前！」と彼女は干乾びた指でウムボバを指さしながら言つた。「お前は誰ぢや？ そして何が欲しいのぢや？ 光る石ではなからう。黄色い金でもなからう、お前の心臓の血の匂ひがわかるやうに思ふ。帯を解け！ ——」

こゝまで云つたときこの不思議な老婆の顔はひきつた。そして彼女は癩癩を起して泡を噴きながら地上に仆れ、そして小舎の中へ連れて行かれた。

國王は慄へながら立ちあがつて手を振つた。すると忽ち軍隊は解散しはじめ、十分間も経つと、吾々と、國王と、數名の従者とを除いて廣場は空つぽになつた。

「色の白い客人！」と彼は言つた。「わしは貴方がたを殺さうと思ふのぢや。ガゴメルが妙なことを言つたから！」

私はからくと笑つた。「氣をつけなさるがい、ぞ國王、吾々は、さう易々と殺されやしないぞ。あの牛を見なされたか、あんたはあの牛のやうになりたいのか？」

國王は眉をひそめた。「國王などを脅すものぢやありませんよ！」

「吾々は脅してゐるんぢやありません。眞實の事を云つてゐるんだ。吾々を殺さうとして見なさい。さうすれば眞實か諛かわかるから。」

巨大な蠻人は額に手をのせて考へ込んだ。

「おとなしく行きなさい」とたうとう彼は言つた。「今夜は大舞踏會があるからそれをお目にかける。今夜のところはわなにかけるやうなことはしないから心配しなされるな。しかし明日になつたらまた考へて見る。」

「よろしい」と私は無雜作に答へた。そして吾々はインフアドオスを連れてたち上り、吾々の小舎の方へ歸つて行つた。

第十章 魔法狩り

吾々は小舎へ着くとインフアドオスに吾々と一緒に小舎の中へはひるやうに言つた。

「インフアドオス、吾々はあるに話したいことがある」と私は言つた。

「どうぞ言つて下さい。」

「インフアドオス、ツワラ王はずるぶる殘忍の人のやうに見えるな。」
「さうで御座いますよ。あの人の殘酷のために國中は泣いてゐるので御座います。今夜御覽になれば判りますが、今夜は魔法狩りがあるので御座います。そして大勢の者が魔法で嗅ぎ出されて殺されるので御座ります。誰一人の命だつて、安全ぢやないので。國王が或る男の家畜や、女房を欲しがつたり、或はまた、或男が叛反をけしかけやしないかと疑つたりしてゐると、あんた方が御覽になつたあのガゴオルか、またはあの老婆に魔法を教はつた他の魔法使どもが、その男を嗅ぎつけて、その男を殺して終ふのです。今夜の月が消えてしまふまでには、澤山の人が死ななくちやならぬのです。いつでもさうでした。ことによると私も殺されるかもしれません。これまで私が助かつてゐたのは、私は戦争が上手で外の兵隊から愛されてゐたからです。だがこれから先きどれだけ生きのびられるか私にもわかりません。國中がツワラ王の殘虐をこぼしてゐます。あの人とあの人の亂暴なやりくちとを憎んでゐるので御座ります。」

「では人民はなぜ彼を倒してしまはんだね、インフアドオス？」

「そりやあの人は國王ですから、それにあの人が殺されりやスクラツガが代つて王位につきますが、そのスクラツガは又父親のツワラに輪をかけた腹黒です。もしスクラツガが王になればツワラよりもつと酷い虐政を布くにきまつてゐます。それにしてもイモツが殺されずにゐれば、或ひはまた、その子のイグシノが生きてゐたらこんなことはなかつたであらうに、をしいことに二人とも死んでしま

ひました。」

「どうしてあなたはイグノシの死んだことを知つてゐるのです？」と吾々のうしろから一つの聲が言つた。誰だらうと思つて驚いて振り返つて見ると、それはウンボバであつた。

「何を言ふんだね、お前は。誰がお前に話をせよと言つたかね？」とインファドオスはたづねた。

「まあ聞きなさい、インファドオス」と彼は答へた。「あなたに一つ話をきかしてあげる。もう何年も前に、イモツ王はこの國で殺されて、イモツ王の妻は子供のイグノシをつれてこの國から逃げたとあなたはいふのですね？」

「左様。」

「その女と子供とは山の上で死んだと言はれてゐるのですね？」

「その通り。」

「ところが、此の母子は死んではゐなかつたのですよ。彼等は山を越えて、放浪者の群に交つて沙漠を横ぎり、水や草や木のあるところまで辿りついたのです。」

「まあ聞きなさい。二人の母子は何箇月も何箇月も旅をつづけてゆくうちに、たうとう、このククアナ人と同じ血統のアマズル人といふ人間の住んでゐる國へ着き、そこに滞在してゐるうちに母親は死んでしまつたのです。そこで子供のイグノシは、また放浪者になつて、白人の住んでゐる不思議な國を旅をして歩き、それから何年もの間白人の學問を學んだのです。」

「そりや面白い話だね」とインファドオスは疑はしきうに言つた。

「それから何年かの間彼はその地で人に使はれたり、兵隊にはひつたりして過してゐたが、心の中では、母親から聞いた自分の身の上のことを一刻も忘れず、死ぬまでにどうかして、生れた國へ歸つて自分の臣民を見たいものだと思つてゐたのです。そのうちに時が來たのです。彼は、この國へゆきたといふ白人の一行に會つて、その一行に加はつたのです。この白人たちは、行方不明の一人の人をたづねて、焼けるやうな沙漠を越えて、ククアナの國へ來て、あなたに會つたのですよ、インファドオス。」

「お前はたしかに狂人だ！」とこの老将は吃驚して言つた。

「さう思ふなら、證據を見せませう、叔父さん。僕はククアナの正當な國王イグノシです！」

かう言ひながら、彼はするりと腰帶を切り落して、吾々の前に裸體で立つた。

「見なさい！」と彼は言つた。「これは何です？」とかう言つて彼は腰のまはりに青く刺青してある大蛇を指した。蛇は彼の腿と腰との境目のところで、口をあいてその尻尾を咬へてゐた。

インファドオスは眼の玉が飛び出るほどに驚いて見てゐたが、やがてその場に跪づいた。

「これはお見せしました！ これはわしの兄の子だ、國王だ！」と彼は叫んだ。

「僕がさう言つたぢやありませんか、叔父さん？ 僕は今ではまだ國王ぢやありませんが、これから、あなたの助けをかりて、それからこの勇ましい白人の方々の助けを借りて國王になるのです。し

かし、ガゴオル婆の言ふ通りです。先づはじめには、この國に血を流さなければなりません。その時にはあの婆の血も流れることになるのですよ。あいつは僕の父を殺し、僕の母を追拂つた奴だから。さてインフアドオス、あなたは僕の両手の中へ手を入れて僕の部下になりますか？ あなたはこれから先、僕と危険をともにして、僕を助けて、あの暴君を、人殺しを、討ち倒しますか、それともいやですか？ どちらかきめて下さい。」

老人は頭へ手をあて、考へてゐたが、やがて、起ち上つて、ウンボバ實はイグノシの方へ進み寄り、彼の前に跪いて、彼の手をとつた。

「ククアナの正當な國王、イグノシ、私はお前の両手の中へ手を入れて、死する迄お前の臣下となることを誓ひます。お前が赤ん坊の時分にわしはお前を膝の上のせてあやしたもんだが、こん度はこの老いた腕で、お前と自由とのために戦ふのだ。」

「さうですか、叔父さん、若し僕が勝つたらあなたはこの國で國王に次ぐえらい人になります。敗けたところで死ぬだけでせう。それに、どの道あなたの命はさう長くはないでせう。さあ叔父さん、立ちなさい。」

「それから白人のお方々、あなた方も私を助けて下さいますか？ もし私が勝つたときは何をさしあげたらよいでせう。白い石がお望みなら、持てるだけそれを持つて行つて下さい。それで承知して下さいますか？」

私はこの言葉を通譯した。

「あの男は英國人を見損つてゐると云つてやつて下さい。」とサー・ヘンリーは答へた。「寶物もそりや結構だし、手にはひれば持つて行くが、紳士といふものは寶物のために身を賣りはしない。だが私はウンボバは好きだったから、私の力にかなふことなら、あの男を援けてやるつもりだ。あの残忍な悪魔のツワラと雌雄を決するのは面白い、諸君はどうです、グッド君、それからコオターメンさん？」

「無論私はあの男を援ける」とグッドは云つた。「しかしツポンを穿くことを許すことだけ約束して貰ひたい。」私はそれを通譯した。

「有難う、承知しました」とイグノシは言つた。「ではマクマザンさん、あなたも私を援けて下さいますか？」

私はしばらく考へてゐたが、手で頭を搔いた。

「ウンボバ、いやイグノシ」と私は云つた。「わしは革命は嫌ひだ、わしはおとなしい人間で、その上少々臆病者だ——こゝでウンボバはちよつと微笑した。——「しかし、わしは友達には忠實だ。お前は吾々に忠實に仕へてくれて、下男の役目さへしてくれたのだから、わしもお前のためには一肌脱ぐ。だがいゝかね、わしは商人だから自分の口すきをしなくちやならん、だからわしは、お前がさつき言つたダイヤモンドがもしも手にはひつたら、それは頂戴するよ。それから吾々は御承知の通りヘンリーさまの行方不明の弟さまを捜しに來たのだから、この方を捜すについては、お前も一つ骨を

折つていたゞきたい。」

「それは云ふまでもないことです」とイグノシは答へた。「インフアドオス、僕の腰の圍りにある蛇のしるしに契つて訊ねるが眞實のことを云つて貰ひたい。本當にあなたはこの國へ白人の來たのを知りませんか？」

「ちつとも知りません。」

「もし白人が來たことがあるなら、あんたの耳にはひるわけでせうな？」

「それは確かにはひつたゞらうと思ふ。」

「只今お聞きの通り御舎弟はこの國へはお見えにならんさうです」とイグノシはサー・ヘンリイに向つて云つた。

「よし／＼」とサー・ヘンリイは吐息をしながら言つた。「あいつはこんなに遠くまで來てゐなからうと私も思つてゐた。可哀さうな奴だ。可哀さうな奴だ。これですつかり吾々の計畫も駄目になつたんだ。だがこれも神様の思し召しだ。」

「ところで」と私は、こんな哀しい問題から話をそらさうと思つて口を出した。「正當な權利によつて國王になるのは大へん結構だが、それにはどう云ふ手段をとるのだね？」

「僕にはわかりませんが、インフアドオス、あんな何か名案がありますか？」

「左様、今夜は大舞踏會と魔法狩りとがあるから」とインフアドオスは答へた。「澤山の人々が魔法婆に

嗅ぎ出されて殺されるに相違ない。すると他の者は心の中でそれに同情してツワラ王の處置を憤慨するにきまつてゐる。舞踏が濟んだら私が二三の隊長に話して見る。そしてその隊長が承知さへすれば彼にそのことを部下の軍隊に話してもらふやうにする。私ははじめにそつと話して見て、お前が眞の國王だと云ふ證據を見せるために隊長どもを連れて來る、さうすれば明日の朝までにはお前の部下には二萬の鎗を持った軍隊が出來ると思ふ。これから私は行つていろ／＼用意をしよう。舞踏會が濟んだときまだ私が生きてゐたら、そして吾々が皆生きてゐたら。此處でまたお目にかゝつていろいろ相談をさせよう。よく行つても戦争はまぬかれませぬな。」

恰度この時國王からの使が來たので吾々の話は中絶された。吾々は小舎の入口まで進んで行つて使の者共に中にはひれと命令した。すると間もなく三人の男がめい／＼立派な鎖鎧と戦斧とを持つてはひつて來た。

「星の國の白人の方々へ國王からのお土産で御座います」と使ひの者と一緒に来た一人の傳令が云つた。

「國王に御禮を申す、よく傳へてくれ。」と私は答へた。

使ひの者が行つたあとで吾々は非常な興味を持つてその鎧を調べて見た。それは驚くべき立派な鎖鎧であつた。下に置くと兩手で握るには少し大きすぎる位の鎖の塊りになつてしまつた。

「これはこの國で拵へるのかね、インフアドオス？」と私は訊ねた。「ずゝ分綺麗なものだね。」

「いゝえ、これは私共の先祖から傳はつたもので御座います。誰が造つたものかわかりません。それにもう少し、か残つてゐませんので、今では王族の者しかこれを身につけることは出来ないので。これは不思議な鎧で、どんな鎧でもこれを通すことは出来ないのです。これを着て居れば戦争に行つても殆んど安全です。國王はよつほど氣にいつた者か、ひどく恐れてゐる者にしかこの鎧はくれないのです。よくよくあなたがたを恐れてゐる證據でござりますよ。今夜はあなた方自身でお召しになつた方がよいでせう。」

その日の残りの部分を吾々は靜かに休み、且つ興味あるその場の形勢を語りながら過した。そのうちに日が暮れて、澤山の篝火が燃え出すと、闇の彼方から大勢の人の聲音や、がちや／＼言ふ鎧の音などが聞えて來た。軍隊が大舞踏會に參列するために指定の場所へ集つて行くのだ。やがて満月が晃晃として輝き出した。吾々が月の光りを見ながら立つてゐると、インファドオスが武裝した二十人ほどの護衛兵を連れてやつて來た。この護衛兵が吾々を舞踏會場へ連れて行つてくれるのだ。吾々はインファドオスのすゝめによつて、國王から貰つた鎧鎧を着てその上へ吾々の普通の着物を着てゐたが、驚いたことにはこの鎧は大して重くもなく、また着工合が悪くもなかつた。非常に大きな人のために造つたもの見えて、グッドと私には少しゆるかつたが、サー・ヘンリーの偉大な體格には手套のやうにしつくりあつた。それから吾々は腰のまはりに短銃を忍ばせて、手には國王から貰つた戦斧を持つて出懸けた。

その朝吾々が國王に引見された大きな小舎の前に着くと、その小舎の圍りには二萬人ばかりの軍隊が隊伍を作つて整列してゐた。聯隊は幾つかの中隊に分れ、中隊と中隊との間には小さい道が出來てゐた。そこを魔法使があちこち歩き廻るのだ。彼等は完全に沈黙してゐた。そして月の光りは林立した鎧の上に、彼等の堂々たる風姿の上に、風に揺く羽根飾りの上に、さまざまの色をした楯の上に、降りそゞいでゐた。

「これでこの國の軍隊は全部だらうな？」と私はインファドオスに云つた。

「いゝえ、これで三分の一ですよ」と彼は答へた。「毎年、こゝへ出るのは三分の一です。あとの三分の一は人殺しがはじまつたときに、騒ぎが起るのを防ぐために、外側に集つてゐるのです。それから一萬人の軍隊は宮殿の周圍を護衛して居り、殘餘の軍隊は地方の村落を守備してゐるのです。」

「みんな黙つてゐるね。」とグッドは云つた。

私はそれを通譯した。

「死の影が頭の上を氣味わるくうろついてゐると誰も物などは言へないのです」とインファドオスは陰氣に答へた。

「澤山殺されるのかね？」

「澤山殺されるのです。」

「まるで費用を惜まずにかけた、格闘の見世物を見るやうですね」と私は他の者に云つた。

サー、ヘンリイは身を慄はした。グッドはもう出て行きたいと言った。
「吾々も危険なのだらうか？」と私はインファドオスに訊ねた。

「それはわかりませんがね。しかし恐れるには及びません。今夜一晩生き伸びさへすればもうしめたも
のです。軍隊は國王に不平を鳴らしてゐますからね。」

その間に吾々は廣場の中央の方へ進んで行つた。そこには數脚の腰掛が置いてあつた。吾々が進ん
で行くともう一組の一行が小舎の方からこちらへやつて來るのが見えた。

「あれはツワラ王と息子のスクラツガと、ガゴオル婆とです。一しよについて來る連中は、今夜人を
殺す奴等なんです」と言ひながらインファドオスは十二人ばかりの巨大な物凄い顔つきをした壯漢の
群を指さした。彼等は片手に鎧を持ち、片手に重い棍棒を持つてゐた。

國王は眞中の腰掛けに着席し、ガゴオルはその脚下にうづくまり、他の者は國王の後に立つた。

「これは、これは、ようこそ、色の白い客人」と吾々が傍へ行くとツワラは叫んだ。「さあ腰をお掛け
なさい。貴重な時間を空費してはなりません。夜は短かいですから。でも恰度良いところへお出で
なされた。これから素的な見世物が見られますよ。あたりを御覽なさい」と彼は意地悪さうな一つの
眼をぎよろりとまはして整列してゐる軍隊を見まはした。

「こんな光景を見たことがありますか。どうです、悪い事をした奴は天の審判を恐れてブル／＼慄へ
てるぢやありませんか？」

「はじめ！ はじめ！」とガゴオルが鋭い金切り聲を出した。「鬣狗が飢ゑて食べ物を欲しがつて吠え
てゐる。はじめ！ はじめ！」

しばらくの間四邊は水を打つたやうに静まり返つた。

國王は鎧をあげた。すると突然二萬人の足がまるで一人の足のやうに上げられて再び地面に下り
た。これが三四回繰り返され、堅い地面もそのために地響きした。その時ずつと遠くの方で一人の人
間の悲しきうな歌聲が起つた。その最後の文句は次のやうな文句であつた。

「女の腹から生れた人間の運命はどうなる？」

すると凡ての人の咽喉が鸚鵡返しに答へた。

「死！」

その中にだん／＼多くのものがその聲に和して歌ひはじめ、たうとう全軍隊が合唱をはじめたの
で、歌の文句はちつとも聞きとれなかつた。或る時は戀歌になり、或る時は軍歌になり、最後には死
の歌になつて胸を裂くやうな號泣に終つた。

再び廣場は沈黙に返つた。が再びその沈黙は國王が手を擧げたために破られた。すると忽ちばたば
たと音が聞えて、軍隊の中から奇妙な恐ろしい姿をした人間の群が吾々の方へ走つて來た。近寄つて
來るのを見ると、皆それは年取つた女で、白髪を後へ流してゐた。その白髪には魚の體から採つた小
さい水胞の飾りがついてゐた。顔は白と黄色との縞に塗られ、蛇の皮を脊にたらし、腰の圍りには人

間の骨でこしらへた輪をガチャ／＼さしてゐた。そしてめい／＼しなびた手に小さな又のついた杖を持つてゐた。皆で十人であつた。彼等は吾々の前へ來ると立ち止つて、その一人が自分の持つてゐる杖で蹲つてゐるガゴオルの方をさして叫んだ。

「お母さん！ 年取つたお母さん！ 皆まゐりました！」

「よし！ よし！ よし！」と老婆は答へた。「お前達の眼は見えるかね？ 暗いところが見えるかね？」

「お母さん見えます！」

「よし！ よし！ よし！。お前達の耳はあいてゐるかね？ 舌で言はない言葉が聞えるかね？」

「お母さん聞えます！」

「よし！ よし！ よし！ お前達の五官は覺めてゐるかね？ お前達は血の臭ひがわかるかね？ この國から王様にはわかる悪者を淨めることが出来るかね？ わしが智慧と魔法とを授けてやつたお前たちに、上帝の審判ができるかね？」

「お母さんできます！」

「では行け！ ぐづ／＼するな、兀鷹ども。色の白い客人が早く見たがつてうづ／＼してゐなさる、早く行け！」

ガゴオルの恐ろしい手下どもは氣味の悪い叫び聲をあげて、腰の圍りに干乾びた骨を、ガチャ／＼

させながら、八方へ散らばつて軍人の群の中へ潛り込んだ。吾々は皆のものを見てゐる譯にいかないで、一番近くにある魔法婆だけを見てゐた。彼女は軍隊の群から五六歩ばかりのところまで立ち止つて、無氣味な踊りを踊り初めた。信じられないほどの速さで、ぐる／＼廻りながら「悪者を嗅ぎつけた！」「母親殺しが傍にある！」「王様に邪心を持つてゐる者が側にある！」等と叫んだ。

彼女の踊りは益々速くなつて行き、昂奮の餘り齒を喰ひしばつて泡を吹き、眼が顔から飛び出しさうになり、肉は目に見えるほど慄へて來た。突然、彼女は獵犬が獲物を捜しあてたときのやうに、ぱつたり踊りをやめてかたくなり、杖をのばして前にゐる軍隊の方へそろ／＼匍ひ出した。彼女が近づいて來ると、軍人どもは平素の大膽さを失つてしまつて、彼女からみじろぎした。吾々は恐ろしさと怖いもの見たさで、息を殺して彼女の一舉一動を見てゐた。

突然、最後が來た。彼女は氣味悪い叫びをあげながら飛び上つて、又のある杖で一人の脊の高い軍人に觸つた。すると忽ちその兩隣りにゐた二人の仲間の軍人が、この男の兩腕を擒へて國王の方へ連れて行つた。

彼は抵抗はしなかつた。しかし彼の手足は極擧したやうにひきつけ、手に持つてゐた鎗は地上に落ち、指は生れたばかりの子供の指のやうに自由がきかなくなつた。

この男がやつて來ると二人の獯猛な死刑執行人が前へ進み出て、命令を待つものゝやうに國王を見上げた。

とツワラ王は數へた。すると死骸は五六歩さきへ曳きすつて行かれて、そこに投げ棄てら
らぬうちに、又次の犠牲者が屠殺場へ連れて行かれる牛のやうに連れられて来た。今度の
外套をつけてあるところから見ると、身分のあるものらしかった。再び恐ろしい命令が下
は死んで仆れた。
と國王は數へた。

ろしい遊びは續いて行き、かれこれ百人ばかりの屍體が吾々の後に列になつて横はつた。
一の格闘競技の話やスペインの闘牛の話聞いたことがあるが、それ等のものもククアナ
と比べると半分も恐ろしくはないだらうと思ふ。格闘競技やスペインの闘牛は、せめて見
みにはなるが、この魔法狩りはそれとは譯が違ふのだ。どんなにひやく／＼することの好き
、この次には自分の番かも知れんなぞと思つてゐた日にはたまつたものでない。

「殺せ！
「殺せ！
「殺せ！
この言
他の男は
「二人！
れた。

これが
は豹の皮
され犠牲
「二人！
かくて
私はシー
の魔法狩
物人の樂
な人だつ

は立ち上つて諫めようとしたが、ツワラは頑として肯かなかつた。
相に適用しなければなりません。この犬どもは悪い奴なのです。悪い奴が死ぬのは國家の
な」と彼は答へた。

にこの騒ぎは一まづ歇んだ。魔法婆どもは血腥い仕事に飽きたと見えて一處にかたまつた
はもう終つたのだらうと思つた。ところがさうではなく、間もなく、驚いたことには、ガ
止ち上つて、杖にすがりながらよろ／＼と廣場へ出て来た。この恐ろしい禿げ頭の老婆が
知んど二重になつたからだに、徐ろに力を集中して、ぐる／＼廻つてゐる光景は物凄いと
とも言いようがなかつた。彼女はあちこち走りまはつてゐたが、やがて或る聯隊の前に立
の高い男を杖で觸つた。その時、聯隊の中にはうめき聲が起つた。たしかにその男は聯隊
た。でもやはり二人の士官が彼の兩手をとつて彼を所刑場へ連れて行き、彼は殺されてし
「百三つ」と數へた。するとガゴオルはまた跳び上つて、今度はだん／＼吾々の方へ近
さつと吾々がやられるのだぜ」とグッドが恐怖の叫びをあげた。

一度吾々
「法律は嚴
爲ですから
十時半頃
ので、吾々
ゴオル婆が
寄る年波に
も氣味悪い
つてゐた春
長だつたの
まつた。

莫迦な！」とサー・ヘンリーは言つた。
が踊りながらだん／＼吾々の方へ近づいて来るのを見たとき私の心臓はほんたうに滅入つ

國王は
づいて来た
「こん度は
「莫迦な！
この老婆

と國王が言つた。
とガゴオルが叫んだ。
とスクラツガが嗚れ聲で言つた。
木が殆んど終らぬ中に恐ろしい處刑が行はれた。一人の男は犠牲者の心臓へ鎗を突き刺し、
大きな棍棒を脳天へ打ち下した。

てしまふやうな気がした。ちらりと後を見ると、後には長い死骸の列がよこたはつてゐる。私は胴顛ひした。

ガゴオルは、まるで生きて、曲つた杖のやうな恰好をして踊りながらこちらへ近づいて来た。彼女の両眼はぎろ／＼と呪はしく輝いた。

彼女はますます近づいて来た。場内の群衆は固唾を呑んで彼女の一举一動を見守つてゐた。遂に彼女は起ち上つてきつとなつて吾々の方を指さした。

「誰だらう？」とサー・ヘンリーが獨り語を云つた。

だが忽ち疑問は霽れた。老婆はいきなり突き進んで来てウンボバ、いやイグノシの肩に觸つた。

「こいつだ！」と彼女は金切聲を揚げた。「こいつを殺せ！ こいつを殺せ！ こいつの胸には謀叛心がみちてゐる！ こいつを殺さんと血の川が流れる！ お、國王！ こいつを殺しなさい！」

その時ちよつと間があつたので私はすかさず口を出した。

「お、國王！」と私は席から立ち上がりながら叫んだ。「この男はあなたの客人の從者だ。吾々の從者の血を流す奴は、吾々の血を流すも同じだ。私は斷然この男を保護します！」

「魔法婆のお母さんのガゴオルが嗅き出したんだからこの男は殺さなくちやならん！」と國王は膨れ面をして答へた。

「いや殺させぬ！」と私は答へた。「この男に指一本でも觸れたらその者を殺してしまふ。」

「きやつを擒へろ！」とツワラは處刑人に怒鳴つた。すると處刑人どもは吾々の方へ進んで来て、もじもじしてゐた。イグノシは鎗を取上げて、そんなにやすつぽく命を賣つてたまるものかと言ふやうな様子をしてゐた。

「さがれ、犬ども！」と私は叫んだ。「この男の髪の毛にでも觸つたが最後、貴様等の王の命はないぞ！」と言ひながら私はツワラにピストルを向けた。サー・ヘンリーもグッドもピストルを取り出した。サー・ヘンリーは處刑人の首長に銃口を向け、グッドはガゴオルの方へ銃口を向けた。

ツワラは私の銃口が、彼の胸のあたりへまつすぐに向けられてゐるのを見て、眼に見えるほど慄へた。

「さあどうだ、ツワラ！」と私は言つた。すると彼は「まあ魔法の筒はしまひなさい。今日はあなたがたを款待するやうに約束したのだからこの男は許すことにしよう。あなた方を恐れてゐるのぢやないのですぞ、おとなしく歸りなさい。」と言つた。

「よろしい」と私は無雜作に答へた。「吾々は人殺しを見るのには飽きて、眠くなつて来た。「踊りはもう濟んだのかね？」

「もう濟んだんだ」とツワラは不機嫌に答へた。そして長い死骸の列を指さしながら。「この死犬どもを兀鷹に投げてやれい！」と言つた。

やがて軍隊が解散し初めたので吾々も立ち上つて小舎へ歸つた。

小舎へ歸つてランプに火をつけて坐ると、ウンボバは吾々に向つて涙を流しながら言った。「有難う御座いました皆様。この御恩は決して忘れはしません。」

「ところでインファドオスはどうしたんだらう」とグッドが言った。

「今に來ますから待つておませう」とウンボバは答へた。

そこで吾々は煙草に火をつけて待つた。

第十一章 天の助けの月蝕

長い間、かれこれ二時間もの間、吾々は黙つて坐つてゐた。餘りに恐ろしい光景を見たので吾々は物も言へなかつたのだ。そのうちに恰度吾々が寝ようと思つてゐたところへ、どや／＼と聲音が聞えた。入口にある番兵が誰何してゐるらしかつた。しかしこれも無事に済んだと見えて、聲音はずんずん近づいて來て、やがて、インファドオスは五六人の嚴めしい顔をした士官を連れてはひつて來た。「皆様！ それからククアナの正當な國王イグノシ！ 私はお約束通り、この方々を連れて參りました。」と言ひながら彼は首長等を指さして言つた。

「この方々はいづれもその命令のもとに手足の如く動く三千宛の手兵を持つて居られます。私は自分の見たこと、聞いたことをこの人達にお話し、ておいたから、この人達にもお前の腰の圍りについてある聖蛇のしるしを見せてお前の身の上話を聞かせて上げなさい、イグノシ！ さうすればこの人達

はお前の下についてツワラ王に反逆するかどうかを決めなさるだらうから。」

返事をするかはりにイグノシは、また彼の腰帶を解いて、腰の圍りに刺青してある蛇を見せた。首長等はかはるがはる側へ寄つて薄暗いランプの光りでそれを調べて一言も言はずに引き下つた。

するとイグノシは腰帶をつけて、彼等に向つて今朝の物語りをもう一度繰り返した。

「お聞きの通り、かゝいふ譯なのですが、どうです皆さん、この人を助けて父親の王位に即かせて下さる、かそれともお嫌ですか？」と話の終るのを待つてインファドオスは言つた。「人民はみなツワラを呪つてゐます。人民の血は泉から出る水のやうに流れてゐます。今夜もその血の流れるのを見ました。私がない／＼當にしてゐた二人の首長も今では野獸の餌食になつてゐます。あなた方もぐ／＼してゐるとそれと同じ目に逢うでせう。で、どうしますか？」

六人の中で一番年長の、脊の低い、すんぐりした、白髪の軍人が前へ進み出て答へた。

「あなたの仰言るとほりです。私の兄弟も今夜殺されてしまひました。しかし、これは一大事ですから、うかと信じる譯にもいきません。こちらの計畫が成就する前に、血の川を流さなくちやなりません。まだ多くのものは國王方へつきますからな。人間といふものはまだ昇らない太陽よりも、今空に輝いてゐる太陽を崇拜するものですからな。ところで、星の世界からおいでになつたこの色の白い客人は、大變魔法がお上手で、イグノシを助けて居られると云ふことだが、若しイグノシが正當な國王であるなら、この方々にそのしるしを示して、吾々にも國民にも見せて戴きたいものです。さうすれ

ば人民は白人たちの魔術に感歎して吾々の味方になるでせう。」

「諸君は蛇のしるしを見たではないかね？」と私は言った。

「それだけちやいけません、蛇はあの人の子供の時分からあるのですから、その他にしるしを見せていたゞきたい。私どもはしるしを見るまでは動きません！」

一同の者もこれに同意したので、私は弱つて、サー・ヘンリーとグッドとを振り返つて、此の場の事情を説明した。

「良い考があるから、ちよつと考へさしてくれとあの連中に言つて下さい」とグッドが言った。

私とその旨を告げると首長等は退席した。彼等が出て行くとグッドは薬のはひつてゐる小函を開けて手帳を取り出し、その表紙の見返しについてゐる曆のところをあけた。「明日は六月四日ですな？」と彼は言った。

吾々は日日はよく勘定してゐたので、さうだと答へた。

「しめた！ これを御覧なさい！——『六月四日グリニツチ時八時十五分より月蝕皆既初まる。南アフリカのテネリフより見ゆ……』これですよ、彼等に明日の晩、月を暗くして見せると言つて見なさい！」

これは素的な思ひつきだつた。たゞ心配なことは、グッドの曆が正確かどうかと言ふ點であつた。若しこんなことで間違つた豫言でもしたのなら、吾々の化の皮は剥がれてしまひ、イグノシがクク

アナの王位につく機會もなくなつてしまふ譯だから。

「その曆は大丈夫かね？」とサー・ヘンリーはグッドに言った。

「間違ひつこはありませんよ」と此の間に何か一生懸命に手帳に書いてゐたグッドは答へた。「月蝕の時間間違ひのあつたことなどはこれまでにだつてありませんからね。それに特に南アフリカで見えるところまで書いてあるのであります。私は今吾々のある場所の経度をほゞ見當をつけて計算してみました、それによると、こゝでは明日の晩のほゞ十時頃から月蝕がはじまつて、十一時半頃まで續くことになります。一時間半程の間は全く暗くなる譯です。」

「ではまあやつて見るか！」とサー・ヘンリーは言った。

私も心許なくは感じたがそれに同意した。といふのはもし雲つた晩でもあつたら困るからだ。しかし一かばちかやつて見ることにして、吾々はウンボバに首長等と呼んで来るやうに言った。彼等が歸つて来ると私は彼等に向つて次のやうに言った。

「ククアナ軍の首長諸君、それからインフアドオスもよく聞きなさい。吾々はみだりに吾々の力を示すことは好まんが、今は一大事の場合止むを得んから、皆の者に見えるやうなしるしを示すことにする。こちらへ来なさい」と言ひながら彼等を小舎の入口へ連れて行き、まさに沈まんとしてゐる月を指さした。

「あれは何だね？」

「あれは沈みか、つてある月です」と一行の代表者が答へた。

「あの月が沈まない中に月の光りを消すことが人間の手で出来るかね？」
すると彼は少し笑つて言つた。「途方もない、そんな事は人間業では出来ません。月は人間よりも強いのですから。」

「ところが明晩夜中から二時間半ほど前に、吾々は一時間半ばかりの間あの月を消して見せる。地上をまつ暗にして見せる。それがイグノシがククアナの王であるしるしだ。さうすれば諸君は満足するだらうな？」

「はつ！ その時には吾々は満足致します」と老首長は微笑しながら云つた。皆の者も微笑した。

「實は明日の日没から二時間後にツワラはお客様方を招待して娘どもの踊りを御覧に入れることになつてゐます」とインファドオスが言つた。「そして踊りがはじまつてから一時間たつと、ツワラが、その中から一番美しいと思ふ娘を向うの山に坐つてこちらを見てゐる『無言の神』への犠牲として息子のスクラツガに殺させることになつてゐます」と言ひながらソロモン街道の終點になつてゐるといふ妙な形をした三つの峰を指さした。「その時にお客様がたが月を暗くして、その娘の命を救つて下されば人民はすつかり信じてしまひます。」

「さうだ、なるほどさうすれば人民は信じる！」と老首長は微笑をうかべながら言つた。

「宮殿から二哩ばかり離れてゐるところに」とインファドオスは續けて言つた。「新月のやうな形を

した小山があります。私の部下の一聯隊とこの方々の指揮してゐなされる三聯隊とがそこに駐屯してゐます。それに、朝になるともう二三聯隊そこへ集まるやうに手筈をしておきます。で、若しあなた方が眞實に月の光りをお消しになるならば、その闇に乗じて私はあなた方を宮殿からそこまでお連れ申します。さうして私どもはツワラ王に對して、戦を開くことに致します。」

「それでよし！」と私は言つた。「これから少し眠つて、魔法の支度をせねばならぬから、もう行きなさい。」

インファドオスは起ち上つて吾々に敬禮して首長等を連れて出て行つた。

「皆さん」と彼等の出て行くのを待つてイグノシが言つた。「あなた方は眞實にそんな不思議なことがおできになるのですか？ それともあの連中に出鱈目を言つたのですか？」

「確かに出来ると思ふんだよ、ウンボバ、いやイグノシ。」

「妙ですな。あなた方が英國人でなければ私は信じないのですが、英國の紳士は嘘をつかんと云ふこととですからね。若し今度の事がうまくいつたら私はきつとお禮をいたします。」

「イグノシ、たつた一事だけ約束してくれんか」とサー・ヘンリイは言つた。

「何でも約束します。どういふ約束です？」

「それはかうだ。若しお前がこの國の王になつたら、ゆうべみたやうな魔法狩りだけはよしてほしいのだ。裁判もせず人間を殺すことだけは止してくれんか？」

私がそれを通譯するとイグノシはしばらく考へてゐたあとで答へた。

「黒人の習慣と白人の習慣とは違つてゐますし、黒人は人間の命を餘り尊重してはゐないので、私はその事を約束しませう。私の力でできる限り魔法狩りは禁止して、審問も裁判もせず、人を殺すことのないやうにしませう！」

「ではそれで約束は済んだから少しやすまう」とサー・ヘンリーは言つた。

吾々はすつかり疲れてゐたので、すぐにぐつすり眠つてしまひ、十一時頃にイグノシが起してくれ、るまで眠り續けた。それから、吾々は起き上つて顔を洗ひ、腹一杯朝の食事をした。それがすむと、吾々は小舎の外を散歩して、ククアナ人の小舎の構造を調べたり、女の習慣を見たりした。

「月蝕がうまくあればいゝがなあ」とサー・ヘンリーはやがて言つた。

「若しなかつた日には大變だ」と私は答へた。「吾々が普通の人間であるつて、ことが判つたら、あの首長等はすぐに國王にすつかり話をするだらう、その時にはとんだ月蝕が起りますからな。」

そのうちに陽が沈んで、一二時間も経つと、八時半頃になつてツワラの使がやつて來た。そして、これから愈々娘どもの踊りが初まると告げた。

吾々は急いで鎧鎧をつけ、鐵砲と彈藥とを持って大膽に出懸けて行つた。しかし私は心の中では恐ろしさに慄へてゐたのである。宮殿の前の廣場は昨夜とはがらりと様子が變つてゐた。今日は兵隊の代りにククアナの娘どもが澤山隊をなして集つてゐた。着物はあまり着飾つてゐなかつたが、頭に花

冠をかむり、片手に棕櫚の葉をもち、片手には高い白百合の花を持つてゐた。ツワラ王はそのまん中に座を占め、その脚下にはガゴオルが蹲まつて居り、インフアドオスト、スクラツガ少年と、外に十二人の護衛兵とがそばに立つてゐた。その外に二十人許りの首長らしい士官も列席してゐたが、その中には昨夜會つた連中も大部分まじつてゐた。

ツワラは、吾々には見かけだけは丁寧に挨拶したが、一つの眼で意地悪るさうにウンボベを睨んでゐた。

「ようこそ、星の國のお客さん！」と彼は言つた。「今夜の見ものは昨夜のとはまた違つたものです、昨夜のやうに面白いものぢやありません。女の接吻ややさしい言葉も良いが、軍人の鎧の音や血の匂ひとは比べものになりませんからな。どうですこの中にお氣にいつた娘はありますか。あれば遠慮なく幾人でも連れて行きなさい。」

「有難う國王、だが吾々白人は吾々のやうな白人としか結婚しないのです。あなたの國の娘さん達も綺麗だが、吾々の女房には出來ないのですよ！」

國王は笑つた。「は、さうですか。この國にはかういふ俚言がありますな。「色は異つても女の眼に變りはない」てね。それからまた「そばに居る女と浮氣しろ。居ない女は當にならん」といふ俚言もあります。しかし星の國では譯が違ふでせうな。白色の人間の住む國ではどんなことだつてありますからね。だがまあそれはさうとようこそお出でなかつた。それからそこにある黒いのもよう

来た。ガゴオルが強情を張れば今頃はお前の體は冷たくしやちこばつてゐたところだ。お前も星の國から来て果報ものだな、は、は、

「僕が死ぬよりさきにあんたを殺して見せる。僕の手足が曲らなくなるよりも前にあんたの體が硬くなつてしまふよ」とイグノシは落ちついて答へた。

ツワラはぎよつとした。「お前はなかく大膽なことを言ふな、餘り高言を吐かぬがよいぞ」と彼はがみ／＼答へた。

「眞實を語るものは皆な大膽だ。眞實は的を外れつこのない鋭い鎗だ。」
ツワラはしかめつ面をして一つの眼をざろりとさせたがそれきり何も言はなかつた。

「さあ踊りははじめろ！」と彼は叫んだ。すると花冠を冠つた娘等は、隊を作つてやさしい唄を歌ひながら、棕櫚の葉と白百合の花とをてんでに振りかざして前へ飛び出した。娘等は月の光りを浴びて踊り續けてゐたが、遂に踊りをやめて一人の美しい娘が列から飛び出し、吾々の前で爪先き立ちになつてぐる／＼舞ひはじめた。その踊りは大抵の Ballet の踊り子もかなはぬほど巧みであつた。やがて彼女が力が盡きて後へ退くと、別の女が現はれて次々に同じやうな踊りを踊つた。しかし美しさから言つても、踊りのうまさから言つても、第一の娘にかなふものはなかつた。

「どれが一番綺麗だと思ひますかね。色の白い客人？」と彼は訊ねた。
「一番はじめのが美しい」と私は何の氣もなしに言つた。がすぐにそれを後悔した。といふのは、イ

ンフアドオスが一番美しい娘が犠牲にあげられるのだと言ふたのを思ひ出したからだ。

「では、あんたの心と私の心とは同じだな。あんたの眼と私の眼とは同じだな。なる程あの娘が一番美しい。だがそれはあの娘にとつちや氣の毒だな、そのために死ななくちやならんのだから。」

「さうだ、死なねばならぬ！」とガゴオルが、まだ怖ろしい自分の運命も知らずに、他の娘の群から十碼ばかり離れた處に立つて、自分の花冠から神經質に花瓣をむしつてゐた憐れな娘の方をチラリと見ながら、金切り聲で叫んだ。

「それはどうしてだね、國王？」と私はやつとの事で怒りを抑へながら言つた。「あの娘は上手に踊つて吾々を喜ばしてくれたし、其上あの娘は美しいのに、それだから殺すといふのは酷いぢやないか。」
ツワラは笑ひながら答へた。

「それはこの國の習慣ですからな」と言ひながら彼は遠くに聳えてゐる三つのみねを指さして「向うに黙つて坐つてゐる神様は、取るべきものを取らなくちやならんのだ。わしが今日一番美しい娘を殺さなければわしの一家に禍が来る。この國ではかう云ふ豫言が信じられてゐるんですわい『國王が娘踊りの當日に山の神に一番美しい娘の犠牲を供へなければその國王の門は亡びてしまふ。』つてね。前の代にこの國を治めてゐたわしの、兄は娘の涙にほだされて、その犠牲を供へなかつたものだから、一家は没落してしまつて、その代りにわしが王位についたわけだ。どうしてもあの娘は殺さなくちやならん」それから彼は護衛兵の方へ向いて「あの娘を此處へ連れて來い！ スクラツガ、鎗の

用意はよいか？」

二人の壯漢が前へ進んで行くと、娘ははじめて自分の身にさし迫つた運命を知つて、けたましい泣き聲をあげながら逃げようとした。しかし壯漢は彼女をしつかりつかまへて、泣きながらもがいてゐる娘を吾々の前へ連れて來た。

「お前の名は何と言ふのぢやな？」とガゴオルが言つた。「返事をしなければ國王の王子に仕事をはじめて貰はうか？」この言葉を聞くと殘忍な顔をしたスクラツガは一步前へ進み出て、大きな鎧を取り上げた。その時、グッドの手が短銃の方へそつと下りて行くのを私は見た。哀れな娘は涙に曇つた瞳できらきら光る刃物を見て、もう逃げようともがくのをやめ、両手を痙攣的に握り締めながら、頭の頂きから足の爪先まで慄へて立つてゐた。

「見ろ！ この娘はわしの小さなおもちやを見たゞけで、まだその味もわからぬうちから慄へてゐる！」とスクラツガは有頂天になつて叫びながら鎧の身をたゞいた。

「今に見てゐろ！ どんない目に遇ふか、この小犬奴！」私はグッドがかう囁いてゐるのを聞いた。

「さあもう静まつたからお前の名を言ふのだよ、良い子だ、恐い事はないからさあ名前を言ひな！」とガゴオルは憎々しげに言つた。

「お、お母さん！」と娘は慄へながら答へた。「妾はファウラタと申しまして、スコ家の者で御座います。お、お母さん、どうして妾は殺されねばならんです？ 何も悪い事はしないのに？」

「泣くな！ 泣くな！」と老婆は毒々しい口調で續けた。「お前は向うの山に坐つていらつしやる神様の犠牲として死なねばならんだ。しかし晝間苦しんで働くよりも、夜眠る方がよい。生きてゐるより死ぬ方がよいのだよ。それにお前は國王の王子に手づから殺されるのだぞ！」

娘のファウラタは苦悶のために両手をねぢまげて大きな聲で叫んだ。「それは餘りです、妾のやうな若い者を、妾は何のとがで明日の朝日も、明日の晩の星も見られんやうになるのです？ 露に濡れた花を摘むことも、水の笑ひ聲を聞くことも出来なくなるのです？ あ、もうお父さんの小羊も見られなくなり、お母さんに接吻をしても貰へなくなり、病氣の山羊を世話することも出来なくなるのです。戀人に抱かれて眼を見て貰ふことも出来なくなり、男の子を生むことも出来なくなるのです。あんまりです！ あんまりです！」

かう言ひながら彼女は再び両手をねぢまげて涙に濡れた、美しい、絶望に沈んだ顔を空へ向けた。この姿を見たら、こゝにある三人の惡魔以外の人間なら、誰でもほろりとして許してやる氣になつたであらう。

護衛兵やその場に列席してゐた首長等の顔には憐愍の色が見えたが、ガゴオルと國王父子とはそんなことでは少しも動かされなかつた。グッドはひどく憤慨して今にも援けに行きかねまじきそぶりをしてゐた。女といふものは眼敏いもので、この哀れな娘はグッドの心の中を讀んだのか、すばやく身を動かして彼のそばへ駆けつけ、彼の「美しい白い脚」を両手で掴んだ。

「お、星の國の旦那様、どうぞ妾をかばつて下さい！ あなたのお力で妾をお助け下さい！ あの殘酷な人々とガゴオルとから妾を守つて下さい！」

「よし来た、娘さん、わしが引受ける」とグッドは昂奮したサクソンなまりで言つた。「さあ立ちなさい、良い娘さんだね」と言ひながら彼は腰をかゝめて彼女の手をとつた。

ツワラは横を向いて息子のスクラツガに合圖をした。すると彼は鎗をとつて前へ進み出た。

「さあ今度はあなたの番だ。何をぐづくしてゐるのです？」とサー・ヘンリーは私に囁いた。

「月蝕を待つてゐるんですがねえ、もう半時間もちつと月を見てゐるんだが、まだちつとも變りがないのです」と私は答へた。

「だが今やらなければあの娘は殺されてしまふ。ツワラはもう獨眼玉を破裂さしてゐますよ。」

それは尤もだと思ひながら私は念のためにもう一度月を仰いで見た。どんな熱心な天文學者が自分の學說を證明するために天體に起る出來事待つてゐるときだつて、その時の私ほどの熱心をもつて天體を見つめてはゐなかつたらう。しかし結果はやはり駄目だったので、私は精一ぱいの威嚴を保つて、ひれ伏してゐる娘とスクラツガの突き出した鎗の穂尖との間へ進んで行つた。

「國王、そんなことをしてはいけません！、吾々は黙つて見てゐる譯にいかん。この娘は許してやりなさい！」と私は言つた。

ツワラは驚いて烈火の如く怒りながら起ち上つた。その場にあらぶ首長連や悲劇を見ようとして

だん／＼吾々の方へすり寄つて來てゐた娘等の間から驚きの囁きが洩れた。

「そんなことをしてはいけません、この白犬奴！ ライオンの洞穴の前で吠えてゐる白犬奴、してはいけませんだつて！ 貴様たちは氣が違つたのか？ よく氣をつけて物を言はぬと貴様たちも捲きぞへを喰はずぞ、一たい貴様たちは何者ぢや？ わしの邪魔をするなんて。下れ！ さあ、スクラツガ

あの娘つ子を殺してしまへ！ 護衛の者ども此奴等をふん縛つてしまへ！」

この聲に應じて武装した者どもが小舎の後から出て來た。前もつて用意してゐたものらしい。サー・ヘンリーと、グッドと、ウンポバとは私の兩側に並んで銃をとり上げた。

「やめろ！」と私は大膽と叫んだ。しかし心の中ではびく／＼ものだつたのだ。「やめろ！ 吾々星の國の人間の命令だ。その娘を殺してはならぬ。一步でもこちらへ寄つたら、月の光りを消して下界をまつ暗にしてやる！」

私の脅しはきゝめがあつたと見えて、者どもはたゞ／＼とした。スクラツガは鎗を持つたま、吾々の前に立つてゐた。

「は！ は！ は！」とガゴオルは金切り聲で笑つた。

「この嘘つきは月の光をランプのやうに消すなんて、さあ消して見ろ！ 消えたら娘は助けてやる。消えなかつたら娘もろとも殺してしまへ！」

私は絶望の眼で空を見上げた。すると嬉しや！ 吾々は——いや吾々ぢやない曆は——間違つてゐ

なかつた。おほきな天體の周縁にかすかな影がさしはじめ、煙のやうな色が明るい月の面を蔽ひはじめた。

まつ黒な影はだん／＼と明るい月の面に浸蝕してあつた。群衆の間から深い恐怖の喘ぎが起つた。「見よ！ 國王！」と私は叫んだ。「見よ！ ガゴオル！ 首長たちも、人民も、女どもも見よ。星の世界の白人の言ふことが諺か眞實かを見よ！

「月は汝等の前で暗くなつて行く。今にまつ暗になるだらう。満月の夜に月がまつ暗になるのだ。お前たちは驗しを求めた。今それを見せてやる。お、月よ！ 暗くなれ！ 清らかなる聖なる月よ！ お前の光りを隠してしまへ！ 奢れる人の見せしめにこの下界をまつ暗にしてしまへ！」

恐怖の呻きが見物人の中から起つた。恐ろしさに茫然としてしまつたものもあれば、地べたに跪いて高い聲で叫んだものもあつた。國王はうす穢い皮膚の下でまつ青になつてちつと坐つてゐた。ただガゴオルだけはびくともしなかつた。

「今にやんでしまふ！」と彼女は叫んだ。「わしはかういふことは前にも見たことがある。誰にだつて月の光りは消せはしない、元氣を出すんだ！ 影は今に通り返してしまふ！」

黒い環はだん／＼と月の面に廣がり、群衆は物も言はずにうつとりとして空を眺めてゐた。不思議な、呪はしい影が月の面を蔽うてゆくにつれて、四邊はしんと静まり、森羅萬象は死の如く静かになつた。この嚴肅な沈黙の中に時は刻々と過ぎて行き、満月はだん／＼深く地球の影に没して行つた。

影はますます／＼月の面に匍ひよつて、もはや月の面を半分以上も浸蝕して行つた。四邊は薄暗くなつて群衆の兇猛な顔も殆んど見えなくなつた。群衆の間からはごとりとといふ音もしなかつた。

「あ、月が死んで行く！ 白い魔法使が月を殺してしまつた！」とたうとうスクラツガがわめいた。そして恐怖と怒りとの餘り鎗を振つて力一ぱいサー・ヘンリーの胸を打つて突いた。だが彼は吾々が國王から貰つた鎧を着物の下に着てゐることを知らなかつたのだ。鋼鐵の鎧は鎗を弾ね返した。そしてスクラツガが二度目に突きかゝつて来るまでに、サー・ヘンリーはスクラツガの手から鎗を奪つてそれを彼の體に突き刺してしまつた。スクラツガはごろりと仆れて死んだ。

これを見て恐怖にうたれた娘等はきやあ／＼わめき聲をたてながら門の方へ逃げ出した。國王も護衛兵や首長等の一部分とガゴオルとを連れて小舎の中へ逃げこんでしまつた。あとには吾々と殺されかゝつたファウラタと、インファドオスと、前の晩に會つた首長等の大部分とがスクラツガの死體と共に残された。

「皆さん！」と私は首長等に向つて言つた。「吾々はしるしを見せました。これで満足されたなら一刻もはやく昨日の話の處へ行かう。闇は一時半ばかりも續く筈だから、その間に逃げて行くことにしよう」

「こちらへ」とインファドオスは先に立つて行つた。首長等も吾々もその後を續いた。グッドは、ファウラタの手を取つて行つた。

吾々が宮殿の入口まで着かぬうちに月はすつかり見えなくなり、まつ暗な空から星の光りが輝き出した。

てんでに手をつなぎ合せて吾々は躓きながら闇の中を進んで行つた。

第十二章 戦闘の前

幸にもインファドオスと首長等とはこの大きな町の道をすつかり知つてゐたので、闇にもかゝらず吾々はすん／＼進んで行くことができた。

一時間餘りも歩き續けてゐるうちに、漸く月蝕は過ぎきつて、はじめに消えて行つた周縁の方が再び見えるやうになつて來た。五分間も経つと星の光りはだん／＼褪せて行つて、どうにか四邊が見える程明るくなつた。吾々はもう町の外へ出て、大きな頂きの平らな小山の方へ近づいてゐた。この小山は南アフリカにはよくあるもので、餘り高くはなく、一番高い處でせい／＼二百呎位なものであつたが、馬蹄形をしてゐて、周囲は相當峻しく、それに石だらけだつた。頂上の草原は廣々とした練兵場で少なからぬ軍隊がそこに駐屯することが出來た。平時はこの小山にある守備隊は三千人の兵員からなる一聯隊であつたのだが、吾々が峻しい坂道を攀ち登つて、微かな月光で見ると、その晩には數個聯隊の兵がそこに駐屯してゐた。

やがて小山の頂きに着くと眠りから醒めた人々の群が、今しがた日撃した自然現象を恐ろしがつて

一處に集つて慄へてゐた。吾々は物も言はずにその中を通りすぎて、小山の中央にある小舎に着いた。そこには、驚いたことには、二人の男が吾々が慌て、國王の小舎の中に殘しておいて來た荷物を持つて來てくれてゐた。

「私（わたし）がこれを取りにやつたのです」とインファドオスが説明した。「それからこれも持つて來ました」と言ひながら、彼は、長い間なくなつてゐたグッドのツポンを取り上げた。

「まさかあの方は『美しい白い脚』をかくしておしまひにはならんでせうな？」とインファドオスは残念さうに叫んだ。

しかしグッドはどうしても承知しなかつたので、それきりククアナ人は彼の美しい脚を見ることは出來なくなつたのだ。それから以後は彼等はグッドの片頬の髻と彼の透き通つた眼と、動く齒とだけ、彼等の審美的憧憬を満足させねばならなかつた。

インファドオスはなほもグッドのツポンを飽かず眺めてゐたが、やがて吾々に向つて、夜が明けるとすぐに首長等が叛逆をするに至つた顛末を説明し、正當な王位の繼承者イグノシを紹介するために各聯隊に整列するやうに命令しておいたと告げた。

そこで朝日が昇るとククアナ人の精華とも云ふべき約二萬の軍隊が召集された。軍隊は方形の三邊に厚い列を作つて整列し、吾々はその空いてゐる一邊に席を占めた。吾々の周圍には忽ち、主だつた首長と將校とが集つて來た。

インフアドオスはこれ等の軍隊を静めて、一同に向つて力強い巧みな辯説をふるつてイグノシの父の物語り、彼がツワツ王のために卑怯な手段で殺されたこと、彼の妻子は追放されて飢ゑてゐたことなどを話した。それから彼は人民がツワツ王の暴政の下に塗炭の苦しみを嘗めてゐることを指摘し、前夜の例をひいて多くの貴族たちが叛反人の名によつて虐殺されたことを指摘した。次で彼は星の世界の白人達がこの國を見下して人民の苦しみを眺め、長い道中をいとはずに遙々やつて來られたといふ次第を語つた。そして、彼等は追放されて困苦を嘗めてゐたククアナの眞の王イグノシを連れて、山を越えてこの國へお出でになり、ツワツラの暴虐を見かねて、娘のフアウラタの命を救ひ、魔法をもつて月の光りを消し、惡魔の子スリラツガを殺して、これから吾々を助けてツワツラを亡ぼし正當な王イグノシを王位につかせて下さるやうになつたのであると語つた。

彼が稱讚の囁きの中にこの演説を終ると、今度はイグノシが出て演説を初めた。彼は叔父のインフアドオスが言つた話を繰返し、最後に雄辯をふるつて次のやうに言つた。「お、ククアナの將卒、並びに人民諸君、諸君は吾が言葉を聞かれた。諸君は吾と、吾が王座に坐つてゐる彼、兄を殺し兄の子を追放して殺さうとした叔父のツワツラと何れかを選ばねばならぬ。吾が眞の國王であることはこの首長等が説明することゝなつてゐる。彼等は吾の腰の圍りにある蛇の姿を見たのである。若し吾が國王でなかつたならこの白人たちが魔法をもつて吾を助けて下さる筈はない。諸君、この白人たちはツワツラを困らせ、吾々を無事に逃がして下さるために月の光りを消して下さつたのだ！」

「然り」と軍人等は答へた。

「吾は國王である！ 汝等に告げる、吾は國王である！」とイグノシは威大なる體軀をぐつと伸し、廣身の戰斧を頭上高くさし上げながら續けて言つた。「もし諸君の中にさうでないと言ふものがあるならば前へ進み出よ、吾はこの場でその男と雌雄を決し、戦ひの血祭とする」と言ひながら彼は大きな戰斧を振つた。斧の刃はギラ／＼と日光を受けて輝いた。誰もこれに應ずるものがなかつたので、イグノシは更に言葉を續けた。

「吾とともに戦ふものはもし我軍に利あらば勝利と光榮をわれと共にするであらう。吾は諸君に牛と女とを與へるであらう。もし戦ひ利あらずばわれは諸君と共に仆れるであらう。」

「吾は戦ひに先だつて諸君に約束する。もし吾が父祖の王座についたならば、流血の慘事はかたく禁ずる。諸君はもはや虐殺者を恨まなくてもよくなる。魔法婆に嗅き出されて理由もなしに殺されることもなくなる。國法に觸れたもの以外は殺されることはなくなる。諸君は枕を高くして眠ることが出来るやうになる。ククアナの將卒及び人民諸君、決心はつきましたか？」

「吾々は決心しました、お、國王」と一同は答へた。

「よし、見よ、ツワツラの傳令どもは首都の中を右往左往して吾と諸君とそれからこゝに居られるわが保護者とを仆すために大軍を集めてゐる。明日か明後日には彼は彼を奉ずる部下の大軍を率ゐて攻め寄せるであらう。ククアナの將卒及び人民諸君、これで話は終つた。めい／＼小舎に歸つて戦の用

意をせられよー」

暫らくすると一人の首長が手を舉げて「萬歳」と叫んだ。それは軍人等がイグノシが國王であることを承認したしるしだつたのだ。それから彼等は隊伍をつくつて進み出した。

半時間の後、吾々は軍事會議を開いた。その時には聯隊の首長は全部出席してゐた。遠からぬうちに敵の大軍が吾々を攻撃して來ることは明白であつた。小山の上から見ると軍隊が續々と召集され、傳令が櫛の齒をひくやうに市中を往來してゐるのが手にとるやうに見えた。疑ひもなく、國王は軍隊を召集してゐるのだ。吾々の味方には國內の粹をすぐつた七箇聯隊の兵が約二萬人居た。インフアドオスと首長等との計算によると、國王の部下には現在少くも三萬から三萬五千の兵が集つて居り、明日の正午までには外に五千以上の援軍が集まるであらうとの事であつた。勿論その中には國王を見棄て、吾々の軍に投ずるものもあるかもしれないが、それは當にならないことであつた。その間にも吾々を鎮壓するための準備は着々と進んでゐた。既に小山の麓には武装した強力な部隊が、吾々の動靜を偵察に來て居り、その外にも將に來らんとする攻撃の兆候は隨所に見えた。

しかしインフアドオスと首長等との意見によると、その日は攻撃はないだらうといふことであつた。といふのは、いろいろ準備もあることだし、昨夜の月蝕によつて沮喪した軍隊の士氣を鼓舞する必要があつたからだ。彼等の意見によると攻撃は明日だらうと言ふことであつた。

吾々の方でも陣地を固めるために百方手段を講じた。男子は殆んど總出でその日の中にいるんなこ

とをした。小山へ登る道には石を積んで通れない様にし、その他いろいろな方法で上へ登つて來られないやうにした。山上の處々には石ころを積み重ねて敵が登つて來るときにそれをころがすやうに準備を整へ、各聯隊の受持場所をきめて、萬端の手筈を整へた。

丁度夕刻前に、吾々が憩んでゐると、國王の宮殿の方から小部隊の軍隊がこちらへ進んで來るのが見えた。その中の一人は軍使のしるしとして棕櫚の葉を手持つてゐた。

彼が近づいて來るとイグノシとインフアドオスと一二の首長と吾々とは山の麓へ下りて彼に會見した。彼は瀟灑たる風采の男で、豹の皮の正服を着けてゐた。

「國王に對して不届きな謀叛を計るものどもへ國王から使に參つた。ライオンの踵につきまといふ豺どもへライオンから使に參つた。」

「用事を言へ！」と私は言つた。

「國王のお言葉だ！ もはや宣戰のしるしに黒牛の肩を引き裂いて、國王自から、この血に塗れた牛を陣地へ追ひ出された。大事に至らぬうちに國王に降伏したらどうだ？」

「ツワラはどう言ふ條件を出してゐるのだ？」と私は物好きに聞いて見た。

「國王の條件は大王にふさはしい極めて寛大なものだ。國王はかう仰せられた「わしは少しばかりの血で我慢する。十人につき一人づゝ殺して、残りの者は許してつかはす。だがスクラツガを殺した白人と、わが王位を僭奪せんとする彼の從者の黒人と、吾に謀叛を煽動せるわが弟のインフアドオス

とは無言の神の冒瀆者としてなぶり殺しにする。」これがツワラ王の慈悲深いお言葉だ。」

暫らく相談したあとで、私は一緒についてきた兵卒等にも聞かせるやうに大聲で答へた。

「汝を使に寄來したツワラの許へとつとと歸つて言へ！ 吾々ククアナの眞の王イグノシと、月の光りを消した星の世界の三人の賢者と、王族のインフアドオスと將卒及び人民とは、この小山の上に集合してゐると告げい！そして吾々は降伏等はずせん、これから二度目の太陽が沈むまでに、ツワラの死骸はツワラの門前で硬くなり、ツワラのために父を殺されたイグノシが彼に代つてこの國を統御するのだと答へる！ 鞭で追ひ歸されん中にさつさと歸つて行け！あとで貴様の方から手を擧げて降伏しないやう氣をつける！」

すると軍使は大聲で笑つた。「そんな大言壯語に恐れると思ふか」と彼は叫んだ。「明日もその元氣でお目にかゝらうぜ。鳥に骨を啄かれるまではまあさんざんはしやいであるがよい。事によると明日は戦場でお目に懸るかもしれん。その時には星の世界へ遁け歸らないでわしを待つてゐてくれ！頼むぞ！」かうした毒言を吐いて彼が走つて行くとすぐに陽は沈んだ。

その夜は忙しい夜であつた。吾々は疲れてはゐたけれども、月の光りを使いりに明日の戦の準備を續けて行つた。吾々の會議をしてゐた處から傳令は織るが如くに行つたり來たりした。そのうちに眞夜半から一時間半ばかり過ぎると、準備はすっかり出來上つて陣中はひっそりと静まり返り、時々歩哨の誰何の聲が聞えるばかりとなつた。サー・ヘンリーと私とは、イグノシと一人の首長とに伴はれ

て小山を下りて前哨陣地を視察した。吾々が進んで行くと、時々思ひ懸ない場所から月の光でキラキラ光る鎗の穂先が出たが、吾々が合言葉を言ふと又消えてしまつた。見張の者は誰一人として眠つてゐるものはない事がそれで判つた。それから吾々は澤山の眠つてゐる戦士の間を通つて歸つて來た。

恰度夜明け頃、私はインフアドオスに起された。彼は國王の宮殿では既に大活動が始まつて、國王方の斥候は吾々の前哨線に出没してゐると告げた。吾々は起ち上つてめい／＼鎖鎧を着けた。これがあつたので吾々は非常に有難かつた。サー・ヘンリーは「郷に入れば郷に従へちや」と言ひながら、インフアドオスに頼んで士人の軍服を用意してもらつてそれを着た。士官の着る豹の皮の外套を首の圍りに結びつけ、額には高級將校だけのつける黒い駝鳥の羽根飾りをつけ、腰には白い牛の尾の腰帶を巻きつけた。足には革靴を穿き、犀の角の柄のついた重い戦斧を持ち、白牛の皮の裏打ちをした丸い鉄の楯を持ち、所定の投げ槍を携へ、その外に一挺の短銃をつけ加へた。野蠻な服装ではあつたが、私はサー・ヘンリー・カーチスのこの時の姿位立派な姿は餘り見たことがないと言はざるを得ない。實際彼がイグノシと二人で同じ服装をして列んでゐる姿は實に堂々たるものだつた。グッドと私ともほぼ同じやうな服装をして、鎖鎧を着け、槍と、楯と、二挺の投げ槍と、その外に銃を持つことにしたが、銃は彈藥も乏しくなつてゐたし、それに接戦の場合には間に合はんので、吾々の後から人足に持つて來てもらふことにした。

吾々は交度がつつかり終ると、大急ぎで食事を済まし、それから動靜を見に出懸けた。小山の上の

平地の一點に褐色の石で拵らへた小さな塔のやうなものがあつた。それは司令部にもなり、物見櫓にもなるやうに造つたものであつた。インフアドオスはそこで部下の聯隊に取り巻かれてゐた。この聯隊は白髮聯隊と云つて、ククアナ軍の中でも最も精銳な軍隊であつたのだ。この聯隊は豫備軍として控へてゐたので、兵卒等は草原の上に隊を作つて横はりながら、國王の軍勢が長い蟻の行列のやうな縱隊を作つて宮殿から匍ひ出してくるのを見てゐた。果しなく長い三つの縱隊にはそれ／＼一萬二千の兵卒が屬してゐるらしかつた。

これ等の軍勢は町を出ると聯隊に編成され、三隊に分れて第一の隊は右の方に進み、第二の隊は左の方に進み、第三の隊は徐々に吾々の正面に迫つて來た。

「敵は三方から吾々を攻め寄せるんだな！」とインフアドオスは言つた。

これは甚だ重大な、情報であつた。といふのは、小山の上の吾々の陣地は、周圍が一半も埋あるの比較的劣勢な防御軍は出来るだけ兵力を集中することが必要だつたからだ。しかし吾々には敵がどの方向から攻めて來るか判らなかつたので、臨機應變の處置をとることにし、各聯隊はそれ／＼部署を定めて別々の攻撃に對抗する準備をするやう命令しておいた。

第十三章 攻撃

三つの縱隊は急がず騒がず徐々に進んで來た。中央の縱隊は、吾々から約五百碼の地點迄來ると、

「まづそこに停止して、友軍が同じ位の距離まで達するのを待つてゐた。この作戰の目的は三軍が同時に攻撃するために相違なかつた。

「あ、機關銃が一つあつたらなあ！」とグッドは眼下に迫つて來る敵軍を見ながら唸つた。「さうすれば二十分間にあの野原を綺麗にしてやるんだがなあ！」

「ないものは仕方がないさ、だがコオターメンさん、あんた一つ鐵砲を射つて見ませんか」とサー・ヘンリーは言つた。「向うに指揮官らしい男が立つてゐるでせう。あの男から五碼以内の處へ彈丸が落ちたら見物ですがなあ。」

これを聞いて私は憤然とした。そこでエクスブレス銃に彈丸を込めて、件の指揮官が吾々の陣地を良く見るために、一人の從卒を連れて本隊から十碼ばかり前へ進み出るのを待ち、私は銃を岩の上に載せて照準を定めた。この小銃は三百五十碼までしか照準がきかないのであるから私は首の邊りをねらへばちやうど胸に當るだらうと計算した。指揮官はどつと立つてゐたのでねらひを定めるには非常に都合がよかつたのだが、風の工合か、それとも昂奮してゐたせゐか、彈丸は指揮官には當らないで、三步ばかり左の方にあた從卒が地べたに仆れた。私のねらつた士官はひどく慌て、從卒のそばへかけ寄つた。

「うまい！ コオターメンさん！ あんたはあの士官を吃驚させたよ。」とグッドは叫んだ。

私はそれを聞くと癪にさはつた。といふのは私は皆の見てゐる前で鐵砲を射ち損なふなんてことは

實にいま／＼しかつたからだ。人間が或る一藝に長じてゐる場合には、その一藝だけでは評判を落したくないものだ。一生鐵砲で渡世して来た私が、鐵砲を射ち損じたとあつては弓矢八幡に申譯けがない私は今の失敗にやつ氣になつて、亂暴にも、その士官が走つてゐる處を狙つて第二彈を放つた。すると哀れな士官は忽ち兩腕を伸して前へのめつた。

この白人の魔法を見て、聯隊の者どもは夢中になつて喜び、勝利のさいきよしと言つてはやした。それと同時に私のために射ち殺された指揮官の部下の聯隊は混亂して後へ下つた。サー・ヘンリーとグッドとも彼等の銃を取り出して射ち出し、私もそれから一二發射つて、何でも都合七八人の敵を仆した。

恰度吾々が銃を射つのをやめたとき、遙か右手の方から氣味の悪い喊聲が聞え、續いて左の方からも同じやうな喊聲が起つて来た。

この物音を聞くと、正面の凹地を進んで来た敵軍も、深い、咽喉から出る聲で歌を歌ひながら、駆足で吾々の方へ迫つて来た。吾々は銃を取つて續けざまに發砲し、イグノシも時々吾々に混つて射つたが、勿論この大軍に對しては大浪に向つて小石を投げるほどの効果しかなかつた。

彼等は喊聲をあげ、かち／＼鎗の觸れ合ふ音をさせながら、吾々が小山の麓の岩蔭に伏せて置いた前哨隊の處まで肉薄して来た。そこまで来ると彼等の進み方は少し遅くなつた。それは吾々の方ではまだまじめな抵抗もしなかつたけれども、敵は小山の崖を攀ち上らなければならなかつたからだ。吾

吾防御軍の第一線は小山の中腹に陣取り、第二線はそれから五十碼ほど後方に陣取り、第三線は小山の上の平地の縁端に陣取つた。

敵は圓の聲をあげてだん／＼肉薄し、味方もそれに應じて圓の聲をあげた。兩軍が接近するにつれて投げ槍がざら／＼光りながら前に後ろに飛び交ふのが見えはじめ、戰の火蓋は遂に切られた。

兩軍は一進一退した。そして彼等の驅は秋の木の葉のやうにバタ／＼と仆れた。けれども暫くのうちに敵軍の優勢なことが判りはじめ、味方の第一線はデリ／＼壓迫されてあとに退り、遂に第二線と一緒になつた。第二線では最も猛烈な激戦が行はれたが、又もや味方は押し返されて戰が初まつてから二十分も経たぬ中に敵は第三線まで殺倒して来た。

しかしこの時までには攻撃軍もひどく疲れて、その上に夥しい死傷者を出してゐたので、堅固な第三線を突破することは容易でないことが判つた。暫らくの間、兩軍は一進一退、どちらが勝つとも判らなかつた。サー・ヘンリーは燃えるやうな眼で死物狂ひの争闘を見てゐたが、やがて物も言はずにグッドを連れて一番戦鬪の劇しい場所へ飛び込んで行つた。

そのうちに勝敗の數は漸く明かになつて来た。攻撃軍は勇敢に戦ひながらも一寸一寸と山を下へ押し返され、やがて混亂して、後方に控へてゐる豫備軍の方へ退却して行つた。その時に傳令が来て左翼の敵も撃退したと告げた。私はこれで戰は一段落を告げたものと思つてやれ／＼と喜んでゐると、右翼の防備に當つてゐた味方の軍隊は、敵に壓迫されて、山上の原の上をだん／＼と吾々の方へ退却

して来るのが見えた。右翼では明かに敵が勝つたのだ。

私の側に立つてゐたイグノシはこの形勢をチラリと見てすばやく命令を發した。すると吾々の周圍にゐた豫備隊は忽ち陣形を整へた。

イグノシが再び命令を發すると、隊長等は直ちにこれを部下に復誦した。すると南無三！ 私自身も荒れ狂ふ敵の攻撃の中に巻き込まれてゐたのだ。私はイグノシの大きな軀の後に身を隠して、ぶきつちよに防戦し、まるでわざ／＼殺されるためのやうに踏踏と前へ飛び出したりした。一二分もたつと味方の軍勢がどつと私のうしろのはうへ退却して陣形を立て直した。それから後のことは私はよくおぼえてゐないが、たゞ楯の衝突するのがガチャ／＼きこえたのを覚えてゐる。それから突然、眼の球の飛び出した大きな男が血鎗を揮つてまつ直に私に突きかゝつて來た。しかし私は起ち上つた。と言ふよりもこの場合身をかがめたと云つたはうがよいかも知れぬ。その場に立つてゐれば殺されるにきまつてゐたので、私は巧みに身をかがめたのだ。するとこの大男ははずみを喰つて私の上へのしかゝつて仆れた。彼が起ち上らない先に私の方が起ち上つて背中から骨もとほれと短銃を射ち込んだ。

それから間もなく私は誰かに打ちのめされたやうな氣がする。そしてそれきり私は何もおぼえてゐない。

氣が附いた時は、私は物見櫓に凭れてゐた。そしてグッドが私の前に身をかがめて、水を入れた瓢箪を持つて立つてゐた。

「どうです？」と彼は心配さうに訊ねた。

私は返事をする前に起ち上つて軀を振つた。

「有難う！ もう大丈夫！」と私は答へた。

「やれ／＼、あんたがこゝへ連れ込まれた時には、もうてつきり駄目だとおもつていやな氣がしましたよ。」

「今の所は大丈夫だ！ 何でも頭を一つがんとやられて、それきり氣が遠くなつてしまつたやうだ。で戦争はどうになりましたね？」

「敵は今の所、すつかり撃退されました。大變な死傷者です。味方の死傷は二千で、敵の死傷は三千はあるでせう。どうですこれは！」と言ひながら彼は駭しい死傷者を指さした。各隊には十人宛の軍醫があて、負傷者の中で恢復の見込のあるものは後方へ移して看護を加へてゐたが、恢復の見込のないものは一人の醫師が診察するのだと言ふ名目のもとに動脈を鋭利なナイフで切つて一二分間のうちに何の苦痛もなしに殺してゐた。ずゑ分亂暴な話だが、どうせ助からぬとすれば結局それが本人にとつては情けであるのかもしれない。

「この恐ろしい光景から眼を轉じて、物見櫓の向う側を見ると、まだ戦斧を手にした、サー・ヘンライと、イグノシとインフアドオスと、一二名の首長とが額を集めて協議中であつた。」

やれ、コオターメンさん、あなたはそこにゐたのですか、重大なことになつて來ましたわい。吾は敵の攻撃を撃退するには撃退したが、ツワラは多数の援軍を得て、今度は吾々を包圍して兵糧攻めにするらしいです！

「それは困つたですな。」

「困つたものです。それになにより困るのはインファドオスが言ふやうに、水を供給する道がないのです。」

「さうですよ」とインファドオスは言つた。「泉の水ではこんな大部隊の人間を支へるには足りないし、それに泉ももう涸れかゝつてゐるのです。日が暮れるまでに吾々は湯を覚えて來るに相違ありません。一體どうしたもんでせう。ツワラは新手の軍隊をどんく連れて來て補充してゐますが、彼は前の戦争に懲りて、今度は容易に攻めて來ないらしいです。恰度蛇が羚羊を巻き殺すやうに、吾々を巻き殺さうとしてゐるらしいです。居ながら戦ふと言ふ戦法を取るらしいです。」

「さうですかなあ」と私は言つた。

「そこでマクマザンさん、吾々の取るべき道は三つしかないのです。飢ゑたライオンのやうに、こゝに待つてゐてのたれ死するか、圍みを破つて北の方へ脱出を計るか、それとも」と言ひながら彼は立ち上つて敵の密集部隊を指さしながら云つた。「吾々の方からまづ直ぐにツワラの咽喉を突くか、この三つしかないのです。サー・ヘンリーさんは最後の説を主張なさるですが、マクマザンさん、あな

たはどうお考へですか。最後の決断権は勿論國王イグノシにあるのですが、あなたのお考へも、透き通つた眼をしたお方の御意見も伺ひたいのです。」

「イグノシ、お前はどう思ふ？」と私は訊ねた。

「私は智慧にかけちやまだ子供ですから、まづ先にあなたの御意見を聞かして下さい」とイグノシは答へた。

そこで私は暫らくダッドとサー・ヘンリーと三人で相談した後で、大體次のやうな意見を述べた。

「こんな風に敵に圍まれてしまつた以上は、そして特に水の供給の道がない以上は、ツワラの軍勢に向つて攻撃をしかけるより外にみちがない。しかも攻撃は直ぐに始めるがよい。でないと言首長の中に變心して、吾々を裏切つてツワラの許へ走るものが出來ないとも限らぬ」と私は言つた。

この意見には大體皆の者が賛成したやうであつた。しかし最後の決定権はイグノシにあるので、一同の者は今度はちつと彼の方へ眼を注いだ。

イグノシは、その間ちゆう深く思索してゐるやうであつたが、暫らく間をおいてから語り出した。

「勇敢なる白人の方々、叔父のインファドオス、それから首長諸君、私の心は決りました。今日これからツワラの陣地に突入して勝敗を一擧に決しようと思ふ。勿論、私の命も諸君の命もこの一戦にかかつてゐるのです！」

「判つた」と私は答へた。

「今は恰度正午で兵卒は食事をしたり、休息をしたりしてゐるが、陽が少し西に傾いたら、叔父さん、あなたはあなたの聯隊と外にもう一聯隊を率ゐて、まつすぐにツワラの宮殿に向つて進撃して下さい。ツワラがそれを見たら彼はきつとそれを粉碎しようと思つて部下の軍隊を差し向けるに相違ありません。けれどもこの正面は両方の原から落ちこんで細長い凹地になつてゐますから、一度に一聯隊づつしかかゝつて來られません。だから一聯隊づつ各箇に破つて行けば良い譯です。それからヘンリーさんはあなたの聯隊に附いて行つていただきます。ツワラはヘンリーさんの今日の武者振りをよく知つてゐますから、あの方が戦斧を振りかざして白髪聯隊の先頭に立つて進んで下されば、きつと度臆を抜かれてしまふでせう。私は第二の聯隊に加はつて行きます。さうすれば萬一あなたの聯隊が破れても、まだ國王があとに残つて戦ふことが出来るからです。それからマクマザンさんは私と一緒に行つていただきます。」

「承知しました國王」とインフアドオスは彼の聯隊が全滅するにきまつてゐるのを知りながら平然として答へた。實際クアナの人民は驚くべき人民で義務のためになら、死を少しも恐れてゐないやうだつた。

「そしてツワラの軍隊の大部分がこの戦ひを見てゐる間に、生き残つた味方の軍勢の三分の一は小山の右側から降りて、敵の左側を襲ひ、他の三分の一は小山の左側から降りて行つて、ツワラ軍の右側を襲撃するのです。そして兩翼からの攻撃が始まるのを見て私は眞正面からツワラの本據を衝きま

す。そして運よく行けば夕方までに吾々はツワラ軍を山へ撃退して平和に國王の宮殿に入城することが出来ます。グッドさんは右翼軍に附いて行つて、光る眼で味方の隊長どもに元氣をつけてやつて下さい！」

攻撃の準備はすぐに開始され、一時間餘りの内に全軍は凡て食事を終つて、三箇師團に編成され、首長等にそれ／＼作戰計畫が説明された。かうして負傷兵の收容のために残された小部隊の守備兵を除く外は、約一萬八千の全軍が今や遅しと出動の用意をしてゐた。

暫らくするとグッドがサー・ヘンリーと私との處へやつて來た。

「左様なら皆さん！」と彼は言つた。「私は軍令によつて右翼軍に加はる事になりました。もうお目にか、れんかも知れませんが、お別れの握手に來ました」と彼は意味ありげにつけ足した。

吾々は黙つて握手をした。だが英國人として餘りにはしたない、取亂した、女々しい様子はしなかつた。

「妙な因縁ですなあ」サー・ヘンリーは少し顔へを帯びた、どつしりした聲で言つた。「實を言ふと私も明日の太陽が見られるとは思ひませんよ。私のついて行く白髪聯隊は兩翼の軍勢を敵に氣附かれないうやうに側面へ迂廻させるために、最後の兵まで戦はなくちやなんのです。だがそれは仕方がない男らしい死に方だと思つて諦めませう。さよならコオターメンさん。あなたの無事を祈ります。あなたは生きのびて、ダイヤモンドにありつきなされることを望みます。だがもし生きのびなかつても、

「今後は決して吾々のやうな山師の粗手にはならぬやうにしないよ！」
それから敷砂たつと、グッドは吾々の手を握つて向うへ行つてしまつた。そこへインフアドオスが来て、サー・ヘンリイを白髮聯隊の先頭へ連れて行つた。私はあれやこれやと様々な不安を抱きながら、イダグノシに附いて第二の攻撃聯隊の中へ加はつた。

第十四章 白髮聯隊の最後の奮戦

數分間経つと、側面攻撃の任に當つた諸聯隊は、ツワラの斥候の鋭い眼を避けるために、小山の蔭に沿うてひそかに進んで行つた。側面軍が一時半許りもかゝつて指定の場所に着くのを待つて、白髮聯隊と、それを援助する聯隊とが進軍を始めた。この第二の聯隊は水牛聯隊と呼ばれてゐた。

この二つの聯隊は、その日まで殆んど敵と戦を交へなかつたので、損害も極めて少なく、士氣は甚だ旺盛であつた。といふのは白髮聯隊は、朝の戦争には豫備軍として小山の上に残つてゐて、そこまで登つて来た敵とほんの少しばかり戦を交へたばかりだつたし、水牛聯隊の方は左翼軍の第三防禦線を受け持つてゐたので、殆んど敵の攻撃を蒙つてゐなかつたのである。

老練な名將インフアドオスは、この様な決死の戦闘の前には、十分軍隊の士氣を鼓舞しておく必要があることをよく知つてゐたので、側面軍が進行してゐる間に、部下の軍隊に向つて、白髮聯隊が正面の戦線を引受けて居る世界の偉大なる白人の戦士と共に戦ふのは非常な名譽であるといふことを壯

重な口調で説明し、勝利の曉には生き残つた者は陞進して、その上國王から澤山な牛の褒美に貰へると約束した。

私は羽根飾りの長い列を見ながら、これ等の勇敢な人々が、一時間も経たぬ中に死んでしまふのかと思つて吐息をした。彼等は死ぬにきまつてゐるのだ。そして彼等自身もその事を知つてゐるのだ。彼等の任務は、ツワラの大軍を引き受けて全滅するまで、或は側面軍が有利な攻撃の時機を見出すまで戦ふことであつたのだから九分九厘までは既に死んだと同じである。けれども彼等は少しも躊躇しなかつた。また誰一人として恐怖を抱いてゐるものもなかつた。彼等は、確實な死に向つて、日の光りに永久の別れを告げようとしてゐるのだ！ しかも彼等は泰然として彼等の運命を見ることが出来るのだ。私はこんな時にもかゝはらず、彼等の氣持と、私自身の氣持とを比べて見すにはあられなかつた。そして何とも言へないやな私の氣持に引き比べて、彼等の勇敢を讚美し、羨望した。義務の爲に是程忠實で、而もその苦しい結果に對して是程無頓着な人達を私は曾て見たことがない。「諸君の國王を見よ」と老将インフアドオスはイクノシを指さしながら激勵の演説を終つた。「國王の爲に仕れるまで戦ふのが勇敢な軍人の任務だ。國王の爲に死を恐れたり、敵に後を見せたりする人間は、永久に呪はれた奴等だ。士卒諸君、諸君の國王を見よ。さあ聖蛇に萬歳を唱へて、後に續け！ 吾とヘンリイ様とは先頭に立つて進む。」

すると暫らく間をおいて、軍隊の間から、遠くの海鳴のやうな響きが起つた。それは六千の鎗で、

靜かに楯をたいた響きであつた。響きは次第に高まつて、遂には百雷の一時に落つるやうに鳴り響いたが、やがてそれも靜まつたときに、突然、國王に對する萬歳の聲が起つた。

イグノシは其日どんなに得意だつたらうと私は思った。羅馬の皇帝だつて『まさに死なんとする』戦士からこんな心からの萬歳をさげられたことはないであらう。

イグノシは彼の戦斧を上げてこの萬歳に答へた。すると白髮聯隊は、約一千人宛の戦闘員からなる三列に別れて進軍を始めた。白髮聯隊の最後の中隊から五百碼程離れて、イグノシは水牛聯隊の先頭に立ち、進軍の命令を下した。この聯隊も白髮聯隊と同じ様に三列になつて進んだ。言ふまでもない事だが、私は無事に歸つて來られる様に心から神に祈つた。私は是迄にも随分妙な境遇に陥つた事はあるが、この時ほど不愉快な、この時程安全に歸れる見込の少なかつた事はないやうに思ふ。

吾々が小山の縁端まで着いた時には、白髮聯隊は、既に小山の中腹まで進んでゐた。これを見るとツワラ軍の陣營は急にどよめいて、吾々が凹地の端まで行きつかぬ中に防ぎ止めるために、急に進軍を始めた。小山の下は、前にも言つたやうに細長い草原の凹地になつてゐて、一番廣い處で、幅四百歩程しかなく、狭い處は九十歩位しかなかつたのだ。

白髮聯隊が、この草原の一番廣い處まで着いて進軍をやめたとき、吾々の水牛聯隊は、小山のすぐ麓の、草原の狭い部分まで進んで、灰色聯隊の最後の列から百碼程後方に、豫備軍として控へてゐた。その間に吾々は、ツワラの全軍を見渡すことが出來た。ツワラ軍には援軍が加はつたと見えて、

朝の戦闘でひどい損害を受けたにもかゝらず、總數四萬を下らないやうに見えた。しかし草原の向う側の端まで來ると、一聯隊宛しか進めないで、暫らく躊躇してゐた。勇敢な白髮聯隊はこの大軍を向うにまはして、會つて三人の羅馬の勇士が數千の敵を向うにまはして楯を守つたやうに、敵の進軍を阻止しようとしてゐたのだ。

敵は暫らく躊躇してゐたが、やがて凹地にさしかゝる處で進軍を止めてしまつた。三列に並んで身構へてゐる勇敢な白髮聯隊と鎗を交へるのは餘り氣が進まぬらしかつた。しかし、忽ち頭に駝鳥の羽根飾りをつけた、長身の士官が大勢の首長と從卒とを從へて前へ進み出た。それは外ならぬツワラ自身であると思つた。彼が聲を勵して命令を下すと、第一聯隊は白髮聯隊に向つて突撃して來た。白髮聯隊は黙々として動かなかつたが、敵が四十碼の處まで進んで來ると、兩軍の間に風を切つて無數の投げ槍が往來し始めた。

ついで突然喊聲をあげて、勇躍しながら、彼等は鎗を振つて肉薄して來た。二つの聯隊の間に猛烈な白兵戦が開始された。楯と楯との觸れ合ふ音は雷のやうに吾々の處まで聞え、草原はギラ／＼燦めく鎗の光りでまるで生きてゐるやうに見えた。兩軍は一進一退して戦を交へてゐたが、戦はそんなに長くは續かなかつた。攻撃軍は見る／＼人影が疎らになつて、やがて完全に撃滅された。しかし白髮聯隊ももはや二列しか残つてゐなかつた。三分の一は戦死してしまつたのだ。

白髮聯隊の殘軍は、再び黙々として次の攻撃を待つてゐた。サー・ヘンリーの黄色い髯が味方の軍勢

の間からちら／＼隠顯してゐたので私はやれ嬉しやと思つた。まだ彼は生きてゐたのだ！

その間に吾々の聯隊も戰場の方へ近く進んで行つた。戰場には死んだり、死にかけたり、負傷したりした。約四千の人間の體が文字通り朱に染つて倒れてゐた。イグノシは、敵の負傷者を殺してはならぬといふ命令を發し、その命令は忽ち全軍に傳へられた。しかも吾々の見た限りでは、この命令は嚴守されてゐたやうであつた。それは實に人の心をうつ情味にあふれた光景であつたが、その時はそんなことを考へてゐるひまなどはなかつた。その中に白い羽根飾りを附けた、第二の聯隊が、白髮聯隊の二千の殘軍に對して進撃して來た。白髮聯隊は、再び敵が四十碼の處まで近づくの待つて、敵軍に向つて突撃し、前と同じやうな悲劇が繰り返された。併し今度は勝敗は容易に判らなかつた。暫らくの間は白髮聯隊の方に勝味が無いやうに見えた。白髮聯隊の戰闘員は、四十歳以上の古兵ばかりで、攻撃軍は皆血氣の青年であつたが、初めのうちは古兵の方がじり／＼と押されて行つた。戦は猛烈を極め、一分毎に數百人位の割合でばた／＼倒れて行つた。

しかし完全な訓練と不撓不屈の勇氣とは、奇蹟を現出する事ができるものだ。一人の古兵は、良く二人の若兵に當る事が出來た事が間もなく判つて來た。ちやうど吾々が白髮聯隊はもう厭だと思つて、代つて進撃しようと思つたときに、喧しい叫喚の中からサー・ヘンリーのどつしりした聲が聞え、彼が羽根飾りの上へ振り上げた戰斧のひらめきがテラリと見えた。形勢はもち直して、白髮軍は苦れ狂ふ敵に對して、まだ磐石のやうに抵抗してゐたのであつた。やがて白髮軍は今度は逆襲に轉

じた。火器が使はれてゐないので戰場には煙が少しも上つてゐなかつたから、戰闘の模様は吾々の處からでも手に取るやうによく見えた。暫らくすると戰闘はだん／＼靜まつて來た。「あ、實に勇ましい軍隊だ。きつとまた勝つだらう！」と私の側に昂奮して齒齧みをしてゐたイグノシが叫んだ。

突然、攻撃軍は白い羽根飾りを風に靡かせながら算を亂して退却し、後には白髮聯隊の勇士たちが殘つた。それはもう聯隊ではなかつた。戰闘の初まる時には三千人もあつたこの聯隊の中でほんの四十分程しか經たない今では、せい／＼六百人以上の者が血に塗れて殘つてゐるに過ぎなかつた。残りの方は凡て地上に倒れてゐたのだ。けれども彼等は鎗を振つて萬歳を唱へ、それから吾々の方へ引き返して來るかと思ふとさうではなくて、反つて逃げて行く敵を追うて百碼ばかり前進し、小高い丘を占領してその圍りを三重に圍んで環狀の陣形をつくつた。有難いことには、その丘の頂きにサー・ヘンリーと吾々の老友インフアドオスとの姿が見えた。だが、そのうちにツワラの聯隊は三度盛り返して來て、又もや戦ひが始まつた。

この物語りを讀まれる諸君はかねて承知の筈だが、私は正直なところ少々臆病者で、しば／＼不愉快な立場にたつて人間の血を流さねばならぬ事はあつたが、元來戰爭などは嫌ひで、自分の血の分量も出來るだけ耗らさないやうに心掛け、時としては、三十六計の奥の手にたよつて、敵に後を見せて逃げ出したこともあるのだが、この時ばかりは私の一生で初めて胸の中に闘志がむらく／＼と起つて來るのを覺えた。これまで恐怖の爲に半ば凍つてゐた私の血は活潑に脈管を流れだし、むやみに人を殺

したい野蠻な慾望が湧き起つて來た。私はちらりと振り返つて後に列んである士卒の顔を見ると、皆な私と同じやうに、手を握りしめ、眼をぎら／＼輝かして勃々たる戦志に燃えてゐた。たゞイグノシだけはいつもの通り冷靜な容子をしてゐたが、さすがの彼すらも齒軌りをしてゐた。

「吾々はツワラが吾々の兄弟を向うで鑿殺しにしてしまつてゐるのに、こゝに根の生えるまで立つてゐるのかね、ウンボバー——いやイグノシ？」と私は訊ねた。

「いや、マクマザンさん」と彼は答へた。「今こそ好機逸すべからずです！」彼が語り終らぬ中に敵の新手の聯隊は例の丘の側面を通り過ぎて、こちらへ迂廻し、丘をかこんで周圍から白髮聯隊の残り少ない殘軍を攻撃し始めた。

この時、イグノシは戰斧を振り上げて進軍の合圖をみると、水牛聯隊は、ククアナ軍特有の閃の聲をあげながら怒濤の如く突撃した。

その次に起つた光景は、私の筆では到底書き盡せぬ。私の記憶してゐる事は大地を揺がすやうな、すさまじい、しかも秩序ある前進と、急に眞正面から敵に衝突かつて恐ろしい衝突が初まり、鈍い呻き聲がきこゑ、血煙りの中に閃めく鎗の光りが見えただけであつた。

私がつきりと吾に返つた時には、私は白髮聯隊の殘軍に混つて、丘の頂きの近くにゐた。そして私のすぐ後にゐたのはほかならぬサー・ヘンリーであつた。私はどうしてこんな處まで行つたのか少しも覺えてゐないが、あとでサー・ヘンリーに聞くと、水牛軍の最初の猛烈な攻撃の時に、殆んど彼

の足許まで進んで、また敵の逆襲によつて追ひ返されたのを、彼が圍みの外へ脱け出して私をそこまですすき上げてくれたのだと言ふことであつた。

その次に起つた戦の模様は到底筆紙で現はすことの出来るやうなものでなかつた。刻々に頭數の減つて行く、白髮聯隊の殘軍に對して、勇敢な敵は味方の死骸を乗り越え乗り越えて、或る時は吾々の鎗を避ける爲に死骸を前にかざしながら進んで來た。しかし彼等は結局死骸の山を堆高くするだけであつた。老将インフアドオスはこの激戦の中にあつて、まるで觀兵式でもやつてゐるやうに、落ち着き拂つて命令を下したり、敵を罵つたり、冗談を言つたりさへして、残り少なくなつた味方の士氣を勵まし、敵が攻撃して來る度に一番戰鬥の猛烈な處へ進んで行つて敵に應酬してゐた。けれどもサー・ヘンリーの武者振りはそれよりももつと勇ましかつた。彼の駝鳥の羽根飾りは鎗の爲めに折れてしまひ、黄色い長髪は後へ振り亂れ、手も鎗も戰斧もすつかり血に塗れて、巨人の如く、當るを幸ひ敵を薙ぎ倒してゐた。

この時、不意に「ツワラだ！ ツワラだ！」と叫ぶ聲が聞えた。すると一眼の巨人、ツワラ王が鎧を身に纏ひ、戰斧と楯を持つて、群衆の中から躍り出した。

「そこにあるのは息子のスクラツガを殺した白人だらう。どうだ、おれが殺せるか？」と叫ぶと同時に彼はサー・ヘンリーを目がけて投げ鎗を投げつけた。しかし幸にも彼はそれを見て楯で受け止めたので、投げ鎗はさつと楯に突き刺さつた。

ツワラはまつ直ぐに彼に躍りかゝつて、戦斧を振り上げて楯の上に打ち下した。その力の弾みをつくただけで、さすがのサー・ヘンリーも踵として膝をついた。

ちやうどその時に、攻め寄せて来た敵の聯隊の中から、困つたやうな叫び聲が起つて来た。上を見上げるとその原因が判つた。

四地の左右にある原つばから一時に無数の戦士の羽根飾りが見えて来たのだ！ 側面軍が吾々の救援に来たのだ！ それは絶好の好機會であつた。ツワラの軍勢はイグノシが豫言したやうに白髮聯隊と水牛聯隊との残軍を攻撃するのに夢中になつてゐて、側面軍が押し寄せて来るのを、すぐ側に近寄るまで知らずにゐたのだ。そこで彼等が陣形を立て直すひまもなく、側面軍の士卒は獵犬のやうに彼等の横つ腹に襲ひかゝつて来たのだ。そのために、ツワラとサー・ヘンリーとの一騎討ちはそれきりお終ひになつた。

五分間のうちに、戦の運命は決せられた。ツワラの軍勢は、正面から白髮聯隊と水牛聯隊との猛撃を受け、今また左右の兩側から新軍の軍勢の攻撃を受けて、算を亂して退却し、吾々に對つてゐた敵の部隊はまるで魔法にでもかゝつたやうに潰滅してしまつて、やがて大浪の引いた後の岩のやうに味方の軍隊だけが跡に残つた。しかしそれは何と言ふ光景だつたであらう！ 吾々の周圍には累々たる死屍が横はり、白髮聯隊の生存者は僅か九十五人になつてゐた。この一戦で、白髮聯隊だけで三千五百の兵士が仆れたのだ。

「諸君」とインフアドオスは腕に受けた傷に繻帯を巻きながら、落着き拂つて言つた。「諸君は、諸君の聯隊の名譽を傷つけなかつた。今日の戦ひは諸君の孫子の代までも語り傳へられるであらう。」それから彼は、サー・ヘンリー・カーチスの手を握りしめて「あなたは偉大な方だ」と率直に云つた。「私は長い軍人生活の間に、ずる分男しい人を澤山見たが、あなたのやうな勇ましい方をつひぞ見たことがありません。」

この時に水牛聯隊は、吾々の陣地のそばを通り過ぎて、宮殿へ通ずる道の方へ進軍を初めた。その時一人の軍使がイグノシの命令を傳へて来た。それはインフアドオスとサー・ヘンリーと私とに、水牛聯隊と一しよに來て貰ひたいと言ふ命令であつた。そこで白髮聯隊の九十人の残軍には負傷者の收容方を命じておいて、吾々はイグノシと共にツワラの宮殿へ攻め寄せて、勝利を完全にし、できるならツワラを俘虜にしようといふ意氣こみで進軍した。吾々がまだ幾程も進まないうちに、私は突然グッドが百碼ばかり離れた岡の上に坐つてゐるのを發見した。彼の側には一人のククアナ人の死骸が横はつてゐた。

「グッド君は負傷したに相違ない」と、サー・ヘンリーは心配さうに言つた。彼がさう言つた時に、大變な出來事が起つた。死骸たとばかり思つてゐたククアナ人が急に立ち上つて、グッドを打ち下し彼の身體を鎗で突き始めた。吾々が呀つと言つてそばへ駆けつけて見ると、蒼色の兵卒が地べたに仆れてゐるグッドを何べんも突いてゐるのが見えた。グッドは突かれる度に手足を宙に上げて苦しんで

あつた。ククアナ人は吾々が来たのを見ると最後に一突き猛烈に突いておいて、一目散に逃げ出した。グッドは見動きもしなかつたので、吾々は彼はもうてつきり殺されてしまったものと詮らめた。悄然として彼の側へ寄つて見ると、驚いたことには、彼はまつ蒼な顔をして、ひどく弱つてはあだが、まだ眼鏡を掛けたまゝで、晴れやかな微笑を浮べてさへあつた。

「實にすばらしい鎧ですよ。」と彼は吾々の顔を見て言つた。そして、それぎり氣絶してしまつた。しらべて見ると彼は追撃の時に投げ鎧で脚に重傷を負うてはあだが、鎧のお蔭で鎧で突かれた傷はほんの擦過傷位しかついてあなかつた。だが此の際彼の看護をしてゐる譯にも行かないので、吾々は彼を楯に乗せて一緒に連れて行くことにした。

宮殿の門前まで行くと、イグノシの軍に歸服した一聯隊の兵が宮殿の警護にあたつてあつた。町の他の入口も、それと別の聯隊が警護してあつた。そして聯隊長等はイグノシを國王として迎へ、ツワラの軍隊はすつかり城内へ逃げ込み、ツワラ自身もこの中へ逃げてしまつたが、軍隊の士氣はすつかり阻喪してゐるから多分降伏するだらうと言つた。そこで、イグノシは吾々と協議した結果、各城門へ傳令を派遣して、開城するやうに命じ、武装を解除すれば全部生命は許してやると約束した。その効果は忽ち現はれて、やがて水牛軍歡呼の中に濠に橋が下され、城門はきいつと開かれた。

吾々は萬一裏切り者のあるのを十分警戒しながら町の中へ進んで行つた。道の兩側には意氣阻喪した戦士等が、首を下げ、楯と鎧とを脚下に投げ出して、イグノシの通るのを見て國王の萬歳を叫んで

あつた。吾々はまつ直にツワラの宮殿に進んだ。一兩日前に、觀兵式や魔法狩りの行はれた廣場に着くと、そこには人つ子の影も見えなかつた。いや全く見えなかつたのではない、といふのは、すつと彼方の國王の小舎の前に、ツワラ自身が、たゞ一人の従者ガゴオルと二人で坐つてあつたからだ。

彼が戦斧と楯とを側において、頤を胸につけ、老婆一人を友として坐つてゐるのを見ると、憎い奴ではあるにもかゝらず、私はそゞろに惻隱の念を催した。彼の率ゐる全軍の中で、一人の兵卒も、數百の宮臣の中であつた一人の宮臣も、たゞ一人の后も、今では彼と運命を共にしようとするものがないのだ！ 憐むべき蠻王よ！ 彼はその時人心の頼みなさをしみみと感じたに相違ない。人間と言ふものは信用を失つたものには見向きもしないものだ、没落せんとするものには友もなければ慈悲もないものだといふことを、彼はつくつくと感じたに相違ない。しかもこの場合には彼にとつてはそれが當然だつたのだが。

吾々は宮殿の門をくゞつて前國王の坐つてゐる廣場へ進んだ。國王から五千碼ばかりの處まで來ると聯隊は止まり、吾々は少しばかりの護衛兵を連れて、彼の側へ進んで行つた。ガゴオルは吾々を見たと何か口ぎたなく罵つてあつた。吾々が側へ寄ると、ツワラは初めて頭を上げ、ちつと押へてあつた怒りのために、額に着けてゐるダイヤモンドと同じやうに光る一つの眼で、イグノシをちつとにらみつけた。

「國王、お目出度う！」と彼は苦々しい嘲るやうな口調で言つた。「おれの稷を食みながら、白人の魔法

の援けをかりて、おれの軍隊を唆かした國王、お目出度う。これから一體おれをどうするつもりだ？」
「汝がわが父に與へたと同じ運命を汝に與へるのだ！」とイグノシは嚴然と言ひ放つた。
「宜しい！ おれが死に方を教へてやるから後學のために、覺えておけ！ この次にはお前の番がくるのだぞ！ 見よ！ 太陽は地の下へ沈んで行く！」と言ひながら彼は戰斧を取り上げて沈む太陽を指さした。「おれの太陽はもうこれがお終ひだ。ところで國王、おれはこれから死ぬんだから、ククアナの法律に従つて最後の恩典を許してもらひたい。おれは戰つて死にたいのだ！ それを拒絶する譯には行くまい。それを斷つたら今日お前の軍隊に追はれて逃げて來た卑怯な奴等にすらお前は合せ顔がないのだぞ！」

ククアナでは國王が死刑に處せられる時には、誰か相手を選んで、どちらか死ぬ迄果し合ひをすることが許されてゐたのだ。

「承知した！ 誰を相手に選ぶか？ わしは遺憾ながらお前と闘ふ譯には行かん。國王は戰場以外では闘ふ事ができない事になつてゐるのだから。」

ツワラの物凄い眼は吾々の隊伍の中をぎろく捜し廻つた。時々彼の眼は私の上にも落ちた。若し彼が最初に私を相手に選んだらどうしよう？ 六呎五吋もある死物狂ひのあの蠻人と闘つて私に勝味は絶対にない。いつそ一思ひに自殺する方が餘程ましな位だ！ 私は慌たしく、心の中で、たとひククアナ人からどんなに嘲られても彼の挑戦には應じまいと決心してゐた。戰斧で頭を割られる

よりも笑はれた方がましだと私は思ふのだ。

やがてツワラは言つた。

「おい、そこにある白人！ 書間に始めた格闘の結末をつけようぢやないか？」

「いけない！」とイグノシが慌て、言葉を挾んだ。「この人と闘ふ譯には行かん！」

「恐ろしいのか？」とツワラは言つた。

運悪くも、サー・ヘンリーはその言葉の意味が判つたと見えて、満面に朱をそゝいで言つた。

「わしはあいつと闘ふ。わしが恐れてゐるかどうかを見せてやる！」

「どうぞあんな命知らずと闘ふことはよして下さい。今日のあなたの働きを見た人は誰だつてあなたを臆病者だ等と思ひはしませんから」と私は頼んだ。

「わしは闘ふ！」と彼は不機嫌に答へた。「生きてゐる人間に誰だつてわしを臆病者だとは言はせん」と言ひながら彼は戰斧を取つて前へ進み出た。

「そんなことをしてはいけません！」とイグノシはサー・ヘンリーの腕を軽く叩いて言つた。「あなたはもう十分戰つて來られたのですから、あなたの身に萬一の事があつたら、私のこの胸が裂けてしまひます！」

「いやどうしても闘ふよ、イグノシ！」とサー・ヘンリーは答へた。

「では仕方ありません。闘ひなさい！ あなたは勇しい方です。きつと立派に闘ひなさるでせう。」

おい、ツワラ、この方が望み通りお前の相手をなさるさうだ！」

前國王は獷猛に笑つて前へ進み出で、カーチスと面を向き合せた。暫らくの間彼等は眞赤な夕陽を浴びて棒のやうにそこに立つてゐた。實にそれは好箇の取り組であつた。

暫らくすると彼等は、互ひに戦斧を振り上げて、相手のすきをうかがひながら、ぢり／＼と詰め寄つた。

突然サー・ヘンリイは、ツワラに躍りかゝつて恐ろしい一撃を加へた。ツワラは一步横へ身をかはした。餘りに猛烈な打撃であつたので、打つた方が却て力のはずみで少し踏けた。するとツワラはすかさずこの好機に乗じて、大きな戦斧を眞向に振りかざして打ち込んで来た。私は心臓が口へ飛び出すやうな気がした。もう駄目だと思つた。ところが豈圖らんや、サー・ヘンリイは素速く左の腕を擧げて戦斧と自分の體との間に楯を挟んで防いだ。楯の縁は少し毀れて戦斧は彼の左の肩を迂り落ちた。その次にはサー・ヘンリイが二度目の打撃を加へ、ツワラはそれを楯でがつしと受けとめた。かくして交る／＼、打撃が交されたが、雙方共に巧みに身をかはしたり、楯で受け留めたりした。昂奮は益々高まり、固唾をのんでこれを見てゐた聯隊の者どもは軍紀を忘れて思はず前へにじり寄つた。そして打撃が交されるごとに、叫んだり呻いたりしてゐた。ちやうどその時、私の側に寝てゐたグッドは、正氣に返つて、その場の出来事を知ると忽ち立ち上つて、片足でビヨン／＼跳びながら私の手を引いて、サー・ヘンリイに盛んに聲援を浴せた。

「そこだ。うまいぞ、あぶない。」等と彼は叫びたてた。

やがてサー・ヘンリイは渾身の力を振つてツワラに打つてかゝつた。さしもの楯も鎖鎧も通つて彼は肩に深傷を受けた。彼は傷を受けると益々猛り狂つて、又もや骨も砕けよと許り打つてかゝつた。その力で犀の角で造つたサー・ヘンリイの戦斧は、眞つ二つに割れてしまひ、彼は顔に傷を負うた。吾々の勇士の戦斧の頭がぼろりと地上に落ち、ツワラが再び武器を振りかざして叫びながら打ちかかつて来た時、水牛聯隊の勇士たちは呀つと叫んだ。私は眼を閉ぢた。目を開いて見ると、サー・ヘンリイは楯を地上に捨て、しまひ、たくましい腕でツワラに組みついてゐた。二人の巨漢は熊のやうに、右に左に巨幹を揺ぶつてゐた。その内にツワラは金剛力を出して、サー・ヘンリイを倒し、二人は地上に上になり下になり轉げ廻つた。ツワラは戦斧でカーチスの頭を打たうとし、サー・ヘンリイは腰から投鎗を抜いて敵の鎧を刺さうとしてゐた。

「戦斧を取つてやれ」とグッドが叫ぶと、その聲はサー・ヘンリイにも聞えたと思えて、彼は投げ鎗を棄て、ツワラの手首に水牛の革で結びつけてあつた戦斧に手をかけ、尙も喘ぎながら猫のやうに轉げ廻つた。突然水牛の革はびり／＼破れて、戦斧はサー・ヘンリイの手にはひつた。と思ふと次の瞬間に彼はすつくと起ち上つた。顔からは血が籠のやうに流れてゐた。ツワラの顔も同様であつた。彼は腰から大きな投げ鎗を抜いてカーチスに向つて跳びかゝり、それを彼の胸に突き刺した。的は外れなかつたが、投げ鎗は鎖鎧のために跳ね返されて終つた。ツワラは再び恐ろしい聲で呻きながら銳利な

投げ鎗を突き刺したが、やはりまた跳ね返された。そしてサー・ヘンリーは後へ踰とよろめいた。ツワラはまたもや彼に飛びかゝつて行つた。するとサー・ヘンリーは満身の力をこめて大戦斧を振り上げ、敵の脳天を目がけて發矢と打ちおろした。數千の見物人はけたましい叫び聲をあげた。と、どうだらう！ ツワラの頭はまるで肩から弾かれたやうに飛んで行つて、地上に落ち、ごろ／＼轉じて行つて、ちやうどイグノシの脚下のところまで止つた。死體は暫らくの間直立してゐたが、やがてどさりと地面に仆れ、首にかけてゐた黄金の頸鎖は首から抜けてあたりを散らした。それと同時にサー・ヘンリーも力が盡きてしまつて、ツワラの死骸の上にとどしんと重なつて仆れた。

人々は彼を抱き起して顔に水を注ぎかけた。すると彼の灰色の眼はベツチリ開いた。彼は死んでゐなかつたのだ！

陽は今しがた沈んだところであつた。私は薄暗がりの中にころがつてゐる、ツワラの頭の側へ行つて、死者の額からダイヤモンドを外してそれをイグノシに渡した。

「これがククアナの正當な王のしるしだ！」と私は言つた。

イグノシはこれを額に結びつけ、前へ進み出て首のない敵の死骸の胸のあたりを足で踏へて、勝ち誇つた聲を張り上げて、朗かに凱歌を歌つた。それは實に勇しい歌であつた。私は嘗て或る學者が、立派な聲でギリシヤの詩人ホオマーの歌を原文で朗讀したのを聞いたことがある。それを聞いた時には歌の意味は判らなかつたが呼吸塞るやうな氣がしたものだ。今歌つたイグノシの歌も、意味はよく

解らなかつたが、このホオマーの詩を聞いた時と同じやうな氣がした。ククアナの言語も、古代ギリシヤ語に劣らず美しい言語だと私は思ふ。

第十五章 グッドの病氣

戦ひがすむと、サー・ヘンリーとグッドとはツワラの小舎へ運ばれて行き、私もそれについて行つた。彼等は二人ともひどい疲れと出血のための貧血とでぐた／＼になつてゐた。私とても大した相違はなかつた。私は元來丈夫な人間で、體の軽いせゐや、長い間獵で鍛へあげて來たせゐもあらうが、疲勞に對しては人一倍抵抗力をもつてゐた。しかしその晩は眞實へと／＼になつてしまつた。そして疲れた時はいつでもさうだが、ライオンに噛まれた古瘡がち／＼痛み出して來た。それに今朝打たれた頭の打撲傷が劇しく痛むのだ。およそ、その晩の吾々三人ほど惨めな三人は容易に見附かるものではない。吾々のたゞ一つの慰めは、今朝元氣よく起きて行つた數千の勇士が、今夜は野原に死骸となつて横はつてゐるのに、吾々はやつと生きのびて、自分の惨めさを感じる事が出來たことであつた。

フアウラタは、吾々が彼女の命を助けてやつてからといふもの、ずつと吾々の女中のやうになつて、特にいろ／＼グッドの世話をしてゐたが、この娘の手を借りて、吾々のうちの二人までの命を救つてくれた鎖鎖を脱がした。私の思つた通り鎖の下には恐ろしい打撲傷がついてゐた。鋼鐵の鎖だから刃物こそ貫通しないが打撲傷を拒ぐことは出來ないからだ。サー・ヘンリーとグッドとはまるで打

撲傷の塊りだつたと言つてもいい。そして私とてもそれをまぬがれてゐた譯ではなかつたのだ。ファウラタは打撲傷の藥だと言つて匂の良い何とかいふ草の葉を搗き碎いた膏藥を持つて来てくれた。それを傷に當てると大分痛みは和らいだ。

しかしサー・ヘンリーやグッドの受けた刀傷に比べると打撲傷位は何でもなかつた。グッドは彼の『美しい白い脚』の肉の部分に貫通症を受けて出血の爲にひどく貧血して居り、サー・ヘンリーはツワラの戦斧の爲に頭の上に深い傷を受け、その他にも數ヶ所の傷を受けてゐた。幸にもグッドは外科の心得があつたので、小さい藥箱を取り寄せると、早速傷口を洗つて、先づサー・ヘンリーの傷口を縫ひ、次に自分の傷口を縫つた。それから傷のところに消毒用の軟膏を塗つて、その上をハンカチの片で縛つた。

その間にファウラタは、スープを拵らへて来てくれた。吾々は疲れてゐたので堅いものを食ふのも臆劫であつたのだ。吾々はこのスープを飲んで毛皮の蒲團の上に寝ころんだ。運命といふものは皮肉なもので、ツワラを殺したサー・ヘンリーがちやうどその晩ツワラの蒲團で眠ることになつたのであつた。

だが眠ると言つたつて容易に眠る譯に行かなかつた。夫や息子や兄弟を失くした女達の泣き聲がそこらぢゆうから聞えて來た。それも無理はないのだ！ この日の恐ろしい戦ひでククアナ軍の略五分の一にあたる一萬五千の人が死んだもの。寝ながら歸らぬ人のために泣いて居るのを聞いてゐると胸

が迫るやうだつた。だが夜半頃になると、女達の泣聲も段々少なくなつて、たうとうひつそりとしてしまつた。併し時々この沈黙を破つて、數分毎に、鋭い、長い呻聲がすぐ吾々の隣りの小舎から聞えて來た。それは後から解つた所によると、死んだツワラ王を嘆くガゴオルの泣聲であつたのだ。

そのうちに私も少しばかり眠つたが、時々吃驚して目を覺した。恐ろしかつた晝間の夢を見たのだ。だが夜はどうか過ぎ去つて行つた。夜が明けて見ると仲間の者も私と同じやうに眠れなかつたことがわかつた。グッドはひどい熱を出し、頭が少し變になつて、おまけに血を吐きはじめた。これには私も吃驚したが、きつと前日、ククアナ軍の戦士のために鎖鎧の上からむやみに突かれた時に内出血を起したのであらう。しかしサー・ヘンリーは、顔にうけた傷のために笑ふこともできず、物を食ふにもかなり骨が折れるやうではあつたが、大分元氣を恢復してゐた。

八時頃になると、インフアドオスがやつて來た。彼は吾々を見て大へん喜んで心から握手をした。だがグッドの容體を見てひどく心配した。彼はサー・ヘンリーに對しては非常な敬意を表して、彼をたゞの人間ではないと思つてゐるらしかつた。實際、サー・ヘンリーは、ククアナの國では神と思はれてゐたのである。軍人等は、口をきはめて彼の勇氣をたゞへてゐた。晝間にさんく激戦をしたあとで、國ぢゆうで一番強いツワラの首を、たゞの一打ちで打ち飛ばすやうな人は此の世に二人とないと言つて彼等は感歎してゐた。その後ククアナの國では、ひどく物を打つ場合には『ヘンリーの打撃』と呼んでゐたものだ。

インフアドオスの話によると、ツワラの聯隊はみなイグノシに降伏し、ツワラがサー・ヘンリーに殺されたので、もう騒ぎはこれ以上起こるまいとのことであつた。といふのは一人息子のスクラツガも殺されてしまつたので、生きてゐるもので王位に即く権利のあるものはなかつたからだ。

私はインフアドオスに向つてイグノシは血の海を泳いで権力の岸へ泳ぎついたやうなものだと言ふと、彼は肩をすくめて答へた「さうですよ、だがクアナ人は時々血を流さないと温順しくならんのです。多くの者が殺されましたけれど、女は残つてゐますから、すぐに代りの者が生れて、それが大きくなると死んだ人に代つて復讐するのです。そして又暫くの間國內は平穩に治まつて行くのです。」

その後でイグノシがちよつと吾々の小舎へ訪ねて來た。彼の額にはダイヤモンドの王冠が載つてゐた。私は、彼が従者を連れて嚴めしく進んで來る姿を見て、數ヶ月前に、ダーバンで、吾々の従者として使つて欲しいと頼みに來た脊の高いズル人の姿を思ひ出して、今更運命の數奇を感じずにはゐられなかつた。

「よう國王お目出度う！」と私は立ち上つて言つた。

「貴方がたのお力でやつと國王になれました」と彼は答へた。

彼の話によると、萬事が順調に運んだので、二週間も経つたら即位の大典をあげたいと思つてゐるとの事であつた。

私はガゴオルはどう處分することになつたかと訊ねた。

「あれは悪い老婆だから、弟子の魔法使どもと諸共に死刑にすることになりました」と彼は答へた。

「でもあの老婆は物識りだね。」と私は答へた。「知識を集めるのは骨が折れるが、知識を亡ぼすのは雑作ないものだね、イグノシ！」

「さうです」と彼は感慨深く言つた。「あの老婆はむかうに聳えてゐる『三人の魔女』と『無言の神』との秘密を知つてゐるのです。そしてこの秘密を知つてゐるのはあの老婆だけなのです。」

「それにダイヤモンドの事もあつたね。約束を忘れちゃいけないよ。イグノシ。吾々をダイヤモンド坑まで連れて行つてくれなくちや困るよ！」

「その事は忘れはしません。」

イグノシが出て行くと、私はグッドの様子を見に行つた。彼は熱に浮かされて譫言ばかり言つてゐた。四五日の間が最も危険な時期だつたので、ファウラタがその間骨身を惜まず看護してくれなかつたら、彼はきつと死んでしまつたに相違ないと私は堅く信じてゐる。

何處の世界へ行つても女は女だ。皮膚の色によつて變りはないものだ。彼女はまるで熟練した病院附きの看護婦のやうに、病人の枕元について何かと看護をしてゐた。初めの一晚は、私は彼女の手傳ひをしようとした。サー・ヘンリーも身體が動けるやうになると、彼女の手傳ひをしようとしたが、彼女は吾々が世話をやくのを好まなかつたと見えて、吾々がざわ／＼動き廻ると病人が落着かないから、病人の看護は彼女一人に任せてもらひたいと言つた。吾々もそれはもつともだと思つた。日とな

く夜となく彼女は彼の病床につききつて看護した。そして牛乳の中へ一種のチュウリップの莖から採つた汁を混ぜた解熱剤を服ませたり、彼の身體に蠅がとまらないやうに追拂つたりしてゐた。グッドはあちこちへ轉げまはり、顔はひどくやつれて、大きな眼は燦々光り、しよつちゆう何かべちやべちやしやべつてゐた。彼女は小舎の壁に背を凭せて、彼の側に立つてゐた。そのやさしい眼には病者に對する限りないやさしさがこもつてゐるやうに見えた——ことによるとそれは同情以上の何物かであつたかもしれない。

二日の間、吾々は彼は死ぬに相違ないと思つてゐた。そして心配さうに度々様子を見に行つた。たゞファウラタだけはさう信じてゐなかつた。

「あの人はきつと助かりますよ！」と彼女は言つた。
ツワラの宮殿から三百碼以内の地域内には全く人聲が聞えなかつた。といふのは國王の命令で、サー・ヘンリーと私との外は、凡ての者が他の場所へ撤退してゐたからだ。それは病人の耳へ人聲が聞えないやうにするためだつた。グッドが病氣になつてから五日目の晩に、私はいつものやうに、床につく前に彼の様子を見に行つた。

そつと小舎の中へはひつて行くと、薄暗いランプの光りでグッドの姿が見えた。彼はもうばたく騒ぐのを歇めておとなしく寝てゐた。

たうとう最期だと思ふと、私は胸が迫つて思はず噎り泣きを洩した。

「しつ！」とグッドの頭の後の方から誰か言つた。

側へ寄つて見ると、彼はまだ死んでゐたのではなくて、白い手でファウラタの細い指をかたく握り締めながら、すやく／＼眠つてゐたのだ。もう危機は通りすぎて彼の命は助かつたのだ。彼はそんな風にしてもう十八時間も眠つてゐたといふことであつた。私はこんなことを言ふと諷だと思ふ人があるかも知れないから言ひたくないのだが、この十八時間の間ちゆう、この忠實な娘は自分が動いたり、手を放したりすると病人が目を覺しはしないかと思つて、すつとそのとほりにしてゐたのだ！ ひもじい位の事は何でもないとして、どんなに彼女は手足が疲れ、痺れたことであらう。實際彼が目を覺した時には、彼女は手足が硬ばつて動けなかつたので、人手を借りて運んで行つて貰はねばならなかつたからゐた。

一度危機を通り過ぎると、グッドの恢復は非常に速く且つ完全であつた。サー・ヘンリーは、グッドが餘程恢復するまでファウラタの心をこめた看病のことを話さなかつたが、彼女がグッドの目を覺しては悪いと思つて、彼の側に十八時間も立ち通してゐたのだと話したときには、正直なこの水兵の兩眼には涙が溜つた。彼は早速、ファウラタが晝食を準備をしてゐた小舎へ眞直ぐに駈けて行つた。言葉の通じない場合に通譯するために私も一緒に蹠いて行つた。

「私はあの女のために命が助かつたのだから、あの女の親切は一生忘れませんと言つて下さい」とグッドは言つた。

私がそれを通譯すると彼女は浅黒い皮膚の下で、さつと顔を赤らめたやうであつた。彼女はまるで小鳥が飛ぶときのやうな素早い、それでゐて、しとやかな身振りで彼の方を向き、大きな鳶色の瞳でちらりと彼を見ながら言つた。

「どういたしましたか、あの方は忘れていらつしやるのよ、あの方こそ私の命を救つて下さつたのでありませんか、それに私はあの方の下女ぢやありませんか？」

この娘は、どうやら、彼女の命を助けた時にはサー・ヘンリーや私も與つて力があつたことなどはけろりと忘れてゐるらしかつた。しかし女といふものは皆さうしたものだ！ 私の親愛なる女房もその通りだつたことを私は覚えてゐる。私は厄介なことになつたと思つて、鬱いだ胸を抱いて、この小さな會見から身を退いた。ファウラタのやさしい眼附がどうも氣になつたのだ。といふのは、水兵といふ人間は一たいに女にあまいものなのだが、特にグッドと來てはそれが甚だしかつたからだ。

この世の中に避ける事の出来ない事が二つある。ズル人に戦争をさせないこと、水兵にちよつとしたことで、すぐに女に惚れるのをやめさせること、がそれだ。

それから數日経つと、イグノシは、國民會議を召集して、正式にククアナ國の國王として承認された。その時には軍隊の觀兵式も行はれて非常に盛大な祝典だつた。白髮聯隊の殘軍は、この日、軍隊の前で整列して、正式に大戦の時の赫々たる武功を感謝され、殘存者は凡て國王から多くの家畜を賜り、悉く士官に昇進して新しく編成される白髮聯隊の指揮官になつた。また全國に布令を發して、

吾々がこの國に滞在する間は、吾々三人には、國王と同様の待遇をするやうに命令され、吾々は生殺與奪の權を與へられた。それからイグノシは今後審問せずして人を殺すことを嚴禁し、魔法狩りは今後絶對に禁止することを公約した。

式がすむと吾々は、イグノシを訪ねてソロモン街道の終點にある坑山を探検して見たいと告げ、その後この坑山について何か様子が判つたかと訊ねた。

「かういふことが判りましたよ」と彼は答へた。「この土地で『無言の神』と言はれてゐる三つの巨像は、その坑山の側にあるといふことです。『無言の神』と言ふのは御承知の通り、ツワラが少女のファウラタを犠牲に供へようとした神なのです。そこにはまた大きな深い洞窟があつて、その中に歴代の國王の屍が埋られてゐるのです。ツワラの國王もそこに埋められてゐる筈です。そこにはまた深い坑窟があつて、それはさつと昔の人が掘つたものだからですが、ことによるとそれはあなた方の仰言る寶石を目當てに掘つたものかもしれませぬ。また國王の墓場には、秘密の窟があつて、それを知つてゐるものは國王とガゴオルとだけなのです。けれどもそれを知つてゐたツワラは死でしまつたし、私はその窟も知らなければその窟に何があるかも知らないのです。けれどもこの土地の傳説によると、さつと昔一人の白人が山を越えて一人の女に伴はれてその秘密の窟へ案内され、その中に藏つてある寶物を見せてもらつたと言ふことです。だがその白人がその寶物を取り出す前に、その女が彼を裏切つたので、彼はその當時の國王のために山の方へ追ひ返され、その後は誰もその窟へ行つたことはな

いと言ふことです。」

「その話は眞實だ。吾々は山の上でその白人の死骸を見て来たんだから」と私は言った。

「さうです吾々は見ました。そして私はあなたに約束しました。もしあなたがその窟へ行くことが出来て、そこに寶石があれば——。」

「寶石があるつてことは、お前の額につけてある石の寶石で判つてゐる」と私がツワラの死體から取つて彼に與へた大きなダイヤモンドを指さしながら言った。

「若しあればあなた方は持てるだけお持ちになつて良いのです。」

「まづ第一にその窟を見附けなければならん」と私は言った。

「そこへ貴方がたを御案内出来るものは一人しかありません。それはガゴオルだけです。」

「で、もしあの老婆が案内してくれなかつたら？」

「その時にはあの老婆は死刑です！」とイグノシは嚴肅に言った。「私はたゞそれだけのためにあの女を生かしておいたのです。お待ちなさい。あの老婆がどう言ふか聞いて見ませう。」かう言ひながら彼は從者に命じてガゴオルにすぐに出頭するやうに告げた。

暫らくたつと、彼女は二人の護衛に急ぎたてられて、その護衛の者を口ぎたなく罵りながらはひつて来た。

「その女を残しておけ」と國王は護衛に向つて言った。

彼女は支へるものがなくなると、その場にぐたりとへたばつてしまつた。

「何か用かねイグノシ？」と彼女は嗔れ聲で言った。「お前はこのわしに指一本も觸れることは出来ないのだぞ。もし觸つたらお前をこの場で殺してやる。わしの魔法に氣をつけるがよいよ！」

「お前の魔法でもツワラを助けることが出来なかつたでないか。老婆！ わしをどうすることも出来るもんか」と彼は答へた。「まあ聞け！ 用事と言ふのはかうだ。光る石のある窟を吾々に教へるのだ！」

「は！ は！」と彼女は嗔れ聲を出した。「それを知つてゐるのはわしだけだ。そのわしは決してお前に教へはしないぞ。白人の野郎共はこゝから手ぶらで歸らせてやる。」

「どうしても言はなくちやならん。わしはお前に言はせて見せる！」

「何だつて、國王？ お前は成る程偉いかも知れんが、お前の力ではわしの口から眞實を言はせることは出来ないよ！」

「それは難かしいだらう。だがわしは言はせて見せる。」

「どうして言はせるのだね、國王？」

「かうするのだ。もしお前が言はないと、お前をじり／＼刺り殺しにしてやる。」

「殺すつて？」と彼女は恐怖と憤怒の餘り金切り聲で叫んだ。「お前はわしに手を觸れる事は出来ないと言つたではないか。お前はわしをどんな人間か知らないのだね。わしの年齢は幾つだと思ふ？ わ

しはお前の父親も、お前の父親の父親の父親も知ってるのだよ。わしはこの國の若い自分からことゝにゐたのだ。そしてこの國が年をとるまであるつもりだ。わしは偶然變死でもすれば別のこと、人手にかゝつて殺されたり何かはしないよ！

「それでもわしは殺して見せる。おいガゴオル、お前だつてもうそんな年をして生きてゐる樂しみもないだらう。髪は脱げ、齒は落ち、體の恰好も顔の形も何もかも無くなつて、たゞ悪心と意地悪い眼とばかりになつてゐるお前のやうな悪婆が生きてゐて何の樂しみがあるのだ？ 一思ひに片附けてやつた方が却つてお前のためでないか。」

「莫迦！」と悪婆は叫んだ。「お前は生きてゐる樂しみは若い者だけしかもつてゐないと思ふのか？ さうぢやないんだよ。そんなことを思つてゐるから人間の心が何一つ判りはしないのだ。若い者は、時とすると死にたい氣もするだらう、若い者には感情があるからな。若い者は戀をしたり、苦しんだりするからな。戀人が死で行くのを見るのなんざあ、ずるぶんつらいもんだからな。だが老人には感情はないのだよ、戀もないのだよ、は！ は！ 老人は他人が死んでも笑つてるのだ、は！ は！ 世の中で悪いことが行はれるのを見て笑つてるのだ！ 老人の好きなものは何よりも命だよ。命と暖かい陽の光りと、良い空氣とだ。寒いのと、死ぬのとは老人には禁物だよ。ひ！ ひ！ ひ！ ひ！ かう言ひながら老婆は地べたにのた打ちながら氣味悪く笑つた。

「へらす口はやめて返事をしろ！」とイグノシは怒つて言つた。「お前は一體石の在りかを教へるのか

教へないのか？ 若し教へないのなら今この場で殺してやる。」

「教へるもんか。お前はわしを殺すことなんか出来はしないのだ。わしを殺すと災が降りかゝつて来るぞよ。」

イグノシは鎗をとり上げてそれを段々下の方へのばし、たうとう地面に蹲踞つてゐる濫樓の塊をちくりと刺した。ガゴオルはギャツと呻いて跳び上つて、またぐたくと地面にへたばつた。

「教へます！ 教へます！ 命ばかりはお助けを！ 陽なたに坐つて肉の片をしやぶらして下されば、それでよい、教へてあげます！」

「よし、かうしてやればお前は言ふことをきくんだな。明日インフアドオスと白人のお客様とをそこへ案内せい！ 道を間違へぬやうに氣をつけるがよいぞ！ 若し案内することが出来なかつたら、なぶり殺しにしてやるぞ！」

「間違へつこはないよ、イグノシ。わしは約束だけは必ず守りますよ。以前に一度、或る女が一人の白人をその窟へ案内したことがある。ところがその白人に災が起つたのだぜ！」と言ひながら彼女は意地悪い眼をきろりと光らせた。「その女の名前もガゴオルと言つたのだ。ことによるとその女はわしだつたかもしれない。」

「誠を吐け！」と私は言つた。「それは十代も前のことぢやないか！」

「さうだつたかもしれん。餘り長生きをすると忘れつぽくなつてな。では多分その話はわしのお祖母

さんから聞いた話だったのぢやらう。そのお祖母さんの名前もたしかにガゴオルと言つたつけ。だがその光る石のある處に石を一ぼい入れた皮の袋が一つあるよ。その石はその男が入れたのだ。しかし石を集めるには集めたが持つて歸ることは出来なんだのぢや、災が起つて来てな。災がだよ。多分、この話はわしのお祖母さんから聞いたのぢやらう。きつと今度の旅は楽しい旅ぢやらうて。途中で戦争で死んだ者の死骸も見られるしな。もうその死骸の眼玉は失くなつてゐるぢやらうて。肋骨はがらん洞になつてゐるぢやらうて、は！ は！ は！

第十六章 國王の墓場

それから三日目の日が暮れたときには、吾々は既に「三人の魔女」の麓の小舎に停つてゐた。ソロモン街道は、そこまで来てゐるのだ。一行は吾々三人と吾々——特にグッド——の世話をしてゐた。アウラタと、インフアドオスとガゴオルとであつた。ガゴオルは駕籠に乗せられて、その中で始終ぶつぶつ呟いたり罵つたりしてゐた。その外に護衛兵と若干の従者とが躡いて來た。三つの山、といふよりもむしろ一つの山にある三つの峰——は前にも云つたやうに三角形を形造つてゐて、その基點になる峰が吾々の方を向いて聳えてゐた。左右に一つ宛の峰があつて、中央の峰が吾々の真正面にあるのだ。その翌朝、朝日を浴びて高く聳えてゐる三つの峰を見たときの光景は、忘れられないものであつた。雪を冠つた山頂は高く、青空に聳え、雪線の下はヒースのやうに紫色に染つてゐた。吾々

の前には、ソロモン街道が、白いリボンのやうに、眞直ぐに約五哩ほど先きにある中央の峰の麓まで、爪先き上りに走つて、そこで終つてゐた。

だがさうしたことは諸君の想像に任せることにする。たうとう吾々は、三世紀以前にポルトガルの老人の惨めな死の原因となり、その何代目かの後裔であつた私の知つてゐる不運な男の死の原因ともなり、ことによるとサー・ヘンリー・カーチスの弟のデヨーヂ・カーチスの死の原因ともなつたかも知れない不思議な坑山に近づいた。吾々は果してそこから無事に歸つて來られるだらうか？ 老婆のガゴオルは彼等に災が降りかゝつたのだと言つた。吾々にもその災が降りかゝるだらうか？ 私

は歩きながらも幾らか氣がかりになつて來た。グッドも、サー・ヘンリーも同じだつたと思ふ。一時間半ばかりも、路傍にヒースの生えた道を歩いて行くと、少し遅れて躡いて來たガゴオルが嘎れ聲を出して吾々に止めと叫んだ。

「もつと悠つくり歩くんだよ。」と彼女は草を編んで拵へた籠の簾の間から顔を突き出して言つた。「寶物を捜しに行くものには、皆が皆災が降りかゝるのだぜ。そんなに走つてまで、わざ／＼災を背負ひ込みに行かなくなつてい、だらう！」そして彼女は恐ろしい聲で笑つた。彼女の笑ひ聲を聞くといつても私は脊筋が寒くなつた。

だが吾々は尙も進んで行くと、遂に吾々の前に大きな四角い坑が見えた。坑の周囲は勾配になつてゐて、深さ三百呎、周囲はたつぷり半哩もあつた。

「これは何だか判りますか？」と私は、この大きな堅坑を呆氣にとられて見てみたサー・ヘンリーとグッドとに訊ねた。

彼等は首を振った。

「ではあんた方はまだダイヤモンドの本場のキンバライでダイヤモンドを採掘する所を見たことがないのですね。これはきつとソロモンのダイヤモンド坑に相違ありませんよ。御覽なさい」と私は坑の四邊を蔽うてある草の中にまだ見える硬い青土の層を指しながら言った。「全然同じですよ。」

ポルトガルの老人の地圖に記してある堅坑に相違ない。この坑の周邊で街道は二つに岐れて、その坑をぐるりとかこんであつた。この周圍の道の處々はすつかり石で出来てあつた。それは坑のふちが崩れるのを防ぐためらしかつた。坑の反対側に立つてある三つの塔のやうなものが見えるが、あれは何だらうと好奇心に驅られながら、吾々は道を急いだ。だん／＼近づくにつれて、それは三人三様の形をした三つの巨像であることが判つた。それこそクアアの人民が非常に畏れてある『無言の神』であらうと吾々は推測したが、果してその通りであつた。しかし、この三つの巨像の莊嚴さはその側へ行くとまではつきり判らなかつた。

生殖器崇拜の粗笨な象徴を彫り附けた大きな石の臺の上に、約二十歩づゝの間隔をおいて、三つの巨像が坐つてあつた。二つは男で、一つは女で、何れも頭の上から臺の上のところまで十八呎ほどあつた。女の像は裸體できりつとひきしまつた中々の美人であつたが、長い年月の間風雨にさらされ

てゐたために、顔は大分破損してをり、顔には角髪のとがあつた。これに反して二つの男の像は身に布を纏ひ、恐ろしい形相をしてゐた。わけても右の方の像は悪魔のやうな顔をしてゐた。左の方の像は静かな顔つきをしてゐたが、その静かさは身顛ひするやうな静かさだつた。

この『無言の神』を見てゐるうちに、誰がこんなものをこしらへたのだらう、それからこの堅坑を掘り、あの街道を造つたのは誰だらうと言ふ疑念が吾々の心に起つて來た。ふと私は舊約聖書にソロモンが異國の神を追うて彷徨ひ歩くところを思ひ出した。その三人の神の名前を私は覚えてゐた。シドニヤ人の女神アシトレトとモアビタ人の神ケモシと、アンモンの子供等の神ミルコムとだ。そこで私はこの巨像はその三人の神をかたどつたものではなからうかと連れの者に言つた。

「ふむ」と古典學者のサー・ヘンリーは言つた。「さうかも知れんね。ヘブライ人のアシトレトはフェニキヤ人のアスタルテで、これはソロモンの時代の大商人だつたのですよ。そして、それが後にギリシヤのアフロヂットになつたのです。この神には半月形の角がありました。この女の像にも角の跡がありますからね、ことによるとこの巨像はフェニキヤの役人が考へついたものかもしれませんね」吾々がこの古代の遺物をすつかりしらべ終らない中に、インフアドオスがやつて來て、無言の神に鐘を擧げて敬禮した。そして吾々に向つて、これから直ぐに國王の墓場に行くか、それとも晝の食事を済ますまで待つかと尋ねた。若し直ぐ行くならガゴオルが案内するといふことであつた。まだ十一時前ではあるし、吾々は早く目的地が見たくてたまらなかつたので、直ぐにこれから行きたいと言つ

た。そして私は、もし遅れた場合の要心に少し食物を持って行くことにした。やがてガゴオルの罾籠がその場へ運ばれ、ファウラタは私の頼みで若干の乾肉と、水を入れた二つの壺籠とを葦で造った籠の中へ入れて持った。ガゴオルは罾籠の中から出ると、じろりと吾々を見て杖にすがつて巨像の五十歩ばかり後に立つてゐる八十呎もある峻しい岩の斷崖の處まで踏躑しながら行つた。吾々も彼女の後からついて行つた。そこには坑道の入口らしいアーチ形の狭い門があつた。

ガゴオルは氣味の悪い笑を浮かべながらそこで吾々を待つてゐた。

「さあ、さあ！」と彼女は嘎れ聲で言つた。「皆用意はよいか。どれ、それではこれから國王の命令通り光る石のところへ案内することにしよう、は！ は！ は！」

「用意は良い」と私は言つた。

「よしよし！ 氣をたしかに持つて何を見ても吃驚せんやうにするが、い、ぜ、さあインファドオス、國王を裏切つたお前さんも道づれになるかね？」

インファドオスは眉をひそめて答へた。

「いや、わしは行かん、わしには用がない！ だがガゴオルよく氣をつける！ お客様がたの髪の毛一本でも傷つけたら、お前の命はないのだぞ、い、か？」

「判つたよ、インファドオス、わしはお前を知つとる。お前はいつも大きなことを言ふのが好きだつた。お前はまだほんの赤ん坊の時に、お前の母親をおどかしたのを覚えてゐるよ。それはまだほんの

此間のことだつたからな。だが心配せんでもい、わしは國王の命令をはたすだけのために生きのびてゐるのだからな。わしはこれまでも澤山の國王の命令通りに働いて來たが、しまひにはどの國王も皆わしの命令を聞くやうになる、は！ は！ どれ、これから昔の國王の顔でも見て來ようか！ ツワラの顔もな！ さあお出で、こゝにランプがある」と言ひながら彼女は大きな油壺を取り出し、外套の下からあやしげな燈芯を出して灯を點けた。

「お前も行かないかね、ファウラタ？」とグッドはこの娘のお蔭で大分上手になつたククアナ語で訊ねた。

「怖いわね」と娘はおづ／＼答へた。

「では僕がその籠を持つて行かう。」

「い、え、あなたの行きなされる處なら、どこへでも一緒に行きますわ！」

「これや愈々困つたことになつたわい」と私は心の中で思つた。

ガゴオルはさつさと道の中へはひつて行つた。道は二人でたつぷり竝んで歩けるほど廣かつた。そして眞つ暗だつた。吾々はこは／＼老婆の嘎れ聲のする方へついて行つた。すると、不意にぱた／＼と羽搏きの音がした。

「おや、あれや何だらう？」とグッドは叫んだ。「何か僕の顔にあたつたぜ。」

「蝙蝠だよ」と私は言つた。

かれこれ五十歩ばかりも来たと思ふ頃、吾々は道が少し明るくなつて来たのに気がついた。それから暫くたつと、吾々は實に驚くべき場所へ来てゐた。

讀者諸君は諸君がこれまで見たことのある一番大きい伽藍を想像して欲しい。だがその伽藍には窓はなく、上の方に、恐らく外へ通ずる堅坑があつて、そこから微かな明りが通つてゐるのだ。そしてアーチ形の屋根は、床の地面から百呎も上にあるのだ。かういふ伽藍を想像すれば、略、吾々のひつて行つた洞窟の大體の見當がつくだらうが、たゞ異つてゐる點は、この自然にできた伽藍は人間のこしらへたどの伽藍よりも高く、廣いといふ點だ。しかしこの場所の不思議さは、たゞ大きいといふばかりでなくて、その中には一見氷のやうな、大きな柱が澤山並んで建つてゐたのだ。それは鐘乳石の柱なのだ。この白い柱のすくすくと並んで立つてゐる光景は到底筆紙でつくしがたい雄大なものであつた。中には起本部の直径が二十呎もあつて天井まで續いてゐる柱もあつたし、中にはいま現に形成されつゝある柱もあつた。岩の床からできかゝつてゐるのは古代ギリシヤの寺院の壞れた柱そのまゝで、上の屋根から下つてゐるのは大きな氷柱そのまゝであつた。

吾々が見てゐる中にもこの柱は刻々に出來つゝあつた。といふのは上の方の氷柱から下の柱の上へ時々小さい水滴がぼたり、ぼたりと落ちてゐた。中には二三分間に一滴位しか落ちないのもあつた。こんな割合で高さ八十呎、直径十呎もある大きな柱が出来るには何年かゝるかを計算して見るのも興味のあることだらう。

鐘乳石といふものは時々妙な形になることがある。それは水の雫が同じところへ落ちないためにさうなるのであらう。或るものは大きな説教臺のやうな形をしてゐた。

この大きな洞窟の側壁には、ところどころに道が通じて、小さい洞窟がその先きに開いてゐた。だが吾々はこんな美しい洞窟もゆつくりしらべてゐるひまはなかつた。といふのは、ガゴオルは鐘乳洞などには無頓着で、早く自分の仕事を済ましてしまはうとしてゐたからだ。特に私はどうして洞窟の申へ明りがはひるのか、それは自然にさうなつてゐるのか、或はまた人間の手でさういふふうに造つたのかを調べて見られなかつたのを残念に思つた。だが吾々は歸りにゆつくり見て行かうと思つて、それで諦めて不愛想な案内者の後を蹤いて行つた。

ガゴオルのあとへついて眞直にこの洞窟の突き當りまで行くと、そこにはまた入口があつた。この入口は初めの入口と違つて、上がアーチ形でなく、四角で、ちよつと埃及の寺院の入口に似たところがあつた。

「さあこれからいよいよ國王の墓場へはひるんだぜ、用意は良いかね？」とガゴオルは訊ねた。明かに吾々をわざと氣味悪がらせるつもりらしかつた。

「いゝから行け！」とグッドはちつとも恐ろしくなれないといふことを見せようとしながら嚴かに言つた。實際吾々はみなさういふふうを裝つてゐたのだ。たゞファウラタは別で、彼女はグッドの腕にかまつてかばつて貰つてゐた。

「少し氣味が悪くなつて来たねえ」とサー・ヘンリーは暗い道を覗きこみながら言った。「さあ行きませう、コオターメンさん、あの婆が待つてゐるから。」

ことり／＼とガゴオルは杖の音をさせて無氣味な聲で笑ひながら歩いて行つた。だが私はまだ何となく薄氣味が悪いのもぢ／＼してゐた。

「早く来なさい」とグッドは言つた。「でないとなあの綺麗な案内者を見失ひますよ。」

こんなふうには言はれたので、私も仕方なく道を降りて行つた。かれこれ二十歩ばかりも行くと、陰氣な暗い部屋の中へ着いた。その部屋は長さ四十呎、幅三十呎、高さ三十呎位あつて、明らかに人間の手で岩を掘り抜いて造つたものであつた。この部屋は前の大きな鐘乳洞のやうに明るくはなかつたので、初めて見た時には、部屋の中に大きな石の臺があつて、その上に巨大な白い像が立つて居り、その周圍に人間位の大きさの白い姿が立つてゐるのが見えただけであつた。その次に私は鳶色のものが一つ中央の臺の上に坐つてゐるのを發見した。それからだん／＼眼が光りになれてくるにつれて、そこにあるのが何であるか判つて来た。

私は元來あまり神經質な人間ではない。それにあまり迷信などは信じない方だ。だがこの光景を見た時ばかりは私は仰天してしまつた。そしてサー・ヘンリーが私の素首を掴んで止めなかつたら、私はきつとこの鐘乳洞の外へ飛び出してしまひ、キンパーリーのダイヤモンドを残らずくれると言つても二度とその中へはひる氣にならなかつたらうと思ふ。だが、サー・ヘンリーがしつかり掴んでゐて

どうにもできなかつたので、私はその場に止つてゐた。しかし暫らくすると彼の眼も暗になれてきたと見えて、サー・ヘンリーは私を掴んでゐた手を放して額の汗を拭きはじめた。グッドは微かな聲で神を祈り、ファウラタは彼の頭に抱きついてけた、ましく泣き叫んだ。

たゞガゴオルだけは大きな聲を出して長く笑つただけだつた。

それは實に氣味の悪い光景であつた。長い石の臺の端に、骨だけの指で大きな白い鎗を持ちながら死の神が坐つてゐた。それは高さ十五呎もある大きな人間の骸骨の形をしてゐた。この骸骨は頭の上へ鎗を振りあげて、今にも突かうとするやうな身構へをして居り、片手は石の臺の上に載せて、今にも起ち上るやうな様子をしてゐた。上體は前こゝみになつて頭蓋骨を前に突き出し、空洞の眼でちつと吾々を凝視め、顔を少し開いて、今にも物を言はうとするやうな風をしてゐた。

「一體あれは何だらう？」とたうとう私は微かな聲で言つた。

「それから、あの周りにあるものは何だらう？」とグッドは臺の周りに竝んでゐる多くの白いものを指さしながら訊ねた。

「それからあれはなんだね？」とサー・ヘンリーは臺の上に坐つてゐる鳶色のものを指さしながら言つた。

「ひー ひー ひー」とガゴオルは笑つた。「國王の墓場へはひるものには災が降りかゝつて来るのぢや。ひー ひー ひー ひー！」

「さあお出で、戦争では勇しかったヘンリーとやら、こちらへ来てお前が殺した相手を見るんだ」と老婆は干乾びた指でカーチスの上衣を引っぱつて臺のところへ連れて行つた。吾々はその後から蹤いて行つた。

やがて彼女は立止つて、臺の上に坐つてゐる意色のものを指さした。サー・ヘンリーはそれを見るのと呀つと叫んで後へ跳び退つた。それも無理ではない、といふのは、臺の上には、カーチスが戦斧で首と胴とを切り放した、ククアナの前王ツワラのやつれた死骸が裸のまま、坐つてゐるではないか。しかも首は膝の上へせてあつて、切られたあとの頸の肉は縮んで、脊柱が一吋ばかり上へ突き出てゐたのだ。おまけに死骸の表面には薄い透明な膜が出来てゐるので、益々薄氣味が悪かつた。なぜそんなものが出来たのか初めの中は良く判らなかつたが、よく見ると天井からポタリ／＼と水滴が死骸の頸の處へ落ち、それが體軀の表面を傳はつて、臺の小さい穴から岩の中へ流れてゐるのであつた。それで薄い膜の出来てゐる譯が判つた。ツワラの死骸は刻々鐘乳石になりつゝあつたのだ。

この氣味の悪い臺の周りを取り圍んで坐つてゐた眞白な人間の姿を見た時に、この見解は益々確實なものとなつた。そこに竝んでゐるのはみな人間の身體なのだ、といふよりも嘗て人間だつたのが、今では鐘乳石になつてしまつてゐるのだ。こんなふうにしてククアナの人民は太古の昔から、國王の屍體を保存してゐたのである。

この國王たちの屍體の長い列は實にこの上なく物凄い見物であつた。二十七の屍體が悉く氷のや

うな屍衣を纏うて、死の神を主人としてその無氣味な臺の周りに列んで坐つて居り、透明な屍衣を透して、微かに顔の輪郭を見ることが出来た。この屍體の數から推して考へても、この習慣は餘程昔から行はれてゐたに相違ない。國王の平均在位年限を十五年としても、四百五十年は經つてゐるのだ。しかし死の神の巨像の方は、それよりもずっと古いものに相違ない。これは例の三つの巨像をこしらへたのと同じ藝術家の手になつたものであらう。この像は天然の鐘乳石を切つて造つたもので、解剖學の心得のあるグッドの説によると、この骸骨は小さい骨の形や配置にいたるまで、解剖學的に完全なものだとのことであつた。

私の考によるとそれは多分古代の彫刻家が氣紛れに造つたのを、ククアナ人が見て、その周圍へ國王の死骸を安置しようと思つたものであらう。それともことによるとその先にある寶窟へ闖入しようとするものを恐れさすために造られたものかも知れぬ。

それは何れにしてもこれが白い死の神と白い屍體との正體であつたのだ。

第十七章 ソロモン王の寶窟

吾々がやつと恐れから鎮まつて、氣味の悪いこの墓場を調べてゐる間に、ガゴオルは別なことをしてゐた。彼女はどうかかかうにかして大きな臺の上へ匍ひあがり、ツワラの死骸の坐つてゐる傍まで行つて何か無氣味なことをしてゐた。ことによると、彼の死骸がもうどれだけ石化したかをしらべて

あたのかも知れぬ。それから躑けながら後へ退つて鐘乳石の屍衣を纏つた白い一つ二つの屍體の前で立ち止つて昔馴染にでも物を言ふやうに、何か判らぬことを喋つてゐた。それがすむと彼女は、白い死の神の脚下にうすくまつて何か祈りをさへげてゐるらしかつた。多分、良くない祈願をしてゐたものだらうと思ふ。吾々はそれを見るとぞつとして早くこの場から出て行きたくなつた。

「さあ、ガゴオル、寶窟へ連れて行け！」と私は低聲で囁いた。
老婆はすばやく臺の上から匍ひ下りた。

「怖くないかね？」と彼女は私の顔を見上げながら言つた。

「さあ行け！」

「よし、よし」と言ひながら、彼女は杖にすがつてよちよちと死の神の後の方へ廻つた。「寶窟は此處にあるのだ。ランプに火を點けてはひりな」かう言ひながら彼女は油壺を下において洞窟の壁に凭れた。私は燐寸を取り出して燈芯に火を點け、入口を捜して見たが、前には堅い岩ばかりで入口らしいものはどこにもなかつた。ガゴオルは無氣味に笑つた。「そこが道だよ、は！ は！ は！」

「お前は吾々をからかつてゐるな！」私はきつとなつて言つた。

「からかつてるんぢやないよ、よく見な！」と言ひながら彼女は岩を指さした。
ランプを差し上げて見ると、石の塊が徐々に床から上へあがつて、上の岩の中へ消えてしまつた。きつとその石のはひる窪みが上に出来てゐたのだらう。その石は高さ十呎幅五呎もあつてか

なり大きな扉ぐらゐの大きさのものであつた。重さは少くも二三十噸はあつたらうと思ふ。それが簡単な仕掛けで、雑作なく動くやうになつてゐたのだ。多分近代の窓を上下するのと同じ仕掛けだつたらうと思ふが、無論吾々にはどういふ仕掛けになつてゐるのか判らなかつた。

この大石がしづく／＼とひとりで上へ上つて、すつかり見えなくなると、その跡に眞暗な坑が現はれた。

いよくソロモンの寶窟へ来たんだな、と思ふと私は昂奮のために身體がぞく／＼して來た。吾々は一ぱいかつがれたのかな、それともダ・シルヴェストラの書いたことに間違ひはなくて、この暗い坑の中に寶物がどつさりあつて、吾々は世界一の金持になれるのかな？ それはもう一二分でわかるのだ。

「そこへはひるんだよ」とガゴオルは入口から中へ進みながら言つた。「だが、その前にこのガゴオルの言ふことを聞いておきな。このさきにある光る石は、無言の神の立つてゐる堅坑の中から掘り出して、こゝへしまつてゐるのだ。誰がさうしたのかわからないがね。こゝに寶物がしまつてゐるといふ噂は、この國の人民に代々言ひ傳へられてゐるのだが、誰もそのありかを知るものもなく、秘密の入口を知つてゐるものもないのだ。しかしすつと以前に一人の白人が、山を越えて、この國へやつて來て、その當時の國王から大變款待を受けたことがある。——多分その白人も星の國からでも來たのだらう。この白人が、この國の一人の女と一緒にこゝまでやつて來て、その女が偶然この秘密の扉を見

附けたのだ。お前さんたちが千年かゝつて捜したつて見附かりつこはないのだよ。そこでその白人は女を連れて中へはひつて、光る石を見出し、その女が辨當袋に持つて来た、小さい山羊の皮に石をいつばい詰めこんだのだ。そして愈々窟を出ようとするときになつて、もう一つ大きな石を拾ひ上げて、それを手に持つたのだ」こゝまで言つて彼女は話を切つた。

「ふむ、それでダ・シルヴェストラはどうしたんだね？」と私は深い興味を感じて呼吸もせずには訊ねた。

老婆は、私がシルヴェストラの名前を言つたのを聞いて吃驚した。

「お前は どうしてその死んだ男の名前を知つてるのだね？」と彼女は鋭くきゝとがめた。そして答も待たずに續けて言つた。

「それからかうなんだよ。その白人は急に怖くなつて、小山羊の皮包を下へ落して、手に持つてゐた石を一つだけ持つて逃げ出してしまつたのだ。その石がツワラの額についてゐた石なのだ。」

「それから誰もひつたものはないのかね？」と私は暗い道を覗き込みながら訊ねた。

「それからは誰もひつたものはないのだ。入口の秘密は嚴重に保たれてゐて、國王だけは、それを開けて見るのだが、中へはひつたものはないのだ。この中へはひると一月の間に死でしまふといふ傳説があるのでね。白人ですらも山の洞穴の中で死んでしまつたのだからね。それで國王でも中へはひらないのだ。は！ は！ これはまつたくだよ。眞實だよ。」

吾々はこれを聞いて互ひに眼と眼を見交した。どうして一體この老婆はこんなことを知つてるのだらうと思ふとぞつと寒気がして来た。

「さあはひるんだ、わしの言つたことが眞實なら、石を包んだ山羊の皮が、まだ床の上にあるだらう。それからこゝへはひつたものは死ぬと言ふ事が眞實かどうかは後になれば思ひあたるだらうて、は！ は！ は！」かう言ひながら彼女は手燭を持つてよち／＼坑の中へはひつて行つた。白狀するが、私はまた彼女の後から躓いて行くのを躊躇した。

「大丈夫だ！ あんな婆の言ふことを恐れてたまるものか」と言ひながらグッドは、ガゴオルの後について坑の中へはひつて行き、吾々も澁々その後を續いた。數碼進んで行くと、ガゴオルは立ち止つて、吾々の來るのを待つた。

「こゝを見い」と彼女は手燭をさし上げながら言つた。「こゝへ寶物を藏ひ込んだ人たちは、萬一秘密の入口を見附けた者があつても、中へはひれないやうに、こんな設備をしておかうと思つたのだが、間に合はなかつたのだ」かう言ひながら、彼女は、二呎四方もある四角な石が道の上に積み重ねてあるのを指ざした。その傍にもそれと同じ大きさの石が置いてあり、何よりも不思議な事には、漆喰と、鏝とが側においてあつたことだ。その鏝は、今日の職人の使ふものと同じやうな形をしてゐた。こゝまで來ると、ファウラタは、恐ろしくなつてもうこれから先きへは行けないからそこで待つてあると言つた。そこで吾々は彼女をその造りかけの壁の上に坐らせ、食料品を入れて來た籠を彼女の

傍に置いて、彼女を後に残して進んで行つた。

十五歩ばかり行くと、突然、精巧な彫刻をした、木の扉に突きあたつた。その扉は開け放してあつた。この前にはひつた者が、それを閉めるひまがなかつたのか、それとも閉めるのを忘れたかに相違ない。

この扉の闕の上に、山羊の皮で造つた皮袋が落ちて居り、その中には小石が一ばいはひつてゐるらしかつた。

「ひー！ ひー！ どうだね？」とガゴオルは笑つた。「わしの言つた通りだらう。こゝへ来た白人が慌てて逃げだして、女の皮袋をあそこへ落して行つたのだよ！」

グッドは身をかゞめてそれを拾ひ上げた。それは重くてざく／＼音がしてゐた。

「きつとこの中にはダイヤモンドがいつぱいあるんだね」と彼は眞顔になつて言つた。誰だつて、ダイヤモンドのはひつた、山羊の皮袋を見ては眞顔にならざるを得ないだらう。

「さあ行け！」とサー・ヘンリイは焦々しながら言つた。「その手燭を貸せ」と言つてガゴオルの手からランプを取つて、部屋の中へはひり、燈りを高く頭上にさし上げた。

吾々も、ダイヤモンドの袋のことは暫らく忘れて中へはひつた。たうとうソロモンの寶窟へ着いたのだ！

薄暗い燈火で見ると、それは天然の岩をくりぬいてこしらへた十呎四角位の部屋であつた。部屋

の中には床から天井まで立派な象牙が積み重ねてあつた。吾々の眼に見えただけでも、最上等の象牙が四五百本位あつた。この象牙だけでも、吾々は一生裕福に暮してゆくことが出来る。ソロモン王は、こゝにある材料で、世界無比の有名な「象牙の玉座」をこしらへたのであらう。

部屋の反対側には、赤く塗つた二十許りの木の箱があつた。

「あそこにダイヤモンドがあるにちがひない。燈りをこちらへちよつと」と私は叫んだ。

サー・ヘンリイは手燭をさし上げて一番上の箱の側へ近寄せた。箱の蓋は、こんな乾燥した場所でも腐蝕して、縁がぐだけてゐるやうに見えた。多分、ダ・シルヴェストラが壊したのだらう。蓋の穴の中から手を入れて中味を一掴み取り出して見ると、それはダイヤモンドではなくして、吾々のまだ見たこともない形をした金貨で、その上には、ヘブライ文字らしいスタンプが捺してあつた。

「これでも角、手ぶらで歸らなくてもいい譯だ。」と私は金貨を側へ置きながら言つた。「箱の中には金貨が二千宛位はひつてゐるに相違ない。そして箱の数は十八ある。これは多分、職人や商人に支拂ふ金だつたのだらう。」

「ダイヤモンドは、あのホルトガル人が皆な袋の中へ入れてしまつたんだな」とグッドは言つた。

「あの一番暗い處を見るがい、ぞよ」とガゴオルが吾々の顔色を読みながら言つた。「あの隅つこに、石の箱が三つある。二つは封がしてあつて、一つは開いてゐる！」

これをサー・ヘンリイに通譯する前に、私は一人の白人が三百年も前にこゝへはひつてから、其の後

誰もはひつた者はないのに、どうしてガゴオルがそんなことを知つてあるかを訊ねて見すにはあられなかつた。

「星の世界の人間は、岩の中を見抜くものがあるつてことを知らないんだね？ は！ は！ は！」と嘲けるやうに答へて彼女は笑つた。

「あのすみつこを捜して見なさい、カーチスさん」と私はガゴオルのさし示した場所を指さして言つた。

「おや、こんな處に押入れのやうなものがある」とサー・ヘンリーは叫んだ。

吾々は急いで彼の立つてある處へ走り寄つた。この凹んだ場所の壁際に、二呎立方ばかりの三つの石の箱が置いてあつた。二つの箱には石の蓋があつたが、三番目の箱は蓋が取つたまゝで開いてゐた。初めのうちは、銀色の光りがちらちらして、眼がくらんでよく判らなかつたが、だんく眼がなれてくると、中には箱の七分目位のところまで、まだ琢きを入れないダイヤモンドがぎつしりはひつてゐた。私は身をかがめてその中の幾つかを取り上げた。實にそれは紛れもないダイヤモンドだつた！ そのことはすべくした石鹸のやうな手ざはりで判つた。

「これで吾々は世界一の金持になつた！」と私は言つた。「モンテ・クリストだつて到底吾々にはかなはぬだらう。」

「市場にダイヤモンドの洪水を流してやらう」とグッドは言つた。

「まづ早くそれを取ることだね」とサー・ヘンリーは言つた。

吾々は世界中で最大の果報者である筈なのに、何だかまるでこれから罪を犯さうとする謀叛人かなんぞのやうに、眞青な顔をして手燭の燈りで燦々光る寶石の前に立つて、互ひに顔を見合せた。

「ひ！ ひ！ ひ！」と老婆のガゴオルは、大蝙蝠のやうに飛び廻りながら後の方で笑つた。「お前さんたちの大好きな光る石がそこに欲しいだけある！ だがそれは取つても指の間からこぼれてしまふぞ。食つてしまふか？ ひ！ ひ！ それとも吞んでしまつたらどうだ？ は！ は！」

その時私はダイヤモンドを喰つたり呑んだりすると言ふ考が妙にかしくたまらなかつたので大聲をあげて笑つた。他のものも譯が判らずに笑つた。だが暫らくすると急に笑ふのをやめた。

「他の箱も開けて見る！」とガゴオルが嘔れ聲で言つた。「きつとその中にはもつと澤山はひつてるよ。澤山持つて行くがい、存分に持つて行くがい、は！ は！」

かう言はれたので吾々は外の二つの箱の蓋を開けにかゝつた。そして何だか冒瀆するやうな氣持で箱の封を切つた。その箱の中にはやはりダイヤモンドがいつぱい填つてゐた。少くも二番目の箱からは、ダ・シルヴェストラが取り出さなかつたので、箱の縁まで溢れるほどはひつてゐた。三番目の箱には四分の一位しかはひつてゐなかつたが、それはみな色の變つた石だつた。二十カラット以下のものは一つもなく、或るものは鳩の卵位の大きさだつた。この大きなのは燈火で透して見ると少し黄味を帯びてゐた。本場のキンパーリーでは、かういふのを「色變り」と言つてゐる。

だが吾々は、その間にガゴオルが残忍な眼付きで吾々の方を睨みながら、蛇のやうにこの寶窟を脱け出して、暗い道を通り抜けて、大きな岩の秘密の扉の方へ匍つて行つたのを氣が附ずにあたのだ。

忽ち續げざまに泣き叫ぶ聲が暗い道の方から聞えて來た。それはフアウラタの聲だ！

「あ、眼鏡の方、皆さん！ 助けて下さい！ 助けて！ 石が落ちて來ます！」

「おや、あの娘の聲だ！ では——」

「助けて！ 助けて！ 婆さんに突き殺されます！」

吾々はすぐに暗い道の中へ駆け下りた。手燭の光りで見ると、大へんだ！ 大きな岩の扉が徐々に下へ下りつゝあるのだ。もう床から三呎しかない。その側でフアウラタとガゴオルとが掴みあつてゐる。フアウラタの赤い血は彼女の膝までたれてゐたが、勇敢な娘は山猫のやうな老婆に尙もしがみついてゐた。あつ！ 老婆は逃げた！ フアウラタはぱたり仆れた。ガゴオルは地べたに身を投げ、蛇のやうに身をねぢつて石の扉の下をすり抜けようとした。扉はその時に彼女を身體を上から挟んだ。ガゴオルが下になつたのだ！ あ！ もう駄目だ！ もう駄目だ！ 彼女は石と石とに挟まれて苦悶の叫びをあげた。三十噸の大石がだん／＼下へ下りて來て、彼女の骨だらけの體軀を徐々に下の岩の上へ壓へつけた。けた、ましい叫び聲も遂にやんでめり／＼と骨の碎ける音が聞え、吾々がそこ

へ駆けつけた時には扉は下まできちんと接してゐた。

それは四秒間位の出來事だつた。

それから吾々は、フアウラタの方へ向き直つた。可哀さうな娘は、胸を突き刺されて仆れてゐた。

もう助かる見込のない事が私にはすぐに判つた。

「あゝ！ ブウグアンさま（グッドのことを彼女はかう呼んでゐたのだ）妾は死にます！——と美しい娘は喘ぎ／＼言つた。「あのガゴオルが外へ匍ひ出して行きましたときには、妾はちやうど氣絶してゐたので氣がつきませんでした。——すると扉が少しづつ、下へ落ちて來るのです。その時あの老婆はまた中へ引返して來ました。上の方を見上げると、あの老婆が少しづつ、下へ下りてくる扉をくゞつて、中へはひつて來たものですから、妾はいきなりあの老婆に武者振りついて止めてやりました。するとあの女は妾を刺したのです。この通り！ 妾はもう死にます、ブウグアンさま！」

「かはいさうに！ かはいさうに！」とグッドは叫んで、どうすることも出來なかつたので、下へ身を投げて彼女に接吻した。

「ブウグアンさま」と彼女は暫時してから言つた。「マクマザンさまはそこにいらつしやいますか？」

妾はもう眼が見えなくなつてしまひました！」

「私はこゝにゐるよ、フアウラタ！」

「マクマザンさま。暫時の間お願ひですから妾に代つてブウグアンさまに申上げて下さい。あの方に

は妾の言葉は判らないのですが、妾は死ぬ前にたつた一語申上げたい事があるのです。」

「何でも言ひなさい、ファウラタ。私が通譯してあげる。」

「ブウグアンさまに言つて下さい。——妾があの方を愛してゐると言つて下さい。妾は死で行くのが嬉しいのです。さうすればあの方は妾のやうな者と闘はりがなくなつてしまひますから、太陽と闇とが釣り合はないやうに、白と黒とはつり合ひません。あの方を初めて見た時から、妾は時々まるで胸の中に鳥がゐて、いつかここから飛び去つて、何處かへ行つて歌ふやうな氣がしました。今では妾は手を舉げることも出来ませんし、妾の頭は冷たくなつてゐますけれど、それでも妾の胸は死ぬやうな氣がしないのです。妾の胸は愛のためにいつばいで、千年も、若くて生きてゐられるやうな氣がするのです。どうぞ、あの方に言つて下さい、若し妾が生れかばつたら、ことによると星の世界でお目にかゝれるかもしれません、マクマザンさま、どうぞたつた一言、妾が愛してゐるとだけ言つて下さい——お、ブウグアンさま！ もつと強く、強く抱きしめて下さい。妾にはもうあなたのお腕が判りません、あゝ！」

「彼女はたうとう死んでしまつた——死んでしまつた。」とグッドは悲しみの餘り起ち上つて叫んだ。彼の正直な顔には涙が傳つてゐた。

「もうあの女のことを悲しまなくてもいいよ、グッド君」とサー・ヘンリーは言つた。

「え！ それはどう言ふ意味です？」とグッドは詰つた。

「それはね、君ももうすぐにあの娘といつしよになれるやうなると言ふことさ。判らないかね、吾々は生き埋めにされたんだ！」

サー・ヘンリーがかう言ふまで、吾々はかはいさうなファウラタの最期の光景に氣を取られてゐたので、吾々が現在どう言ふ立場に陥つたかを氣がつかなくかつた。しかし彼の言葉を聞いて、その恐ろしさがやつと判つて來た。重い石の扉は閉ざされてしまつたのだ。しかも多分永久に閉ざされてしまつたのだ、といふのはその祕密を知つてゐるたゞ一人の人間は、その下になつて粉微塵に碎かれてしまつたからだ。このやうな扉は、強力なダイナマイトでも用ゐなければ到底開く望みはない。しかも吾々はその扉の悪い方に閉ぢ込められてゐるのだ。

數分間吾々は恐怖にうたれてファウラタの死骸の側につゝ立つてゐた。元氣も何もすつかりなくなつてしまひ、これから徐々に惨めな最期をとげるのだと思ふと、吾々は呆然としてどうしてよいか判らなくなつた。今になつて吾々はすつかり合點が行つた。これはあのガゴオルの悪魔が最初から仕組んだ事に相違ない。あの老婆はどういふものか吾々をひどく憎んでゐたが、その吾々三人が日頃欲しがつてゐた寶物ともろともに、飢ゑと渴とで徐々に死んで行くのを見て、彼女は樂まうと考へてゐたのだ。彼女がダイヤモンドを食うとか呑むとか言つて吾々を嘲つた意味が、今になつて私には判つて來た。恐らくあの憐れなポルトガル人も、吾々と同じやうな目にあひかゝつて、寶石の一ばいはひつた皮袋を棄てたまゝ、慌てゝ逃げ出したものに相違ない。

「ぐづくしてゐても仕様がなない」とサー・ヘンリイは腹れ聲で言つた。「ランプはすぐに消えてしまふから、あの扉を動かす仕掛がそこらにあるかどうか捜して見よう。」

吾々は死物狂ひになつて、血の沼の中をあちこち歩き廻りながら、扉や、道の兩側の壁を手さぐりして見たが、仕掛けらしいものは何も見つからなかつた。

「駄目だ！」と私は言つた。「仕掛けは内側にある筈はない。もし内側にあるのならガゴオルは慌て、匍ひ出さうとしなかつたに相違ない。あの老婆が、大きな石の下に敷かれるのもかまはずに逃げ出さうとしたのは、内側には仕掛けのない事を知つてゐたからに違ひない。」

「とに角、吾々はこの扉をどうすることも出来んから、もう一度寶窟の中へ引き返さう」とサー・ヘンリイは言つた。

そこで吾々は、後へ引返した。行きがけに、中途にある造りかけの壁の側で、憐れなフアラタが持つて来た食物を入れた籠を見附けたので、それを吾々の墓場となるべき寶窟の中へ持つて行つた。それから吾々は引返して、フアラタの屍體を鄭重に寶窟の中へ運んで、金貨の箱の側へ置いた。

そして吾々は、寶石のはひつた三つの石の箱に凭れてどつかと坐つた。

「これから食物をなるたけ永く續かせるために今の中に三人で分けておかう」とサー・ヘンリイは言つた。そこで吾々はそれを分配した。少しづつ食べれば一人前四分宛位の分量があつた。それから乾肉の外に、六合づつ位はひる水を入れた瓶が二つあつたのである。

「さあ、明日は死ぬんだからこれから食つたり飲んだりしよう」とサー・ヘンリイは苦笑しながら言つた。

吾々はめいめい少量の乾肉を食ひ、少しばかりづつ水を飲んだ。いふまでもないことだが、吾々はひどく空腹を感じてはゐたのだが、食欲は餘り無かつたのだ。それでも食事をするといくらか気分がよくなつて来た。それから吾々は起ち上つて、何處かに出口はないかといふ微かな希望を持つて、この牢獄の壁を系統的に隅から隅まで調べて見た。床も同じやうに注意深く調べた。

だが出口は何處にもなかつた。考へて見れば寶窟などに出口のありさうなわけもないのだ。ランプはだん／＼薄暗くなつて来た。油はもう殆んど盡きてしまつたのだ。

「コオターメンさん」とサー・ヘンリイは言つた。「今何時ですか？——あなたの時計は動いてゐますか？」

時計を取り出して見るともう六時であつた。吾々が洞窟の中へはひつたのは十一時だつから、もう七時間たつたわけだ。

「インフアドオスが待ちあぐんであるでせう」と私は言つた。「若し吾々が今夜ぢうに歸らなければ朝になつたら彼は吾々を捜しに来るでせう。」

「いくら捜しても判るまい。あの男は扉の秘密も知らなければ、扉が何處にあるのかさへも知らないのだから。昨日までは、生きて人間で、扉の秘密を知つてゐるものはガゴオル一人しかなかつたので

す。今日はもう誰も知つてゐるものはないのです。たとひあの男が扉を見附けたとしても、あれを壊すことは出来ばしない。クアアナの軍隊が總掛りになつたつて厚さ五呎もある岩を壊すことは出来ばしない。もうかうなつては神様にすがるより外はありませんよ。考へて見れば寶物を捜しに來たものは皆非業の最期をとげたが、吾々も矢つ張りその仲間の數を増やすだけですよ。—
ランプは益々暗くなつて來た。と思ふと急にぼつと燃え上つて白い象牙の積み重ねたのや、黄金の箱や、その前に横はつてゐる哀れなファウラタの死骸や、寶物の一ぱいはひつてゐる山羊の皮や、ダイヤモンドの鈍い光りや、そこに坐つて餓死を待つてゐる三人の白人のやつれた凄惨な顔やを、一時に明るく照した。

そして焰は消えてしまつた。

第十八章 絶望

その晩の恐ろしさは私の筆では十分に描きつくせぬ。だが有難いことにはその恐ろしさは時々眠りのために途切れた。こんな恐ろしい境遇にあつても疲れきつてゐると時々睡魔が襲つて來るものだ。けれども少くも私は餘り多く眠ることは出来なかつた。世界中の最も勇敢な人間でも吾々の眼前にさし迫つてゐるやうな運命には氣がくじけてしまふに相違ないのに、私は決して勇敢な人間ではないのだ。しかしその事は別としても、その場の餘りの静けさだけでも、眠ることを許さなかつたのだ。讀

者諸君は、夜、床の中で眼が醒めて四邊の静けさが妙に恐ろしくなる時があるに相違ない。だが諸君は、完全な静けさと言ふものがどれ程恐ろしいものかはまた知るまい。地球の表面では常に何かの音、何かの運動があるものだ。ところがこゝではさういふものが絶対にないのだ。吾々は雪を戴いた大きな峰の内蔵の中へはひつてゐるのだ。數千尺の上には清らかな風が眞白な雪の上を吹いてゐるのだ。だがそんな音は此處まではとゞきはしない。吾々は死人の坐つてゐる恐ろしい墓場からですらも長い隧道と五呎も厚さのある岩の扉とで隔てられてゐるのだ。しかも死人は音などさせせるものではない。世界中の砲兵隊が一度に大砲を放つたつて、この生きた墓場の中にある吾々の耳にはとゞく筈がない。吾々は世界のあらゆる響から絶縁されてゐるのだ。——既に死んだも同じなのだ。

それに吾々の皮肉極まる立場が妙に強く私の胸を打つた。吾々の周囲には、加減な國の國債を支拂つたり、艦隊を建造したりするに足る位の富が横はつてゐるのに、吾々はそんなものはいらないから少しでも逃げ出す機會があればよいと思つてゐるのだ。今にきつとそんな寶物よりも一片の食物、或ひは一ぱいの水の方がほしくなつて來るだらう。そして最後には、一思ひに苦しみを縮めて死んでしまふことが出来れば、そんな寶物はいらぬといふ氣にもなることだらう。實際人間が一生を費して得ようとする富なんていふものは、最後の時になるとまったく價値のないものだ！

こんなことを考へてゐるうちに、夜はだん／＼更けて行つた。
「グッド拜、燐寸は尙本残つてゐるかね？」とたうとうサー・ヘンリーが言つた。その聲は恐ろしい

静寂の中にがん／＼響き渡つた。

「八本です。」

「一本擦つて時間を見よう。」

彼が燐寸をすると漆黒の闇に馴れてゐた吾々の眼は、眼がくらむほどまぶしく感じた。私の時計は五時だつた。吾々の遙か頭の上では、今、美しい曙の光りが雪の峰を染めてゐるに相違ない。そして、心地よい微風が、夜の霧を吹き拂つてゐることだらう。

「何か少し食つて元氣をつけることにしよう」と私は言つた。

「物を食つたところで何になるんだ？」とグッドは答へた。「もう早晩死んでしまふんだもの？」

「でも生きてゐるうちはまだ希望がある」とサー・ヘンリーは言つた。

そこで吾々は乾肉を食ひ、少しばかり水を飲んでまた暫らく休んだ。その時サー・ヘンリーは出来るだけ屏の近くへ行つて大聲を出せば誰か、外で聲を聞きつけるかもしれないと言ひ出したので、長い間の海上生活で鋭い聲を持つてゐるグッドが、手さぐりで隧道を歩いて行つてわめきはじめた。彼の出した聲は實に大きな聲だつた。しかし外側へは蚊のなく程にも聞えなかつたことであらう。

暫らくすると彼は断念してす／＼歸つて來た。しかもそのために咽喉が渴いて少し水を飲まねばならなかつた。それで吾々は水がなくなつてしまふのをおそれてもうわめくのはやめた。

吾々はまた用もないダイヤモンドの箱に凭れて何もせずにつくねんとしてゐた。この何もせずにあ

るといふことが、また吾々にとつては何よりつらいことの一つであつた。私はもうすつかり絶望してしまつた。サー・ヘンリーの廣い肩の上に頭をもたせて、私は思はず涙をこぼした。片一方の肩では、グッドが涙をのみ込んでゐるのが聞えた。

その時ほど私は、サー・ヘンリーのやさしさと勇氣をしみ／＼感じたことはない。吾々二人が物に恐れた子供で、サー・ヘンリーが乳母だとしても、彼はこれ以上吾々をやさしくすることは出来なかつただらう。彼は、彼自身も同じじめな境遇にあることは忘れてしまつて、力のあらん限り吾々を慰めたり勵ましたりしてくれた。そして吾々と同じやうな境遇にありながら奇蹟的に助かつた人の話をしたり、それでも吾々が浮きた、なくなると思ふにはもう苦しむのも暫くの間にすぐに樂になる、疲れきつて死ぬのは楽しいものだ（これは諷刺だが）等と言つたりして吾々を慰めた。

その中に夜が明けたと同じやうに日が暮れて行つた。こんな暗闇の中では晝と夜との區別はないのだが、燐寸をすつて見ると時計は七時になつてゐた。

吾々はもう一度喰ひ且つ飲んだ。さうしてゐるうちに私の心のうちに一つの考へが浮んで來た。

「この空氣は重苦しいが、それでもいつまでも新鮮なのはどういふ譯だらう？」と私は言つた。「さうだ。そのことは氣がつかなかつた」とグッドが跳び上つて言つた。あの石の屏から空氣がはひつて來る譯はないから、何處か他のところからはひつて來るに相違ない。空氣が通はないとすれば、吾々はこのにはひつた時に窒息してゐる筈だから、きつとある、搜して見よう。」

このちよつとした希望の火花を認めただけでも吾々の氣持がどれほど變つたかわからない。吾々はすぐに四つ匍ひになつて少しでも風の通つてゐさうな處を捜しまはつた。そのうちに私の手は冷たいものにさはつてきよつとしたが、それはファウラタの死んだ顔であつた。

一時間餘りの間吾々は捜しまはつたが、たうとうサー・ヘンリーと私とは幾度びも吾々の頭を象牙や、箱や、窟の壁にぶつつけてかなり負傷したので絶望して諦めてしまつた。しかしグッドは何もしないであるよりはまじだと言つて、殆んど陽氣な調子で辛抱強く捜してゐた。

「みんなこつちへ来て見なさい！」とやがて彼は壓へつけるやうな聲で云つた。

「言ふまでもなく吾々は彼の方へ踰越しながらかけつけた。」

「コオターメンさんちよつと此處へ手をあて、見なさい。私の手のところへ。なにか感じがありますか？」

「風が下からあがつて来るやうな氣がする。」

「よく聽いてゐなさい」と言ひながら彼は起ち上つてそこを足で踏んだ。すると吾々の心中にはさつと希望の焰が燃え上つた。そこは空洞のやうな響きがした。

私は手を顫はしながら燐寸をつけた。もうあとには三本しか燐寸は残つてゐなかつた。燐寸の光りで見ると吾々の立つてゐる處は窟の一番端の隅つこであつた。それだから吾々は、先程あれ程捜してゐても空洞の響きに氣がつかかなかつたのだ。燐寸の燃えてゐる間に、よく念入りに檢べて見ると、堅

い岩の床に一つの接ぎ目があつた。そしてその岩に一つの石の環がついてゐた。吾々は昂奮の餘り一語も言はなかつた。希望のために心臓の鼓動が激しくなつて物も言へなかつたのだ。グッドの持つてゐたナイフの背には馬の蹄から石を抜きとるために鍵がついてゐた。彼はその鍵を開いてそれで環のまはりをほじくり、たうとうそれを環の下へさし込んで鍵が折れないやうに要心しながらそつとこじ上げた。環はやつと動き出した。それは石で出来てゐたものだから何百年も前からそこに横になつてゐたにもかゝらず、餘り堅く膠着してはゐなかつた。鐵の環なら錆びついてゐて動きはしない處だつたのだ。やがて輪は上へもち上つた。そこで彼はその中へ手を入れて力いっぱい引張つた。しかし下の岩はびくともしなかつた。

「私がやつて見よう！」と私は焦々しながら言つた。といふのは、その石の環は、あひにく、ちやうど隅つこにあつたので、二人で一度に引つばるわけにはゆかなかつたのだ。私はそれを掴んで引つばつて見たが何の手答へもなかつた。

それからサー・ヘンリーがやつて見たがやはり駄目だつた。そこでグッドは再び環を掴んで、吾々が空氣の通つて来るのを感じた隙き間を、もう一度すつかりほじくつた。

「カーチスさん、これをつけてあなたの中へ通しなさい。あなたは二人力ありますから」と言ひながら身だしなみのい、彼がもつてゐた丈夫な黒い絹のハンケチを取り出し、それを輪の中へ

通した。「コオターメンさん、あなたはカーチスさんの腰の周りを抱いて私が言葉を掛けたら力一ぱい引きなさい。そら。」

サー・ヘンリーは、満身の力を振りしぼり、グッドと私とも精一ぱいの力を出した。

「そら、そら、もう一呼吸だ。少し動き出した」とサー・ヘンリーは喘きながら言った。彼の大きな背中の筋肉がめりめりいふのが聞えた。突然、ぎしぎしと軌る音が聞えたかと思ふと颯つと風が吹きあげて来た。吾々は三人とも重い敷石の下になつて床の上に仰向けに轉んだ。サー・ヘンリーの力が遂に効を奏したのだ。

「一寸をつけなさい、コオターメンさん」と吾々が起き上るとすぐにサー・ヘンリーは言った。「今度は氣をつけなさい。」

私はその通りにした。すると有難や！ 吾々の前に石の階段の第一の踏み段があつたのだ。

「さてこれからどうしよう？」とグッドは訊ねた。

「無論階段を下りて行つてあとは神に任せるのさ！」

「ちよつと待つて」とサー・ヘンリーは言った。「コオターメンさん、残つてゐる乾肉と水とを持って行きませう。あとで要るかもしれないから。」

私はそれを取りに箱の側へ引き返した。そしてそこから行かうとした時にふと考へついた。吾々はこの一晝夜といふものはダイヤモンドのことなどは考へなかつた。實際ダイヤモンドのことなんか考

へると、そのためにこんな目に遇つたのだと思つて胸糞が悪くなつたものだ。だが私は思ひ返して、若しこのいまくしい坑の中から出られる事がないとも限らぬと思つて、少しダイヤモンドをポケットトへ入れて行かうと決めた。そこで私は最初の箱へ手を突込んで、私の古ぼけた獵服のポケットへはひるだけダイヤモンドを詰め込んだ。そして一番上へ三番目の箱から大きな奴を一掴みか二掴み入れた。これはうまい考へだつた。

「あなた方もダイヤモンドを持って行きませんか？」と私は二人の者に言った。「私はポケットへ一ぱい詰め込みましたよ。」

「ダイヤモンドなんてもう二度と見たくもない」とサー・ヘンリーは言った。

グッドは何とも答へなかつた。彼はその時彼をあなたに愛してゐた憐れな娘に最後の別れをしてゐたがらうと私は思ふ。家の中に安らかに生活してゐる諸君は、吾々がこんな無限の富をうちやつておくのを不思議に思ふかも知れぬが、二十八時間の間、地球の内臓の中へ閉ぢ込められて、それから先どうなるかも知らないやうな場合には、誰だつてダイヤモンドに未憐れを殘すやうなことはなからうと私は思ふ。私だつて日頃の習慣のために價値のあるものはちよつとした機會でもあれば持つて行くと言ふことが第二の天性になつてさへ居なかつたら、ポケットの中へこんな邪魔物を詰め込むやうな事はしなかつたに相違ない。

「さあコオターメンさん、來なさい。私が一番先きへ行きますよ」とサー・ヘンリーが既に石段の最

初の段に足を掛けながら言った。

「よく氣をつけて行きなさい。下に恐ろしい穴があるかもしれませんから」と私は答へた。彼は十五段ばかり進んだ時、立ち止つた。「これで石段はお終ひだ。どうやら道があるらしい、早く來なさい」と彼は言った。

グッドはその次に、私は最後に並んで行つた。そして残つてゐる二本の燐寸のうち的一本をつけた。その光りで見ると吾々の立つてゐる處は狭い隧道で、道が右と左とに直角についてゐた。それ以上の事は判らない中に燐寸は指まで燃えて消えてしまつた。そこでどちらの道を進んだらよからうかといふ厄介な問題が起つて來た。勿論、その道はどんなふうなのか、或はまた何處へ通じてゐるのか判りやうはなかつた。だが一方の道へ行けば安全で、一方の道へ行けば破滅かも知れないのだ。吾々は遂方に暮つて終つたが、不圖私が燐寸を點した時に風の爲に焰が左の方へ曲つたとグッドが言ひ出した。「風の吹いて來たはうへ行けば良い。風は内側へ吹くので、外側へ吹く道理はないから」と彼は言つた。

吾々はこの言葉に従つて、兩側の壁を手探りして、一步毎に前の地面を足でさぐりながら、どうかして命を助からうと思つて、この呪はれた寶窟から出て行つた。そんなことはあるまいと思ふが、若し生きた人間がいつか此處へはひつたら、開け放した寶石の箱や、油のなくなつたランプや、儂れなフアウタラの白骨等で吾々が嘗つてこゝへ來たことが判るだらうと思ふ。

手探りをしてかれこれ十五分ばかりも進んで行くと、道は急角度を畫いて曲つて居り、それからまたしばらく行くと同じやうに曲つて何處までも續いてゐた。そんなふうにして吾々は數時間も進んで行つたが、どうやらこの道は出口のない石の迷路らしい、何のための道かは判らないが、確かに太古にこしらへたもので、鑛脈に沿つて從横に掘つたものらしい。

遂に吾々は疲れきつてがっかりして立ち止つた。そして乾肉の残り最後の水を飲んでしまつた。咽喉は石灰窯のやうにからくに乾いてゐた。岩窟の暗闇の中で死ぬことだけはまぬがれたものの、今度は隧道の暗闇の中で死ぬことになるらしい。がっかりしてそこに立ちつくしてゐると、何か物音が聞えるやうな氣がしたので、他の者にもそのことを注意した。それは、微かな、非常に遠くから聞える音ではあつたが、やつぱり音には違ひなかつた。こんなに寂然とした處では音が聞えたばかりでもどんなにほつとするか知れたものでない。

「あれは水の流れる音だ。行つて見よう」とグッドは言つた。

そこで吾々は以前のやうに手探りしながら音の聞える方へ進んで行つた。だん／＼進んで行くにつれて音ははつきり聞えるやうになり、遂には「さう／＼」といふ大きな音になつて來た。確かに水の音だ。だがいつたいていどうしてこんな處に水が流れてゐるのだらう？ 水の音はもうすぐ側に聞えて來た。先頭に立つてゐたグッドは水の匂がすると言ひ出した。

「そつと行くんだよ、グッド君」とサー・ヘンリーは言つた。「もうすぐそばに違ひないから。」と突

然、ざぶん、と音がしてそれと同時にグッドの叫び聲が聞えた。
彼は水の中へ墜ちたのだ。

「グッド！ グッド！ 何處にあるんだ？」と吾々は吃驚して叫んだ。するとむせるやうな聲で返事が聞えたのでほつとした。

「大丈夫です、岩に掴まってゐるから。燐寸をつけて見せて下さい。」

私は大急ぎで、残つてゐる最後の一本の燐寸をつけた。その明りで見ると、吾々の脚下には黒い水が流れて居り、少し先の方の突き出た岩につかまつてゐるグッドの黒い姿が見えた。水の幅はどれ位か判らなかつた。

「私をつかまへて下さい。そこまで泳いで行きますから」とグッドはどなつた。

「いでざんぶと水の中へ飛び込む音が聞え、やがて彼はサー・ヘンリーの伸してゐる手につかまつた。吾々は彼を隧道の上へ引き揚げた。

「大へんだつた！」と彼は喘ぎ喘ぎ言つた。もしあの岩につかまらなかつたら、そしてもし私が泳ぎを知らなかつたら、土左衛門になつたところですよ。流れは速いし、底はないのですからね。」

吾々はまた墜ちはしないかと思つてこの流れの岸傳ひに進むことはやめて、グッドが暫らく休み、吾々も水を飲んだり顔を洗つたりしてから、もと来た道へ引き返した。そして右の方へ曲つてゐる別の道へはひつて行つた。

「どちらへ行つても同じだね。おつこちる處まで行つて見るまでだ」とサー・ヘンリーは言つた。

今度はサー・ヘンリーが先頭になつて、吾々は力なくしほれきつてとぼく後から蹠いて行つた。

突然彼は立ち止つた。「これや私の頭がどうかしたんたらうか？ それともあれは光りだらうか？」と彼は囁いた。

吾々は眼を据ゑてちつと見詰めた。すると成程、ずつと先きの方に微かな小屋の窓位な光るところが見えた。それは吾々のやうに二日間も暗闇の他に何も見なかつた者の眼にでなければ判らないほど微かな光りであつた。

吾々はほつと安心してその方へ進んで行つた。五分間も行くと、その光りは紛れもないものになつて来た。それから暫らくたつと爽やかな風が吾々の顔にあたつて来た。吾々はすん／＼進んで行つた。隧道はだん／＼狭くなり、下はもう岩ではなくて土になつてきた。吾々は四つ匍ひになつて匍ひだし、初めにサー・ヘンリーがやつと外へ脱け出した。グッドも私もそれに續いて隧道から匍ひ出した。外へ出て見ると、空には星が輝いてをり、吾々は爽やかな空気を吸ひこんだ。だがその時突然足をふみはづして吾々は草と軟かい土との上をごろ／＼と何處までもころんで行つた。

私は何かにつかまつてとまつた。でその場に坐つて大きな聲でわめくと、下の方でサー・ヘンリーが答へた。彼も勾配の少し平たくなつた處にとまつてゐたのだ。彼はせい／＼息をきらしてはあだが別に怪我はなかつたやうだ。それから吾々はグッドを捜した。グッドも少し離れたところの又のある

木の根にひつかつてとまつてゐた。彼は方々を打つたらしいがすぐに正氣にかへつた。吾々は草の上に坐つて泣きたいほど嬉しい氣持になつた。すんでのことで吾々の墓場になるところであつた、あの恐ろしい土葬から、吾々はやつと逃げだすことができたのだ。きつと情け深い神様の力が、吾々の足を豺の穴の方へ導いて下さつたのに相違ない。と言ふのはあの隧道の端にあつたのはたしかに豺の穴に相違なかつたと思はれる。その時は恰度向うの山は薔薇色に染つてゐるところであつた。吾々は二度と見られまいと思つた。曙の光りを見たのだ。

やがてほのかな晝の光りが射し込むにつれて、吾々の居る處は洞窟の入口の附近にある大きな堅坑に近い處であると言ふことが判つて來た。上には坑の縁に立つてゐる三つの巨像の姿がぼんやり見えた。疑ひもなく吾々が彷徨ひ歩いたあの隧道は、このダイヤモンド坑と何か關係があつたのだ。地下を流れてゐるあの河は何の爲の河で、また何處から流れて何處へ注いでゐるのかは判らなかつたが、私はそんな事は知りたと思はなかつた。

四邊はだんく明るくなつて、吾々はお互ひの顔が見えるやうになつた。吾々は、頬はこけ、眼は窪み、顔ぢゆうに埃りと泥とがいつぱいいつぱい居り、そこらぢゆうかすり疵のため血だらけになつてゐた。そして吾々の顔にはさし迫つた死に對する恐怖の色がまだありくと残つてゐた。到底陽の光りで見られるやうな顔ではなかつた。しかもなほグッドの眼鏡が彼の眼にはまつてゐた事は嚴然たる事實であつた。恐らく彼は一度もそれを外した事はなかつたのだらう。眞暗な闇も、地下の河への墜

落も、堅坑の勾配を轉び落ちたことも、グッドと彼の眼鏡とを引き離すことはできなかつたのだ！やがて吾々は起ち上つた。そして餘り長くとまつてゐると手足がなえて來るのを恐れて大きな堅坑の側壁を徐々に上りはじめた。一時間餘りも青い粘土の勾配を木の根や草につかまりながら攀ち上つてたうとう巨像の立つてゐる街道へ登りつゝいた。百碼ばかり離れた道端に焚火が燃えてゐて、火の周りには人影が見えた。吾々が互ひにぐんなりした身體を凭せ合ひながら、踰越とそちらへ進んで行くと、その中の一人が立ち上つて吾々を見ると地べたへ倒れて恐怖の叫びをあげた。

「インフアドオス、インフアドオス！、吾々だよ！」
彼は起ち上つて吾々の側へ駆け寄り、まだ恐ろしさに慄へながら、しげく吾々を見詰めた。
「お、あなたの方でしたか、眞實にあなたの方が生返つて來なかつたのですか！ 眞實に生き返つて！」
かう言ひながら老戰士は吾々の前に身を投げ、サー・ヘンリーの膝につかまりながら嬉し泣きに泣いた。

第十九章 イグノシの別辭

それから十日目に再び吾々はククアナの宮殿へ歸つて來た。私の頭髮があつた洞窟へはひる時よりもずつと白くなつたのと、グッドがフラウラタに死なれてから、とかく鬱きがちになつたのを除くと、

外には大して別條はなかつた。私は舊式な常識家の立場として、ファウラタが死んでくれたことは幸だつたと言はざるを得ない。あの娘が生きてゐたら、きつと面倒が起つたに相違ない。あの可哀さうな娘は、普通の土人の娘とは違つて殊勝な心掛けの娘であつたらうし、姿も美しく氣だてもやさしかつたが、どんなに美しくたつて、どんなに氣だてがやさしくたつて、結局あの娘が自分で言つたやうに、太陽と闇とはつり合はないし、白と黒とはつり合はないのだから。

言ふまでもなく吾々はソロモンの寶窟へは二度とはひらなかつた。二日休んで疲勞が恢復すると、吾々が匍ひ出して來た堅坑の側壁にある穴が見つかりはしないかと思つて堅坑の中へ下りて捜して見たがたうとう見附からなかつた。第一雨の爲に吾々の足跡は判らなくなつてゐたし、それに色々な穴が澤山あつて、吾々の助かつた穴はどれであるのか到底見判けがつかなかつた。それから宮殿へ歸つて來る前日に吾々は、あの驚くべき鐘乳洞をもう一度檢べに行き、國王の墓場の中へもはひつて見た。白い死の神の鎗の下を通りすぎて吾々は、吾々の逃げ道を塞いで終つた大きな岩の扉を眺めた。その岩の下には、ガゴオルの屍體が平たくべちやんこにつぶれてゐた。しかしその岩の扉はつき目さへ判らず、一時間餘りも捜して見ただけでも秘密の仕掛けなどはてんで判らなかつた。あとに残して來た數限りない寶物の事を考へると残念でたまらなかつたがどうにも仕様がなかつた。吾々はがっかりして、もと來た道へ引返し、その翌日宮殿へ向けて出發したのであつた。しかし眞實のところを言ふと、吾々ががっかりしたなんていふのは餘り蟲がよすぎるかも知れぬ。といふのは

讀者は記憶してゐるであらうが、私は急に思ひついて寶窟から出がけに古ぼけた獵服の残らずのポケットへ寶石を一ぱい詰め込んで來たからだ。その中の少なからぬ部分は堅坑の崖を轉げ落ちる時に落してしまつたが、まだかなり残つてゐた。中には百カラットから三十カラットまでの大きなのが十八もあつた。私の古ぼけた獵服だけでもまだ吾々みんなが百萬長者にはなれないまでも、少くもずあぶん裕福な身になるには十分だつた。その上に三人がめい／＼一番立派なのを自分のものとして一組宛、ヨーロッパへ持つて歸ることも出來たのだ。

宮殿へ着くと吾々はイグノシから非常に喜んで迎へられた。彼は大層元氣で、ツワラとの大激戦で損害を蒙つた聯隊の改造などに忙がしかつた。彼は非常な興味をもつて吾々の驚くべき物語りを聞いてゐたが、ガゴオルが恐ろしい最後をとげたといふことを聞くと、急に感慨にたへぬやうな様子になつた。そして國王の周りに列んでゐた顧問の一人を呼んで訊ねた。

「お前はずあぶん年を老つてゐるな。」
「さやうで御座います。國王の祖父様と同じ日に私は生れたので御座います。」
「お前の子供の自分にお前はガゴオルを知つてゐたか？」
「はい知つておりました、國王。」
「その時分にはガゴオルはお前のやうに若かつたか？」

「い、え國王！あの女は今と同じやうに年を老つてあました。そして私の祖父様のじぶんにもやはり年老つて、干乾びて、醜い、悪い婆でありました。」

「もうあの婆はあないのだ！あの婆は死でしまつたのだ！」

「ではこの國から古い災禍が取り除かれたといふものでございますね。」

「はつ！」

「皆さん」とイグノシは言つた。「あの老婆は不思議な奴です。あの女が死だったので私は喜んでゐるので。あの女は暗い處であなたがたを殺さうとしたのです。そしてそのあとで私の父を殺したやうにして私を殺したかも知れないのです。では話をお進め下さい。」

私が吾々の脱出の物語りをすつかり話してしまふと、兼て三人で打合せてあつたので、私は愈々クアナの國を出發すると言ふことをイグノシに告げた。

「たうとうお前にお別れをして、もう一度吾々の故國へ歸る時が來た。考へて見ればイグノシ、お前は吾々の從者として來たのだが、今では立派な國王のお前に別れを告げることになつたのだ。吾々の恩を忘れないならお前が約束した通りにやつてくれよ。正しい政事を布き、法律を尊び、理由もなしに人を殺すやうなことはしてくるな、さうすれば國は益々榮えてゆくだらう。明日の夜明には吾々に從者をつけて山の向うまで送つて來てもらひたい。そのことは許してくれるだらうな國王？」

イグノシは返事をする前に兩手で顔を掩うた。

「私はこの胸が痛みます」とたうとう彼は言つた。「あなたの言葉を聞くと私は胸が裂けるやうです。皆さん、私がどのやうな事をしたために私を一人残して皆さんはお歸りになるのです。謀叛の時には私といつしよに戦つて下さつて、戦に勝つて平和になると、どうして私を残して行つておしまひになるのですか？ 私は何をさし上げたらいいでせう？ 女がお望みなら若い娘の中からお望みのものをお取り下さい！ お住居がお入用なら眼の届くかぎり、どの土地でもさし上げます。白人の住む家がお望みなら、私の人民に教へて建てさせて下さい！ 牛がお望みなら結婚した男に申附けて下されば誰でも牡牛でも牝牛でも持つて参ります！ 獵の獲物がお望みなら私の國の林には象が歩いて居ります！ 葦の間には河馬が眠つて居ります！ 戦争がしたければ私の軍隊はあなた方の命令を待つて居ります！ その他何でもお望みのものがあればさし上げます！」

「いやイグノシ、さういふものは吾々は少しも欲しくないと私は答へた。「吾々は生れた土地へ歸りたいのだ。」

「は、あ判りました！」とイグノシは眼を光らして不機嫌な顔で言つた。「あなた方は、私より、あなた方の友人の此の私より、光る石が好きなんです。あなた方はその石を持つてこれからナタルへ行つて、黒い、動く水を越えてそれを賣つて金持になりなされるのだ。白人の性根といふものはみんなそんなものだ。思へば白い石が憎らしい。それを欲しがる者が憎らしい。白い石を捜すためにあの墓

場へ足を踏み込んだものはみんな死でしまふがい。ではどうぞ勝手に行って下さい！」

私は彼の腕に手をのせて「イグノシ！」と言った。「お前はズルの國に彷徨つてゐた時分に、ナタルで白人と一緒に伴んでゐた時分に、お母さんから聞いたお前の生れ故郷へ、お前が子供の時分に遊んだところへ、お前の家のあるところへ、歸りたいとは思はなかつたか？」

「そりや歸りたかつたですよ、マクマザンさん。」

「それと同じだよ、イグノシ、吾々の心は吾々の故郷が懐かしいのだ！」

暫らく沈黙が続いたあとでイグノシはがらりと聲の調子を變へて言った。

「よく判りました。あなた方の仰言る通りです。空を飛ぶものは地上を走ることを好みません。白人は黒人と住むことを好まないのです。私の胸は痛みますけれど、矢張り、あなた方は行って下さい。私のところへはあなた方のお便りはないのだから、あなた方は私にとつては死んだものと同じなのですが、私はあきらめます。」

「だが聞いて下さい、そして皆の白人に知らせして下さい。今後、他の白人は、たとひ無事にあの山を越える事が出来たとしても、私は決してこの國へ入れません。私は鐵砲を持つたり、ラム酒を持つたりして来る商人はこの國へ入れたくありません。私の國の人民は先祖がして来たやうに鎗で戦はせません。水を飲ませません。私は人間の心に死の恐ろしさを吹き込んだり、國王の法律に叛かせたりする説教をする人たちもこの國へ入れません。若し一人の白人がこの國へ来たなら私は送り歸してやります。」

もし百人の白人が来たなら追ひ返してやります。もし白人の軍隊が来たなら私は全力をあげて彼等と戦ひます。光る石はもう誰にも捜させません。若し軍隊がやつて来たなら私はこの國の聯隊を派遣してあの堅坑を埋めてしまひ、白い柱を折つてしまつてあなた方が話した石の扉のそばへも寄せつけません。しかしあなた方三人はいつでも来て下さい、喜んでお迎へいたします。あなた方は生とし生ける何物よりも私にとつては尊いのですから。

「あなた方がお歸りになる時には叔父のインファドオスと私の顧問とに一聯隊の軍隊をつけてお供させます。山を越して行くには別の道がもう一つありますからその道を案内させませう。では左様なら皆さん。もう私を見ないで下さい。私はもうたへられませんが。私は緊急勅令を出して沿道の人民にあなた方の名前を口にするのをかたく禁じ、もし命に叛く者は死刑にするやうに布令して置きませう。この風變りな消極的な敬意を表する方法はアフリカ民族の間では珍らしくないのである。さうすればあなた方の記憶は永久に残るでありませう！」

「ではもう行って下さい。私の眼に女の眼のやうに涙の流れないうちに行つて下さい。だが時々長い人生の行路の途中で過去を振り返りなされる時、またあなた方がお年齢をとつて火のそばで踞つて居なされる時には、吾々がこの國で手に手をとつて戦つたことを思ひ出して下さい。では左様なら。御機嫌よう。」

イグノシは立ち上つて暫らくの間しげくと吾々を眺めてゐた。それから彼は肩衣のすみで顔を掩

つて吾々の姿が見えないやうにした。吾々は無言のまゝ立ち去つた。

その翌朝、吾々は別れを惜む舊友インファドオスと水牛隊とに送られて宮殿を去つた。まだ時刻は早かつたが町の大通りには澤山の人民が列をつくつて吾々に送別の敬意を捧げた。女どもは吾々に花を投げてくれた。それは實に至情のこもつたほろりとする光景であつた。しかも送つてくれる相手は野蠻な土人なのだから益々哀切を極めたものであつた。

ところが途中で滑稽なことが起つた。

恰度吾々がある街角へさしかつたときに、一人の美しい若い女が綺麗な百合の花を持って、それをグッドに送つた。どうも女どもはみんなグッドを好いてゐるやうだ。そしてその若い女は彼に一つの願ひを聞きとめて貰ひたいと言つた。

「何だか言つて御覽！」と彼は答へた。

「どうぞ卑しい妾たちにあなた様の美しい白いおみ脚を拜まして下さい。あなた様のおみ脚のお噂を聞いて、遙々四日もかゝつて田舎から参つたものですから。一目拜まして戴いて孫子の代まで語り傳へようと思ひますから。」

「そんな馬鹿なことをしてたまるか！」とグッドは昂奮して叫んだ。

「まあまあ君」とサー・ヘンリーは言つた。「君は婦人の頼みを斷る譯にはゆかんよ。」

「いいや、どうしても嫌だ。そんな不作法な事が出来るのですか」とグッドは頑固に言ひ張つた。けれどもたうとう彼は承知してツボンを膝までめくつた。それを見るとその場にある女ども、特に頼みを聞いて貰つたその若い娘は夢中になつて喜んだ。で、たうとう彼は町の外れまでさうして歩いて行かねばならなかつた。

だん／＼進んで行くうちに、インファドオスは、ククアナ國からシバの乳房を越えて沙漠へ下りる道が外にもう一つあると言つた。その道を通つてゆけば沙漠の中途に大きなオアシスがあるといふことであつた。そして歸りにはその道を通つた方がよからうと彼は勧めた。

ククアナを出てから四日目の夜、吾々は再びククアナと沙漠とを隔てゝある山の頂きに着いた。翌日の夜明けに吾々は峻しい崖の端まで來た。そこから二千呎ばかり下に横つてゐる平野に下りて行くのだ。

そこで吾々は老戦士インファドオスに別れを告げた。彼は別れにのぞんで、心から吾々の幸福を祈り、悲しさのために殆んど泣かんばかりであつた。「この老人の眼ではあなた方のやうな方はもう二度と見られませんまい。あなた方のことは一生忘れません、わけてもサー・ヘンリーさまが戦争で勇ましい働きをなされた姿はまだ眼に見えるやうです。兄のツワラの首を切り飛ばされたところなんぞは眞實御立派でした。あんな事はこれからさき、ことによつたら運よく夢にでも見られるかもしれませんが、この眼では到底見られませんまい」と彼は言つた。

吾々も彼と別れるのが悲しかった。ことにグッドは非常に別れを惜んで記念に問題の眼鏡を一つ彼にやつた。それは彼が別に取つておいた眼鏡であることがあとから判つた。インファドオスは大喜びで、かういふものを持つて居れば彼の威信が大いにあがると言つて、何べんも失敗した後、たうとうそれを彼の眼にはめた。この老戦士が眼鏡を掛けた姿ほど不似合な恰好を私はまたと見た事がない。まつたく豹の皮の外套や、黒い駝鳥の羽根飾りには眼鏡といふものは似合はないものだ。それからイグノシの好意で吾々を送つてくれる案内人どもは、水や食料品を澤山背負ひ、水牛聯隊から割れるやうな送別の萬歳の叫びを浴びながら、吾々は坂道を下つて行つた。下り道は相當骨が折れたがどうにかその日の夕刻には別に故障もなく麓まで着いた。

その翌日吾々は五人の案内人に水や食料品を持たせて、骨の折れる沙漠の中を歩いて行き、晩には沙漠の上にテントを張つて夜を明かし、その翌日の曉方になるとまた歩き出した。

三日目の正午までに吾々は案内人の言つたオアシスの樹立を見ることが出来た。それから日没前には再び草原の上を歩いて流れる水音を聞いてゐた。

第二十章 邂逅

さてこれから私はこの不思議な旅の中でも最も不思議な話を書くことになつた。この出来事は運命といふものが如何に奇しきものであるかを示すものだ。私は他の二人の者の先にたつてオアシスから

流れる小川が、飢ゑた沙漠の中へ呑まれてしまふ處まで岸傳ひに歩いて行つた。その時突然私は眼をこすつた。それも無理ではない。私から二十碼足らず前の無花果の樹蔭のよい場所に、小川に面して、こぢんまりした一軒の小舎が建つてゐたのだ。その小舎は、ケイファー人の小舎と同じやうに、草と細い樹枝とで造つたものではあつたが、入口は丸いくゞり穴ではなくて、普通のたつぶりした扉になつてゐた。

「こんなところに何のために小舎を建てたのだらう？」と私は獨り言を云つた。すると恰度その時に小舎の扉が開いて、毛皮の服を着て黒い鬚をもちややく生やした一人の白人がびつこを引きながら小舎の中から出て來た。私は餘り強く太陽の熱にうたれたので氣が變になつたに相違ないと思つた。こんな筈はない。こんな處へ獵師が來た事は曾て無い筈だ。あの小舎の中に獵師などが住んでゐる譯がない。私はちつと眼を据ゑて見た。すると向うの男もちつとこちらを見てゐた。恰度その時にサー・ヘンリーとグッドとが私に追ひついた。

「御覽なさい」と私は言つた。「あれは白人ぢやありませんか、それ共私は氣が狂つたのでせうか？」
サー・ヘンリーも見つた。そしてグッドも見つた。その時突然跛をひいて黒い鬚を生やした白人は大きな聲で叫びながら吾々の方へびよこしく歩いて來た。彼は吾々の側まで來ると呼吸を切らしてその構に倒れた。

サー・ヘンリーはその側へ跳んで行つた。

「おや！これは弟のジョオジだ！」と彼が叫んだ。この物音を聞いて、やはり毛皮の服を着たもう一人の男が、鐵砲を持って小舎から出て来て吾々の方へ駆けつけた。そして私を見るとこの男は叫んだ。

「マクマザンの旦那！」と彼は嗚れ聲を出した。「私が判りませんか、旦那？ 私は獵師のジムですよ。旦那から戴いた書附を無くしてしまつて、私たちはかれこれ二年も此處にゐたのです。」かう言ひながら彼は私の脚下に轉がつて嬉し泣きに泣いた。

「仕やうのない慌てものだね！」と私は言つた。「大切に藏つておかないからだ。」

その間に黒い鬚の男は正氣に返つて起ち上り、彼とサー・ヘンリーとは一語も言はずに顔を見合した。この兄弟の過去の争ひは何が元であつたかは私は知らぬし、訊ねても見たことないが、多分女の事でもあつたらう。併しその時には屹度二人は昔の事はもう忘れて終つてゐたに相違ない。

「ジョオジ！」とサー・ヘンリーがたうとう口をきつた。「おれはお前はもう死んだかと思つてゐた。お前を捜しにソロモン山まで行つて來たのだよ。さうしてこんな沙漠の中にお前が兀鷹のやうに止つてゐるのに遭遇したんだ。」

「僕も二年ほど前にソロモン山へ行かうと思つたんです。」と彼は少し不慣れな言葉で答へた。彼は近頃英語を使う機會などは全くなかつたのである。「併し此處まで來たときに、石ころに足を挫かれて前も後へも行けなくなつてしまつたのです。」

その時私は前へ進み出た。「御機嫌よう、ネヴィルさん！」と私は言つた。「私を覚えて居られますか？」

「おや、あなたはコオターメンさんぢやありませんか。それからグッドさんも？ ちよつと待つて下さい。私はまた目がまひさうになつて來ました。實にこれは不思議な奇遇せですな！」

その晩テントの中の焚火を圍んでジョオジ・カーチスは吾々に彼の物語りをした。彼の物語りも吾々のと同じほど數奇を極めたもので、簡單に言へば次のやうなものであつた。彼は三年足らず前に、スリマン山へ登らうと思つて、シタンダ村を出發したのであつた。私がジムにことづけた書附けのことは、彼は今日までちつとも知らなかつたと言つた。それで、いろ／＼土人から聞いた話を綜合して、シバの乳房の方へは行かないで吾々が今下りて來た、梯子のやうな坂道の方へ向つたのであつた。その方がシルヴェストラの地圖に書いてあつた道よりも良かったのだ。沙漠の中では彼とジムとは非常な困苦を嘗めたが、たうとうこのオアシスまで辿りつき、そこでジョオジ・カーチスは恐ろしい不慮の災難に遇つたのである。彼等がこのオアシスに着いた日に、彼は小川の流れの側に坐つてゐると、ジムがそのすぐ上の方で沙漠に澤山ある針のない蜜蜂の巢から蜜を採つてゐた。その時にジムの足許の大きな石ころが、ジョオジ・カーチスの右脚へ墜ちて來て彼の脚を挫いたといふのであつた。それから彼は跛になつて、前へも後へも進めなくなり、沙漠の中へ出て確實に死んでしまふよりは、このオアシスに残つてゐて、運命を待たうときめて今まで暮してゐたと言ふのであつた。

しかし彼等は食物には別に困らなかつた。それは彼等は澤山彈藥を持つてゐたし、オアシスへは様な鳥獸が夜分に水を飲みに来るものだから、それを射つたり、係蹄にかけて取つたりして、肉は食ひ皮は剥いで着物に造つたりしてゐたのだ。

「まあかうした譯で」とジョオジ・カーチスは話を終つた。「吾々は二年近くの間第二のロビンソン・クルーソーと彼の召使ひのフライデーとのやうに、いつか土人が此處へ来て吾々を助けてくれはしまいかと心細い望みをあてにして生きて來たのです。だが誰も來てくれませんでした。やつと昨晚吾々は、ジムがシタンダ村へ行つて助けの者を呼んで來ることに話をきめた所なんです。彼は明日發つ筈になつてゐたのですが、私は彼が再びこゝへ歸つて來ることなどは當にしてはゐませんでした。ところが、今、あなたが、人もあらうにあなたが、私のことなどはとつくに忘れて本國で贅澤に生活してゐるであらうと思つたあなたが、こんなわかりにくい道を通つて來て、あなた自身も思ひがけない處で私を見つけて下さつたのです。こんな不思議な、こんな涙のこぼれる程有難い話は、私は聞いたこともありません！」

それから今度はサー・ヘンリーが口を開いて吾々の冒險の主な事實を夜の更けるまで話した。

「でもまあ」とジョオジは私が彼にダイヤモンドを出して見せた時に言つた。「あなた方はあなた方の骨折りに對して私の取るにも足らん身體の外に、せめて何物かを手に入れられた譯ですわね！」

サー・ヘンリーは笑つた。「あれはコオターメンさんとグッド君とのものなんだよ。獲物があつたら

何でも二人で分けるやうに約束してあつたのだ。」

この言葉を聞くと、私は少し考へるところがあつて、グッドと相談をした上で、サー・ヘンリーに向つてダイヤモンドの三分の一は受取つて貰ひたい、もし彼が受取らんと云ふなら、このダイヤモンドを捜しに行くために、吾々よりもつと苦しい目にあつた弟のジョオジさんに渡して貰ひたいと傳へた。そこでサー・ヘンリーはやつとこのことで納得したが、ジョオジ・カーチスは少し後までそのこととは知らずにゐたのだ。

ここで私はこの物語りを終らうと思ふ。沙漠を越えてシタンダ村へ歸るまでの吾々の旅はずゐぶん困難なものであつた。特に右脚を痛めてゐるジョオジ・カーチスを助けて行かねばならなかつたので非常に苦しかつた。だがともかく無事にシタンダ村まで着いたのであつた。その間の出來事を詳しく話すと行きがけの話と重複するからそれは省略することにする。

シタンダ村へ着くと、吾々が行きがけに預けて置いた鐵砲やその他の荷物等はすつかり無事であつた。しかしそれを預けて置いた不頼漢の老人は、吾々が無事に歸つて來たのを見て目算が外れたやうな嫌な顔をしてゐた。吾々は此の村へ着いてから六ヶ月目に一同揃つてダーバンの近くにあるベレアの小さい私の住居へもう一度歸つて來た。私は今そこでこの物語りを書いてゐるのだ。そして此處で

私は、私の長い變化の多い生涯のうちでも最も不思議な旅をともにして来た人達に別れを告げたのであつた。

後記——恰度私が最後の言葉を書いてしまつた時に一人のケーファー人が私の家の蜜柑の竝木の處へやつて来て、郵便局からだといつて一通の手紙を渡した。それはサー・ヘンリーからの手紙で、次のやうに認めてあつた。

一八八四年十月一日

ヨークシャー、ブレイリー・ホールにて

「親愛なるコオターメン

「私は二三便前に、吾々三人、ジョオジとグッドと私とが、無事に英國へ着いたことをお知らせしました。吾々はサムプトンで船を降りて町へ上陸しました。その翌日からのグッド君の成金振りをあなたにお目にかけていたやうです。鬚は綺麗に剃る、よく合つたフロックコートを着込む、新しい素敵な眼鏡を新調する、などたいへんな景氣です。私は彼と一緒に公園へ行つて散歩しましたが、そこで二三の知り人に遇ふと早速「美しい白い脚」の話をして聞かせました。

「彼はひどく怒つてゐます。特にある意地の悪い男がそのことを或る社交新聞に掲載したものですからね。

「さて用件に移りますが、グッド君と私とはダイヤモンドを持つて寶石商に値踏みをして貰ひに行きました。彼等がつけた値段は餘りの巨額な値段ですから、あなたにはいま申し上げないことにします。しかし勿論彼等は斯様な大きな石がこんな澤山市場に出たことはないから、その値段は幾分あてずつぼうだと言つてゐました。一番大きな一つ二つの石を除くと残りのものは全部最上等のブラジル石に匹敵するやうな上等の品らしいです。私は彼等にそれを買はないかと言つたところ、彼等の力では到底買へないと答へました。そして市場に恐慌を來すといけないから少し宛賣るがい、と忠告してくれました。しかし彼等はその中の僅の部分に對して十八萬磅の値を附けました。

「あなたも早く歸つて来てかう言ふ様子を見なければなりません。特にあなたがどうしても三分の一分の分け前を下さると言ふのなら尙更です。それは私の物ではなくてジョオジのものになるのです。グッド君はもう以前のグッド君ではありません。同君は鬚を剃つたりその他身の周りを飾ることに浮身をやつしてゐます。だが、同君はまだファウラタのことが思ひ切れないやうです。同君は國に歸つてから、姿の點にかけても、表情の美しい點にかけても彼女に匹敵する女をまだ見ないと私に言つてゐました。

「是非あなたも歸つてお出でなさい。そしてこの近くで家を一軒お購めなさい。あなたはもう

生涯の仕事はしてしまはれたのだし、今では金は澤山あるし、それにすぐ近所に恰度あなたに
誂へ向きの賣家が出てゐます。是非歸りなさい。早いほどよいです。吾々の冒険の物語りは船
の上でも書き終へることが出来ます。吾々はあなたにそれを書いてお終ひになるまでは誰にも
話をしないことにしてゐるのです。それは聴く人が信じないと思ふからです。この手紙が着き
次第お歸りになればクリスマスまでにはこちらへ着きます。クリスマスには私の名と一緒にあ
なたの名も記入して申込んでおきます。グッド君もジョオジも来ます。それから序ですが、
あなたの息子さんのハリイさんも来ます（これはあなたのための囮ですよ）。私は一週間程、ハ
リイ君と狩に行きまして同君が好きになりました。ハリイ君は落着いた青年ですね。同君は過
つて私の足を射ちましたがすぐに弾丸を取り出してくれました。そしてそれから獵に行く時
には、醫學生を連れて行くのが便利だと言ふことを證據だて、くれました。
「では左様なら。私はもうこれ以上言ふことが出来ませんが、あなたが是非歸つて來られるこ
とを知つて居ます。」 草々。

ヘンリー・カーチス

追伸——かはいさうなキヴァを殺した大きな牡象の牙は今この室に、あなたから戴いた一對
の水牛の角の上に飾つてあります。なか／＼立派なものです、それから私がツワラの首をチヨ

ン切つた戦斧は机の上に掛けてあります。私は鎖鎧の上衣を持つて來られなかつたのを残念に
思ひます。

ヘンリー生

今日は火曜日だ。金曜日には船が出るはずだ。私は實際カーチスの言葉に従つてその船で英國へ歸
らなければならんと思つてゐる。吾が子のハリイよ。お前に遇ふだけのためにでも歸らなくちやなら
んのだ。それにこの物語りが印刷されるについてもいろ／＼面倒を見なくてはならぬ。私は、この仕
事は他の誰にもまかせたくないのだ。

アラン・コオターメン

19258

昭和三年七月一日印刷
昭和三年七月三日發行



發兌

東京市芝區受台町四丁目六番地

世界大衆文學全集第二十八卷
洞窟の女王、ソロモン王の寶窟

譯者 平林初之輔

發行者 山本美

印刷者 竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

改造社

總發行所 東京市芝區受台町四丁目六番地
電話 芝(43) 自一一二一
至一一二四番

改造社

(刷印社會式株刷印清日)

